檻の中の幸福

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
檻の中の幸福

【Ｎコード】
Ｎ６０２８ＩＫ

【作者名】
暗闇魍魎

【あらすじ】
ある特殊な施設で性奴隷として育てられた少女たち。商品として出荷が決まった少女たちが受ける性器に対する容赦のない残虐な拷問。鞭、針、火。泣き叫び許しを乞う少女たちは性器を拷問されながら、その中に幸福を見つけていく…

一、始まり（前書き）

女性が痛めつけられる小説です。（特に性器中心）そういうものが苦手な方はご遠慮ください。

一、始まり

一、始まり

八千代は薄暗い小部屋の中で椅子に腰掛けていた。黒いブラウスに黒いスカート、黒いストッキング。十三歳になったばかりの彼女が喪服姿でいるのは別に周囲に不幸があった訳ではない。不幸はこれから彼女の身体に降り掛かるのだ。長い髪を三つ編みにし俯く八千代の身体が震えているのはその恐怖のためだった。

小さな音を立てて前方の扉が開くと、「扉から中に入りなさい。」という声がどこからか聞こえた。

八千代は言われるまま扉から中に入ると、そこはかなり広い部屋のようであるが照明がなく、部屋の中央らしき場所だけにスポットライトがあてられていた。

「スポットライトの中まで進みなさい　」

先程と同じ機械的な声が今度は頭上から聞こえた。扉近くに立ちすくんでいた八千代は怖々とスポットライトの光の中まで進む。

「これから商品披露が開始されます　要望にそぐわない反応をした場合、御披露するに値しないと判断されますので注意しなさい　」

・・御披露するに値しない　・・

八千代は考えただけで恐ろしくなった。

ここは養鶏場、養豚場等と同じようにある種の人間を育成している隔離された施設であり、その存在を知るのはごく一部の限られた者のみだった。そして、この施設で披露するに値しないとはすなわち、八千代は価値無しと判断され処分されるということである。

「目をつむりなさい。」

頭上から声が聞こえた。両手を前で合わせ背筋を伸ばし立っていた八千代は言われるまま目を閉じた。

「スカートをまくりなさい。」

再び声が聞こえた。
八千代は両手で膝上までの黒いスカートの裾を掴み、それをまくり上げた。
黒いストッキングに包まれた八千代の綺麗な太ももがあらわになる。

「もっと上。腰までめくるのです。」

八千代は慌ててスカートを腰までまくり上げた。
スポットライトの照明の中、八千代の形の良い恥丘の影が淫靡に浮かび上がる。ストッキング越しに白い下着の形まではっきりわかった。

「足を開きなさい。」

八千代は今度は始めから大きく足を開いた。

・・私、オシッコを見ていただくの？　・・

この施設なりの教育を施されている八千代は自分が立ったまま放尿する姿を晒されるものとばかり思った。自分の股間から下着とストッキングを濡らし湯気を立て溢れ出す小便。その無様で惨めな自分の姿を楽しんでいただく。八千代は下腹部に力を入れいつでも命令されれば放尿できるよう準備した。

「あなたはこれから御披露が終わるまでの間このままの姿勢でいなければなりません。目を開けたり、スカートを下ろしたり、足を閉じたりした場合は価値無しと判断します。ただし声をだすのは許可しますので存分にあなたの悲鳴を聞かせなさい。」

・・私の悲鳴・・

八千代は自分がこれから悲鳴を上げるほどの苦痛を味わわせていただくのだと理解した。
そして、その恐怖心のためこんな無様な格好をさせられているというのに羞恥心はほとんど感じなかった。

「これから、あなたは皆様が納得されるまで鞭で打たれます。どこを鞭打たれるか答えなさい。」

・・私、鞭でうたれる・・

考えるまでもなく八千代は自分の身体のどこが鞭打たれるのか分かった。自らスカートをまくり晒している部分。そして大きく足を拡げまるで無防備になっている女の子の大切なあの部分。

「わ・私の性器です。」

恐怖で張り裂けそうな心でやっと答えた八千代の身体は震えていた。

・・女の子の一番大切なところを鞭で打っていただく・・

恐怖で震えながらも八千代は、自分の性器が鞭で打ちやすいように腰を前に突き出した。黒いストッキングに包まれた恥丘が前に突き出され一層淫靡に強調される。

・・怖い、怖いよ・・

鞭打たれるのが自分の胸や尻だったならば八千代はこんなに恐怖に囚われなかっただろう。今までの教育で胸も尻も激しい鞭打ちを経験していた。どちらも凄まじい痛みであったがその苦痛の度合いは想像がつく。しかし、自分の性器が鞭で打たれるなど八千代は想像したこともなかった。

・・どれだけ痛いの・・

今まで命令され自慰する時以外は自分でも触れることが許されなかった性器。その大切で敏感な性器に鞭が叩き込まれる。考えてみればこの日のために意図的に性器への鞭打ちはおこなわれなかったのだと八千代は気付いた。どんなに激しい痛みであっても八千代は足を開いたまま性器を鞭打たれ続けなければならない。その残酷な計画にストッキングに包まれた八千代の下腹部と太股は恐怖と緊張のため大量の汗でムッとする匂いを発していた。

でもだからこそ楽しいんだ、と八千代は思った。今までの教育で八千代は、自分にとって痛みが激しいほど相手に楽しんでいただける、と教えられていた。そして自分が泣き叫べば泣き叫ぶほど喜んでいただけるとも教えられていた。

・・私の性器を鞭打って楽しんで下さい・・

八千代は性器を鞭打たれ泣き叫ぶ自分の姿を想像していた。

二、性器鞭打ち

二、性器鞭打ち

性器を鞭打たれるために自ら大きく足を開いて立つ八千代の耳に突然ヒュッという鋭い風切り音が聞こえ、次の瞬間八千代の股間の中心の裂け目に激痛がはしった。

「痛いぃーーーっ」

不意の鞭打ちに八千代は絶叫し、思わずしゃがみ込みそうになるのを必死でこらえた。と、再び身構える間もなく第二撃が八千代の性器を打ち据える。

「あーーーーーっ」

八千代の想像を遥かに超える股間に焼きごてを押し付けられたかのような激痛に、涙を流しながら八千代は、それでも相手が自分の性器を鞭打ちやすいように腰を突きだした。
鞭は嵐のように容赦なく、しかも正確に八千代の性器を打ち続けた。

「あぁーーーーっ」

性器を打たれる度、その衝撃で八千代の黒いストッキングに包まれた太股がぶるぶると震える。

「痛いーーーっ」

泣き叫ぶ八千代の顔は大量の涙と汗と鼻水で無様に汚れていた。鞭は八千代の性器を中心に恥骨から肛門付近まで股間を満遍なく思い切り打ち込まれる。

「あーーーーーーーーっ」

その鞭先が八千代の性器の一番敏感な部分に叩き込まれ、八千代は一際高い悲鳴をあげた。八千代の股間が黒く光りだす。それまで高い音をあげていた鞭の打撃音がビシャッという低い音に変わった。八千代はクリトリスを痛打され思わず漏らしてしまっていた。股間を中心に内股まで濡れたストッキングが照明の光で黒く光っている。それでも容赦なく加えられる鞭の打撃で小便の飛沫が飛び散りスポットライトの中で輝いた。

「ひーーーーーっ」

八千代は自分が失禁したことさえ気付いていなかった。八千代が思うのは、この姿勢を崩さないようにという事はもちろん、性器を鞭打たれ泣き叫ぶ自分の姿を存分に楽しんでいただくという事だけだった。

「痛いーーっ」

小便を漏らし泣き叫びながらも八千代は、鞭が自分の性器に叩き込まれるタイミングに合わせ自分から腰を突き出した。それには自分の性器を鞭打つことを楽しみ満足してもらいたいという八千代の思いが込められていた。

・・痛い、痛いよ・・

八千代はすでに性器の感覚が無くなっていた。ただ開いた足の中心に鞭が叩き込まれる度に、股間から耐え難い痛みが八千代の全身を走り抜ける。その痛みこそが楽しんでいただいている証だと八千代は思った。

・・もっと楽しんでいただくの、倒れたらダメ・・

失神寸前の八千代は必死に足を開き、大切な性器に鞭を浴び続けていた。八千代の性器を容赦なく打ち据える鞭の激しい打撃音と八千代の悲痛な叫び声だけが響きわたる。

朦朧とした八千代の意識に「目を開けなさい。」という言葉が飛び込んできた。
いつの間にか永遠に続くのかとも思えた性器への鞭打ちは終わっていた。
目を開けるとすでにスポットライトは消され、涙で滲んだ八千代の視界に青いランプが三つ映った。

「商品披露は終了しました。三人の入札者の方がこれより商品チェックを行います。誘導ランプに従い次の部屋に進みなさい。」

声が終わると八千代の左側に点々と小さなランプの線が現れた。
その光りの線に沿って歩きだそうとした八千代は自分の太股が硬直して動かないことに気付いた。慌ててスカートをまくり太股を揉みだした八千代はストッキングが濡れていることを知った。

・・私、お漏らししちゃったんだ・・

八千代は激しく鞭打たれた自分の股間に手を当てた。その下着とストッキングは自分の小便でびっしょりと濡れている。

・・痛い、痛いよ・・

スカートをまくったまま両手を股間に当て八千代は泣きだした。ふと気付くと手前のランプから徐々に光が弱くなっている。八千代は右手を股間に当て、涙を流しながら必死に歩き、ようやく次の部屋にたどり着いた。そして薄暗い部屋の中央に進んだ。

三、逆さ吊りの八千代

三、逆さ吊りの八千代

「それでは目をつむりなさい。」

例の機械的な声が響いた。

「これから入札者による商品チェックを行います。あなたの価値がここで判断されます。万が一、入札者全員が価値なしと判断した場合は遺憾ながら廃棄処分となります。」

事務的に告げた後、さらに声は続いた。

「まずは再び鞭打ちです。どこを鞭打っていただきたいか答えなさい。また、その際の要望があれば言いなさい。」

八千代は胸、そして尻を鞭打たれている自分の姿を想像してみた。しかしどちらもつい先刻八千代が経験した性器への鞭打ちに比べるとインパクトが少ない気がした。

「はい、私の性器を鞭で打ってください。」

八千代は自分の価値を認めてもらうには、やはり自分の一番大切で敏感な性器を思い切り鞭で打っていただく以外ないと考えた。そして自分の泣き叫ぶ姿を存分に楽しんでいただくためには、自分の

性器にもっと強烈な痛みを与えていただくことだと考えた。

「私の両手を縛り両足を開き逆さに吊るしてください。それから私の性器を鞭で打っていただければ私の無様に泣き叫ぶ姿を一層楽しんでいただけると思います。」

八千代はスカートの上から自分の股間に手を当てた。

・・もっと痛い目にあうのよ、大丈夫?・・

八千代は両手を後ろ手に縛られ床に寝かされ、足首にベルトが巻かれた。そのベルトに付いたロープが巻き上げられていく。スカートが捲れ八千代の胸まで覆った。黒いストッキングに包まれた八千代の股間は大きく開脚され無防備な姿を晒している。そして、その無防備な八千代の性器へ唸りを上げて鞭が振り下ろされた。

「うわあーーーっ」

開脚逆吊りで性器を鞭打たれ八千代は悲鳴をあげ続けていた。逆さ吊りで開脚されているため開き気味の八千代の性器の中心に容赦なく思い切り鞭が叩き込まれる。鞭の種類も違い、その苦痛は先程と比較にならなかった。

「許してくださいぃーーっ」

とうとう八千代は哀願した。その八千代の哀願が気に入ったのか、さらに激しく鞭が叩き込まれる。

「あーっ痛いーーっ」

ストッキング越しに白く見えていた下着の股間部分が、だんだんと黒く変色しはじめている。容赦なく叩き込まれる鞭の激しい打撃に八千代の柔らかな性器は皮膚が破れ下着を染めるほど出血しだしたのだ。

「痛い、痛い、痛いぃーーっ」

泣き叫ぶ八千代の性器に今まで以上にうなりをあげて鞭が叩き込まれる。後ろ手に縛られた八千代の両手は固く握り締められ紫色に変色していた。

ようやく鞭打ちが終了し、八千代は椅子に腰掛け嗚咽しながら次の責めを待っていた。腰掛けたまま八千代は戒めの解かれた右手をスカートの中にいれストッキングの上から性器に触れてみた。

・・痛い・・

軽く触れただけで八千代の性器に激痛がはしる。八千代は立ち上がり恐る恐るストッキングの中に両手を入れると左手で下着をずらし右手を性器にあてた。

・・うっ・・

痛みと共にぬるっとした感触があり、そして八千代は自分のクリトリスが固くなっていることに気付いた。慌てて八千代はスカートの中から手を出した。

・・どうして・・

八千代は右手を見た。血と汗と小便の匂いに混じり確かに自分の愛

液の匂いがした。

・・私、私嬉しかったの?。私の性器を鞭打って楽しんでいただいて嬉しかったの?・・・

血と汗と小便、そして愛液のついた右手を八千代は味わうように舐め、泣き出した。

四、針の恐怖

四、針の恐怖

「次は針責めです。あなたの身体で針山にしていただきたい部分を答えなさい。」

右手を舐めながら嗚咽している八千代に次の責めが告げられた。

・・針山・・

八千代の脳裏に、ある部分を針山にされ泣き叫んでいる自分の姿が唐突に浮かんだ。

「私の性器にお願いします。」

咄嗟に答えてしまってから八千代は恐怖に震えた。

・・性器を針山にされる。私の一番大切な性器を・・

「立ち上がり、目をつむりなさい。」

八千代は震えながら後ろ手に縛られ、そして再び開脚され逆さ吊りにされた。

「目を開けなさい。」

逆さ吊りのまま八千代が目を開けると、目の前にモニターが置かれ、その画面には黒いストッキングに包まれ思い切り開脚された少女の股間が映っていた。そして八千代はそれが自分の股間だとすぐ気付いた。

「針責めの間そのモニターの映像を見続けるのです。目を閉じたりそらしたりしてはいけません。」

モニターの横にはレンズがあり、自分の性器が針山になっていく様子を見る八千代の表情が別のモニターに映し出されるようになっていた。

「それでは改めて針山にされる部分を答えなさい。」

八千代が答えることでこの責めが開始されるようだった。

「思う存分私の性器に針を刺し、私が泣き叫ぶ姿をお楽しみください。」

震える声で八千代が言い終わった瞬間、モニターにその針が映し出された。四センチ程の白い半透明で円筒状の取手の先に三センチ程度の針が光っている。八千代の目が恐怖で大きく見開かれた。

・・怖い、怖いよ・・

針は八千代の股間の中心よりわずか前に狙いをつけストッキングと下着を貫いていった。八千代はクリトリスにチクッとした痛みを感じ恐怖のため泣き叫んだ。

「怖いーっ助けてーーーっ」

しかしモニターの中で針は容赦なくゆっくりと八千代の股間に押し込まれていく。

「あっあっ助けてぇーーっ」

針が突き刺さるにつれ耐え難い痛みが八千代のクリトリスを襲った。八千代の苦痛を長引かせるため、針は意図的にゆっくりと八千代の性器に刺し込まれていく。

「嫌ーーっ痛いーーーっ」

自分の性器に針を刺しやすいように腰を動かすのを必死に我慢していた八千代であったが、ゆっくりと八千代の一番敏感な部分に刺し込まれていく針のあまりの激痛に、八千代は腰を動かし必死に逃げようとした。しかし、その八千代の腰は押さえ付けられ、泣き叫ぶ八千代の性器に針はゆっくりと容赦なく刺し込まれていった。

「嫌ーーーーーーーーーーっ」

モニターで八千代は自分の性器に針が深々と根元まで突き刺さっていくのを涙で滲む目で見続けた。

・・私、楽しんでいただいてる・・

八千代は自分の股間から無惨に生えた針を見つめ泣き続けた。そんな泣き続ける八千代にお構いなく二本目の針がモニターに映り八千代の股間に当てられた。それは最初の針より八千代の前、恥骨寄りにそして一本目同様ストッキングの中心線上に軽く刺された。次に

自分の性器を針が貫く場所を残酷に眼前に示され八千代は泣きながら哀願した。

「嫌ーーっもう許してっ」

八千代の黒いストッキングに包まれた腰は今度は始めからしっかりと押さえ付けられ、泣き叫ぶ八千代の性器にゆっくりと針が押し込まれていく。

「あーーーーっ痛いっ」

慣れることのない激しい痛みに泣き叫ぶ八千代は、腰を動かし必死に抵抗しようとした。しかしその八千代の抵抗も虚しく、しっかりと押さえつけられた腰は身動きできず、八千代の性器に針はゆっくりと容赦なく刺さっていった。

「あーーーーーーーーーっ」

八千代は針が根元まで性器に突き刺さっていく間、悲鳴をあげ続けた。

・・私の大切な性器、大丈夫?・・

その八千代の背後に拘束具が用意され、八千代の太股と腰は両側からもはや少しも身動きできないようきつく固定された。そして、しっかりと腰を固定された八千代がモニターの中に見たものは、今までよりもはるかに長く太い針だった。それは固定され何の抵抗もできない八千代の性器を今まで以上に痛めつけ傷つけ苦しめるため用意されたものだった。

「こ、怖いっ」

その凶悪な針を見た八千代は泣くことも忘れ恐怖に身体を震わせた。そしてその針が自分の股間中央に軽く刺された時、八千代の恐怖は頂点に達した。

「やめてっ助けてっ」

恐怖で八千代の口はこわばり囁くような声しか出せなくなっていた。

「あっあっあっあっ」

恐怖のため声も出せずただ震えながらモニターを見つめる八千代の目に、ストッキングを貫き下着も貫いていく針が映っていた。八千代の呼吸はまるで周りに酸素がなくなったかのように早くなっている。その八千代の脅える表情や姿を楽しむため、針は下着を貫き性器に触れたまま止められていた。

「嫌ーーーっやめてーーーっ」

その針が軽く押し込まれ、自分の性器にチクッとした痛みを感じた瞬間、八千代は絶叫する。針は八千代の性器に一ミリ程度刺されたままその動きを止めた。八千代の呼吸はさらに早くなる。

「許して、もう許してっ」

八千代はモニターに映る巨大な針が自分の性器を串刺しにしていく様を想像し泣きながら哀願した。とその凶悪な針に再び力が込められる。

「うわあっやめてぇーーっ」

八千代の絶叫に針は動きを止める。

「やめてっ助けてっ」

恐怖のためぶるぶると身体を震わせ八千代は泣きながら哀願し続けた。呼吸はどんどん早くなり、八千代は今にも意識を失いそうだった。

「もうだめーーっ早く刺してくださいっ」

繰り返される恐怖に耐えられなくなった八千代はとうとう自ら性器に針を刺されることを望んだ。その八千代の反応に満足したように長針は望みどうり八千代の性器に突き刺されていった。

「嫌ぁーーっ痛いーーーーっ」

尿道と膣口の間に突き立てられた長針は性器の肉を貫きながらゆっくりと八千代の中に入っていく。八千代は泣き叫びながら失禁していた。八千代自身はそのことに気付かなかったが、モニター内で股間部分の下着とストッキングが盛り上がりそこから透明な液体が溢れ、性器を中心に黒く光っていくのを見てはじめて自分が漏らしたことに気付いた。後から後から溢れだす尿を止めようと八千代は股間に力を入れようとしたが、何事もないように八千代の性器に深く突き刺さっていく長針の激しい痛みにそれは叶わず、八千代は悲鳴をあげ泣きながら放尿し続けた。

「あっあーーーーっ」

八千代は放尿しながらも性器に針を一本また一本と突き立てられていった。八千代の意志に関係なく尿は股間から溢れ続け、その無様な姿を楽しむように針は容赦なく八千代の性器を貫いた。

・・私の性器に針を刺すのが面白いの？それとも私に苦痛を与えるのが面白いの？・・

恥骨から肛門付近まで一直線に自分の性器に突き刺さった十数本の針を見つめ八千代は嗚咽していた。

・・どっちでもいい。こんなに楽しんでいただいてる、私の性器に針を刺すことを、私が苦痛で泣き叫ぶ姿を・・

その泣き続ける八千代にさらに苦痛を与えるため、股間中央に突き刺さる針の列の両側に再び針が突き刺されていった。

「あーーっ痛いいっ」

固定され逃げることもできない八千代の股間に針は容赦なく刺されていく。後ろ手に縛られ涙を拭うこともできない八千代は、滲む目で自分の汗と小便と血で汚れた股間をを見つめ思った。

・・もっともっと私の性器に針を刺してください・・

性器に刺さる針の痛みに身体を硬直させ泣き叫びながら、そして、まるで物のように無情に針山にされていく自分の性器をモニターで見ながら、八千代は祈った。

・・私の泣き叫ぶ姿を楽しんでください・・

五、針と鞭

五、針と鞭

モニターにはもはや針を刺すところのない程無残な姿となった八千代の股間が映し出されていた。その針山と化した自分の性器を見ながら八千代は思った。

・・私の性器、こんなにたくさん針を刺すほど楽しんでいただけたんですね・・

汗と小便で黒く光るストッキングに包まれた八千代の股間に無数に突き刺さる針。その無惨な姿が楽しんでいただけたことの証だと八千代は思った。

「針責めは終了しました。最後の責めに移る前にこの針の抜き方についての要望を言いなさい。」

・・抜き方・・

考えてもいない言葉だったが、またも八千代の頭に恐ろしい責めを受けている自分の姿がうかんだ。

「このまま私の性器を鞭で打ち、針を叩き落としてください。」

言いながら八千代は恐怖で震えはじめた。少し触れられただけで激

痛がはしる針山と化した自分の性器を鞭で打たれる。遠目でみてもわかるほど逆さ吊りの八千代の身体は無様に震えていた。

・・怖いです、でも私の性器を痛めつけることを楽しんでいただけるなら・・

八千代は震えながらモニターに映る無惨に針山とされた自分の性器を見つめていた。と、八千代の太股を固定していた拘束具が金属音をたてて動き出した。今でも限界まで開いている八千代の足をさらに開こうとしている。

「うっ」

八千代の股関節が嫌な音を立てている。

「あっあ・・」

呻き声を上げる八千代の足はほとんど水平近くまで開かれていた。今まで画面上に見えていた太股が視界から消えたことで、八千代の性器に突き刺さっている無数の針が異様さを際立たせる。その異様さは八千代にこれから自分が受ける苦痛はこれまでの比ではないと認識させるに充分だった。

「こ、怖いです・・」

あまりの恐怖に八千代は泣き出していた。モニターを見つめる大きな瞳から涙が溢れ出し、八千代は自分が失神するのではないかと思うほど呼吸が早くなっていた。その八千代の怯える姿を楽しむため構えられた鞭はまだ振り下ろされずにいる。

「あっあっあっあっ」

恐怖で嗚咽する八千代の性器を効果的に損傷させるため鞭は慎重に狙いを着けられ、そして渾身の力を込めて振り下ろされた。

「あーーーーーーーーーっ」

物凄い風切り音と共に鞭が針を刺された性器に振りおろされた瞬間、八千代は想像を絶する激痛に絶叫し吊るされたままの上半身はのたうち回り失禁だけでなく大便まで漏らしてしまった。

「嫌ぁ助けてーーーっ」

我を忘れて許しを乞う八千代の性器に再び容赦なく鞭は叩き込まれる。しかし、八千代の予想に反して抜け落ちた針は意外に少なく、まだほとんどの針が八千代の性器に突き刺さっていた。

「ひーーーーーーーっ」

鞭打たれた瞬間針はさらに深く八千代の性器に突き刺さり、そしてその反動で性器の肉を深くえぐった。

「あーーーーーーーっ」

容赦のない激しい鞭打ちに八千代は泣き叫び、許しを乞い、身動きできない腰を動かそうと必死に身体をよじった。

「痛いいっ。」

八千代の想像とは裏腹に性器に深く刺さった針はなかなか抜けず、

そのため際限なくその股間に鞭が叩き込まれていた。すでに性器を中心に小便、大便、汗と血の匂いが入り交じりムッとする悪臭を放っていたが八千代自身その匂いに気付くほどの余裕がなかった。

「助けてえぇーーーーーーっ」

絶叫した八千代はとうとう失神してしまった。だらしなく白目をむいた八千代の激しく動いていた上半身は力無くだらりとぶら下がる。しかし、八千代の性器を襲う凄まじい痛みは、八千代に失神することさえ許さなかった。失神した八千代の性器に容赦なく叩き込まれる鞭の激痛に、八千代は覚醒し悲鳴を上げ再び失神した。その八千代の姿を楽しむため、鞭は激しさを増しながら八千代の性器を打ち続けた。

八千代が気がつくとモニターには自分の無惨な状態になった性器が映し出されていた。針責め後の激しい鞭打ちでストッキングと下着の股間部分は破れ、八千代の性器は隠すものなくすっかり露出している。その性器は、激しい鞭打ちに針責め、さらに続いた鞭打ちにより見るも無残な状態に変わり果てていた。

その八千代の性器が大きく開かれ、拡大されて映し出された。モニター一面に大きく映し出された八千代の性器は血塗れになりながらもクリトリスは固く勃起し、膣からは糸をひき今も愛液が溢れていた。

・・私、嬉しかったんだ。こんなに激しく私の性器を痛めつけていただいて、こんなに凄い苦痛を与えていただいて・・

モニターに映った自分の無惨な性器を見つめ八千代は大声で泣きはじめた。

六、恐ろしい考え

六、恐ろしい考え

「最後の責めはあなた自身が考えなさい。商品価値を高めるような素晴らしい責めを期待します。」

声が告げると椅子に座る八千代の前に紙と筆記具が用意された。八千代は座ったままかるく足を開くと左手をスカートの中に入れ、右手でペンを持った。そして、スカートに入れた手で自分の性器を開いた。

・・痛い・・

触れるだけで鋭い痛みが八千代を襲う。しかし、まだクリトリスは固く、膣は濡れていた。

・・私の性器、もっと痛めつけてもらいたいと言ってる。私も・・

八千代は自分の性器に問い掛けるかのように膣に指を入れた。

・・どうしてほしいの・・

八千代は腰を浮かし、指で膣の内壁を擦った。そして、足を開き性器を鞭打たれる自分の姿、泣き叫ぶ自分の性器に容赦なく突き立てられていく針、その針山と化した性器に振り下ろされる鞭、八千代は自分の性器が受けた想像を絶する苦痛を思い出していた。

「あっ」

自分の無様な姿を思い出すほど溢れてくる愛液に、八千代はたまらずペンを置き両手で性器を愛撫しだした。そして、とうとう八千代は、床に転がり、汗と小便、大便で汚れた喪服のスカートをまくり上げ、大きく足を拡げたままブリッジのように腰を持ち上げ、その激痛のはしる股間を泣きながら愛撫していた。

・・私の性器、こんなに痛いのに喜んでる。私も、こんなに痛いのに嬉しい・・

八千代は涙を流し、口はだらしなく開けながら性器を愛撫し続けた。

「あっ、あっ」

絶頂寸前の八千代の足は爪先立ちになり腰はさらに高く持ち上げられた。

「あーーーっ壊してえーーーーーっ」

絶叫した八千代の高く上げられた股間から愛液が噴水のように吹き出した。そして、八千代の腰はそのまま糸の切れた人形の様に力が抜け冷たい床に落ちていった。ストッキングと下着が破れ性器だけ露出した八千代の股間は、八千代自身の激しい愛撫で白濁した愛液が辺り一面糸を引いていた。そして、放心状態の八千代に恐ろしい考えが浮かんだ。

・・これならきっと楽しんでいただける・・

八千代は再び後ろ手に縛られ開脚され逆さまに吊されていた。モニターに白濁した愛液が糸を引く八千代の性器が映し出される。それは八千代が自慰に耽っていたことを証明していた。

「あっ」

八千代は自分の汚れた性器をモニターで見つめ青ざめた。

「私、自分の快感のために許可なく自慰を行い、これから痛めつけていただく大切な性器を汚してしまいました・・」

八千代は取り返しのつかない自分の失態に萎縮し後悔した。しかし、そんな八千代の後悔など関係なく、ただ八千代の性器を痛めつけるための準備が進められていく。まず八千代の太股に強力なクリップが三個付いたベルトがきつく巻かれる。

「あっ痛い・・」

思わず八千代が声を上げるほど革ベルトはきつく締めつけられ、黒いパンストに包まれた綺麗な八千代の太股の肉に深く食い込んだ。そして、八千代の小陰唇が伸ばされクリップで留められていく。

「あ・あ・・痛いっ・・」

八千代は自分の性器を乱暴に拡げられ身体に力が入ったが、腰を動かすのはなんとか耐えた。モニターには左右からクリップで留められ、解剖された蛙の腹のように無様に拡げられた八千代の性器が映っていた。

・・私の性器、喜んでる・・

八千代は目の前に映る自分の無様な性器のクリトリスが固く勃起しているのを見つめ、初めて羞恥心が湧き起こった。

・・私、性器を痛めつけられて喜んでいる変態の女の子ですけど、どうか気に入ってください・・

八千代の拡げられた性器から白濁した愛液がきれいに拭き取られ、代わりに白いゲル状の物質が塗られていく。
八千代はその様子をモニターで見つめ、これから自分の性器が経験する想像できない苦痛を思い涙が止まらなかった。
自慰しながら八千代が思いついた責めとは、自分の性器を燃やすことであった。性器を燃やされ泣き叫ぶ自分の哀れな姿を十分楽しんでいただく。そして、拡げられたまま燃え続ける性器を鞭で打っていただき、のたうち回る自分の姿を楽しんでいただこう、という恐ろしい責めだった。

六、恐ろしい考え（後書き）

読んで下さり有難う御座います。
感想や、こんな風に痛め付けて欲しい等々書いて頂ければ幸いです。
勿論、全て書ける訳ではないのでご了承下さい。
有難う御座いました。

七、性器燃焼

七、性器燃焼

「熱いーーーーっ」

性器に火をつけられ八千代は悲鳴を上げた。
火はなんの容赦もなくじりじりと八千代の性器を焼いている。鞭や針とはまた違う苦痛に八千代は泣き叫んだ。

「もう許してくださいーーーっ」

モニターの中で焼かれていく自分の性器を見ながら八千代は恐怖と苦痛で半狂乱になっていた。

「あーーーっ焼けちゃうーーーっ」

自分の股間が燃えている映像は八千代の精神にも衝撃を与えていた。

「嫌あ、許してーーーーっ」

八千代の身体が極度の緊張と恐怖で痙攣をはじめたのは当然だった。
すると燃え続ける八千代の性器に新たな固形燃料が追加された。

「うわあーーーーっ」

火力が一気に強くなり八千代は絶叫した。

「これ以上許してくださいーーっ」

遠目でもわかるほどぶるぶると身体を痙攣させながら八千代は哀願した。

「もう消してくださいーーっ」

しかし当然ながら八千代の哀願は聞き入れられなかった。

悲鳴と許しを乞いながら八千代は半分白目を向き口から泡を噴き失神に近い状態になっていた。股間付近のストッキングはちりちりと溶けている。そして、追加された固形燃料が溶け、八千代の拡げられた性器を溢れ流れ出した。

火は八千代の恥骨から肛門まで広がり、容赦なく八千代の柔らかな肌を焼いた。そして、とうとう八千代の白い下着に火が燃え移った。

「嫌あーーっ助けてえーーーーーーーっ」

下腹部が火に包まれ八千代は恐怖で気が狂いそうだった。

・・燃やされてるの、私。嬉しい？・・

火は八千代の太股まで包みはじめた。絶叫しながら八千代は身体を必死に動かし抵抗していたが、その下半身に火はどんどん広がっていった。そして、八千代のわずかに生えた陰毛が焼ける匂いが充満する。

・・私の性器、燃えてる・・

ほとんど意識のない八千代は、なぜか燃え続ける腰を突き出し、身体を海老のように後ろに反らした。と、その姿勢が合図だったかのように、突き出された八千代の性器に鋭い風きり音と共に鞭が叩き込まれた。

「あーーーーーーーーっ」

信じられないことに、焼けただれた性器を鞭打たれた八千代は股間から愛液を吹き出し絶頂に達していた。目は正気を失ったように宙を泳ぎ、口はだらしなく開けられている。
その八千代の燃え続ける性器へ嵐のように鞭が叩き込まれた。

「痛いーーーーっ」

焼けただれ拡げられた性器を容赦なく鞭で打たれる激痛に、八千代は覚醒し身体を硬直させ絶叫した。

「痛っ痛っ痛いーーーっ」

鞭は容赦なく八千代の性器に叩き込まれる。

「嫌ーーーっ痛いーーーっ」

泣き叫ぶ八千代の性器にさらに強烈に鞭は叩き込まれる。その容赦ない激しい鞭打ちに拡げられたままの八千代の性器は皮膚が裂け血が飛び散った。

ようやく床に降ろされた八千代は立ち上がろうとして無様に転んでしまった。身体が震えていて思うように動かない。

「仰向けになり目をつむり口を開きなさい。」

どうしても立ち上がれなかった八千代は安堵し、言われるまま仰向けになり目をつぶって口を開いた。すると開いた口にいきなり生暖かい液体が勢いよく入ってきた。

・・オシッコ？オシッコを飲まさせていただいてる・・

八千代は自分の口にたまった小便をこぼさないようにゆっくり味わいながら飲み干した。その間、八千代の下半身はスカートをまくられ足を開かされていた。

「自慰しなさい。」

八千代は言われるまま震える腰を持ち上げ両手を性器にあてた。

・・あっ・・

すでに八千代のクリトリスは固く勃起しており、膣は愛液を溢れさせていた。

・・私、燃やされて嬉しかったんだ・・

八千代は自慰する姿を楽しんでもらうため大きく足を開き、自分が性器のどこを刺激しているのか分かるようゆっくりと両手を動かし始めた。

・・私の自慰する姿、お楽しみください・・

八千代は固く勃起したクリトリスを摘み擦り、尿道を指先で刺激し

膣に指を入れ、自分の性器の恥ずかしい姿を楽しんでもらおうと必死に指先を動かす。その妖しく動く八千代の両手と性器に生暖かい液体がかけられた。

・・オシッコ。オナニーしている私の性器にオシッコをかけていただいてる・・

「あっ」

八千代は爪先立ちになり腰を高く突き出した。

・・もっともっと、おかけください。私の無様で汚い性器にオシッコを・・

「あっあーっ」

自分の性器に小便をかけられながらの自慰に八千代は早くも絶頂に達しそうになった。

「あっあっあっあっ」

その八千代の顔にも小便がかけられた。

・・嬉しい、私、嬉しいんだ・・

「あっあーーっ」

性器と顔に小便を浴び絶頂寸前の八千代の両手が無情にも退けられ、小便を浴びながら愛液が糸を引く八千代の性器に鞭が思い切り叩き込まれた。

「あーーーーーーーーっ」

八千代は性器を鞭打たれ、そのまま絶頂に達してしまった。

八、人間蝋燭

八、人間蝋燭

そして今、八千代は落札者の館にいた。
白いレオタードに白いストッキングで大きく開脚され腕は後ろ手にきつく縛られ逆さに吊るされている。レオタードの股間部は八千代の性器が露出する程度に切り裂かれていた。そして、固く勃起した八千代のクリトリスを今まさに針が貫こうとしている。

・・怖いです・・

クリトリスに感じたチクッとした痛みに八千代は恐怖で身体を強張らせた。何度経験しても性器を針で刺される苦痛に慣れる事はない。むしろその痛みを経験したために八千代は、却って強烈な恐怖に襲われていた。自分の敏感な性器に針を刺される想像を絶する苦痛。八千代は涙を流し小さな声で泣き始めていた。

「痛いぃーーーっ」

泣き続ける八千代に何の躊躇いもなく針はクリトリスを右から左に貫通しそのまま突き抜けた。針に付けられた太い糸がずるずると八千代のクリトリスを通される。

「あぁぁぁーーーーーーーーーーっ」

あまりの苦痛に八千代は絶叫し失禁した。逆さ吊りにされた八千代の股間から噴水のように小便が勢いよく溢れ出す。小便を漏らし号泣する八千代に、さらに苦痛を与えるため、もう一本の針が最初の針と交差するようにクリトリスをゆっくりと貫通し糸が通された。次に鋭い針が何本も用意され、八千代のクリトリスに突き立てられる。

「ひぃぃぃーーーーーーーっ痛い、痛い、痛い、痛いっ」

吊られたまま激痛でのたうち回る八千代の腰は押さえつけられ針は容赦なくクリトリスの周りに何本も突き刺され、当然、敏感な突起にも突き立てられる。

「嫌ーっ助けてえーーっ」

泣き叫び哀願する八千代のクリトリスになおも針は刺し続けられ、たちまち八千代のクリトリスはハリネズミのようになった。しかし、嗚咽を続ける八千代の膣からは愛液が溢れ出していた。その膣に膣鏡が奥まで挿し込まれ大きく開口される。そして開口された奥に見える赤黒い子宮口に鉗子を使い無理やり綿の糸が挿入された。そして、クリトリスを貫通した糸と纏められる。

「うわあーーーーーっ」

自分の身体の奥の激痛に八千代は悲鳴をあげた。そして、その糸の挿入後大きく開口された八千代の膣内に赤くどろどろに溶かされた蝋が流し込まれる。

「熱いいーーーっ」

八千代はエビのように身体を反らせながら絶叫した。
膣に流し込まれた蝋が固まると開口していた膣鏡が抜かれ、膣とクリトリスから飛び出した糸に火が点けられた。同時に部屋の照明も落とされる。

「あーーーーっ」

あまりの熱さに八千代が腰を動かし、火を消そうともがく。

「熱いいぃっ」

これは八千代自身が、自分の泣き叫ぶ姿を楽しんでいただくため考え出した人間蝋燭とクリトリスへの針責めを合わせたものだった。
この責めを思いついた時八千代は、自分の性器が受ける苦痛に恐ろしくなると同時に愛液を溢れさせるほど興奮した。

「もう嫌ーーーっ助けてくださいーーっ」

八千代の股間だけクリトリスからの出血と溶けた蝋で白いレオタードが赤く染まっている。
八千代は膣を焼かれて激しく腰を振り泣き叫んだ。縛られ背後で握りしめている八千代の手は、きつく握り過ぎて変少くしている。そして、更なる激痛が八千代の性器を襲う。クリトリスに付けられた糸が燃えて短くなるにつれ、クリトリスに突き刺された針が赤く熱しられ八千代のクリトリスを中からも焼く。

「あひぃぃーーーっ許してくださいぃぃーーっ」

すると、八千代の絶叫があまりに五月蠅かったのか、口を押えられるとガムテープが何重にも貼られ厳重に口を封印されてしまった。

「おごおごっ」

暗闇の中、白いレオタードでのたうち回る八千代の姿が、八千代自身の股間で揺らめく炎により妖しく照らし出される。その妖しい光景は観る者に残虐な意思を植え付けていった。

それはこの責めを考えた八千代自身すら想像できないことだった。

暗闇の中その白い肢体を妖しくくねらせ泣いている八千代。残虐な意思はその八千代にもっと激しい苦痛を与えるため、炎が揺らめき針が突き刺さる八千代の性器に思い切り鞭が叩き込まれた。

「おーーーーーーっ」

性器に針を刺され、それを鞭で打たれた経験はあった八千代だが、クリトリスに集中的に針を刺され鞭で打たれた経験はなかった。それは八千代の想像を絶する激痛であった。そして、鞭の一撃で何本もの針が貫いていたクリトリスが裂け八千代は口から泡を吐き失神してしまっていた。

その失神して無防備になった八千代の性器に鞭が容赦なく連続で叩き込まれる。

八千代は激痛で気が付いては泣き叫び、再び失神するというパターンを繰り返していた。八千代の性器はすでに血まみれで鞭が叩き込まれる度、血が飛び散り白いストッキングやレオタードを赤く染めた。それでも鞭は容赦なく八千代の性器を打ち続けた。

そして、覚醒と失神を繰り返し朦朧となった八千代の両手の戒めが解かれた。

「そのまま自慰しなさい。」

八千代は開脚され逆さに吊されたまま自慰をはじめた。左手は火が

消え固くなった蝋を膣から出し、それを男根代わりにし激しく動かす。そして、右手はまだ何本か針の刺さったまま血塗れのクリトリスを激しく擦った。

「あっあっ」

八千代は激しい痛みで泣きながらも手は動かし続けた。そして、八千代が絶頂に達しようとした瞬間、八千代の手は退けられ、白濁した愛液が糸を引く八千代の性器に鞭が叩き込まれた。

「おうーーーーーーっ」

八千代は性器を鞭打たれ、股間から愛液を噴水のように跳ばした。

「性器を開きなさい。」

八千代は荒い息のまま両手で自分の性器を開いた。その拡げられ尿道口や膣口を晒す八千代の性器に、うなりをあげて鞭が振り下ろされる。

「あっあーーっ」

八千代は自分の拡げられた性器を鞭打たれながら、絶頂に達し続けた。そして幾度も絶頂を迎えた八千代は床に下ろされ、仰向けのまま足を開き腰を高く持ち上げていた。

「性器を開きなさい。」

八千代は高く持ち上げた腰の前後から手をまわし自分の性器を再び大きく開いた。そして、その自分の性器がよく見えるように爪先立

ちになりさらに高く腰を持ち上げた。

「おっ」

白いレオタードに白いストッキングで腰を高く上げた八千代の拡げられた性器に小便が浴びせられた。

「おっおっ」

八千代の勃起したクリトリス、尿道に小便が浴びせられる。そして、口を開き愛液を溢れさせる膣口に小便が浴びせられ膣内に生暖かい小便が勢いよく入ってくると八千代は絶頂寸前になった。

「おうーーーーーーーーーーっ」

自分で拡げた性器に小便を浴び続け、とうとう八千代は絶頂に達してしまった。

・・嬉しい・・

八千代は心からそう思った。

九、人間オブジェ（前書き）

今回は少し趣を変え羞恥プレイになります。とはいえ八千代の性器に対する拷問は変わりません。

九、人間オブジェ

九、人間オブジェ

八千代は朝から呼び出され、今日の準備に為衣装を選んでいた。今日は午後から大事なパーティがあり、八千代もそれに姿を出すことになっていた。ゲストの皆様に喜んで頂けるよう八千代は頭を悩ませた。基本プランは聞いているので、それに合わせた衣装を選ばなければいけない。当然、性器は晒されるので下着は身に着けない方がいいのか、逆に下着は穿いて股間を切り裂いた方がいいのか、それにスカートはどうするか、八千代は悩んでいた。そして、悩んだ末八千代は下着ではなくスクール水着を着用する事に決めた。股間部分は切り裂いて性器を露出させる。スカートも穿く事に決めた。スカートをめくるのも楽しいだろうと考えたのだ。さっそく衣装を身に着けると八千代は自分の姿を鏡に映してみる。

・・喜んで頂けるかな・・

三つ編みお下げにした黒髪に太い眉、大人しく真面目そうな顔は、華やかさはないが痛めつけたくなるような被虐性のある顔に見える。そして、スクール水着を着用した八千代の体は、まだ胸の膨らみは小さく寸胴の幼児体型の為かなり幼く見えた。八千代は鏡の前でクルッと体を回転させる。スクール水着と色を合わせたプリーツのミニスカートがふわりと舞い、そこから覗く八千代の股間を強調した。最後に八千代は太ももに食い込む黒いサイハイソックスを穿き、部屋をあとにした。

パーティ会場で八千代はオブジェとして中央に置かれることになる。その重要な役目に八千代は緊張した。

・・どうか、うまくいきますように・・

緊張する八千代に足を開いて台の上に立つよう命令される。そして、八千代の両足首が固定され足を閉じられないようにし、両腕も背中に廻されきつく縛り上げられた。さらに口には八千代が事前に用意してあった自慰で汚れた下着を詰め込まれ、その上からボールギャグが噛まされる。当然、ゲストの顔を見る事など許されない八千代は黒い布で厳重に目隠しされる、さらに念の為、鼻にフックを架けられ天井からのロープで思い切り引かれ八千代の顔が上を向いたままで固定されるよう調整された。

「うっうっ……」

すでに八千代の体から八千代自身の匂いが溢れ出していた。その匂いの溢れる八千代の性器へ本日ゲストを楽しませる仕掛けが装着される。

まず八千代の性器の右側の小陰唇が摘まれ太い釣り針が突き刺され貫通される。まず一本。そして、二本三本と釣り針は容赦なく突き刺されていく。五本の釣り針を突き刺して貫通させると今度は左側にも同じように釣り針を五本貫通させられた。

「おおおおっ」

八千代はすでに泣き出し黒い目隠しからは涙が滲み出ていた。もちろん釣り針を性器に貫通させただけで八千代のオブジェが完成する筈がなかった。八千代が号泣し苦しむ姿をゲストに楽しんで貰うの

が主旨なので、八千代の性器をもっと激しく痛めつけなければオブジェの意味がなかった。
その為の下準備が続いている。八千代の性器が拡げられ尿道にコックの付いた太いカテーテルの先端が当てられた。八千代はビクッと体を震わせる。膣や肛門なら多少太いものでも八千代は耐えただろうが尿道は別だった。その太いカテーテルが尿道に突き入れられ八千代は塞がれた口で絶叫した。しかし、それに構わずカテーテルは八千代の尿道に押し込まれていく。

・・おしっこの穴、壊されちゃう・・

あまりの激痛に八千代は体をくねらせ、今度は鼻の穴が千切れそうになった。

「ひやぁーーーーっ」

そんな八千代の事などお構いなしに作業は進められていく。カテーテルを八千代の尿道に挿入後、性器から垂れ下がる釣り針に付いた糸に重い陶器製のボウル状の容器が取り付けられていく。そして、左右各五本の糸を結び終わると手を離されぶらんと八千代の性器からぶら下がる。

「おおぉぉーーーーーっ」

八千代の性器に一気に重量がかかり、小陰唇は千切れそうなほど伸びている。

・・痛いぃぃーーっ切れちゃいますぅーーっ・・

そして、性器にぶら下げられた陶器製の容器に尿道に挿入されたカ

テーテルが入れられた。八千代は今日の為しばらく前から排泄を禁じられており、さらに水を多量に飲まされていた。そして、最後の仕上げとして八千代の名前の入ったネームプレートが取り付けられる。通常が胸だが、八千代は性器にぶら下げる事になった。八千代のクリトリスが勃起させられ、そこにネームプレートの付いた安全ピンが容赦なく突き通される。

「おごぅぅーーーっ」

クリトリスを太い安全ピンで貫通され八千代はひと際大きな悲鳴を上げた。そして、オブジェとして完成した八千代はパーティの間はこのまま動く事も許されず大勢のゲストの前でその姿を晒すことになった。

パーティが始まると、まず八千代の尿道に入れられたカテーテルのコックが開かれた。八千代の膀胱に溜まっていた小便が一気に流れ出し、性器にぶら下げられた容器に溜まる。

「おごぉぉーーーーっ」

性器が千切れそうな激痛で絶叫する八千代の姿が好評で、大勢のゲストが八千代の前に集まってきた。ちょうどゲストの頭の高さに八千代の股間がくるように高さを調節してあるのでスカートをめくれば八千代の引き伸ばされた性器を目の前で見る事が出来、それも好評の要因の一つになっていた。

時間が経つにつれ八千代の性器にぶら下げられた容器に溜まる小便の量が多くなってはきたが、それでも八千代の膀胱に溜まった小便の量には限界がある。八千代をもっと痛めつけてゲストを楽しませる為、八千代の肛門も利用する事になり浣腸器が用意された。

スクール水着の股間が大きく切り裂かれ八千代の肛門も晒され、大勢の注目する中八千代の肛門に浣腸器が突き刺さる。そして、五百ミリもの浣腸液が八千代の肛門から体内へ注入されていく。

・・お腹が冷たい・・

八千代は自分が浣腸されている事は当然すぐ分かり、それが何の為に行われているのかも理解した。

・・もっと私を辱めて、もっと私の性器を痛めつけて、お楽しみください・・

八千代は自分の性器が熱くなり自慰したい衝動を必死に押さえていた。

十、千切れる小陰唇

八千代の苦しむ姿を楽しむのが目的の為、当然浣腸一本で許される筈がなかった。一本目の注入の後すぐに二本目の注入が行われる。これで、一リットル、しかし、この程度では終わらない。続いて三本目、四本目と容赦なく八千代の肛門から浣腸液が注入された。合計二リットル。八千代の下腹がポッコリと膨れている。

・・苦しいです、でも、もっと私を痛めつけて楽しんでください・・

ゲストからも、もっと注入しろとのリクエストがあり、八千代の肛門にまた浣腸器が突き刺さり注入が開始された。が、すでに二リットルもの浣腸液を注入されている八千代の体内に無理矢理時間をかけて五本目を注入する。そして、それが全て八千代の中に入った時ゲストから歓声があがった。しかし、どうせならもう一本入れて三リットルにしてはどうかとの声が上がり、八千代の肛門にまた浣腸器が突き刺された。

・・もう入らないですぅ。でも嬉しい、私の無様な姿を楽しんでいただいてる・・

八千代は小陰唇を引き伸ばされながらも膣口から愛液を溢れさせていた。そして、自分でも注入される浣腸液を受け入れようとするが、なかなか注入作業は進まなかった。それでも最後は八千代の苦痛な

どかまわずに無理矢理に肛門から浣腸液を押し込み八千代は三リットルもの浣腸液を全て注入されてしまった。そして、急ぎ八千代の肛門にコック付きのチューブが乱暴に押し込まれ、もう一方の先は性器に下がる容器の中に入れられた。準備は整い八千代の肛門からのびるチューブについたコックが開けられる。すると、凄まじい勢いで八千代の性器に下がる容器の中に大便が流れ出してきた。一気に重量が増え八千代の小陰唇が引き千切れそうになっている。

「おごぉぉぉーーーーっ」

八千代の悲鳴もまた大きくなってきた。八千代のスカートは捲られ、クリトリスに付けられたネームプレートも一旦外された。八千代の大きく足を開いたまま性器にぶら下げられた糞尿の溜まる容器が少しずつ下がっていく様子がハッキリと良く見えるようになる。あと僅かで八千代の小陰唇は千切れる。大勢のゲストはその瞬間を見逃さないよう八千代の股間に視線は集中した。

「おぉぉぉーーーーーっ」

八千代の苦痛の声も大きくなってくる。そして、その時はきた。一つの釣り針が八千代の小陰唇を引き千切りぷらんと垂れ下げる。すると、バランスを崩した容器が傾き、次々に八千代の小陰唇を引き千切っていった。

「ぐぎゃぁぁーーーっ」

口を塞がれていてもなお凄まじい悲鳴が八千代の口から洩れる。そして、小陰唇を引き千切られた性器からは血が滴り落ちていた。

・・痛いよ。でも楽しんで頂けて嬉しい・・

八千代は、性器の激しい痛みに耐えながらオブジェとして喜んでもらえた自分に満足していた。だが、パーティはまだ半ばである。パーティ半ばでメインのオブジェがなくなってしまってはゲストに申し訳ない。そこで、ここから八千代の性器をこのまま提供し自由に痛めつけられるよう趣向を変更した。ただし、多少の損傷はかまわないが破壊はご容赦願うという事でアナウンスされた。
それは素晴らしいとゲストの間で拍手が起こる。そして、番号札が配布され順番に八千代の性器に拷問できる運びとなった。
一番目の男が、目を輝かせて八千代の股間の前に立つ。手には用意された長い針を持っていた。一度クリトリスから奥深く針を突き刺したいと思っていたんですよ。これが良かったら私も奴隷を購入しようかな。そう言いながら八千代のクリトリスを摘まむと先端に針を当てた。
八千代の鼓動が早くなってくるのが分かった。クリトリスへの針攻めは何度も経験した八千代だったが、当然慣れる事はない。針を突き刺される度に凄まじい激痛に泣き叫ぶ事になる。
八千代は、クリトリスに感じたチクッとした痛みでこれから味わう痛みを想像し体が汗ばんできていた。

・・うっうっ、怖い・・

その泣き出している八千代の姿も好評でパーティは、盛り上がっていく。針を持った男はカメラに向けてポーズを決める。男が八千代のクリトリスに針を突き刺す様子を動画撮影し、そのＳＤカードを無償で提供するサービスだった。
男はカメラの前で、八千代の性器に突き刺す針の太さや長さをよくわかるようにアップで写していた。直径一ミリ、長さ三十センチはある凶悪な針である。これが八千代のクリトリスに突き刺されていく。

そして男は号泣する八千代のクリトリスに針を突き刺し始めた。八千代の泣き声が大きくなっていく。

十一、終わりなき性器拷問

十一、終わりなき性器拷問

八千代は大勢のゲストが間近で見つめるなか、クリトリスを串刺しにされていく。男は初めてクリトリスに針を突き刺す興奮で手がぶるぶる震えていた。その震えが振動として針に伝わり八千代に更なる激痛を与えている。

「おごぉぉぉーーーっ」

八千代は悲鳴を上げ続けていた。急遽用意された小型カメラで、八千代の串刺しにされていく性器の様子が巨大なモニターにアップで詳細に映し出されていたが、多くのゲストの視線は眼前の本物の八千代の性器に集中していた。

・・深いぃぃぃーーーっもう許してぇぇぇーーーっ・・

クリトリスに針を突き立てられたり貫通されたりした経験はある八千代だったが、クリトリスの頂点からここまで深い体の中まで串刺しにされた経験はなかった。八千代は性器から突き刺さる長針の激痛に必死に耐えていた。

・・動いたらダメ、股を開いて性器に針を刺される無様な姿を楽しんでもらうの・・

もちろんオブジェとして展示されてる八千代は動くことは許されなっかたし、鼻にフックを架けられて天井から引き伸ばされている八千代は、体を激しく動かせば鼻が千切れるようになっていた。男は興奮しながら長かった針のほとんどを八千代のクリトリスに突き刺していた。クリトリスから体の奥深くまで針を突き刺された八千代は、泣きながら足を開き性器を晒し立っていた。男は興奮した口調で、最高に楽しかった私もぜひ性器奴隷が欲しくなりましたと言い記念の録画されたＳＤカードを受け取ると名残惜しそうに八千代の性器の前を離れた。

二番目の男も最初の男同様、長針を選択した。やはり、八千代の性器に針を刺したいという希望者は多いようだった。男は八千代のクリトリスではなく、会陰部。八千代の性器の肛門寄りに狙いをつけ針先を当てる。おおっとゲストからも声が上がる。これもかなり痛そうだぞと期待する声が多く聞かれた。
その声が耳の入り八千代は震えていた。

・・怖い、怖いよ、でも楽しんで頂いてる、我慢するの八千代・・

八千代は自分に言い聞かせ耐えようとしたが、その痛みはとても耐えられるものではなかった。八千代は悲鳴を上げ続け、涙は目隠しから溢れ流れ落ちる。開いた足も体もぶるぶると痙攣し、八千代が倒れて鼻が千切れなかったのは奇跡に近かった。
男は、泣き叫ぶ八千代の会陰にずぶずぶと長い針を突き刺していき、とうとう最後まで針を押し込んだ。

「おごぉぉぉーーーっ」

八千代の悲痛な声がパーティ会場に響き、ゲストの興奮も高まってきていたところで三番の札を持ったミニスカートから太ももを見せ

た女が歩いてきた。女は八千代の性器の前でじっくりと八千代の性器を観察した後、その顔に邪悪な笑みを浮かべ八千代の性器を大きく拡げると手にしたライターで炙り始めた。そして、これ位は性器破壊にならないですよねと念を押す。了承を得た女は、さらにライターの火を八千代の性器に近付けて炙っていたが、これはもう抜いていいかと八千代の尿道と肛門から垂れ下がるカテーテルとチューブを指差して尋ねた。そして、女は八千代の垂れ下がる二本の管を乱暴に引き抜くと、またライターで八千代の性器を炙り始めた。女はカテーテルを抜いた尿道口と膣口を集中的に火で炙り、それに飽きると今度はクリトリスと会陰に突き刺されている針を炙り始めた。針が火の熱で赤くなってくる。

「うぎゃぁぁぁーーーーっ」

八千代の絶叫はもう人間のものとは思えないほど凄まじい声に変わっていた。じりじりと性器を焼かれたうえに今は性器に突き刺された針を焼かれ、体の中に焼けた針を突き刺されたのと同じ状態になっていた。女は楽しそうに八千代の性器を火炙りにしていたが、興奮がおさまらなくなったのか、ミニスカートの中に手を入れると自分の性器に手を当て自慰を始めてしまい、四番の札を持つ者が、女を蹴り飛ばして強制的にどかした。四番の札も女だった。この女はもうスカートを脱ぎ捨て下着も脱いでいた。そして、自分の性器に太い性具を根元まで挿入しベルトで固定している。初めから興奮状態の女は、八千代の膣口に乱暴に膣鏡をねじり込むと最大に開く。そして、八千代の膣の奥に見える子宮を確認し、残虐な笑みを浮かべると手に持った長い針を、なんと八千代の子宮に突き刺した。

「うぉぎゃぁぁぁーーーーっ」

絶叫する八千代の声を嬉しそうに聞きながら女は、さらに深く八千

代の子宮に針を突き刺していく。そして、女は八千代の子宮に刺した針を回転させたり、上下に動かして八千代の子宮を徹底的に痛めつける。

・・助けて、もう助けて・・

今までなんとか耐えていた八千代だったが、体の奥に残酷に針を刺されその激痛とその針を刺されている自分の体の個所が八千代の精神にも衝撃を与えていた。子宮を串刺しにされるという衝撃に八千代は痛みだけではない涙も大量に流していた。

・・私…子宮に針を刺されてる、こんな体の奥まで痛めつけていただけるなんて、凄い、どんな人が刺してくれているんだろう　私、もっとひどい事されるのかな　みんな、私の性器を痛めつけて楽しんでくれてるんだよね・・

八千代は、ここまで残虐な事をされても動いてしまってオブジェとしてゲストの皆様を失望させてはならないという事と、また自分の性器を拷問して泣き叫ぶ姿を楽しんでくれているゲストにも思う存分楽しんでもらう事、体の奥の激痛に耐え八千代の頭にあるのはそれだけだった。

女は、耐えている八千代が我慢ならなくなったのか、子宮に刺していた針を抜くと、また突き刺した。そして、ザクザクと何度も何度も八千代の子宮に針を突き刺す。

・・嫌ぁもう助けてぇ・・

足を開かされ性器も拡げられ、その奥の子宮を何度も針で突き刺され泣き叫ぶ八千代の姿はゲストに好評であったが、八千代の性器に拷問するのは一人一回までというルールの為、この女も強制的に退

去させられた。

そして、次の五番目が待ちかねたといように八千代の性器を覗き込む。まだ、パーティの御開きには時間がある。順番を待っている者たちは早く自分の番がこないかと待ち侘びていた。八千代はまだまだ性器に拷問を受け続けなければならなかった。これ程の長時間性器を拷問され続ける事は、八千代にとって初めての経験である。

それから、八千代の悲痛な悲鳴がパーティが終わるまで会場内に響いていた。

パーティが終了した後、八千代の性器はクリトリスに8本、そして、なんと子宮には42本、会陰を含めた性器には10本。そして、肛門にもぐるりと9本もの針が突き刺されており、パーティに参加したゲストには、この八千代の針山にされた性器の写真が記念として配布され、好評を得ていた。

八千代はパーティ終了後も、いつまでも何時までも泣いていた。

十二、宴の後

十二、宴の後

パーティは無事に終了し後片付けが始まっていた。
八千代の鼻に付けられたフックは外され、足を固定していた拘束具も外された。しかし、性器に刺された針はそのまま、両腕は後ろ手にきつく縛られたまま、目も口も塞がれたまま持ち上げられ、いつもの拷問部屋まで連れていかれた。
そこで、八千代はまた大きく足を開かされた状態で逆さに吊るされる。八千代は自分がまた逆さ吊りにされた事で、自分への性器拷問はまだ終わらないのだと理解した。

・・これ以上まだ私の性器は拷問されるのですね・・

八千代は逆さに吊られ、これからどんな拷問が自分の性器に加えられるのかと思うと体の震え涙が止まらなかった。

まず、八千代の哀れな姿を写真で何枚も撮影された。開脚逆さ吊りで性器が針山になっている全身図を始め、針山にされた性器のアップ画像、目と口を塞がれ涙と鼻水で汚れた顔も撮影される。そして、撮影終了後、八千代の性器への拷問の準備が進められていった。
針山にされた性器から、針を抜かないように慎重に膣鏡が抜かれていく。そして、膣鏡が抜かれた膣からは子宮に刺された針の頭が束になって光っていた。その後、所々千切れた八千代の右側の小陰唇が摘まれ、グッと引っ張られると拡げたまま大陰唇に用意された

押しピンでプツッと刺して止められた。

「おぉぉーーっ」

八千代がまた悲鳴を上げるが、かまわずに5本の押しピンで小陰唇が拡げたまま固定される。次には当然左側の小陰唇も同じように押しピンで大陰唇に拡げたまま固定された。

半日以上、性器を拷問され続けて泣き続ける八千代をまるで〝モノ〟のように扱い事務的に性器拷問の準備が進められていった。そして、八千代にこれから行う拷問に対しての恐怖を与える為、八千代の目を塞いでいた黒い布が取り除かれ、目の前にこれから拷問を加える道具が示された。

それは、一本の黒い革の鞭であった。八千代の頭に恐怖が蘇る。以前、八千代は性器を針山にされ、そこを鞭で打たれた経験があった。その時の恐怖と痛みを思い出し八千代は、呼吸が苦しくなってきた。しかも、今回は外性器だけでなく、子宮にまでたくさんの針が突き刺されている。このまま鞭で打たれたら子宮がどうなってしまうのか、さすがの八千代も恐怖で頭が狂いそうだった。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

・・許してください、お願いします・・

呼吸が荒くなり、首を左右に振って涙を流し必死に許しを乞う八千代だったが、そんな八千代の哀願などなんの意味もなく、鞭は針山になっている八千代の性器に向かって構えられる。が、鞭は一旦引き上げられ、再び大量の針が用意された。

・・私、もう性器を処刑していただくの?・・

八千代は、この長時間性器を拷問された後のトドメともいえるこの拷問に、これは性器拷問ではなく性器を破壊される処刑なのではと考え始めていた。この屋敷では、常に新鮮な刺激に飢えており八千代のような性器奴隷は一年を待たずして入れ替えられると聞いていた。八千代は、ここに来てからもうすぐ一年になる。そろそろ性器が処刑されてもおかしくない時期になっていた。性器処刑が執行されると云う事は、性器奴隷の八千代はもう価値がないと判断され処分されることになる。処分とは始末、つまり殺される事だった。

八千代にこれから針山にされた性器を鞭で打たれると認識させた後、黒いガムテープが貼られ八千代の目はまた塞がれた。そして、今度は口を塞いでいたギャグが外され、口に押し込められていた汚れた下着も取り除かれた。八千代は呼吸が楽になったと同時に、この機会に許してもらえるよう訴えようと口を開けると、その口に太く長いものが押し込まれる。それは、八千代の頭を押さえられ喉の奥まで入れられた。

「ごふっごふっ」

八千代は思わず咽るが、それはさらに八千代の喉奥まで入ってきた。そこで、八千代はようやく気付いた。

・・私、喉を犯していただいてるんだ・・

八千代にとっては初めての経験だった。八千代は性器奴隷として性器に様々な拷問を受けてきたが、性器以外を女の体として扱われたことはなかったのだ。

今、初めて八千代は女として扱ってもらっていると感じ、逆に恐怖を感じた。今までは〝モノ〟として扱われ、それが八千代にとっては当然の事だと感じていた。それが、突然女として扱われたとする

と、やはり、もう処刑されるのだと考えずにはいられなかった。

・・お願いします、まだ私を処刑しないで下さい・・

八千代はなんとか処刑を考え直して貰えるよう訴えたかった。が、八千代の喉から男根が抜かれる事はなく、八千代に性器に激痛を感じ再び泣き叫んだ。

「おごぅおごぅ」

八千代は喉に男根を突き入れられながら、開いた性器に、また針を突き立てられていた。それは、この後八千代の性器を鞭で打つ為の準備だった。八千代の性器にさらに多くの針を刺し徹底的に痛めつける計画だと察した八千代は、もう自分の性器は処刑されると涙を流し泣き出していた。

・・もっともっと痛めつけて頂きたかった・・

逆さに吊られ喉を犯されながら性器に針を刺される八千代は、もう自分がこの世に居られる時間は僅かなのだと認識し、それはあっさりと受け入れた。

八千代が心残りなのは、性器を完全に破壊して貰いたいという事だった。もし、性器を徹底的に容赦なく完全に形も残らず処刑して貰えるなら、それは、そのように育てられた八千代にとってこの上ない喜びだった。

十三、八千代の価値

八千代は開脚逆さ吊りで、針山にされた性器に更に針を突き刺されながら喉奥を犯されていた。

「おごぉおごぉ」

八千代は呼吸もままならず苦し気にうめきながらも、健気に男根を吸い必死に奉仕しようとしていた。しかし、男はそんな八千代の気持ちなどまるで関係なく、八千代の性器のまだ針が刺されていない個所に入念に針を刺していった。

もはや、あまりの激痛で性器の感覚がなくなっている八千代であったが、それでも新たに針を刺されると涙を流し、つい喉に押し込まれている男根をきつく咥えてしまう。

・・お許しください・・

八千代は不慣れな行為に心の中で謝罪するが、そんなことは関係ないというように男は隙間なく針山になった八千代の性器を満足気に眺め八千代の頭を押さえると、さらに固く大きくなったものを八千代の喉の奥の奥まで突き刺した。

「おぐぅ」

そして、苦し気な声を出した八千代にお構いなく、八千代の子宮に突き刺された針の頭を掌でグッと押し込んだ。

「お、ぎゃぁぁーーーっ」

何十本もの針が八千代の子宮に深く突き刺さり、八千代が激痛で思わず息を吸い込みきつく男根を咥えてしまった瞬間、男は八千代の喉奥に放出していた。そして、一旦八千代の喉から男根が抜かれる。その際、八千代は喉奥に射精された精液を飲み干すことが出来ず、口から出してしまっていた。

「お許しください、不慣れなもので、どうかお許し…」

八千代が自分の不手際を謝罪している最中に、八千代の謝罪など何の意味もないというように再び喉奥に男根が突き込まれる。そして、その後何回もその行為は行われ、最後に男根が抜かれた後八千代の口は開口具を挿入され閉じられないように固定された。八千代が自分の口に何が行われるのかと思っているうちにペンチが用意され八千代の前歯を挟む。

「ほごっ」

何っと八千代が思った瞬間、八千代の前歯が無理矢理引き抜かれた。

「ほぎゃーーーっ」

性器拷問とはまた違う痛みに八千代は悲鳴を上げるが、かまわず八千代の頭は押さえ付けられ次々に八千代の歯は抜かれていった。そして、八千代は上下とも奥歯の数本の歯を残し全ての歯を抜かれてしまった。

「おわぁおわぁ」

八千代は開かされた口から血を流し泣きじゃくるが、これは本来性器処刑を執行され処分されるところを、新たな価値が見出され処刑が延期になった証であった。

八千代は、しばらく喉奥を犯されながら性器を拷問されるという新しいスタイルでしばらく試される事となったのだ。

とはいえ、本日の性器拷問が終了したわけではなく、八千代が針山にされた性器を鞭で打たれる事に変わりはなかった。

その為に歯を抜かれた八千代の口はガムテープで何重にも塞がれた。

そして、目と口を塞がれ怯える八千代の前に鞭を手にした男が現れる。八千代は人の気配で、これから自分の性器に鞭が容赦なく叩き込まれることを感じ、体は震え泣き出していた。

その、恐怖で泣き出している八千代の針山にされた性器に、鞭は容赦なく思い切り振り下ろされた。

「おがぁぁぁーーーっ」

八千代が絶叫し性器から血が飛び散るが、以前針山の性器を鞭で打たれた時と違い、今回は性器に深く針が刺されている為、針が抜ける事はなく逆に鞭の打撃で更に深く性器に突き刺さり性器の肉を鋭く抉った。

・・もう助けてぇぇーーっ・・

幾度となく性器拷問を受けた八千代ですら、この拷問には耐えられず、ほんの数発鞭の打撃を受けただけで失神していた。しかし、失神したくらいで八千代が許される筈もなく薬剤を注射され強制的に

覚醒させられると再び鞭が性器に叩き込まれた。
それは、八千代が失神する度繰り返され、八千代の性器から血が溢れ出し股間を真っ赤に染めても許される事はなく鞭が叩き込まれていた。
八千代は、小便のみならず大便まで漏らし始め、八千代の股間は大小便と血が混じり陰惨な状態になっている。

・・もう今日はお許しくださいぃぃーーっ・・

八千代は必死に許しを乞うが、これだけひどい拷問をされるという事は楽しんで頂いてる証だと心の片隅で誇らしい気持ちにもなっていた。

八千代は新しい行為で満足させる事が出来たため性器処刑の執行は見送られたが、それはほんの一時の事にすぎない。八千代が性器を処刑され処分される日が来るのは、そう遠くない将来であるのは間違いなかった。

十四、野外性器拷問

十四、野外性器拷問

以前開催されたパーティで好評だった八千代に、貸し出しの依頼がきていた。それはすんなり了承され、八千代は一日貸し出される事となった。その際の性器拷問の条件として、もう近々処刑される予定の八千代なので、多少の性器破壊は問題ないと先方に伝えられていた。もちろん、それは八千代自身は知る由もなかった。

先方に送り出される朝、八千代は先方の希望で白いスポーツブラ一枚と太ももの付け根に食い込む白いサイハイソックスだけの姿にされ、頭には口の部分と鼻の孔だけが開いている黒い革の全頭マスクが被せられ、開いた口には赤い球の付いたボールギャグが押し込まれていた。そして、両腕は革の拘束具で後ろ手にきつく拘束され、首輪に付けられたロープに引かれ八千代はよたよたと歩いていた。

先方へは車で移動する事になるが、当然八千代が座席に座る事は許されず、車のトランクに押し込まれる。そして、車は出発し、しばらく走ると大きな門を通り抜け庭園の中を走り大きな屋敷の前で停車した。屋敷の前には二人の女が出迎えに立っていたが、その女二人はどう見ても普通の女には見えなかった。

女は二人とも全裸で真っ赤なハイヒールを履いている。そして、股間に名札をぶら下げ、肛門には鈴の付いたアヌス栓を挿入し、性器からは三個の錘が左右の小陰唇とクリトリスから下がっていた。

小柄で幼い方の女の股間に下がる名札には〝睦月〟と書かれ、もう

一人の女の名札には〝葉月〟と書かれていた。そして、葉月はパーティで八千代の子宮に最初に針を突き刺した女だった。葉月はパーティで八千代の性器にもっと拷問したかったが退去させられ不満を感じており、それで今回八千代の貸し出しを依頼したのだった。それに今回は八千代の性器の破壊も多少認められており、葉月は興奮を止められなかった。

「ようこそ、メス穴奴隷」

車のトランクから出された八千代を見て葉月がニコリと笑った。

八千代はそのまま運ばれ、庭園の中の広場の中央で開脚逆さ吊りにされた。広場の周りにはテーブルと椅子がぐるりと置かれ、その椅子には今回のゲストたちが腰掛けていた。その腰掛けているゲストは男女比は女の方が多いようにみえ全員全裸で頭にマスクを被っていた。

葉月と睦月は、逆さに吊られた八千代の前に立ちゲストを見回すと頭を下げる。

「それではこれから、このメス穴奴隷の性器を拷問していきます助手の睦月がカメラを担当し、後ろの大型モニターに鮮明に映し出されますのでお楽しみください」

葉月は大型の膣鏡を手に取ると八千代の膣口に突き刺し、まだ濡れてもいない八千代の膣に無理矢理押し込んでいく。

「おぉぉーーっ」

八千代が無理に押し込まれ声を上げるが、かまわず葉月は八千代の膣に膣鏡を根元まで押し込み最大に開いていく。それを睦月がカメ

ラで撮影し八千代の赤黒い子宮がモニターにアップで映し出される。

「本日はせっかくの好天気なので、まずこれで痛めつけます」

葉月は手にしたレンズをカメラに前に出す。そして、その巨大な虫眼鏡で八千代の子宮を覗いているのかと思ったが、葉月はレンズで太陽光を集め八千代の子宮を焼いていた。

「おぎゃぁぁーーーっ」

子宮を焼かれ八千代がのた打ち回り、うまく焦点が合わなくなる。そこで睦月はカメラを自分の頭にベルトで留め、両手で八千代の腰を押さえ付けた。

モニターの中で八千代の子宮が煙を上げてチリチリと焼けていく様子がアップで映し出され、おおっとゲストから歓声が上がる。葉月は楽しそうに八千代の子宮を焼いていき、ゲストに向かって、どうぞ御自由に自慰をなさって下さいと告げた。そういう葉月の股間はもう太ももの内側までぐっしょりと濡れていた。幼い睦月は、子宮を甚振られる八千代の姿に我慢できないようで大きく股を開き股間に手を当て激しくこすり始めていた。

「さて次はここに百本ある線香を使います」

葉月は残酷な笑みを浮かべると、線香に火を点ける。しっかり、全部の線香に火が点いたのをゲストに確認させると、その中の一本を取り八千代の開いた膣の中に入れると、なんと火の点いた先を八千代の子宮に押し付けた。

「あぁぁぁーーーーーーっ」

八千代の絶叫が庭園に響き渡る。葉月は続けて二本三本と八千代の子宮に押し付けていく。どうやら葉月は八千代の子宮を徹底的に痛めつけたいようであった。

モニターの大画面に映し出された八千代の子宮に、線香の火が押し当てられ八千代自身の分泌液でジュッと消え煙があがるその様子が詳細に映し出され、男のゲストが自分の性器をしごき始め、女のゲストは股を開きクリトリスを擦り摘まみ自身の穴に指を突っ込んだ。ゲストが八千代の子宮に行われている残虐な拷問に興奮している様子を確認し葉月は満足気に頷き、休みなく八千代の子宮に線香の火を押し付けた。葉月は、八千代の子宮に百本全ての線香を押し付けようと残酷に笑った。

子宮に線香の火を何本も何本も押し当てられ泣き叫ぶ八千代の姿を見ながら、ゲストの男たちは精液を放出し、女たちは絶頂を迎えていた。

十五、焼け爛れた子宮

十五、焼け爛れた子宮

ついに八千代は子宮に百本の線香全ての火を押し付けられていた。
八千代の膣から飛び出る線香の束が、八千代の哀れさを感じさせゲストの興奮を呼んでいる。女のゲストには性具も用意され、存分に自慰に耽れるよう配慮された。
葉月は、それでは仕上げですと言い、八千代の膣から飛び出す線香の束に火を点けた。線香は煙を上げどんどん短くなっていき、八千代の膣壁を焼き始める。

「ひぇぇぇーーーーーっ」

膣を焼かれ八千代が絶叫する。ゲストの手がまた忙しく動き出すが、絶叫した八千代は失禁し噴水のように小便を尿道から噴き出し、それが線香にかかり火は消えてしまっていた。

「あら、残念」

葉月は、まるで残念でないような顔で呟いた。ここで八千代に失禁させておいて、この後失禁させないようにする為の葉月の計画通りに事が進み、葉月は笑いが止められなかった。
これから八千代の性器に加えられる拷問を思うと、同じ女として葉月は同情を禁じ得なかったが、それ以上に八千代の性器に加える拷問が楽しくて堪らなかった。

睦月が、八千代の膣内から小便で湿ってしまった線香をきれいに掻き出す。次の拷問の為にも膣内をきれいにしておく事が必要だった。そして、きれいになった膣内をカメラで写しゲストに状態を確認させた後、本日の最大の目玉である性器拷問に取り掛かる。

「さあ皆さん、これからメス穴奴隷に行う拷問は、思いついた時興奮して私が自慰してしまった程の性器拷問です　同性の女性の方は特に見逃さないように」

葉月は大袈裟に宣言すると、あるものを摘まんで八千代の拡げられた性器の上に翳す。それを見たゲストからどよめきが起こった。

「本当にあれ入れるのか」

「凄い事になるぞ」

男のゲストの声に交じり女のゲストの声も多く聞かれる。

「うそっ凄い、早く入れてっ」

「もう、おしっこで消せないから、凄い事になりそうでワクワクする」

「死んじゃうんじゃない、楽しそう、私もやりたい」

「私がやられたら絶望して死ぬわ、本当早く見たいわね」

「このメス、こんな事経験出来るんだから、可哀想だけど羨ましいわね」

「普通の女がこれやられたら死ぬしかないけど、このメスには丁度いいわ、いい気味ね」

八千代は自分の性器に何が行われるのか想像もつかなかったが、ゲストの声と只ならぬ雰囲気に、これから自分の性器に加えられる拷問は想像を絶するものなのだと恐怖で体の震えが止まらなかった。

「それでは性器拷問を執行します」

そう言う葉月が火箸で慎重に持っているのは真っ赤に焼けた炭だった。炭の温度は一般的に３００度から６００度になる。それを葉月は八千代の膣内に入れ、八千代の子宮や膣を焼き尽くそうとしていた。そして、ゲストが固唾を飲んで見守るなか、葉月は容赦なく本当に八千代の膣内に炭を落とした。炭は八千代の子宮の上にポトンと落ちる。

「あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

八千代の体はこれ以上ないという程エビのように反り返り、途切れる事のない断末魔の絶叫が迸る口からは泡が吹き出していた。

「おお、本当に入れたぞ」

「最高っ！！もうあのメスの子宮は使えないわね」

「凄い凄い、子宮どうなってるんだろう」

「あのメス、これで生きてるなんて凄いわ」

「ふふっ、線香でおしっこ漏らさなければ、ここで漏らして消せたのにね」

「このメスの子宮焼ける匂い、意外と良い匂いするわね」

ゲストから賞賛の声が上がり、八千代の膣と子宮が焼ける匂いが辺りに漂う。

しかし、八千代の苦しみはまだ終わらない。葉月はもう一個炭を摘まむとまた八千代の膣に放り込んだ。そして、次々と膣が一杯になるまで炭を放り込み。膣から零れそうになると、火箸でつつき炭を細かく均す。

のた打ち回る八千代の姿と、この世のものとは思えない絶叫を聞きながらゲストの男も女も自慰行為が止められず、あちらこちらで精液が放出されたり愛液が噴き出したりしていた。

しかし、葉月の残虐性も止まらず、なんと八千代の膣に入れた炭を団扇で扇ぎ始めた。炭はこうして扇がれると１０００度近い高温になる。八千代の膣から火が燃え上がった。そして、八千代の外性器、小陰唇やクリトリスも焼いていく。

凄まじい光景だった。八千代の大きく開かれた足の中心で炎が燃え上がっている。八千代の性器が焼かれる匂いが辺りに広がった。

「おお、これは一生の思い出になる」

「いい気味ぃ、このメス、このまま殺しちゃえばいいのに」

「ひゃはっ、このメスの膣と子宮、黒焦げ決定ぃ」

「ついでに頭にも火を点けて顔も焼いちゃえばぁ」

「楽し過ぎ、このメス、無様で最高っ！！」

「このメスのマンコ、容赦なく壊されてるのが楽しい」

「私もこのメスのマンコ、壊したいぃぃぃっ」

ゲストたちの興奮は当分収まりそうもなかった。女のゲストは興奮で失禁する者が続出し、そこかしこに小便の水溜まりが出来ていた。

ようやく八千代の股間に濡れタオルをのせ空気を遮断し炭の火を消化した睦月は、八千代の膣から炭を掻き出し、八千代の性器の状態をモニターに映す。

八千代の子宮と膣壁は焼け爛れ真っ赤に腫れ上がり原形を留めていなかった。

「それでは皆様、最後にこの火箸でトドメを刺します」

葉月は、まだ八千代の性器を痛めつけようとしていた。

「この真っ赤に焼けた火箸を、このメスの子宮口に突き刺してて奥まで押し込みます」

葉月の言葉に、おおっとゲストから声が上がる。

「見逃さないように」

葉月は焼け爛れた八千代の子宮中心に狙いを定め、真っ赤に焼けた火箸を突き刺していく。八千代はもう死んだように動かなかった。

ずぶずぶと八千代の子宮を串刺しにした火箸は八千代の体の奥の奥を焼き尽くす。そして、葉月はもう一本の火箸をとった。

「これが本当の最後の一本、これをこのメスの尿道に突き刺して終了です、お疲れ様でした」

葉月に並んで睦月も頭を下げる。ゲストから拍手が沸き起こるなか、葉月は八千代の性器を開き、八千代の小さな穴、尿道に焼けた火箸をねじ込んでいった。八千代の尿道が裂けながら焼かれていく。八千代の性器から焼け焦げた匂いがまた漂った。
八千代の性器から飛び出す二本の火箸が有終の美を飾っていた。

「このメス穴奴隷からも一言」

葉月は、八千代の口を塞いでいたボールギャグを外し、早く話せと八千代の頭をハイヒールで蹴る。

「や、八千代と申します。本日は八千代の性器拷問をご覧くださり有難うございます。今回は特に激しい拷問をして頂きましたので、楽しんで頂けたかと思います　よろしければ拷問直後の八千代の性器をご覧になり笑ってもらえれば嬉しいです」

八千代が泣きながら訴えた言葉で急遽希望者に、抜歯された八千代の口から喉を犯しながら拷問された性器を間近で確認するプランが用意された。女のゲストには腰に付けるペニスバンドが用意され八千代の喉を犯す感覚を味わえるよう配慮されたのだった。そして、全員が希望し八千代の喉を犯しながら、火箸が突き刺さり醜く焼け爛れた八千代の膣と子宮を観察しまた興奮していた。

「これは凄い、滅多に観られない物を見れて楽しい」

「ここまで徹底的にやられると、このメスのマンコも満足したんじ

ゃない」

「このメスを殺さないで、マンコだけ壊すなんて凄いわ」

「私なら、このままマンコから串刺しにして殺しちゃうけどなぁ」

「お尻の穴にも入れて燃やせば、もっと良かったな」

「このメスのマンコの中に、おしっこかけてあげたいわ」

「あぁぁこのメスのマンコ、ズタズタに切り刻んで殺したいわぁ」

「もう、このメスのマンコ使えないから切り取って私にくれないかしら」

興奮は収まらず、開脚逆さ吊りで体を震わせ泣いている八千代の姿を見ながら自慰行為をするゲストが後を断たなかった。

今回の性器拷問で、八千代の性器の機能はほぼ完全に破壊されてしまった。もう八千代は自慰で快感を得る事も、普通に小便をする事も出来なくなっていた。

八千代に残されたのは、機能しなくなったこの女の象徴を、形も残らない程徹底的に処刑され殺されていく事だけだった。

十六、性器処刑執行

十六、性器処刑執行

八千代は姿見の前に立ち、手を後ろに組み胸を軽く突き出し、その両足を大きく開いた。鏡の中に八千代の姿が映っている。開いた両足の中心から、コック付きのカテーテルが垂れ下がっている。先日の性器拷問で尿道を破壊された八千代は、カテーテル無しでは排尿も出来ない体になっていた。

・・私の裸・・

八千代は開いた足の間に手を伸ばし、そっと自分の性器に触れた。

・・私の性器、今日処刑されるの・・

以前の八千代であれば、すでに性器が濡れはじめているのであるが、膣も破壊された八千代の性器がもはや濡れる事はなかった。

・・最後だから悔いのないように痛めつけてもらうのよ・・

顔を上げた八千代は鏡に映った自分の姿を見つめた。

・・私、今日処刑されるの、怖い？・・

血と涙と悲鳴に飢えたこの館では常に新鮮な生け贄を欲していた。

そのため一部の例外を除き一年を経過した少女は処刑されるのが習わしで、この館に来てから一年が過ぎた八千代の、今日がその処刑執行日だった。八千代は文字通り性器を徹底的に破壊され処刑される。八千代がどんなに泣いても叫んでも数時間後には、八千代という女の子は居なくなっているのだ。

鏡に映る自分を見つめ、今まで受けた数々の責め、そしてその恐怖と苦痛を思い出していた八千代の目から涙が溢れていた。

・・もっともっと私の性器を痛めつけて楽しんでもらいたかった・・

八千代はわずか一年で自分の価値がないと判断されたことが悲しかった。八千代は鏡の前でしゃがみ込むと両手で顔を覆い声を上げて泣き出した。

八千代は処刑室の中央で両手を上げ足を開き震えながら立っていた。これから、いよいよ八千代の性器処刑が執行される。

そして、処刑の為の準備が粛々と進められていった。まず、八千代の股間から垂れ下がるカテーテルのコックが緩められ排尿され、八千代の最後の小便が床に広がり、八千代の排尿が済んだ後カテーテルが引き抜かれる。

その後、八千代の肛門からグリセリンが一リットル程注入され、大便も排出される。八千代は立ったまま肛門から大きな音を出し大便を排出する。それは、八千代の肛門から噴出する便が透明になるまで１０回繰り返された。

次に、高圧洗浄機で八千代の体が洗浄される。特に八千代の股間には念入りに洗浄機の高圧水流が当てられ穴の中まできれいに洗浄され、八千代の両腕は背中にまわされ二度と動かせないよう厳重に拘束された。

八千代はこの何時もとは違う処刑前の儀式に、これから自分の性器

に行われる処刑を想像し泣き出していた。

「お願いします　怖いです…　許して下さい　」

八千代は必死に許しを乞うが、その唇は摘まれ大型のタッカーを当てられると、バチンバチンと留められ、その上にガムテープが何重にも貼られ厳重に口を塞がれてしまった。さらに両目の瞼も摘まれ、タッカーで留められた。そして、同じくガムテープが貼られ目も塞がれる。

「ううううぅ」

嗚咽する八千代の足首にベルトが巻かれ、そのまま何時ものように開脚逆さ吊りにされた。これで、八千代の性器処刑の準備が整い、八千代の性器を丸出しにされ逆さに吊られた最後の姿を楽しむ為しばらく放置された。性器処刑が執行されるまでの間、逆さに吊られた八千代は泣き続けた。見る事も喋ることも出来ず、体の自由も奪われた八千代は間もなく自分の性器に執行される処刑の恐怖に、体を震わせ哀れに泣いていた。

・・私の大切な性器、もう壊されているけど、今日私の体から消滅するの。どんなひどい事されるのか分からないけど最後だから思う存分楽しんで頂きたいです・・

八千代は目が塞がれているので見えないが、もし見えていたら発狂するほどの処刑具が並べられていった。
カチャカチャという処刑具が触れ合う音が、目を塞がれた八千代の恐怖を誘う。

「ふぅふぅふぅ」

八千代の息が荒くなっていく。そして、周囲の空気が変わった。いよいよ八千代の性器処刑が執行される。全裸で開脚逆さ吊りにされ、腕も縛られ、目も口も塞がれた八千代も、敏感にその気配を感じとり泣き声が大きくなっていった。

まず、直径1．5センチ長さ1メートルの鋭いニードルが手に取られる。ニードルは八千代の股間の小さな穴、尿道に狙いをつける。導尿に使うカテーテルは、せいぜい5ミリ程度であるが、このニードルは、その三倍の太さがあり、さらに表面がヤスリ状に加工されている凶悪な物であった。当然、八千代の細い尿道は裂け削り取られる事になる。
その処刑用のロングニードルは八千代の尿道に狙いをつけ、容赦なく突き刺さされていった。

「ふ、ふぅぅぅーーーーっ」

その痛みは当然ながら今までの痛みの比ではなかった。八千代の尿道を切り裂きながらずぶずぶと押し込まれていくニードルはそのまま膀胱を貫き、八千代の下腹部、臍の下にその針先を現した。激痛とともに自分の下腹部を突き破り現れたニードルの針先に八千代は発狂したように泣き叫んだ。

十七、性器処刑執行２

十七、性器処刑執行２

全裸で開脚逆さ吊りにされ腕も縛られ目も口も塞がれた八千代は激痛と恐怖でのたうち回りながら泣き叫ぶ。しかし、八千代の下腹部だけはしっかりと押さえ付けられ無情にも身動きひとつできなかった。

その八千代のなだらかな形の良い陰毛も生えていない恥丘の中心に直径８ミリ長さ３０センチのニードルが当てられた。そして、そのニードルが金槌で叩かれ八千代の中に打ち込まれていく。

「ふおぉぉぉーーーーーーーーっ」

絶叫する八千代の恥骨にカンカンと規則正しくニードルは打ち込まれていく。そしてとうとう恥骨を貫いたニードルはそのまま八千代の中に打ち込まれていった。

「ふごぉぉぉぉーーーーーっ」

恥丘にニードルを打ち込まれ八千代は塞がれた口で絶叫する。そして、八千代の恥骨を貫いたニードルは、そのままどんどんと打ち込まれ八千代の体を貫通し、その先端を八千代の尻の割れ目から見せた。夥しい涙と鼻水を溢れさせ遠目にも分かるほど震えながら泣き続ける八千代に、さらに絶望と死の恐怖を味合わせるため次のニードルも八千代の下腹部正面に狙いをつけ、恥骨の右から斜めに突き刺されていった。

「ふごぉ、ふごぉぉぉぉーーーっ」

自分の身体を貫通していくニードルの激痛と恐怖に塞がれた口で必死に許しを乞う八千代。しかし、その半狂乱の八千代の姿を楽しむため、今度は恥骨の左からニードルが突き刺される。そしてそれは八千代の身体の中で、右から刺されたニードルと交差し右臀部に突き抜けた。

「ごあぁぁぁぁーーーっ」

恥丘に無惨に突き刺された三本のニードルと尿道を引き裂き膀胱を串刺しにし下腹部を突き破り顔を見せているニードルの先端。八千代は確実に壊されていく自分の性器の感覚に、恐怖と絶望と苦痛で首を嫌々と云うように振り必死に許しを乞う。

その恐怖で凍り付いた八千代の顔に小便が浴びせられる。小便は、逆さ吊りにされている八千代の鼻の穴に集中的に浴びせられ、八千代は呼吸が出来なくなり必死に頭を振るが、その頭は押さえ付けられ鼻の穴に直接男性器が押し付けられ小便が注ぎ込まれた。そして、頭を押さえ付けていた手が放された時、八千代は鼻の穴から勢いよく小便を吹き出した。

「ふごぉっふごぉぉーーっ」

ようやく息が出来た八千代だったが、その八千代の胸に心電図の電極が貼り付けられモニターがセットされる。八千代がどこで絶命したか、この処刑を見ているゲストにはっきり分かるようにし楽しんでもらう為だった。すでに叫ぶ元気もなくなった八千代に心電図モニターがセットされ、今度は八千代の膣前庭の膣口よりわずか尿道寄りにニードルが突き刺された。

「ふごぉーーーーーっ」

八千代の性器の中心に突き立てられたニードルの先端は途中膣内に突き抜けそのまま八千代の子宮を貫いた。そして、次は膣口の肛門寄り会陰からニードルが突き刺さりまた膣内に抜け八千代の子宮を貫いた。そのまま続けて膣口の右左から計四本のニードルが八千代の膣口の回りに突き刺され、その全てが八千代の子宮を深く貫いていた。

・・私の大切なところ、もうすぐ壊されちゃう・・

女という性の生きる証、その子宮を前回の拷問でほぼ破壊された八千代は、今回の処刑では子宮そのものを徹底的に破壊され消滅させるプランになっていた。八千代はその恐怖と激痛で自分の頭が少しずつ狂いはじめたように感じた。

・・だめ、まだ発狂しないで・・

八千代は自分の性器に加えられる拷問をまだ感じていたかった。自分の性器に与えられる最後の苦痛をできるだけ味わい泣き叫びたいと思っていた。

・・だからお願い狂わないで・・

恐怖と苦痛に飲み込まれそうな自分を励ました八千代は、自分の性器を処刑し楽しんでいる人やそれを見て楽しんでいる人達がいると考え、その人達の為にも頑張らなければと必死に意識を保とうとした。

これまで性器のみを露出し責められていた八千代は最後の今回初め

てその裸体を晒していた。十七歳になった八千代のきれいな裸体は、それ故その下腹部を貫く何本ものニードルの残虐さと異様さを高めていた。そして、その姿はさらに残虐な意思を煽り加速させていった。

陰毛の生えていないツルツルの八千代の恥丘に再びニードルが打ち込まれていく。

「ふごぉーーーーっ」

恥丘から尻へニードルが突き抜ける間、八千代は涙を流し叫び続けた。そして、休む間もなく次のニードルが八千代の下腹部に突き刺される。八千代は自分の下腹部を容赦なく破壊し膀胱を子宮を貫通するニードルの激痛に気が狂ったように激しく泣き叫んだ。その姿を楽しむように恥丘は八本ものニードルで貫かれ、八千代の身体を貫通した針先は血を滴らせながら尻へ突き抜けている。

・・早く。私の意識があるうちに性器を壊してください・・

八千代は自分の性器を徹底的に破壊する性器処刑を自分の意識があるうちにその全てを楽しんで貰いたい、そして八千代自身も自分の性器に与えられる凄まじい拷問を味わいたかった。

・・もうすぐ私、性器を処刑されて死ぬんだから・・

十八、八千代完全絶命

十八、八千代完全絶命

その八千代の性器と下腹部を貫く夥しいほどのニードルが抜かれていく。ニードルが抜かれた穴からは血が流れだし、八千代の股間と下腹部は真赤に染まった。ニードルが抜かれたのは八千代のためではなく、その八千代の性器を破壊する次の拷問のための下準備にすぎなかった。

膣内を貫通するニードルが抜かれ邪魔するものが無くなった八千代の膣に膣鏡が根本まで挿入され大きく開かれる。そして、奥に見えるぐずぐずに破壊された子宮が確認され、そこに八千代の恥丘を貫通したニードルが突き刺されると、そのまま奥まで押し込まれ完全に子宮を串刺しにした。

「ふぐぅーーーっ」

八千代は体を反らせ塞がれた口で絶叫するが、その苦しむ八千代の姿を楽しむ為、次々と八千代の子宮にニードルが突き刺されていく。そして、もう刺す所がなくなると膣鏡が抜かれ出来た隙間にニードルが突き刺されていった。結局、八千代の子宮には１００本以上のニードルが突き刺され、膣口から出ているニードルの束がキラキラと輝いていた。

１００本ものニードルで子宮を串刺しにされた八千代は死んだように動かなくなっていたが、心電図のモニターで八千代がまだ生きている事が確認できた。当然ながら性器処刑は八千代が完全に絶命するまで執行される。八千代は、まだまだ性器処刑の激痛に苦しみぬ

くのだ。
次に用意されたのは正月の餅つきで使う杵だった。杵は大きく振りかぶられると、八千代の股間目掛けて振り下ろされる。

グシャァ・・・

「ぶぎゃゃゃゃーーーーーっ」

子宮に突き刺されていた１００本以上のニードルが一気に八千代の中に押し込まれ、八千代はのたうち回る。前回の性器拷問で黒焦げにされていたクリトリスと小陰唇も叩き潰され血が飛び散った。そして、まるで餅をつくように何度も何度も杵は八千代の股間、性器に振り下ろされた。

杵での性器叩き潰しが終了し、八千代の膣口からめり込んでいるニードルが全て抜かれ、血塗れの八千代の性器が拡げられその膣口に八千代の太股程の太さのある杭が当てられる。そして、杭は八千代の性器にゆっくりと押し込まれていく。

「ぶぎゃぁーーーーーっ」

悲鳴を上げ続ける八千代の膣は裂け血が溢れだした。ごぼごぼと血を溢れ出す八千代の膣に杭はゆっくりと打ち込まれ、八千代の子宮に達したあたりでその動きを停めた。そしてその杭は高速で回転をはじめる。

「あぁぁぁぁーーーーっ」

悲鳴を上げる八千代の膣の内壁は高速で回転する杭に削り取られ血飛沫と共にあたりに飛び散った。

杭が抜かれた八千代の性器はぽっかりと丸い穴があき、穴の奥には子宮が見えている。

「ぶぼぶぼっ・・」

潰れている左の小陰唇が引き延ばされナイフが当てられると無造作に切り取られた。

・・嬉しい、嬉しいよね・・

同じく右の小陰唇が切り取られていく間、八千代は自分の性器に語りかけていた。そして、切り取られた二つの小陰唇は一つずつ医療具で八千代の子宮の中へ押し込まれ、最後に火薬を詰めた丸い爆薬が八千代の子宮内にセットされた。

・・喜んで、私の性器・・

そして、何の躊躇もなく膣から出た導火線に点火される。しばらくすると鈍い音と共に八千代の下腹部は一瞬膨らみ性器から大量に血が吹き出す。そしてただの穴と化した八千代の膣からナイフが差し込まれ子宮が切り取られはじめた。

「おっおっおっおっ・・・・」

自分の身体の内部を切り刻まれ八千代は虫の息になっていたが、それでもまだ生きていた。そして、膣から血塗れの八千代の子宮が取り出される。

「ぶごぉぉぉーーーーっ」

子宮を摘出され泣き叫ぶ八千代。その八千代の子宮は鉤針でぶら下げられると着火材をかけられ火を点けられ、忽ち黒焦げになっていく。

・・もう私、女の子じゃない・・

その八千代の黒焦げにされ叩き潰されたクリトリスの根元に細いワイヤーが巻かれ、徐々に左右に引かれていく。そして最後を楽しむかのように無数の針がクリトリスを貫いた。

・・さよなら、私の性器・・

ワイヤーが食い込み血が滲んだと思った瞬間、八千代のクリトリスは簡単に千切れ床に転がった。
自分の性器が完全に破壊されたのを確認した八千代は思った。

・・私の性器、満足したよね・・

おそらくひどい事になっているであろう性器を朦朧とした意識で想像しながら八千代は思った。

・・今度は私が満足するばんよ・・

ここで八千代が録音しておいた音声が流される。

「私の絶命する姿をどうぞ最後までお楽しみください・・・」

その八千代の股間に巨大な鋸の刃が押し当てられる。

・・素敵でしょう、私、性器から二つに切られるの・・

鋸はまるで木材でも切るかのように無造作に八千代の股間を引き始めた。

・・ああっ痛い、痛いよっ・・

八千代の恥骨を切る耳障りな音が響く。

・・苦しい、でも・・もっと苦しめて、そして楽しんでください・・

恥骨を半分ほど切ったところで八千代の血と脂で切れの悪くなった鋸は新しいものに代えられ、再び八千代の体を切り裂くべく鋸は動き出した。

・・もう、満足した八千代・・

八千代は薄れていく意識を懸命に繋ぎ止めていた。

八千代の恥骨を切断したところで鋸が股間から取り除かれた。今度は腰骨が邪魔をしたためだった。八千代の腕の戒めが解かれ、両腕が力無く垂れ下がる。その左腕の肩付近に電動カッターが当てられ、八千代の左腕はあっけなく切り落とされた。続いて右腕も切り落とされる。カッターは刃を交換し今度は八千代の太股を付け根から切断した。八千代はすでに自分の身体が何をされているのか解らなかった。

切り落とされた八千代の手足は無造作に段ボール箱に投げ込まれる。そして四肢を切断された八千代の身体も固定具から外されると手足同様段ボール箱に詰められた。

八千代はそのまま台車で運ばれるとゴミと一緒に焼却炉に投げ込まれた。

1、もう一つの性器鞭打ち（前書き）

凛津の章の始まりです。まだ幼く、八千代の様に完全に教育が施されていない凛津は、その至らなさから八千代以上に酷い目にあっていきます。
苦手な方は注意して下さい。

1、もう一つの性器鞭打ち

1、もう一つの性器鞭打ち

八千代がスポットライトの中、性器を鞭打たれていたのとほぼ同時刻、別の部屋では白いポロシャツに同じく白いプリーツの入ったスコートに身を包んだ十二歳の凛津(りつ)もスポットライトの光の中にいた。小柄で華奢な体は、まだ未発達で弱弱しい印象であるが、それが逆に凛津(りつ)を初々しく見せていた。

年長の八千代とは違い、まだ完全に教育が施されていない凛津(りつ)は、両手は後ろ手にきつく縛られ、目は黒い布で厳重に目隠しされ、口にはボールギャクが押し込まれていた。そして、形のいい凛津(りつ)の鼻にもフックがかけられ、鼻の穴が千切れそうなほど思い切り上に引張り上げられ、鼻の穴の中を無様に晒している。そのためすでに可愛い凛津(りつ)の顔は涙と鼻水と涎で汚れ無様な姿を晒していた。

「足を大きく開き、腰を突き出しなさい。」

機械的な声が聞こえ、言われるまま凛津(りつ)は大きく足を開いた。商品披露の際鞭打ちが行われ、それで商品の質を判断してもらう、と聞かされていた凛津(りつ)は恐怖で震えてくる。

・・凛津(りつ)のオマンコ、鞭で打たれるの・・

わざわざ足を開かされ立たされた事で凛津は、無防備に晒す自分の股間・性器に鞭が叩き込まれると容易に想像できた。今まで、胸や尻や太ももは鞭で打たれた事はあったが、性器を鞭で打たれた事は

なかったので凛津は、胸を打たれた時の痛みを思い出し、それがこれから性器に与えられるかと思うと体が震えてくるのを止められなかった。

・・どれだけ痛いんだろう・・

胸でさえ、あれだけ痛いのにそれが凛津の敏感な股間の割れ目に叩き込まれる。

・・でも凛津が泣くと喜んでもらえるから、痛かったら思い切り泣いていいんだよね・・

学校に行っていればまだ小学生の凛津が、目も口を塞がれ腕を縛られ、性器を鞭で打たれる為大きく足を開いている。その哀れな姿が、光の中浮かび上がる。

「終了までの間その姿勢を崩さないように注意しなさい。」

と聞こえたと同時にヒュッという風切り音が聞こえ、凛津の想像通り股間に激痛がはしった。

「おごぅぅーーーーっ」

口をギャグで塞がれている凛津は声にならない悲鳴をあげ大きく後ろにのけ反った。間髪を入れず凛津の性器に鞭が叩き込まれる。白いミニのスコートは連続して性器に叩き込まれる鞭打ちの激しさに大きくめくれたまま舞い落ちることを許されず凛津の白いアンダースコートがあらわになった。凛津は黒髪を左右に垂らしたツインテールを激しく振りながら泣き叫ぶ。

「おごっ、おごぅぅーーーっ」

口を塞がれ許しを乞う事すらできない凛津は無様なうめき声をあげ続けた。そして、目隠しの下から涙は大量に流れ、鼻水と涎が一緒になり凛津の首から鎖骨付近まで光らせた。

「おごぅおぉぉぉーーーっ」

動物のような叫び声を出し、汚れた顔を無様に晒しながらも凛津は、八千代同様、自分の性器を鞭打ってもらうため命令通り腰を突き出し続けた。

薄いパンティストッキングと下着だけで性器を鞭打たれ続けた八千代に比べ、多少生地が厚いアンダースコートと下着で性器を鞭打たれている凛津の方が確かに苦痛は少ないと思われるが、口を塞がれているため思うように呼吸ができず凛津は気が遠くなってきていた。しかも、その為に八千代よりも激しく性器に鞭が叩き込まれている。

・・凛津のオマンコ、鞭で打たれてる・・

今にも失神しそうになりながらも自ら腰を突き出し性器を鞭打たれる凛津の、その鞭打たれている股間から透明な液体が湯気を立てて溢れ出した。ふいに生暖かくなった股間と太股をつたう液体の感覚で凛津は自分が失禁したことに気付いた。

・・凛津のオマンコ、オシッコ漏らしながら鞭で打たれてる・・

凛津は、足を拡げて立たされ小便を漏らしながら性器を鞭打たれている無様な自分の姿を想像していた。そして想像の中の自分は泣き叫びながらも、その鞭打たれている性器はクリトリスが固く勃起し愛液を溢れさせ太ももの内側まで濡らしていた。

・・嫌ぁぁっどうしてっ・・

股間を襲う激痛に泣きながら凛津は、今まさに自分の性器がそういう状態になっているとは気付かなかった。

「ふぅふぅふぅ」

正確に股間の中心の性器に激しく打ち込まれる鞭の激痛に凛津の呼吸が荒くなってくる。気を抜いたら倒れてしまうと凛津はなんとか意識を保とうとした。その時、力を入れ過ぎて凛津は、ぶぅっと大きく放屁した。そして続けて、ぶっぶっぶっと連続して屁が出る。思わず会場から笑いが出た。

・・嫌だぁーーっ・・

小便を漏らしたうえ、無様に放屁しながら性器を鞭で打たれる自分の姿に凛津は泣きながら赤面していた。

そして、まだ小学生の幼い性器に容赦なく鞭は打ち込まれ凛津のアンダースコートの股間に赤い染みが出来始めていた。激しい鞭の打撃で凛津の大陰唇が裂け、血が滲んできたのだ。それでも鞭は、凛津の性器に叩き込まれる。

凛津は号泣しながらも、命令を守り姿勢を崩さずにいた。そして、永遠に続くかと思われた凛津の性器への鞭打ちがようやく終了した。

その後、凛津の顔を拘束していた、目隠し、鼻フック、ギャグが順番に外されていく。凛津は恐る恐る目を開け、その涙でかすむ目で前方に青いランプが二つ光っているのを確認した。

・・良かった、凛津を選んでくれた人居たんだ・・

凛津は、こんな自分を選んでくれた人に感謝する。

そして、凛津は商品チェックのため次の部屋に移され、足を大きく開かされ立たされていた。

「アンダースコートと下着をあなたの性器が露出する程度切り取りなさい。そして、切り取った部分を口に入れ味わうのです」

凛津は目の前に置かれたテーブルから、カッターを手に取った。テーブルには他にも、五ミリ程の直径の半透明なカテーテルをはじめ様々な器具が置かれていた。

小便で汚れたアンダースコートと下着の股間部分を慎重に切り抜いた凛津は、それを口に入れようとして一瞬躊躇した。小便まみれの下着の一部を口に入れることは、性器を鞭で打たれることに比べると凛津にとっては造作ない事だったが、小便以外の匂いが凛津の鼻に入ったためだった。

・・今の匂い、凛津のオマンコの匂い?・・

凛津は口中で味わい、その匂いが自分の想像通りのものだと判った。

・・オマンコを鞭で叩かれて。凛津、気持ちよかったの?・・

自分の小便と愛液の付いた布切れを口中で味わいながら凛津は、性器に触れ確かめたい衝動に駆られていた。しかし、命令された事以外の事をするわけにはいかないと教育されてぃる凛津は、その衝動になんとか耐えていた。

2、飲尿オナニー

2、飲尿オナニー

「口中の物を出し、カテーテルを手に取りなさい。」

何も味のしなくなったアンダースコートと下着の欠片を口から出し凛津は机の上から迷わずカテーテルを手にした。まだ一般的には小学生の凛津であるが、この特殊な施設で教育された凛津は、それがどういう形状でどの様に使用するのかは理解していた。凛津が手にしてみると思ったよりも径が太く感じる。

・・こんな太いのが、おしっこの穴に入るの・・

凛津は、カテーテルを手にし震えていた。

「そのカテーテルの青い端を尿道から指定された線まで挿入しなさい。そして、もう一方を口にくわえ自分の尿を全て飲み干すのです。」

案の定、命令は凛津の想像したものだった。命令に従い凛津は左手で自分の股間のまだ幼い割れ目に触れ、桜色の小陰唇を開くと凛津の幼い小さな膣口からは愛液が溢れていた。

・・凛津、気持ちよかったの・・

そして凛津は右手に持ったカテーテルを自分の膣口の上、小さな尿

道に宛い突き入れた。

「痛いっ」

凛津の大きな瞳から涙が溢れ出した。カテーテルを押し込むにつれ凛津の尿道に激痛がはしる。凛津に苦痛を与えるためカテーテルの表面がヤスリ状になっているためだった。そして、この時凛津は気付いていなかったが尿道に押し込まれたカテーテルの先端には小さな刃が逆向きに埋め込まれており、カテーテルを抜く際その刃が凛津の尿道を切り裂く仕掛けになっていた。

「あっ」

凛津は尿道にカテーテルを射し込みながら小さな声を上げた。

・・痛いのに、どうして・・

尿道の内壁をヤスリで削られる激痛に、泣きながらカテーテルを押し込む凛津のまだ皮に包まれたクリトリスは固く勃起し膣は愛液を溢れさせていた。

ようやく三、四センチ程自分の尿道にカテーテルを押し込んだ凛津は自分の膀胱にカテーテルの先端があたった手応えを感じ、もう一方の端を口にくわえた。

・・凛津のオシッコ・・

凛津は右手に力を込め一気にカテーテルを自分の膀胱に突き入れた。そしてそのまま指定された線までカテーテルを尿道に押し込んでいく。

「ううっ」

膀胱まで達したカテーテルから自分自身の小便が凛津の口中に勢いよく溢れる。今迄の教育で飲尿の経験はあったが、直接膀胱から飲むのは初めてだった。

・・何時もより美味しい・・

なぜか凛津は、いつも教育されている時に飲んでいた自分の尿よりも美味しく感じられた。空気に触れず直接膀胱から飲んでいる新鮮な尿だからだと凛津は思った。そして、凛津は自分が自分の小便を飲んでいる姿がよく見えるように前かがみだった姿勢を元の足を開いた立ち姿勢に戻した。凛津の股間の割れ目から口まで繋がったカテーテルの中を薄い黄色の液体が流れていく。

「自分の尿を飲みながら自慰をしなさい。」

凛津は両手をスコートの中に入れると、すでに濡れている自分の性器を愛撫し始めた。

・・凛津は自分のオシッコ飲みながらオナニーしています・・

生暖かく苦い液体をこぼさないように飲み続けながら、凛津の右手は勃起しているクリトリスを摘まみ左手は後ろから自分の肛門に指を入れていた。凛津はこんな時でも、命令のない限り膣には触れてはいけないという教えを守っていた。

・・気持ちいい。凛津、気持ちいいの・・

凛津の脳裏には小便を飲み、狂ったように自慰に耽る自分の姿が浮かんだ。

「おっ、おぉぉっ」

凛津は尻を突き出し、さらに指を肛門の奥まで入れ刺激する。スコートの中から白いアンダースコートに包まれた形の良い凛津のまだ小さな尻が見える。

・・気持ちいい。気持ちいいのぉ・・

凛津は、その口は膀胱に残った自分の尿を飲み尽くすかのようにカテーテルを吸い続けた。

「おっおっおっおっ」

全身汗まみれになり絶頂寸前の激しく動く凛津の両手は突然押さえ付けられ、そして尿道にから垂れ下がるカテーテルが容赦なく一気に引き抜かれた。

「あぁぁぁーーーーーーーーーーっ」

カテーテルに埋め込まれた刃で尿道を切り裂かれ凛津は絶叫した。そして、絶叫と同時に凛津の股間から血と愛液が吹き出していた。自分の尿道を切り裂く激痛で絶頂に達してしまった凛津は、股間から血と愛液を滴らせながら虚ろな表情で床に座り込んでいた。

・・痛いのに。痛いのに。痛いのに凛津、気持ちいいの・・

「あなたが一番痛めつけてもらいたい部分を答えなさい。」

唐突に質問を投げ掛けられ凛津は答えた。

「はい。一番は凛津のオマンコです、二番は凛津の小さなオッパイです。」

催眠術に掛けられているかのように凛津は躊躇なく言った。

「上半身裸になりなさい。」

命令が告げられ、凛津は服を脱いだ。凛津のようやく膨らみかけた小さな胸は汗ばみ照明の光を浴びひかっている。そして両方の桜色の乳首は恐怖と緊張と喜びのためすでに固く勃起していた。

「前にある色つきの画鋲を使い、あなたの胸を綺麗に飾りながら、自慰しなさい。」

凛津は泣き出しそうな声で、はいと答えた。

大量に用意された画鋲は赤や黄色などに塗られ、針の部分は普通の画鋲の倍はあった。そして、その先端は容易に抜けないよう釣り針の様にかえしが付けられていた。

「怖いっ」

手にした画鋲を見つめ思わず凛津は呟いた。

・・凛津、自分でオッパイに画鋲刺しちゃうの・・

凛津はテーブル横に用意されていた姿見に自分の姿を映してみる。

ようやく膨らみかけた小さな胸が震えていたが桜色の乳首は固く勃

起していた。。

・・怖い、怖いよぉ・・

凛津は画鋲を持った震える手を左胸のまだ桜色の乳首に持っていき、その尖端に画鋲の針を押し付けようとしたが、手が震えて狙いが定まらない。

・・怖い、怖いよぉ・・

凛津は今迄の教育で、鞭で打たれたり蝋燭を垂らされた経験は豊富にあったが、針を刺された経験はなかった。それは、出荷前の商品にあまり傷をつけない様にするという理由だけで、凛津が幼いからという考えは微塵もなかった。ここまでくれば、あとは早く売りさばくか処分するかそれだけだった。凛津自身も、ここで買い手がつかなければ処分、すなわち殺されると分かっているので命令に従おうと必死だった。

・・凛津、早くしないと・・

凛津は自分に言い聞かせ、震えながら画鋲を乳首に押し付けた。プツッと皮膚が破れ針が凛津の桜色の小さな乳首を貫いていく。

「痛いぃぃーーーっ」

凛津の大きな瞳から涙が溢れ、えっえっと小さな声で泣き出していた。しばらくの間、凛津は自分の乳首に画鋲を刺したショックで細い肩を震わせ、ぺちゃんこ座りのまま泣き続けていた。

3、容赦なき虐待

3、容赦なき虐待

涙を浮かべながら凛津は左手を股間に伸ばし性器を開くと固く勃起している自分の皮を被った小さなクリトリスを擦りはじめ、右手は小さな胸に画鋲を押し続けた。

「あうぅっあうぅっ」

涙と鼻水を流し泣きながら凛津は自慰に耽った。膨らみかけた胸に画鋲を刺す度、小さな体がビクンと震え愛液が股間から溢れる。姿見で、自分の胸に画鋲を刺し泣きながら白いスコートに手を入れ自慰に耽る自分の姿を見ると凛津の呼吸はどんどん荒くなっていった。

・・凛津はどうしようもない変態です・・

すでに大量のカラフルな画鋲が凛津の小さな胸を覆っている。

「あっあっあっ」

姿見の中で絶頂寸前の凛津は自分の小さな胸の飾り付けが完了したのを見た。そして、その無様な胸を凝視し右手の指を肛門に突き入れ絶頂に達しようとした瞬間、凛津の両手はガシッと掴まれると高く持ち上げられ、さらけ出された凛津の画鋲が突き刺さる胸に鞭が叩き込まれた。

「あうぅぅーーーーーーーーっ」

自分の無様な胸を容赦なく鞭打たれ凛津は激痛とともに絶頂に達していた。その凛津の胸に続けざまに鞭が叩き込まれる。まだ幼い小さな胸にも容赦がなかった。

「あっ、あーーーーーっ」

まだ小学生の凛津が号泣しながら押さえ付けられ、画鋲で飾られている小さな胸を鞭で打たれ続ける。凛津がどんなに泣き叫んでも何度も何度も鞭で打たれ、凛津の小さな胸は血塗れになっていった。

「ひぃぎぃぃぃーーーっ。」

凛津があまりに泣き叫ぶので、凛津の口にガムテープが貼られ口が塞がれてしまう。

「おごぅおごぅ」

口を塞がれた凛津はツインテールを振り乱して許しを乞うが、許される事はなく更に激しく鞭が凛津の小さな胸に叩き込まれた。遠目で見ると白い縁どりで黄色い水着のブラの様に見える凛津の画鋲を刺した哀れなほど小さな胸は、激しい鞭の打撃で刺した画鋲が所々吹き飛び血が噴き出している。その凛津の顔は大量の涙と鼻水で無様に汚れていた。そして、凛津の押さえ付けられていた腕が放され、凛津はようやく鞭のお仕置きが終わってくれたと目を開けると目の前で木刀を構えている人の姿が涙で滲む目にぼんやりと映った。

・・えっ・・

凛津は、まさかと思ったが再び凛津の腕が頭上で押さえ付けられる。

・・嫌だぁぁぁ怖いぃぃぃっ・・

凛津は大きく目を見開き、ぶるぶる震えながら木刀を見つめる。

「ふぅふぅふぅふぅっ」

口を塞がれている凛津の鼻息が荒くなっていき、凛津はまた、ぶぅっと大きく放屁してしまった。辺りに悪臭が漂う。

・・これ以上、凛津を苛めないでぇ・・

しかし、凛津の小さな願いなど聞き入れられる訳がなく、泣きながら震える凛津の小さな胸に木刀が思い切り叩き込まれ、それは凛津の小さな体が浮き上がり両足が一瞬床から離れる程の威力だった。そこで、凛津の両腕が背中にまわされ縛り付けられると、今度は腰と頭が押さえ付けられる。そして、頭を押さえた手が凛津が怖くても目を閉じられないよう上下の瞼も押さえ付けた。

「ふぅふぅふぅふぅ」

凛津の鼻息がどんどん荒くなっていく。そして、木刀は押さえ付けられ逃げる事の出来ない凛津のぶるぶると震える小さな胸に容赦なく叩き込まれた。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

口を塞がれていても尚響き渡る凛津の絶叫。その絶叫を楽しみかの様に木刀は何度も何度も凛津の小さな胸に叩き込まれた。それは、

凛津が白目を剥き、鼻から沫を吹き失神するまで続けられた。

凛津への拷問は、凛津が失神した程度では許される筈がなく、ツインテールが掴まれると顔を上げられ頬に思い切り平手が叩き込まれた。それは、凛津が覚醒するまで続けられる。そして、凛津が気が付くと今度は顔面にパンチが浴びせられた。

「ふぎゃっ」

凛津は目を覚まし、また、えーんえーんと泣き出したが、その泣いている凛津の白いスコートが脱がされ、凛津は全裸にされた。小学生の貧弱な裸体が晒され凛津の陰毛の生えていないツルツルの恥丘の下には筋が一本通り、そこから桜色の小陰唇が僅かに覗いていた。そして、身長１３２センチ体重３１キロの小柄で華奢な凛津の足首が二人の男にそれぞれ持たれると、ぐいっと逆さに吊るされ、足を大きく開かされる。凛津の股間の縦筋と肛門が露に晒された。凛津は腕を縛られ口を塞がれたまま、二人の男に開脚逆さ吊りにされ更に激しく泣き出した。その号泣する凛津の前に木刀を持った男が立つ。凛津はこれから自分が何をされるのか思い描くと、恐怖でツインテールが自分の顔を叩く程、首を大きく振り泣き叫んだ。

「ふごぉふごぉふごぉふごぉぉぉーーーっ」

凛津の前に立つ木刀を持った男は、木刀を上段に構える。その狙いは明らかだった。

・・許してくださいぃぃ凛津死んじゃう・・

しかし、木刀は容赦なく振り下ろされる。鋭い風切り音の後、正確に凛津の股間の縦筋に思い切り叩き込まれた。

「ぶひぃぃぃーーーーーっ」

凛津は絶叫し体をエビのように反らせ、何とかこの拷問から逃れようと必死に体をよじるが、もし凛津の腕が縛られていなかったとしてもそれは無駄な抵抗だった。凛津が、どんなに暴れようが、凛津の足首を掴み逆さに吊るしている男たちは微動だにしなかった。そして、そんな凛津を嘲笑うかの様に第二激が続けて性器に叩き込まれる。

「ぶひぃぃぃーーーーっ」

凛津が絶叫し、まだ膀胱に残っていた小便がぴゅっぴゅっと凛津の割れ目から噴き出した。

・・痛いぃぃ凛津のオマンコ死んじゃう・・

小学生の凛津の割れ目に容赦なく木刀は何度も何度も叩き込まれ、とうとう凛津は気絶してしまった。しかし、それでも凛津は許されず木刀は容赦なく気絶した凛津の性器に叩き込まれ、その度に凛津の幼い割れ目から小便がぴゅっぴゅっと噴き出していた。

その凛津の気絶しながらも性器を木刀で打たれ小便を噴水のように噴き出す無惨な姿が好評だったが、入札者はまだ凛津の商品チェックをして欲しいと云うことで、凛津に対する残酷な拷問はまだまだ続けられた。

4、果しなき暴行

4、果しなき暴行

ようやく、凛津に対する激しい暴行が一旦終了し、腕は縛られたままだが口を塞いでいたガムテープは剥がされ、呼吸は楽に出来るようになったが、凛津は床に座り肩を震わせて泣いていた。テーブルの上にはまだ使用していない道具がいくつかある。その道具がどんな残酷な用途で自分の体に使われるのか想像するのも怖かった。姿見の中に凛津の華奢な体が映っている。身長１３２センチ、体重３１キロで長い黒髪を左右に振り分けたツインテールの凛津が震えていた。

しばらくして、退室していた男達が部屋に戻ってくると、凛津はビクッと体を竦めた。また、自分に対する暴行が始まると思い、小さな体をさらに縮めて丸くなり震えながら泣いている。そんな凛津の姿にも男たちは可哀想とも思わず、凛津のツインテールと足を持つとモノの様に持ち上げ、テーブルの上に仰向けに寝かせた。そして、頭はテーブルから外に出し、そのまま倒し押さえ付ける。凛津の目の前に自分の頭を押さえ付ける男の股間があった。幼いながら教育を受けてきた凛津は、このまま自分の喉を犯されるのだと思い大きく口を開いた。凛津は、喉に男のモノを突き刺される方が痛い目にあうよりはずっとマシだと考えていたが、何時まで経っても凛津の口に男のモノは挿入されず、代わりに凛津の肛門に浣腸器が突き刺されグリセリン液が注入された。それは、何度も何度も注入され、凛津の下腹部が膨れ上がり、もうこれ以上入らない状態になっても、凛津の肛門から無理矢理グリセリン液が注入されていく。

「く、くるちいですぅ　もう入らないよぉ」

泣きながら許しを乞う凛津の膨らんだ下腹がドンと殴り付けられ、凛津はげぼぅっと口からグリセリン液と大便を吐き出した。

「おげぇおげぇ」

肛門からはどんどんグリセリン液を注入され続け、更に腹を殴り続けられた凛津は目を見開き涙を流し口から大便を出し続ける。そして、口から大便が出なくなり透明なグリセリン液だけになると、ようやく肛門からの注入が止められた。しばらく凛津は口と肛門、両方の穴からグリセリン液を垂れ流し苦しみ続けた。

その後テーブルから下ろされた凛津はツインテールを乱暴に掴まれ立たされる。そして、体を押さえ付けられる。凛津はまた痛い事をされるのではと泣き出していた。そして、案の定凛津の顔面が殴りつけられる。

「あぎゃぁぁぁぁーーーーっ」

凛津は顔面を殴られ絶叫する。出荷前の段階では激しい調教はあったが、商品に傷をつけない様に配慮されている面があったが、もうこの段階では容赦がなかった。凛津の顔面は何度も何度も殴り付けられる。そして、凛津の顔面が小さな胸同様血塗れになってきた。

「あうぅぅぅっ」

凛津は何度も顔面を殴られ意識が朦朧となったのか叫び声ではなく呻き声を上げ始め、そして、体をビクンビクンと痙攣させる。そん

な凛津に気付け薬が注射され、凛津は強制的に覚醒させられた。

「もう、ゆるひてくだひゃい」

顔面を激しく殴打され、まだ意識が混濁している凛津はおかしな日本語で許しを乞うが、その凛津の首に天井からのロープが巻かれる。ロープが首に巻かれる間、凛津はこれ以上まだ自分に暴行が加えられると思い、今まで以上にぶるぶると震えだした。

「おねがひひまぁす、ゆるひてくだひゃい」

ぶるぶる震える凛津の前に、ボクシングのグローブをはめた男が二人立つ。素手ではなくグローブをはめているという事は、自分の拳を痛めない為、それと二人いるという事は、つまり長時間、休みなく凛津の体を殴り続ける事を意味していた。

両腕を後ろ手に縛られ、首にロープを巻かれた凛津は、その小さな体をぶるぶると震わせ泣きながら立っていた。

「ひたいのは、ゆるひてくだひゃい」

震えながら必死にお願いする凛津の姿を楽しそうに笑って見ながら男は凛津のみぞおちに強烈なパンチを叩き込んだ。拳がめり込み、凛津の小柄な体が宙に浮く。

「おげぇぇぇぇーーーっ」

凛津は無様に胃液を吐いて苦しむ。その凛津の苦しむ姿を楽しみながらパンチは連打され凛津の小さな体を痛めつける。そして、次の男に交代すると交代された男は、凛津の首のロープをもう少し引くように指示した。そして、凛津が爪先立ちでようやく立てる程度に

調整される。この男二人は入札者で、実際に凛津を痛めつけ試したいと云うことで凛津の商品チェックに参加していた。

「く…くるちいでちゅ…」

両腕を縛られ、首も吊られ、爪先立ちで苦しむ凛津の血塗れの顔面や胸に嬉々として男はパンチを打ち込んだ。

次にまた交代した男はロープをもっと引くように指示し、凛津は完全に首吊り状態になっていた。

・・凛津、もう死んじゃう・・

首に全体重がかかり声も出せない凛津に男は近付き、目の前にある凛津のツルツルの恥丘にパンチを打ち込み、下からもアッパーカットのように打ち上げ凛津の割れ目にもパンチを打ち込んだ。

凛津は死なないように時々降ろされながら、二人の男に人間サンドバッグとしてパンチを浴び続け意識を失っていった。

5、凛津の幼い割れ目

5、凛津の幼い割れ目

人間サンドバッグにされ気を失った凛津は腕を縛られたまま冷たい床に横たわっていた。そして、しばらくして気が付いた凛津は部屋の中で話している声に気が付いた。普通はこのチェック室内でチェックスタッフが話す事など有り得ないが、凛津が幼く、さらに気を失っていると思い気が緩んだものと思われた。凛津は、まだ気を失っているふりをして男たちの話を聞いていた。

「隣のチェック室のメス、針山にされたマンコを鞭で打ってくれと言ったらしいぞ。」

「それは、凄いな。」

「その後、今度はマンコを燃やしてくれって言ったらしい　それで購入ランプが点いたみたいだ。」

「それは俺も隣の部屋担当したかったな。」

「俺もだ、こんな面白くもないガキより、ずっと楽しそうだ。」

「どうせ、こんなガキ、買う奴いないから早く処分しちまえばいいんだよ。」

「そうだな、もう早く帰りたいな。」

「あと、なんだっけ？」

「このガキのマンコに針刺して終わりだ。５本な…。」

「たったそれだけか、じゃあ早く刺して終わりにしよう。処分は他の奴がやってくれるんだよな？」

「そうだ。早いとこガキ起こして吊るして終わらせよう。」

男たちは凛津に使づいてくると、凛津のツインテールを乱暴に掴み平手を打つ。凛津が、うーんと気が付いたふりをすると男たちは軽々と凛津を持ち上げ大きく足を開かされたまま逆さに吊るされた。凛津はこれから起こる事を知っている為、余計に恐怖に捕らわれぶるぶると大きく震えていた。それでも、その目は部屋の一画にある購入ランプに向けられている。あのランプが点灯すれば、凛津の買い手がついた証だった。

・・あのランプ点かなかったら、凛津、処分されちゃう・・

凛津が恐怖で震えているうちに準備が整ったようで、凛津の腰が押さえ付けられ、凛津の皮を被ったクリトリスの皮が剥かれ剥き出しにされ摘まれる。まず凛津の一番敏感な部分に針が突き立てられるようだった。

「ひぃっひぃっひぃっひぃっ」

凛津の呼吸が荒くなっていく。そして、凛津のクリトリスの頂点から針が突き刺されていく。

「ひぃぎぃぃぃぃーーーーっ」

凛津は体を反らし、涙を流し悲鳴を上げる。しかし、凛津の腰は厳重に押さえ付けられ、容赦なくさらに深く針が突き刺されていく。凛津の幼い割れ目に突き刺された針が輝いている。

・・一本でもこんなに痛いの・・

まだ最低でも４本残っている。もしそれでランプが点かなかったら凛津は自分の性器にもっと針を刺してもらうつもりだった。それでも、点かなかったら…。考えるのも恐ろしかった。凛津が考えているうちに、二本目の針が凛津の性器の肛門寄り会陰部に当てられ、躊躇なく突き刺される。

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーっ」

こんな所に針を刺された経験など当然ない凛津は泣き喚いた。

「ひたいぃぃもうゆるちてくだちゃい」

まだ顔面が腫れていてうまく喋れない凛津は、あまりの激痛につい許してを言ってしまい慌てて言い換える。

「ごめんなちゃい、もっちょりつのおまんこに、はりをちゃしてくだちゃい」

勿論、凛津に言われるまでもなく、凛津の性器に針が突き刺されていく。あっと言う間に5本の針が凛津の性器に突き刺されたが、壁の購入ランプは点灯しなかった。

・・お願いします、凛津を買ってください・・

凛津の涙で滲む目に、片付けを始めている男の姿が入った。

「おねがいちまちゅ、もっちょもっちょ、りつのおまんこに、はりをちゃしてくだちゃい」

凛津は必死にお願いする。小学生の凛津が自分の性器に針をもっと刺してくれと泣きながらお願いする姿が多少評価され、凛津の性器に望み通り針山になるまで針が刺される事になった。

「ありがとうごちゃいます　りつがうるちゃかったらくちをふちゃいでくだちゃい」

それではと凛津の幼い割れ目がぱっくりと拡げられ膣前庭窟にどんどん針が刺されていく。凛津は激しく泣き叫び、途中で希望通り口をガムテープで塞がれた。

「ぶひぃぃぃーーーーっ」

塞がれた口で無様に絶叫しながら凛津は、性器を針山にされていく。もう１００本以上の針が突き刺され、凛津の小さい性器だけではなく恥丘や肛門にまで針が突き刺されていた。それでもまだ凛津の購入ランプは点灯しなかった。そろそろ終了の気配が漂い、凛津は激しく首を振りツインテールがぶんぶん左右に振れる。

・・凛津を買ってくださいぃぃ・・

凛津があまりに激しく首をふるので、呼吸困難になっているのかと凛津の口を塞いでいたガムテープが剥がされた。

「りつのおまんこ、もっちょいたためちゅけてくだちゃい」

凛津は泣きながら必死にお願いする。

「このまま、りつのおまんこ、ぼくとうでおもいきりうってくだちゃい」

凛津の幼い頭では、隣の部屋での拷問を真似する以外考えられなかった。そして、鞭よりも木刀の方が破壊力がありそうに思えた為、最後の望みをかけて必死にお願いしたのだ。針山の性器を木刀で打つのは楽しそうだと、凛津の願いは聞き届けられた。今まで以上に凛津の足が開かされ、凛津の股関節が嫌な音をたてる。そして、耳障りな声で絶叫するだろう凛津の口に凛津が穿いていた下着が押し込まれ、その上からガムテープを貼られ厳重に口を塞がれた。大開脚され、腕を縛られ、口も塞がれ、幼い割れ目を針山にされた凛津は、逆さ吊りでぶるぶる震えながら目の前の木刀を構えた男を涙で滲む目で見ていた。

「ふっふっふっふっ」

再び凛津の鼻息が荒くなっていく。男は凛津の恐怖を楽しむように、軽く木刀を振り凛津の割れ目に刺さる大量の針先にちょこんと木刀を当てる。

「ふっふんっ」

凛津はビクンと体を震わせ、さらに恐怖で号泣する。

「ふぅぅーーーっふぅぅーーーっ」

凛津の呼吸が荒くなり恐怖で失神しそうになっていた。まだ小学生の凛津が泣きながら針山にされた性器を木刀で打たれようとしている。その恐怖は筆舌に尽くしがたいものといえた。そして、男は大きく木刀を振りかぶる。それを見た凛津は塞がれた口の歯を食いしばった、次の瞬間、木刀が唸りを上げて振り下ろされる。

ぐしゃ

木刀は正確に凛津の針山にされた性器に叩き込まれた。

「ぶひぃぃぃぃーーーーーーーーっ」

凛津はのけ反ったまま硬直したように動かない。その凛津に続けて容赦なく木刀が叩き込まれる。

ぐしゃ、ぐしゃ、ぐしゃ

「ぶひぶひぶひぃぃぃぃーーーーーーっ」

凛津は必死に自分の股間を襲う激痛に耐えていたが、それももう限界にきていた。幼い割れ目からは血が噴き出し、凛津の股間は真っ赤に染まった。

・・早く凛津を買ってくださいぃぃ・・

凛津は泣きながら鼻から泡を噴き出しとうとう失神してしまった。それでも、凛津は性器を木刀で打たれ続け、ほぼ全ての針が根元まで性器に打ち込まれ凛津の下腹部は血塗れになっていた。そして、凛津が気を失っていなければ狂喜したであろう購入ランプが点灯し

ていた。

6、凛津の出荷前処置

6、凛津の出荷前処置

針山にされた性器に木刀を打ち込まれ、気絶してしまった凛津は、まだ腕を縛られ口を塞がれたまま冷たい床の上に横たわっていた。まだ十二歳、小学生の凛津の体は顔面も小さな胸も血塗れになり、激しい拷問を受けた幼い割れ目からは血が流れ出している。凛津の足は大きく拡げられ、その幼い性器が拡大されモニターに映し出されていた。男たちは、その拡大された凛津の性器を見ながら、凛津の性器に根元まで打ち込まれた針の除去作業に勤しんでいた。

「やっている時は楽しいが、後の処理が面倒だな」

「この後、処分だったら、こんな手間かからないけどな」

男たちは愚痴を言いながら作業を進めていく。それでも、１００本以上の針が凛津の性器に突き刺されているため、なかなか時間のかかる作業だった。

「このガキも、最後覚醒したみたいに頑張ったな」

「隣のメスといい、このガキといい、頭のおかしな商品の考える事は理解できんな」

「まったくだ。理解したくもないがな」

男たちは交代で凛津の性器から針を一本一本抜いていき、最後の一本を抜き終えた時にはかなりの時間が経っていた。

「ようやく終わったか」

「それにしても、よくこんなガキ、高い金だして買ったもんだな」

「そうだな。隣のメスならともかく、こんなガキだもんな」

凛津の、男たちの評価は最低のものだった。幸い、気を失っていた凛津は自分がそんな風に言われている事を聞かずに済んでいた。

「そろそろ、起こすか」

男は凛津のクリトリスの注射針を深く突き刺し、気付け薬を注入した。凛津が体をビクンビクンと痙攣させると、ぱっちりと目を開け覚醒する。

「起きたみたいだな。残りは処刑室で済まそう」

処刑室と聞いた凛津は、小さな体をぶるぶると震え出した。

・・助けて下さい。凛津、まだ死にたくない・・

購入ランプが点いていた事を知らない凛津は、唯一自由に動く足をバタつかせ必死に抵抗したが、また顔面を殴られ両足も縛りつけられてしまった。それでも、芋虫のように体をくねらせ抵抗する凛津だったが、軽々と持ち上げられストレッチャーに乗せられるとガラガラと運ばれていった。

・・嫌ぁ、誰か凛津を助けてくださいぃぃ・・

「ぶひ、ぶひ、ぶひぃぃぃーーーっ」

凛津は号泣し、ストレッチャーから降りようと体を動かすが男たちに押さえ付けられ処刑室のドアが開かれ、そのまま中へ運ばれていった。そこは、しーんと静まり返った部屋の中にポツンと拘束器具の付いた金属製のベッドのようなものが置いてあり、部屋の隅には断頭台のような大きな器具や、こびり付いた血なのか赤錆びた回転のこぎり等が置いてあった。

・・お願いします。凛津を殺さないで・・

「ぶひ、ぶひぃぃ」

凛津はストレッチャーから金属製のベッドの上に移されると、足を大きく開かされ固定される。そして、腕も戒めを解かれると、ベッドの上に大の字に固定された。

着々と準備が進められていくなか、何も知らない凛津は恐怖で泣きじゃくっていた。今回、凛津を購入した者からの指示で、納品前に凛津にある処置を委託されていたのである。それを行う為、器具の揃っている処刑室が選ばれたのであるが、いずれにしろ凛津にとって処刑は免れたが酷い事になるのは明白であった。

「どこから、始める？」

「両方の口を先に手分けしてやろう」

男たちの、ひそひそ話が聞こえ、凛津はもう自分が生きていられるのは僅かな時間だけ、それもその残された時間も徹底的に痛めつけ

られると感じ、大声で泣く以外なかった。

・・殺すなら、楽に殺してください・・

凛津は、せめて楽に死にたいと願った。もう痛いのは嫌、そう思ったが、凛津の希望など叶えられる筈がなかった。凛津は口に閉じる事が出来ないよう金具を装着され、一本一本、歯を抜かれていった。それと同時に、凛津の皮を被るクリトリスの皮がピンセットで挟まれカッターで切り取られていく。そして、凛津の歯はすべて抜かれ、クリトリスの周りの包皮もすべて切り取られた。

「りつをころちゅなら、りゃくにころちてくだちゃい」

顔面が腫れているうえに歯も抜かれてしまった凛津は、うまく言葉が喋れなくなっていた。その凛津の両腕の肩の付け根にベルトが巻かれきつく締めあげられる。。そして、赤錆びた回転のこぎりの刃が回転を始めた。

「ひぃぃぃっ」

回転のこぎりの刃が凛津の左腕に迫り、凛津が悲鳴を上げる。そして、凛津が恐怖で顔を背け目を閉じるが、男の手で頭を無理矢理向けられ、目も瞼を押さえつけられ閉じられないようにされた。凛津がショック死しないように事前に麻酔が打たれているが、そんな事も知らない凛津は恐怖で泣き叫ぶ。

「こわいでちゅうぅぅっ」

恐怖で震える凛津に構わず、回転のこぎりの刃は凛津の左腕を切断していく。凛津の左腕の肉と骨が切断される嫌な音が響き、ついに

凛津の左腕は肩口から切断されてしまった。そして、切断された凛津の左腕がごみ箱に投げ捨てられ、次に右腕の切断作業に進んでいく。

・・凛津、バラバラにされて殺されるんだ・・

麻酔の為、痛みを感じない凛津は、この後順番に手足を切断され最後に首を切断され殺されるものだと冷静に判断していた。殺されるのは怖かったが、痛みがない分凛津は嬉しかった。そして、右腕もあっさりと切断され凛津は次に足が切断されるものと思っていたが、それは何時まで待ってもやってこなかった。

「ええと、あとは焼き印だけか」

「ああ、左右の胸に一文字ずつだ」

「〝り〟〝つ〟って何だこれ？」

「このガキの名前らしいぞ」

「このガキ、一人前に名前あるのか」

気が緩んだ男たちは凛津が聞いているのも構わず会話している。凛津はそこで初めて自分が殺されるのではないという事を知った。

・・えっ、凛津、殺されないの。生きていられるの・・

両腕は無くなり、これから胸に焼き印を押されるようだが、生きていられる嬉しさで凛津は踊り出したい気分だった。

・・凛津を買ってくれた人がいたんだ・・

凛津は、顔も名前も知らない人物に感謝の気持ちしかなかった。そして、凛津は今この瞬間今まで生きてきて一番の幸せを感じていた。

7、凛津の平穏な一日

7、凛津の平穏な一日

凛津は広い庭園の銀杏の木の下に、首輪に付いたロープで固定されていた。凛津の目には黒い布がぐるぐると巻かれ、口もガムテープが貼られ塞がれていたが、それでも生まれてからずっと地下の澱んだ空気の中で育った凛津は、そよそよと吹く気持ちのいい風を感じ幸せな気分だった。

あの施設での拷問から一か月。凛津は再び拷問される事もなく平穏に暮らしていた。凛津を購入したご主人からは、しばらくあの激しい拷問からのダメージを回復させる為ゆっくりしてもらうと伝えられていた。ただし、庭園でゲストに出会い、求められたら対応するようにと厳命されていた。凛津は黒い髪のツインテールに目鼻立ちのはっきりした人形のような顔をしていた。散々殴られたり拷問されたりして変形していた顔も、ようやく元の凛津の顔に戻っており、小さな胸も幼い性器も傷が癒え普通の状態に戻っていた。両腕は切断され、歯も全て抜かれ、クリトリスの包皮も切除されているが、凛津はこうして生きていられる事が嬉しかった。

太ももの付け根まで覆う白いサイハイソックスに桜色のローファーを履いた凛津は、首に付けられたロープの長さの動ける範囲でチョコチョコ動いては、小鳥の声を聴き、池の水の中を泳ぐ魚の飛び跳ねる音に驚き、風に舞う木々の葉の匂いに幸せを感じていた。

・・凛津、こんなに幸せでいいのかな？・・

世間を知らない凛津は、自分が幸せだと思っていた。その時、鳥の

鳴き声に交じり、人の話し声が風に乗って聴こえてきた。ゲストの皆様に出会った時は、足を大きく開いて性器をよく見えるようにして待機しなさい、と言われていた。

「何、あの裸のガキは…？」

一人の女性が、凛津を発見してこの集団の中心にいる男に問いかける。

「ああ、あれは家の性玩具だ。父が購入したんだ。壊さなければ好きに使っていいぞ」

この家の後継ぎらしい男が、まわりの友人たちに言うと、皆色めき立ち会話が盛り上がる。

「そうそう。あのガキ、抜歯も全て済んでるから口でやると具合いいぞ」

「でも、口、塞がれてるじゃん」

「やる時に剥がして、終わったら貼っておけばいいんだよ」

「そうか、それなら是非やってみたいな」

一人が言うと、男たち全員が自分もと言いだした。

「あのガキの近くにテーブルがあるだろう。あの上に仰向けに寝かせてやるといい。首を動かせないようテーブルに切り込みが作ってあるからな」

さっそく凛津は男たちに持ち上げられるとテーブルの上に寝かされ、テーブルの切り込みに頭を倒され、さらにベルトで頭を固定された。そして、凛津の口を塞いでいたガムテープを剥がされると、容赦なく凛津の口から喉の奥まで男のものを突き刺された。

「おごぅ」

凛津はいきなり喉奥まで突かれて呼吸ができなくなり逃れようとするが、頭はベルトとテーブルの切り込みで固定され、両腕もなく抵抗できない凛津の体も他の男に押さえ付けられ、喉奥を犯され続けた。

・・く、苦しいですぅ・・

凛津の黒い布で覆われた目から涙があふれ出し、股間の割れ目からは小便がチョロチョロと漏れ出した。

「おいおい、殺すなよ」

「おお、気持ち良すぎて忘れてた。このまま殺したいところだな」

ようやく解放された凛津は、咳き込みながらヒューヒューと苦し気に呼吸するが、すぐにまた次の男に喉奥を犯される。凛津は、そのまま何人もの男に代わる代わる喉を犯され続け、そのうちに性器も犯された。まだ、女児といえる凛津が押さえ付けられ泣きながら口と性器を犯される姿を見て、男たちのみならず一人いた女も興奮させる。男たちが凛津を散々犯し、口と性器から白い精液を垂れ流し泣き続ける凛津の頬が思い切り叩かれる。

「ひぃぃぃーーっ」

凛津が悲鳴を上げるが構わず凛津の頬を打ち続けていたのは女だった。

「おい、睦月様のスイッチ入ったんじゃないか？」

笑いながら凛津の頬を打ち続ける睦月と呼ばれた女は、自分の服を脱ぎ捨て全裸になる。

「椅子っ」

男の一人を見て睦月が言うと、慌ててその男は地面に四つん這いになる。睦月は当然のように男の背に腰を下ろすと足を組んだ。睦月の赤いハイヒールが鮮やかに目に入る。

「そのガキ、立たせて足を開かせなさい」

男たちは睦月の命令で凛津をテーブルから降ろし立たせる。そして、ふらふらしている凛津の体を押さえ付け足を大きく開かせた。凛津はこれから自分の性器にまた激しい拷問が行われると感じ震えていた。

「ふふっ、このガキ、いい声で泣くわね。名前はなんていうの？」

凛津が自分に言われたとは気付かず黙っていると、睦月は凛津の頬をまた叩いた。

「名前って言ってるんだけど」

幼い凛津の頬を楽しそうに叩き続ける睦月の姿に男たちは震えあが

る。

「り、りちゅ、でしゅ」

「歯がないからうまく喋れないみたいね。無様でいいわ。凛津っていうのね。胸に焼き印されてる文字は名前だったのね。年はいくつ？」

「じゅうに、ちゃいでしゅ」

「そう、十二年も生きたら、もう死んでもいいわね。このガキが動けないように押さえ付けときな」

睦月は、にやりと笑うと凛津の股間の割れ目に思い切り蹴りを入れた。それも足の甲ではなく、ハイヒールの鋭角なつま先で凛津の性器を蹴り上げていた。

「ひ、ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

凛津は絶叫し、小便を漏らす。睦月の足に凛津の小便がかかっているが、睦月は気にする様子もなく続けて凛津の性器に蹴りを入れる。睦月のハイヒールのつま先半分が凛津の膣にめり込み、凛津の膣が裂け血が溢れだした。血を見て、さらに興奮した睦月は凛津の性器に激しく蹴りを入れ続ける。凛津の膣から血が流れだし地面に血だまりを作った。

「ゆるちてくだちゃい」

凛津が必死に許しを乞うが、睦月は蹴りを入れ続ける。凛津はもう自分で立っている事ができず、男たちが支えていなければ倒れてし

まう状態だった。

「やばいぞ、睦月様のスイッチ、完全に入ってる」

「ああ、このガキ殺されるぞ」

睦月の凄まじい虐待に、男たちは背筋が寒くなった。睦月は、さすがに疲れたのか四つん這いの男の背に腰を下ろすと、凛津の血と小便で汚れた足を投げ出す。

「舐めて綺麗にしなさい」

男たちは急いで凛津のツインテールを乱暴に掴み睦月の足の前に頭を動かす。凛津は自分の血と小便を泣きながら舐め始めた。

「この凛津とかいうガキ、気に入ったわ。今度、葉月お姉様にお願いして貸し出してもらうようにするわ。その時にはもっと酷い事をして、死にたくなるほどの苦痛を与えてあげるから楽しみにね」

睦月は、自分の足を泣きながら舐めている凛津の顔面を左足で蹴りつけた。そして、地面に転がる凛津の顔面を踏みつける。

「いいざまね。もう少し痛めつけておこうかしら」

睦月は、凛津のツルツルの恥丘をハイヒールの踵でグリグリと踏みつけ体重をかける。

「ほら、立たせて足を開いて押えなさい」

男たちは睦月の下僕のように命令通り凛津の体を押さえ付ける。睦

月は凛津の膣と尿道と肛門と股間の三つの穴に落ちていた木の枝を突き刺し、再び蹴りを入れる構えをする。

「不味くないか。このまま蹴るつもりかよ」

「このガキ。膀胱も子宮も直腸も全部串刺しにされて死ぬぞ」

男たちのひそひそ話が耳に入り、凛津は恐怖で震え出した。

「おゆるちくだちゃい、おゆるちくだちゃい」

凛津は震えながら呪文のように繰り返す。

「ふふ、最後に特別の痛みを味わってもらうわ」

睦月は思い切り凛津の股間を蹴り上げた。

「ひぎゃぁぁぁぁーーーーっ」

凛津の絶叫と共に、凛津の股間の三つの穴から血が噴き出した。そして、泡を吹いて気絶した凛津の体がビクンビクンと大きく痙攣する。男たちは慌てて凛津の首輪を外し、医療室へ運んでいった。

8、凛津の性器拷問（三角木馬編）

8、凛津の性器拷問（三角木馬編）

広大な屋敷の庭を、白い下着と白いサイハイソックス以外全裸の凛津は首輪に着けられたロープに牽かれ歩いていた。その足取りがふらふらとしているのは目隠しと股間に刺さる針のためだった。凛津の穿いている白い下着の股間には、針が無数に埋め込まれており、その針が凛津の性器に深く突き刺さっていた。歩く度に性器に刺さる針が、性器の肉をえぐり、凛津は一歩歩く度に激痛に涙を流していた。

「止まりなさい」

ようやく、その地獄の行進から凛津が解放されたのは周囲に大きな池や木があり、花も咲き気持ちのいい場所だったが、立ち止まった凛津のすぐ横には三角木馬の形に削られた庭石が置かれていた。目を塞がれている凛津だったが、その場の雰囲気からここで自分の性器に対する拷問がおこなわれるのだろうと敏感に察知し震え始めていた。

・・今日は何されるんだろう、あまり痛くないと嬉しいな・・

凛津は、ささやかな願いを唱えるが凛津の願いが叶ったことはなかった。

「足を開きなさい」

命令され足を開いた凛津は自分の股間が観察されている気配を感じた。そして、凛津の股間は性具の振動で強制的に刺激され、針を突き刺されているにも関わらず凛津の股間は、愛液と汗でむっとする匂いを発し始めていた。

「おぉぉーーーっ」

その濡れた股間が不意にぎゅっと押され、針の痛みで思わず凛津は声をだした。

「放尿しなさい」

凛津の股間の状態に満足したのか新たな命令が凛津に告げられた。凛津は昼の陽射しの中、大きく足を開いて立ったまま放尿しだした。凛津の下着の股間中央から小便が溢れ、下着の両脇から漏れた小便が太股を濡らす。その放尿している凛津が軽々と持ち上げられると、横の三角木馬の庭石の上に下ろされた。

「ひぎぃぃぃーーーーーーっ」

凛津の性器に三角木馬の鋭角が食い込み下着に埋め込まれた針もさらに奥深く突き刺さった。そして、泣き喚く凛津の両足に庭石がぶら下げられる。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

性器から身体を二つに裂かれるような激痛に凛津は絶叫する。その凛津の腰が残酷にも前後に揺らされはじめた。

「おがぁぁーーーーーーーっ」

凛津は動物のように咆吼し、目隠しの下からは大量の涙が溢れ出していた。

放尿したまま三角木馬に跨がされ、目も口も塞がれ許しを乞う事もできず泣き続ける凛津。その姿を楽しむため耳にも栓を着けられ凛津はこのまましばらく放置される事になった。

・・私のオマンコ、裂けちゃうよぉ・・

自分の体重と両足に付けられた庭石の重量が全て凛津の性器に集中し、三角木馬の鋭角が食い込み針にえぐられた凛津の性器は血を流し続けている。

・・私のオマンコ、壊されちゃうの・・

凛津は三角木馬に跨り、その股間から血を流している自分の姿を想像していた。想像の中で自分の足に次々に石が下げられていく。三角木馬の鋭角はその度に凛津の性器に深く食い込み、そしてとうとう性器を引き裂いた。凛津の股間から血が溢れ、性器を裂かれた激痛で凛津の上半身はのたうち回る。その凛津の足にはそれでも石が下げられていく。三角木馬は性器から凛津の身体を二つに裂き、その鋭角の先端は凛津の恥骨と腰骨を砕きへその下まで達している。凛津はゆっくりと自分の身体を裂かれていく恐怖と激痛で発狂する。

「あひっあひっあひっ」

見ることも聴くことも話すこともできない凛津は容赦なく自分の性器に食い込んでくる鋭角に恐怖と期待を感じ異常に興奮していた。

この屋敷に購入されて来てから凛津は、拷問の度に快感を与えられ、

痛みにも少しずつ快感を得られるようになってきていた。凛津が、性奴隷として少しは成長したといえる。それでも、その痛みに全て耐えていける程、凛津は大人ではなかった。

・・許して下さいぃ。もう私のオマンコ壊れちゃうよぅ・・

そう思いながら凛津は、いつの間にか自分で腰を前後に動かしていた。

「おぉーーーっおっ」

腰を動かす度、凛津の性器の肉はえぐれ、凛津の股間からは血が溢れ出していた。

・・もう裂けちゃう、私のオマンコ・・

凛津が三角木馬に跨り、性器から血を溢れさせながら腰を動かす。その姿に満足したのか凛津の足にさらに石が追加された。

「おぉぉーーーーーーーっ」

三角木馬の鋭角が一気に凛津の性器に食い込み、凛津は絶叫する。その重さのため凛津は腰を動かすこともできなくなった。

・・本当に私のオマンコ裂けちゃうよぉ・・

今まで以上にしっかりと確実に自分の性器に食い込んでくる三角木馬の感触に凛津は恐怖し興奮していた。その凛津の足にまた石が追加される。

「・・・・・・・」

その激しい苦痛に、もはや凛津は声も出せず性器からは血が大量に溢れ出した。凛津の恥骨はミシミシと悲鳴を上げている。

・・もう、裂けちゃう、私のオマンコ。凛津のオマンコ、今日壊されるんだ・・

もう自分の体重を軽く超える庭石を足にぶら下げられた凛津は、足をピーンと伸ばし全ての重さが集中する性器からはミシミシと音がしている。が、そんな凛津の足に、更に庭石が追加された。

「おぎぃぃぃぃーーーっ」

天を仰いで絶叫する凛津の体に、鞭も叩き込まれ始めた。それも三人がかりで凛津の胸に、腹に、背中に、恥丘に、尻に、太ももに、そして、顔面にも容赦なく連続で叩き込まれる。さらに凛津は鞭で打たれながら足にまた庭石が追加された。

・・もう、凛津、死んじゃうよぉ・・

凛津は全身を襲う激痛と自分の性器がいよいよ引き裂かれるという恐怖で失神していた。しかし、失神したくらいで凛津が許される筈がなく、ツインテールを掴まれ、ロープで上半身を立たされると再び鞭が激しく叩き込まれていった。

9、凛津の性器拷問（膣縫い編）

9、凛津の性器拷問（膣縫い編）

凛津は、例によって首輪につながれたロープの範囲で嬉しそうにチョコチョコと動き回っていた。今日も気持ちよく晴れ、爽やかな風が凛津のツインテールを通り抜ける。凛津はしゃがみ込んで黄色い小さな花の香りを嗅いでいた。

「おい、凛津」

凛津を呼ぶ声に顔を上げると、庭園に置かれたテーブルの所に、凛津を購入した男の姿があった。凛津は急いでテーブルまで戻ると、テーブルの上に仰向けになり首をテーブルの切れ目に入れると口を大きく開いた。すぐに凛津の喉奥に性器が突き入れられる。

「おごぅおごぅ」

凛津は泣きながらも一生懸命、口を大きく開いていた。男は、凛津の喉の奥の奥まで自分の性器を貫通させると容赦なく激しく腰を振り、苦しさで暴れる凛津の足をがっしりと押さえ込み凛津の喉を犯し続ける。凛津は、ジョーッと小便を漏らし、ぶっぶーっと放屁もしていた。

「凛津の喉はいい具合だ。これなら、ゲストに提供しても恥ずかしくないな」

男は満足気に頷くと、凛津の喉奥に放出した。

「よし、凛津。御褒美をあげよう」

男の言葉に凛津は、テーブルからごろりと転がるように降り、男の前で大きく足を開いて立つ。

「おねがいちまちゅ、ごちゅじんちゃま」

男は口元に笑みを浮かべると、凛津の性器に思い切り蹴りを叩き込んだ。男の革靴の爪先が凛津の膣に半分近く食い込み、膣が裂け血が噴き出す。凛津は足を窄めて地面をのたうち回っていた。

「いちゃいぃぃ、いちゃいよぉぉーーっ」

号泣する凛津の顔面を踏みつけた男は、そのまま凛津の両足首を持ち、力尽くで足を拡げる。そして、凛津の性器を観察すると、凛津の小さな軽い体を持ち上げぶらぶらと振り回した後、首輪に付いたロープを外し屋敷の中に移動する。

「これを見てごらん」

男は凛津に直径5ミリくらいの小さな球体を見せる。球体の表面には無数の針が突き出ていた。凛津は、それが何なのかまるで分からず、きょとんとした顔をしていたが、次の男の説明で震え出した。

「これは凛津の体の中にいれる拷問具だ。これはリモコンで振動するように出来ている。凛津はどこに入れてほしいかな」

男は残酷に笑い、凛津の答えを待つ。凛津は男の期待しているであ

ろう場所を震える声で答えた。

「りちゅのおまんこのなかにいれてくだちゃい」

「よく言えたね、凛津。それでは、さっそく始めよう」

凛津は大きな台の上に、足を大きく開いて貼り付けの様に固定された。首、胸、腰、そして、太ももに足首と厳重にベルトで締め付けられ身動き出来なくされる。

「さあ、始めようか」

男は凛津の膣に膣鏡を挿入し、膣を大きく開くと、奥に見える子宮口を確認する。そして、凛津の小さく可愛いツルッとした子宮頸部の中心にある子宮口にチューブを刺し込んでいく。

「あうっあうっ」

小さな声を上げる凛津に構わず男は、慎重にチューブをある程度の長さを挿入すると、チューブの反対側に漏斗を刺し込んだ。

「さあ、凛津。凛津の子宮の中に、この球を入れるからね。子宮の中に入れれば、もう取り出せないから凛津はこれからずっと苦しむんだ」

「こわいでちゅ、りちゅ、しんじゃうの」

「うーん。死にはしないけど、死ぬよりもっと辛いかもな」

男は笑うと、じやらっと漏斗の中に針付きの小さな球をあけ、漏斗

を揺らし凛津の子宮の中に入れていく。

・・あっあっあっ、入っちゃう、本当に入っちゃうよぉ・・

凛津は自分の体の中に入ってくる凶悪な拷問具に、小さい体をぶるぶると震わせていた。男は漏斗に入れた数十個もの球体を全て凛津の子宮に入れると、満足そうにチューブを抜いた。

「あと、凛津の膣にもこれを詰めておくからね」

男は、凛津の膣鏡で開いている膣内にも、じゃらじゃらと球体を詰めていく。そして、一杯まで詰めると膣鏡を抜いた。

「このままだと膣から零れ落ちそうだから、凛津の膣を縫って、落ちないようにしておくから」

男は簡単に言うが、膣を縫うと言われた凛津は恐怖で泣き喚く。

「おねがいしまちゅ、りちゅのまんこぬわないでくだちゃい。じぶんで、てーぷはってておちないようにしまちゅから、おねがいしまちゅう」

しかし、凛津のお願い等当然無視される。

「あまり煩いのは好きじゃないから口を塞いでおくよ」

男は凛津の口を無理矢理開けると、口の中にもじゃらじゃらと球体を流し込んだ。そして、テープで何重にも口を塞ぐ。

「飲み込まないように気を付けてな、凛津。飲み込むと痛くて大変

だぞ」

「ふごっふごっ」

口を塞がれ身動きもとれない凛津の膣口に針が突き刺され、そのままスッと針を通され、その後を糸がズルズルと通っていく。

「ふがぁーーーっ」

絶叫した凛津は、口に入れられた球体をいくつか飲み込んでしまった。子宮や膣ならともかく、飲み込んでしまったことで凛津は恐怖で青くなる。

・・飲み込んじゃった。凛津、死んじゃうの・・

そんな凛津の恐怖などお構い無しに、凛津の膣がチクチクと縫われていく。拷問具を飲み込んでしまった恐怖と、膣を縫われる激痛で凛津は、小便はおろか大便まで漏らし始めていた。

「締まりの悪い穴だ。ここも縫って欲しいのか？」

男は残酷に凛津に告げると、針先でツンツンと凛津の肛門の括約筋を軽く刺す。凛津は必死に首をぶんぶんと振り、許してくださいと訴えた。男は凛津の膣縫いを再開し、丁寧に何針も縫い、凛津の膣の封印を完成させる。

「よし、凛津。暫くはこのまま過ごしてもらうぞ。いつこのリモコンのスイッチを入れるか分からんからな、覚悟しておくんだな」

男は楽しそうに笑うと、凛津の拘束を解き口のテープを剥がし、口

の中の拷問具をここにあけろとトレイを差し出す。凛津は、おげぇと吐き出すが、自分がどれくらいの拷問具を飲み込んでしまったのか分からず震えていた。

10、ショートケーキ

10、ショートケーキ

凛津は広い庭園の池の畔で、足を大きく開かされて立っていた。黒い布を何重にも巻かれ目隠しされ、口にもボールギャグが装着されていた。珍しく凛津は全裸ではなく、白いスポーツブラと同じく白い女児用の綿の下着を穿いていた。たが、それはただの下着ではなかった。スポーツブラの内側には画鋲が埋め込まれており、凛津の膨らみのない胸に突き刺さっていた。そして、女児用下着の股間から恥丘にかけても同じく画鋲が埋め込まれ、凛津のツルツルの恥丘から性器、肛門まで画鋲の針が突き刺さっている。凛津は、少しでも動くと突き刺さった針に抉られる激痛で、命令された通りに動かずにいたが、それでも針が刺さった部分のじんじんとした痛みで静かに泣き出していた。

「待たせたね、凛津。それじゃ始めるか」

口調は優しいが男は容赦なくリモコンのスイッチを入れた。凛津の子宮と膣内に入れられている針付の球体が振動を始める。

「あびゃゃゃーーーっ」

凛津は本当にピョンと飛び上がると、地面に転がり足をばたつかせのたうちまわる。

「ほぎゃぎゃぎゃーーっ」

男は凛津の顔面に足をのせ仰向けに押さえ付け、苦しむ凛津を楽しんで見ている。

「痛いのは、ここかな？」

男は凛津の恥丘を踵で思い切り踏みつけた。

「ぶじゃぁぁぁーーっ」

凛津は絶叫し、ぶりぶりと大便を漏らしてしまった。

「おやおや、汚いねぇ」

男は汚い物を扱うように爪先で凛津の体をゴロゴロと転がし、そのまま池にどぼんと落とした。

「汚いお尻をキレイにしなきゃね」

しかし、両腕のない凛津は池から上がる事が出来ず、バシャバシャと水をはね溺れそうになっていた。

・・助けてくださいぃぃ。凛津、本当に死んじゃう・・

男は凛津の溺れている姿を楽しそうに笑って見ていた。そして、バシャバシャと暴れていた凛津が、ぐったりと動かなくなったのを確認し水から引き揚げる。目隠しとボールギャグを外すと凛津は、おげーっと水を吐き出した。しばらく、げぼげぼと涙を流し苦しむ凛津に男は、早く立ちなさいと命令する。凛津は慌てて頭を地面に突

き立ち上がった。

「よしよし、凛津。それじゃあ口を開いて」

凛津は命令通り歯のない口を大きく開くと男は、凛津の口の中に、凛津の漏らした大便を押し込み、顔面にも大便を塗り固めた。

「可愛いよ、凛津。さあ、大きく足を開いて腰を突き出すのだ」

凛津は命令されたままの姿勢をとると、凛津の開いた足の中心、性器に鞭が叩き込まれた。

「ほげぇぇぇーーっ」

凛津は口に詰められた大便を吐き出してしまい、そのペナルティとして性器を打つ鞭が棘鞭に変えられた。そして、その凶悪な棘鞭が唸りを上げて凛津の性器に打ち込まれる。

「うぎゃゃゃーーーっ　いちゃい、いちゃいぃぃぃ」

泣き叫ぶ凛津に容赦なく棘鞭が叩き込まれる。凛津の白い下着の股間部分は、あっという間に赤く染まった。そして、立っていられなくなった凛津は、開脚逆さ吊りにされ性器のみを集中的に棘鞭で打たれる。

「おゆるちくだちゃい、おゆるちくだちゃい」

凛津は呪文のように繰り返すが男は楽しそうに凛津の性器を棘鞭で打ち続け、再びリモコンのスイッチも入れてしまう。

「ぶびゃあぁぁーーーっ」

顔面に塗られた大便は、凛津の涙と涎でほとんど流されてしまっていた。その時、男の傍らにこの家の執事がやって来ると、男に何事か告げる。男は、ほうっという顔をすると執事に何かを告げ、再び凛津の性器に棘鞭を叩き込み始めた。そして、数十分後ようやく鞭打ちが終了した時には、凛津の股間は真っ赤に染まり血が流れだし血だまりを作っていた。凛津はぐったりとぶら下がったまま完全に失神していた。

★　★　★　★

凛津が気が付くと屋敷の中の椅子に座っていた。もう、画鋲付の下着は脱がされており、凛津はキョロキョロと辺りを見回すが誰も居なかった。凛津は自分が大失態をしてしまったのではないかと不安になってきた。ドキドキしながら待っていると、カチャとドアの開く音が聞こえ男が入ってきた。何か手に持った皿に凛津が初めて見る物が乗っている。

「凛津、実は凛津を貸して欲しいという連絡があったんだよ。先方は是非、凛津をと云うんだ。正直な話、かなりの金額を出してくれるから、私も嬉しいよ。これも凛津のおかげだ」

そう言うと男は凛津の前のテーブルに持ってきた皿を置いた。

「これは凛津への御褒美だ。さあ、食べなさい」

凛津は、ここで初めて目の前の物が食べ物であると知った。

「凛津は手がないから、そのままガブッと食べていいぞ」

それでも凛津は、この白い三角形の物体が何か分からず戸惑っていた。

「どうした？　これはショートケーキだよ。柔らかいから歯のない凛津でも大丈夫だ」

「ちょーとけーき？」

「そうだよ、甘いから凛津も気に入ると思うぞ」

凛津は恐る恐るショートケーキの端を口に入れてみる。その生まれて初めて味わう甘い味と食感に凛津は夢中になり脇目もふらずショートケーキを食べ続け、あっという間にペロッと食べてしまい、皿に残ったクリームまでペロペロときれいに舐めてしまった。そして、食べ終わってからも空の皿をじっと見つめたまま固まったように動かなかった。

「ずいぶん気に入ったようだね。凛津のおかげで大金が入るからね。もう一つ食べるかい？」

凛津は激しく首を縦に振る。男は凛津の前にもう一つケーキを置いた。

「これはモンブランというケーキだ。これも美味しいぞ」

凛津は夢中になって食べ続ける。美味しくて涙が出てきたが食べるのは止めなかった。

しかし、凛津は知らなかった。自分がもう二度と帰って来れない地獄に足を踏み入れてしまった事を……。

凛津のこの世の終わりのカウントダウンが始まっていた。

11、カウントダウン

11、カウントダウン

凛津は、何時ものように庭園で風に吹かれていた。長い間、閉鎖された空間で育ってきた凛津にとって、この広い庭園は居るだけで幸せな気分に浸れた。

・・風って気持ちいいな・・

そよそよと気持ちいい風に包まれて凛津は、首輪に付けられたロープの範囲内で、チョコチョコと歩き回り、朝のひと時を楽しんでいた。そして、ふと便意を覚えた凛津は、地面に足で穴を掘りしゃがみこむ。

「あっ…」

ぶりぶりぶりっ

気持ち良く排便した凛津は、土をかけ穴を埋めると人工的に造られた小さな滝に尻を当て、肛門の汚れを洗い流す。そこへ、凛津のドミネーターの声が聞こえてきた。

「おーい、凛津」

凛津は急いで直立不動の姿勢をとり足を大きく開く。歩いてきたド

ミネーターは凛津の頭を撫でると、お迎えが来たぞと言い、首輪からロープを外す。

「凛津、さようならは」

「ちゃりょうなりゃ？」

「そうだ、凛津。これで、お別れになるかも知れないからな」

「はい、ちゃりょうなりゃ」

凛津は、意味は分からなかったが挨拶はしなければと、さよならを告げる。一旦、凛津は部屋に戻されると、旧タイプのスクール水着を着せられ、黒いサイハイソックスも穿かされると、足首に足枷が装着され、その足枷に付いた鎖の先に逃亡防止用の鉄球が付けられる。重さ１０キロもある鉄球が両足に付けられ、凛津は歩くのにも難儀した。そして、そこへ凛津の大好物のショートケーキを、この屋敷の執事が運んできた。

「ちょーとけーき」

凛津は思わず声を出していた。

「さあ、食べてください」

凛津は、お預けをいわれていた犬の様にショートケーキにかぶり付くと、あっという間に食べつくしお皿まで綺麗に嘗めていた。

「ありがとうございまちゅ、おいちいでちゅ」

凛津は、またショートケーキが食べられて感激していたが、凛津がもう少し大人だったら、これは何かがあるに違いないと疑ってかかるところである。幼い凛津は何も気付かなかったが、その方が幸せだったのかもしれなかった。

お迎えの者をあまり待たせてはいけないので、凛津は急いで目隠しされ台車に乗せられ玄関まで運ばれる。そこには大きな黒塗りの車が停車していた。車に詳しい者なら、その車がベントレーで超高級車であると気付くが、凛津は目隠しされていなくとも車の事はまったく分からない為に、相手がどれ程の富豪なのか想像することも出来なかった。凛津は全身をビニールシートでぐるぐるに巻かれるとトランクに詰め込まれた。そして、凛津を積んだベントレーは走り出していく。行き先を知っている者は、地獄に向かって走って行くように見えるが、何も知らない凛津は、初めてこんな高級車に乗せられ無邪気に感激していた。

しばらく走ったベントレーは大きな門を通り抜け、広い庭園の駐車場に停車する。そして、トランクが開けられ凛津が降ろされた。

「久しぶりね、メスガキ」

その声に聞き覚えがあった凛津は、体をビクッと震わせる。

「貴方の声を聞いただけで震えているじゃない、何をやったの？」

「ご挨拶がわりに少しお仕置きしただけですよ、お姉さま」

凛津を出迎えに出て来ていた二人の姉妹の会話に、凛津は過去の記憶が甦り震えていた。凛津は目隠しされて見えないが、姉妹は二人とも全裸で股間に重りをぶら下げ、名札も股間に付けていた。年長の方が葉月、年下の方が睦月と書かれている。全裸に赤いハイヒール、股間に名札を提げた姿は、妙にエロチックに感じられた。

「さて、さっそく準備しましょうか」

葉月は、隣に控えていた男に、台車に乗せた凛津をガラガラと運ばせ、庭園の中心部にある野外調教用の舞台に降ろす。そして、凛津の足枷を外し、ロープを巻くと逆さに吊り上げた。凛津はYの字の形に吊り下げられた。姉妹が、周囲のゲストには聞こえない様に小声で話していた。

「両腕がないと楽で良いわね」

「お姉さま、このガキ殺してもいいのですか」

「殺すのは駄目ね。法外な違約金取られるわ」

「うちでも支払えない程ですか？」

「払えなくはないけど、こんなガキの為に支払うのはちょっとね」

「そうですか…」

「そんな顔しないの、睦月。死んでなきゃ良いのよ。先方に返した時に心臓が動いてればOK。その後すぐに死んでも知ったことじゃないわ」

残酷に笑う葉月に、睦月は、さすがお姉さまと笑顔になった。

その頃、舞台の周りに誂えた特設のゲスト席には、大勢のゲストが座り、飲み物を飲みスイーツを頬張りながら寛ぎ始めていた。全員、全裸でマスクを着けている。男女比は3：7で女性の方が多く、そのため周囲には高級な香水の香りと、早くも濡らしている性器の匂

いが漂っていた。

「ほお、今回の奴隷はずいぶん幼い感じだな」

「これなら、あまり教育費もかかってないだろうから、殺すところまでやってもらえるのかしら？」

「これだけ幼いと耐えられるのか心配だわね」

「すぐ死んじゃうと面白くないからねぇ」

「幼い割には、両腕切断に焼き印とか、かなり調教されてるようね。これは楽しみだわ」

「手違いという事で、殺してくれないかしら」

「こんなガキ、殺してもいいと思うけどね」

「このガキが、どんな目にあうのか楽しみで仕方ないわ」

物騒な会話が凛津の耳に次々と入り、凛津は恐怖で震えが止まらなかった。ここにきて、さようならの意味が分かったような気がして、凛津は泣き出していた。

・・凛津、ここで殺されちゃうの？・・

少し前の幸せな気持ちが思い出されて、凛津は号泣しだした。

「ずいぶん泣いてるけど無様でいいわね」

「早く、泣くことも出来ない程痛め付けてほしいわ」

「これだけ泣くって事は、自分がどんな目にあうか分かっているのかしら。ククッ、楽しみね」

ゲストの面々は、早く幼い凛津が拷問されないかと待ちくたびれていた。

12、惨劇の始まり

12、惨劇の始まり

凛津は開脚逆さ吊りにされ号泣していた。凛津は目隠しされ見る事は出来ないが、大勢の人の気配がする。その人々の話し声が凛津の耳に入ってくるが、そのどれもが早く凛津を拷問し殺してしまえというものだった。

・・許してください。まだ、凛津を殺さないで・・

凛津は、そればかりを祈るが、凛津を拷問処刑する準備は着々と整えられていく。まず、凛津の着ているスクール水着の股間部が切り裂かれ幼い性器が剥き出しにされる。

「クリトリスの周りの包皮は切除されてるけど、意外に綺麗なマンコだわ」

「早くぐちゃぐちゃにしたいですね、お姉さま」

姉妹は顔を合わせて、にっこりと笑う。

「まずは鞭でマンコ打ち付けていこうかな」

「お姉さま、今日は優しいですね。いつもはいきなり酷い拷問をしていきますのに」

「まだガキだからね。いきないやったらすぐ死んでしまいそうだから徐々に進めていくわ。それでも、もしこのガキが死んだら、睦月、あんたを売却して違約金支払うわ。だから、安心して殺せるけど、すぐ死なれたら詰まらないからね」

「お姉さま。私を売却？」

「そうよ。もう業者にも連絡してあるわ。睦月なら高く売れそうで嬉しいわ。大丈夫よ。このガキ殺したりしないから、私を信じなさい」

「きょ、今日、私の足に付けてくれた足枷って、まさか…」

「そう、それは逃亡防止のリモート爆弾。あなたがもし逃げようとしたら足を爆破出来るようにね。まあ、あなたがそんな無様なまねするとは思わないけど念のためね」

睦月は、妹の自分でさえも只の物としか思っていない葉月に恐怖したが、その悪魔のような残酷な姉を尊敬もした。

「も、もちろん私はお姉さまを信じています。もしお姉さまがミスしても私が高く売れるのなら良かったです」

「そんなに震えなくても大丈夫よ、睦月。それより、このメスガキ、子宮の中に拷問具を注入されているらしいわ。このリモコンで動作するのよ」

「子宮の中に？」

「そう。なかなかハードなこともされてるようだから結構耐えられると思うわ。だから、子宮も取り出して切り裂いてみましょうよ」

睦月は自分の足首に付けられている足枷を見る。それは、とても外せそうにないし、これが爆弾というのも間違いなく本当だろう。睦月は、今まで自分は処刑する側の人間だとばかり思っていたが、今日の状況によっては自分が処刑される側になる。その生まれて初めての感情に抑えようとしても足がガクガクと大きく震えてしまう。

「ちょっと、睦月。お客様の前で何惨めな姿晒してるの。しっかり出来ないなら、このガキの代わりにあんたを処刑するよ」

「い、いえ、お姉さま。これは武者震いですよ」

弁解する睦月だったが、そう言いながら睦月は、なんと失禁してしまっていた。睦月の股間から透明な液体が溢れだしている。睦月は慌てて止めようとするが、一度漏れ出してしまった尿は止めることが出来ず、太ももを伝い足元を濡らしていく。

「もう、いいわ、睦月。がっかりね。あんたもこれから処刑する」

「えっ、ちょっと、お姉さま…」

慌てる睦月を他所に葉月が指を鳴らすと屈強な男が二人現れ、葉月の前に膝まづく。

「睦月を、このガキと同じように吊るしてもらえるかしら」

「お姉さまっ！！　御冗談ですよね」

「もう煩いから口も塞いどいて」

「お姉さ……、むぐぅ」

睦月は口枷を嵌められ、腕を後ろ手に縛られ開脚逆さ吊りにされる。睦月は、信じられないという顔で宙を見つめていたが、そのうちに泣き出していた。

「ああ、鬱陶しい。目隠しもしといてもらえるかしら」

葉月の命令で男たちは、吊るされて泣いている睦月の頭を押さえぐるぐると黒い布を巻き完全に目隠ししていく。

「皆さま、今日は趣向を変えて睦月の処刑も執行します。私がこのメスガキの拷問を担当しますので、睦月の処刑をやってみたいという方はお手持ちの端末から金額の入力お願いします。最高額の入力をされた方、二名に睦月の処刑執行をお願いします。もちろん、睦月の方は殺してしまっても構いませんのでお気軽に入札お願いします」

葉月の言葉でゲストの間でざわめきが起きる。

「睦月ちゃんを処刑していいの？」

「えぇーっ、私、是非やりたい」

「なんか、今日いる人はラッキーだよね」

「殺していいなんて最高じゃない、私もやりたいわ」

「僕も是非、睦月ちゃんを処刑したいけど、いくら支払えばいいんだろう？」

「こんな若くてきれいな娘を処刑出来るなら、お金は惜しまないわ」

様々なゲストの話し声が耳に入り睦月は、もう確実に自分はここで殺される。しかも、ただ殺されるのではなく残酷に地獄の苦痛を味わわされながら殺されていく。睦月は、恐怖で過呼吸になり口枷を嵌められた口から泡を吹きだした。

「なに、この女、みっともない。メスガキの方がしっかりしてるじゃない」

葉月は、睦月の顔面を蹴り上げた。

「ぶぼっ」

睦月は鼻血を出して泣きながらぶらぶらと揺れている。

「それでは入札結果が出ましたので発表します。４２番の男性と６９番の女性に決定しました。それではお二人、前へ。よろしくお願い致します」

二人の男女が前にでる。

「それでは予定通り、性器の鞭打ちから始めましょう」

葉月は二人に鞭を渡すと、どうぞ遠慮なく思い切り打ってくださいとニコリと笑う。凛津と睦月の地獄が始める。

13、惨劇の時間

13、惨劇の時間

開脚逆さ吊りにされた凛津の剥き出しの性器に鞭が激しく叩き込まれる。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

性器への鞭打ちは何度も経験している凛津だが、その痛みに慣れる事はなく、さらに拷問に慣れている葉月は正確に凛津の性器の割れ目に鞭を叩き込んでくる。

「だじげでぇぇぇーーーーっ」

凛津が激痛に身をよじり絶叫するが、隣で吊るされている睦月の方はまだ性器鞭打ちが開始されていなかった。執行役の二人は睦月の股間を覗き込んで何かしているようだった。そして、ようやく準備が終わったようで二人は鞭を手に持ち位置につく。二人が何をしていたかは巨大なモニターに映し出され、ゲストから感嘆の声が漏れる。睦月は小陰唇をクリップで挟まれベルトで引かれ、くぱぁと拡げられたままにされていた。睦月の性器の中身、尿道口や膣口がモニターにくっきりと映し出されている。

「おおっ、あの状態で鞭打つのか。楽しみだな」

「いいねぇ、最高だね」

「あれで打たれたらマンコ血だらけになるわね」

「睦月ちゃん、自分がやられる側になって本当は嬉しいんじゃないの」

「これから、あの睦月ちゃんが処刑されるかと思うと興奮するわ」

そして、鞭を構えた女が睦月のぱっくり拡げられた性器に狙いをつける。

「ふふっ、ファンだった睦月ちゃんのぱっくり開いた桜色の可愛いマンコに鞭を叩き込めるかと思うと興奮するわ。それに、殺していいって言われてるから、きちんと残酷に殺してあげるね。そうそう私の名前は沙也加っていうの、死ぬまで覚えててね」

沙也加は楽しそうに鞭を思い切り睦月の開いた性器に叩き込んだ。

「ひゃぶぅぅぅーーーーーっ」

絶叫する睦月の性器から血が飛び散った。血を見て更に興奮した沙也加は続けて嵐のように睦月の性器に鞭を叩き込む。

バシィバシィバシィバシィバシィバシィ

「おばぁ、おばぁ、おばぁ、おばぁ、おばぁ」

口を塞がれても響き渡る睦月の悲鳴と、性器から血が飛び散る。

・・あらら、素人にしてはやるわね・・

葉月は横目で沙也加を見て感心する。鞭で性器を打ってからは好きなように処刑していいと伝えてある。どんな風に睦月を処刑するのか葉月も興味津々だった。そして、睦月のトドメは最高入札者の男がすることになっている。その方法を男から聞いた時、葉月は、成程男しか考えつかないなと、それも感心した。もちろん、その方法で睦月にトドメを刺す事は許可してある。それをやられて睦月が生きていられる筈がない。完全に絶命する。葉月は、睦月の最後の瞬間を想像し興奮していた。

・・さてと、私もこのメスガキを痛めつけて楽しんでもらわないとね・・

葉月は、直径１０ミリ長さ６０センチの表面がヤスリ状に加工されているニードルを手にすると笑みを浮かべる。

・・性器鞭打ちなんて誰でも普通にやってる事だからね。普段、見れないものを披露してあげないと来てくれたゲストの皆様に申し訳ないからね。死ぬ直前まで破壊して痛めつけてあげるよ、メスガキ。ここからが地獄だよ・・

葉月は左手で凛津の性器を拡げ尿道口を確認する。そして、ニードルの切っ先を凛津の尿道口に当て、少しづつわざとゆっくりと突き刺していく。

「あびゃぁぁぁっ、いだいぃぃぃーーーーっ」

葉月は、ニードルで凛津の尿道を裂きながら、ニードルを回転させ尿道を削り取り、凛津の尿道を徹底的に破壊していく。その時、睦

月の処刑担当の男が葉月に、睦月の口枷を外す許可を求めてきた。

「せっかくだから睦月ちゃんの泣き叫ぶ声聞きたいんですが」

もちろん葉月は高額入金の男の要望は許可する。男は、性器を鞭打たれ続けている睦月の口枷を外した。その途端、睦月が絶叫する。

「いだぁぁぁーーーーーっ、だじげでぇぇぇーーーーっ」

無様に大声で泣き喚く睦月に、沙也加は葉月と同じニードルを手にする。

「ふふっ、睦月ちゃん、今度はニードルでおしっこの穴と膀胱壊してあげるね。いつも睦月ちゃんがやってる事だから分かるよね」

「やめでぇぇっ、ゆるじでぇぇーーーっ」

「ダーメ!!　どんなに泣いても許してもらえる訳ないでしょ」

「おねがいじまぢゅ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃ」

「無様だねぇ睦月ちゃん。もう、睦月ちゃんは助からないんだよ」

沙也加は一度ニードルを置くと、睦月の頬を思い切り平手で打つ。

パーン!!

乾いた音が響き睦月の頬が赤くなる。そして、沙也加は男に睦月の頭を押さえてくださいと頼み、男ががっしりと睦月の頭を押さえたのを確認し連続で睦月の頬を打つ。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン

睦月の頬がたちまち腫れあがる。そこで、沙也加と男が入れ替わり、今度は沙也加が睦月の頭を押さえ、男が睦月の顔面を容赦なく殴りつける。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ」

睦月の顔は、鼻が折れ前歯も折れ腫れあがりぐしゃぐしゃになっていく。そして、沙也加と男は、睦月の性器と胸を同時に拷問していった。男は睦月の形の良い胸にニードルを貫通させていく。それも、二本や三本ではなく２０本以上のニードルで二つの胸の膨らみを無惨に貫通させられた。そして、男は睦月の桜色の乳首にカッターを当てると、乳首を縦に切り裂いていく。さらに十字に乳首を切り裂き、ライターで炙り始めた。しかも、沙也加は睦月の尿道にニードルを突き刺し、そのまま膀胱を串刺しにしている。

「ほーら、睦月ちゃん、痛いよねぇ。でも、一本で終わるなんて思わないでね」

沙也加は二本目のニードルを取ると、すでに一本目のニードルで裂けてしまっている睦月の尿道に二本目のニードルを無理矢理突き刺していく。

「あぎゃぁぁぁーーっお姉ぢゃまぁぁもうゆるじでぐだぢゃいぃぃーーっ」

葉月がチラッと睦月の方を見て、笑みを浮かべながら沙也加に近付く。

「睦月が何言おうと構わないから、皆さんが喜ぶように残酷に処刑してくださいね」

「もちろんです。葉月様。私も楽しませてもらいます」

沙也加は三本目のニードルを睦月の尿道に突き刺していく。男の方も睦月の乳首を黒こげにしていった。

「睦月ちゃん、マンコと胸、同時に責められて最高ね」

「メスガキの方は腹から三本もニードル突き出てるわよ」

「私も睦月ちゃん処刑したかった。あの二人、いくら出したのかしら」

「睦月ちゃんはマンコ、ぐちゃぐちゃにして殺して欲しいわね」

「メスガキも、これ拷問じゃなくて処刑だと思うけど」

ゲストたちは、思いがけず凛津と睦月の処刑が見られる事に興奮していた。

１４、処刑される睦月（前書き）

新年早々酷い話ですいません。

睦月が処刑されるシーンばかりですので、苦手な方は読まないようお願いします。

１４、処刑される睦月

１４、処刑される睦月

睦月は尿道から5本のニードルを突き刺され膀胱を無茶苦茶に串刺しにされ破壊され、二つの胸の膨らみもニードルを２０本以上貫通され乳首は切り裂かれたうえ黒焦げに焼かれていた。そして、真っ黒に焼かれてしまった乳首は、少しずつ削り取られ、睦月の胸から消滅してしまった。

「だじげでぇぇぇーーーーっ、もおいやぁぁぁーーーーーーっ」

哀れに泣き叫ぶ睦月だったが、処刑は休みなく進行していく。

「ふふふっ、睦月ちゃん。これから本格的に睦月ちゃんのマンコ処刑していくね」

沙也加は、もう興奮して嬉しくてたまらないという風に睦月の性器をくぱぁと開ける。早く睦月の性器を破壊したいのを必死に堪えている感じであったが、右の小陰唇を摘まむとビローンと引き伸ばす。

「睦月ちゃん、綺麗な桜色の小陰唇ね。すぐ切除しちゃったら勿体ないから短冊切りにしてあげるね」

沙也加は引き伸ばした睦月の小陰唇を錆び付いた鋏で5ミリ幅の短冊切りにしていく。

「いだぁぁ、いだいよぉぉぉーーっ、ゆるじでぇぇーーーっ」

しかし、沙也加は睦月の左の小陰唇も引き伸ばし短冊切りにしていった。そして、今度は睦月のクリトリスに狙いをつける。そして、彫刻刀を使い少しずつ慎重に削り取っていく。睦月の小さな突起は残酷に削り取られ睦月の股間から消滅した。同時に男は釘打ち機を持ち睦月のツルツルの恥丘に当てスイッチを押す。

バスッ

睦月の恥丘の中心に釘が深く打ち込まれる。

バスッバスッバスッバスッバスッ

いったい何本の釘を打つのかと思われるほど睦月の恥丘、そして、ビキニラインに釘を深く打ち込んでいく。そして、打ち込んだ釘に電線を巻き付けると容赦なく電流を流していき、それをどんどん強くしていく。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

睦月は開いた口から舌を突き出し白目を剥いている。

ぶりっぶりっぶりっぶりっ

体に電流を流されブルブル震える睦月は大便まで漏らし始めた。

「あら、汚い。こっちの穴も壊しとかないとね」

「いやだぁぁーーっもおゆるじでぐだぢゃいぃぃじんじゃうぅぅーーっ」

「あらあら、睦月ちゃん。分かってるでしょう。睦月ちゃんは処刑されるの」

沙也加は苦しむ睦月に残酷に告げると、真っ赤に焼けた鉄パイプを手にし、睦月の肛門に狙いをつけ躊躇なくズブズブと押し込んでいく。３０センチ以上押し込まれ睦月の肛門や直腸の焼け焦げる臭いが漂う。

「ひぎゃぁぁぁーーーーっじぬうぅぅーーーっ」

「トドメを刺すのは僕だからね。まだ、殺さないよ」

男は電流の強さを更にあげる。

「あばばばばばばばばばばばばばっ」

ようやく電流を止められた睦月の膣に膣鏡が挿入され大きく拡げられる。膣の奥に子宮が確認される。

「ひゅう、ひゅう」

睦月は大きく息をを吸い込みながらも、まだ体が細かく痙攣している。

「子宮に詰めたい物があるから、子宮頚部切り取るね、睦月ちゃん」

沙也加は楽しそうにメスと鉗子を持つと睦月の拡げられた膣に鉗子

を入れ子宮を挟みメスを当てる。そして、睦月の子宮頚部をスパッと一気に切り取った。睦月の子宮は頸部を切り取られ大きな穴が開いている。沙也加は、ニヤリと笑うと鉄箸で何かつまみ上げた。

「おお、これは前に見た事あるが、また見られるとは最高だ」

「膣じゃなくて子宮に入れるのよね。これは睦月ちゃん死ぬわね。楽しみだわ」

「私も前に見たけど、子宮の中に入れるなんて最高」

「もう、焦らさないで早く入れて欲しいわ」

「どんな無様な姿を晒してくれるのか楽しみ」

ゲストが注目するなか沙也加は着火してある備長炭を睦月の子宮の中に落とす。

「あっびゃぁぁぁーーーーーっ」

絶叫する睦月に構わず沙也加は、どんどん備長炭を睦月の子宮に押し込んでいく。肉の焼け焦げる臭いが辺りに漂う。

「おびゃぁぁぁーーーーーっ」

体の中を高温で焼かれ睦月は断末魔の悲鳴を上げる。沙也加は、さらに団扇で睦月の子宮内の備長炭を扇ぐと高温になった炭が火を噴く。

「膣から火噴いてるって凄い図だな」

「あははっ、もう睦月ちゃん間違いなく死ぬわね」

「逆さ吊りにされてマンコから体の中焼かれて死ぬなんて最高じゃない、睦月ちゃん」

そこへ男が沙也加に待ったをかける。

「トドメは私がするので、その辺で止めてもらえますか」

「あら、ごめんなさい。つい興奮してしまって失礼しました」

沙也加は、睦月の性器から噴き上げている火に水をかけて消火すると男に譲った。男は気絶している睦月の顔面を殴りつけ覚醒させ、手に持った器具を見せる。

「睦月ちゃんなら、これが何かわかるよね」

男は笑みを浮かべて言うが、睦月の顔は強張る。

「頭蓋穿孔器……」

「何に使うかも分かるよね」

「いやだぁだじげでぇぇぇーーーっおねがいじまぢゅうぅぅぅーーーっごろざないでぐだぢゃいぃぃーーーっ」

泣き喚く睦月に構わずに男は器具を睦月の頭に装着していく。そして、スイッチを入れると穿孔用ドリルが回転を始める。それは、段々と睦月の額に近付いていき頭蓋骨に丸い穴を開けた。

「あがががががががっ」

睦月の額にカパッと丸い穴が開き、男が睦月の前に立ち、睦月の頭を押さえ付ける。

「皆さん、御注目。どうやら睦月の最後の時が訪れたようです。お見逃しのないようお願いします」

葉月が手を止めて声を張り上げる。どちらを見ようかと迷っていたゲストも一斉に睦月の処刑に注目する。

「脳姦か、私は観たことがなかったから、ここで観られるとは嬉しいな」

「睦月ちゃん、頭の中もグチャグチャにされるのね。興奮しちゃう」

「あの睦月ちゃんが、こんな無様に処刑されるなんて、私、イッチャいそう」

「睦月ちゃんの処刑を観られるなんて、その幸運には感謝しかないな」

ゲスト全員が息を呑んで見つめる中、男は自分の硬く勃起したモノを睦月の額の穴に当てる。

「嫌だぁぁーーっ!!　ゆるじでぇぇーーっ!!　だじげでぇぇーーーっ!!」

しかし、男は容赦なく睦月の額の穴に自分のモノを突き入れていく。

「だれがぁだじげでぇぇーーっ！！　いっじょうどれいになりまずがらぁぁーーーーっ！！　おねがいぃぃーーーーっ！！」

それでも、男は構わず自分のモノをズブズブと睦月の頭の中に突き入れていく。そして、とうとう根元まで睦月の頭の中に入れてしまった。睦月の表情が硬直したように動かなくなる。逆さ吊りにされ腕も後ろ手に縛られ抵抗出来ない睦月に最後の時が訪れた。性器破壊の激痛に、なんとか耐えてきた睦月だったが、頭に男の性器を突き入れられ、もう耐えようもなかった。そして、男は睦月の頭を押さえたまま激しく腰を振る。

「あっびゃゃゃーーっ！！　ぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！」

睦月は白目を剥いて涙を流し意味不明の声を出しながら頭の中を犯され続ける。体はビクンビクンと大きく痙攣を始め、口からはだらしなく涎を垂れ流していた。男は、逆さ吊りの睦月の頭を激しく犯し続ける。そして、男は左手で睦月の頭を押さえながら右手で持ったアイスピックで睦月の性器をグサグサと突き刺していく。

「ハァハァハァハァハァ」

男の興奮は頂点に達していく。もう、睦月は脳をグチャグチャに犯され哀れにも物言わぬ物体と化していた。

「うっ」

激しく腰を動かしていた男は小さく声を出すと睦月の頭の中に射精した。しかし、それでも男は自分のモノを抜こうとはせず、今度は睦月の頭の中に放尿し始めた。睦月の目・鼻・口・耳から男の小便

が溢れ出る。

「うわぁ、睦月ちゃん、頭の中におしっこされてるの。最高」

「あの可愛い睦月ちゃんが頭からおしっこ流して死ぬなんて無様で良いわね」

「僕も睦月ちゃんの頭の中におしっこしたいよ。羨ましい」

その声が聞こえたのか、睦月の頭を犯していた男は、睦月の頭から自分のモノを抜いた。

「僕からのプレゼントです。もう睦月ちゃん死んでますけど、それでもよかったらご自由に彼女の頭を犯して放尿してもいいですよ」

すると、途端に希望者が殺到し行列が出来る。睦月は死んでからも頭を犯され続け、頭の中に精液と小便を放出され続けた。

そして、最後の男が睦月の前に立つ。その男は睦月の取り巻きだった男だった。

・・ああ、あの怖い睦月様が泣き喚きながら無様に処刑されるなんて最高ですよ。しかも、睦月様の頭の中を犯せるなんて感無量です・・

男は、これ以上ない程硬く勃起した自分の性器を睦月の頭にねじ込む。

・・あっあっ、僕は今本当にあの睦月様の頭を犯しているんだ。あっあーーっ・・

絶頂に達した男は睦月の頭の中に大量の精液を射精する。そして、やはり大量の小便を放尿した。睦月の目・鼻・口・耳からドボドボと小便が溢れ出す。ようやく睦月の頭から男が性器を抜くと、睦月の額の穴からドボドボと小便と精液、グチャグチャにされた脳と脳漿が流れ出て地面に溜まっていく。

「じゃあ、最後の仕上げは私にやらせて下さいね」

沙也加が男の前に進み出る。

「えっ、まだ何かするつもりですか？　もう彼女はとっくに死んでますよ」

「ええっ。でも、折角だから睦月ちゃんを真っ二つにしてあげようと思って。いいですよね、葉月さん？」

「構いませんよ。お好きなように」

葉月から許可をもらった沙也加はチェーンソーのエンジンをかけた。

「生きてる時ならノコギリでゆっくりと真っ二つにするのが最高だけど、もう物と同じだからこれで簡単にいきます」

沙也加はチェーンソーを睦月の股間に当てると、一気に頭まで真っ二つに切り裂いた。睦月の体は内臓を撒き散らし、左右別々に吊られたまま哀れにもブラブラと揺れていた。

１５、凛津、無惨

１５、凛津、無惨

凛津は、開脚逆さ吊りにされ拷問を受けていたが、それが中断され不審に思った。この後、何か恐ろしい拷問を行う為の準備をしているのではと考え震えていた。

・・怖いよぉ、凛津、死んじゃうの・・

目隠しされた凛津は、近くで行われている睦月の処刑を見る事は出来ないが、睦月の泣き叫ぶ声が耳に入ってくる。必死に許しを乞いながらも処刑されていく睦月の声が、断末魔の絶叫の後、聞こえなくなりゲストたちの笑い声が広がっていく。

・・処刑されてた女の子、死んじゃったんだ・・

その場の雰囲気から凛津は、敏感に睦月の最後を感じ取っていた。あの泣き叫び方から相当酷い処刑をされて最後を迎えたのだろう。凛津は、ニードルで尿道から膀胱を串刺しにされ腹から切っ先が突き出る処刑をすでに受けていたが、そんな処刑などまだ序の口だと思わざるを得なかった。

・・もう、凛津を殺していいですから痛くしないでください・・

凛津のそんな小さな願いも叶えられる事はなく、葉月はスクール水

着を切り裂いて剥き出しになっている凛津の性器を拡げたままクリップで固定する。そして、凛津の膣前庭窟に固形燃料を塗り付け火を点ける。

「あっぢゃぁぁぁぁーーーーっ！！！　あぢゃあぢゃあぢゃあぢゃぁぁぁーーーーっ！！！」

凛津の性器が燃え上がり、尿道に突き刺されたままのニードルも赤く熱せられ、凛津は体の中からも焼かれ始めた。そして、凛津の着ているスクール水着とサイハイソックスにも火が燃え移る。

「あっぢゃぁぁぁぁーーーーっ！！！　だぢゅげじぇぐぢゃぢゃいいいいーーーーーーっ！！」

全身火だるまになり凛津は泣き叫ぶが、葉月やゲストたちは楽しそうに笑って見ているだけだった。

「ぢぬぅぅぅーーっ！！　だぢゅげぢぇぇぇーーーっ！！」

その、のたうち回る凛津に消火剤が吹き付けられ、凛津の全身の火が消化された。

「皆さま、残念ですがまだこのメスガキを殺すわけにはいきませんので、ここで消化させていただきます」

葉月が謝罪しながら、釣りに使用する三本針を巨大化したような凶悪な針をゲストに見えるようにモニターに映す。

「この三本針をメスガキの子宮に挿入します。子宮口を切開して子宮に挿入して針をかけ抜けないように致します」

葉月は、手慣れた様子で凛津の膣に膣鏡を入れ膣を大きく開くとメスで凛津の子宮を切開し、三本針を凛津の子宮に引っ掛ける。そして、針に付いたロープを引き、針が抜けない事を確認すると、そのロープを上方にある金具に通しピーンと張っていく。葉月は、次にケーブル類を束ねる為に使用する太い結束バンドで凛津の太ももの付け根をきつく締めていった。凛津の両足の太ももは結束バンドが激しく食い込み血流が止められてしまっていた。

「もう、皆さんにはこれからこのメスガキが何をされるか、お分かりかと思いますが一応説明させていただきます。まず、このメスガキの両足を太ももから切断します。すると、このメスガキは子宮に突き刺さる三本針だけで吊るされる事になります」

葉月の説明に、再び会場が盛り上がり始まる。

「〝子宮吊り〟か。それは楽しそうだ」

「子宮が抜けるか、千切れるまでやってもらいたいな」

「子宮だけで吊られるなんて想像しただけで濡れてしまうわ」

「わ、私もやられてみたいかも。あのメスガキ羨ましいわね」

「あのガキ、体重軽そうだから、どんどん重り付けてほしいわね」

「子宮抜きは最高ね。子宮抜いた後、このガキも処刑してほしいわ」

「子宮抜いた後、このガキの頭も犯したいな」

葉月は、男の声が耳に入りほくそ笑む。

・・このガキも需要ありそうだわ。違約金支払っても、それ以上の物が入りそうね・・

葉月は頭の中で素早く計算し、凛津を処刑して息の根を止めてしまう事に決めた。そして、すぐに凛津の頭を犯す権利を入札してもらい、とどめを刺す男を決定した後、電動チェーンソーで凛津の太ももを切断し始める。

「うんぎゃぁぁーーーっ！！！！」

凛津の絶叫と血と肉片が飛び散り太ももは切断されてしまう。そして、もう一方の太ももも、まるで木の枝でも切るように簡単に切断されてしまった。凛津は子宮にかけられた三本針だけでブラーンと吊るされてしまう。

「最後のトドメの前にこのメスガキの子宮を抜き出す為に重りを下げていきます。いったいどれ位の重りで子宮が抜けるのかお楽しみ下さい」

葉月が楽しそうに凛津の肛門にU字型の金具を突き刺し重りをぶら下げていく。５キロ、１０キロ、１５キロ。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーっ！！！」

凛津の、膣口からピンク色の子宮が顔を見せていた。そして、さらに重りが追加される。２０キロ、３０キロ、４０キロ。

「んぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ！！！」

ビローンと子宮が引き摺り出され凛津が絶叫する。もうすぐにでも子宮が抜けるか千切れそうな状態だった。葉月がさらに重りを追加すると……。

ズボウゥ！！

子宮が凛津の膣口から飛び出し、凛津の体が落下する。

「あぎゃ」

凛津は頭を地面に打ち声をあげ、子宮は卵管は千切れブラブラと揺れていた。葉月は、その子宮を切り裂き中から針の付いた球体を取り出した。

・・ほう、けっこうな数が入れられているな。この拷問具は面白そうだから貰っておくか」

「さてと」

葉月は、あんこうを吊るすのに使用する巨大なギャフを凛津の膣に突き刺し下腹部まで突き通す。そして、ギャフに付いたロープで凛津の体を吊り上げていった。凛津は今度は性器からギャフで逆さ吊りにされる。凛津の最後の時が近付いてきた。葉月は、凛津の額、左右の側頭部、後頭部にそれぞれ穿孔具で穴を開ける。凛津は頭蓋骨に穴を開けられ、いよいよ自分の最後を悟り必死に許しを乞う。

「おねがいちまちゅ、りちゅをたちゅけてくだちゃい」

しかし、葉月は先程選考した４人の男を呼び凛津の四方に立たせる。

「それでは、皆さんで一気に4ヶ所からメスガキの頭を犯してください」

「おねがいでちゅ、おねがいでちゅ、りちゅをたちゅけて」

男たちは凛津の言葉など聞こえないように、凛津の頭蓋骨に開けられた穴に自分のモノを突き当てる。

「ああ、そうだ。少し待ってくださる」

葉月は男たちに告げ、凛津の顔を覗き込み、凛津の目隠しを解いていく。

「もう、あなたはここで終わりだから私の顔を見せてあげるわ。それと、ほらあそこで揺れてる物を御覧なさい」

凛津は、葉月の綺麗な顔に驚く。とても、こんな残酷な処刑をするような女性には見えなかったが、その後ろで揺れている物が何か分かった時恐怖で叫び出した。

「あらあら、そんなに驚かなくてもいいでしょう。どう、真っ二つになった睦月も可愛いでしょう」

「いやぁこわいでちゅう。りちゅちにたくないでちゅ。ゆるちてくだちゃい」

「ふふ、お喋りはお終い。さよなら」

再び男たちが凛津を取り囲む。目の前に迫る男の性器を見て凛津は、

これから自分がどんな目にあうのか嫌でも頭に浮かんでしまう。

・・いやだ、そんな事されたら凛津死んじゃう。痛い事我慢するから凛津を許して下さい・・

凛津は、恐怖で硬直してしまい思ったことが言葉に出来なかった。
それでも必死に言葉を絞り出す。

「たちゅけて、おねがいしまちゅ。りちゅ、なんでもちゅるから…
…」

凛津の口が開いたまま止まり、大きく見開いた目から涙が零れ落ちる。凛津は四方から頭に男の性器を突き入れられていた。

「あっぴゃぁぁーーーっあばばばばばばばばばばばばばばばばばばばっ」

まるで空気が抜けるように凛津の口から意味不明の最後の音が漏れる。男たちは凛津の頭を犯し続け、凛津の頭の中に激しく射精した。
そして、4人とも凛津の頭の中に放尿する。凛津の目、鼻、耳から尿が溢れ出した。

「皆さん、近いうちに素人の女子中学生2体を入手出来ますので、御期待下さい」

葉月が最後にゲストの面々に次の予定を告げる。

「さすが葉月さんだ。次々に確保してくるなんて素晴らしい」

「私も、葉月さんのこの催しが一番の楽しみなので、嬉しいわ」

また、すぐに次の催しがあると知り一同は葉月に喝采を送った。

その後、凛津は首から切断され頭をガラスケースに入れられると、恐怖で硬直した最後の表情のままオブジェとして飾られ好評を博していた。

１６、処刑執行、順子と結衣（番外編）（前書き）

今回は、他の作品の女の子が処刑されるお話です。
本編とは関係ありませんので、ご了承ください。

１６、処刑執行、順子と結衣（番外編）

１６、処刑執行、順子と結衣（番外編）

橘理津子から、姫野順子と柏木結衣、２人の身柄を譲り受けた葉月は、また拷問と処刑が楽しめるのかと思うと自然と笑みが零れてくる。

「ふふ、くそ真面目な橘にしてはなかなか気が利く。今度こちらからも礼を返さんとな」

葉月は、さてこの２人どうしようか。考えれば考えるほど楽しくて仕方がなくなる。しかし、素人の中学生となると気を付けて拷問しないと処刑する前に死んでしまう可能性も大きい。葉月は今までにない楽しさで興奮していた。

「軽い拷問から慣らしていくしかないわね。性器は普通に使えない程壊してあるようだけど子宮は、まだ抜き取られていないみたいだからね。もう発狂しちゃってるようだから案外いけるかもね」

葉月が色々妄想しながら自慰に耽っていると、来客があったようでドアにノックがあり執事が入ってくる。。

「神楽坂様が、お目にかかりたいと見えています」

「神楽坂？　どなた？」

「睦月様を処刑なさった女性でございます」

「ああ、あの時の」

部屋に入ってきた沙也加は、素っ裸でソファに寝転ぶ葉月を見てギョッとしたが、即座に膝を折り頭を下げる。

「何の用かしら」

「はい、今度処刑執行される人数も2人だと仰ってましたので私で良ければお手伝いさせていただけないかと思いまして。これはほんの詰まらないものですが」

沙也加は持っていたバッグから上等な和紙で包まれた紙包みを手渡す。葉月は紙包みの中身を確認し、満面の笑みを浮かべる。

「いいわ、神楽坂さん。あなたにお願いするわ。日時はおって連絡するので宜しくお願いしますね」

沙也加は、はいと恭しく頭を下げ退出していった。

★　★　★　★

今日も盛況だった。これまでと違い逆さ吊りではなく拘束台の上に仰向けに拘束された順子と結衣は、手足胴を何か所も厳重にベルトできつく拘束され、大の字の状態で身動き一つ出来ないように固定されていた。

「さて、今日はせっかくの中学生女子であるので、犯したい方がいればご自由に犯してください。ただ、性器は拷問されて壊されているので具合が良くないかもしれませんがご容赦くださいね」

あっという間に順子と結衣の股間と頭の前に列が出来る。男性だけでなく、腰にペニスバンドを装着した女性の姿も多かった。性経験がほとんどないうちに性器を破壊されてしまった中学生の順子と結衣は喉と肛門の経験もなかったが集中的に犯されまくる。発狂してしまっているため口を閉じられないように開口ギャグが装着された口を、頭を押さえ付けられ喉の奥の奥まで突き入れられ射精される。女性の場合は、胃まで届くのではと思われるほど巨大なペニスバンドで順子と結衣の喉の最奥まで容赦なく突き入れ腰を動かしている。無茶苦茶に喉を犯されている順子と結衣は口から血を流し始めていた。

「おびゃおびゃおびゃおびゃ」

涙を流し喉を犯され続ける順子と結衣は、同時に性器と肛門も犯されている。性器は破壊されグズグズの状態であるが、それでも犯される。そして、肛門も犯され続け裂けてしまい血が流れている。２人の中学生は長時間１００人以上の人間に犯され続け、３つの穴はボロボロになっていく。そして、ようやく凌辱の嵐が去った後、順子と結衣は三つの穴から血を流し意識を失っていた。

「さあ、それでは処刑を開始します」

葉月と沙也加は、順子と結衣を拘束台から外すと、二人の首にロープを巻き立たせたまま腕を後ろ手に縛り、足は大きく開かせ足枷に鉄パイプが取り付けられ、閉じられないように固定する。そして、

背中にも鉄パイプが通され背筋を伸ばしたまま固定される。頭は顔が天を向くように固定された。順子と結衣は、〝人〟の字の形に動けないように固定され、そのまま吊り上げられていく。二人の股間の下には、太い杭が設置された。杭の中間あたりには鋭い刃が上を向いて取り付けられている。

「お待たせしました。串刺し切断処刑の開始です。どうぞ、お近くでゆっくりとご覧ください」

葉月の合図で2人の体が下げられ、性器に杭の先端が当てられ挿入される。そして、ロープが外され、2人の体重で杭が性器に突き刺さっていく。残酷に処刑されていく中学生の2人の足に重りがぶら下げられる。

ズルッ!!

重りの重さが加わり深く性器に杭が突き刺さっていく。

「あぶぶぶぶぶぶぶっ!!」

重りが追加され、さらに深く杭が突き刺さる。もう、子宮を突き破り胃まで達するほど杭は突き刺さり、順子と結衣の性器から激しく血が流れ始める。そして、ついに上を向いた刃の位置まで2人の体が下がってきた。順子と結衣は串刺しにされるだけではなく、真っ二つに切断される事になる。

「はい、それじゃ、もっと重りを追加してあげましょうね」

重りを追加されもう性器が切断され始めた。クリトリスが会陰が肛門が全て切断され血が溢れる。どんどん重りが追加され、へその辺

りまで切断されてしまった2人の体がビクビクと痙攣を始める。

「よし、沙也加。いくよ。せーの」

葉月の合図で、葉月と沙也加は其々順子と結衣、2人の足の間に固定されている鉄パイプに思い切り飛び乗る。

ズボゥゥゥゥッ！！

順子と結衣の体が一気に下がり、口から杭の先端が血塗れで飛び出し、胸まで切断された体から血が噴き出した。もう2人はこのままでも長くは持たない状態であるが、葉月と沙也加は小型の爆弾を手にすると、涙を流している2人の両目に筒状の爆弾を突き刺した。2人の目は潰れ血が溢れだすが、爆弾は防水紙で包まれている為、何の問題もなかった。

「それでは、みなさん中学生2人の最後です」

葉月と沙也加が同時に導火線に火を点ける。導火線は、ジジッと燃えて短くなっていく。

ボンッ！！

鈍い音が響き、順子と結衣の頭が肉片と血をばら撒いて吹き飛んだ。哀れにも順子と結衣は、まだ中学生という若さで生涯を終えることとなった。

葉月は、理津子に処刑が終了した事を連絡したが、理津子は電話で話す事が出来ないようで代わりに電話口にでた香坂麗華に伝え、またよろしくと上機嫌で電話を切った。

1、少女の性器鞭打ち（前書き）

真弓の章の開幕です。

残酷拷問絵巻をお楽しみください。

1、少女の性器鞭打ち

1、少女の性器鞭打ち

八千代と凛津が性器を鞭打たれていたのと同時刻。別の部屋でもう一人の少女がスポットライトの光りを浴びていた。
スクール水着を着た十二歳の梨絵は目隠しをされ、両手は後ろ手に縛り上げられ、足は大きく開かれたまま、腰と太股を背後から厳重に固定されていた。
まだ幼い梨絵はこれから何が起こるか想像すらできず、ただただ震えていた。
なんの前触れもなく開かれた梨絵の足の中心に鞭が叩き込まれる。
風切り音が違うのは八千代と凛津とは違う種類の鞭が使われているためだった。

「痛ーーーいっ」

梨絵は絶叫し大声で泣き出し拘束から逃れようと必死にもがいた。
しかし、梨絵の腰と太股を固定している拘束具はそんな梨絵の下腹部をしっかり固定し身動き一つできなかった。その身動きできない幼い梨絵の性器へ続けざまに鞭が叩き込まれる。

「やだぁーーーーっ」

自分の性器がなぜこんな仕打ちを受けているのかさえわからず梨絵は泣き続けた。すでに最初の一撃で漏らしてしまったのか梨絵のス

クール水着の股間が黒く光っている。そして、太股を透明な液体が流れていた。

「あああああっ」

泣き続ける梨絵の性器に鞭は容赦なく叩き込まれ、その度梨絵は絶叫した。

幼い性器を鞭で打たれ続け、泣き通していた梨絵が突然静かになり固定されていない上半身がガクッと後ろにのけ反った。あまりの激しい鞭打ちに梨絵は気を失ったようだった。

その気を失った梨絵の性器に容赦なく叩き込まれる鞭の音が響き渡る。梨絵は性器を鞭打たれた瞬間ビクンと身体を動かし再びのけ反るという動作を繰り返していた。

気を失い無抵抗になった梨絵の性器を打ち続けていた鞭の音が変わった。と同時に梨絵の股間から赤いものが飛び散った。スクール水着という丈夫な生地で守られている梨絵の性器に苦痛を与えるため使われた特性の鞭には小さな刺が埋め込まれていた。その刺が水着の股間部分を少しずつ裂き、そしてとうとう梨絵の性器に直接鞭が叩き込まれたのだ。

鞭は梨絵の性器の皮膚を簡単に引き裂き血が飛び散った。

「あああああっ」

あまりの激痛に覚醒した梨絵は再び絶叫し泣き喚いた。

「痛いよう、痛いよう。」

泣き続ける梨絵の性器に容赦なく鞭は叩き込まれ、辺り一面に血が飛び散った。スクール水着の股間部分はほとんど無くなり、梨絵の

性器はすっかり露出していた。

「いやあっいじめないでぇーーーっ」

一際高く絶叫し梨絵は再び失神した。その小柄な身体がびくんびくんと痙攣している。

鞭は、しかし容赦なく梨絵の性器に叩き込まれていた。もはや刺鞭で直接打たれている梨絵の性器は血塗れで、そこから飛び散った血が梨絵の下腹部や太ももを染めている。梨絵は虚ろな目をしたまま性器を打たれ続けていた。

いまだに青いランプが点灯しない梨絵に対し更に厳しい責めが加えられる。両手を頭上で縛られたまま天井からのロープで固定された。そして梨絵の顔面が思い切り殴られた。

「あうぅぅっ」

梨絵は鼻と口から血を垂らし覚醒した。その梨絵の顔面がまた殴られる。

「ごめんなさいっ」

恐怖で涙を溜め震えながら謝る梨絵の顔面がまたも殴りつけられる。

「ごめんなさ・・・・」

謝ろうとした梨絵の顔面が続けて殴られ、梨絵は下を向いて口から血を垂らした。その梨絵の髪の毛が掴まれ無理矢理顔を上げさせられるとまた梨絵の顔面は容赦なく殴られた。梨絵は恐怖と痛みで大声を上げて泣き出した。

・・怖い、助けて・・

泣き続ける梨絵の顔面はまるでサンドバックのように容赦なく殴られ続け、その顔は涙と鼻水、鼻血と口からの出血で無惨な有様になっていた。そして、嗚咽する梨絵の左足が持ち上げられ固定された。破けたスクール水着の股間から梨絵の性器が露出している。その幼い性器が無造作に拡げられた。

「あっ」

俯き泣き続けていた梨絵がびくっと身体を震わせる。その梨絵の小さな腰はしっかりと押さえ付けられ、太いデルドゥが梨絵の幼い性器に挿入されはじめた。まだ濡れてもいない膣口に容赦なく突き刺されていく。

「やーーーっ助けてぇーーっ」

自分の性器を裂かれていく痛みに梨絵は大声で泣き叫んだ。とその梨絵の髪が掴まれ再び顔面が殴られる。

「ごめんなさいっ」

なぜ殴られるのか分からないまま恐怖で梨絵は謝る。そして、声を上げないよう必死に耐えた。その梨絵の幼い性器にデルドゥは容赦なくどんどん押し込まれていく。性器から大量に血を流し梨絵は押し殺した声で泣いていた。

しっかりと腰を押さえ付けられミシミシと性器を貫かれていく梨絵はけなげにもその痛みに耐えていた。しかし、性器の中に容赦なく突き込まれていくデルドゥの先端が梨絵の子宮口を無理矢理こじ開

けその中に挿入された時、梨絵は再び絶叫していた。

「いだいぃぃ、だじげでぇぇぇーーーーっ！！」

梨絵は、また顔面を殴られ続ける。そして、殴られながら梨絵は幼い性器にデルドゥを根本まで突き刺されていた、梨絵の性器から血がドボドボと溢れだし太ももを伝っていく。そのまま梨絵は放置されたが、結局時間内に青いランプが点灯することはなかった。

梨絵の運命は決定した。

2、廃棄処分

2、廃棄処分

梨絵は、結局入札者が現れず廃棄処分が決定した。通常は、このまま処分室へ送られ、そこで処分される事になるのだが、以前より本当に処分しているのかとの疑問の声があり、実は整形を施して使い回しをしているのではと噂されていた。その噂を解消するため今回、梨絵の処分はこのままこのステージ上で行われる事に決定した。

「今回、残念ながら御希望のお客様が現れませんでしたので、この商品は廃棄処分と致します。通常は斬首し焼却して終了ですが、皆さまからの要望もあり公開処分という形をとらせて頂きます。公開しますので斬首だけでは不満もあるかと思います。そこで簡単に性器破壊を執行した後に斬首という流れで処分いたします。私たちが、廃棄になった商品をきちんと処分している事を認識していただければ幸いです」

アナウンスの後、すぐに梨絵の着ているスクール水着が切り裂かれ全裸にされる。いったん拘束を解かれた梨絵は狂ったように泣き叫び激しく抵抗し逃れようとするが、鳩尾に体が浮き上がるほどの一撃を入れられ吐瀉物を口から吐き出しのたうち回っていた。そして、仰向けにされた梨絵の両手首と両足首に枷が装着され、枷に付いたロープがギリギリと引かれていく。まるで股裂きのように左右に思い切りロープが引かれ、梨絵の手足の関節が悲鳴を上げていた。

「だじげでぇぇぇーーーーっいだいぃぃーーっ！！」

泣き叫ぶ梨絵の体が大の字に手足を拡げたまま空中に持ち上げられていく。梨絵の手足はピーンと伸び切り千切れそうになっている。観客席からは大股を開いた梨絵の性器が丸見えになっていた。

「それでは、性器破壊を開始します。外性器を切除した後、膣を破壊し、最後に子宮を破壊します。時間の都合がありますので、要望等は後日連絡いただければ幸いです」

直ぐにマスクをつけた執行人が現れ、まるで物のように梨絵の小陰唇を摘まむとジョリジョリと鋏で切り取り始めた。

「いだぁぁーーっだじげでぇぇぇーーーーっ！！」

絶叫する梨絵に構わず、あっという間に左右の小陰唇が切り取られ無造作に投げ捨てられると、次にメスが握られクリトリスに狙いがつけられる。そして、クリトリスの根元にメスが突き刺され、そのまま抉るようにクリトリスは切除された。

「あびぃぃぃーーーーーっ！！」

性器からボタボタと血を流し号泣する梨絵の性器破壊はどんどん進んでいく。外性器を破壊した執行人に代わり、次の執行人が真っ赤に灼けた太い鉄棒を持ち現れた。それを見た観客席から、次に起こる事を思い描いた者たちから歓声が上がる。そして、それは観客の予想通り梨絵の膣へ突き入れられる。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーっ！！！」

梨絵の絶叫が響き渡るなか、ジューという膣肉の焼ける音と異臭、煙が股間から漂う。鉄棒は梨絵の膣壁を十分焼き尽くした後、焼き付いた膣壁を引き剥がしながら抜き取られる。鉄棒が抜き取られた後は梨絵の股間にはポッカリと丸い穴が開いていた。

「あわわわわわわわわわわわわっ」

泣き続ける梨絵の首にロープが巻かれる。そして、四人の執行人が回転ノコギリを持って現れると其々梨絵の両手両足の付け根の位置に着く。さらにもう一人が梨絵の口に性具型の口枷を喉に押し込み装着し、目にもこれから行われる事を梨絵が見てショック死しないよう黒い布がグルグルと巻かれ目隠しされていった。

「んごぅんごぅ」

声も出せず目も見えなくなった梨絵の悲し気な呻き声が漏れるなか回転ノコギリのスイッチが入れられ梨絵の手足が付け根から切断される。

「んごぅぅぅーーーーーーーーっ!!!」

梨絵の細い手足が切断され血が噴き出し、梨絵の体は首吊り状態になりブラーンと揺れていた。そこへメスを持った執行人が梨絵のへその下にメスを突き刺し、そのまま正中切開する。そして、切開した梨絵の下腹部に手を突っ込むと子宮を取り出してしまった。梨絵はこのままでも失血死は免れないが、その前に梨絵の首に細いワイヤーが巻かれ左右に引かれていく。梨絵の首にワイヤーが食い込み、血が流れ出した次の瞬間。

ボンッ!!

梨絵の首が切断され胴体がステージに落ち転がる。梨絵の廃棄処分は終了した。

★　★　★　★

梨絵が廃棄処分される様子をステージの袖から眺めていた真弓は怒りで体が震えていた。

・・何も考えていない馬鹿な女のおかげで私の準備が十分でないのに呼び出されたじゃない。私があの年の頃には、どうしたら御主人様に喜んでもらえるのか、そればかり考えて体の方も喜んでもらえるよう気を使っていたけどね。あんな馬鹿じゃ廃棄されて当たり前だわ・・

真弓は、廃棄処分された梨絵に一片の哀れみも感じなかった。むしろ、この施設で育ちながらの体たらくに怒りしか感じなかった。

・・この私の女の体を痛めつけて喜んでもらう。それが全てじゃない・・

真弓は、そのために自分の体の維持にも余念がなかった。長い黒髪は、好みに合わせてポニーテールにもツインテールにも三つ編みにも出来るよう備えていた。もちろんショートが好みの場合は何時でも髪の毛を切るつもりだ。胸は形の良いお椀型に維持し、くびれたウエスト、貼りのあるヒップに、薄っすらと陰毛の生えた恥丘、適度に肉の付いた太もも。真弓は、この体ならば痛めつけるのは楽しいだろうと自信を持っていた。そして、その自信が今日これから試

される。

・・ランプがいくつ点くかで私の価値が分かる。私は今日の為だけに生きてきた。今日が満足いく結果ならば、すぐに処刑されて構わない・・

真弓は固い決意で拳を握りしめた。

3、商品披露

3、商品披露

ステージの照明が落とされ、中央部分だけにスポットライトが当てられる。そこへ、ガラガラと台車に乗せられた真弓が運ばれてきた。八千代も凛津も、処分された梨絵も衣服を着けての鞭による責めだったが、真弓は太ももの付け根に食い込むサイハイソックス以外全裸にされていた。通常は売却前に商品をあまり傷つけない為に衣服を着用しての鞭責めになるが、今回は梨絵が落札されなかった為の急遽の商品披露になるため、インパクトを強くする必要があり全裸での鞭責めとなった。しかも、真弓は背後の拘束台に〝人〟の字型に大きく開脚したまま完全に固定され身動き一つ出来ない状態だった。

・・ううっ怖いっ、でも真弓の体を痛めつけるのは絶対楽しい筈、真弓が責める立場だったら、真弓のマンコに徹底的に鞭を叩き込んで痛めつける。間違いなくマンコが裂けて血が出るまで鞭で打たれる。もしかしたら小陰唇やクリトリス千切れちゃうまで鞭で打たれるかも。どれだけ痛いんだろう。でもマンコ鞭で打たれて泣き叫ぶ無様な真弓の姿見てると楽しそう・・

スポットライトの中、浮かび上がる真弓の拘束された体にさらに手が加えられる。まず真弓の目に黒い布が巻かれ視界を塞がれる。そして、口の中にもシリコン製の性器が押し込まれ口も塞がれた。

・・真弓の目と口、塞ぐんだ。それだけ酷い責めを受けるのかな・・

真弓は自分が酷い責めを受けるため目と口を塞がれたのだと考えたが、それは少し意味が違っていた。酷い責めを受けるのは間違いないが、目を塞いだのは真弓の眼球を損傷から守るためであり、口を塞いだのは真弓が誤って舌を噛んでしまわないようにだった。そして、真弓が事前に録音されていた自己紹介が流される。

「初めまして真弓と申します。１８歳になりました。もちろん処女です。自慰行為は週一回きちんと監視していただいてる中で行っています。これまでの調教具合は、口は喉の奥、食道の半分までは性具を押し込んでもらっていますが、抜歯はまだ済んでいません。お尻の穴は、１リットルまでの浣腸、アナルビーズでの自慰、アナルデルドゥで拡張し、８センチのアナルプラグで固定を繰り返していますので、アナルフィストも楽しめると思います。マンコはこれから真弓を購入してくださる方の為に手つかずの状態です。お好みの状態に調教開発してください。鞭は、お尻だけ経験済み。蝋燭もお尻だけ。針は経験ありません。これから真弓の体の色々なところに針を刺して楽しんでください。真弓は絶対に、許してくださいとか助けてくださいなんて泣き言は言いませんので思う存分徹底的に痛めつけて楽しんでください。よろしくお願いいたします」

真弓の録音された挨拶が終了すると、いよいよ商品披露が開始される。真弓は周囲の気配を敏感に察知し、自分の性器に叩き込まれるであろう鞭の激痛に備え、気持ちと体に何時鞭が叩き込まれてもいいように力を込める。そして、ヒュッという鞭の風を切る音が聞こえた。その音がいくつも聞こえたように思ったのは気のせいだと真弓は思ったのだが…。

「あびゃぁーー！！」

真弓は塞がれた口で絶叫していた。鞭の風を切る音がいくつも聞こえたのは真弓の気のせいではなく、真弓は顔面、胸、性器、太ももの四か所を同時に鞭で打たれていた。そして、続けてまた四か所に鞭が叩き込まれ真弓は絶叫する。真弓の想像を超えた責めに、真弓は自分が何をされているのかさえ分からなかった。

・・ひぎぃぃーーっ痛いぃぃーーっ！！・・

真弓は全身を襲う激痛に、何も考えられなくなっていた。真弓の顔面、胸、性器、太ももに赤い蚯蚓腫れがどんどん出来てくる。

「あびゃびゃびゃびゃーーーーーっ！！」

真弓の顔面に鞭が叩き込まれ続け、真弓はようやく目と口が塞がれた理由が分かった。もし何もない状態で顔面を鞭打たれたら眼球は傷つき、最悪破裂してしまっていただろう。そして、大きく口を開けて悲鳴を上げた瞬間に鞭が叩き込まれたら舌が千切れたり、激痛で口を閉じた時に誤って舌を噛み切ってしまう恐れもある。それを防止するための処置だと理解した。真弓は自分の性器だけでなく、ほぼ全身を鞭で打たれている事に興奮していた。

・・真弓の体を痛めつけるのが楽しいからここまでしてもらえるんだ・・

真弓の顔面は真っ赤に腫れあがり、形の良い胸の膨らみも鞭が打ち込まれる度にぶるぶると震え真っ赤になっている。真弓の性器はさらに酷い状態になっていた。大陰唇は真っ赤に腫れあがり小陰唇はところどころ裂けてしまっている。クリトリス腫れ、膣前庭窟も裂けて血が滴り落ちている。太ももも例外ではなく、特に内ももの部

分が集中的に狙われサイハイソックスが破れ血が滲んでいた。

「あばばばばばばばばばばばばばっ！！」

悲痛な声を上げる真弓の股間から、湯気をたてて小便が溢れだした。鞭はその小便を漏らす真弓の性器の中心に集中して打ち込まれ始めた。四本の鞭が休みなく続けて真弓の性器に叩き込まれる。

「あっぴゃぁっ！」

真弓は泡を吹いて失神してしまった。それでも真弓が許される事はなく。真弓の性器に鞭は打ち込まれていく。

そして、真弓の想像通り青いランプが点灯していた。それは、八千代や凛津よりも多い数だった。残念ながら気絶してしまった真弓は、自分にとっての高評価を知ることはないまま次のチェックへと流れ作業のように進んでいく。商品である真弓の気持ちなど考慮する必要などまるでない。当然の事だった。

「ふふっ、おもしろそうな玩具だ。是非とも手に入れて、この玩具に「許して」「助けて」と言わせるのは楽しそうだ。死にたくなる程の苦痛を毎日与えてやろう。いつまでもつかな」

青いランプのボタンを押した一人の男が、残酷に笑いながら呟いた。

4、商品チェック

4、商品チェック

真弓はステージから商品チェック用の部屋へ移動させられ、そこで一度拘束台から解放された。

「商品チェックに入ります。定番の蝋燭責めになりますが、自分の体のどこを責めてもらいたいか答えなさい」

考えるまでもなく真弓は即答する。

「真弓の顔と、胸、マンコを責めてください。女の子の象徴的な部分を責めるのは楽しいと思います。特にマンコを責めるのは一層楽しいと思いますので、徹底的に責めて楽しんでください」

さっそく真弓は両腕を背中に回されきつく縛り付けられる。そして、まず台の上に仰向けに寝かされ大きく足を開いた姿勢で固定される。真弓は鞭で打たれた時と同様、三か所を同時に蝋燭で責められる事になった。三人のマスクを被った男が両手に火の点いた蝋燭を持ち、それぞれの位置に立つ。

「それでは、顔面、胸部、性器への同時蝋燭責めを開始します」

天井から声が流れ、真弓の体への蝋燭責めが始まった。ほとんど至近距離からの、蝋燭を垂らすというより流すという感覚で真弓の体

は蝋燭で赤く染まっていく。
真弓の顔面は、鼻の穴に呼吸用のチューブが挿入され表情も分からなくなる程、赤く塗り固められていった。そして、胸の膨らみも同様に肌に着くほどの距離から蝋燭が流される。特に股間は襞の隙間やクリトリスの包皮の隙間にも蝋が垂らされ流し込まれる。それは、熱いというより痛いという感覚だった。

・・痛い、痛い、痛い、痛い、痛い・・

執拗に蝋燭を垂らされ真弓の顔面も胸も恥丘から股間にかけても蝋燭で真っ赤に塗り固められていた。そして、一通り三か所を蝋で塗り固められた真弓は、今度は開脚逆さ吊りにされ、性器の部分を更に徹底的に責められる事となった。生まれて初めて開脚逆さ吊りにされた真弓は、その苦痛で呻き声を上げていた。大きく開いた足の関節がぎしぎしと悲鳴を上げている。

・・痛いぃ足が外れそう・・

そんな真弓にお構いなく、まず一度股間を塗り固めた蝋燭を鞭で叩き落される事になり、一本鞭を持った男が真弓の股間に狙いをつける。そして、ヒュッという風切り音のあと真弓の性器に鞭が叩き込まれた。

「おごぉぉっ！」

蝋で固められた真弓の口から、くぐもった呻き声があがり、股間の蝋燭がパリンと砕け飛び散った。その真弓の股間に続けて鞭が叩き込まれる。

ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ

真弓の股間に垂らされた蝋はほとんど鞭の打撃で引き剥がされ、再び真弓は性器を直接鞭で打たれる状態になっていた。

「おごぉ！おごぉ！」

苦し気な声を上げる真弓だったが、構わずに商品チェックは進んでいく。綺麗に蝋が剥がされた真弓の性器で小陰唇が摘ままれ、くぱぁと広げられクリップで固定され性器の中身が晒された。クリトリスの下に尿道口と膣口がはっきりと確認出来る。まだ綺麗な色の膣前庭窟は、鞭で打たれた跡が血が滲み生々しく残っている。そして、また真弓の性器への蝋燭責めが開始された。クリトリスへは勿論、剥き出しの膣前庭窟へも容赦なく蝋燭が垂らされていく。今まで真弓の顔面や胸に蝋燭を垂らしていた男も、今度は性器に垂らしている為、６本の蝋燭で責められた真弓の性器は、瞬く間に真っ赤に塗り固められていった。そして、真弓の股間一帯が再び赤く染まった後、また鞭で性器を打ち蝋が剥がされる。

「あびゃぁぁーーーっ！！！」

広げられ中身剥き出しの性器を鞭打たれ真弓は絶叫する。真弓の顔面に垂らされた蝋燭もバリバリと剥がれ落ちていた。

「ふぅふぅふぅふぅふぅ！！」

・・真弓のマンコ、今どうなってるの？・・

真弓は自分の性器の状態が気が気でなかった。相当酷い状態にされているのだろうと想像していたが、実際は真弓の想像ほど酷い状態にはなっていなかった。まだまだ序ノ口だったのであるが、知識ば

かりで経験のない真弓には、分かる筈のない事だった。

「この女、処女だったな。窒内への蝋燭責めはどうするのか、指示を仰いでくるか」

真弓を逆さ吊りにしたまま男たちは退室していく。静まり返った部屋で一人残された真弓の泣き声が大きく響いていた。

取り敢えず真弓は処女のまま出荷という事になり、窒内部、子宮への蝋燭責めは見送られた。八千代や凛津に比べ商品チェックの項目が遥かに少ない時点で出荷となったのは、購入希望者が破格の金額を提示し、少しでも早く真弓を手に入れたいという希望からだった。

「可哀想にな、この女」

「どうしてだ?この程度のチェックで出してもらえるんだ。ラッキーだろう。他の女はもっと散々痛め付けられてから出荷されていくのに」

「いやいや、この女を買ったあの紳士。恐ろしい目をしていたぞ。俺の経験から言えば、ああいう人物は女を徹底的に痛め付けて処刑するのが趣味なんだ。この女も地獄の苦しみを味わわされて早ければ1週間も経たないうちに処刑されるんじゃないか」

「1週間!普通半年とか一年はお楽しみだと聞いていたが……。そんな短い期間で、あんな大金払うのか。金持ちの思考は分からんな」

「まあ、だからこの女はもう長くは生きられないと思うぞ」

「もったいない。俺なら、もっと長い間痛め付けて楽しむがな」

「だから、お前は金持ちになれないだろう」

男たちは笑いながら話していたが、その会話が耳に入っていた真弓は恐怖で更に大きく泣き出していた。

5、容赦なき暴力

5、容赦なき暴力

真弓にとって初めての平穏な日々が続いていた。購入されこの屋敷に来てからの三日間は、真弓の身体のサイズを計測された以外、犯されることも拷問されることもなく過ぎていた。真弓は、贅沢で豪華な食事を与えられ、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

・・このまま何もなくて過ごせるわけがない。きっと真弓の処刑の準備をしているんだ・・

真弓は、購入される前に聞いた話が忘れられなかった。正直、真弓は逃げられるなら逃げ出したかったが、あの施設での教育を受けた真弓は、自分は購入してくれた方に楽しんでもらう為に存在していると教え込まれていた。恐怖から逃げてしまっては自分の存在意義がなくなってしまう。自分の身体の全てを捧げることで、自分は自分でいられる。真弓は楽しんでもらうために自分が何があっても耐えなければならないと考えていた。それに、真弓は自由に歩き回ることは出来たが、真弓の足首には足枷が装着され、その足枷に付けられた鎖の先には重さ１０キロはある鉄球が繋がれ歩くことも大変な状態であり、さらに両腕は背中に回され固く拘束されていた。そのため、もし真弓が本当に逃亡しようと考えても、それが叶う可能性はほとんど無いに等しかったのである。

しばらく椅子に座り窓の外の風景を眺めていた真弓だったが、そこ

ヘドアが開き男が入ってきた。真弓は急いで椅子から降り跪く。真弓の目の前に男の性器があった。真弓は、舌を使い男の性器に奉仕する。すると、男の性器が硬く勃起してきた。

「口を開けなさい」

男の命令で真弓が口を大きく開けると、男は真弓の口の中に自分のモノを深く押し込んだ。

「おごぅっ」

真弓が思わず咽るが、男は構わず真弓の頭を押さえ付け喉の奥の奥まで突き入れた。両腕を縛られ何も抵抗できない真弓は、頭を押さえ付けられたまま喉を犯され続ける。

「オボォオボォ」

真弓は、呼吸が出来ず涙を流しながら苦し気な声をあげるが、それでも許される事はなく喉を犯され続けた。

「おや?」

男は、押さえ付けていた真弓の頭から力がなくなったのを感じ真弓を見ると、哀れにも真弓は失神してしまっていた。男は真弓の喉から性器を抜くと、真弓の髪の毛を鷲掴みにし平手で真弓の頬を激しく叩く。何度も叩いているうちに、ようやく真弓の意識が戻り泣き出した。

「これくらいで失神とは、お仕置きが必要だな」

男は真弓を立ち上がらせ、真弓の首に天井からのロープを巻き付け引いていく。そして、真弓がつま先立ちでやっと立てる位置でロープを固定した。もし足を滑らせたりしたら、真弓は首吊り状態になってしまう。

「さあ、歯を食いしばれ」

真弓に告げた男は、容赦なく真弓の顔面に拳を叩き込んだ。

「あひぃぃーーっ！」

真弓が悲鳴を上げるが構わず男は真弓を殴り続ける。

バキッバキッバキッバキッバキッ！！！

真弓の顔面は忽ち腫れ上がっていき、鼻血を出し唇も切れ口からも血を流していた。男は自分の拳も血塗れになるのも構わず、真弓を殴り続けていたが、さすがに自分のダメージも大きくなったのか、拳で殴るのを止めスパンキング板を手にした。そして、今度はスパンキング板を真弓の顔面に叩きつける。

ビシィビシィビシィビシィビシィビシィ！！！！

「なかなかいい顔になってきたじゃないか」

男は赤黒く晴れ上がった真弓の顔を見て、楽しそうに笑う。そして、真弓の鳩尾へ強烈な拳を叩き込んだ。

「おばぁぁー！」

真弓の体が浮き上がる程の衝撃に、真弓は口から胃液を吐き出す。

「汚い物を床に撒き散らすとは」

男はペットボトルを手に取り、真弓に中の水を飲ませる。５００ｍｌの水を全て真弓に飲ませると、もう一本ボトルを取り、それも真弓に飲ませていく。

「まだ、いけるだろう」

男は残酷に笑い三本目のボトルも真弓に無理矢理飲ませていく。そして、更に四本目も真弓の口に入れ全て飲ませてしまう。

「ふふん。上の口はこれくらいでいいか」

男は今度は真弓の肛門にエネマシリンジを突き刺し、同じように水を注入していく。

「あうぅぅぅーーっ」

真弓の下腹部がどんどん膨らんでいく。そして、瞬く間に真弓の腹はパンパンに膨らんでいた。

「苦しいか？」

男の言葉に真弓は、こくんと頷く。

「それでは、もっと苦しんでもらおうか」

ガラガラと何かの機械を運んできた男は、得意そうに真弓に説明す

る。

「これはピッチングマシーンという機械だ。こいつは１６０キロの球を投げることが出来るのだ。これをお前の体で受けてもらおうか」

そう言われても真弓は性知識以外、世間一般の事はほとんど知らない。ただ、その機械が自分を痛め付ける物だというのは理解できた。何をされるのか分からない真弓に向かってピッチングマシーンが動作を始めた。そして、真弓が何かが機械から射ち出されたと思った次の瞬間、真弓の口にボールが当たっていた。

「あがぁぁ！！」

真弓の前歯が何本も折れ、唇はさらに裂けていた。真弓はその衝撃を経験してしまった事で恐怖を覚えた。

・・次は何処を狙われるの・・

せめて耐えられるところを狙って欲しかったが、そんな訳はないという事は真弓も十分理解していた。そうしている内に次の球が射ち出される。それは、真弓のパンパンに膨らんだ腹に投げ込まれた。

「おっぱぁぁぁぁーーーっ！！！」

真弓は口から飲んだ水を吐き出し、肛門からも注入された水に混じり大便を噴出していた。そして、足を滑らせた真弓は、そのまま首吊り状態になりピクピクと体を痙攣させていた。しかし、その程度で真弓が許される事はなく。続けてどんどんと球が投げ込まれていった。

6、処女膜を破壊される真弓

6、処女膜を破壊される真弓

バシィバシィバシィバシィバシィバシィバシィ

「あばばばばばばばばばばばばばばばっ！！」

連続で球を受け続け真弓は全身痣だらけになっていた。そして、すでに真弓は吐瀉物や排泄物を周囲に撒き散らし、飲まされた水や注入された水も全て排出してしまっていた。

「だいぶいい状態の体になったな。次に移るか」

男は、ぐったりしている真弓を開脚逆さ吊りの形に固定する。そして、眼下にある真弓の性器をじっくりと眺めた。

「鞭で散々打たれたとはいえ処女だけあってまだ綺麗なマンコだな」

男はしげしげと真弓の性器を眺めながら指で開いてみた。桜色の膣前庭窟に小さな尿道と、その下に膣口が見える。男はさらに膣に軽く指を入れ開いてみた。膣口から1センチほど奥に襞で塞がれており中央に小さな穴が開いている。

「処女膜も綺麗に残っているな」

男は、真弓の処女膜を残酷な笑みを浮かべながら見つめる。

「どうせいらないものだから徹底的に痛めつけて破壊してやろう」

男は屈みこんで真弓の顔を見つめ、真弓の意識がある事を確認する。そして、真弓の耳元に口を近付けて、ゆっくりとよく聞こえるように言う。

「これからお前の処女膜を破壊する。それから性器も徹底的に破壊していく。少しでも気持ちよくなれるなんて思うなよ。お前には苦痛と絶望しか与えない。思う存分泣き叫んで許しを乞うんだな」

「ひぃぃーーっ」

真弓は小さく悲鳴を上げる。性経験のない真弓であるが、知識として初めての性交で処女膜が貫通される時には痛みと出血が伴うと知っている。ただそれは普通の場合、意図的に破壊すると宣言された真弓は恐怖で体が震えてきた。しかし、真弓はもう抵抗することも逃げることも出来ない。このまま、処女膜を破壊され、性器も破壊されていくしかないのだ。

・・真弓のマンコ、どんな目にあうの・・

男の姿は真弓の視界から消えていた。歩き回っている気配が感じられるので、真弓は自分の性器を破壊するための準備を整えているのだと思い恐怖でガチガチと歯の根も合わせられなくなっていた。

・・怖い怖い怖い怖い・・

自分の体を痛めつける程、購入者は楽しんでくれると教育されてき

た真弓だが、今日受けた痛みは真弓の想像をはるかに超える痛みであった。そして、これから受ける痛みは、さらにその上をいくのだろう。

・・破壊って、真弓のマンコ無くなっちゃうの？・・

今まで監視されている中での週一回の自慰が楽しみだった真弓は、もうあの快感が得られなくなると思うと悲しくなると同時に、本来の用途に一度も使用されずに壊される自分の性器が哀れでならなかった。

「さあ始めようか」

男は真弓の膣口に釣り針状の針を刺していく。

「あひぃぃーーっ」

真弓が悲鳴を上げるが男は気にする様子もなく、むしろ嬉しそうに真弓の膣口にぐるりと針を刺していく。

「膣を開くのには膣鏡を使えばいいけどね。そうするとせっかくの処女膜を破いてしまうからね。針を刺して引っ張って開口する事にしたよ」

真弓の膣口の周囲も針を刺し終えた男は、真弓の小陰唇にも同じように針を刺していく。そして、直径３０センチの鉄製の輪に釣り針に付いた糸を結びつけ真弓の性器を開いたままに固定する。

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーーーっ！！」

針を刺された経験のない真弓は、いきなり敏感な性器に針を刺されたうえに思い切り引かれたまま固定され絶叫していた。真弓の性器は開いたまま中身をさらけ出している。

「ただ破くだけでは詰まらないからな。まず蝋燭を垂らしてあげよう」

男は真弓の開いた膣の中、処女膜に蝋燭を至近距離から垂らし始めた。

「あっぱぁぁぁーーーーっ！！！」

再び真弓が絶叫するが男は、真弓の膣口から蝋燭が溢れるまで蝋で埋め尽くしいく。そして、埋め尽くした蝋が固まった後、それを取り出した男は処女膜の型取りだと喜んでいたが、その型取った蝋に粘液が糸を引いているのに気付き眉を顰める。真弓はバルトリン腺から粘液を分泌し性器を濡らしていた。

「まさか、マンコに蝋燭垂らされて感じているのか。気持ちよくさせる気はないからな。次はそんな余裕がないようにしよう」

男は火箸を使い、炭起こし器で火を起こした炭をつかみ取ると真弓の眼前に持っていく。真弓は至近距離に炭をつけられて、その熱気に恐怖を覚える。

「この備長炭は１０００度まで温度が上がる上質の炭だ。これでお前の処女膜を焼いてあげよう」

男はそう言うと真弓の眼前から炭を離し、股間の上に持っていく。そして、だんだんと凄まじい熱気が真弓の性器に近付いてきた。

「ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ」

真弓の息がどんどん荒くなり体はぶるぶると震えている。そして……。

ジュワァーーッ

「あっびゃぁぁぁぁーーーーーーーーーっ！！！！」

真弓の絶叫が響き渡り、真弓の処女膜が焼ける臭いと、煙が股間から立ち上る。男は楽しそうに真弓の処女膜に炭をぎゅっと押し付けている。

「処女膜、全て焼き潰してやる」

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃぁぁ！！」

体をエビの様に反らせ口から泡を吹いていた真弓は、その後がっくりと失神してしまった。それでも、男は真弓の処女膜を焼き続けていた。

7、性器を破壊される真弓

7、性器を破壊される真弓

炭で処女膜を黒焦げにされた真弓は、まだ性器を処女膜を責められていた。

「さあ、これで処女膜を千切り取ってやろう」

男は手に持ったペンチで真弓の処女膜を挟むと、そのままブチッと処女膜を千切ってしまった。

ブチィブチィブチィブチィ

男はどんどん真弓の処女膜を千切り取っていく。

「あびゃぁぁーーーーっ!!」

絶叫する真弓の処女膜は瞬く間に全て千切り取られてしまった。

「さて、お前には子宮なんて必要ないから摘出しようか」

男は釣りに使用する太い三本針を用意し、それを真弓の子宮口から子宮内に押し込んでいく。そして、三本針がしっかりと子宮内部にかかった事を確認し、針に付いた細いワイヤーを上部の滑車に通し反対の端に重りをぶら下げていった。

「まず１０キロからいこうか」

男が重りから手を放すと、重りの重量がもろに真弓の子宮にかかり、真弓の子宮が釣り上げられたようにだんだんと顔を出してくる。

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーーっ！！」

「さて、もう１０キロいくか」

合計２０キロの重りを下げられ、真弓の子宮は膣口から顔をのぞかせていた。

「いだぁぁーーーーーーーっ！！」

「まだ重さが足りないな」

男はさらに１０キロの重りを追加し、計３０キロの重りが下げられた。真弓の子宮は膣口から飛び出し、その赤黒い姿を無様に晒していた。

「ふふ、もう半分くらい体から飛び出してしまってるぞ。どんな気分だ。子宮を引き摺り出されるのは」

開脚逆さ吊りの状態で腕も拘束され、何も抵抗できない真弓の膣口から子宮が引き摺り出されていく。男は真弓の両足を更に大きく無理矢理開脚させる。ぎしぎしと真弓の股関節が嫌な音を立てている。

「さあ、もっと痛めつけてやるぞ」

男は太い五寸釘を何本も手にすると、一本を真弓の僅かに陰毛の生えた恥丘に当てる。そして、まるで木材に釘を打つように真弓の恥丘に五寸釘を打ち込んでいく。真弓は膣から子宮を引き摺り出されながら、恥丘に釘を打たれていた。

「あっびゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！！」

真弓の恥丘に打ち込まれた五寸釘には電線が装着されていた。その五寸釘が今度は真弓の恥丘の脇、左右のビキニラインに打ち込まれる。さらに、真弓の尿道と会陰部にも電線付きの釘が打ち込まれていった。

「くくくくっ」

男は残酷な笑いを浮かべると鋭く輝くメスを手にし、半分以上引き出されている真弓の子宮にメスの切っ先を当てる。そして、真弓の子宮を切り裂いていく。

「あんぎゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！！」

子宮を切り裂かれ絶叫する真弓の切り裂いた子宮の中へ液体燃料をどぼどぼと注入した男は、そのまま容赦なく火を点けた。真弓の子宮が燃え上がる。

「あっびゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！！」

開脚逆さ吊りで膣から引き摺り出されている子宮が燃え上がっている。凄まじい光景だったが、男はさらに真弓を痛めつけようとする。

「徐々に通電していきますよ。耐えられますかね」

男は子宮を燃やされている真弓に電気も流し始めた。

「あぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！」

性器に通電され真弓の下腹部がぶるぶると大きく震える。

「なかなか耐えますね」

男は一旦通電を止めると、真弓の胸の膨らみにも電線付きの針を突き刺していき、さらに真弓の頭にも電線を巻き付けていった。

「全身に通電しますからね。今度は耐えられますかね。おっと急がないと子宮が燃え尽きてしまいますね」

真弓の子宮を燃やしている炎は、真弓のクリトリスや小陰唇も燃やし始めていた。

男は楽しそうに笑いながら真弓の体に電気を流し始める。

「うっばぁぁぁぁーーーーーーーーーーーっ！！！」

子宮を燃やされながら全身に電流を流される真弓はぶるぶると体を震わせながら絶叫するが男はさらに電圧を上げていく。

「あばばばばばばばばばばばばばっ！！！！」

真弓は白目を剥き開いたままの口から舌を突き出し、顔中涙と鼻水で汚し口からは泡を吹いていた。

「もう少しかな」

男は、子宮を燃やされながら通電されている真弓の肛門にエネマシリンジを突き刺し薄めた塩酸を注入する。そして、アナルプラグで真弓の肛門を塞いでしまう。真弓は、体の中からも塩酸で焼かれていった。

「あんびゃぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

真弓は断末魔の悲鳴のような絶叫を上げるが、男はそんな真弓に容赦なくさらに電流を強くする。もう真弓は自分が何をされているのかさえ分からなくなっていた。そんな真弓に男は革製の一本鞭を持ち、思い切り真弓の体に叩き込む。顔面、胸、下腹部。真弓は子宮を燃やされ通電され肛門から塩酸を注入され体の中も焼かれながら激しい鞭打ちを受けていた。

「だ……」

泡を吹いていた真弓の口が動く。

「だ、だじげでぇぇぇーーーーっ！　もうゆるじでぐだじゃいぃぃぃーーーーーーっ！！」

「ははっ、やっと言ったな。もちろん許すわけがないがな。いいぞ、もっと命乞いしろ」

男はさらに電流も強くし激しく鞭を叩き込む。と、燃やされて黒焦げになっていた子宮が千切れ、どさっと床に落ちた。

「おやおや、もう燃え尽きてしまったか」

男は通電を止め、グラインダーを持つと真弓の開いた股間の前に立つ。小陰唇もクリトリスもすでに黒焦げになっていたが男はグラインダーのスイッチを入れ真弓の性器に狙いをつける。

「これでお前の外性器は消滅するな」

男は躊躇なく真弓の性器にグラインダーを押し付け、真弓の性器を削り取っていく。周囲に真弓の性器の肉片が血とともに飛び散っていった。しばらく楽しそうにグラインダーで真弓の性器を削っていた男がスイッチを止めると、真弓の股間はきれいに何も無くなっていた。

「だじげで、だじげで」

うわ言のように呟く真弓の性器を完全に破壊するため男は、直径３０センチはある巨大なドリルを用意する。

「これで残った膣も削り取って完全に消滅させる。お前がまだ生きられるなんて希望を持たないように性器は完全に壊す。お前には苦痛と絶望しか残らないんだよ」

男はドリルを回転させると真弓の膣に突き入れていった。

ギュオーン

激しい音と共に真弓の膣だけではなく膣の周りの全てが削り取られ肉片となっていく。

「あびゃびゃびゃびゃびゃ！！あっびゃぁぁぁーーーーーーーー

ーーっ！！！！」

ドリルが抜かれた後、真弓の股間には巨大な穴が開いていた。男はその穴に燃料を塗り付け火を点ける。

「出血を止める為に焼き潰しておくからな。すぐに死なれては詰まらないから、もっと苦しんでもらわないと」

男は残酷に笑い、真弓をどう処刑しようか楽しそうに考えていた。

8、処刑を執行される真弓

8、処刑を執行される真弓

「あぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！」

性器を破壊された後も真弓は、まだ許されることなく通電され鞭で打たれていた。股間にドリルでポッカリと開けられた穴も、まだ燃え続けている。電流もどんどん強くされ大きく体も震えていた。

「どうだ、真弓。苦しいだろう。ほら、もっと命乞いしろ。泣き喚く姿を晒すんだ」

男は、さらに激しく真弓に鞭を叩き込む。

「だれがぁだじげでぇぇぇーーーーっ！！もおゆるじでぐだぢゃいいいいーーーーっ！！あびゃびゃびゃびゃびゃぁぁーーーーーっ！！」

泣き叫び哀願する真弓の股間で燃えていた火がようやく消えた。

「ふふっ、火が消えたか。では次に進むとしよう。ここからはもう拷問ではなく処刑だからな。もう生きていられると思うなよ」

男は太く巨大な釣り針状のギャフを天井から吊るし、大きく開かされた真弓の股間の前に立つ。

「さあ、これを真弓の股間の穴に突き通して吊るしてやろう」

男は真弓のポッカリと口を開けている股間の穴にギャフの切っ先を入れ、そのまま抉るように突き刺していく。そして、突き刺されたギャフの切っ先が真弓の臍の下から頭を出す。

「あんぎゃぁぁーーーーーーーーーー！！！」

男は真弓の下腹部にしっかりギャフが突き通ったのを確認し、真弓の両足首に巻かれていたロープを外していく。しばらくすると真弓の両足のロープは外され、真弓は股間に突き刺さるギャフだけで逆さに吊るされていた。

「あんびゃぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

一気に自分の体重がギャフが突き通されている下腹部にかかり、真弓は絶叫し両足をバタつかせるが、そのため体が揺れ余計に激痛が走る。

「バカな女だ。そんな状態で暴れれば余計ギャフに力が加わるだろう。おい、この女の股関節を砕いて足を動かせないようにしてやれ」

男が命令すると、控えていた屈強な男が三人現れ、一人が真弓の腰に腕を回し押さえ付ける。そして、２人の男が真弓の両足を片方づつ掴み、どんどんと開脚させていく。真弓に両足は水平まで大きく開かされる。しかし、そこで終わりではない。真弓の両足はさらに大きく開かれていく。

バキィィッ！！！

大きな音が響き真弓の股関節が砕け散る。

「はびゃぁぁぁぁぁーーーーーーーーっ！！！！」

真弓の足はだらーんと腰から折れ曲がり力なくぷるぷると震えている。

「膝も折ってあげなさい」

男が笑いながら命令する。真弓の両足をまた男が抱えると膝を逆方向にきめていく。

バキャ！

「あぎゃぁぁぁぁーーーーーーーーーっ！！！」

真弓の両足の膝も破壊され、真弓は絶叫する。真弓の両足は股関節と膝を破壊され変な角度で震えている。

「ついでだ。もう腕も必要ないから、肩と肘を折ってもらおうか」

男が再び命令する。男たちは真弓の両腕の拘束を解いていく。

「おねがいじまじゅ。だじゅげでぐだぢゃい」

真弓は男たちに必死に懇願するが、男たちも笑いながら真弓を見下ろし両腕をがっしりと掴む。

バキィィ！

まず真弓の肩の骨が砕かれる。

バキャァ！

次に容赦なく真弓の肘も折られた。

「あびゃぁぁーーーーっもおいやぁぁぁーーーーっゆるじでぇぇぇーーーーっ！！！」

真弓の両腕も、両足のようにだらーんと力なく垂れ下がる。ギャフを下腹部に突き通され両足も両腕の骨を折られ吊り下げられている無惨な真弓の姿を楽しそうに見つめていた男は真弓の形の良い胸の膨らみに目をつける。

「さて、胸だけこのままでは申し訳ないからな。どんな処刑方法がいいかな」

男は号泣する真弓の二つの胸の膨らみの根元に細いワイヤーを巻き付けていく。そして、そのワイヤーを引き真弓の体を引き上げていった。ワイヤーが真弓の乳房に食い込み真弓が悲鳴を上げる。しかし、男は構わず真弓の体を吊り上げ、真弓は股間に突き刺さるギャフと胸のワイヤーで体が仰向けのまま水平状態で固定される。骨を折られている真弓の四肢は、だらーんと下に垂れ下がっていた。

「もお、いやぁぁぁーーーーっ！　だじげでぇぇぇーーーーっ！！」

泣き叫ぶ真弓の体に容赦なく重りが下げられる。そして、また真弓の体に通電され始めた。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！！！」

真弓は白目を剥き、また口から泡を吹きだしている。そして、筋肉が弛緩した真弓の肛門からアナルプラグがポトリと落ち、肛門から血と大便が噴き出した。

「ふはは、無様な姿だな。もう一つくらい重りを下げればお前の胸も千切れるだろう。そうしたら別室で最後のトドメをさしてやろう」

そう言いながら男は真弓の体に重りをぶら下げる。

「ひぎぃぃぃーーーーーーーーっ！！」

真弓の胸にワイヤーが激しく食い込んでいき血が滲みだす。そして…。

バスン

真弓の胸が引き千切れ、真弓はまた逆さになりぶらぶらと揺れている。千切れた乳房は床にぼとりと落ちていた。真弓、自慢の胸の膨らみが切除され、真弓は激痛と精神的なショックで気絶していた。

9、哀れに絶命する真弓

9、哀れに絶命する真弓

気絶した真弓は、ようやく通電を止められギャフを抜かれると床に降ろされた。そして、死んだように動かない真弓の髪の毛が掴れ、そのままずるずると引き摺られていく。

「貼り付けにしてトドメを刺してやるからな」

真弓は背後の処刑台に、大の字に固定される。その時点で真弓は覚醒させられ今までとは違う辺りに漂う死の気配に恐怖で過呼吸になっていた。

「おいおい、まだ処刑台に固定しただけだろ。泣き言は言わないなんて強がっていたくせにまるでだらしないな」

男に何と言われようと真弓はもう恐怖に立ち向かう事も痛みに耐える事も出来なかった。一度折れてしまった心はもう元には戻らない。これから行われるであろう自分に対する処刑にただ震えているだけだった。その真弓の前に、ちょうど真弓の手足を除いた体がすっぽり入る人型の棺のようなものが運ばれてきた。

「これは中世ヨーロッパで〝鉄の処女〟と呼ばれていた処刑具だ。それをいろいろ改良した新バージョンになるな」

男は自慢気に説明を始める。真弓も拷問や処刑に関する知識は叩き込まれていたので、鉄の処女という名称だけでそれがどういう物なのか理解していた。

「この中に入ってもらう。知ってると思うが鉄の処女の中には鋭い針が無数に植えられている。その中に入れて蓋を閉めれば、中に入った者の全身に針が突き刺さり絶命する仕組みだ。それが普通の鉄の処女だが、この改良版は少し違う。これは全身を入れるのではなく手足を除いた部分が入るようになっている。ここにお前を入れて蓋を閉めると針が刺さるだけじゃなく手足が切断されるようになっている。ふふっ、どうだ楽しいだろう」

もはや真弓は泣く事しか出来なかった。これで死ねる、もう苦しまないで済むと真弓はそればかり考えていた。蓋を閉められた時の一瞬の苦痛。その後はもう終わりだ。真弓はもうすぐ解放されると、それだけに縋り付いていた。

「この改良版は他にも改良点があるぞ。顔の部分が取れるようになっていて、まずここを外して蓋を閉める。そうするとお前の苦痛に歪む顔が良く見えるわけだ。最後にこの顔の部分をハンマーで打ち込んでトドメを刺すんだよ。ほら、この顔の部分の裏側に太くて長い針が付いているだろう。これがお前の目と口に突き刺さり頭を貫通するんだよ。そうそう心配しなくても、この蓋の部分に付いている針は急所に刺さらないように設計されてる。蓋を閉められて全身を串刺しにされてもすぐには死なないようになっているから存分に苦しむ事ができるぞ。そして、この蓋に付いている縦のスリットは、ここから回転のこぎりの刃を入れてお前の正中線を真っ二つに切り裂けるんだ。それに当然、電気も流せるようになっているから通電してやるよ。最後だから最大の電撃でな。どうだ、お前の好きな苦痛を存分に味わえそうで嬉しいだろう」

男は興奮しているようで饒舌に処刑具の説明をする。真弓は言葉がなかった。最後の最後まで徹底的に自分を痛めつける悪魔の所業に発狂しそうだった。

「さて、始めるか」

男は真弓の背後から鉄の処女の半分を装着する。

「うっ、うっ、うっ」

泣き続ける真弓に、びっしりと針の植え込まれた鉄の処女の半分が迫って来た。これがピタッと閉じた時、真弓の手足が付け根から切断され全身に針が突き刺さる事になる。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ」

目を見開き真弓の息が荒くなってくる。真弓の体に植え込まれた無数の針の針先がチクリと当たる。男はニヤリと笑うと一気に蓋を閉めた。

「あんびゃぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーっ!!!!」

鉄の処女がピタリと合わさり、真弓の手足が付け根から切断され全身に針が突き刺さる。そして、真弓はそのまま通電される。

「あばばばばばばばばばばばばばっ!!」

真弓の顔が恐怖と苦痛と絶望で歪む。

「もお、ゆるじでぇー！はやぐごろじでぐだぢゃいいいいーーーーっ！！」

男は白目を剥き口から泡を吹く真弓の哀れな顔を眺めながら、さらに強く通電する。

「あっぴゃぁぁーーーーーーーーーーっ！！」

真弓はついに発狂してしまった。とても常人に耐えられる苦痛ではなかった。ここで発狂してしまったのは真弓にとって幸せだったのかもしれない。

「この女、もう発狂しやがった」

男は舌打ちしながら回転のこぎりを操作する。そして、スリットに刃を入れ真弓の正中線を切り裂いていく。激しく血と肉片が飛び散る。男はさらに顔の部分を覆うマスクをとると口の部分の太い針を真弓の口の中へ無理矢理差し込む。口の針の方が長く設計してあるため真弓の両目にはまだ針は突き刺さっていない。

「さあ、これで終わりだ」

男はハンマーを構えると、顔のマスクに狙いをつけ思い切り振りぬく。

ガィーン

鈍い音と共に真弓にマスクがピタリと装着され目と口の部分から血が噴き出した。

ブシャーーッ

しばらく勢いよく噴き出していた血は、やがて勢いを失いまるで涙の様にマスクの目の部分から垂れていた。真弓は頭を貫通され、もう何も言わぬ物体になっていた。

1、少女たちの性器鞭打ち（前書き）

3人の少女たちの物語です。

今までと違い教育されていない少女たちが痛め付けられ壊されていきます。

1、少女たちの性器鞭打ち

1、少女たちの性器鞭打ち

ステージの上、スポットライトの光の中、白いポロシャツに同じく白いプリーツのスコート、白のサイハイソックスを穿いた少女が足を大きく拡げスコートをたくし上げ自分の股間を晒している。ショートカットで整った顔立ちの少女は恥ずかしさの為か、顔を赤く上気させていた。その少女の股間、白いアンダースコートの中心に大きく染みができている。少女は自分の股間を大勢の観客（入札者）に見られているという興奮で、アンダースコートに染みが出来るほど濡らしてしまっていた。そして、頭上のスピーカーから音声が流れ出した。

「初めまして、莉子、１３歳です。オナニー大好きですが、痛めつけてもらう事も大好きな変態マゾです。これから、マンコを鞭で打ってもらいますので莉子の泣き叫ぶ姿をお楽しみください。よろしくお願いいたします」

事前に録音されていた莉子の音声が流される。すると、スポットライトの光が、スーッと横に流れていき、その光の中に別の少女の姿が浮かび上がった。少女は濃紺の旧タイプ、スカート型のスクール水着を身に着け、足には黒いパンティストッキングを穿き、その上に更に黒いサイハイソックスを重ね穿きしていた。少女のほとんど膨らみのない胸に寸胴の体型がスクール水着に良く合っている。そして、少女は両手を上げ、足を大きく開いていた。少女は三つ編み

を左右に垂らした黒髪で、太い眉に眼鏡をかけた大人しそうな顔をし頬を上気させながら、真っ直ぐ前を見つめている。その姿勢からこの少女が真面目な少女であると想像できるが、この少女の股間にも大きく染みが出来ていた。

「初めまして、柚月です。１３歳になりました。柚月は自分が処刑される姿を妄想しながらオナニーしてきました。本当に柚月を処刑してくださる方がいてくだされば嬉しいです。柚月は女の子の形をしたモノですので徹底的に壊してください。よろしくお願い致します」

柚月の音声が流れるとまたスポットライトの光が横に移動する。その光の中にまた別の少女が浮かび上がった。上半身には形の良い胸の膨らみに白いスポーツブラだけ身に着け、下半身には横に白いラインの入ったブルマと太ももに食い込む黒いサイハイソックスだけ身に着けた少女が、腕を後ろ手に縛られ足首に装着された足枷に付けられたバーで足を大きく開かされたまま立っている。ツインテールの髪形で幼い顔立ちの少女の股間にも大きく染みが出来ていた。

「初めまして、拘束されて痛めつけられるのが大好きな優奈といいます。１３歳です。一日穿いた下着を頭に被ってオナニーするのが大好きな女の子です。自分のおしっこやうんちを飲んだり食べたりするのも大好きですけど、男の人のおしっこ飲んだり、うんち食べたりしたいと思っている頭のおかしい女の子です。よろしくお願いします」

優奈の紹介が終了すると、スポットライトが三か所同時に点灯され、莉子、柚月、優奈の三人の少女が光りの中浮かび上がる。さらに、後方にある大型モニターに三人の少女の染みが広がる股間が大きく映しだされた。アンダースコート、スクール水着、ブルマ。それぞ

れの股間に広がる染みが鮮明に映し出され、莉子、柚月、優奈の顔もアップで映し出される。

「それでは商品披露の性器鞭打ちを開始します。なお、今回は当施設にて厳正に教育された商品ではございません。ある町より確保してきた商品となります。その為、いつものような教育された商品とは異なりますのでご承知おきください。それもありまして今回は三体まとめての入札をお願いします。どれか一つのみの購入は御遠慮願います。もちろん、三体購入後、不要な商品を処分するのは一向にかまいません。まとめて購入していただく事が前提です。それに当施設の商品ではありませんのでノークレームノーリターンでお願いします。それでは格安の金額からスタート致します」

観客席からどよめきが起こる。

「まったく、こんなところでも抱き合わせ商法がはびこるとはな」

「まあ、でも三体共そこそこの商品なのでお得かもしれないですよ」

「教育がされていないのが気になるな。耐性がなくてすぐ壊れたら損だろう」

「いや、だからすぐ壊してしまえばいいんですよ。三体、手に入るわけですから楽しそうですよ」

「そうだな、私はあのスクール水着がいいな。他のは先に壊してスクール水着だけ少しずつ壊していくのもいいかもな」

観客席がざわつくなか三人の仮面をつけ一本鞭を持った男が、莉子、柚月、優奈の前にそれぞれ立つ。三人の少女は眼前に立つ一本鞭を

構える男を見て、本当にこれから自分の性器が鞭で打たれると実感し口を開けたまま顔を強張らせていたが、その股間ではそれまで以上に恥ずかしい染みが大きく広がっていた。そして、男たちは一本鞭を構え少女の性器に狙いをつける。

ヒュッ

風を切る一本鞭の鋭い音の後、莉子、柚月、優奈の股間の中心、性器の割れ目に一本鞭が思い切り叩き込まれた。

「「「あっびゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！」」」

たった一発だった。ただの性器への鞭一発で少女たちは絶叫しステージに転がり、のたうち回る。そこを男たちが髪の毛を掴み無理矢理立たせると背後に用意した拘束台に縛り付けてしまった。少女たちは、人の字型に厳重に拘束される。

「あああああああああああ」

拘束台に縛られた少女たちは、涙と鼻水で顔を汚し号泣していた。先程まで顔を上気させ興奮していた姿はまるで見えなくなり、恐怖と激痛で顔を強張らせ縛られた体を震わせながら泣いている。そこへ容赦なくまた一本鞭が性器に叩き込まれた。

「「「あっびゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！」」」

避ける事も庇う事も出来ない少女の性器へ続けて一本鞭が叩き込まれる。少女たちは妄想とは違う現実に自分の体を襲う激痛に気が遠くなっていった。

2、失禁と顔面凌辱

2、失禁と顔面凌辱

初めに漏らしたのはブルマ姿の優奈だった。大きく開かれたブルマに包まれた股間に激しく鞭が叩き込まれ、太ももまでぶるぶると震える。

「痛いぃぃーーーっ!!」

号泣する優奈の股間、柔らかい性器に容赦なく鞭が叩き込まれる。

バシィバシィバシィバシィバシィ!!!!!

その優奈の股間に叩き込まれていた鞭の打撃音が変わってくる。

ビシャァビシャァビシャァビシャァビシャァ!!!!!

優奈のブルマの股間に黒い染みが広がったと思うと太ももを伝い小便が流れ落ちる。鞭が叩き込まれる度に優奈の小便の飛沫が飛び散った。

・・助けてぇ、本当に痛いよぉ・・

優奈は自分が漏らしていることさえ気付かずに、性器を鞭で打たれ続けていた。その優奈の頭が押さえ付けられ天井に顔を向けられる。

そして、両側に立った男が両手に持つ火の点いた蝋燭を優奈の顔面に垂らし始めた。

「あつぅぅっ、いたいぃぃ」

泣き叫ぶ優奈の口の中にも蝋燭が垂らされる。そして、鼻の穴に呼吸用のチューブが挿入され、計四本の蝋燭で顔面に蝋を垂らされている優奈の顔面は赤く塗り固まっていった。

「！！！！！！！っ」

優奈の顔面は赤く厚く塗り固められ、もう声も出せなくなっていた。優奈は顔面を蝋で塗り固められながら、小便を漏らし性器を鞭で打たれ続けた。

★
★
★
★

次に漏らしたのはスクール水着の柚月だった。拘束され動けない状態で股間を激しく鞭で打たれ続けている。

「もう、いやぁぁぁぁーーーーっだじげでぇぇぇーーーーっ！！」

柚月は腰を引いて少しでも苦痛を和らげようとするが、厳重に拘束された体は身動き一つ出来なかった。その身動き出来ない柚月の性器に容赦なく一本鞭が叩き込まれる。

「あっびゃぁぁぁーーーーーーーーーーーっ！！」

絶叫する柚月の股間の割れ目に一本鞭は正確に叩き込まれる。そのうちに柚月の股間が黒く濡れ始め、鞭の打撃音が変わる。

ビシャァビシャァビシャァビシャァ！！！！

小便を漏らしながら性器を鞭で打たれ続ける柚月の顔は涙と鼻水とよだれで汚れ酷い状態になっていた。その無様な顔が背面のモニターに大きく映し出され、観客たちの注意を引いていたが、その柚月の頭も押さえ付けられる。そして、鼻フックが掛けられるとグイッと強く引かれ鼻の穴を無様に晒された。更に鼻の穴の横からもフックがかけられ、柚月の鼻の穴は大きく拡げられ、その穴の中を無様に晒す。そして、口には開口ギャグが装着され、口も閉じられないように固定された。その間も柚月の性器は鞭で打たれ続けている。

「おごっおごっおごっおごっ」

大きく拡げられている柚月の鼻の穴に金属製の細いチェーンが入れられていく。どこまで入れるのかと思うほどチェーンを鼻の穴に入れられた柚月は、涙を流しながらゴホッゴホッとむせ口からチェーンの先端が飛び出した。もう一方の鼻の穴にも同じようにチェーンの反対の端が入れられ口から飛び出してきた。更に男性の性器を模した、長さ三十センチはある巨大な性具が用意され柚月の開口されている口に挿入されていく。胃まで届くのでは思われる性具が容赦なく柚月の口から入れられていった。

「おごぉぉぉーーっ！！」

苦し気に声を上げる柚月だったが、性具は柚月の口に根本まで入れられてしまった。白目を剥いて口から吐瀉物を出している柚月の鞭打たれている股間で、スクール水着が盛り上がっていく。

ぶりぶりぶり！！

柚月は大便まで漏らし始めていた。

「はひゅーー」

柚月の口を塞いでいた性具が抜き取られ、柚月は呼吸が出来るようになるが、すぐにまた性具が根本まで突き入れられていった。

★　★　★　★

最後に漏らしたのはアンダースコートの莉子だった。

「あうぅぅ、いだいぃぃぃ」

休むことなく性器を鞭で打たれ続け、莉子はもう性器の感覚がなくなっていた。それでも、自分の股間に唸りをあげて叩き込まれる鞭の激痛に莉子は失神してしまいそうだった。その莉子のアンダースコートの股間に染みが広がり鞭の打撃音が低い音に変わる。

ビシャビシャビシャビシャ

莉子の小便の飛沫が辺りに飛び散る。その莉子の顔面が押さえ付けられ、男が手に持った鋭い針を莉子に見せつける。そして、莉子の下唇を摘まむと内側から外に針を突き通した。更にもう一本。そして、もう一本。結局、莉子は下唇に四本もの針を突き刺されていた。次に上唇が摘ままれ、上唇にも針が突き刺されていく。四本。下唇

と同じ本数の針が突き刺されていた。

「ひぐぅひぐぅ」

涙と鼻水を垂らし泣き声をあげている莉子だが、この程度では当然許されない。今度は口腔内から外に向けて針が突き刺され頬から針が飛び出す。更に鼻にも針が突き刺されていった。が、これで終わりではなかった。莉子の舌が摘まれ容赦なく針が貫通する。

「ひぎゃぁぁーーっ！！」

莉子は絶叫するが、さらにもう一本針が貫通した。

「あびゃびゃびゃびゃびゃ」

莉子は顔面の様々な箇所を針で突き刺され、恐怖と苦痛で失神してしまった。

3、購入前チェック

3、購入前チェック

優奈、柚月、莉子の三人は、公開性器鞭打ちが終了し、入札者が現れた為、それぞれ個室に移動され購入前のチェックが行われるところであった。入札金額の大きい者から、好みの商品を選びチェック出来るようになっていた。ただし、今回は三人まとめての落札となるので、チェック出来なかった商品もまとめて購入しなければならない。その事に二の足を踏んだ者も多かったが、好みの商品があれば、あとオマケが二つ付いてくると考えた者が入札に名乗り出ていた。今回、その入札者がちょうど三人だったので個別にチェックする事となっていた。チェックは、自分で行っても構わないし、指示を出して痛め付けてもらい反応をチェックするのも構わない。犯すのも自由である。性器だけではなく、口腔も肛門でも問題なかった。ただし、まだこの段階では商品に元に戻せない行為、例えば乳首やクリトリス、小陰唇の切断や子宮抜き取り等の行為は禁じられていた。殺してしまうのもＮＧで、万が一殺してしまった場合には違約金を支払う必要がある。もちろん、購入後の商品には何をしようと自由である。その場ですぐに壊して殺してしまうのも自由であるし、ゆっくりと壊して泣き叫ぶ姿を楽しむのも自由である。

★　★　★　★

優奈、柚月、莉子の三人は、公開鞭打ちの時の状態のままそれぞれ個室で〝大〟の字ではなく、さらに過酷で大股開きの〝土〟の字の形に拘束され商品チェックを震えながら待っていた。この施設で教育された訳ではない三人は、これから自分たちが何をされるのか、この先どんな運命が待ち受けているのか、まるで理解していなかった。安易に自分たちの変態欲求を満たせれば良いと考えていたが、実際に性器を鞭で打たれ、顔面を容赦なく凌辱されるともう二度と戻れない場所に踏み込んでしまったという恐怖に縛られ、拘束されたまま呻き声をあげ震えていた。

鉄のドアが開く音で莉子はビクッと体を震わせる。足音が近付いて来たと莉子が思っていると、アンダースコートの股間部が切り裂かれる。そして、何の準備もなくいきなり莉子の膣に男の性器が入ってきた。まだ経験のない莉子の処女膜を引き裂き、容赦なく激しく前後に腰が振られる。

「ひぎぃぃーーーっ痛いぃぃぃーーーっ!!」

莉子の瞳から涙がポロポロ零れた。莉子は泣きながら性器を犯されていた。

莉子が犯されて号泣している頃、優奈もまた犯され泣き叫んでいた。激しく腰を動かされ優奈の性器は血まみれになっていた。さらに優奈は犯されながら顔面を殴打されていた。顔面を固めている蝋がポロポロと剥がれ飛び散っていく。優奈の顔面を覆っていた蝋がほぼ剥ぎ取られると、今度は優奈の腹部に拳が叩き込まれる。

「おげぇぇーーっ!おごっおごっ」

優奈は泣きながら口からゲロを吐いていた。しかし、一番貧乏くじを引いたのは柚月だった。柚月の部屋のドアを開けて入って来たの

は女性だった。カツカツとハイヒールの音を響かせ歩いてくる。女は長さ1メートルはあるペニスバンドを腰に装着していた。

「あっ、豪徳寺様。そのペニスバンドを使用すると商品を死亡させてしまう恐れがあるのでお気をつけ下さい」

この部屋担当の男性職員が女性に注意するが、女性はじろりとその職員を睨み付ける。

「私を誰だと思っているの黙って見ていなさい」

「はっ、申し訳ありませんでした」

女性の有無を言わせぬ迫力に職員は頭を下げる。女性は柚月の頭の方に廻ると開口ギャグで閉じられない口の中へ腰に装着したペニスバンドを入れていく。

「ほごぉほごおぉぉ」

柚月が苦し気な声を上げるが女性は長いペニスバンドをどんどん柚月の口にどんどんと押し込んでいく。そして、なんとペニスバンドの先端は柚月の食道を突き抜け胃にまで達していた。

「ほごぉ、ほごぉ、ほごぉ」

柚月は涙を流して苦しむが、女性はかまわず腰を振る。

「どう？　胃を犯されるのっていい気分だろう？」

女性は柚月の口を犯しながら大きく開かれた股間に目を向ける。ス

クール水着に包まれた柚月の股間に顔を埋めてツンとした尿の匂いと血の匂いを嗅いだ女性はニヤリと笑った。我慢出来ないわね。女性は残酷に微笑んだ。

「ちょっと、あなた　」

女性が職員を呼び寄せ、この娘を購入すると伝える。もちろん他の二人もセットだ。

「しかし、他に二人の方がいるので彼らのチェックが終了し金額が決まってからでありませんと」

男性職員は女性にそれまで待つように頼むが女性は、当然他の男性が付けた値段より高く支払う。だからもう購入した事にしろと迫ってきた。

「少々お待ちください」

職員は自分一人では判断出来かねると、女性を待たせて退室した。そして、上の方でも揉めたのであろう。しばらくの間、戻っては来なかった。

「お客様の御購入ということで決定致しました」

戻ってきた職員は女性に頭を下げて告げる。

「つまり、もう私が何をしようとかまわないわけだな」

女性の残酷に笑う顔を見たとき男性職員は、この柚月という少女に同情した。いったいこれからどんな酷い事をされるのか。きっと、

発狂するほどの苦痛を与えられて殺されていくのだろう。しかし、男性職員は無様に殺されていくこの少女の姿を想像し、自分の性器を硬く勃起させていた。

4、一人目の処刑

4、一人目の処刑

落札され豪徳寺葉月の屋敷に連れて来られた三人の少女は、葉月により様々な薬剤や調教を施され自分が痛め付けられる程、周囲の評価が上がり楽しんでもらえると洗脳されていった。そして、時期がきたと感じた葉月はいよいよ少女たちの処刑を開始しようとしている。薄暗い部屋の中拘束され震えている三人の少女の左の乳首には残酷に針が突き通され、まるで商品のタグのように名札が下げられている。

「柚月」と名札の付いた少女は、三つ編みにした黒髪に眼鏡をかけた真面目で大人しそうな顔立ちで、濃紺の旧スクール水着がつるぺたの胸で寸胴の幼児体型晒によく似合っている。そして、黒いパンティストッキングを穿いた上に、さらに太ももの付け根に食い込む黒いオーバーニーソックスを重ねて穿いていた。

「莉子」と書かれた名札の少女はショートカットの髪に太い眉、白いポロシャツに白いスコート、白のサイハイソックスを穿いた清楚な姿から強烈な女のフェロモンを発している。そして、ツインテールの髪に小学生のようにも見える幼い顔立ちで上半身には白いスポーツブラだけ身に付け、下半身には白いライン入りのブルマを穿き、黒いサイハイソックスを穿いた少女は「優奈」と書かれた名札を付けていた。

三人とも両腕を高手後手にきつく縛られたうえ頑丈な皮の首輪を取り付けられ天井からのロープで固定されている。さらに少女達は足枷を付けられ、その足枷には彼女達の体重ほどもある片側三十キロ

の錘が付けられていた。
その三人を全裸に赤いハイヒールを履き、股間に名札と錘をぶら下げた人物が見下ろしている。この人物がこれから少女達を処刑する執行人だった。名札には「葉月」と書かれている。この屋敷の主人で、三人を落札した人物だった。
三人とも足を大きく開き、股間を葉月に晒している。葉月は三つ編みに眼鏡の柚月の前に腰を下ろし、スクール水着の股間部分を横に捲り柚月の裂け目を観察しだした。そして、乱暴に柚月の性器を拡げるとその中身も入念に観察する。拘束されたうえ性器を間近で観察され柚月は羞恥で真っ赤になっていた。

「柚月の性器、気に入っていただけましたら、どうぞ御遠慮なく痛めつけ処刑してください・・」

葉月は赤面する柚月を見つめるとニヤリと笑い隣の優奈の首輪のロープと足枷の錘を外し、傍らにある拘束台を指差す。
優奈は後ろ手に縛られたまま上気した顔でゆっくりと拘束台に歩いていった。そして、拘束台の前で振り向き息を飲むと恥ずかしそうに足を開く。その瞬間、拘束台にライトが浴びせられ白いブラとブルマ姿の優奈が浮かび上がる。ブルマの股間部分にはすでに興奮のため染みが出来ていた。

「お、お願いします・・」

震える声で優奈が呟くと葉月は背後の拘束台から突き出た金属製の拘束具で手際よく優奈の腰と両太股を厳重に固定する。そして再び天井からのロープが優奈の首輪に付けられ上半身の自由も奪われた。
そして、震える優奈の眼前に凶悪な太く鋭い処刑用ニードルが示される。

「優奈が苦しみ抜いて絶命する姿を存分にお楽しみください・・」

ガチガチと歯も合わせられぬほど震える優奈。その大きく開かれたまま固定された優奈の股間、ブルマの中心に出来た恥ずかしい染みにニードルの鋭利な切っ先が当てられる。

「あっあっ怖い。怖いです・・」

優奈は自分の性器に感じた冷たいニードルの感触に泣き出していた。

「あんな大きな針で性器を串刺しにしていただくの・・私、怖い・・」

「処刑していただくんだから怖くて当たり前です・・それに私達が泣き叫んで苦しんだほうが楽しんでいただけるんだから・・」

「うん、そうだよね・・でも私、震えが止まらないの・・」

柚月と莉子は恐怖に震えながら、今まさに処刑されようとしている優奈を見つめる。股間に鋭いニードルを当てられ震える優奈は、涙を流しながら目を瞑り、呼吸は酸欠のように激しくなり白いブラに包まれた優奈の形の良い胸が上下に小刻みに動いている。そして、とうとう優奈の性器にニードルが突き刺され始めた。

「あっ・・」

ニードルの先端がブルマを簡単に貫くと優奈は小さな悲鳴を上げる。そして、ニードルが一センチ、二センチと優奈の身体の中に突き入れられていく。優奈の呼吸はさらに激しく、そして早くなる。

「まだ、膣だよね・・」

「うん、でももうすぐ子宮だよ・・」

柚月と莉子はまるで自分の性器にニードルが突き刺されているかのような錯覚に陥っていた。

「怖い、怖いよぅ・・」

優奈は自分の膣内にどんどん侵入してくるニードルの冷たい感触にボロボロと涙を流し震えている。もうすぐニードルは優奈の子宮を貫きそのまま優奈の身体を貫通していく。優奈はこれから自分を襲う想像すらできない苦痛に恐怖と、そして優奈自身気付いていなかったがかってない興奮を感じていた。大きく開かれ無残にニードルが突き刺さる優奈の股間では、ブルマから優奈にとって最後となる大量の愛液が染み出しニードルの表面を覆い光らせている。しかし、その光はこれから処刑される優奈を一層哀れなものに見せていた。

「あっ痛いーっ」

目を瞑り小さく声を出し続けていた優奈が突然大きく目を開け叫び声を上げる。その声に柚月と莉子は全身を凍りつかせた。

「嫌っ怖いーっ、助けてくださいっ」

子宮口をニードルの先端で無理矢理抉じ開けられ、優奈は爪先立ちになり必死に腰を持ち上げようとする。しかし、しっかりと拘束された下腹部は身動き一つ出来なかった。

「怖いよぅ、もう許してくださいぃーっ」

優奈は処刑される恐怖に大声で泣き叫び哀願を続ける。

「あーっ怖いぃっ、漏れちゃうぅーっ」

身体を硬直させ優奈が叫んだ瞬間、股間から大量の小便が勢いよく吹き出した。

「あっあっあっあっ・・・」

小便を漏らしながら優奈の呼吸が上限を知らないように早くなっていく。

「あっあぁぁぁーーーーーーーーっ」

続いて凄まじい絶叫が優奈の口から発せられた。優奈のブルマの股間部分が瞬く間に赤黒く染まり、小便も赤く染まっていく。

「ひぃぃーっやめてぇーーーっ」

子宮を貫かれ股間から真っ赤な小便を滴らせながら優奈は文字通り泣き叫び苦しんだ。

「もう許してぇーっ、痛いぃっ」

夥しい涙と鼻水で顔を汚し泣き叫ぶ優奈の性器にニードルは容赦なく残酷にゆっくりと突き刺され優奈の身体を貫いていく。

5、優奈の最後

5、優奈の最後

泣き叫び悲鳴を上げる優奈の性器に凶悪なニードルが深く突き刺されていくにつれ、股間から滴り落ちる血の量が増えてくる。

「痛いぃ助けてくださいぃぃっ」

小便を漏らしながら性器を串刺しにされていく優奈のブルマから悪臭と共に大便もこぼれ落ちた。しかし、葉月は容赦なく優奈の性器にニードルを突き刺していく。

「あぁあぁああ・・」

大小便を垂れ流しながら性器を串刺しにされる優奈の無惨な姿に柚月と莉子は号泣し、二人とも恐怖のため失禁していた。そして、小便を漏らし震える二人の前で、悲鳴を上げ続けていた優奈はとうとう口から血を吐き出す。

「ごっばぁっ」

ごぼごぼと口から血を吐き出す優奈の体が細かくぶるぶると震えている。

「嫌ぁーっ怖いぃーーーっ」

柚月と莉子は身体を硬直させ悲鳴を上げる。しかし、二人とも無意識に足を大きく開き、小便を漏らすその股間を露に晒していた。

「あ・あ・あ・あ・・・」

ニードルが優奈の性器に深く突き刺さるにつれ、泣き叫び絶叫していた優奈の悲鳴に力が無くなってくる。そして、その身体がビクンビクンと大きく痙攣をはじめた。すでに苦痛のため枯れることなく涙を流し続ける優奈の両目は焦点を失っていた。

柚月と莉子の二人は大声で泣きながらも残酷に処刑されていく優奈から目を離せずにいた。その優奈の白いブラに包まれた右胸の先端、ポッチリとした小さな突起から点滴の長い針が深く突き刺され薬剤が注入されていく。

「う・あ・・」

ほどなく優奈は覚醒し、再び自分の身体に刻まれた凄まじい痛みに絶叫する。

「痛いよぅ痛いよぅ・・」

性器を串刺しにされながら気絶することも許されず、優奈は処刑されていく恐怖と苦痛と絶望で発狂寸前の状態になっていた。

「もう、殺してくださいぃぃっ」

血を吐き泣きながら哀願する優奈の顔に、優奈が漏らした大便が擦り付けられ口の中にも大便が押し込められる。優奈は涙を流し口の中の大便を飲み込んでいく。次から次へと押し込められる大便を優

奈は苦しげに飲み込み続け、とうとう自分が漏らした大便全てを再び身体の中に戻していた。そして、優奈に大便を食べさせる事を終えた葉月は、再びニードルを握り優奈の性器に突き立てていく。１メートル以上あった処刑用ニードルは、今や葉月が握る僅かな部分を残し優奈の性器から体内に突き刺されていた。

「う・あ・・、こ、殺してください・・」

大便まみれの顔で涙を流し苦しげに呻く優奈を満足気に眺めた葉月は新しく処刑用ニードルを手にし優奈の尿道に先端を当てた。そして瀕死の優奈の尿道に突き刺していく。

「あびゃぁぁぁーーーーーーーっ！！」

二本目のニードルが容赦なく優奈の尿道を引き裂いていく。そして、優奈の膀胱を呆気なく破壊する。尿道を裂かれ膀胱を貫通させられた優奈はまるで断末魔の悲鳴のような大声を上げ苦しんだ。しかし、葉月はさらに凄まじい苦痛を優奈に与えるため、二本のニードルが突き出す優奈の股間下に巨大なバーナー状の処刑具をセットする。そして、柚月と莉子が泣きながら見つめる前で点火した。

「ひぃぃーっ熱いぃーーーっ！！」

串刺しにされた股間をバーナーの炎で熱せられ優奈は悲鳴を上げる。

「熱いぃーっ熱いよぉーーーっ！！」

泣き叫び苦しむ優奈のブルマにバーナーの青白い炎が燃え移る。そして、熱せられた二本のニードルは真っ赤に焼け、優奈の性器は外と内両方から焼かれはじめた。

「熱い、熱い、熱い、熱いぃーーーーっ！！」

性器を燃やされ発狂したように泣き叫ぶ優奈を葉月は嬉しそうに眺め、鞭を手にした。そして、串刺しにされ燃やされている優奈の性器に思い切り鞭を叩き込んだ。

「あーーーっあっあっあっ・・」

悲鳴を上げながら優奈はすでに自分の性器が何をされているのかさえ分からなくなっていた。ただ自分の性器を襲う凄まじい激痛に泣き叫び続けていた。

「う・・あ・・・・」

串刺しにされた性器を焼かれながら鞭で打たれていた優奈の悲鳴がついに途切れ、性器を鞭打つ打撃音だけが響きはじめた。葉月は静かになった優奈に不満の様子で、さらに激しく優奈の性器を鞭打ちはじめる。しかし、優奈は再び悲鳴を上げることはなかった。

「優奈ちゃん、死んじゃった」

柚月と莉子は涙を流し大声で泣いていた。葉月は絶命した優奈をさらに辱めるため拘束具から外すと優奈の身体を床に投げ出した。そして、足首を掴むと足を大きく開かせブルマを切り裂く。そして、泣いている二人に優奈の処刑された性器を晒した。

「ひぃーっ」

柚月と莉子は哀れにも黒焦げの炭になっている優奈の性器に悲鳴を

上げ目を見開いたまま動けずにいた。股間以外は綺麗なままであるため、余計に優奈の性器が異様に映る。葉月は二人が見つめるなか優奈の性器からずるずるとニードルを抜き取ると抱え上げ大きな机上の台の上に仰向けに寝かせ大の字にベルトで拘束した。葉月は絶命した優奈の体をさらに破壊する考えだった。台には、台を縦断するように動く回転ノコギリが設置されている。そのノコギリが勢いよく回転を始め、大きく開いた優奈の股間の割れ目に迫っていく。

「う、嘘だよね」

震えながら見つめる柚月と莉子の見ている前で、優奈の性器の割れ目に回転ノコギリの刃が当たり血と肉片が飛び散る。優奈のクリトリスが一瞬で消滅した。

「ひぃぃーーっ」

回転ノコギリは優奈の性器を真っ二つに切断し、さらに優奈の体を切断していく。そして、震える柚月と莉子の眼前で優奈の体は真っ二つに切断されていた。

6、処刑前の準備

6、処刑前の準備

優奈が残酷に処刑され、残った柚月と莉子は恐怖で震えていたが、もう二人の運命もあの場所に出品された時点で尽きていた。次に葉月が狙いをつけたのは莉子だった。葉月は莉子の首輪に付けられたロープを外すと改めて鎖を取り付け、それを引いて歩かせる。莉子は鎖に引かれるままヨロヨロと歩くが、足首に装着された足枷に付けられた重りの為うまく歩けない。

「早く歩けないなら、お仕置きをしてあげるわ」

葉月は莉子の着ている服をカッターで切り裂いていく。ポロシャツが剥ぎ取られ、現れた白いスポーツブラも切り裂かれ上半身が裸にされる。そして、白いスコートも剥ぎ取られ残ったアンダースコートも切り裂かれ下半身も剥き出しにされた。莉子のツルツルの恥丘の下に割れ目が見えている。

「いい格好ね。さあ、歩きなさい」

葉月は太ももに食い込む白いサイハイソックスだけの姿になった莉子に命令する。しかし、裸にされたからといって、腕を縛られ足枷に重りを付けられた状態で上手く歩ける筈がなかった。莉子は変わらずにヨロヨロと歩いている。もちろん本人は必死に歩こうとしているが、無理な話だった。

「辱しめるだけじゃ駄目なようね」

葉月は鎖を持ったまま莉子の後ろに回り、乗馬鞭で莉子を打ち始めた。

バシィッ！バシィッ！バシィッ！！

鋭い音が響き渡る。

「あひぃぃぃーーーーっ！！」

莉子は悲鳴を上げ、必死に足を動かし若干歩く速度が速くなったが葉月はさらに激しく鞭を叩き込む。それは、設置された拘束台の前に莉子が辿り着くまで続けられ、ようやく莉子が拘束台の前に着いた時には背中や尻が、みみず腫れで真っ赤になっていた。

「よし、そこでマンコが私によく見えるように足を大きく開いて腰を突き出して立ちなさい。顔も上げて胸も突き出して姿勢よく立つのですよ」

莉子は命令された通り、足を大きく開いて顔を上げ姿勢を正す。葉月は後ろの拘束台から伸びた頑丈な鉄のステーに付いたベルトで莉子の体を順番に拘束していく。足首、脹ら脛、太もも、腰、胸、首、頭。ここまで厳重にする必要があるのかと思える程、莉子の体にはベルトが深く食い込み、足を開いたまま身動き一つ出来ないよう“人”の字型に完全に拘束された。

「さてと……。あなたは少し変わった趣向で処刑してあげるわ。あなたを発狂させてから処刑します。メスを発狂させて廃人にするの

って楽しいわ。ほら、これを飲みなさい」

葉月は無理矢理、莉子の口に錠剤のような物を大量に入れる。莉子は噎せながらも次々に口に入れられる錠剤を飲み込んでいた。

「ふふふ。全部、飲んだわね。通常の百倍の量だから、効果はすぐ表れるわよ。次はこれを注入してあげる」

葉月はシリンジに入った紫色の不気味な液体を見せると莉子の肛門にシリンジの先を突き刺した。そして、紫色の液体を莉子の体内に注入していく。

「あうぅぅ、冷たいよぉぉ」

一本目が注入して終わると、またシリンジに容器から液体を吸いあげ莉子の肛門から再び注入する。それを何度も繰り返され、莉子は体の中に紫色の液体を2リッター近く注入されてしまった。そして、葉月は莉子の肛門から液が漏れるのを防ぐ為、バイブ機能の付いた太く長いアナル詮を装着し、莉子の肛門を塞いでしまった。

「どう?だんだん乳首とマンコが火照っていい気持ちになってきたでしょう。あなたに飲ませたのも、おしりの穴から注入したのも即効性のある超強力な媚薬。普通に気持ちよくセックスする量の百倍よ。嬉しいでしょう。それに腸からはすぐに直接吸収されるから、もうマンコは我慢出来ない筈ね。１３才、まだ子供のあなたにメスの快感を味わわせてあげるわ」

さらに葉月は媚薬の入った注射器を持ち、莉子の右の乳首に針を突き刺し媚薬を注入する。

「どう？マンコが我慢出来なくなったら遠慮なく言いなさい」

莉子は顔を真っ赤にして、トロンとした目で口を半開きに開け、ハァハァと大きく息をしている。

「あ、あ、あ、あ、あ……」

だんだんと莉子の息が荒くなってきて声も漏れ出してきたが、葉月は左の乳首にも注射針を突き刺し媚薬を注入してしまう。

「あわわわわわわわわ……」

莉子は目を大きく見開き口を大きく開けたまま体はじっとりと汗ばみ乳首とクリトリスは固く勃起していた。

「まだまだ、もっと気持ちよくしてあげるわね。一番敏感な処に原液のまま注入してあげるわ」

葉月はまるで浣腸のシリンジのような大きな注射器を持つと、勃起している莉子のクリトリスに針を深く突き刺し原液のままの媚薬を大量に注入する。

「あっばぁぁぁーーーっ、あばばばばばばばばばばば……」

莉子は厳重に拘束されていなければもう立っていられない程、膝がガクガク震え快感に喘(あえ)いでいた。

「まだ、終わりではないからね。マンコの周りは集中的に徹底的に射ってあげるから」

葉月は注射器を手にしながら残酷にニヤリと笑う。

「マンコを媚薬漬けにしてあげるわ。もちろん、マンコの中にも射ってあげるから嬉しいでしょう」

7、無限の快感

7、無限の快感

媚薬の入った注射器を持った葉月は残酷に笑うと、莉子の会陰部にも注射針を深く突き刺し媚薬を注入する。さらに柔らかな膣前庭窟の尿道口と膣の間にも三ヶ所、クリトリスの根元の周囲にもぐるりと注射針を射ち込んで媚薬を注入してしまう。が、それで終わりではなかった。莉子の左右の大陰唇にも五ヶ所ずつ注射針を射ち込み媚薬を注入する。そして、さらに膣鏡を挿入し莉子の膣を大きく拡げると、膣壁にも注射針を突き刺し媚薬を注入し、奥に見える莉子の子宮にも容赦なく何ヶ所にも注射針を突き刺し大量の媚薬を注入する。莉子の子宮内も強力な媚薬で満たされた。

「あびゃぁぁぁぁぁーーっ!!ゆるじでぇぇぇーーっ!!マンコあづぐでじぬぅぅぅーーっ!!」

葉月は、その莉子の哀れで無様な姿を笑いながら、莉子のビンビンに硬く勃起しているクリトリスの皮を剥き、振動して刺激を与え続け、内側には鋭い針が無数に突き出ている一度装着すると切除する以外二度と外す事が出来ない電動リングを無常にもカチッと装着してしまう。

「はっびゃぁぁぁぁぁーーっ!!イク、イク、イッグウゥゥーーっ!!」

莉子は大きく開いた口から舌を突きだし涎を大量にだらだらと垂らして泣き喚く。バルトリン腺からも粘液を激しく分泌し、まるで漏らしたように股間はビショビショになり太ももまで濡らしていた。

「あはは、面白い。もっと気持ちよくさせてあげるわ」

葉月は笑いながら莉子の勃起した乳首に浸透性の高いクリーム状の媚薬を塗っていく。そして、クリトリスや性器の割れ目の襞の隙間にもたっぷりと塗り付け、さらに膣の中にも惜しみ無く大量の媚薬を入念に塗り付けた。莉子の乳首や性器の内部からも媚薬が沁み渡り、莉子の乳首は激しく天を突き、クリトリスは痛いほど固く勃起している。子宮は下がり、子宮口は大きく拡がり膣壁のバルトリン腺からは大量の粘液が分泌され膣からドボドボと流れ出していた。

「あびゃぁぁぁーーーーっ!!!だじげでぇぇーーーーっ!!!　もお、いぐうぅぅーーーーっ!!!!」

そして、葉月はそんな莉子のクリトリスに容赦なく電極を押し当て電流を流し、刺激を与えていく。

ブブブブブブブブ!!!!!!!

そして、どんどん電圧を上げていった。

「あぶぶぶぶぅぅぅーーっ!!だじげでぇぇーーーーっ!!!!
じぬう、もう、じぬうぅぅぅーーーっ!!!」

ビシャーッ!!!

莉子の体がガクガクと震え、大量の汗も流し、性器から激しく潮が

大量に吹き出した。莉子の顔は真っ赤に火照り涙と鼻水と涎で無様に汚れ、大きく口を開け舌を突き出し白目を剥いている。

「13才のメスが潮を吹き出すか。いいねぇ。いい気持ちだろう。ほら、もっと飲ませてやるよ。嬉しいだろう、このまま永遠にイカせ続けてやるからね」

潮を吹いて悶える莉子の大きく開いた口を押さえ付け媚薬の錠剤を、また大量に無理矢理飲ませた葉月は莉子の耳元に口を近づけて囁く。

「もう聞こえていないだろうけど伝えておくわ。この媚薬は長時間効果が持続するの。それを、これだけ大量に飲まされて、注入されて、塗られているわけだから、可哀想にあなたはもう二度と元の人間には戻れない。このまま、理性を破壊されて、あなたの脳は快感だけに塗り潰されていく。あなたの脳は何も考えられなくなり無様に廃人になるの。でも、もっと媚薬を追加していってあげるわ。あなたが発狂しても、さらに快感を与え続けてあげる。もちろん、媚薬だけでは不満でしょうから性具も使ってさらに刺激を与えてあげるわ。とことん堕ちてもらってゴミ以下の存在になってもらうからね。ああ、楽しみ」

葉月は莉子に別れを告げるように言うと、もう焦点の合っていない莉子の涙が溢れる目に黒い布をぐるぐるときつく巻き付け目を塞いでしまう。

「視覚を奪われると、性感帯はさらに敏感になるのよ。まあ、もうあなたは何も見えてないでしょうけどね」

そして、口にも30センチはある電動式の男根の付いた口枷を莉子の喉奥深くまで無理矢理押し込み、喋れないように口も塞ぐ。

「メスは喉も性感帯だからね。忘れずに刺激してあげるわ。あなたは幸せね。ここまで徹底的に同時に性感帯を刺激してもらえるメスはいないわよ」

葉月は莉子に口枷を装着した後、さらに媚薬を注入しようと注射器を手に取ってから、ふと考える。

「いちいち注射するのも面倒だからイルリガートル使って媚薬を注入し続けるようにしてあげるわ」

葉月はいくつかのイルリガートルに媚薬の原液を満たすと、それを莉子の左右の乳首、クリトリス、膣前庭窟、会陰から媚薬を注入するように点滴針を突き刺しセットした。これで莉子は常に強力な媚薬の原液を体内に注入され続ける事になる。もう莉子には発狂して廃人になる以外の道は残されていなかった。

「それじゃ、性具もセットしてもっと快感を得られるようにしてあげるわね」

葉月は莉子の乳首に、振動し電流も流せ内側に針の付いた乳首リングを装着する。そして、莉子の尿道にもバイブ機能付きの太く表面がヤスリ状に加工されたプジーを膀胱まで突き入れた。膣にも強力な振動と回転を与える太いバイブレーターを奥深く子宮まで挿入して固定する。

「さあ、準備完了。一斉に電源を入れますよ」

葉月は、全ての性具のスイッチを一度に入れる。足を開いたまま目も口も塞がれ完全拘束された莉子は媚薬を飲まされ、媚薬を塗られ、

媚薬を注入されたうえに、さらに性具で女の性感帯全て、喉、乳首、クリトリス、尿道、膣、肛門を激しく刺激され続け、その快感にもう莉子の理性は崩壊し全身汗まみれで喘ぎ悶えていた。

「ふごぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーっ！！！！」

莉子は塞がれた口で、まるで獣のように激しく咆哮する。そして、莉子は性器から潮を吹き続け、イキ続けていた。

「この状態で2時間も放置すれば、どんなにしっかりしたメスでも発狂して廃人になるのよ。メスの体は意思に関係なく発情するからね。あなたは一晩放置して楽しんであげる。全てのメス穴から分泌液を垂れ流して休む事も寝る事も出来ずに一晩中イキ続けなさい。13年しか生きていないあなたの最初で最後の文字通り気が狂う程の快感を存分に味わうといいわ。もうすぐ、あなたは人間ではなくなって、ただのモノになるからね。さようなら」

笑いながら葉月は、狂っていく莉子の姿を残さず撮影する為、機器をセットする。そして、強制的に惨めに発狂させられる莉子の哀れな姿を震えながら見ている柚月に向かって歩いてくる。そして、残酷に柚月に告げた。

「あなたは私の好みだから、今あそこで悶えているメスみたいに快感は一切与えないわ。あなたのこの顔が苦痛に歪んで泣き叫ぶ姿を想像すると興奮してくるの。だから、徹底的に痛め付けて耐えられない痛みで発狂させてあげる。どれだけの目にあえばあなたは狂うのかしら？少しずつ解体していってあげようか？マンコをバラバラにバラすのは決定だけどね。バラしたマンコは記念に保存しておいてあげるから、心配しないで……。あなたの子宮、卵巣、膣、クリトリスに小陰唇。それを眺めながら私はオナニーする。いけない、

もう濡れてきたわ。フフッ楽しみね」

柚月は、自分の下腹部が切開され子宮や卵巣が取り出される姿を想像し、あまりの恐怖にシャーッと勢いよく小便を漏らしていた。

「あらあら、もったいない。足、早く開きなさい」

葉月は柚月の股間に口をつけると、柚月の漏らす小便を飲み始めた。

「ああ、好みのメスのオシッコは美味しいわ」

柚月の漏らす小便を全て飲み干した葉月は、柚月の太ももを濡らしていた小便も舌できれいに舐め尽くす。

8、処刑へのカウントダウン

8、処刑へのカウントダウン

柚月が恐怖のあまりシャーッと漏らした小便を飲み干した葉月は、ブルブルと震えている柚月の顔を見つめる。スクール水着姿で拘束され怯える柚月の溢れる涙も舌で舐めとった葉月は満足そうに微笑む。

「お漏らしなんて良いわね。初々しくて、可愛いわ。そうだ、膀胱も保存してあげる。美味しいオシッコがここに入っていたかと思うと興奮するわ。それに、あなたにはこれを射ってあげるわね」

葉月は太い注射器を鞄から取り出し、足を大きく開きなさいと命令する。柚月が足を開くと葉月はスクール水着の股間を捲り、柚月の性器を指で開きクリトリスを露出させ皮を剥く。そして、クリトリスの頂点へ注射器の針を突き刺した。

「痛いぃぃぃーーーっ!!」

柚月が悲鳴を上げるが葉月はかまわず注射器の針を根本まで深くクリトリスに突き刺し、チューと薬剤を注入する。

「これは神経を過敏にする薬。意味が分かる?これであなたは通常の何倍も痛みを強く感じるのよ」

葉月は、そう言いながらもう一本注射器を取るとまた柚月のクリトリスに深く突き刺した。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ！！！！いだいぃぃぃぃーーーーっ！！！！」

柚月は絶叫し、子供のように号泣する。

「どう？さっきよりかなり痛く感じるでしょう。もっともっと射ってあげるわ」

泣き叫ぶ柚月のクリトリスに葉月は残酷に何本も注射を射ち続けた。柚月はクリトリスから何回も薬剤を注入され半狂乱になっていた。大量の薬剤を体の中に入れられ神経が過敏になった柚月はもう、少し注射器の針を刺されるだけで体を裂かれたような激痛がはしり獣のように絶叫し口から泡を吹いていた。

「これも射ってあげるわ」

葉月は柚月の左の乳首に注射器の針を刺し別の薬を注射する。

「これは強心剤。あなたが痛みのショックで死なないように心臓の力を上げておくね」

柚月は痛みの感覚を何十倍にも上げられながら、ショック死はしないように処置される。

「ううぅ、お願いします。許してください。怖いですぅ」

柚月は泣きながら葉月に哀願する。

「あはは、やっぱり良いわ。あなたの泣き顔、興奮する」

葉月は大声で笑うと、柚月の頬を平手で打つ。

パーンッ！！

「ひぇぇぇーーーっ！！」

柚月は断末魔の悲鳴のように絶叫する。

「どう？普通のビンタでも相当痛いでしょう。もっと、注入してもっと痛覚を敏感にしてあげるわ」

柚月は遠目にも分かるほどブルブルと大きく震えていた。

「お願いします。普通に処刑して下さい。マンコ、切り刻んで構いません。でも、薬はもう許して下さい。怖いですぅ」

哀れに震えて泣きながら必死にお願いする柚月だったが、葉月はその柚月の姿を見てまた興奮していた。

「ああ、いいわぁ。興奮する。もっともっと注入して息がかかっただけで激痛が走るようにしてあげるわ」

「いやぁぁ、許してくださいぃぃぃ」

大声で泣き叫ぶ柚月の股間にブスブスと注射針を突き刺し、葉月は大量に薬を注入していく。それも一回ではなく二回、三回と続けてだ。

「あぎゃぁぁぁーーーーっ！！」

注射針を股間に刺される度に柚月は絶叫した。楽しそうに薬を注入していた葉月だったが、そのうちに手持ちの薬が全て無くなってしまう。残念そうに立ち上がった葉月は号泣している柚月に告げる。

「さてと、あなたにはここであの悶えているメスが発狂して処刑される様子を見ていてもらうわ。激痛で目を開けていられないかも知れないけどね」

葉月は傍らに備え付けられている三角木馬を指差すと首輪に付いているロープを外し引き摺るように柚月を三角木馬の横に連れて行く。そして、また首輪にロープを取り付け、ウィーンと強力なモーターで首吊りのように柚月の体を引き上げていった。両腕を縛られたままブラブラと首吊りで揺れている柚月を三角木馬に跨がらせると、今度は三角木馬の上に降ろしていった。

「あぎゃぁぁぁーーーーっ！！！」

柚月の割れ目を左右に割り三角木馬の鋭角が食い込んでいく。痛覚を敏感にされている柚月には、まさに体を性器から裂かれるほどの激痛だった。

「あなたの悲鳴、興奮するけど少しうるさいかな」

葉月は三角木馬の脇に脚立を置くと上に乗り、獣のように咆哮する柚月の口に、先程切り裂いた莉子の汚れたアンダースコートを詰めていき、さらにその上にボールギャグの大きな玉を押し込んでベルトをきつく締め固定する。

「ふごぉぉぉーーーっ！！！！！」

それでも、まだ漏れる柚月の悲鳴に葉月はガムテープを何重にも貼り付け完全に柚月の口を封印してしまった。

「！！！！！！！！！」

声を出せなくなった柚月を満足気に眺めた葉月は脚立から降りると柚月の太ももにも革のベルトをきつく巻き付け、そのベルトの金具に追加の重りをぶら下げた。柚月は元々足首の足枷に付けられていた重りと、さらに太ももに追加された重りで足をピーンと伸ばし、股間の割れ目には激しく三角木馬が食い込んでいる。柚月は天を仰いで目から大量の涙をポロポロと溢していた。

「今、片側２０ｋｇか……。もう少し追加してあげるわ」

葉月は、柚月の足首にさらに重りを追加する。それも１つではなく、片側に２つだ。それだけでも、もう片側４０ｋｇ。両足で８０ｋｇになるが、太もものベルトにもさらに重りを追加する。けっきょく、片足に５０ｋｇ。合わせて１００ｋｇもの重りが柚月の足にぶら下げられた。

「！！！！！！！！！！！！！！！」

柚月の足は一直線に伸びきり関節はミシミシと音を立てている。柚月の恥骨はもう割れてしまいそうであった。三角木馬が激しく食い込むスクール水着の股間部に赤黒く血が滲んでいるのは、クリトリスが潰れてしまったのではと想像できる。柚月は涙と鼻水を大量に流し天を仰ぎ硬直したように同じ姿勢をとっていた。葉月は、その

柚月の激痛に苦しむ様子を嬉しそうに眺め鞭を持つ。

・・せっかくだから、もう少し痛め付けてあげるわ・・

葉月は、三角木馬に跨がされ苦しむ柚月に容赦なく鞭を叩き込んだ。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィッ！！！

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

柚月は鞭で打たれる度に、刃物で体を切り裂かれるような激痛を味わっていた。早く殺して下さい。柚月の願いはもうそれだけだった。葉月は笑いながら狂ったように柚月の体に鞭を思い切り叩き込んでいたが、しばらくして冷静に戻り鞭を置き柚月の様子を眺めた。そして、柚月がまだ息をしているのを確認し安堵する。

・・危ない、危ない。つい興奮して殺してしまうところだったわ。このメスにはもっともっと苦しんで死んでもらわないとね・・

今日はこれまでにしておくかと、葉月は柚月と莉子を放置し厳重に施錠すると処刑部屋を出ていった。しかし、葉月が居なくなったからといって二人の苦痛がなくなるわけではなかった。莉子は動くことも出来ず、激しく潮を吹き続けイカされ続けている。もうすでに莉子の脳は際限なく続く快楽で破壊されてしまっていた。莉子はもう、処刑されなくても人間として生活する事は不可能だった。それでも、この後何十時間も莉子は容赦なくイカされ続ける。そして、柚月も三角木馬に跨がされたまま苦痛に耐え続けなければならない。よく見ると柚月のスクール水着の尻の部分が黒く汚れ悪臭を放っていた。どうやら柚月は大便を漏らしてしまったようだ。

この二人の哀れな姿は処刑室に設置された何台ものカメラで監視されていた。

自室に戻った葉月は大型のモニターで柚月と莉子の無様な様子を楽しみながら、クッションの効いた豪華なソファーに腰を降ろし、良い薫りのする上等なブランデーのグラスを傾けていた。

9、処刑執行・莉子の最後

9、処刑執行・莉子の最後

翌日、葉月は笑みを浮かべながら処刑室に入っていった。モニターで予め確認してあるが、莉子はもう間違いなく発狂し廃人になっていた。莉子はもう人間ではなく、人の形をしたものとなっている。それでも、莉子はまだ潮を吹いてイカされ続けていた。柚月も同じ姿勢のまま固まったように動かない。途中で小便も漏らしてしまったようで、柚月に近付くと大小便のツンとする悪臭が葉月の鼻を襲った。重りを付けられピンと伸ばされ一晩放置された柚月の両足はもう使い物にならないだろう。筋肉は伸び切り関節はぐだぐだになり歩く事は出来なくなっているのは間違いなかった。

・・ふふ、このメスはもっともっととびきり酷い姿にして処刑してやるわ・・

柚月を見て残酷に笑った葉月は、予定通り先に莉子の処刑に取りかかる。莉子は爆薬で爆破して処刑するつもりだった。もう発狂しているので、痛めつけてもあまり意味がない。自分が何をされても分からない状態だろう。なので、普段はあまり使わない爆殺で派手に莉子の体を破壊する事にしたのだ。

・・今、気持ちよくなっているマンコを爆破して処刑してあげるわ。子宮、膣、膀胱、直腸、全部に爆薬を詰めてあげる・・

葉月は莉子に近付くと乳首に固定したリングを確認し、膣や肛門に挿入してある性具も抜いていく。膣のバイブレーターを抜くと、ブシャッと粘液が大量に吹き出した。そして、肛門からも液状の大便が勢いよく吹き出す。尿道も同様だった。尿に赤い血が混じったものが垂れている。そして、莉子の股間の3つの穴は、ぽっかりと口を開けたままになっている。もう、括約筋が弛緩し口を閉じる事はないだろう。だらしなく開いたままの穴を葉月は満足気に眺めた。そして、葉月は手際よくイルリガートルからの点滴針も抜き、莉子の口を塞いでいる口枷も外していった。最後に目隠しの布を外す。そして、莉子の目を指で拡げてみると、莉子の目はもう焦点が合わず何を見ているのか分からなかった。

「あぴゃぱぱぱぱぱぁぁーーあぴゃぁぁーー」

だらしなく涎をダラダラ垂らし、もう莉子は何を言っているのか分からなかった。その莉子の姿に満足した葉月は、器具を使い、まず莉子の尿道から爆薬を詰めていく。莉子の膀胱の中にまで大量の爆薬を詰めた葉月は、次に膣を拡げ子宮の中にも爆薬を詰め、膣にも詰められるだけ爆薬を詰め込んだ。

「あひゃーひゃー」

性器に爆薬を詰められて気持ち良いのか莉子は声を上げている。そして、葉月は爆薬がこぼれ落ちるのを防ぐ為、針と糸でチクチクと莉子の膣を縫い合わせてしまった。さらに念のため小陰唇も縫い合わせていく。導火線だけが莉子の尿道と膣から出ている。最後に莉子の肛門から直腸の中にも爆薬を詰め、肛門も縫い合わせる。

「これだけでも爆破すれば絶命するのは間違いないけど、頭も無様に吹き飛ばしてあげるわ」

葉月は莉子の耳、鼻と爆薬を詰め、最後に口中に導火線の付いた丸い爆弾を押し込み、莉子が口から吐き出してしまわないようにガムテープで口を塞いだ。これから自分は処刑されるというのに莉子は虚ろな目で宙を見つめ、へらへらと笑っているようだった。葉月は最後に直径3メートルほどある円筒形の透明な筒を莉子に被せて周囲を覆っていく。それは強化ガラスで作成され、爆発の衝撃にも耐えられるものだった。

「こうしないと周りに血や肉片が飛び散って掃除が大変だからね」

誰にともなく言う葉月は、莉子の処刑の準備が整い柚月の様子を見るが、柚月にはもう莉子の処刑を見ている余裕はないようだった。自分の股間を襲う凄まじい痛みに辛うじて耐えている。そんな様子であった。痛覚を敏感にされている上に、一晩も放置されては正常な精神でいられる方がおかしい。それでも、柚月はまだ発狂してはいないようだった。

・・このメス、予想通り頑張ってくれて嬉しいわ。早く処刑して泣き叫ぶ顔が見たいわね・・

葉月は逸る心を抑えつつ、莉子の処刑をまず執行する。といっても、導火線に点火するだけだ。簡単な処刑である。

ジジジジッ！

導火線は微妙に長さを変えてあるので、同時に点火しても爆発する順番が異なる。まず、肛門。次に膀胱。そして、子宮。特に多量の爆薬が詰めてある子宮と膣が爆発するすれば、下腹部の周りは全て吹き飛ぶだろう。その後、僅かな時間をおいて頭部の口に入れた爆

弾が爆発する。頭を吹き飛ばされ莉子は完全に絶命する事になる。

ジジジジジジッ！！

導火線がどんどん燃え、短くなっていく。もう、莉子がこの世に存在していられるのも後僅かだ。葉月はワクワクしながら、指で柚月の目を開けたまま押さえつけ莉子の最後を見せつける。

バ、バ、バーンッ！！！

肛門、尿道、子宮の順に連続して爆発し、円筒形の透明な筒の内側に血と肉片がべっちゃりと貼り付いた。莉子のヘソから太ももの中ほどまでの下腹部が消滅してしまっていた。

ジジジジ

そして、頭部へ向かう導火線が短くなっていく。まず、耳。

パーン！！

莉子の両耳が吹っ飛び血が噴き出す。次に鼻。

パーン！！

莉子の鼻も失くなり、血が噴き出した。そして、最後の導火線が短くなっていく。葉月は我慢できずに自分の性器に指を当て自慰を始めた。

ハァハァハァハァ……

葉月の息遣いが荒くなっていく。

バーンッ！！！

「あぁぁーん……」

莉子の頭が吹き飛んだ瞬間、葉月は頂点に達していた。哀れな莉子は胸部と腕と足だけが残り、残った部分から血を噴水のように吹き出していた。

「もう、我慢できないわ。あなたもすぐに処刑してあげるわね」

葉月は、お気に入りの柚月を処刑する興奮で、また性器を濡らし始めていた。

１０、性器を解体される柚月（前書き）

柚月の処刑が開始されます。
今回は内臓抜き取り等の残虐な描写があるので、苦手な方は注意して下さい。

１０、性器を解体される柚月

１０、性器を解体される柚月

三角木馬から柚月を降ろした葉月は処刑台の上に仰向けに柚月を寝かせ〝大〟の字に固定する。そして、少し考えた後スクール水着を切り裂いていき、パンティストッキングも破き、太ももに食い込むサイハイソックスだけの姿にする。

・・この体もいいわぁ。ほとんど膨らみのないツルペタの胸に寸胴の体型。つるつるの恥丘にまだきれいな割れ目。この無垢な感じが堪らないわぁ・・

葉月は処刑台の上に乗ると、柚月の体を跨いで、柚月の体を見ながら自慰を始めた。

ハァハァハァハァハァハァ

葉月の呼吸が荒くなり、バルトリン腺から分泌された粘液がぼとぼとと柚月の体に滴り落ちる。

「ほら、何、惚(ほう)けているの」

虚(うつ)ろな目で宙を見つめる柚月の顔を踏みつけて、舐めなさいと命令する葉月。柚月は泣きながら葉月の足の指を咥えて綺麗に舐めていく。１０本の足の指を全て舐めさせた葉月は、今度は口を大きく開

けろと命令する。

「こぼしたらどうなるか、分かるよね」

葉月は大きく開けた柚月の口の中に放尿する。柚月は口の中に貯まる葉月の尿をこぼさないように必死に飲み込んだ。泣きながら小便を飲む柚月の顔を見て葉月はまた興奮してきた。そして、処刑台から降りると、スパンキング板を持ち柚月の小さな胸を思い切り叩き始めた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

「あぎゃっあぎゃっあぎゃっあぎゃっ」

悲鳴を上げる柚月の胸が真っ赤に染まるが、構わずに葉月は叩き続ける。

「ほら、ここも打ってあげる」

葉月は柚月の小さな胸から、こんもりした恥丘へと狙いを変える。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

「あひゃあひゃあひゃあひゃあひゃぁぁぁ」

柚月の恥丘も赤く染まっていく。

ハァハァハァハァハァハァハァハァハァ

・・ああ、もうダメだ。早く、このメスが絶望に沈む顔を見ないと

もう収まらない・・

「ふふ、それではあなたの処刑を開始します。予定どおりあなたのマンコからバラしていくからね」

葉月は処刑台の上に〝大〟の字に固定されている柚月の体をさらに念入りに拘束していく。特に下腹部周辺は腰と太ももを厳重に数本の丈夫な革ベルトで台に完全に固定する。もはや何をされても柚月は動く事が出来ない。

「ううぅ、お願いします。せめて楽に処刑してください」

優奈も莉子も処刑され、もう自分の運命も変える事が出来ないと察した柚月は泣きながら葉月に必死にお願いする。

「何回も言うけど、あなたの苦痛に苦しむ顔が楽しいの。徹底的に痛めつけて処刑してあげるからね。もう覚悟しなさい」

葉月の残酷な言葉に柚月は子供のように号泣する。葉月は、その恐怖で泣き出している柚月の反応に満足する。

「まず、マンコを処刑するね。あなたの叫び声を聞けないのは残念だけど、さすがに処刑中ずっと泣き叫ばれたらうるさいから、また口は塞いでおくわ」

葉月は切り裂いたスクール水着の大小便で汚れた股間部分を柚月の口に詰めていき喉の奥まで押し込んで、さらに残りのスクール水着を柚月の口の中一杯に詰めガムテープで何重にも貼り付け完全に柚月の口を封印した。そして、柚月の頭を起こし自分の下腹部が見えるように固定する。

「さあ、準備完了。おっと、いけない。あなたが途中で意識を失わないように覚醒剤を射つの忘れていたわ」

葉月は急いで柚月の乳首に注射針を刺し覚醒剤を注入する。そして、銀色に輝くメスを握り柚月のヘソの下に狙いを付ける。

「さあ、いくわよ」

ドスッ！

躊躇（ちゅうちょ）なくメスを突き刺した葉月は、そのまま柚月の正中線を切り裂いていく。切開された柚月の下腹部から血が溢れ出す。

「！！！！！！！！！！！！！！！」

口を塞がれ声にならない悲鳴を上げ涙を流す柚月の顔を楽しそうに眺めて葉月は手を止める。

「可哀想に、痛いよねぇ。麻酔も打たず切られてるものね。それにさらに痛覚を敏感にしてあるからね。でもね、これからもっと痛くなるからね。もう、中学生のあなたなら我慢出来るよね」

柚月は下腹部を切開されたショックと激痛で大便を漏らしていた。葉月は、その柚月の姿を楽しそうに眺め、切り裂いた柚月の下腹部に手を入れ、恥骨を剥がすようにバリッと取り出す。そして、さらに奥に手を入れ何かを握りしめると、柚月の尿道から小便が噴き出した。そして、そのままそれを取り出した。柚月は自分の体の何かが抜き取られ、それはもう取り返しのつかない事だという実感があったが、激痛で何が取られたのか分かる筈もなく、また分かりたく

もなかった。が、葉月は嬉しそうに柚月の体から抜き取った臓器を見せる。

「ほら、こっちの硬い骨があなたの恥骨。そして、こっちがあなたの膀胱よ。きちんと保存しておいてあげるからね。もう、あなたはおしっこをする事も出来ないのね。もっとも、おしっこだけじゃなくて、もうすぐ何する事も出来なくなるけどね。あの爆発したメスと同じにね。あははははっ」

笑いながら、ずぼっと柚月の下腹部にまた手を突っ込んだ葉月は両手に1つずつ何かを握っていた。その小さな粒のようなものを柚月に見せる。

「この小さいの分かる？あなたの卵巣だよ。あなたのメスの大元の部分、無くなちゃったね」

柚月は涙を流し自分の体から抜き取られていく臓器を見つめていた。こんな事をされれば、もうショックで死んでいるか、気絶している筈なのに薬の効果で柚月は強制的に覚醒させられていた。葉月は続けて大きな臓器を取り出す。そこに付いているホースのようなものはメスで切断して柚月の眼前に晒す。柚月は気の狂いそうな激痛で体を痙攣させていた。

「ほーら、これが子宮だよ。膣は後で取り出すから切っておいたよ。もう、あなたはメスじゃないね。あははははっ」

高笑いする葉月は、柚月の子宮をホルマリンを満たしたガラスの器に入れる。処刑台の横の机の上には、柚月の膀胱と卵巣、そして、子宮を入れたガラスの器が並べられた。

「心配しないでね。出血なんかで殺してしまっては詰まらないから止血はしておくからね。まだまだ、もっとあなたを痛めつけてあげないとね」

少しでも早く死にたいと願っていた柚月だったが、その望みも葉月に断たれてしまった。もう、早く莉子のように発狂してしまいたかったが、それも薬で覚醒されてしまい、意識ははっきりしている。柚月はこの地獄のような激痛を味わいながら、葉月が誤って自分の心臓や頭を潰してくれないかと願っていた。

１０、性器を解体される柚月（後書き）

次回、この章の完結となります。
柚月の運命は変えられませんが、苦痛からは解放される事になります。

11、絶命する柚月（前書き）

いよいよ柚月の最後の処刑が執行されます。そして、この章の最終話となります。
酷い拷問を受けてきた柚月の最後の姿をご覧ください。

１１、絶命する柚月

１１、絶命する柚月

もう下腹部を切り裂かれ子宮や卵巣等を摘出されてしまった柚月の外性器にも最後の時が迫っていた。まず葉月はメスで柚月のクリトリスを切除しようとしたが、クリトリスはすでに潰れてしまっていた。

「あらあら、無様に潰れていますよ。可哀想に、そうとう痛かったでしょうね。あははっ」

潰れたクリトリスを見て大笑いした葉月は、それでも柚月のクリトリスを抉り取りガラスの器にポトリと落とす。そして、クーパーを手にすると柚月の小陰唇を引き伸ばしジョリジョリと切り取っていく。

「ほーら、２枚とも切り取ったからね」

ビラビラと切り取った小陰唇を柚月に見せた葉月は、次に膣をくり貫こうとして衝撃を受ける。

「あなた、処女だったの。まあ、この顔とこの体では分かるわね。一般的には需要なさそう……。可哀想ね、オナニーしか出来なかったなんて」

そう言いながらも葉月は残酷に柚月の膣をくり抜いていく。そして、ホースのような膣を柚月の目の前に晒す。

「あなたの処女膣だよ。可哀想だから処女膜貫通してあげるわ」

巨大な性具を持った葉月は、くり抜いた膣に性具を挿入していく。そして、激しく性具を膣に出し入れする。

「あははっ、ほら、気持ちいい。あなたの膣、激しく犯されているよ。凄いね、自分の膣が犯されているところ見られるなんて、嬉しいでしょう」

激しく性具を出し入れされる柚月の膣はボロボロになり破れてしまい原型を止めなくなっていた。葉月は残念そうに破れた膣を床に投げ捨てるとヒールでグリグリと踏みつけた。

「あははっ、もうあなたのマンコ失くなったね。どんな気持ち？メスの大事な部分、全部失くなったよ。痛くてそれどころじゃないか。ふふ、今度はあなたの四肢を切断するよ。この電動ノコギリで二の腕と太ももから切断してあげるからね。可哀想にあなたは芋虫になるんだよ」

葉月は切断する位置に赤い油性のマジックで線を書いていく。

「そうそう、四肢を切断する前に指も全部落としてあげるね」

大きなニッパーを手に取ると葉月は、柚月の右足の親指を挟み、バチンと切り取る。

バチン、バチン、バチン、バチン！！

「！！！！！！！！！！」

悶絶する柚月にかまわず、あっという間に柚月の右足の指が全て落とされてしまった。そして、次に左足の指も全て切断される。足が終わったら今度は手だ。葉月は忙しく動き回る。柚月は両手の指も全て根本から切断されてしまった。

「頑張ったね。ほら、あなたの指、全部無くなったよ。じゃあ、いよいよあなたの四肢を全て切断してあげるから……。相当、痛いけどまた頑張ってね」

果てしなく涙を流す柚月の顔を眺め、頭を撫でると葉月は楽しそうに電動ノコギリのスイッチを入れる。

キューン

モーター音が響き渡り、ノコギリが高速で回転を始める。葉月は、ノコギリの回転する刃を当てようとするが、そこでニヤリと笑う。

「1回で切断してしまったら詰まらないから、手首、肘、肩口と順番に切断してあげるわ。足も、足首、膝、太ももと3ヶ所順番に切断してあげる。ふふ、楽しそう」

葉月はそう言うと、柚月の右手首から切断していく。次に左手首、左足首、右足首と柚月の周りを周りながら切断していった。そして、右肘、左肘、左膝、右膝と進んでいく。柚月の手足はどんどん短くなっていった。そして、柚月の手足は全て切断された。

「ほーら、四肢切断完了。これであなたはツルペタで寸胴の胴体と

三つ編みの頭だけ……。さて、次はあなたの残った胴体を処刑するわね」

葉月は、拘束台のベルトから柚月の体を外し、次の準備に入る。最後の処刑だ。この処刑が終了すれば、当然もう柚月は生きてはいないだろう。柚月は苦しんで苦しんで苦しみぬいて死んでいく事になる。葉月は柚月の口に貼り付けていたガムテープを剥がし、口に詰めていたスクール水着を取り出す。

「がはぁっ」

柚月が苦しそうに息を吐き出した。そして、仰向けになったまま涙を流し絶叫する。手足の無くなった柚月はもう自分で動くことも出来ない。柚月はこんな状態で生きている自分が信じられなかった。性器を完全に破壊され、四肢も切断された。できれば手足を切断されている最中に死んでしまいたかった。

・・苦しい。痛い。もう嫌だ。もう早く死にたい・・

柚月は転がってこの台から落ちれば頭を打って死ねるかもと考え、転がろうとするが葉月に髪の毛を掴まれ押さえられてしまう。そして、そのまま三つ編みを持たれぶら下げられた。もはや何も抵抗出来ない柚月は三つ編みをロープに縛られ、ぶらーんと哀れに吊るされた。

「最後の処刑を執行するわね。あなたをこのまま吊り下げて、あそこのプールの中に降ろします。あのプールの中に入っているのは濃硫酸。その中に首まで浸けてあげるね。あなたは体を少しずつ溶かされていくの。どう?楽しそうでしょう」

「ひ、ひぃぃぃ。お願いします。許してください。もう私の頭を潰してすぐに殺してください」

恐怖で震え絶叫する柚月の体が吊るされたまま、濃硫酸プールの上に移動され、ぶらぶらと揺れている。そして、有無を言わせずゆっくりと濃硫酸に向かって下降し始めた。

「お願いぃぃーーっ許してぇぇぇーーーっ！！」

必死に許しを乞う柚月の腰が濃硫酸の中に浸かる。

「あびゃぁぁーーーーーーーーっ！！！」

ジューという音と共に不快な臭いが辺りに漂う。葉月は、わざとゆっくりと柚月の体を下降させていった。それでも、確実に柚月の体は濃硫酸の中に入っていく。

「んびゃぁぁーーーーーーーーーっ！！！」

柚月の体はもうツルペタの胸まで浸かっている。そして、とうとう首までどっぷりと濃硫酸の中に浸かってしまった。が、そこで葉月は柚月の体を一気に上昇させる。

ザバァと柚月の体が濃硫酸の中から引き上げられた。柚月の体は赤黒く溶けはじめていて見るも無惨な状態だった。

「あばばばばばばばばばばば」

柚月は意味不明な言葉を吐いているが、まだ生きていた。それを確認し葉月はまたゆっくりと柚月の体を下降させる。柚月はまた濃硫酸のプールの中に浸けられていった。そして、また首まで浸けると

再び上昇させる。どうやら、葉月は少しでも長く柚月を苦しめる考えのようだった。柚月は何度も何度も、濃硫酸プールに浸けられては出される事を繰り返されていた。絶叫していた柚月の声にだんだん力が無くなってくる。

そして、ついに引き上げられた時、柚月の首が千切れ、溶けて骨の見えていた胴体が濃硫酸のプールにドブンと落ちる。柚月の頭だけがぶらぶらと揺れていた。一番悲惨な処刑を執行されていた柚月がようやく苦痛から解放されて死ねた瞬間だった。

ぶらぶら揺れる柚月の頭を眺めながら葉月はポンと手を叩いた。

・・そうだ、この頭、剥製にして飾っておこう・・

葉月は自分のこの素晴らしい思いつきに興奮した。自分のお気に入りのメスの恐怖と苦痛に歪んだこの顔のまま剥製にして部屋に飾る。その横には柚月の子宮や卵巣も置いておく。

・・最高だわ・・

葉月は早速柚月の頭を剥製にする手配を始めた。

11、絶命する柚月（後書き）

お読みくださり有り難うございます。
感想頂けると励みになります。よろしくお願いします。
それでは、次章開始までしばらくお待ちください。

1、秋穂の性器鞭打ち

1、秋穂の性器鞭打ち

ステージの中央に進み出た秋穂はブルブルと震えていた。マークされている指定された位置で歩みを止めた秋穂は客席の方を向くと両手を上げ、足を大きく開いた。スポットライトの中、秋穂の小柄な姿が浮かび上がる。ポニーテールにした黒い髪に太い眉、ぱっちりと大きい瞳、小ぶりの鼻に小さな口。秋穂の顔は可愛らしいといえるが、どこか暗い影があった。それは、このような施設で育てられた女子の共通の影のように思われた。秋穂は珍しい濃い緑色のセーラー服を着ている。スカートも同じ濃緑のプリーツの入ったミニスカートである。足には黒いタイツかソックスを身に付け、黒いローファーを履いている。一見、秋穂はごく普通の真面目な中学生のように見えるが、この施設で育てられた女子である以上、普通の女子である筈がなかった。秋穂も、八千代や真弓同様の思考を持っているのである。自分の体を痛めつけてもらい、それを楽しんでもらう。自分の苦痛が大きければ大きい程、喜んでもらえる。秋穂の頭の中には、その事だけがインプットされていた。

「スカートを捲り、もっと大きく足を開くのです」

頭上のスピーカーから機械が喋っているような冷たい声で命令が告げられた。秋穂はすぐにスカートを捲り上げ、足を大きく開く。秋穂のスカートの下から純白の綿の下着が鮮やかに現れ、秋穂は黒いタイツではなく、太ももの付け根に食い込む黒いサイハイソックス

を穿いているのだと確認できた。

「これから、鞭打たれる場所を答えなさい」

再びスピーカーから秋穂に命令が告げられる。

「はい、秋穂のオマンコです」

考えるまでもなく秋穂にはすぐに分かった。こんなに大きく足を開いて無防備に晒している場所が鞭で打たれるに決まっている。秋穂は初めて性器を鞭で打たれる事にドキドキしていた。

・・これが性器調教だよね。秋穂のオマンコ、鞭で打つの楽しんでくれるかな？　思い切りオマンコを打って楽しんでもらえるよう秋穂も頑張ります・・

健気にも秋穂は膝を軽く曲げ、自分の股間を鞭で打ちやすいように姿勢を整える。そこへ、覆面を被った体格のいい男が二人、鞭を持ってやって来ると、秋穂の前後に立ち鞭を構えた。

「それでは、性器鞭打ちを開始します」

スピーカーから冷たい声が開始のアナウンスを告げたと同時に秋穂の後ろの男が、秋穂の性器に思い切り鞭を叩き込む。

バシィィィッ！！

「あうぅぅぅっ！」

性器を痛打され秋穂が悲鳴を上げる。次には秋穂の前の男が、秋穂

の性器に鞭を叩き込んだ。

バシィィッ！！

「あうぅぅぅっ！」

秋穂は、また悲鳴を上げる。男たちは交互に秋穂の性器に連続で鞭を叩き込んだ。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ

「あう、あう、あう、あう、あう、あう、あうぅぅぅぅ」

秋穂の顔はたちまち涙と鼻水で汚れていく。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ

歯を食い縛り必死に激痛に耐えている秋穂の尻から大きな音がする。

ぶっ、ぶっ、ぶぶうぅぅーーっ！

音と共に悪臭も漂った。秋穂は痛みに耐えるため下腹部に力を入れすぎ大きく放屁してしまっていた。性器を鞭打たれる度、ぶっ、ぶっと放屁する秋穂の姿に観客席から笑いが起こる。しかし、秋穂本人は痛みに耐えるのに必死だった。続けざまに自分の性器に叩き込まれる生まれて初めての激痛に気を失いそうになりながら辛うじて耐えていた。開いた足はガクガクと震え、顔は苦痛で歪んでいる。

ビシャ、ビシャ、ビシャ、ビシャ、ビシャ、ビシャ！！

秋穂の性器に叩き込まれている鞭の打撃音が変化したと思うと、秋穂の股間から透明な液体が湯気を立てて漏れていた。秋穂の下着の中心から溢れ出ている。秋穂は性器を鞭で打たれ続け、小便も漏らしてしまっていた。性器を鞭打たれて小便を漏らすのは、もう女子の定番となっていたので、観客席からはやっと漏らしたかという程度のもので、それが興奮させる要素にはならなかった。しかし、漏らしながら鞭打たれる秋穂の純白の下着の股間が赤く染まってくると観客を興奮させてくる。血の赤が目立つ純白の下着を穿いた秋穂の考えは的を得ていたといえた。

観客のボルテージが上がったところで一旦性器鞭打ちが停止され、秋穂は自己紹介するよう命令される。

「秋穂といいます。１５才、処女です。性知識は勉強していますが、実際に調教していただくのは今日が初めてです。ですので、思う存分秋穂を調教して楽しんでいただければと思います。最後に処刑されるまで頑張りますので、よろしくお願い致します」

涙声で自己紹介した秋穂は頭を下げる。

「性器を鞭打たれた感想を述べなさい」

頭上のスピーカーが再び秋穂に告げる。

「は、はい。初めてですので比較は出来ないですが、体がオマンコから裂かれるみたいにもの凄く痛いです。でも、秋穂のオマンコを鞭で打って楽しんでいただいてると思うと嬉しいです。あ、あの……。お願いがあります。秋穂はまだ調教初心者ですので失神して倒れて、せっかくの調教を中断させてしまうかも知れません。なので、秋穂の体を失神しても大丈夫なように拘束していただけると嬉しいです」

秋穂の要望は採り入れられ、性器鞭打ちが再開される前に拘束台が用意され秋穂は〝大〟の字に拘束された。その際にミニスカートは脱がされ、秋穂の下半身は下着とサイハイソックスが丸見えになる。秋穂はヘソまで覆う女児用の股上の深い下着を穿いていた。そして、秋穂の性器目掛けて鞭打ちが再び開始される。

ヒュッ！ヒュッ！

今度は二人の男が秋穂の後ろに立ち、二本の鞭が同時に秋穂の性器に叩き込まれる。

「あうぅぅぅっ！！」

秋穂は性器を激しく鞭打たれ泣き叫ぶが、入札用のランプは点灯しなかった。運営側も、先日も一人廃棄処分を発生させてしまい、かなりの損失を出してしまったので、なんとか秋穂をアピールしようとする。

「ここで一度、鞭の種類を変更します。まだ、商品を壊すわけにはいきませんが、この商品に一度だけ棘鞭を使用します」

このアナウンスが流れると観客席がざわついた。

「商品は覚悟が決まったら、自分で開始の合図を送りなさい」

秋穂も、まだランプが点灯していない事を認識していた。このままでは自分は廃棄処分されてしまう。

・・棘鞭……・・

それは処刑に用いられる凶悪な鞭であった。鞭の表面に無数の棘が植え込まれている。それは、一撃で肉を抉り切り裂く。この鞭で処刑された女子は例外なく発狂して、地獄の苦しみの中死んでいった。それが使用される。それも、敏感な性器に対してである。

・・怖いよぉ・・

なまじ知識がある為に秋穂は恐怖で震えていた。

2、容赦のない仕打ち

2、容赦のない仕打ち

秋穂は観客席からも分かるほどブルブルと大きく震えていた。その、可哀想なほど震える秋穂の前に棘鞭に持ち変えた男が立つ。秋穂が合図を送れば即座に秋穂の性器に棘鞭が叩き込まれる仕組みだ。が、秋穂はなかなか覚悟が決まらなかった。もちろん、このままでは自分は廃棄処分にされ殺されてしまう。分かってはいるのだが、自分の一番敏感な部分に叩き込まれる凶悪な棘鞭の事を想像すると震えが止まらなかった。

・・秋穂が無様な姿を晒すほど喜んでもらえるんだから、秋穂のオマンコを棘鞭で打っていただけばランプを点けてくださる方がいるよね・・

秋穂はようやく覚悟を決める。

・・秋穂みたいな女子は、痛めつけて楽しんでもらう以外何もないから、それを拒んだら何も残らない。秋穂はオマンコ殺されても我慢します・・

秋穂は大きく息を吸い込み深呼吸する。

「秋穂のオマンコを棘鞭で打ってください」

その瞬間、ヒュッという鞭が風を切る音が聞こえた。

ビッシャァーーッ！！

「あっぶうぅぅぅーーーーっ！！！！！」

棘鞭が思い切り容赦なく秋穂の性器に叩き込まれる。秋穂は天を仰いで絶叫し、口から泡を吹いて白眼を剥き失神していた。秋穂の股間は、丈夫な綿の下着のクロッチ部が棘鞭の一撃で抉り取られ、まだきれいな性器が剥き出しになっていた。秋穂の性器は、丈夫な綿の下着を穿いていたおかげで、鞭による打撃と微かなかすり傷だけで損傷なく無事だった。それでも、棘鞭による秋穂の性器への容赦ない一撃はインパクトが大きかった。それまで、点いていなかったランプが1つ点灯していた。

気絶している秋穂はそのまま商品チェックの部屋に運ばれていった。

★
★
★
★

秋穂が気が付くとそこは窓ひとつない部屋の中だった。両腕は後ろ手に縛られ、足も両足首がまとめて縛られコンクリート床の上に芋虫のように転がされている。声を出そうとして秋穂は口も塞がれている事に気付いた。ガムテープのようなものが口に貼られ声を出す事が出来なかった。そして、何やら話し声が聞こえる。

「この前、落札された3人セットのメスがいただろう」

「ああ、俺もその中の1人担当したよ。テニスウェアみたいの着てたメスかなぁ」

「そうなのか……。僕はスクール水着のメスだった。その3人、もう全員処刑されたらしいぞ」

「えっ……。早くないか、落札してからまだ間もないぞ」

「落札したのがあの女だからな。聞いたことあるだろ〝豪徳寺葉月〟」

「ああ、有名な女だな。あまり関わりになりたくない女だ」

「まあ、そんな女だからな。大金払って手に入れたメスをすぐ処刑してしまうんだよ。二人は串刺しに爆殺と、まあ普通らしいが、残りの一人はマンコバラされて四肢を切断されて硫酸のプールに入れられたらしい」

「うわ、またずいぶん酷い殺し方だな」

「その酷い殺され方したメスが、僕が担当したスクール水着のメスなんだよ。ここで本題だ。実はこのメスの処刑されてる姿が撮影されていて、あの女が売り出しているんだよ。僕もそれが欲しいんだけど、かなり高額でね。今度のサラリーで返すから少し貸してくれないか？」

「そんな処刑動画が欲しいのか。いいけどさ。メスの処刑なんてお前も廃棄処分のメスで散々やっているだろう。動画じゃなくリアルでさ……」

「いや、実はあのスクール水着のメス。けっこうというか、物凄く僕の好みだったんだよ。だから、あのメスがどんな風に泣き叫んで

苦痛に歪んだ顔して処刑されていったか興味があってね。好みのメスが絶望の中、殺されていくのって最高だろう」

「はぁ？お前もあの〝豪徳寺葉月〟と同じか。立派な趣味を持ってるな」

「恩にきるよ。今度、好きなもの進呈するから」

「それなら、俺は巨乳のスタイル抜群なメスがいいな。そういうメスを処刑するのがいい」

「お前もいい趣味持ってるじゃないか」

秋穂は、ここのスタッフの物騒な会話を聞いて内心恐怖で震えていた。もちろん自分は処刑される為に購入されたのだから、処刑されるのは当然の事だと思っている。でも、出来るだけ楽に処刑してもらえれば嬉しかった。

「この転がってるメスは、どんな風に処刑されるのかな？」

「ふうん、俺だったら穴という穴、全部壊してから、ゆっくり処刑するな。だいたい高い金払ってすぐ処刑しちまったら勿体ないだろう」

「僕もこのメスなら、じっくり痛めつけて処刑したいな。こいつのマンコは徹底的に破壊したいよ。いい声で泣き喚きそうだ」

「おっと、そろそろ目も塞いでおかないとな」

「あっ、いや。このメスは眼を潰しておいてほしいと要望があった

ぞ」

「そうなのか。本当だ。悪い、指示書チェック漏れてたわ。じゃあ、急いで潰しておこう」

スタッフの男二人はペンチを持ち、転がる秋穂に近付いてくる。男たちの会話が聞こえていた秋穂は、恐怖で泣きながら縛られている身体を動かし必死に逃げようとしていた。スカートが捲れ上がり、白い下着が丸見えになっている無様な秋穂の姿に男たちは爆笑する。

「アハハ、このメス逃げようとしてるのか。馬鹿だね、逃げられる訳ないじゃん」

「だいたい逃げようとするなんて、なってないな。目を潰す前に少しお仕置きしておこうか」

一人の男が秋穂の髪をむんずと掴むと持ち上げる。そして、そのまま首にロープを巻かれ吊り下げられた。

「ふんごぉぉーーーーっ!!」

塞がれた口で秋穂が悲鳴を上げる。男たちは秋穂の爪先がやっと床につく微妙な高さに調整し、秋穂の前に立つと拳を握り締めた。

「さあ、いくぞ!メスッ!」

男は思い切り秋穂の下腹部に拳を叩き込んだ。秋穂の身体が浮き上がるほどの一撃だ。

「ふんごぉぉーーーーっ!!」

秋穂が絶叫するが、一撃で許される筈がなかった。続いてまた下腹部に容赦ない一撃が叩き込まれる。秋穂は恥骨に激しい打撃を受け漏らしてしまっていたが、お構いなしに殴られ続ける。

「ふおぉぉぉーーーーっ！！」

サンドバッグのように殴られ続け秋穂は意識が薄れてきたが、そこで、男たちは殴るのを止め、いよいよ眼球破壊に着手する。

3、最後に見たもの

3、最後に見たもの

秋穂は背後から万力のような器具で頭をがっちりと固定される。もう1ミリも頭を動かす事は出来なかった。

「でも、何で目を潰すのかな？　別に目隠ししとけばいい話じゃないか」

「ああ、何やら落札者が自分の顔を見られたくないらしい。自分の顔を鏡で見るのも嫌らしいから、よほど顔に自信がないんだろう」

「それで、奴隷の目を潰すのか。別に奴隷になんか見られても良いと思うけどな」

「普通はそうだろうな。まあ別に俺たちは言われた事をやればいいだけだからな」

男たちは、そこで会話を打ち切ると、秋穂の目を潰すという作業に取りかかる。そして、涙を流す秋穂の目に使い込み錆びついたペンチが迫ってきた。その汚れはおそらく何人もの娘の体を破壊してきた汚れだろうと思われる。

「ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ」

秋穂の鼻息が荒くなってくる。そして、秋穂の左目の上下に錆びたペンチが入ってきた。

「ふごぅ、ふごぅ、ふごぅぅーーっ」

塞がれた口で秋穂が絶叫する。だが……。

グシャァ

あっさりと秋穂の左の眼球が潰されてしまった。

・・ひぐぅぅ、許してください・・

残った右目から大量に涙を流し、許しを乞う秋穂だが、男たちは何の感情もなしに事務的に秋穂の右目も潰そうとする。

「ちょっと、待った。ペンチで潰すのは簡単だけど、面白くないな」

「別に面白いも何もないだろう。仕事だからな」

「そうだけど、このメスももう何も見えなくなるんだ。１５才の処女と言っていたからな。最後に良いもの見せてやろうぜ」

男の一人はそう言うと自分の勃起した性器を秋穂の残った目の前に晒す。

「そんなモノ出してどうするつもりだ?」

「これで、このメスの目を潰してやるんだよ」

「そんな事して大丈夫か。殺したら懲戒処分受けるぞ」

「大丈夫さ。廃棄処分になったメスで何度も試しているからな。金は貸してやるから、黙っておけよ」

「本当か、ありがとう。それなら僕は見てないからどうぞご自由に。それにしても、お前も相当だな」

男は固定されて動けない秋穂の右目に勃起した自分の性器の先端を近付けていく。

「ふぐ、ふぐ、ふぐう」

手足を縛られ、頭も固定されて何の抵抗も出来ない秋穂は涙を流して震えている。その秋穂の眼前に男の性器が迫ってきた。頭を固定されている秋穂は動くことが出来ないので、されるがままである。男の手が秋穂の瞼を押さえつけ、目が閉じられないようにする。

「ふぐ、ふぐうっ」

秋穂は恐怖で細かく震えていた。

・・そんなとこに入れられたら死んじゃいます。秋穂は御主人様に処刑されるんじゃないの・・

迫ってくる男の性器に秋穂はもう失神してしまいそうだった。そして、その時はきた。

「はぶうぅぅぅーーーーっ！」

秋穂が悲鳴を上げるが構わず男は、秋穂の目に性器を突き入れてくる。秋穂がこの世で最後に見たものは、男のいきり立った性器だった。目に性器を突き入れられ秋穂は自分の眼窩の中で動く男の性器の感覚に塞がれた口で絶叫していた。自分の頭の中で性器が動いている。そのゾワゾワした感覚は筆舌につくし難いものだった。もし男がもっと深く性器を突き入れたら秋穂の命はそこで終わっていただろう。まさに死との紙一重だった。性奴隷として拷問され処刑される運命の秋穂であるが、このいつ殺されるのか分からない自分の眼窩を犯される行為には激痛と同時に恐怖を抑えきれずガタガタと小さな体を震わせ漏らしてしまっていた。

「ありゃこのメス、潮を吹くんじゃなくて漏らしてるぞ。まあ、快感なんかあるわけないしな。やっぱり、そんなとこ犯されるのは、こんな奴隷でも怖いのか」

もう一人の男は笑いながら眼窩を犯され小便を漏らす秋穂を見ていた。

ズボゥッ

秋穂の眼窩を犯していた男の性器が抜かれると、秋穂の右目からはドロリと血と精液と共に硝子体が流れ出してしまっていた。両目を破壊された秋穂は、もう何も見る事が出来ない。永遠の暗闇の中で生きる事になる。それだけではない。性奴隷として日々性器を調教、拷問される運命なのである。

秋穂は潰された両目を洗浄消毒され、ぐるぐると包帯を巻かれた。

そして、口を塞いでいたガムテープも剥がされる。

「よーし、準備ＯＫだな　それじゃ落札者に入ってきてもらおうか」

「目も潰したし両手の拘束もＯＫ、服装の乱れも直したし大丈夫だな」

男たちは話しながら頑丈なドアを開けると退室していった。一人残された秋穂はポツンと部屋の中央に立たされていたが、いつまで経っても人の入ってくる気配がない。秋穂はだんだんと不安になってきていた。ごく稀に、ランプを点けて権利を獲得してみたが、商品チェックする前にやはり要らないとキャンセルするゲストもいるらしいと聞いていた。商品チェック前であれば、まだ違約金も少ないので、そのような行動をとるゲストもいるのだ。その場合、他に商品チェックする者がいなければ、また出品される事になるが、コンプライアンスの関係で一度キャンセルされた事を明記しなければならず、その為再出品されても結局廃棄処分になる事がほとんどだった。

・・廃棄処分……・・

秋穂はそれだけは避けたかった。自分が誰からも必要とされていないと告げられるのと同義である。何の役にも立たない。何の価値もない。そんな悲しい自分には成りたくなかった。

・・お願いします。早く来て下さい・・

秋穂は祈っていた。どんな人でも早く現れてほしかった。そこから、調教と拷問の日々が始まり、処刑までのカウントダウンが始まるが、それでもここでゴミのように廃棄処分されるよりはマシだと思えた。秋穂は、例えどんな人生でも人に必要と思われるような人生を送りたかったのだ。その時……。

ギィィーーッ

重い軋むような音が聞こえる。頑丈な重い鉄の扉が開いた音だ。来た、秋穂はホッとしすぐに挨拶する。

「秋穂といいます。今回はありがとうございました。どうぞ、存分に商品チェックして下さい。御主人様の御命令で秋穂の両目は完全に潰されていますので御安心下さい」

「……」

入ってきた人物は何も言わず秋穂を拘束台の上に仰向けに寝かせる。そして、スカートを捲り、足を大きく開かせ固定した。目の見えない秋穂は、その人物が何をしているのか分からなかったが、その人物は秋穂の股間に顔を近付け臭いを嗅いでいた。そして、秋穂の臭いに納得したのか、ウンウンと二度頷くと今度はセーラー服を捲り、スポーツブラに包まれた秋穂の形の良い胸の膨らみを眺める。そして、また頷いていた。

それだけだった。あっけないくらいに商品チェックは終了した。秋穂ははれて性奴隷として購入される事が確定した。

★　★　★　★

そして、秋穂は豪邸の敷地内の池の畔にいた。秋穂は肩口までである黒のロンググローブと太ももの付け根に食い込む黒のサイハイソックスだけを身に付け大勢の男に囲まれていた。このお屋敷に秋穂が購入されて来てから二日目。きれいに晴れ渡り気持ちの良い穏やかな午前だった。

今日は秋穂の御披露目兼貫通式が開催されていた。秋穂を招かれたゲストが鞭で打ち、その後抽選で順番を決め秋穂を自由に犯す事が出来るのだ。秋穂は膣は勿論、咽喉も肛門も未経験の為、最初の一人はそれぞれ処女貫通を楽しむ事が出来るが、大体がこの屋敷に集まってくる人間はメス奴隷を犯すより、メス奴隷を痛め付ける方が好きな人間ばかりであるので、犯す順番よりも鞭で打つ順番の方に意識が集中していた。誰でも、もうぐったりしたメス奴隷を鞭打つよりも、活きのいいうちに鞭で打ち絶叫させたいと思うのが普通である。

「私は今日、自作の鞭を持参して来ましたよ。鞭とスパンキング板を合わせた平鞭です。ぜひ威力を試したいので、早い順番に当たって欲しいですね」

「はは、私も鋲を打ち込んだ特性の鞭を持ってきました。この鞭を使うとすぐにメス奴隷は失神してしまいますからね。昨年のこのお屋敷の御披露目でこの鞭を使っていきなりメス奴隷を壊してしまいましてね。皆さんの顰蹙をかいました。ですから今回は私は最後でいいと主催者の香坂氏に伝えましたよ」

集まった人々が楽しそうに歓談する中で、両腕を後ろ手に縛られ足を開かされ立っている秋穂は震えていた。目が見えない為分からないが、かなり大勢の人間がいるように思える。秋穂には事前にこの集まりで行われる内容が伝えられてある。

・・これから鞭で打たれて、犯されるんだ。やっぱり、オマンコばかり鞭で打たれるのかな。失礼のないように3つの穴をきれいにしておけと言われたけど、よく洗ったから大丈夫だよね・・

秋穂はドキドキしていた。これからの秋穂の反応で自分の価値が決

まる。そう思うと立派に務めあげないと、という重責がのし掛かってくる。そうしているうちに準備が整い、秋穂の御披露目が開始された。

「それでは一番の方、前に出てこのメス奴隷の好きな箇所を鞭で打って下さい」

一本鞭を持った男が一人前に出てくると鞭を構えて秋穂の前に立った。男の目は秋穂の股間に向いている。

「やっぱり、一発目はここだよな」

男はヒュッと慣れたように鞭を振り秋穂の性器に鞭を打ち込む。

ビシィッ!!

「いだあぁぁぁっ!!」

鞭は正確に秋穂の性器にヒットし、秋穂は絶叫する。

「おお、良い声で叫ぶじゃないか。三発しか打てないのが残念だな」

秋穂はじかに性器を鞭打たれ、その激痛に膝がガクガク震えていた。御披露目では鞭は一人三発までと決められている。女の象徴である〝顔〟、〝胸〟、〝性器〟に一発ずつ鞭打てるようにとの配慮であるが、どこを鞭打とうと自由なので、性器に三発打ち込む人間もおれば、尻や背中を打つ者もいる。

「オーソドックスに顔と胸を打とうと思ったが、これなら残りも幼い割れ目に打ち込んでやるか」

男は笑いながら鞭を振り、秋穂の性器に二撃目も打ち込んだ。

ビシィィィィッ！！

「いだあぁぁぁーーーーっ！！！」

秋穂は思わず足を閉じそうになるのを必死に堪えていた。秋穂は眼球は潰されてしまっているが涙腺は残っているので涙が流れ出していた。眼窩に埋め込まれているアニメキャラクタのような義眼から涙が溢れている姿はシュールだった。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

泣きながら足を開いて立つ秋穂の性器に三発目の鞭が叩き込まれた。

ビシィィィィッ！！

「いだあぁぁぁーーーーっ！！！」

秋穂の顔は一人目が終了した時点で、もう涙と鼻水とよだれでグショグショだった。

4、女の大切な部分

4、女の大切な部分

秋穂は一人目の鞭打ちが終了した時点で早くもフラフラになっていた。両目が潰されていて視覚がない為に、余計にふらついてしまう。二人目のゲストが秋穂がふらついていて狙いが定まらないとクレームを訴えたので、急遽秋穂は拘束される事になった。足は足首に装着されている足枷に鎖が付けられ、足が閉じられないように拘束される。背中で縛られていた両腕は頭上に上げられ、手首に装着された手枷に頭上からの鎖が付けられ拘束されてしまう。秋穂は大きく足を開き、腕を上げたまま、顔面、胸、股間を無防備に晒す姿勢でがっしりと拘束されてしまった。

「いいね、女の大切な部分を思い切り潰してやる。思う存分泣き叫べ」

基本的にゲストは男も女も頭に被っているマスク以外全裸である。男の股間では、可愛らしい秋穂を痛め付ける興奮で性器が激しく猛り立っており、マスクの下では凶悪な笑みを浮かべていた。

「まずは当然ここだっ」

バシィィィッ！！

「あぎゃぁぁぁーーーーっ！！」

強烈な一本鞭の一撃が、秋穂のこれ以上ないほど開かされた股間の中心の割れ目を襲う。秋穂は天を仰いで絶叫した。

「いだい、いだい、いだい」

秋穂は柔らかな性器に思い切り鞭を打ち込まれ号泣している。

「いい声で泣きやがる。もう一発そのマンコに打ち込んでやりたいが、その膨らみかけた胸も痛め付けてやりたいしな」

男は秋穂の胸に狙いをつけ鞭を思い切り振った。

バシィィィッ!!

「ひぎぃぃぃぃーーーっ!!」

男の鞭は正確に秋穂の左右の乳首を横一直線に打ち据える。この一発で秋穂の胸には赤いみみず腫れが浮かび上がっていた。

「最後の一発はその可愛い顔に入れてやる。覚悟しろっ」

男は泣いている秋穂の顔面に容赦なく鞭を叩き込んだ。

バシィィィッ!!

「あびゃぁぁぁーーーーっ!!」

秋穂の顔面にも無惨にみみず腫れが出来ていた。秋穂は女の子の象徴ともいえる3ヶ所を鞭打たれ無様に号泣している。男は、その秋

穂の姿を見て名残惜しそうにしていたが、次の者に席を譲った。そして、次に秋穂の前に立ったのは女性だった。目の周りだけ覆うマスクを着けている。

「私の特性の鞭でマンコを叩き潰してあげるわ」

女は軽く持参の鞭をヒュッと振る。それは棘鞭と呼ばれる鞭の一種であった。だが、本当の棘鞭では一発で対象物を破壊してしまう。そこで女は工夫し、棘ではなく鞭の表面に無数の凸部を作る事で代用していた。それでも並の鞭よりは破壊力が増大される。その鞭を秋穂の性器に打ち込もうとしている。もちろん目を潰され、目が見えない秋穂には女がどのような鞭を使用するのか知るよしもないが、その風切り音で次に自分に使われる鞭が普通の鞭ではないと感じていた。

女は、両手を頭上で固定され、両足も大きく開いたまま固定され泣いている秋穂の姿を見つめ楽しそうに笑う。

・・鞭だけでなく、このメスのマンコ、徹底的に壊したいわね。後でレンタルして貰えるか交渉しようかしら・・

女は鞭を構え、秋穂の性器を破壊する妄想を頭に描いていた。

「さあ、マンコに打ち込むよ。覚悟しな、メス」

ヒュン

鋭い音が響き秋穂の性器に鞭が打ち込まれた。それは今までの鞭よりも遥かに大きな衝撃を秋穂の性器に与える。しかも、この女の鞭さばきは正確で、秋穂の股間の割れ目にぴったりと叩き込まれていた。

「ほぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

天を仰いで絶叫した秋穂の股間から小便が漏れだしていた。

シャーッ

勢いよく秋穂の股間から溢れる小便は、秋穂の性器や太ももを濡らしながら地面に水溜まりを作っていく。

「こんなに早く漏らしたら後の人の楽しみが失くなるでしょう。締まりのない穴ね」

女は鞭を構え、また秋穂の小便を漏らす股間に鞭を叩き込んだ。今度は正確に秋穂の会陰と肛門を打ち据える。

バシィィィッ！！

「あぎゃぁぁぁーーーーっ！！」

ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ！！

秋穂は会陰と肛門を鞭打たれ、無様にも大便も漏らしていた。

「あらあら、こんなに大勢の人の見ている前でウンチも漏らすなんて、さすがメス奴隷だわ。最後の一発はピンポイントでクリトリスを狙ってあげる」

女は哀れに大小便を漏らす秋穂の性器の敏感な部分、クリトリスに狙いをつけ鞭を打ち込む。

ビシィィーーッ！！

「あんぎゃぁぁぁぁーーーーっ！！」

クリトリスを鞭で痛打され秋穂は、大小便を漏らしながら口から泡を吹き白目を剥いて失神してしまった。しかし、失神したくらいで秋穂が許される事は当然ない。失神しても厳重に拘束されている秋穂の体は、股を開いた姿勢のまま固定されている。秋穂は哀れにも失神したまま次々に鞭で打たれていった。そして、ようやく最後の一人が鞭を叩き込んだ時、秋穂の体は全身みみず腫れで腫れ上がっていた。

★　★　★　★

秋穂への鞭の調教が終了し、今度はゲスト全員に犯される為、秋穂は両腕を高手小手に縛りつけられ仰向けに寝かされていた。くじ引きで秋穂を犯す順番が決められ、それぞれ番号札を持って待機していたが、秋穂を鞭で打つ時程の盛り上がりはなかった。ここに招かれている者の多くは異性と性交することに不自由する者はおらず、秋穂を犯す事に興味を持つ者はほとんどいなかったのだ。メス奴隷を犯すよりも、メス奴隷を痛め付けて壊し処刑していく。それだけを楽しみにしている人間なのだった。いくら、秋穂が処女だといってもそれほどの価値を見出だせないのである。その気になれば、もっと上等なメスの処女を何時でも犯す事が出来る。そんな人間の集まりであるため、鞭の調教が終わってしまえば、もう興味の大半は失ってしまったといって良かった。それでも、招待してくれた人間への義理もあるため一人目の男が秋穂の前に立つが、男の性器は元

気がないままだった。

「少し我が儘聞いて貰えるかな」

男は近くにいたこの屋敷のスタッフにリクエストする。男の願いは聞き届けられる事になり、早速スタッフが準備に動き出した。秋穂は腕の拘束を解かれ、改めて両手首、両足首を背中側でまとめて縛られる。そして、その体勢のままロープで上から吊るされた。

「ううううっ」

呻き声を上げる秋穂の腰に、さらに錘が吊り下げられた。秋穂は江戸時代の拷問〝駿河問い〟で吊るされ苦痛で顔を歪めている。その秋穂の苦しむ顔を見て、男の性器がようやく硬く勃起してきた。

「このまま、犯してやるからな」

男は残酷な笑みを浮かべ、吊られている秋穂の体をくるくると回しだした。

5、犯される秋穂の穴

5、犯される秋穂の穴

駿河問いで吊るされ、くるくる回されていく秋穂はロープが一杯に捻れたところで手を放される。すると、秋穂の体は独楽のように高速で回転していく。

「おばあぁぁーーーっ」

吊るされて回転させられているうちに秋穂の顔が赤くなってきた。男は秋穂のその顔を見ると、もう一度秋穂の体をくるくると回していき手を放した。

「おっばあぁぁぁーーーっ!!」

ブハァッ

回転している秋穂の鼻から血が噴き出す。高速の回転で頭に血が集中してしまい、鼻の細い血管が破れてしまったのである。その鼻血を流す秋穂の姿に男は満足し、秋穂の性器の処女穴に自分の性器を突き刺した。

ぶち、ぶち、ぶちぃぃ

「いだいぃぃぃーーっ」

秋穂の処女膜が呆気なく破られ、男は根本まで自分の性器を突き刺し、激しく腰を動かす。秋穂は駿河問いの厳しい姿勢のまま処女を貫かれ無様に犯されていた。

パン、パン、パン、パン、パン

「いだい、いだい、いだい、いだい」

秋穂は犯されている処女穴も勿論だが、吊られている手足の間接も壊れそうな程の激痛に悲鳴をあげていた。が、その秋穂の悲鳴も男にとっては実に心地好いＢＧＭとなっていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は秋穂の苦しむ声に興奮し、秋穂の内に放出していた。男が自分の性器を抜いた後に、秋穂の膣から破瓜の血と精液がどろり溢れだしてきている。秋穂は駿河問いで吊るされたまま初めての経験を迎え涙が止まらなかった。

・・ひぐ、ひぐ、ひぐ、手足が取れそうに痛いよ。オマンコも大きな穴が空いたみたいに痛い・・

秋穂は初めての経験で不安になっていた。自分の性器が男に気に入ってもらえたのか、目が見えれば相手の男の表情から察する事が出来るのだが、両目を潰されている秋穂には確認のしようがなかった。経験のある女であれば男が自分の中に放出した事で、ある程度満足してくれたと想像出来るのだが、経験のない秋穂にはそんな考えも浮かばなかった。

・・私のオマンコ、どうだったんだろう・・

秋穂は気が気でなかった。自分にとってアピール出来る最高の場所である。犯す、痛め付ける、壊す。その為の大切な場所なのだ。自分の性器が満足を与えられなければ、自分の価値はないに等しい。秋穂は、今日のお披露目でその真価が問われていると感じていた。

・・私のオマンコが価値ないと思われたら、私も価値ないのと同じ。秋穂の体で他に価値あるところなんてないもの。お願いします、皆さん。私のオマンコ、気に入って下さい・・

秋穂は〝駿河問い〟の拷問で吊るされながら、精一杯股を開いて自分の性器をアピールしていた。そこへ、次の男が秋穂を犯す準備をしてやって来る。男は手に錘の付いたクリップを持っていた。

「少しこのメスに飾りを付けていいかね。その方が気持ちが昂るものでね」

男の言葉にスタッフも断る理由もなく了承した。本日はお披露目なので、秋穂に対する多少の加虐は容認されている。男はさっそく吊られている秋穂の胸を刺激し乳首を勃起させる。そして、持っていたクリップで秋穂の乳首を挟んだ。

「痛いっ！」

秋穂が小さく叫ぶが、男はもう片方の乳首もクリップで挟んでしまう。秋穂は二つの乳首をクリップで挟まれ、ぶらーんと錘をぶら下げられた。男は秋穂の顔を覗き込むように見ていたが、秋穂の口に指を入れると舌を摘まみ出す。そして、秋穂の舌にもクリップで錘をぶら下げた。

「ううっ」

秋穂は舌を突き出したまま、よだれをだらだら垂らしていたが、男はここにも付けてあげようと秋穂の鼻もクリップで挟み錘をぶら下げた。そして、鼻と舌と乳首をクリップで挟まれ錘を下げられている秋穂を見ているうちに、それまでだらんと垂れていた男の性器が、天をつくように硬く勃起してくる。男は秋穂の苦しそうな姿を見て勃起していた。女が苦しむ姿を見て興奮する、根っからの異常者と云えるが、それでもこの程度で興奮するとは、ここに集まっている人間の中では、まだまともな方だといえた。

「それじゃあ犯させてもらおうか、メスガキ」

男は秋穂の膣口に自分の勃起した性器を当てると一気に根本まで突き刺した。

ズボゥウッ

「あうぅぅーーっ」

秋穂が声を上げるが、男は秋穂の腰を押さえて激しく腰を振る。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

秋穂は男に気に入ってもらおうと、痛いのを我慢して声を上げていた。男にとっては秋穂がどんな声を上げようと関係なかったが、秋穂は必死に自分の価値を上げようとしている。秋穂にもう少し経験

があったなら、男は秋穂が激しい悲鳴を上げた方が興奮すると気付いただろうが、残念ながら秋穂にそこまでの経験はなかったのである。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は義理で放出したように秋穂の内に精液をぶち撒けると、もう興味がないというようにさっさと自分の席に戻っていった。

次のゲストは女だった。腰に巨大なペニスバンドを装着している。女の場合はこのようにペニスバンドで犯しても構わないし、デルドゥやローターで責めても構わなかった。

「マンコはもう処女じゃないから、喉を犯してあげるわ。喉から胃まで犯してあげるから思う存分苦しみなさい」

統計的に女の方が残酷であった。この女も秋穂に快感など与えようとまるで思っていない。この女もまた秋穂が苦しむ事で興奮する女なのだ。女は吊られたままの秋穂の前に立つと鼻と舌を挟んでいるクリップを外し、秋穂の頬を平手で打つ。

「ほら、メスガキ。早く口を開くのよ」

秋穂が慌てて口を開くと女はペニスバンドの先端を秋穂の口に入れる。秋穂は顎が外れそうな程大きく口を広げ、ペニスバンドを呑まされていく。

「おごごごっ」

おかしな声を出す秋穂の喉に女は容赦なく巨大なペニスバンドを押し込んでいった。周りから見ていても秋穂の喉をペニスバンドが貫

通していくのが確認できる。

ズンッ

女は秋穂の喉に根本までペニスバンドを突き入れてしまった。あのペニスバンドの長さからいって、女が言ったように秋穂の胃の中まで貫かれているのは明らかだった。口から胃まで串刺しにされ呼吸も出来ずに苦しむ秋穂の頭を両手で押さえ付けて女は激しく腰を振る。

・・私、死んじゃうんだ・・

息が出来ずに意識が朦朧としてきた秋穂は、自分がこのまま殺されると思っていた。苦しいけどあまり痛い事をされずに良かったかなと思ったりしていた。今までのメス奴隷がどの様に処刑されたかは資料にまとめられ、教育される際に頭に叩き込まれている。どの処刑も凄まじいものであるが秋穂が一番恐怖にかられた、あの柚月というメスの処刑だけは受けたくないと秋穂は心の底から思っていた。なので、ここで死ぬ事は秋穂にとっては大歓迎なのであった。

6、調教されていく秋穂

6、調教されていく秋穂

秋穂の御披露目は盛況のうちに終了した。招かれたゲストの面々も概ね満足して帰路についていた。その中の一人、神楽坂沙也加は多少無理してでも秋穂を落札しておけば良かったと後悔していた。沙也加は秋穂の喉を最初に犯した女だった。あの特注の巨大なペニスバンドは敬愛する豪徳寺葉月から借りたものである。

・・私も葉月様の様に力と資金力があったら奴隷をたくさん手に入れて楽しむ事が出来るのに・・

沙也加は、時おり葉月の屋敷でメス奴隷を処刑する手伝いをしていたが、自分でも好きな奴隷を処刑してみたいという欲求に囚われていた。

・・もう少し頑張れば、あのメス奴隷を落札出来たのに・・

最後に引いてしまった自分が情けなかった。沙也加は、葉月の妹である睦月の処刑をした時の興奮が忘れられなかった。その後も葉月がメス奴隷を処刑する手伝いをしてきた事もあり、葉月からある程度の信頼を得ていた。

・・この香坂家も、豪徳寺家と並ぶ相当な勢力と力を持っている。やはり、このような一流の家でなければ奴隷を処刑する楽しみは味

わえないのですね・・

それでも沙也加もこうして招待を受けるくらいの力は持っている。神楽坂家もある程度は名前を知られた存在なのであった。そして、そのおかげで、しばらく後に沙也加に調教依頼の連絡がきた。香坂家からである。メス奴隷として購入した秋穂の性器調教を依頼したいという内容だった。その報酬額を見て沙也加は成る程と思っていた。かなり安い金額であった。これでは葉月様のような方は動かないだろうと沙也加は思い、さらに調教という言葉に目を止めていた。これが調教ではなく、性器処刑や性器破壊であったなら金額に関係なく葉月様は引き受けただろうと思っていた。葉月はなにより女子の性器を破壊する事を好む性格なので……。

沙也加はすぐに了承の返事を返した。とにかく秋穂の性器を痛め付けられるなら、それは楽しい事であった。沙也加は、秋穂の性器を調教する様子を頭に描き興奮して濡らしていた。

・・もう我慢出来ないわ・・

沙也加は下着を脱ぐと、自分の部屋に神楽坂家で飼っている奴隷を呼び出し自分に奉仕するよう命令し股を大きく開いた。そして、目隠しされている奴隷の頭を掴むと自分の股間に押し付ける。奴隷は沙也加の割れ目に舌を這わせ、クリトリスの包皮の隙間や小陰唇の襞の間も舐めていく。尿道や膣口も舌で刺激していく事も忘れない。

「あんっ」

クリトリスを軽く噛まれ沙也加は思わず小さな声を出していた。きちんと教育を施された奴隷の奉仕は見事なものであったが、沙也加はどうしても不満を隠せなかった。

「立って股を開きなさい。両手は上に上げるのです」

沙也加の命令で奴隷は言われたままの姿勢をとる。その奴隷の姿を見て沙也加はため息をついた。

・・やはり美しさに欠ける・・

沙也加の前で脚を開いて立つ奴隷の股間では、陰茎が硬く勃起し睾丸が揺れていた。そう神楽坂家の奴隷はオス奴隷だったのである。メス奴隷に比べて安価で手に入るオス奴隷は、メス奴隷を手に入れるまでの繋ぎとして購入される事が多いが、神楽坂家では依然としてオス奴隷を飼い続けていた。

・・醜い体だ・・

沙也加は鞭を手に取ると、オス奴隷の股間に思い切り鞭を叩き込んだ。

「あじゃぁぁぁーーーーっ!!」

性器を鞭打たれオス奴隷はたまらず股間を両手で押さえ、床に倒れ転げ回る。

「早く立って手をどけて股をひろげろっ!」

沙也加の怒声が響き、オス奴隷は目隠しの下から涙を流しながら、また同じ姿勢をとった。オス奴隷はまた、性器を鞭で打たれると分かっていながら命令に従わなければならない。沙也加はオス奴隷の性器に連続で鞭を叩き込んだ。鞭の打撃で、オス奴隷の性器が前後左右に激しく動き、睾丸も鞭打たれ激しく揺れている。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ、あひっ、あひぃぃぃーーっ」

オス奴隷は全身から汗を吹き出し悲鳴を上げながら性器を鞭で打たれていた。

「もっと、腰を前に突き出しなさいよ。使えない奴隷ですね。私にチンポを鞭で打ちやすいようにしなさい」

沙也加の厳しい命令でオス奴隷は自ら腰を突き出し性器を鞭で打たれていた。

・・ぜんぜん駄目だ。メス奴隷のマンコを鞭で打った時と違う。メス奴隷の柔らかな造型の体が鞭で痛めつけられ惨めなミミズ腫れが出来る事が最高なのだ。こんな汚いオスの体では興奮が高まらない・・

沙也加はオス奴隷の性器を鞭で打つのを中止すると、枝切り鋏に持ち変える。そして、オス奴隷に近付くと、鞭で打たれながら勃起しているオス奴隷の陰茎の根本を鋏で挟む。沙也加がそのまま鋏を閉じればオス奴隷の陰茎は根本から切断されてしまう事は明白だった。目隠しされているオス奴隷は自分がこれから何をされようとしているのかまるで分からずに同じ姿勢をとり続けている。

「お、お嬢さま。それはお止め下さい。奴隷が壊れてしまいます。旦那様に叱られてしまいますよ」

この家の執事である壮年の男性が慌てて沙也加を制止していた。オス奴隷は安価とはいえ、それなりの価格はする。豪徳寺葉月のように購入した奴隷をすぐ処刑したりする余裕は神楽坂家にはなかった。それがまた沙也加の不満になっていた。

・・ああ、葉月様。早くまたメス奴隷を手に入れて私を誘ってくれないかしら・・

沙也加は、葉月から誘いがくるのを心待ちにしていた。

★
★
★
★

沙也加は開脚逆さ吊りにされている秋穂の前に立っていた。秋穂を購入した香坂家の者は、自分でメス奴隷を痛めつけるより、痛めつけられているメス奴隷を見る事の方が好みのようだった。それも男に責められているのではなく、同性の女に責められているのが好みだと言っていた。沙也加にとっては願ってもないチャンスであったが、やはり性器調教までで処刑は禁じられてしまっていたのが不満であった。それでも、引き受けたのは、秋穂の性器を痛めつけてその苦しむ顔を楽しみたいという欲求からだった。

・・さて、どうやってこのメスの性器を調教していこうかしら・・

沙也加は目の前の秋穂の割れ目をまじまじと見つめながら考えを巡らせていた。処刑なら小陰唇とクリトリスを切断して、膣にもドリルでもぶち込んでぐちゃぐちゃにしてやるところであるが、調教ではそこまでの事は出来ない。

・・鞭、蝋燭、針、カテーテル、こんなところかしらね。多少の傷は認めるとは言っていたけれど、どこまでが多少なのかしら・・

沙也加は腕を組んで考え込んでいた。ここで上手くこのメスを調教して香坂家の信頼を得れば、いずれこのメス奴隷に飽きた時に、自分に処刑する役がまわってくるかも知れない。沙也加は、その為にも香坂家の人間が満足するような調教を秋穂にしていく必要があると考えていた。

・・まあ、最初は軽い責めからいきましょう。それで様子を探りながら厳しい責めにしていけばいいわね・・

沙也加は秋穂を処刑する日を想像し股間を激しく濡らしていた。

7、性器調教される秋穂

7、性器調教される秋穂

開脚逆さ吊りにしてある秋穂の腕も背中に回し縛り付け、口にも猿轡を噛ませた沙也加は、そこでカメラのセッティングを行う。用意されている数台のカメラで秋穂の調教の様子を撮影すると同時にリアルタイムで香坂家の食堂にいる、この家の住人たちが大画面のモニターで見られるようになっていた。この家の住人は、秋穂が性器を調教され泣き叫ぶ姿を楽しみながら食事を味わうつもりのようだった。

・・さて、それでは始めますか・・

沙也加は秋穂の左右の小陰唇をクリップで挟みクリップに結びつけたゴム紐を秋穂の太ももに縛りつける。小陰唇を左右に引っ張られ、これで秋穂の性器は中身を剥き出しにされた。秋穂の膣前庭の尿道と膣口が露に晒されている。取り敢えず沙也加はこの秋穂の性器をアップで撮影してから、用意してきた赤い太く長い蝋燭を手にする。これは沸点が高く改良された蝋燭なので、皮膚に垂らされた場合、通常の蝋燭より遥かに熱く感じるのだ。蝋燭に慣れた奴隷でも、この蝋燭を至近距離から垂らされれば悶絶する。秋穂はまだ調教の経験はそれほどないようなので、泣き叫ぶ事になるのは間違いなかった。しかも、この蝋燭が垂らされる場所は大きく開かれた秋穂の性器の中身だ。神経が集まるここに垂らされては経験をつんだメスでも白眼を剥いて失神する以外なかった。しかも特注の高温の蝋燭だ。

秋穂は、そんな敏感な処に高温の蝋燭を垂らされようとしている。

・・処刑が出来ないのは残念だけどね。それでもメスのマンコ痛めつけるのは楽しいから、泣き叫んでもらうよ・・

沙也加は蝋燭の点火し、すぐには垂らさないで溶けた蝋を溜めている。そして、秋穂の性器の真上に蝋燭を持っていくと、一気に溜まっていた蝋を至近距離から秋穂の拡げられた性器に垂らしていく。

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

凄まじい悲鳴を上げた秋穂は、吊られている体を海老のように反り返らせ絶叫している。食事をしながら秋穂のその姿を見た香坂家の人間は一様に目が釘付けになっていた。

「おお、さすが神楽坂家のお嬢様だ。容赦ないですな」

「マンコに蝋燭を垂らす調教は見たことあるけど、開いたマンコの中身に蝋燭を垂らすのはなかなか珍しいね」

「それに、メス奴隷の反応もなかなか良いわね。お尻に頭がつきそうなほど反り返っているわ」

「マンコに蝋燭を垂らされて、こんな無様な格好をしているメスを見ると食事が進むわね」

「いやぁ、本当。マンコ調教は別格だね。これ見ながらだと、ナイフとフォークが止まらないよ」

香坂家の食卓では会話が盛り上がり、興奮すると食欲が増すのか全

員がナイフとフォークを忙しく動かしていた。
沙也加は、秋穂の股間を真っ赤に塗り固めていく。秋穂は性器全てに蝋燭を垂らされて、反り返っていたが、やがて力尽きたようにだらーんとぶら下がる。沙也加は秋穂の性器を塗り固めた蝋が冷えて固まるのを待ち、慎重に剥がしていった。秋穂の性器からパリッと剥がれた蝋燭の塊には、秋穂の性器の形がくっきりと残っていた。

・・しっかりとマンタクが出来たわね。きちんと人数分作ってあげないとね・・

沙也加は、また新たに秋穂の性器に蝋燭を垂らしていく。

ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ

「ふごおぉぉぉーーーーっ!!」

また性器に蝋燭を垂らされ、再び秋穂は絶叫し、激しく反り返った。

「あははっ、条件反射？マンコに蝋燭垂らされる度に反り返ってるよ。おもしろいね」

「まったく、メスのこの無様な格好を見ると食事が進むね。メスの性器調教ほど楽しいものはないよ」

「このメスもマンコ調教されて本望でしょうね。メス奴隷はマンコ調教されるのが一番の名誉だからね」

香坂家の食卓では好き勝手言いながら秋穂の姿を見て食事を楽しんでいる。当然だが、誰一人秋穂を可哀想などと思う人間はいなかった。それよりも、もっと秋穂の苦しむ顔が見たいと望む人間たちば

かりであった。

蝋燭で人数分のマンタクを作り終えた沙也加は、次の調教に進む。今日は徹底的に秋穂の性器を蝋燭で焼き潰すつもりであった。外性器を蝋燭で調教した沙也加は当然秋穂の性器の内にも蝋燭を垂らしていこうと考え、秋穂の膣にリングに付いたステーを挿入していく。ステーはリングの中央にまとまっているので、それほど苦労せずに秋穂の膣に挿入する事が出来た。この性具は本来は肛門拡張用の性具であるが、今回沙也加は秋穂の膣を開いたままにするためにこの性具を使用していた。それは、ステーで膣を拡げた方が膣鏡で開くよりも膣壁の露出が多い為、膣自体を痛め付ける事が出来るからだった。せっかく性器の内を調教するのだから子宮だけでなく膣壁も調教するに越した事はない。沙也加はリングに付いたステーのネジを順番に均等に締めていき、秋穂の膣を開いていく。秋穂の膣はネジを締められるにつれ、だんだんと大きく口を開いていった。そして、沙也加はＬＥＤライトで秋穂の膣内を照らしカメラのレンズを向けた。モニターに秋穂の膣内が画面一杯に映し出される。膣鏡と違い細いステーで膣を開いている為、赤黒い子宮だけでなく膣壁の様子を鮮明に確認出来た。

「ほう、これはマンコの中、はっきりと見えて楽しいな」

「このメス奴隷、これだけマンコ開かれるって事はマンコの中、調教されるのよね。楽しみ、わくわくするわ」

香坂家の食卓では盛り上がってきていたが、開脚逆さ吊りにされ性器を開かれている秋穂は不安で一杯であった。ようやく、性器への蝋燭責めが終わり、ホッとしたのも束の間、次の責めが行われようとしている。

・・秋穂のオマンコの穴、こんなに拡げられて何されるの。痛いことされるのかな。でも、秋穂のオマンコ気に入って欲しいです。もっと痛め付けて秋穂のオマンコ好きになって下さい・・

調教の経験は少ない秋穂であるが、八千代や凛津、真弓同様きちんと教育されている。自分が激痛に苦しめば苦しむほど、楽しんで貰える事を徹底的に叩き込まれていた。哀れではあるが、そういう育てられ方をされてきた秋穂たちにとっては、自分の性器を痛めつけて相手が楽しんで貰える事に幸せを感じていたのは間違いなかった。

下準備を終えた沙也加は、鍋に蝋燭を入れガスコンロで溶かし始めた。そう、沙也加はポタポタと蝋燭を垂らすのではなく、秋穂の膣の中に溶けた蝋燭を一気に流し込もうとしているのだ。しばらくすると鍋の中の蝋燭は溶け、ブクブクと泡立つほど沸騰してきた。沙也加は、残酷な笑みを浮かべると両手を鍋つかみに入れ、ぐらぐらに溶けた蝋燭の入った鍋を掴んだ。沙也加がこれから何をするのか理解した香坂家の面々はナイフとフォークの動きが止まり、画面に釘付けになっていた。そして、沙也加は秋穂の開いた膣の中に、ぐらぐらに沸騰した溶けた蝋燭を一気に流し込んだ。

「ふんごぉぉぉーーーーーーーっ！！！！」

文字通りの秋穂の絶叫が響き渡り、秋穂は背骨が折れるのではと思われるほど、激しく反り返っていた。秋穂の膣からは溢れた蝋燭がクリトリスや肛門にも流れていき焼いていた。秋穂の顔は涙と鼻水とよだれで汚れ、全身から汗も吹き出している。そして、秋穂はそこでフッと失神してしまい、反り返っていた体が力なくぶら下がった。沙也加は、しばらく気絶した秋穂を放置し、秋穂の膣内で蝋燭が固まった事を確認しズボッと取り出す。そして、また鍋で熱して蝋燭を溶かしていく。

「さあ、二回目いきますよ」

沙也加は、無様に気絶している秋穂の開いた膣内に、また溶けた蝋燭を流し込んだ。

「ふうごおぉぉぉーーーーーーーっ！！！」

その凄まじい激痛に秋穂は覚醒し、断末魔の悲鳴のような声をあげ、また海老のようにのけ反っていたが、また無様に失神する。秋穂のその姿は大変好評で、秋穂はその後も許されることなく何度も膣に蝋燭を流し込まれ、膣と子宮を焼かれ続けた。

8、性器縫いと性器殴打

8、性器縫いと性器殴打

秋穂は開脚逆さ吊りで性器を調教されていた。開かれた膣内に溶けた蝋燭を流し込まれるという激しい責めを繰り返し受け、秋穂は失神と絶叫を繰り返し号泣しているが許される事はない。

・・ううっ、秋穂のオマンコどうなってるの。もう感覚がないよぅ・・

何度も膣内を焼かれ秋穂の性器は焼け爛れ酷い状態になっていたが、それでも許されず、まだ膣内に蝋を流し込まれている。その度に秋穂は体を反り返らせ絶叫していた。そして、繰り返し責められているうちに秋穂の体はビクンビクンと大きく痙攣を始めていた。

・・あら、残念。どうやら、ここまでみたいね・・

沙也加はカメラに向かい、本日の性器調教はここまでですと挨拶した。

★　★　★　★

・・ううっ、痛い、痛い、痛い、痛いよ・・

秋穂は与えられている奴隷部屋で股間を両手で押さえ転げ回っていた。性器の治療が済み股間には包帯が巻かれている秋穂の姿が痛々しい。両目を潰されている秋穂には自分の性器に何をされたのか分からないが、自分の膣の中に焼けた鉄棒でも突き入れられたイメージだった。それを何度も繰り返される。繰り返されるという事は自分の性器を痛め付ける事が気に入ってもらえたのかなと秋穂は少し嬉しく思っていた。

・・秋穂のオマンコ、気に入ってもらえたみたい。痛いけど頑張らないと、私、オマンコ奴隷なんだから、オマンコ痛めつけてもらう事しか価値ないし・・

そう思いながらも秋穂は性器の痛みに呻き声をあげていた。そこへ、食事が運ばれてきた。この食事の時間は秋穂にとって一番幸せな時間である。奴隷だからといって質素な食事ではない。奴隷の体力や健康を維持する為に豪華な食事が与えられていた。そして、秋穂は目が見えない為、食事の際は香坂家の使用人が食事を口まで運んでくれる。この使用人から香る香水の匂いがいつも同じなので、秋穂は香水の匂いが近付いて来るとパブロフの犬のようによだれが出てきてしまっていた。食事は、スープ、サラダ、主菜、パン又はライス、デザートと質も量も充分なものだった。それまで、施設の必要最低限な食事しか食べた事のない秋穂にとって、この香坂家の食事はまさに至福のものだった。特にデザート。凛津が初めて食べたショートケーキに感動したように、秋穂もまた初めて食べたプリンに感激していた。

それから、しばらくは秋穂の平和な日々が続いていたが、そんな平穏な日は長くは続かない。再び、性器を調教される日がやってくる。

★　★　★　★

秋穂は調教部屋で、また開脚逆さ吊りにされていた。逆さに吊るされるだけでも苦しいが、さらに大きく開脚されている。関節がぎしぎし軋み、これだけでもかなりの拷問である。

・・苦しいけど秋穂のオマンコ、痛め付けるには一番いい格好だから我慢しないと・・

健気にも秋穂はそう思うが、これから行われる性器調教は、また厳しいものになるのは間違いなかった。カメラを設置した沙也加は針と糸を手にしていた。普通のメス奴隷が、沙也加の手にしている物を目にしたら恐怖で泣き叫ぶだろうが、秋穂は見えない為にその点の恐怖は感じずにすむが、その代わり心の準備をする事が出来ずいきなりその調教を受ける事になる。今回も小陰唇を摘まれ、チクッとした痛みを感じたと思ったら、続いてずるずると何かが小陰唇の中を貫いていく感覚に思わず悲鳴を上げていた。

「いだあぁぁ、いだいよぉぉっ！！」

秋穂の顔は忽ち涙と鼻水で汚れていく。そして、反対側の小陰唇にも針が突き刺され糸が通されていった。その様子は４Ｋのカメラで鮮明に記録されると同時に、香坂家のモニターに映し出されている。

「うーん、やっぱりマンコ縫いは良いねえ。メスがマンコを縫われていく姿は興奮するわ」

「ほんと、もうギチギチに縫って欲しいわね」

香坂家の食卓が盛り上がる中、秋穂の苦痛は高まっていく。もう、４針も性器を、小陰唇を縫われてしまっていた。秋穂も自分の性器が縫いこまれている事に気付き号泣している。

・・秋穂のオマンコ縫われてる。もう使えなくされちゃうのかな・・

秋穂は性器を襲う激痛に絶叫しながら、縫われていく自分の性器を楽しそうに眺めている人たちを想像し嬉しくなっていた。

・・無様に縫われた秋穂のオマンコを見て楽しんで下さい・・

秋穂は泣きながら小陰唇を縫い合わせられていく。もう半分以上縫い合わされていたが、当然そこで許される筈がない。完全に性器を縫い終わるまで秋穂の苦痛は続くのだ。そして、ようやく秋穂の性器の割れ目は上から下まで完全に縫合された。細い糸でぎゅっと閉じられた秋穂の性器がアップで映し出されていた。

「おおっ、きれいに縫われているな。神楽坂家のお嬢さまの腕も相当だな」

「マンコ縫われたメスって惨めでいいね。マンコ封印されて、どんな気持ちなのかしら」

「縫い目もきれいだし、隙間がないほどぴったり合わせられてるね。こんな完璧なマンコ縫い見たの初めてだわ」

ぴったり縫い合わされた秋穂の性器の状態に称賛が与えられるが、もちろんこれで調教が終わりではない。きれいに縫われた性器が今度はぐちゃぐちゃにされていくのだ。沙也加は手持ちカメラで、秋穂の縫われた性器をひとしきり撮影した後、カメラを置きスパンキ

ング用の革製の細長い板を手に取る。

「さあ、思う存分泣き喚きなさい」

沙也加はスパンキング板を思い切り縫われている秋穂の性器に叩き込んだ。

バシィィッ！！

「あぎゃあぁぁぁーーーっ！」

秋穂が絶叫し、海老のように反り返った。

「痛い、痛い、痛い、痛い」

縫われた性器を激しく殴打され、秋穂は号泣する。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ！！

「あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶうぅぅーーっ！！」

沙也加は笑いながら秋穂の性器をスパンキング板で連続で殴打する。大きく反り返ったままの秋穂の性器からチョロチョロと尿が漏れだしていた。縫われているために勢いよく噴き出せない尿はジョーッと性器から溢れだし逆さに吊られた秋穂の体を汚していく。

「また、のけ反ってるね、このメス。マンコ調教されると反り返るのは、このメスの条件反射みたいだね。なかなか無様で好きだね、この姿」

「おしっこ漏らしてるね。噴水みたいに噴き出すのも良いけど、マンコ縫われて漏れてくるおしっこもいいね」

「縫われたマンコを殴打されるって最高だろう。このメスもここまでされれば本望だろうよ」

「ねえ、もっと凄いの見たくなっちゃったわ。もう、このメス、処刑して良くない」

「えっ、少し早くないか。高い金出して買ったんだから、もう少し楽しんでからの方が良くないか」

「そうだな。払った分、楽しんで回収しないとな」

「でも、私、もう我慢出来ないわ。興奮してマンコびしょびしょだよ。それに今撮影している動画売ればいいんだよ。豪徳寺さんは処刑動画販売してかなりの売上げがあるらしいわよ。神楽坂さんは、豪徳寺さんとお知り合いだから、彼女に頼んで豪徳寺さんの販売ルートで売って貰えば、ルートのないうちでも大丈夫でしょう」

「そうか、神楽坂さんに頼めばいいのか。いい人に調教に来てもらったな。上手くすれば家も豪徳寺さんと顔が繋げるな」

「じゃあ、さっそく神楽坂さんにお願いしてみるわ」

こうして、秋穂の処刑はあっさりと決定してしまったが、秋穂は何も知らず縫われた性器を殴打され続け体を反り返らせ号泣していた。

9、秋穂の日常

9、秋穂の日常

「えっ　」

沙也加は、香坂家の娘に秋穂の処刑を依頼され喜びを隠せなかったが、内心の興奮を悟られないように努めて冷静さを装っていた。ただし、秋穂を処刑するに当たって多少なりとも代金を回収したいので、豪徳寺家とパイプのある沙也加に今撮影している動画を販売ルートに載せてくれないかという要望があった。沙也加は不承不承という感じで、香坂家の娘の依頼と要望を了承した。

・・やはり、調教を引き受けて正解だったわ。こんなに早く処刑出来るなんて。動画の販売なんて葉月様にお頼みすればわけなく引き受けてくださる。ふふ、これであのメスを処刑出来るかと思うと興奮してくるわ。どんな風に処刑してやろう。あれは絶対やりたいわね。壊していく順番も考えないといけないわね。・・

沙也加は、豪徳寺葉月から譲って貰ったメス奴隷の処刑動画を改めて全てチェックしようと考えていた。それは、豪徳寺家での処刑は勿論、他の場所、葉月以外の他の人物が執行した処刑も含まれている。沙也加にとっては宝物ともいえる動画であった。

・・この八千代というメスもなかなか良いわね・・

沙也加は動画を見ながら興奮していた。八千代は開脚逆さ吊りで尿道を串刺しにされへその下からそのニードルの切っ先が突き出ていた。さらに恥丘からもニードルを打ち込まれ尻に突き抜けている。その後もニードルで性器を串刺しにされ、子宮には１００本ものニードルが突き刺された挙げ句、そのまま巨大な杵で何度もニードルを叩き込まれ子宮をぐちゃぐちゃにされていたが、更に爆破され、摘出されてしまっていた。当然、小陰唇もクリトリスも切断されてしまっている。そして、八千代は最後に性器からノコギリで引かれ、絶命していた（八千代の章）

次の動画は凛津だった。凛津の処刑は沙也加もその場にいたので記憶に残っている。両足を切断され子宮吊りにされた挙げ句、子宮を抜かれる。そして、頭に穴を空けられ、そこから犯されて絶命した。無様な死に様だった。沙也加はその時、隣で葉月の妹である睦月の処刑に手を貸しており、今でも楽しい記憶として鮮明に心に残っている（凛津の章）

・・あの睦月ちゃんも無様に泣きながら処刑されていって最高だったわ・・

沙也加は興奮が止まらず続けて動画を見続ける。真弓という気の強そうなメスが処刑されていき、心が折れていく様子は見物だった。真弓は最後は泣き喚きながら四肢を切断され、鉄の処女で全身を針で貫かれて絶命した。ただ、残念だったのは鉄の処女のマスクの為、真弓の最後の死に顔が見れなかった点だ（真弓の章）

そして、最近葉月が執行した3人の少女の処刑だ。優奈というメスは性器を串刺しにされ、そのまま火炙りにされ、鞭で打たれ絶命した。莉子というメスは、無理矢理大量の媚薬を注入され発狂させられた挙げ句、性器を爆破され、最後に頭を爆破され絶命した。最後の柚月というメスは生きながら性器を解体され、四肢を切断された状態で濃硫酸のプールに入れられ溶かされて絶命していた（3人少

女の章）

沙也加にとってはどれも楽しそうな処刑であるが、処刑出来るのは秋穂一人なので、全ての処刑を実行する事は出来ない。そこが沙也加の悩みの種だった。

・・困ったわね。どうやって処刑するか、絞り切れないわ・・

それは沙也加にとっては重大な決断だった。葉月のように次から次へとメスを処刑出来れば悩む事もないのだが、処刑出来るのは秋穂一人である。

・・仕方ないわね。ある程度全ての処刑が出来るように準備しておいて、あとは実際の処刑の時の気分でいきましょう。それが一番後悔しないでしょうね・・

そう決断すると沙也加は準備にかかる日数を計算し、そこから秋穂の処刑執行日を決定した。これで、秋穂の知らないところで、秋穂の命のカウントダウンが始まったのである。

それからの沙也加は忙しかった。ホームセンターや薬局に行き、必要な機材や薬品を買い集め、秋穂の処刑の準備に余念がなかった。その一方、秋穂は調教もなくゆっくりとした毎日を過ごしていた。毎日の三度の食事も更に豪華になったように感じ、秋穂は感激していた。それに、ここ2日は午後3時におやつまで提供されていた。今日は秋穂の大好物のプリンパフェで、秋穂は幸せな気分に浸っていた。勘のいい者であれば、この変化に何かを感じ、逆に不安で怯えるところであるが、幸せな事に秋穂は何も気付かずに毎日を過ごしていた。もちろん秋穂は毎日ぼーっと過ごしていたわけではない。調教のない時でもやる事はあるのだ。今日も秋穂に指示が与えられていた。秋穂は人気アニメのヒロインのコスプレをさせられ撮影用のセットが作られた部屋に連れていかれる。秋穂はそこでまず自慰

する姿を撮影されるのだ。

「ほら、しっかりオナニーするんだよ。その清楚なアニメキャラが激しくオナニーするところがウケるんだからね。立ったまま足を開いてオナニーするんだ」

秋穂は命令された通りにミニスカートを捲り、白い下着の上から激しく性器を擦る。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

秋穂が小さく声を出し始め、白い下着の股間の中心に染みが出来ていく。

「イク、イク、イクぅぅ」

秋穂は頂点に達すると、ガクッと膝をつき放心状態になっていたが、すぐに次の命令が告げられる。

「早く立って足を開きなさい。そして、おしっこしなさい。おしっこする前に正面を向いて挨拶するのも忘れないようにね。その後も事前に指示した通りにやるのよ」

急いで立ち上がった秋穂は大きく足を開いてミニスカートを捲り、顔をあげると事前に記憶させられた挨拶をする。

「遠坂○でーす。これから、みんなの見ている前でおしっこするね。○のお漏らしする姿見逃さないでね」

秋穂の挨拶する姿はバッチリと撮影され、秋穂は下着を穿いて立っ

たまま小便を漏らし始めた。白い下着の股間の中心から湯気を立てて透明な液体がジョーッと溢れていく。

「〇のお漏らし見てくれた。今度は、お漏らしでびっしょりのおパンツ被ってウンチするね」

秋穂は穿いている下着を脱ぐと、躊躇せずに頭に被る。そして、立ったままウンウンと息み始めた。

「あっ、〇のウンチ出るよ。いっぱい出すからよく見ててね」

秋穂の肛門からムリムリと大便が排泄され、ぼとぼとと床に落ちていく。秋穂の足の間には大量の大便が落ちていた。

「あはっ、汚ないウンチ、いっぱい出しちゃいましたぁ。ここから、ちょっとお手伝いしてもらって〇の上のお口と下のお口でウンチ食べさせてもらいます」

すぐに黒の全身タイツを身につけた黒子が現れ、秋穂をまんぐり返しの姿勢にすると口と膣に開口器を挿入し大きく開ける。そして、秋穂の口と膣に大便が入れられていく。秋穂の口と膣に大便が山盛りになったところをアップで撮影される。そして、秋穂は自分の口に押し込まれた大便を飲み込んでいき、膣に入れられた大便は鉗子を使い子宮内に入れられていった。

「〇はウンチ、食べちゃいました。美味しかったよ。今度は、これを見ているあなたのウンチ食べたいな。〇はあなたがだーい好き。また、〇のこと見てね」

最後に秋穂の顔と性器がアップで記録され、そこで本日の撮影は終

了となった。しかし、普通の撮影のように、そこでお疲れ様と終わるわけではない。秋穂の顔と性器は洗浄され、これから撮影スタッフに犯されていくのである。秋穂は机の上に仰向けに押さえつけられ、口にはまた開口具が装着され最大まで開かれる。そして、喉の奥まで男の性器が突き入れられた。

「うごっ、うごっ、うごっ」

苦しげな声を出す秋穂に構わず男は腰を振る。と同時に秋穂は性器も犯されていた。秋穂の幼い性器に男の勃起した性器が突き入れられ激しく腰が振られる。秋穂は喉と膣を犯されながら思っていた。

・・秋穂の口マンコとオマンコ、犯して貰えて嬉しいです。もっともっと秋穂を犯して楽しんで下さい・・

秋穂は知らなかった。もう、秋穂の処刑執行日が決定し、その日が迫ってきている事を……。それは逃れられない運命。秋穂は、そう遠くない未来に救いのない絶望の中、泣き叫びながら処刑されていくのだ。

１０、処刑までの日

１０、処刑までの日

秋穂はいつものように開脚され逆さに吊られていた。両腕も背中に回され縛りつけられている。いつもと違うのは、全裸ではなく半袖の体操服に濃紺のブルマという服装だった。前回、コスプレした秋穂の動画を葉月に委託して販売したところ、好評だった為、調教時も衣服着用でやってみたらどうだろうという提案が香坂家から出され、沙也加も了承したのだった。沙也加にしてみれば、秋穂が服を着ていようがいまいが関係ない。秋穂を痛め付ける事が出来れば良いのである。

「みなさん、こんにちは。オマンコ奴隷の秋穂です。これから秋穂のお股の間を鞭で打ってもらいます。お股の間ですよ。メス奴隷のオマンコです。思い切り容赦なくオマンコを鞭打ってもらいますので、泣き叫ぶ秋穂の無様な姿を楽しんで存分に自慰して下さいね。何回も自慰出来るようにたっぷりと時間をかけてオマンコを鞭で打ってもらいます。ドピュドピュして下さいね。でも、もし秋穂が失神してしまったらごめんなさいです」

前の動画で挨拶も好評だったため、調教時にも秋穂に挨拶させる事にして録音した音声を聞かせ秋穂に覚えさせていた。秋穂の挨拶が済むと鞭を構えた沙也加が開脚逆さ吊りの秋穂の前に立つ。今回は沙也加も目の周りを覆うマスクを着け、全裸に赤いハイヒールというスタイルだった。沙也加はマスクなど着けたくなかったのだが、

その方がそれらしいと言われ、やむを得ず装着したのだった。

「それでは、マンコ鞭打ちの調教を開始します」

沙也加が構えた鞭は凶悪な一本鞭だ。通常は、股間等の柔らかい箇所を鞭打つ場合、バラ鞭が使用される事が多い。バラ鞭は叩き込んだ時の音が激しく興奮するが、痛みは分散される為多少軽くなる。もちろん、性器を鞭打たれれば、それがバラ鞭であっても女は泣き叫ぶ以外ないのだが、今回、沙也加は一本鞭を選択している。なぜなら今回秋穂はブルマを穿いているからだ。一本鞭の苦痛はバラ鞭の比ではない。痛みが集中するため、どんな女でもこれで性器を打たれれば絶叫して失神する以外なかった。ただ一本鞭は、鞭を打つ方にもある程度のスキルを要求する。メス奴隷に最高の痛みを与えるには、それなりの技術が必要なのだ。沙也加クラスになると一本鞭を意のままに操り、奴隷に最高の苦痛を与える事が出来る。当然、狙った箇所に正確に打ち込む事が出来るのだ。

・・ふふ、ブルマ穿いてるのだから遠慮しないで思い切り打たせてもらうわよ・・

沙也加は残酷に微笑むと、秋穂の股間目掛けて思い切り鞭を振り下ろした。ヒュンという鋭い風切り音の後、秋穂の性器に叩き込まれる鈍い音が響き渡る。

ビシイィィィッ！！

「あうううぅぅーーーーっ！！！」

ブルマを穿いているとはいえ、強烈な一本鞭の一撃を性器に叩き込まれ秋穂は悲鳴を上げ、いつものように大きく反り返る。そこへ息

つく間も無く次の鞭の一撃が叩き込まれる。

ビシィィィッ！！

「あひいいいいーーーーっ！！！！」

秋穂の顔はたちまち涙と鼻水で汚れていた。その顔はアップで撮影されると同時に、沙也加のインカムに要望が飛ぶ。沙也加は了承すると秋穂の性器の一点に集中して鞭を叩き込んでいく。

ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！！」

連続で鞭を叩き込んでいくと鞭の打撃音が変わってきた。そして、秋穂の股間がアップで撮影される。

ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ

「ひぎいいいいーーーーっ！！！」

尿道付近を集中的に鞭で打たれた秋穂は失禁してしまっていた。ブルマから透明な液体が溢れ出て、そこに容赦なく鞭が叩き込まれ、秋穂の小便の飛沫が周囲に飛び散り照明の灯りでキラキラと反射する。ブルマから漏れだした秋穂の尿は、逆さ吊りにされている秋穂の体を汚していく。

ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ

「ひぎいいいいーーーーっ！いだあ、いだいよおぉぉーーーー

っ！！」

体をエビのように反り返らせる秋穂への鞭打ちを一旦停止した沙也加は画鋲を手に取りカメラの前にアップで映しだす。それは通常の画鋲より針が長く、針の先には〝かえし〟が付いていて容易に抜けないように作成された特注の画鋲だった。もちろん、この画鋲はメスの性器や、メスの体を痛め付けるその為だけに開発されたものである。沙也加は、この画鋲を力尽きたようにだらーんと吊られている秋穂のブルマの股間部中心にぐっと押し付けた。

「ひぎぃぃぃぃぃーーーーっ！！」

性器に画鋲を押され悲鳴を上げた秋穂は、また激しく反り返っていた。

「ふう、ふう、ふう、ふう、秋穂のオマンコ鞭打ちはいかがだったでしょうか。秋穂の無様な姿を楽しんで、いっぱい出してくれました？ここで視聴者の皆さんにお知らせです。皆さんが放出した、男性の方は精液、女性の方はマン汁を送って頂ければ、もれなく秋穂の子宮に注入するサービスを期間限定で開始します。皆さん、いっぱい出して送ってきてね。そして今、秋穂はオマンコに画鋲を押されています。お股の間に画鋲を押す所がなくなるまで刺されますので、ここでもドピュドピュして下さいね」

荒い呼吸でなんとか挨拶を終えた秋穂の股間に沙也加は次々に画鋲を押していく。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ、いだい、いだい、いだいぃぃ」

秋穂はクリトリスから会陰まで８個の画鋲を一直線に押されていた。

が、当然それで終わりではない。秋穂が言ったように、秋穂の股間に画鋲を押す所がなくなるまで画鋲を押されていくのだ。股間の中心に一直線に画鋲を押された秋穂は、今度はその両脇に画鋲を押されていく。

プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ

「あびゃあぁぁぁーーーっ、いだい、いだい、いだいぃぃっ！！」

瞬く間に秋穂の股間は画鋲で埋め尽くされていき、秋穂のブルマに包まれた股間一面が画鋲で埋め尽くされる。沙也加は、秋穂の股間を見つめ口許に笑みを浮かべると、また一本鞭を手に取った。

「さあ、いくよ。メス」

沙也加は思い切り鞭を振る。ヒュンという鋭い風切り音の後、大量の画鋲が押されている秋穂の性器に鞭が激しく叩き込まれた。

バシィィッ！！

「あっびゃあぁぁぁーーーーっ！！！」

秋穂は絶叫し、尻に頭がつきそうな程、大きく反り返るが、そこへまた沙也加の鞭の一撃が容赦なく叩き込まれる。秋穂の性器に押されている画鋲が数個、鞭の打撃で飛び散った。秋穂は反り返ったまま苦痛の声を上げているが、沙也加のインカムに連絡が入る。沙也加は黒子を呼び指示を与えると、黒子は反り返っている秋穂の体を両側から無理矢理元の姿勢に戻す。反り返っていると秋穂の表情が見えない為、逆さ吊りで正面を向いたまま押さえつけられた。そこで、沙也加は一本鞭から枇杷の木で作成された木刀に持ち変える。

そして、ヒュンヒュンと軽く素振りをすると秋穂の画鋲を押されている性器に狙いをつけ上段に大きく構える。開脚逆さ吊りで黒子に両側から体を押さえられている秋穂は、それまでと変わった空気に気付き、自分の性器が更なる苦痛にさらされると感じ号泣していた。

・・覚悟しなさい、メス。メスのその大きく開いた股の中心、マンコに思い切り木刀を叩き込んであげる・・

沙也加は思い切り木刀を振り下ろした。

グシャアァァッ！！

「あっびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

その一撃で秋穂は口から泡を吹いて失神してしまったが、すぐ黒子により覚醒させられる。そして、沙也加は笑いながら楽しそうに秋穂の性器に木刀を叩き込み続けていた。

グシャァ、グシャァ、グシャァ、グシャァ、グシャァ

「あぎぃぃぃぃーーーーーっ！！！」

そこにはもう、処刑の決まった秋穂に対する遠慮など微塵もなかった。どうせ近々に処刑される秋穂の性器が潰れようと、恥骨が砕けようと関係ない。沙也加の心はもう歯止めが利かなくなっていた。

11、ついに処刑される秋穂

11、ついに処刑される秋穂

性器調教やコスプレ動画撮影に忙しく過ごしていた秋穂に、ついに処刑執行日がやってきた。香坂家では朝から今までと違う気配が漂い、それは秋穂も感じていた。秋穂に提供された朝食も、それまでにない豪華なものだった。いつもはベーコンエッグにトースト、サラダにミルクという質素なもので、それでも施設の無味乾燥な朝食に比べると秋穂にとって格段に美味しく嬉しいものだったが、今朝はそれにフルーツやスープ、デザートにプリンまで付いていた。目が見えない秋穂であるが、食事の補助をしてくれる香坂家の使用人に説明を受け感激で笑顔が溢れていたが、対照的に事情を知っている使用人は暗い顔で、無邪気に食事を食べている秋穂を見てその瞳には涙が浮かんでいた。

・・今日は特別な記念日なのかな。この家の人たち嬉しくてそわそわしてる感じがするし、楽しい日なのかな・・

すぐそばにいる使用人の顔が見えない秋穂は、処刑を楽しみにしている香坂家の人間の雰囲気から、何か楽しい事が起こるのだろうと想像していた。その楽しみが、自分の処刑だとは夢にも思わなかったのである。そして、秋穂の穏やかで幸せだった時間は終わる。秋穂は、沙也加の待つ処刑室に連れていかれた。

★
★
★
★

秋穂はコスプレでの調教が好評だった為、この最後の処刑も開始時はスクール水着を着用して始められる事になった。旧タイプ、スカート型と呼ばれる厚手の生地の学販されている本物のスクール水着である。秋穂はスク水姿で正座させられヘッドフォンをつけられる。そこで、処刑の冒頭で秋穂が喋る挨拶を覚えさせられるのだが、それで初めて秋穂は自分の運命を知った。

・・えっ?私、処刑されちゃうの。もう、プリンも食べられないの・・

秋穂は混乱していた。突然の処刑宣告に頭の中が追い付いていかなかった。処刑されるという実感が湧いてこない。しかし、冗談ではない事は間違いない。そう思うと恐怖が体を突き抜け震えてきた。調教などではない。処刑なのだ。自分はもう生きてこの部屋から出られない。以前、資料として観せられたメス奴隷たちが処刑されていく動画が秋穂の頭の中で甦る。全員が凄まじい方法で残酷に処刑されていった。いつかは処刑される日がくる事は分かってはいたが、こうして実際自分が処刑される番になると恐怖で体の震えが止まらなかった。

・・嫌だ。まだ、処刑されたくないよ。怖い。お願い、助けて下さい・・

秋穂は小さく、助けて助けてと呟きながらぶるぶると震えているが、その秋穂の両腕が後ろに回され高手小手にきつく縛りつけられていく。

「ううっ……」

すでに泣き出している秋穂の体が逆さに吊られていく。そして、脚が大きく開脚されていった。秋穂はいつもの調教のように腕を縛られ、開脚逆さ吊りにされていた。

「さあ、最後の挨拶をしなさい」

沙也加が残酷に秋穂に告げると、秋穂はさらに激しく泣き出してしまった。沙也加は苦笑いして、秋穂の頬に激しく平手を打ち込む。

パンッ、パンッ、パンッ

「あうっ、あうっ、あうっ」

沙也加は吊られている秋穂の顔を見下ろし、今度は秋穂の腹部を殴りつけた。

ドスゥッ！

「あうぅぅぅっ」

「メス奴隷のくせに最後の挨拶も出来ないの、みっともない。他のメス奴隷は立派にマンコ壊されて泣き叫びながら絶命していったわよ」

沙也加が激昂して怒鳴り散らすと秋穂は小さな声で、ごめんなさい、すいませんと泣きながら謝罪する。

「早く挨拶しろっ、メス奴隷っ！」

ドスゥッ！

沙也加はまた秋穂の腹を殴りつける。

「おげぇぇぇーーーっ！」

秋穂はせっかく食べた物を吐いてしまっていた。

「汚いねぇ。まったくだらしないメス奴隷だわ。まあ、メスには違いないから、マンコ処刑を楽しませて貰うわ」

沙也加は鞭を持ち構えていると、ようやく秋穂が最後の挨拶を始めた。

「こんにちは、秋穂です。今日は皆様お待ちかねの秋穂の処刑日です。今までの調教では満足出来なかった方にもご満足頂けるよう頑張ります。まずは、いつもの調教から処刑に移行し、秋穂が完全に絶命するまで徹底的に執行されますのでお楽しみ下さい。それでは、秋穂が無様に絶命する姿を楽しんで下さいね。ううぅっ……」

泣きながら震える声で挨拶した秋穂だが、最後はまた号泣してしまい、涙と鼻水で顔面を汚していた。しかし、そんな哀れな秋穂の姿にも興奮こそすれ、憐憫の情など一切なく沙也加は鞭をふる。いよいよ秋穂の処刑が開始された。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ

「いだあぁぁぁーーーっ！！」

大きく開いた股間に鞭を連続で叩き込まれ秋穂は悲鳴を上げる。しかし、秋穂の体はまだ反り返ってはいなかった。

・・ふふ、こんな調教で反り返っているようじゃ、処刑のショックで心臓が止まってしまうからね。頑張ってもらわないとね。まあ後で葉月様から貰ってきた強心剤を射ってあげるから頑張りなさい・・

容赦なく秋穂の性器を鞭で打ちながら沙也加は思わず笑みが零れてくる。秋穂の処刑をどうするか、考える程楽しくてどうしても顔が笑ってしまうのだった。秋穂の性器への鞭打ちを終了した沙也加は、もう調教はいいだろうという気になり、秋穂のスクール水着の股間を性器が露出する程度、ナイフで切り裂いていく。秋穂はこれから処刑される性器を露に剥き出しにされていた。

・・もう我慢出来ない。早くこのメスのマンコをズタズタにしたいわ・・

沙也加は目の前の秋穂の性器を早く破壊したい衝動を抑えるのに苦労していた。

・・慌てて壊したら後であれもやれば良かったと後悔する事になるからね。悔いが残らないようになるべく色々な事をして壊していかないとね・・

沙也加は努めて冷静になるよう深呼吸した。そして、秋穂の口に男根に似た性具型のギャグを押し込み、秋穂の口を塞いでいく。元々眼球は破壊されている秋穂は、これで何も見えず、何も喋れなくなる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

口も塞がれた事で、いよいよ自分の処刑が本格的に開始されると感じた秋穂の鼻息が荒くなっていく。沙也加は銀色に輝くニードルを手に持っていた。

・・尿道串刺しは絶対やらなければいけない処刑の一つだわ。まず、これからやっていこう。マンコの穴はその後で壊す・・

沙也加は秋穂の尿道から壊していく事に決め、秋穂の性器を拡げると尿道口を確認する。そして、小さな尿道口にニードルの切っ先を当てる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうぅぅっ」

秋穂の鼻息がさらに激しくなっていく。沙也加は秋穂の尿道にズブズブとニードルを突き挿していった。そして、ニードルを押し込んでいくと膀胱の奥に突き当たった感触があった。

・・ふふ、いくよ。まずは膀胱串刺し・・

沙也加は掌で思い切り秋穂の尿道に刺さっているニードルを押し込んだ。

ズブゥゥゥッ！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

ニードルの先端が秋穂の下腹部を突き破り、ヘソの下からその顔を見せていた。秋穂は大きく反り返り絶叫している。

・・ふはは、いい様だね。一本じゃ終わらないからね・・

沙也加は2本目のニードルを秋穂の尿道に無理矢理突き刺すと押し込んでいく。秋穂の尿道はビリビリと裂け血が噴き出した。

「ふごっ、ふごおぉぉぉーーーーっ!!」

絶叫し続ける秋穂の下腹部を突き破り、2本目のニードルが顔を出した。

・・まだまだいくよ・・

沙也加は楽しそうに秋穂の尿道に3本目のニードルを突き刺していく。秋穂の細い尿道は完全に破壊され、膀胱も3本のニードルで串刺しにされ、秋穂は反り返ったまま絶叫し続けている。秋穂にとって地獄の時間がついに始まってしまった。

12、性器通電地獄

12、性器通電地獄

「ふごおぉぉぉーーーーっ!!」

尿道から3本のニードルを突き入れられ尿道を裂かれ膀胱を串刺しされ、下腹部からニードルの切っ先が飛び出している秋穂は、狂ったように絶叫していた。性器処刑、それは今までの性器調教とはレベルの違う恐怖と苦痛を秋穂に与えていた。自分の性器が容赦なく壊されていく。秋穂は絶叫して体をのけ反らしながら恐怖でガタガタと震えていた。あの資料で観た自分と同じメス奴隷たちも、こんな恐怖と絶望と苦痛のなか処刑されていったのかと思うと秋穂は涙が止まらなかった。この逃れられない恐怖、拘束され処刑されていくしかない運命。生まれた時から教育を施され他の運命を知らない秋穂は、それでももう少し生きていたかった。

・・あの八千代というメス奴隷は尿道を串刺しにされた後、恥丘にもニードルを突き刺されていたわね。それに葉月様には、尿道に焼けた火箸を入れられ焼かれていた。まだ、メインの穴にいくのは早いわね・・

沙也加は、秋穂の膣を処刑する前にまだ他の処を破壊していこうと考えた。そして、秋穂の着ているスクール水着のスカート部を捲ってみる。そこから現れた秋穂の形のよい恥丘に釘を打つ事に決めた。

・・この形のよいツルツルでなだらかな恥丘に五寸釘を打ち込んでやるわ。見物だわね・・

沙也加はすぐに普通の釘よりも巨大な五寸釘を手にし、金槌も握る。

・・釘を打ち込むのにニードルが邪魔になるわね。もう、効率悪いわ。私はまだ葉月様の域には達していないということね・・

沙也加は自嘲気味に笑うと、釘を打つ前に秋穂の尿道から膀胱を串刺しにしているニードルを抜いていく。ズルズルと抜かれていくニードルの感覚に秋穂はまた絶叫していた。

・・これだけ絶叫出来るって事は、まだ元気があるわね。楽しめそうで嬉しいわ・・

沙也加は残酷に笑いながら、秋穂の恥丘の中央にに五寸釘を当てる。そして、金槌で思い切り打ち込んだ。

ガーン、ガーン、ガーン!!

「ふ、ふごおぉぉぉぉーーーーっ!!」

恥丘に五寸釘を打ち込まれ秋穂は、また激しく反り返り絶叫する。沙也加は五寸釘を根本まで秋穂の恥丘に打ち込んでいた。秋穂の恥骨を貫通した五寸釘は膣を突き抜け直腸まで達しているに違いなかった。

「ふごおぉぉぉ、ふごおぉぉぉっ」

苦しみぬいている秋穂に沙也加は二本目の五寸釘を打ち込む。

ガーン、ガーン、ガーン、ガーン！

「ふごおぉぉぉぉーーーーっ！」

絶叫する秋穂の声に力がなくなってきていた。沙也加は三本目の五寸釘も打ち込もうと考えていたが、弱ってきている秋穂を見て、次の処刑に移ろうと考え注射器を用意し秋穂に強心剤を注射した。

・・急に弱々しくなったわね。急がないと楽しめないわ・・

沙也加は慌てていた。秋穂が絶命してしまっては楽しみが半減する。沙也加は急いで先端に尖った鉤のついている医療用のピンセットとクーパーを手に取る。そして、秋穂の小陰唇をピンセットで摘まみ引き伸ばすとクーパーの刃を根本に当てジョキジョキと切断していく。

「んごぉぉぉ、んごおぉぉぉーーーっ！！」

小陰唇を切断されていき秋穂は絶叫する。右の小陰唇が全て切除されると、次に左の小陰唇も切断されていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「んごおぉぉぉーーーっ！！！」

秋穂の性器は徐々に、だが確実に破壊されていく。秋穂の小陰唇を左右とも切除してしまった沙也加は次に秋穂の小さな突起クリトリスを狙う。

・・さあ、この敏感な突起に何をやっていこうか・・

沙也加が秋穂のクリトリスの包皮を剥くと、こんな酷い仕打ちを受けていながら硬く勃起していた。

・・さすがにメス奴隷。体は痛め付けられる事に反応しているわけね・・

沙也加は電線の付いた針を右手で持つと、秋穂のクリトリスを左手で摘まんだ。そして、針先をクリトリスの当て力を入れる。

プスッ

「ふぐうぅぅぅっ」

クリトリスに針が突き刺さる小さな音とともに秋穂も小さく声を上げる。沙也加はそのまま秋穂のクリトリスに針を刺していき、プツンと貫通させた。そして、また電線付きの針を取る。

「今度はここに深く刺してあげるわ」

沙也加は秋穂の性器の会陰部に針先を当て、躊躇いなく突き刺した。

ブスウゥゥッ

「ふぐうぅぅーーーっ！」

秋穂の悲鳴がクリトリスを貫通された時よりも大きくなる。沙也加はそのままズブズブと秋穂の中に深く針を押し込んでいった。秋穂は会陰に針を根本まで突き刺されていた。それだけでも相当な痛み

であるだろうが沙也加は更に秋穂の性器を痛め付けようとする。

「見た目は派手じゃないから面白味には欠けるけど、やられる方にしたらかなり苦しむ事になるからね。このメス奴隷を痛め付けるのには忘れずにやって起きたいわね。ふふ、マンコに通電してあげる」

沙也加は二本の針への電線の付いたコントローラーのスイッチを入れる。そして、電圧を上げていった。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶっ」

性器に通電され秋穂の体がぶるぶると震え出す。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ、ぶっぶぅぅぅっ」

秋穂は性器から通電され激しく体を震わせ、それを見た沙也加は爆笑していた。

「おもしろーい。何この無様な姿、最高、ウケる」

沙也加は縛っていた秋穂の腕をロープをほどくと秋穂は腕を力なくだらんと下げていた。そこで沙也加は再び秋穂の性器に通電する。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ、ぶっぶぅぅぅっ」

再び秋穂が声を上げ、両腕がまるで踊っているように激しく動く。

「あははは、最高っ！これは面白いわ。もっと強くしたらどうなるかな」

沙也加は容赦なく電圧を上げていった。

「ぶぼおぉぉぉ、ぶぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ！」

さらに秋穂の動きは激しくなっていく。まるで、壊れたロボットのように意味不明な動きを繰り返している。沙也加は、その秋穂の無惨な姿を爆笑しながら見ていたが、コントローラーのスイッチを止めた。

・・危ない、危ない。これでうっかり殺してしまったら詰まらないからね・・

「ふうーっ」

沙也加は大きく息を吐き、冷静さを取り戻すが、秋穂は気を失ったように両腕をだらんと下げて動かなくなっていた。沙也加は、その間にまた秋穂の両腕を縛りつける。

・・さて、そろそろ我慢出来ないからメインの処へ進むとしよう。ふふ、このメスのマンコ壊していくよ・・

沙也加は、今まで観てきたやってきた処刑を頭の中で考える。八千代も凛津も真弓も例外なく子宮を引き摺り出されていた。

・・やっぱり、子宮を抜き出すのはマストだよね。このメスの子宮も抜き出して破壊してやろう・・

沙也加は残酷に微笑むと、目の前に吊られている秋穂の股間を楽しそうに眺めていた。

13、秋穂の最後（前書き）

秋穂の章、最終話になります。
例によって秋穂も容赦なく残酷に処刑されていきますので、気を付けて下さい。

１３、秋穂の最後

１３、秋穂の最後

開脚され逆さに吊られて性器に通電された秋穂は気を失ってぐったりと揺れていた。その間に沙也加は、秋穂を床に下ろしスクール水着の上にブルマを穿かせていた。そして、処刑を手伝ってくれている人間に指示を出す。秋穂は処刑部屋から運び出されていった。秋穂が連れ出された場所は屋敷の外れの広い敷地であった。秋穂はその芝の上に寝かされ両足首に丈夫な革のベルトが巻かれ厳重に固定される。両腕も頭上でまとめて縛られ拘束された。そして、２台のオートバイが用意された。オートバイからはそれぞれロープがのびている。そのロープが秋穂の足首に巻かれたベルトにそれぞれ付けられた。もうお分かりであろう。秋穂は２台のオートバイでロープで引かれ地面を引き摺り回される事になる。秋穂を引き摺る事など１台のオートバイで十分であるが、わざわざ２台のオートバイを使用する理由は言わずもがなであろう。準備が整うとすぐにオートバイのエンジンがかけられ、ライダースーツを着た男がオートバイに跨がった。そして、沙也加の合図でオートバイが走り出す。

「ふごおぉぉーーーーっ！」

何が起きているのか分からず、秋穂は地面を高速で引き摺られ悲鳴を上げていた。ぐるぐると敷地内を周回し秋穂に充分恐怖を味わわせた後、その時はきた。２台のオートバイは並んで走行して秋穂を引き摺っていたが、１本の樹木に向かって走っていく。そして、樹

木の手前で左右に別れて通り過ぎ、そのまま走行していく。秋穂は地面を引き摺られていくが、その秋穂の股の先には大きな樹木が障害物のようにそびえている。もし、秋穂の目が見えていたとしても左右の足を別々のロープで引かれている秋穂に逃げ道はなかった。秋穂は樹木に向かって高速で引き摺られていく。

バキャッ！！

「ふがあぁぁぁーーーーっ！！！」

鈍い音と秋穂の絶叫が響き渡る。秋穂は高速で樹木に股間を激突され失神していた。秋穂とオートバイを繋いでいたロープは切れている。これは、敢えて切れるように細工をしてあったのだ。オートバイで引き摺られ樹木に激突すれば、股間はぐちゃぐちゃに破壊され両足も引き千切れてしまうだろう。それでは、たった一回で秋穂を殺してしまう。それでは面白くないので、ロープを切れるようにしておいて、秋穂のダメージを軽減させたのであった。それでも、秋穂の恥骨が砕ける程のダメージは与えられていた。ブルマをわざわざ穿かせたのも多少性器に加えられるダメージを軽くする為であるが、ブルマ一枚で果たしてどれ程の効果があるのか疑問が残るところであった。

沙也加は股間を潰された秋穂を眺めていたが、なにか不満だった。思い付いた時には、これは楽しめるのではないかと考えていたが、実際に行ってみると意外に詰まらない。やはり、自分の手で秋穂の性器を破壊していく。これが一番満足するのだと気が付いた。そこで、再び処刑部屋に秋穂を移動し開脚逆さ吊りに拘束した。そして、ブルマもスクール水着も切り裂き剥ぎ取っていく。秋穂は生まれたままの姿にされ、潰された性器を観察され、アップで撮影もされる。秋穂の外性器は激しい激突でクリトリスは勿論潰され形が失くなっており、大陰唇も含め股間全体がぐちゃぐちゃに破壊され恥骨まで

粉々に砕けていた。

・・もう完全に潰されているけど、マンコの中身はまだ平気ね。じゃあ、この残った膣と子宮を壊していきますか・・

沙也加は秋穂の膣をまずズタズタする処刑を考えていた。

・・なにが良いかしら。一度しか出来ないものだから悩んでしまうわね。ああ、葉月様みたいにすぐに何度でもメスを処刑出来れば、こんなに悩まないで済むのに・・

沙也加は、悩みに悩んだ挙げ句メスを手に取った。そして、秋穂の膣にメスを子宮に突き当たるまで入れ、そのままメスで秋穂の膣を縦にスパッと切り裂いた。

「ふごおぉぉーーーーっ！」

次に絶叫する秋穂の膣の反対側にメスを入れ、そこも切り裂く。秋穂の膣は上下二ヶ所が縦に切り裂かれ血を流しているが、沙也加は次に秋穂の膣の左右も切り裂くつもりだった。

「さあ、いくよ。今度は左右を縦に切り裂くからね。このメスのマンコの穴も、もうすぐ終わりだね」

沙也加は楽しそうに笑うと、メスの刃をスッと滑らせた。秋穂の膣に一筋の赤い線が出来たかと思うと、そこから血が溢れだした。

「ふごおぉぉーーーーっ！」

悲しげに絶叫する秋穂の膣の反対側も切り裂かれていく。秋穂は膣

を縦に四等分に切り裂かれていた。沙也加は、さらに膣の際奥の部分をぐるりと切っていく。そして、その切った際奥の部分を鉗子で挟みニヤリと残酷に笑うが、急に思い付いたように秋穂の腕に薬剤を注射していた。

「ショック死されたら詰まらないからね。これで、良いだろうね。おい、メス。お前もメス奴隷としての誇りがあるなら死ぬまで頑張れよ。頑張っても、もうすぐ死んじゃうけれどね。ふははっ」

沙也加は笑いながら秋穂の膣を挟んでいる鉗子を掴むと思い切りそれを膣から取り出した。バリバリという何かが剥がれる音がして、鉗子に挟まれていた膣壁が秋穂の膣から剥がされていた。

「ぶぎゃあぁぁぁぁーーーーっ!!!!」

膣から膣壁を剥がされ今までにないほど激しい絶叫をする秋穂。しかし、沙也加は次の膣壁をまた鉗子で挟んで引き剥がす。そして、また次……。

「ぶぶぶぶぶぶぅぅぅーーっ」

秋穂は四等分された膣壁を全て剥がされ呻き声を上げていた。秋穂の性器から膣も消滅し、秋穂の股間には血塗れの穴が空いているだけになっていた。

「さあ、メス。最後の処刑だね。残った子宮を壊すからね。もうひと頑張りだよ。ぷぷっ」

苦痛に喘ぐ秋穂とは対照的に、楽しくて笑い出している沙也加。その沙也加は長い鉄串を持っていた。それをバーナーの青い炎で炙る。

鉄串は、たちまち真っ赤に熱せられていった。

「葉月様がよくやるけどね。私も好きなんだよ、子宮串刺し。奥の奥まで突き刺してあげるからね」

沙也加は熱した鉄串を秋穂の股間に空いた穴に入れると、そのまま奥に見える子宮にズブリと突き刺していく。

「おぶぅぅぅぅーーーーっ！！」

秋穂が絶叫し反り返ろうとするが押さえつけられ、ズブズブと子宮を串刺しにされていった。沙也加は鉄串を根本まで押し込んでしまった。秋穂は焼けた鉄串で子宮を串刺しにされてしまったが、当然今までの例からも1本で終わる筈がない。秋穂は体を押さえつけられ、2本、3本と子宮を串刺しにされていった。

「おぶぶぶぶぶぶぅぅぅっ」

だんだんと秋穂の悲鳴にも力が失くなってくる。もう、秋穂に残された時間は少なくなってきているのは明白だった。秋穂の子宮に13本の焼けた鉄串を刺した沙也加は、そろそろ秋穂に最後の処刑を執行しようと考える。

・・死なれる前に楽しまないと・・

沙也加は、いったん秋穂の拘束を全て解き、改めて秋穂を拘束台の上に仰向けに乗せ、手足を大の字に拘束する。

「これは葉月様が造られた処刑台の試作品。試しに使ってみてもいいと許可頂いたから使ってみるわ」

それは複数のギロチン台がまとまった作りだった。大の字にされた秋穂の手足の上にそれぞれギロチンの刃があり、秋穂の手足を一度に切断する仕組みになっている。それだけではない。秋穂の股間を鉄製の巨大なボウガンの矢が狙っており、引き金を引くと秋穂の股間から一気に串刺しに出来るようになっていた。沙也加は、秋穂の頭を動かして調整し、秋穂が串刺しにされた時に上手く口から矢の先端が飛び出すように慎重に位置を合わせて固定した。もう、秋穂に残された時間は5分もなかった。

「ほら、最後の挨拶をしなさい」

沙也加が冷酷に秋穂に命令する。秋穂はもう自分の最後を悟っていた。ここまでされて生きていられる筈がない。それでも、死ぬのが怖かった。

「ううっ、たしゅけてください……」

秋穂が言った途端、張り手が飛んでくる。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！

「みっともない、メス奴隷らしく早く挨拶をしなさいよっ」

秋穂は泣きながら震える声で、施設で叩き込まれている最後の挨拶を言う。

「ううっ、秋穂の絶命する姿をどうぞお楽しみ下さい……」

秋穂が言い終わった瞬間、沙也加はギロチンを落とした。そして、

続けてボウガンの引き金を引く。一気にギロチンの刃が落ち、秋穂の腕を肩口から、秋穂の脚を太ももの付け根から瞬時に切断する。

「ぶぎゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

そして、一瞬の間をおいて秋穂は股間から串刺しにされる。

ズボウゥッ！

「おぼおぉぉーーーーっ！」

秋穂の口から血塗れの矢の先端が飛び出していた。秋穂は苦しげな呻き声をあげ、ビクンビクンと体を痙攣させていたが、やがて静かになり動かなくなった。沙也加は、残酷に処刑された秋穂を見て、激しく興奮し太ももまで濡らし自慰を始めていた。

13、秋穂の最後（後書き）

お読み下さりありがとうございます。

今までの誰のどのエピソードが良かった等教えて頂けると、参考になりますので嬉しいです。

宜しくお願い致します。

それでは、次章でまたお会い出来る事を楽しみにしております。

1、ゆかりの運命（前書き）

今回から始まる「ゆかりの章」でメス奴隷となり残酷に処刑されてしまうのは「変態異常自虐少女ゆかりの記録」で主人公であった渡邊ゆかりです。奴隷に堕ちたゆかりは、ついにオークションに出品されてしまいました。

「変態異常自虐少女ゆかりの記録」を未読の方がいましたら、そちらの方からお読み頂ければ、ゆかりの性格や経緯かわかり楽しめるかと思います。

御面倒ですが、よろしくお願い致します。

1、ゆかりの運命

1、ゆかりの運命

渡邉ゆかりはある組織に、とある中学校から引き渡され大きな会場でオークションにかけられていた。全裸にされステージに立つゆかりに、これから、このオークションの定番である女性器への鞭打ちが行われようとしている。ゆかりは、今まで自分が経験してきたものとは違う竦み上がるような恐ろしい雰囲気を敏感に感じとり、惨めにもぶるぶると震えていた。ここには調教や拷問とは違う処刑の、死の匂いが満ちていた。

「自己紹介しなさい」

天井のスピーカーからステージに立つゆかりに機械のような合成音で有無を言わさぬ口調で命令が告げられる。ゆかりは震える口を開き自己紹介を始めた。そのゆかりの口中の歯は既に全て抜歯されており、早口では喋れない為ゆかりはゆっくりと震える声で聞き取れるように話しだした。

「はじめまして、渡邉ゆかりといいます。１３歳、中学生でした。私は自分で奴隷になる事を望み人間を捨てました。そして、メス奴隷となり体も奴隷に相応しい体にしてもらい、調教や拷問をしてもらっていましたが、いつまでも学校に置いておくには無理がある、との事で協議された結果、この施設の方がメス奴隷のゆかりに相応しいと引き取って頂く事になりました。そして、今、こうしてステ

ージに立たせてもらっています。どうぞよろしくお願い致します」

ゆかりは震える声でなんとか言い切った。このステージに立つ直前にゆかりは、もし購入希望のランプが点灯しなければ即座に廃棄処分にされると言われていた。つまりランプが点かなければ廃棄処分となり有無を言わせずゆかりは処刑されてしまう。そこでゆかりの短い人生は終わってしまうのだ。しかし、購入希望者が現れたとしても、けっきょく処刑が先送りになるだけで、最後にはけっきょく性器を破壊されたうえ残酷に処刑されてしまう。もう、ゆかりの運命は、このステージの上に立った時点でカウントダウンが始まり、最期には処刑されるという事は既定の事実として決定してしまっていた。それはもう絶対に逃れる事が出来ないゆかりの運命だった。今まで、このステージに立ったメス奴隷たちで処刑を免れた者はいない。全員、例外なく恐怖と苦痛と絶望の中、容赦なく性器を破壊され、その後無様に泣き叫びながら残酷に処刑されていった。ただ、この施設で育てられたメス奴隷たちは、それでも自分の体が痛め付けられる事で、自分の主人に喜んで貰える事でささやかな幸福を感じていたが、少し前までは変態マゾではあるが普通の女子中学生であったゆかりが、そのような気持ちになるとは到底考えられなかった。ゆかりは間違いなく後悔と絶望で泣き叫び命乞いしながら残酷に処刑されていく事になるのだ。ここはもう、ゆかりが自慰の際頭に描いていた性器調教や性器拷問の世界ではない。性器処刑、女の性器を徹底的に破壊する行為を楽しむ悪魔のような人間たちが集う場所である。当然、ゆかりも調教や拷問ではなく、女性器を完全に破壊されてしまう。そして、その後処刑されてしまい完全に絶命する運命なのだ。ゆかりが変態マゾではあるが、まだ素人の中学生なので手加減してもらえるなどという甘い世界ではなかった。

「それでは、両手を上げ、足を大きく開くのです。あなたの性器を良く見えるようにするのです」

また天井から合成音が高圧的にゆかりに命令を告げる。ゆかりは震えながら命令に従い、万歳のように両手を上げ、足を大きく開き腰を前に突き出し、自分の性器が観客席から見えるようにした。そして、ゆかりの体にスポットライトの灯りが集中し、ゆかりの体が暗闇の中浮かび上がる。

「ほうっ、自分で言った通りもう奴隷の体になっているじゃないか。なかなかそそるね」

「マンコにいくつピアス入れられてるのかしら。マンコの穴にも入れられているみたいね。じっくり数えてみたいわね」

「恥ずかしい文字を焼き印されているのもポイント高いね。もしかして、あそこにも焼き印されてるかな。確認してみたいところだね」

「鼻輪が奴隷らしくて、しかも抜歯済みなのも手間がかからず良いよ」

「これなら、すぐに処刑しても良いわね。楽しめそう」

「そうね、私なら手に入れた日に処刑するかな。マンコ徹底的に壊されて処刑される時、このメスがどんな顔するのか楽しみだわ」

スポットライトに照らされたゆかりの体を見てゲストたちが口々に囁きあっていた。今まで、自虐やクラスメイトからの調教、拷問を受けてきたゆかりであったが、ここでは普通に処刑という言葉が使われている事にゆかりは恐怖を感じていた。メス奴隷を残酷に処刑するのが当たり前の世界なのだ。メス奴隷は性器を破壊され処刑するものという前提で会話されている。最悪の場合、せっかく落札さ

れ購入されてもその日のうちにゆかりは処刑されてしまうのかもしれない。とはいえ、このステージに立たされてしまってはもう逃げる事も出来ない。ゆかりは自分の運命を悲観し激しく後悔し静かに泣きだしているが、もうどうする事も出来なかった。

「初めから泣いてるメス奴隷は珍しいな」

「なかなか良い泣き顔と泣き声じゃないか。それをアピールしたいのかも」

「確かに不細工な顔だけど、この泣き顔ならもっと激しく泣かせてみたいわね」

ゆかりが泣いていても当然ながら可哀想と思うゲストは一人もいなかった。それどころか、もっと泣かせてみたいと考えるゲストがほとんどだった。そして、凶悪な一本鞭を持った男がゆかりの前に現れる。

「何処を鞭で打たれたいか、希望を述べなさい」

また合成音が流れる。普通の中学生であったゆかりは完全にこの場の雰囲気に怖じ気付き唇が震え声が出せなくなっていた。

「早く答えなさい」

焦れたように、また合成音が催促する。ゆかりはもちろん〝性器〟と答えなければならない事を理解している。ここで自分をアピールしてランプを点ける人が現れなければ自分は即座に廃棄処分にされ始末されてしまう。

「はひーっ、はひーっ」

ゆかりは深呼吸して自分を落ち着かせようと必死になっていた。

「ゆ、ゆかりのマンコを遠慮なく思い切り鞭で打って下さいっ。ゆかりはマンコを鞭で打って貰う事が大好きな変態マゾ奴隷です。ゆかりのマンコ鞭打ちを楽しんで下さい」

ゆかりはなんとか口に出して言う事が出来た。

「それでは、そのままの姿勢で動かないように。動いた場合、その場で失格となる場合があります」

いくら性器を鞭で打たれようと動けない。ゆかりは、それならいっそ動けないようにきつく拘束して欲しいと思ったが、男は鞭を振りかぶるとゆかりの性器に向かって思い切り鞭を打ち込んだ。

ビシィィーーッ!!

「あびゃぁぁぁーーーーっ!!」

性器を鞭で打たれゆかりは絶叫していた。鞭は正確にゆかりの割れ目に打ち込まれ、ゆかりの柔らかい敏感な場所を痛打する。それは今まで鞭打たれたものとは違う、何千何万回と女性器を鞭打ってきた人間の女性器を痛め付ける事に特化した鞭の一撃だった。たまらずゆかりは、シャーッと勢いよく小便を漏らしてしまっていた。わずか一発の性器への鞭の打撃で小便を漏らしたメス奴隷はゆかりが初めてだった。ゆかりよりも年下である小学生の〝凛津〟でさえ、いきなり漏らす事はなかったし、同じ様に素人であった柚月たちでさえも耐えていたが、ゆかりは鞭の打撃一発目で漏らしていた。も

ちろん、ゆかりはピアスを入れられた性器を直に鞭で打たれるという他のメス奴隷よりも確かに厳しい状態ではあったが、それでもゆかりがだらしなくすぐ漏らしてしまう緩い穴のメスだと印象を与えたのは間違いなかった。だが、ゆかりは小便を漏らしながらも頭上に上げた両手を固く握りしめ、姿勢を崩さないように必死に耐えていた。しかし、すぐに続けて鞭がゆかりの性器を襲う。

ビシィィーーッ！！

「おっびゃあぁぁぁーーーーっ！！」

大量にピアスを入れられた性器を鞭で打たれ、ゆかりの開いた太ももはぶるぶると震え、膝はガクガクと揺れ、口からは泡を吹いている。小便を漏らしながら性器を鞭打たれるゆかりは、それでもなんとか意識を保っていた。

1、ゆかりの運命（後書き）

ついにゆかりにとって引き返す事の出来ない運命が、動き出してしまいました。
ゆかりは、これまでの八千代や凛津、真弓、秋穂同様残酷に処刑されていきます。

2、無様に命乞いするゆかり

2、無様に命乞いするゆかり

ステージの上で性器を鞭で打たれているゆかりは、もう口から泡を吹き失神寸前だった。大きく開いた足はガクガクと震え、性器に鞭が叩き込まれる度に倒れそうになるが必死に耐えていた。が、残酷な事にさらにゆかりの性器に叩き込まれる鞭の回転が上がる。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィッ！！！

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あうぅぅーーーっ！！」

休む間もなく連続で性器に鞭を叩き込まれ、ゆかりはもう限界に近付きつつあった。

・・もお、ぢぬうぅぅーーっ・・

ゆかりの性器からは血が滴り落ち、目は白眼を剥き、口からはブクブクと泡を吹いている。その姿は、今までこのステージに立った八千代を始め誰よりも無様なものだった。

「だぢげでぇぇ、ゆるぢでぐだぢゃいぃぃ、もお、ぢぬうぅぅ、ぢにだぐないでぢゅぅぅーーっ！！」

ゆかりは性器を鞭で打たれながら無様に命乞いする。出品されているメス奴隷が命乞いするなど、このオークションが開始されて以来初めての出来事だった。

「ここまで無様なメス奴隷は初めてですな」

「逆に新鮮かも知れませんよ。命乞いするメス奴隷を処刑するのも楽しいかも知れません」

「良いかも知れませんね。興奮しそうです。このメス奴隷が本当に処刑される時、どんな顔して死ぬのか楽しみです」

「本当ですね。このメス奴隷がマンコ壊されてしまった時の絶望の顔が見物ですね」

「あはっ、たまには良いよねえ。こういう命乞いするメス奴隷を徹底的に痛め付けて地獄の苦痛の中処刑してやりたいね。煩(うるさ)そうだけどね」

ゆかりの命乞いは、かえってゲストの残虐心を刺激しただけだった。命乞いをした事でゆかりは、会場にいるゲスト全ての心の中に徹底的に残酷に性器を処刑しようという意識を植え付けてしまった。けっきょく、ゆかりの性器は近いうちに徹底的に処刑されてしまう事になる。変態のゆかりの最後の日はもう残り僅かに迫っていた。あの、自虐自慰を繰り返していたゆかりが本当に残酷に処刑されていく。ゆかりは性器を徹底的に破壊され、その生涯を終えるのだ。その事実に気付いていないのは哀れにもゆかり本人だけだった。ゆかりは廃棄処分にならなければ、自分はまだ生きていられると思っていた。この期に及んで浅はかな考えであるが、それはこの施設の出

身ではない素人のゆかりでは仕方のない事だった。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィッ！！！

激しい鞭の嵐がゆかりの性器を襲っている。今まで性器への鞭打ちを経験してきたゆかりであるが、それは所詮、調教、拷問レベルのものであると痛感する。人を処刑、殺すための鞭とは、やはり一線を画するものだと実感していた。一撃毎の苦痛や恐怖が桁違いであった。

・・だじげでえぇぇーーっ、ゆかり、しんじゃうよおぉぉーーーっ・・

心の中でも絶叫しながら、ゆかりはそれでも耐えていた。廃棄処分という確実な死の恐怖から逃れる為に必死であったが、それも限界にくる。ゆかりは性器を鞭打たれ続け、白目を剥き涙と鼻水を垂れ流し、さらになんと大便まで漏らしていた。性器を鞭打たれる度、緩んだ肛門から漏れた大便が周囲に飛び散る。それは、ゲストのいる客席にまで飛び散り、さすがに一時鞭打ちは中断され、ゆかりが漏らす物が無くなるように浣腸される事になった。すぐに、強力な刺激で排泄を促す薬剤が用意されシリンジでゆかりの肛門から注入される。

ヂューーーッ

ヂューーーッ

ヂューーーッ

ゆかりの肛門からどんどん浣腸されていき、ゆかりの下腹部が膨れてくる。しかし、まだ注入は終わらない。

ヂューーーッ

ヂューーーッ

ヂューーーッ

「ぐるぢいぃぃ、ぐるぢいですぅぅぅっ」

ゆかりが悲鳴を上げるが、まだゆかりは浣腸される。

ヂューーーッ

ヂューーーッ

ヂューーーッ

「おごっ、おごおぉぉーーっ」

ゆかりは肛門から注入された浣腸液を口から苦しげに噴き出していた。そのみっともない姿に、ゆかりの三つ編みの髪が掴まれ、頬が激しく打たれる。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！

忽ちゆかりの頬が赤く染まり、同時にゆかりは肛門から液状の大便を激しく噴き出していた。

ビシャァァーーーッ

ゆかりは平手で頬を打たれながら大便を漏らしていたが、激しく噴き出していた大便の勢いが弱くなっていき、やがて噴出が止まった。そこで、ようやくゆかりの性器への鞭打ちが再開される。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、ゆるじでぇぇーーーっ、もお、だれがあ、だずげでぐだじゃいぃぃぃーーっ！！」

ゆかりは、また性器に鞭を叩き込まれ無様に絶叫していた。それでも、ゆかりは廃棄処分だけは逃れようと必死に両手を上げ脚を大きく開き腰を突き出していた。もう、このステージに立っている時点で自分の運命は決定してしまっている事に気付いていないゆかりは必死だった。性器に鞭が叩き込まれる度に、ゆかりの太ももはぶるぶると震え崩れ落ちそうになるが、まだゆかりは耐えていた。それでも、まだランプが点灯しない事で運営側も少し趣向を変えようと考えた。

ゆかりは、この施設で育成されたわけではないので、仮に廃棄になったとしても運営側としてはそれほどの損失は生まれない。なので、もう少しきつく痛め付けていく事になった。多少、ゆかりの体が損傷しようと関係ないという事だ。ゆかりにとっては大勢のゲストが見守る前で更に酷い仕打ちを受ける事になる。

ゆかりは数人の仮面を着けた男に手足を押さえられていた。そして、口も背後から男に押さえられる。ゆかりは、何をされるのか分からずぶるぶる震えていた。そのゆかりのピアスが入れられている乳首に媚薬が塗られ無理矢理勃起させられる。そして、天井のスピーカ

ーから音声が流れてきた。

「皆様、お待たせしました。これよりメス奴隷の乳首を切開します。切断ではなく切開です。治癒すればまた乳首を痛め付ける事が出来ますので御了承下さい。このメス奴隷は既に乳首にピアスを入れられていますので、切開して一度ピアスを除去します。購入された方はご自分でピアスを入れ楽しんで下さい」

このアナウンスに会場はざわついていた。

「この時点で切開までするのは珍しいな」

「今までは、このステージではほとんど鞭だけだったのにね」

「切開とか、購入した人の楽しみだと思っていたけど、まさかこのステージで楽しめるとは嬉しいサプライズだな」

「このメスの乳首が切り裂かれるの見られるなんて私ラッキーだわ」

一気に盛り上がってきた会場とは裏腹に、ゆかりは恐怖でぶるぶる震え号泣していた。そのゆかりの泣き顔もスクリーンにアップで映し出され、会場の興奮を更に高めていた。

3、ゆかり乳首切開

3、ゆかり乳首切開

ゆかりの体は数人の男に押さえ付けられ、口も男の手で塞がれていた。もう、ゆかりが逃げようと思っても、ゆかりの力では動くことも出来ない。

「あぁーっあぁーっあぁーっあぁーっ」

ゆかりは恐怖で号泣しているが、ゆかりの前に大きなカッターを持った男と、撮影用のカメラを持った男が現れる。それを見たゆかりの泣き声がさらに大きくなる。ゆかりは、これから乳首を切開される。切除ではなく切開である事が、残酷さを際立たせていた。切除は一回切除してしまえばそれで終わりだが、切開は一度切開しても治癒すれば、また切開出来る。ゆかりをとことん痛め付けるには切除より切開の方が有効であるのは間違いなかった。そして、ゆかりはただ乳首を切開されるのではない。今、乳首に入れられているピアスを除去されるのだ。

「あぁーっあぁーっあぁーっ」

ゆかりは激しく泣いていた。その泣いているゆかりの左の乳首の先端にカッターの刃が当てられる。そのカッターの刃の感触にゆかりは狂ったように暴れ逃れようとするが、男数人に押さえられていては、ゆかりの力ではどうしようもなかった。男はゆかりの乳首を摘

まみ、スーッとカッターの刃を滑らせていく。ゆかりの乳首から血が滲み出した。

「ふがあぁぁぁーーーーっ！」

ゆかりが絶叫するが男は構わずまたカッターの刃を滑らせた。男はゆかりに苦痛を与える為に、一度では切開せず少しずつゆかりの乳首を切り裂いていくつもりのようだった。男は何度も何度もゆかりの乳首にカッターの刃を滑らせ、その度にゆかりは絶叫した。そして、ゆかりの乳首は縦に切開されたが、それで終わりではない。乳首に入れられたピアスを除去する為に、今度は横に切開される。ゆかりの乳首に、またカッターの刃が今度は横向きに当てられた。そして、またカッターの刃がゆかりの乳首をゆっくりと切り裂いていく。

「ふがあぁぁぁーーーーっ！」

ゆかりは男の手で塞がれた口で絶叫しているが、構わずカッターの刃はゆかりの乳首を何度も往復し深く切り裂いていく。そして、カッターの刃がゆかりに入れられているピアスに当たった。

ズルッ

ゆかりの乳首は十字に切開され、入れられていたピアスが取り出される。男はゆかりから取り出したピアスを銀のトレイに置き、今度は右の乳首も同様に切り裂いていく。始めに縦にゆっくりと切開し、次に横に切開する。そして、十字に切開したゆかりの乳首からピアスを取り出し銀のトレイに置いた。そこで一旦ゆかりを押さえつけていた男たちがゆかりから離れる。

「両手を上げ、切開された乳首がよく見えるように胸を突き出すのです」

また命令が告げられゆかりは泣きながら両手を上げ、胸を反らせて自分の切開された乳首を強調していた。ゆかりの小さな胸の先端で哀れにも十字に切開され血を流す乳首が晒される。ゆかりは全身をぶるぶると大きく震わせ、やっと立っている状態だった。それは無理もなかった。凛津より年上で、秋穂と変わらない年のゆかりであるが、この施設で育てられた二人とは、育った環境が違う。変態マゾではあるが極普通の真面目な中学生であったゆかりには、このステージで行われている事全てが、恐ろしい恐怖以外の何者でもなかった。自分が望んだ事とはいえ、こんな恐ろしい世界に足を踏み入れてしまった事を、今さらながら後悔していた。

・・お願いします。誰かゆかりを助けて下さい・・

ゆかりは、そればかりを祈るが、ゆかりに救いの手が差しのべられる事はもうない。ゆかりに手を伸ばすのは残酷な死神以外いなかった。

乳首を切開され、入れられていたピアスを取り除かれたゆかりに次の処置が施される。天井のスピーカーからのアナウンスを聞いたゆかりは恐怖で泣き叫んでいたが、また男たちが現れ今度はゆかりの体を背後の拘束台に厳重に拘束していく。

「いやぁ、おねがいしますぅ。ゆるしてくださいぃぃぃ」

ゆかりは泣き叫びながら拘束されていき、逆さに開脚された状態で完全に拘束されていた。

「誰かぁぁ、助けて下さいぃぃ、うぐぅっ」

無様に救いを求めるゆかりの口中にゆかりが穿いていた綿の下着が押し込まれ、その上からボールギャグも厳重に装着された。さらにガムテープも貼られゆかりの口を完全に塞ぐ。そして、ゆかりの目にもガムテープが貼られ、その上に黒い布がぐるぐると巻かれていく。ゆかりは視覚も完全に封じられてしまった。

「うぐっ、うぐっ」

ゆかりは、嫌々というように首を振り声を上げるが次の処置の準備が滞りなく進んでいく。

「いやあ、今日ここにいる人はラッキーですね。これは普段見られないものですよ」

「本当ね、もう興奮してくるわ。ここまで見せるなんてなかなかサービスがいいわね。これからもここを愛用しようかしら」

「たまにこういうサプライズがあるから足繁く通ってしまうんだよな。上手く心理をついてくるよ」

「このメス奴隷がこれからやられる事を思うとマンコが濡れてくるわ。ああ、早くやってくれないかしら」

聴覚は封印されていないゆかりにゲストの話し声が聞こえてくる。当然ながら誰もゆかりを救おうとする者など皆無だった。それより、早くゆかりに次の処置が施される事を全員期待しているのが分かりゆかりは絶望していた。

・・怖い、怖い、怖いよぉぉ・・

自慰の際、これから行われる行為を妄想した事はあるゆかりだが、それが実際に自分に行われるとなると震えが止まらなかった。激しい自虐も行ってきたゆかりであるが、自分で行う自虐と他人が行う行為とは同じ行為をしたとしても、それは全然違うものになる。変態マゾのゆかりでさえ、自虐する場合には、どうしても自分を守る本能が顔を出してしまう。けれど、他人が行う行為は当然ながらゆかりに一切容赦しない。ゆかりの痛みなど考慮する事はない。本当にそのままの行為が行われるのだ。

ゆかりは、これから性器を切開される。乳首を切開され、ピアスを除去されたように、ゆかりは性器を切開され入れられているピアスを全て除去されるのだ。

目も口も塞がれ、完全に拘束されたゆかりに逃げる術はない。ゆかりを救う者も現れる事もないし、この行為が中止される事もあり得なかった。このステージの上でそこまでされるメスはゆかりが初めてであった。運営側もゆかりを売り込むのに力を入れているという思いが会場のゲストには伝わっていた。

4、ゆかり性器切開

4、ゆかり性器切開

ゆかりは会場の最後尾の席から見ても震えているのが分かる程、ぶるぶると震えていた。無理もない。中学生のゆかりがこれから性器を切開されるのだ。ゆかりが性器に入れられているピアスの数はかなり多い。つまり、ゆかりはそのピアスを除去するために、性器をズタズタに切り裂かれる事になるのだ。小陰唇、大陰唇、クリトリス、そして、割れ目そのものといえる膣前庭窟。全てが切り裂かれ切開される。まだ、幼いゆかりに震えるなと注文する方が無理な相談だった。

・・私、本当にマンコ切られる。針を刺すとかじゃなくて、本当にマンコ切られちゃう。マンコ、壊されちゃうよぉぉ・・

ゆかりは恐怖と、もう逃げられない絶望で号泣しているが、まだまだ認識が甘かった。ゆかりは、自分の性器が壊されると思っているが、この程度の事は本当の性器破壊に比べれば、笑ってしまう程の軽度な行為に過ぎなかった。本当の性器破壊は、女性器を徹底的に破壊される。それは、外性器も内性器も含めて全てが、刺す、焼く、切る、溶かす等の残虐な拷問を受け、二度と使用出来なくされるのは勿論、股間から性器そのものの存在を失くされてしまう事だった。今までの、八千代や凛津、真弓も秋穂も性器を徹底的に破壊されていた。これ程凄まじい性器破壊をされては、当然メス奴隷自体も生きているのは難しい。多くのメス奴隷は性器を破壊され絶命してい

く事になる。それでも、生きていたメス奴隷には同時に処刑が執行され絶命させられる。性器を破壊され価値の失くなったメス奴隷は生かしておく理由もないので、すぐに処刑され絶命させられるのが通例だった。それは、今まで一人の例外もなく執行されてきた。そのレールにすでに乗ってしまったゆかりも、そう遠くない未来に性器を破壊された挙げ句、処刑を執行され絶命していく事になる。その将来の事を思えば、性器切開程度で震えて泣いている場合ではないのであるが、この施設の教育も受けていない普通の女子中学生のゆかりにとって、それは想像もつかない世界なのだろうと思われた。

「おっ、いよいよ始めるようですよ。楽しみですねぇ」

「あの不細工なメス奴隷がマンコ切り刻まれて泣き叫ぶのが楽しみ。いい気味だわ」

「あれだけピアス入れられていると、取るのも大変よね。まあ、その分こっちは楽しめるけどね」

「入れられているピアスを取るという事は、一旦奴隷を解除して、また新しく購入した人がメス奴隷にするという事だよね。私もメス奴隷欲しいけど、あの地味な顔と、あの体型じゃあね。格安で手に入るならいいから、入札はしてみるけどね」

女はそう呟きながら、手元の入札ボタンを押していた。青いランプが点灯し、これでゆかりの廃棄処分というシナリオは失くなった。ゆかりにとっては、即処分される事態は避けられた事になる。それが、ゆかりにとって幸せであるのかは判断のつかないところであった。瞬時に殺されてしまうか、ゆっくりと苦痛を味わわされ徐々に壊され死んでいくか。どちらが幸せなのかは、本人以外には分からない事であった。

青いランプが一つ点灯したのを見て慌てた男が一人いた。自分以外にも、ゆかりを狙っているものがいるとは考えていなかったのである。

・・今時、三つ編みの黒髪を二本垂らしたあんな地味で華やかさのない、どちらかというと不細工な顔に、胸も小さくて寸胴の体型だから、需要があるとは思わなくて油断した。競り合いになると価格がつり上がるから、最後にボタンを押そうと思っていたのに・・

男は、オークション終了間際にボタンを押し最低落札価格でゆかりを購入しようと考えていたが、その思惑が外れ唇を噛んでいた。

そうしているうちに、鋭いメスを持った男がゆかりの大陰唇に狙いをつける。まず、大陰唇を切開してピアスを取り出すようだ。男は、ゆかりの大陰唇に入れられたバーベルピアスに沿ってメスを入れる。

「ふごおぉぉーーーーっ！」

大陰唇を切開され、ゆかりが絶叫するが男はさらに深く切開し、入れられていたピアスを取り出すとトレイの上にカチャッと置く。そして、すぐに反対側の大陰唇にもメスを入れた。

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

また、ゆかりが絶叫する。その激痛にゆかりは暴れるが、開脚されたゆかりの腰の部分は何本もの革のベルトがついた丈夫なステーで特に厳重に拘束されているため、微動だに出来なかったが、その他の部分は拘束具が壊れるのではと思える程、激しく暴れていた。

大陰唇のピアスの取り出しが終了したゆかりの小陰唇にニッパーの刃が当てられる。今度はゆかりの小陰唇に入れられているピアスを

取り除く為に、小陰唇を切断するのだ。

プチッ！

「んごおぉぉぉーーーーっ！」

ゆかりの小陰唇がニッパーで切断され、ピアスが一つ取り除かれる。

プチッ、プチッ！

「んんんごおぉぉぉーーーーっ！！」

さらにゆかりの小陰唇が切断され、残りのピアスも取り除かれた。

そして、反対側の小陰唇に移る。

プチッ、プチッ、プチッ！

「んんん、んごおぉぉぉーーーーっ！！」

なんのためらいもなくゆかりの小陰唇は切断され、片側3個、計6個の小陰唇のピアスの除去は終了した。残りはゆかりのクリトリス、そして割れ目に入れられているピアスである。特に割れ目に入れられているピアスを取り除くには、文字通り性器を切開する事になるので、会場のゲストも息を呑んで期待していた。

「いよいよ次はクリトリスですねぇ。ワクワクしますな」

「クリトリスもあれだけピアスを入れられていると、包皮ごと切開するんですよね。楽しみだ」

「クリトリスには縦にも横にもピアス入れられているから、乳首みたいに十字に切開されちゃうんだよね。あのメス奴隷、あの敏感な部分切開されちゃうなんて最高」

「ああ、切開だけじゃなくて切除するところも見たくなってきたわ。その為には購入するしかないのね」

青いランプが点灯する数が多くなってきて男は焦っていた。このまま、点灯するランプの数が増えていけば、どんどん価格は上がっていくだろう。そういう意味では、運営側の思惑通りといえた。外部から手に入れた投資した金額がほとんどないゆかりが高く販売出来れば、まさにぼろ儲けである。久々に運営側の笑いが止まらなかった。その為、ゆかりの売り込みにも力が入る。性器切開など、購入した者の特権であったが、このステージで披露してさらに売値を上げようと目論んでいたのである。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

ゆかりは、大陰唇と小陰唇を切り裂かれ号泣していた。さらにこれからクリトリスと性器そのものを切開される事になる。ゆかりの性器の状況は、高解像度のカメラで撮影され、ステージ背後の大型スクリーンに鮮明に映し出されている。会場のゲストの興奮も高まってきていた。

5、ゆかりの購入希望者

5、ゆかりの購入希望者

ゆかりの性器切開も残るはクリトリスと割れ目そのものである膣前庭窟となっていた。運営側の思惑通り、ゆかりの入札を希望する青いランプが数多く点灯している。これは、このところ類を見ない盛況であった。ここで教育された訳ではない素人のゆかりは、最低落札金額は安価に設定されているが、これだけの数の入札希望者がいれば八千代や凛津、真弓、秋穂以上の価格になる事も充分に考えられた。この組織にとっては掘り出し物を手に入れたといえるだろう。しかし、そんな事情など関係ないゆかりにとっては、この大勢のゲストの見ている前で性器を切開されるという苦痛を味わわされるのだ。ゆかりは、塞がれた口で号泣していた。今までゆかりは性器に対する調教や拷問など数多く経験してきた。性器に花火を打ち込まれたり、爆破された事もあった。それでも、このステージで行われる残虐行為の方が格段に恐ろしく感じられた。性器を痛め付けられる事に快感を覚える異常な性癖のゆかりでさえも、恐怖で体がすくんでいた。それほど、このステージには恐怖そのものが染み付いているといえた。

その、号泣するゆかりの性器が大陰唇、小陰唇に続いてクリトリスが切開される。ゆかりのクリトリスには3本ものピアスが入れられている。それを全て取り除く為には、クリトリスの包皮毎、乳首同様十字に、それも深く切開する必要があった。まず、ゆかりのクリトリスに縦にメスが入れられる。包皮毎、縦にスパッと切開された。

「ふごおぉぉーーーーーっ！」

悲鳴を上げるゆかりのクリトリスから、まず一つピアスが取り除かれる。そして、次には横にクリトリスが切開された。

「ふごおぉぉーーーーーっ！！」

再びゆかりが絶叫し、二つ目のピアスが除去される。もう一つはゆかりのクリトリスの根元に入れられているため、さらに深くクリトリスを切開する必要があった。メスに力が入れられ、慎重にだが容赦なくゆかりのクリトリスが深く切開されていく。

「ふごっ、ふごっ、ふごおぉぉーーーーーっ！！」

ゆかりのクリトリスは十字に、そして、深く切開されピアスは取り除かれた。いよいよ次はゆかりの割れ目である。ゆかりは、膣と尿道、そして会陰にピアスを入れられているので膣前庭窟を切開される事になる。

「いよいよですな。私はメス奴隷のマンコが切り裂かれるのは見るのが初めてなので興奮しますよ」

「私は一度見た事がありますが、そうそう見られるものではありませんので、ワクワクしますな」

「いいわね。あのメス奴隷のマンコ、切開されると思うと濡れてくるわ」

「もう、早くしてくれないかしら。我慢出来ないわよ」

「こんなものが見られるなら、毎回参加したくなりますね」

期待に満ちた眼でスクリーンに大きく映し出されているゆかりの性器に注目している大勢のゲストたちのゆかりに対する感情が、ゆかりにも伝わってきていた。それは、性器を切開され無様に泣き喚くゆかりの姿を期待する感情だった。ここにいる全ての人間が、それを期待して見つめている。ここにきてようやくゆかりも悟っていた。

・・私はもう本当にマンコ壊されて、その後処刑されるんだ。もう私は絶対に助からないんだ・・

この会場の全てがそれを期待して望んでいる。この中の誰に購入されても、自分は助からない。それが本当に実感として感じられた。

・・怖い、怖いよぉ・・

ゆかりは後悔と絶望で体の震えが止まらなかった。これから、行われる性器切開など、きっとほんのお遊び程度のものなのだろう。ゆかりの心はもう恐怖に呑み込まれていた。しかし、そんなゆかりの感情などが考慮されるわけもなく。ゆかりの会陰にメスの刃が当てられる。

スパアッ

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

絶叫するゆかりの会陰が切開されていく。性器切開を初めて見るゲストも多く、固唾を呑んでスクリーンを見つめるなか、ゆかりの絶叫がシーンと静まりかえった会場に響き渡る。ゆかりの会陰は深く切開され、入れられていたピアスが取り除かれた。そして、いよい

よゆかりの性器に残った最後のピアスの除去が始まる。プリンセス・アルバーティナ。膣から尿道に入れてあるピアスである。つまり、ゆかりは膣から尿道を切開されるという事になる。しかも、ゆかりはプリンセス・アルバーティナを2本も入れられている。ゆかりは大事な処を2ヶ所も切開されるのだ。

「いやあ、興奮しますね。もう我慢出来ないですよ」

そう呟いた男の右手は自分の硬く勃起した性器を激しくしごいていた。

「もうダメ。あのメス奴隷、マンコ切られて最高だわ」

隣の女も右手を自分の股間に当て激しく動かしていた。それだけではない。会場のほとんどで男も女も自慰行為に耽っている。そんな中、ゆかりの尿道にメスが当てられ、スッと尿道が切り裂かれていく。そして、そのまま膣に向けてメスは動いていった。

「ぶぼおぉぉーーーっ、ぶぼぼぼぼおぉぉーーっ！！」

絶叫するゆかりの膣前庭窟に尿道から膣口に向けて一筋の赤い線が出来、そこから血が溢れだした。

ドピュッ、ドピュッ

プッシャーーーッ

その瞬間、会場のそこかしこで精液が放出され、潮が吹かれていた。ゆかりはピアスを取り除かれ、カランとトレイに置かれた。そして、切開されたすぐ隣にまたメスが当てられ最後のピアスが除去される。

ゆかりは、ようやく拘束を解かれステージに股を開かされ立たされていた。切開された乳首と性器からは血が滴っている。ゆかりは髪の毛を掴まれ顔を上げさせられると目と口を塞いでいた拘束も解かれる。ゆかりの涙と鼻水とよだれで汚れた無様な顔が、大画面のスクリーンにアップで映し出されていた。

「今回、大勢のお客様より購入希望のボタンが押されまして大変嬉しい次第です。そこで、最後にこのメス奴隷を面談した際に得た情報から、性器拷問を行います。それをもって商品チェックへと移らせて頂きます」

再びアナウンスがあり、観客席から歓声が上がった。

「今回はなかなかサービスが良いじゃないか。まだマンコを痛め付けてくれるとはね」

「嬉しいわ。まだこのメス奴隷の惨めな姿を見られるのね。期待しちゃうわね」

「何やるのかしらね。切断や摘出しちゃったらマンコ壊れちゃうから、買った人の為に行わない筈だからね」

「お金払って良いから、もうこのメス奴隷のマンコを徹底的に破壊して欲しいわね」

観客席はゆかりの性器への更なる拷問が行われるというアナウンスで大いに盛り上がっていた。その為、購入希望のランプもどんどん点灯していく。運営側にとっては願ってもない事だった。ゆかりはこの施設育ったメス奴隷ではないので、かかった費用というのは、ゆかりの両親に支払った譲渡金だけである。両親は、その目も眩む

ような金額に驚いていたが、組織にしてみればはした金である。その金とゆかり本人のメス奴隷宣言とメス奴隷化されるまでの動画を見た事で、もう両親は自分たちの娘であるゆかりに愛想を尽かし、大金を貰って今後の自分たちの人生を楽しく遊んで暮らす事を選択したのだった。なので、これだけ購入希望者がいれば落札価格はどんどん上がっていくだろう。運営側にとっては、まったくぼろ儲けといって良かった。

ゆかりは今度は左右に立てられたポールからロープで手首足首を縛られ立ったまま大の字に拘束されていた。

6、ゆかり、商品チェック

6、ゆかり、商品チェック

ゆかりはステージの上で大の字に拘束されている。いくつものスポットライトが当てられ、ゆかりの裸体が浮かび上がるように強調されていた。そのゆかりの体からピアスは除去されたが、焼き印は残っている。胸に〝ブス〟、腹部には縦に〝マンコ〟と遠くからでも読めるほどはっきりと焼き印が捺されていた。そして、切開された乳首と性器からは血が滴っている。その、ゆかりの血の滴る性器の下に何かが置かれ位置が調整された。

「それでは皆様、メス奴隷の性器拷問を開始します」

アナウンスが流れると同時にスポットライトが消され、ステージの上も暗闇になるが、すぐに床に置かれた物から激しく火花が噴き出した。

「あぢゃあぁぁぁーーーーっ!!」

ゆかりが絶叫する。それで観客席のゲストは理解した。

「噴き出し花火か、懐かしいな。それでメス奴隷のマンコ焼いているのか」

「いいわね。あのメス奴隷、マンコや太ももに火花浴びせられて最

高だわ」

「うーん、でもどうせならメス奴隷のマンコの中も焼いて欲しいなぁ。それは買った人の特権なのかなぁ。私も購入希望のボタン押したけどいくらになるのかなぁ」

「いやあ、ほんと。こんなの観てると是非手に入れたくなりますなぁ」

「今回、主催者の進行が上手いですね。購買意欲が刺激されますよ」

「私も欲しいけど、きっと無理ね。だって、あの有名な女の方を見かけましたから。あの方が会場に現れた時は多分みんな購入されてしまうわ」

「ああ、私も見ましたよ。葉月様でしょう。あのメス奴隷、葉月様に購入されたら相当酷い事になりますね」

「そうか、葉月様がいらしているのか。葉月様は購入したメス奴隷の公開処刑をしてくれたりするから、このメス奴隷も公開処刑してくれないかな」

「あら、私も葉月様の公開処刑観た事がありますけど楽しかったですよね。ほんと、葉月様がこのメス奴隷を購入されたら公開処刑して欲しいですね」

会場では興奮したゲストたちが盛り上がっていたが、一人の男は唇を噛んでいた。

・・豪徳寺葉月が来ているのか。あいつは気に入ったらいくらでも

金を積み上げていくからな。あのメス奴隷は僕が落札したいのだけど……・・

男は豪徳寺葉月の事は知っていた。というより、このようなオークションに出席している人間で知らない者はいない程の有名人であった。彼女は気に入ったメス奴隷を購入しては残虐に処刑して楽しんでいた。その処刑を大勢の観客の前で公開して楽しむ事もあるし、一人で処刑してその撮影動画を販売する事もあった。いずれにせよ豪徳寺葉月に購入されたメス奴隷は性器を徹底的に破壊され処刑されるという事は間違いなかった。

・・豪徳寺葉月の気に入らなければ良いのだけれど・・

男は祈るような気持ちだった。男は知らなかったのだ。以前、豪徳寺葉月が落札した〝柚月〟というメス奴隷を……。柚月とゆかりはよく似ている。顔や体型や雰囲気までも……。柚月をさらに激しく変態にして、性器を痛め付けられる事だけに快感をおぼえるマゾにしたのがゆかりといえた。柚月の頭を剥製にして飾っている豪徳寺葉月がゆかりを気に入らないわけがなかった。この時点でゆかりは一番最悪の運命に向かってしまったのが確定してしまう。その、ゆかりはステージ上で花火の火花を性器に浴びせられ絶叫していた。そして、ようやく花火が燃え尽きゆかりはようやく解放されたかに思えたが、次の作業が進められていた。ゆかりの膣に太い円筒状の物が挿入され、貞操帯のような革のベルトで膣から抜けないように固定される。今度はスポットライトは点灯したままだった。

「これが最後になります。この性器拷問が終了しましたら商品チェックへと移行します。入札希望の方は拷問終了までにお手元の購入希望ボタンを押して下さい」

感情のないアナウンスに促されてしまい、ここでも数人が慌ててボタンを押していた。青いランプの数はおそらく過去最高の数になっていた。運営側は満足したように、ゆかりに最後の性器拷問を執行する。

「これからメス奴隷の性器の中に打ち上げ花火を撃ち込みます。どうぞお楽しみください」

アナウンスの後、ゆかりの膣に挿入されている打ち上げ花火に点火された。

ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ！！

「あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばっ、あばぁぁぁーーーっ！！」

鈍い音とゆかりの絶叫が響き渡る。ゆかりは白眼を剥いて、口からブクブクと泡を吹き失神していた。

★　★　★　★

ゆかりはステージから商品チェック用の部屋に運ばれ、両腕は背中で拘束されたうえ厳重に目隠しがされていた。もちろん、これから間近でゆかりをチェックする購入希望者の顔を見えなくするためである。今回はすでにゆかりのダメージが大きい為、軽い打撃や犯す事以外は遠慮するように指示が出されていた。犯すぶんにはゆかり

の膣も肛門も口腔も全てＯＫであるが、加虐については平手で叩く程度以外はＮＧとされていた。ゆかりは指示されたまま両足を大きく開き、小さな胸を突き出して立っていた。そこへ一人目の男が入ってくる。

「は、初めまして。メス奴隷になる前は〝渡邉ゆかり〟という名前でした。ゆかりは、マンコを痛め付けてもらう事が大好きな変態マゾ奴隷です。どうぞよろしくお願いいたします」

ゆかりは指示通り入ってきた購入希望者に挨拶する。男はしばらくゆかりの体を間近で眺めていたが、ゆかりに正座するよう命令する。ゆかりは命令に従い冷たい床に正座していた。

「よし、上を向いて口を大きく開きなさい」

男が次の命令をくだし、ゆかりは命令通り上を向いて口を大きく開いた。男はゆかりの全ての歯を抜歯された口の中を眺めて満足そうに頷いていた。そして、自分の性器をゆかりの口に狙いを付けると、そのまま放尿した。

じょーーっ

ゆかりの口の中に男の小便が溜まっていく。男はゆかりの口一杯に小便が溜まったところで一旦放尿を止めた。

「飲みなさい」

男の命令で、ゆかりは口を閉じ男の小便を飲もうとするが慣れていない為、口から少し溢してしまう。

パシィッ！

「うぐぅっ」

ゆかりは頬を平手で打たれていた。

「メス奴隷が溢してどうするのですか」

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！

連続で頬を打たれゆかりの目隠しの布に涙が滲み、頬を赤く染まっていた。

「ううっ、申し訳ございません。御主人様」

ゆかりは必死に謝罪していた。メス奴隷のゆかりは命令には絶対服従しなければならない。わずかでも逆らう事など、もう許されないのだ。しかし、こんな事は、ゆかりが憧れたメス奴隷のほんの一端にすぎなかった。ゆかりは、これから商品チェックを受け、その中の誰かに購入されていく。そこからが、ゆかりのメス奴隷としての本当の苦痛が始まっていく。ゆかりの残りの時間は、いずれにしろそう長いものとは思えなかった。

7、沙也加と公園の男

7、沙也加と公園の男

ゆかりの口中に並々と男の小便が満たされた。ゆかりは静かに口を閉じ、ごくっと男の小便を溢さずに飲み干した。そして、すぐにまた上を向いて口を開く。男はまたゆかりの口の中に放尿した。それは、男が小便を出しきるまで続けられた。ゆかりは生まれて初めての男の性器からの直飲尿をなんとかこなしていた。

・・ううっ、生暖かくて苦くて変な味だけど、これ男の人のおしっこだよね。私、おしっこ飲まされているんだ。嬉しい、ありがとうございます・・

ゆかりは、自分を人として扱わない男の態度に興奮し性器を濡らしてしまっていた。つい先程までは恐怖で震えていたゆかりだが、やはりゆかりは真性の変態マゾであるのは間違いなかった。

「なかなか良いじゃないか。いい公衆便女だ」

男は満足したようにゆかりに立ち上がるように命令し、今度は机の上に仰向けに寝かせる。そして、ゆかりの頭だけを机の端から出し押さえつけると口を開けるように命令し、ゆかりの口に自分の硬く勃起した性器を突き入れた。

「おぼぉっ！」

いきなり喉奥まで突き入れられ思わずゆかりがむせるが、男はかまわず激しく腰を振る。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

ゆかりは大きく口を開き、少しでも男が自分の喉の奥を犯せるようにしているが、呼吸が出来ずゆかりは意識が薄くなってきていた。両腕は縛られていて動かす事も出来ないゆかりは、男のなすがままに口腔を犯されている。ゆかりの口からは白濁した唾液が泡となって吹き出しており、股間からはチョロチョロと尿が漏れ始めていた。

「申し訳ありませんが、そこまでにして下さい。そこから先は是非購入してからお願いします」

監視役としてこの部屋に待機しているスタッフに止められ男は頭を掻いていた。

「いや、申し訳ない。このメス奴隷、抜歯してあって具合がいいものだから、つい興に乗ってしまったよ。うん、これなら多少値が張っても欲しくなったな」

男はスタッフに頭を下げると退室していった。ゆかりは泡を吹いて気絶していたが、スタッフに気付け薬を打たれ、また股を開いて立たされていた。そして、次に入って来たのは女だった。

「間近で反応見たいから、少しくらい痛め付けるのは良いのよね」

「ええ、多少の加虐は構いませんが、刺したり焼いたり切ったりなど、メス奴隷に傷が残る事は御遠慮下さい。商品でありますので、

購入された方の楽しみを残しておきませんといけないので」

女はスタッフに確認して分かりましたと頷くと、ゆかりにツカツカと近付いてゆかりの髪の毛をむんずと掴んだ。そして、もう片方の手でゆかりの頬を思い切り叩く。

パシィィッ！

「あうぅっ」

ゆかりの頬が赤くなり、目隠しに涙が滲んだ。女は、そのゆかりの顔を見てニヤリと笑うと今度は続けてゆかりの頬を打つ。

パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ！

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

ゆかりの両頬が赤く染まり涙が流れている。女は満足したように次の命令をゆかりに告げた。

「四つん這いになって尻を突きだしなさい。メス奴隷の穴をチェックさせてもらいますよ」

ゆかりは両腕を縛られたまま床に跪き尻を高く突き出す姿勢をとる。女はゆかりの丸出しの性器と肛門を眺めていたが、いきなりゆかりの肛門に人指し指を突き刺した。女はＭＰ関節と云われる指の第三関節までゆかりの肛門にずっぽりと突き刺しぐりぐりとゆかりの腸内を刺激していたが、ずぼっと指を抜くと自分の指に付いたゆかりの大便や腸液を眺め、今度はその汚れた指をゆかりの膣に突き入れた。ゆかりは肛門を刺激されすでに大量に濡らしていたため女の指

はなんの抵抗もなくするりと入っていく。

「１３年物というわりには緩いわね。まあ私が購入したら、この穴はすぐに壊すから関係ないか。さあ、もう一つの穴もいくわよ」

女はゆかりの膣から指を抜くと、もう一つの小さな穴、尿道に指先を当て突き入れようとしている。ステージで切開された尿道が再びビリビリと裂けそうになっていた。

「ひぎぃぃぃーーーっ、いだいですぅぅぅーーーっ」

ゆかりが絶叫し、スタッフが慌てて女を止めていた。

「すいません。それはこのメス奴隷を購入してからにお願いします」

女は残念そうに舌打ちするとスタッフに向かって睨みつけた。

「私を誰だと思っているの神楽坂沙也加よ。どうせこのメス奴隷は私が購入する事になるわ。まあ、今はあなたたちの顔を立ててこれで終わりにしておくわ」

「はい、神楽坂様のお顔はもちろん存じ上げておりますが、このメス奴隷を購入される方から、このメス奴隷を出来るだけ現状維持しておくようにとの指示を頂いておりまして……」

「ちょっと待ちなさいよ。まだ商品チェックも終わっていなくて誰が最高額を提示するかも分からないのに購入する人が決まっているなんてあり得ないでしょう。どういう事なのか説明してもらうわ」

「はい、それはその方が商品チェックを終わって出された最高額に

さらに１０億プラスするという事ですので、上の方ですでに購入する者が決定しているという事です。神楽坂様、これは他言無用でお願いしますよ。神楽坂様なのでお話しした次第なので……」

・・そんな、まさか葉月様がいらしているの……・・

そこまでして気に入ったメス奴隷を手に入れるなど沙也加の頭の中では豪徳寺葉月以外考えられなかった。

・・でもそれならこのメス奴隷を処刑する時、私もサポートで呼ばれるかもしれない・・

沙也加はゆかりを処刑する自分を想像し笑みを浮かべながら退室していった。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

ゆかりは泣きながら立たされ、再び商品チェックが開始された。運営側にしてみれば落札者が決まっていても少しでもこのメス奴隷の価格を吊り上げたいという思惑があるのは当然だった。価格が上がれば上がるほど良いのだ。その価格にさらに１０億がプラスされるのだから……。

ゆかりは、その後も口や性器や肛門を犯され続けていた。自慰や自虐は数多く経験しているゆかりであるが、短時間にこれだけ犯されイカされた経験は皆無であり、ゆかりの頭はもう何も考えられないほど真っ白になっていた。そこへ何処かで聞いた覚えのある声が聞こえた。

「まったく、返事が返ってこないと思ったらこんな事になっているとはね。僕の奴隷になるのは嫌だったのかい」

ゆかりは記憶を辿り、それがあの公園で出会った男だと思い出した。ゆかりが針の付いた下着を穿いて自慰しようとしていた公園で会った男。ゆかりの裸を見て自慰してくれた男。ゆかりは懐かしく思い出していた。

「ごめんなさい。返事は出そうと思っていたのに、ゆかりは変態で頭がおかしいから、こうなってしまいました」

「まあ、別に良いさ。僕が君を落札しようと思ったけど今回は間違いなく他の者に落札されるだろうね。僕の知っている女にね。あの女に落札されたメス奴隷は例外なく性器を徹底的に破壊されて処刑される。君にとっては最高のことかも知れないね。君が処刑される時には僕も立ち会わせてもらえるように頼んでみるとするよ。君とまともに会えるのはこれが最後かもしれないから、今日は犯させてもらうよ。どこの穴が希望かな」

「はい、ゆかりのマンコを犯してください」

男はゆかりが答えるやいなや、ゆかりの腰を掴みゆかりの膣に自分の硬く勃起した性器を突き刺した。そして、激しく腰を振る。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

ゆかりの口から声が漏れる。

「なるほど君はこんな声を出すのか。処刑される時にはどんな声を出すのかな」

男は目隠しされているゆかりの顔を残酷な瞳で見つめながら腰を振

る。豪徳寺葉月に落札されれば間違いなくゆかりは苦しみ抜いて発狂してしまうだろう。自分が、ゆかりが処刑される時に会ってもおそらくもう廃人になっていて自分の事もわからなくなっているに違いない。今がゆかりを味わう最後のチャンスだ。男は商品チェックに割り当てられた時間をフルに使用して、ゆかりの体を隅々まで味わうつもりだった。

8、購入されていくゆかり

8、購入されていくゆかり

ゆかりの商品チェックもいよいよ最後の一人となっていた。その最後の人物が部屋に入ってきた瞬間、ゆかりは背筋が凍り声も出なくなっていた。

「う、あ、あ……」

挨拶しなければいけないのだが恐怖で声が出ない。目隠しされているゆかりは部屋に入ってきたのが人間とは思えなかった。まるで死神がゆかりの命を奪う為に入ってきたように感じたのだ。

「あらあら、そんなに緊張しないで良いのよ、ゆかりちゃん。私はゆかりちゃんの事が気に入ったから是非購入させていただくわ」

ゆかりが感じた恐ろしい気配とは裏腹に、綺麗なよく通る声がゆかりの耳に飛び込んできたが、それが余計に恐ろしさを倍増していた。

「ゆかりちゃんのプロフィール読ませてもらったけど随分楽しい性癖を持っているわね。でもやはり本人の口から直に伺いたいと思ったのよ。そうそう、あなたをまだ購入していないから、今は名前で呼んであげているのよ。渡邉ゆかりなんて可愛い名前ね。さあ少しは落ち着いたかしら、ゆっくりで良いから自分の性癖を言ってちょうだいね」

ゆかりは、この優しそうな口調の女に逆らってはいけないと直感で感じていた。そして、自分を購入していくのも間違いなくこの女であると確信していた。

「中学生の頃の名前は渡邉ゆかりといいました。風紀委員長の橘さんの配慮で、ゆかりは自分の意思でメス奴隷に堕として頂きました。ゆかりは小さい時から変態で頭がおかしかったです。自分のマンコを破壊して処刑するお話しを書いていたりしました。実際にマンコを爆破して貰いたくて、わざと変質者に捕まったりしました。ゆかりは、マンコを痛め付けられる事が何より気持ち良いんです。ゆかりは普通の女の子ではありません。ゆかりは頭のおかしい変態マゾです。どうか、ゆかりのマンコを徹底的に壊して処刑してください。よろしくお願いいたします」

ゆかりは震えながら女に言った。この女の人は間違いなく確実に自分の性器を徹底的に残酷に破壊する。ゆかりは、もう自分の運命は終わりに向かって進んでいると実感していたが、その恐怖とは反面、幼い頃から妄想してきた性器破壊が、いよいよ本当に自分の性器に執行されるのかと思うと、興奮して濡らしてしまっていた。。

「あら、ゆかりちゃんは橘の学校の生徒だったのね。橘も私同様異端、普通の人間ではないからね。これから先も長い間、橘とは関わっていく予感がするわ。ゆかりちゃんの処刑動画は橘にも送ってあげましょう。きっと、彼女も喜ぶわね」

女は楽しそうに微笑んでいたが、頭の中ではゆかりの性器をどのように壊していくか残酷に考えていた。

「ふふ、変態で頭がおかしいゆかりちゃんが満足するように残酷に

マンコを壊してあげる。この前のメスみたいにマンコを解体するのもいいわね。ゆかりちゃんの子宮、取り出してぐちゃぐちゃにしたいわね」

女は屈みこむと股を開いて立っているゆかりの股間を眺めて、性器を指でくぱぁと開いた。

「ひっ……」

思わずゆかりが身構えるが、女はのんびりした口調で感想をもらしていた。

「あらあら、切開されたマンコが酷い事になっているわね。いったい何人に犯されたのかしら。おしっこの穴も傷が開いちゃっているわね。誰か、おしっこの穴も犯そうとしたのかしら……。まあ、ゆかりちゃんのマンコが回復するまで治療して待ってあげるわ。その方が壊すとき楽しめるからね」

女はゆかりに呟くと、部屋に待機しているスタッフの方に顔を向ける。

「私の商品チェックはもういいわ。ゆかりちゃんは私が購入します。なので、もうゆかりちゃんは私のモノ、目隠しを取っても良いわよね」

「はっ、豪徳寺様。問題ありません」

スタッフは直立不動の姿勢で葉月に答えていた。葉月はゆかりの目の上に厳重に巻かれている目隠しをくるくると解いていく。しばらくするとゆかりの瞳に光が入ってきた。それが眩しくて目を細めて

いたゆかりは、ようやくその光の中に一人の女性の姿を認識した。その姿は光輝く残酷で無慈悲な天使のようにゆかりは感じていた。

「初めまして、ゆかりちゃん。豪徳寺葉月です。ゆかりちゃんを、ゆかりちゃんが妄想していたように残酷にマンコを処刑してあげますからね」

ゆかりは思わず跪いていた。そして、深く頭を下げる。この人にはけっして逆らってはいけないと本能的に感じていた。

「あらあら、可愛いわね、ゆかりちゃん。では、さっそく私の足の指を舐めてきれいにして貰おうかしら。ああ、それからゆかりちゃんを名前で呼ぶのは私が契約書にサインするまでよ。その後ゆかりちゃんは私のメス奴隷になるから、もう名前も人格も全て破棄されてただのモノになるのよ。だから、私の足を舐めながら今のうちに希望を言っておきなさい。心残りがあって死ぬのは嫌でしょう。ゆかりちゃんがして貰いたい事は全部してあげるわ」

葉月は自分の足をペロペロと丁寧に舐めているゆかりに残酷に言い放つが、ゆかりも、もう逃れられない運命なら本当に心残りがないようにしたいと考えた。どうせ処刑されてしまうのなら、徹底的に性器を壊されて殺されたい。もう今のゆかりに残っている思いはそれだけだった。

「ゆかりのマンコを徹底的に破壊して下さい。クリトリスも小陰唇もおしっこの穴もマンコの穴も、そして子宮も全部原型が無くなる程、完全に破壊して下さい。ゆかりの体からマンコが消滅するくらいの処刑を執行して下さい。頭のおかしいゆかりはその為だけに生きてきました。マンコを処刑されて絶命する事だけがゆかりの望みです」

ゆかりは葉月の足を舐めながら震える声で言うが、その性器は今まで以上に激しく濡れ、その分泌液で太ももまで光っていた。葉月はそれを嬉しそうに聞いていた。

「良いわね、ゆかりちゃん。あなた最高だわ。ああもう今すぐにでもゆかりちゃんのマンコ壊したいわ。でも、ちゃんと完治する迄我慢するわね。ゆかりちゃんもそれまで我慢してね。その後、ゆかりちゃんの待ち望んでいるマンコの処刑をきっちりと執行してあげますからね」

葉月は今までに処刑してきたメス奴隷を思い返す。

・・ゆかりちゃんにはどんな処刑が良いかしら。やっぱり、大勢の見ている前で無様に処刑されるのが良いかしら。良い声で泣きそうだし、この顔が絶望と苦痛で歪むのは楽しそうで待ち遠しいわ・・

残酷に笑みを浮かべる葉月の足を、ゆかりは興奮して性器を濡らし舐めているが、やはりゆかりはまだ中学生、処刑される、性器を破壊される、その本当の苦痛をまるでわかっていなかった。妄想の中ではない。性器を本当に破壊される。そこには快感など存在しない。純粋な痛み、発狂する程の苦痛だけである。ゆかりが、その事実に気付くのは哀れにも実際に性器を処刑され、その激痛を味わった時であった。

9、初日の出来事

9、初日の出来事

ゆかりは予定通り豪徳寺葉月に購入され、葉月の屋敷に大きなスーツケースに入れられ荷物のように運び込まれていた。そして、スーツケースが開けられゆかりは外に取り出される。ゆかりは全裸で両手両足を縛られ、目も口も塞がれていた。そして、ゆかりは両足の拘束を解かれ、何人もの男に無理矢理足を開かされＬＥＤ　のライトの光を当てられ性器の状態を中まで入念に確認される。拘束されてスーツケースに長時間入れられていたゆかりの性器はオリモノ等で激しく汚れ異臭を放っていた。

「良い匂いね。メス奴隷のマンコの匂いらしくて興奮してくるわ」

ゆかりの性器に鼻を近づけて匂いを嗅いでいた葉月が満足そうに頷くと男たちに控室まで運びなさいと命令する。ゆかりは台車に載せられ、がらがらと運ばれて行った。

ゆかりはスーツケースから出された時から極度の緊張状態だった。このまますぐに処刑されてしまうのかもしれない。実際にその時が近付いてくると当然ながらゆかりは興奮よりも恐怖が勝り抑えようもなくガタガタと震えていた。

・・怖い、怖いよ。もうゆかり、処刑されて殺されちゃうの・・

恐怖に震えるゆかりは男たちに丁寧にベッドの上に寝かされる。そ

して、目と口を塞いでいた拘束具が外された。

「ようこそ、私のお屋敷へ。あなたはこれから６９番と呼ばれます。覚えておくように。そして、幾つか質問があるのですぐに答えるように。私を待たせるような事はしないようにしなさい。分かったわね」

「う、あ……」

ゆかりは恐怖ですくんでしまい声が出せなくなっていた。商品チェックの際の葉月とはまるで違うその圧倒的な冷酷で残忍な雰囲気にゆかりは押し潰されていた。

パンッ、パンッ、パンッ！！

「ひいぃぃぃっ」

いきなりゆかりの頬が激しく連続で打たれゆかりは悲鳴をあげていた。

「すぐに答えなさいと言ってるそばから返事も出来ないの」

「ひいっ、申し訳ありません」

ゆかりは慌てて頭を下げて謝罪する。

「６９番、あなたに奴隷契約書を送った男がいたそうね。なぜサインしなかったのか答えなさい」

有無を言わさぬ口調で葉月がゆかりを問い詰める。ゆかりは今度は

震える口をすぐに開いた。

「はい、私はサインするつもりでした。でも期日は記載されていませんでしたので、もう少し自分でマンコを痛め付けてからと思ったのです。そうしているうちに橘さんの配慮で奴隷になってしまいましたので返答する時間がありませんでした。橘さんは一目で私の本性を見抜いてしまったのです。あの男の方には申し訳ない事をしてしまいました」

「なるほど、橘なら69番、お前の本質を見抜くなど造作もないだろうな。それと、サインするつもりだったというのは間違いないな」

「はい、間違いありません」

ゆかりが即答すると葉月は満足そうに残酷に微笑んだ。

「では、今から69番、お前の手足を切断する。眼球破壊は好みの別れるところで、私は見えなくさせて恐怖に怯えさせるより、恐怖に怯える眼が好きだからな。眼球はそのまま残しておこう。だが、不要な手足は切断する。69番、お前の望んだ姿になれるのだ。嬉しいだろう」

「ひいぃぃぃっ、はい、う、嬉しいです」

ゆかりは更に激しく震えだした。心の準備も出来ていない状態で、今すぐこれから手足を切断されてしまう。確かにゆかりは自分の手足を切断された姿を想像して興奮していたが、それはあくまでも想像の中での事だった。それが本当に手足を切断されてしまう。それはもうゆかりの妄想の世界ではなく、現実に起こる出来事なのだ。

「良いわね、６９番。その怯える眼が最高だわ。さっそく四肢切断しましょう。その前に、一回オナニーさせてあげるわ。もう自分でオナニーする事は出来なくなるからね。ほら、思う存分オナニーしなさい」

そう言うと葉月は、ゆかりの両手の拘束も解いていた。

「うっ、はい、ありがとうございます」

ゆかりは泣きながら自分の股間と小さな胸に手を伸ばす。

「うぅ、うぅ、うっ、うっ」

「あはは、ほら、しっかりオナニーしなさい。これで最後のオナニーになるのよ。気合い入れてイキなさい」

葉月は泣きながら自慰するゆかりを見て爆笑していた。そのうちにゆかりの乳首とクリトリスが硬く勃起してくる。変態のゆかりはこの状況でも自慰で絶頂に達しようとしていた。

「おっ、おっ、おっ、おっ」

ゆかりの息が荒くなり手の動きがさらに速くなっていく。ゆかりが頂点に達するのはもうすぐそこに迫っていた。が、葉月はそこでゆかりの手を押さえつける。

「はい、そこまで。それでは四肢切断しますよ。処置室に行きましょうね」

茫然とするゆかりの首に首輪を付け、首輪に付いた鎖をグイッと引

き立ち上がらせる。

「お、お願いします。葉月様、最後までオナニーさせてください」

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

「あううぅっ」

ゆかりの頬に容赦ない激しい平手打ちが連続で叩き込まれる。

「メス奴隷の分際で私に逆らうなと言っているでしょう。早く歩きなさい。最後に自分の足で歩かせてあげるのだから」

ゆかりは泣きながら一歩一歩、自分の手足が切断される処置室に向かって葉月に鎖を引かれ歩いていた。

ダァーーン！

重い音が響き処置室の鉄の扉が閉められ鍵がかけられる。コンクリートの打ちっぱなしの殺風景な部屋の中央に頑丈な拘束台が置かれている。拘束台にはゆかりの手足を固定する為の革製の丈夫なベルトが何本も装着されていた。そして、その台には四つのギロチンが設置されている。それを目にしたゆかりは思わず歩みを止めてしまっていた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

「あうぅぅっ」

再びゆかりの頬に平手打ちが叩き込まれる。

「何度も同じ事を言わせないでね、６９番。さっさと台の上に仰向けになりなさい」

葉月の命令でゆかりは拘束台の上にノロノロと登り、仰向けになった。

「手足を大の字に大きくひろげるのよ」

再び葉月の命令でゆかりは手足をひろげ、拘束台の上で大の字になる。葉月はカチャカチャと革のベルトでゆかりの手足を固定していった。ゆかりは拘束台の上で完全に拘束されもう動けなくなっている。葉月は楽しそうにギロチンの位置を調節していた。その時が間近に迫りゆかりはこの期に及んで無様に激しく号泣しだしていた。

１０、四肢切断されるゆかり

１０、四肢切断されるゆかり

拘束台の上に大の字に固定されたゆかりの手足の上にギロチンの位置を調整していた葉月は、ギロチンの刃の落ちる位置を慎重に確認し満足気に頷いた。

「本当は肩口と太ももの付け根から切断して完全な達磨にしたいけど、しばらく性玩具として使用する予定だから肘上と膝上から切断するわね。まあ、惨めな体に変わるのは間違いないから、あなたも満足でしょう、６９番」

葉月の言葉が耳に入るがゆかりにとっては手足を切断される事にかわりはない。拘束台に固定されたゆかりは自分の手足の上で残酷に輝くギロチンの刃に怯えて泣きながらチョロチョロと尿を漏らしてしまっていた。

「私が命令をしていないのにおしっこ漏らすなんてなってないわね。おしっこの穴、壊そうかしら」

葉月はゆかりの尿道に焼けた串を突き刺して焼き潰そうか、ドリルを突き入れて尿道そのものを破壊しようかと考えたが、かろうじて踏み留まる。

・・危ない、危ない。ここは我慢して楽しみはとっておかないと…

・・・・

葉月は自分を落ち着かせるように深呼吸して気持ちを静めた。そして、はたと気が付く。

「いけない、忘れるところだったわ。ショック死してしまうと詰まらないから薬を射っておくわね。６９番の大好きなところに射ってあげる」

葉月は薬剤を入れた注射器を持つとゆかりの股間、クリトリスに狙いを付け、ズブッと針を頂天から深く突き刺す。

「うぐうぅぅぅっ」

ゆかりは、その痛みになんとか耐えていた。葉月は、ゆかりの中に薬剤を注入すると、ゆかりのクリトリスから針を抜いた。

「どう、マンコに注射されて嬉しいでしょう」

「は、はい、ありがとうございます」

泣きながらお礼を言うゆかりの太ももをベルトできつく締め上げた葉月は、反対側の太ももとゆかりの両方の二の腕もベルトできつく縛りあげる。

「ショック死もそうだけど、出血死も詰まらないからね。止血用のベルトをきつく巻いたのよ」

葉月はこれで準備ＯＫという顔をする。ゆかりは、あと数十分、いや数分後には自分は手足を切断されていると思うと震えが止まらな

かった。性器にピアスを入れられたり、焼き印を捺された時も凄まじい痛みであったが、今回の四肢切断は次元が違うように感じる。もう自分の手足が永久に失くなるのだ。ゆかりでなくても恐怖で震えるのは当然といえた。葉月は、そんなゆかりを楽しそうに見ながら最後の準備を進める。

「６９番、口を大きく開けなさい」

ゆかりは口を開ける意味が分からなかったが、葉月の命令通り大きく口を開けた。葉月はゆかりの開けた口へ４本の細いロープを咥えさせた。

「このロープはそれぞれギロチンに繋がっています。６９番、あなたがロープを口から放してしまうとギロチンの刃が落ちる仕組みです。そうですね、今日は１５分放さずにいられたら四肢切断は明日に延期しましょう。明日は３０分我慢出来たらまた延期しますよ。さあ、６９番どこまで頑張れますかね。もっともあなたは歯を全て抜歯されていますので必死に頑張らないと無理だと思いますけどね」

葉月はゆかりに嬉しそうに残酷に告げ、ギロチンのスイッチに手をかけた。

「今からギロチンのストッパーを解除しますよ。ここから１５分です」

葉月はためらいなくギロチンのストッパーを解除する。ゆかりの咥えているロープにギロチンの刃の重量がずっしりとかかってくる。

「ふぐっ、ふぐうっ」

ゆかりは必死にロープを咥えていた。ゆかりの瞳からは涙がポロポロと溢れ、鼻からは鼻水が垂れている。葉月は、そのゆかりの表情を笑いながら撮影していた。ゆかりは必死にロープを咥えているが、やはり抜歯されてしまい歯のないゆかりに長時間ロープを咥える事には無理がある。ずるずるとロープはゆかりの口から滑り抜けていく。

「ふぐっ、ふぐっ、ふぐっ」

泣きながらゆかりは必死にロープを咥えるが、1本のロープがずるりとゆかりの口から抜けてしまった。大きく目を見開くゆかりの涙で滲む瞳にスローモーションのように落ちてくるギロチンの刃が映っていた。

ズガァァンッ!!

「あびゃぁぁぁーーーーっ!!」

ゆかりの右足が膝上から切断され、ゆかりは絶叫する。そして、絶叫して口を開いてしまったが為にロープが放され残りのギロチンの刃もゆかりに向かって残酷に落ちていった。

ズガッ、ズガッ、ズガァァーン!!!

「おっ、びゃぁぁぁぁーーーーーっ!!!」

ゆかりの四肢は切断された。それは、まったく呆気なく玩具の手足を切断するように簡単に実行されていた。ゆかりは白目を剥いて口から泡を吹き、股間から小便がシャーッと噴き出している。それどころか、大便までぶりぶりと漏らし失神していた。

「あらあら、おしっことウンチまで漏らしちゃって可愛いわね。まあ、歯がない状態で良く頑張ったわ。これで６９番も立派なメス奴隷の中のメス奴隷、性玩具の仲間入りね」

葉月はゆかりの四肢を切断され大小便を漏らしている無様な姿を見て満足していた。そして、ゆかりの切断された手足を手に取るとクーラーボックスの中に収納していった。

・・ふふっ、これは記念に保存しておこうかしら。それとも何かに使えるかな・・

葉月は残酷な笑みを浮かべながら、四肢を切断されたゆかりの姿をパネルにして飾っておこうと考えていた。

★　★　★　★

ゆかりが気がつくとベッドの上だった。起き上がろうとして起き上がれない事に気付いたゆかりが手を見ると肘から先が無くなっていた。そして、両足も膝から下が無い。そこで、ゆかりはあれが夢などではなく現実に起こったことだと改めて認識し、もう普通の生活には二度と戻れない絶望で泣き出していた。

・・もうゆかり、オナニーも出来ない。マンコ痛め付ける事も出来ないよ・・

ゆかりが涙を流していると葉月が入って来た。

「６９番、ようやく気付いたようね。どう、手足が無くなった感想は。あなたが望んだ姿に成れて嬉しいでしょう」

「はい、葉月様ありがとうございます。一つ残念なのは、オナニー出来ないのが寂しいです」

「手足が無くなった感想がオナニーとは、まさに真性の変態で嬉しいわ。普通のメス奴隷だともう少し悲観するものだけどね。まあ、オナニーの心配はしなくても大丈夫よ。あなたにはもう苦痛しか与えないからね。気持ち良くなろうなんて二度と思わないことね。毎日、痛め付けて最後に残酷に処刑してあげる。そうそう、あなたを手に入れたからストックしていたメス奴隷を一体処刑する事にしたの。明日、処刑を執行するから、あなたにも特別に見せてあげるわ」

葉月は楽しそうに笑い出ていった。その葉月と入れ違いに食事を乗せたワゴンを押してメイドが入ってきた。そして、テーブルの上に食事を並べ、手足の無いゆかりに食べさせてくれる。

「６９番さんが処刑されるまで私がお世話させて頂きます。何かありましたら、そこのボタンを押して下さい」

ベッドのヘッドボードには大きなボタンがあり、これなら手足の切断されたゆかりでも押せる大きな物だった。

「葉月様から、６９番さんは大変に変態だと伺っております。変態プレイがしたくなりました時も遠慮無くボタンを押して下さい」

まるで無表情に言いながらメイドは、それではと退室しようとしたがゆかりが呼び止める。

「葉月様が明日、私に処刑を見せてくださると言っていましたが、私が見てもいいものなんですか」

「もちろん、葉月様がいいとおっしゃるなら問題ありません。葉月様がメス奴隷の方に処刑を見せる事など今までなかった事ですが、６９番さんはよほど葉月様に気に入られたのでしょう。ちなみに明日処刑されるのは６７番さんです」

メイドはゆかりに頭を下げると出ていった。一人残されたゆかりは、しばらく自分の状況を把握する為、色々と考えていたが、そのうちに自慰がしたくなり我慢できなくなっていた。

・・マンコ、マンコ虐めて……・・

ゆかりはベッドの上で悶々としながら、手足の無い体でゴロゴロ転がっていた。毎日、性器を自虐し、奴隷になってからも性器を調教されていたゆかりは、それが出来ない事に半狂乱になっていたのだ。もはや救いようのないゆかりが残酷に処刑されるまで、後僅かだった。

11、ゆかりの性器調教

11、ゆかりの性器調教

ほとんど毎日自慰していたゆかりは、その大好きな自慰が出来なくなり発狂したようにベッドの上を転げ回っていたが、もう我慢の限界だった。ゆかりはヘッドボードのボタンを頭で押す。すると、あの無表情なメイドがすぐに部屋に入って来た。

「いかがなさいました」

メイドは無表情でゆかりに尋ねてくる。

「お願いします。ゆかりのマンコを調教して下さい。ゆかりは毎日マンコを自分で調教していたので、もうマンコが疼いて耐えられないです」

ゆかりはメイドに懇願する。メイドは驚いた様子もなく無表情でいたが、突然ゆかりの頬を平手で叩き始めた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パアンッ！！

「うぐうぅぅっ」

そして、涙ぐむゆかりに一点厳しく指摘する。

「６９番さんは、まだ自覚が足りないようですね。あなたはもう人間ではないのです。６９番という生体性玩具だということを認識しなさい。良いですか、もう〝ゆかり〟などという名前ではないのです」

メイドに厳しく指摘されたゆかりは、泣きながら頷いていた。

「よろしいですね。それでは御要望の調教を開始します。といっても６９番さんのマンコを私が壊すわけにはまいりませんので了承して下さい」

メイドは慣れたようにゆかりの下半身を拘束していく。腰と残っている太ももに、それぞれ二本ずつの革のベルトで開脚したまま閉じられないようにゆかりを固定した。そして、太い蝋燭を取り出す。

「これは葉月様が開発した蝋燭です。通常の蝋燭は融点が６０度程度ですが、これは融点を高めてあります。変態の６９番さんも当然蝋燭プレイなどはされていると思いますが、この蝋燭は当然市販などされておりません。これはメス奴隷を痛め付ける為に葉月様が開発されたものですからね。ちなみに融点は８０度前後だと伺っております。蝋燭プレイに慣れた６９番さんでも、泣き喚く事になると思いますので満足出来ると思います。安心して下さい。とはいえ私はあまり煩いのは好みではありませんので口を塞がせて頂きますね」

メイドは自分の下着をするりと脱いでゆかりの顔前にかざす。その白い綿の下着の股間部分はぐっしょりと濡れていた。

「私たちメイドは常に尿道、膣、肛門に性具を挿入され刺激を与えられ続けています。ですので下着はかなり汚れていますが変態の６９番さんには嬉しいでしょう」

メイドは自分の汚れた下着をゆかりの口の中に押し込んでいく。ツーンとした匂いと味がゆかりの口中に広がるが、ゆかりはメイドの言う通りその匂いと味に興奮していた。そして、自分の下着を全て押し込んだゆかりの口に、さらにガムテープを何重にも貼り、ゆかりの口を厳重に塞いでしまった。

「さあ、それではいきますよ。今までこれをされたメス奴隷は最初に垂らされた蝋だけで失神しましたからね。６９番さんはどうでしょうか」

メイドは手に持った赤黒い蝋燭に点火した。そして、蝋を貯めている。しばらくして無表情なメイドの顔に笑みが浮かび、蝋燭をゆかりの性器に近付けると、性器につきそうな超至近距離から溶けた蝋を一気にゆかりの性器に垂らしていった。

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

ゆかりは絶叫する。その激痛は今までの蝋燭の比ではなかった。次元が違う激痛に感じる。それは、ゆかりが焼き印を捺された時の激痛に似ていた。しかも、この蝋はすぐに冷めたりしない。いつまでも高熱を保っていた。おそらく蝋の中に鉄粉でも入っているのではと思われるが、ゆかりにはそんな事を判断する余裕はなかった。蝋を垂らされた性器が、じんじんと何時までも熱くて痛い。

「さすがは６９番さんですね。マンコに、この蝋燭を垂らされて失神しないのは見事です。それでは、６９番さんのマンコと股間、全て真っ赤に塗り固めて差し上げますね」

メイドは、楽しそうにゆかりの性器を蝋燭で塗り固めていく。しば

らくすると、ゆかりの股間は全て蝋燭で赤く塗り固められていた。
ゆかりは涙を流して泣いているが、メイドはゆかりの塗り固められた性器の上に木綿の糸を置き、さらにその糸の上に蝋を垂らし塗り固める。

「この程度では69番さんは満足出来ないでしょうから、もっとマンコを痛め付けてあげますね」

そう言うとメイドは、ゆかりの蝋燭で塗り固められた性器から飛び出ている糸に点火した。ゆかりの股間で赤い炎が揺れている。しばらくは大人しく泣いていたゆかりだったが、やがて発狂したように暴れ絶叫する。

「ふんごおぉぉぉーーーーっ!!!」

・・ゆかり、マンコ燃やされてるの?あづいぃぃーーーっ!・・・

しかし、どんなに暴れようと拘束された足は閉じる事が出来ない。
ゆかりは自分の股間でメラメラと燃える火で、性器を焼かれていた。

「ふふっ、そんなに暴れなくても大丈夫ですよ。69番さんのマンコを壊してしまっては葉月様に私が処刑されてしまうので壊しませんよ。壊す寸前まではしますけどね」

メイドは、ゆかりの火が燃える性器を見つめながら冷静に言うが、性器を燃やされているゆかりにはメイドの言葉など耳に入る余裕はなかった。メイドはゆかりの性器に直に火が点く前に、ゆかりの性器に鞭を叩き込む。

バシイィィッ!!

「ふぐうぅぅーーーっ！！」

激しい鞭の一撃でゆかりの性器で燃えていた火は消えていた。これで終わりかと思いきや、メイドはゆかりを今度は腰の拘束具に天井からのロープを付け逆さ吊りにする。ゆかりは開脚逆さ吊りの形にされていた。そして、ゆかりの股間を塗り固めていた蝋燭をきれいに剥がすと、ゆかりの小陰唇をクリップで挟み左右に大きく拡げる。ゆかりは性器の中身を露に晒していた。

「今度は６９番さんの膣前庭に蝋を垂らしてあげますね。おしっこの穴もマンコの穴も蝋燭で固めてあげますよ。嬉しいですか」

メイドの問いにゆかりは泣きながら、はいと頷いていた。

「６９番さんは本当に真性の変態マゾですね。それでは、今度はこの蝋燭を使いましょう。葉月様がお作りになった物ですが、製作が大変で数多くは作れない貴重な蝋燭です。先程の蝋燭よりさらに融点が高く作ってある蝋燭です。１００度くらいになると思いますよ。それで６９番さんのマンコを焼いて差し上げます」

さすがにゆかりも恐怖を感じたのか、いやいやという風に首を振るがメイドはさらに恐ろしい調教をしようとする。

「せっかくですからマンコの穴の中にもこの蝋を流し込みましょう。さすがの６９番さんも間違いなく失神するでしょうね」

そして、ゆかりの膣に膣鏡を挿入する。これも普通の膣鏡ではなく、ステーが４本のタイプだった。リングに付いた４本のステーのネジを締めていくとステーが拡がり、ゆかりの膣を開口していく仕様だ

った。鳥の嘴のような膣鏡と違い、細いステーで膣を拡げる為、膣壁も良く観察出来、痛めつけるにも格好の膣鏡だった。メイドはゆかりの膣を最大まで拡げ、その奥に子宮を確認する。

「さあ、それでは始めます。まずはクリトリスからいきますか」

メイドは、また至近距離からゆかりのクリトリスに蝋を垂らす。１００度の熱蝋がゆかりのクリトリスにポタッと落とされた。

「ふんがあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

ゆかりは絶叫し、尿道から尿が噴水のように噴き出していた。そのゆかりの小便はメイドの顔面を直撃している。

「最初に尿道口を塞ぐべきでしたね」

メイドは顔を拭きながら、ゆかりの放尿が終わるのを待っていた。そして、放尿が終わったゆかりの性器からきれいに尿を拭き取ると、今度はゆかりの尿道口に触れる程近くから蝋燭をポタポタと垂らす。

「ぶごおぉぉぉーーーーっ！！」

１００度もの高温の蝋燭をまた垂らされゆかりは絶叫していた。メイドは、それまでの無表情から一変して、ゆかりの性器調教を始めてからは終始嬉しそうだった。

12、膣焼き

12、膣焼き

逆さ吊りにされ、性器を高温の蝋燭で責められているゆかりは塞がれた口で絶叫し続けていた。

「ふごおぉぉぉーーーーっ！」

塞がれていてもなお響き渡るゆかりの絶叫で、ゆかりがどれ程の苦痛を与えられているのか想像する事ができる。ゆかりは特別に作成された融点が１００度の蝋燭で性器、それも割れ目の中、膣前庭を責められていた。普段は小陰唇で守られている膣前庭が、くぱぁと拡げられ容赦なく高温の蝋がポタポタと垂らされていた。メイドは嬉しそうにゆかりの膣前庭を蝋燭で塗り固めていく。ゆかりの性器はクリトリスから会陰まで、もう真っ赤に塗り固められていた。しかし、その中で１ヶ所、膣鏡で拡げられた膣の内部は手付かずになっている。メイドは最後にゆかりの膣内を蝋で埋め尽くして楽しむ為、膣には手を付けずにいたのだった。

「もうマンコは塗り固めるところがありませんね。それではマンコの中を固めていきましょうか」

メイドは、いよいよゆかりの膣内に蝋燭を垂らして、子宮頸部から膣壁、全てを蝋で焼き潰すつもりで嬉しそうにゆかりの膣内を覗きこむが、そこで思わず舌打ちしていた。なんと、ゆかりは性器を蝋

燭で責められて興奮し、バルトリン腺から大量に粘液を分泌し濡らしてしまっていた。

「どうしようもない変態ですね、６９番さんは……。マンコ、ここまでされて喜んでいるとは、救いようのないド変態です。こんなに粘液で膣内を濡らされては、せっかくの蝋燭責めの効果が半減してしまいますよ。まったく、手間をかけさせてくれますね」

メイドは、ウェットティッシュでゆかりの膣内をきれいに拭き取っていくが、拭き取るそばからまた濡れてくる。

「このメス奴隷は始末におえませんね」

メイドはゆかりの膣壁に先に蝋を垂らしバルトリン腺を塞いでいく。ゆかりは膣壁を焼かれる激痛に絶叫していた。バルトリン腺を蝋燭で塗り固められたゆかりは、いよいよ膣の最奥、子宮に蝋燭をポタポタと垂らされていた。

「ふんごおぉぉーーーーっ！！」

普段、人の目に触れる事のない子宮が晒され、そこに高温の蝋燭が垂らされていく。ゆかりの子宮は赤く塗り固められていった。ゆかりは大量の涙と鼻水で顔を汚し絶叫している。

「ふふ、さすがの変態の６９番さんも、子宮と膣を焼かれるのは堪えるとみえますね。でも膣内全て蝋燭で埋めるまでは止めませんよ」

ポタポタと蝋をゆかりの膣内に垂らしながらメイドは、次の調教の為、ゆかりの膣内に木綿の糸も垂らしておく。そして、その糸毎ゆかりの膣内を蝋で埋めていった。

「さあ、やっと６９番さんの膣が蝋で埋まりましたね。次はもっときついですよ。６９番さんは耐えられますかね」

ゆかりの膣に挿入していたステー状の膣鏡を抜き取ったメイドは、ゆかりの膣から先が見えている木綿の糸を残酷に眺める。

「点火しますよ。マンコ蝋燭の調教です。私はこの調教をされるメス奴隷を観るのが大好きなんですよ。ああ、そうそう。いくら熱くてもおしっこで消す事は出来ませんよ。おしっこの穴も塞いでありますからね」

楽しそうにメイドは言い、ゆかりの膣の糸に点火した。ゆかりの股間の中心、膣でオレンジ色の炎が揺れている。メイドは、その炎をうっとりしたように見ていた。ゆかりは、しばらくは何も感じなかったが、蝋が溶けてくるとだんだんと耐え難い熱さと痛みが性器を襲ってくる。

「ふごおおぉぉーーーーーっ！！！」

ゆかりは塞がれた口で泣き叫んでいた。泣き叫んだからといって許してもらえるわけはないが、ゆかりには泣き叫ぶ以外出来る事がなかった。それは、まるで真っ赤に焼けた杭を性器に、膣に突き入れられているような激痛だった。それも一瞬ではなく継続的に膣を焼かれている。融点８０度の蝋燭が溶けゆかりの膣内を満たしている。ゆかりは発狂したように暴れ、絶叫していた。

「あらあら、この程度の事でこの様子では、葉月様にマンコを処刑される時にはどうなるのかしら。今までの例からいって発狂しちゃうのかしらね。６９番さんも公開処刑の予定だそうだから、せいぜ

い発狂した無様な姿を大勢のお客様に見てもらって笑ってもらうといいわ」

しかし、ゆかりにはメイドの言葉は耳に入ってこなかった。膣と子宮を焼かれる激痛に、それどころではなかったのである。しかも、膣に流し込まれている蝋はなかなか冷えずに固まらない為、ゆかりの膣の隅々まで入り込み焼いている。

「ふぼおっ、ふぼおっ、ふぼおっ、ふぼおぉぉぉーーーっ！！」

ゆかりはポロポロ涙を流し絶叫しているが当然だが許される事はない。メイドは苦しむゆかりの姿を楽しそうに見ていた。すると……。

ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

ゆかりは大便まで漏らし始めていた。ゆかりの肛門から大便が溢れ床にぼとぼとと落ちていく。それを見てメイドは顔をしかめていた。

「まいりましたね、ウンチまで漏らすとは……。まったく躾のなっていないメス奴隷ですね」

メイドはゆかりの排便が済むのを待ち、ゆかりの肛門をウェットティッシュできれいに拭き取る。そして、ゆかりの肛門にも蝋燭を垂らそうとしたが、突然思い付いたように手を止め肛門開口用の器具を手に取る。これも、ゆかりの膣を開口した器具と同じ様にリングにステーが付いた形状の器具だった。メイドはステーの先端をゆかりの肛門に挿入しネジを締めていく。それにつれてゆかりの肛門がどんどん拡がっていった。

「さあ、お尻の穴の中も焼いてあげますよ。ここを蝋で埋めるのは

私も始めてです。興奮しますね」

メイドは嬉々としてゆかりの開口した肛門の中にも蝋を垂らしていく。そして、忘れずに木綿の糸も垂らしていた。

「おやおや、これは底無しですね。いくら垂らしても埋まりません。この葉月様から頂いた貴重な蝋燭をこれ以上使ってしまうのは憚られます。普通の蝋燭に換えますか」

メイドは特製の高温蝋燭から普通の蝋燭に持ち変え、ゆかりの肛門内を蝋で埋めていった。そして、膣同様、ゆかりの肛門から飛び出している木綿の糸に点火する。ゆかりの股間で二つのオレンジの炎が揺れていた。

「ふごおおぉぉぉーーーーーーっ!!!」

膣と子宮だけでなく直腸も焼かれ、ゆかりは拘束している器具が壊れるのではと思われる程、激しく暴れ泣き喚いていた。

「良い姿ですよ。最高です。興奮しますね」

メイドは、激痛で苦しむゆかりの姿を楽しそうに撮影していた。そして、撮影しながら気付いたように、また蝋燭と糸を手に取った。

「マンコを調教するのが一番ですが、こうして撮影していると少し物足りないですね。ですので、もう少し華やかに飾ってあげましょう」

メイドは、ゆかりの乳首に糸を巻き付けてから蝋を垂らし固めていく。そして、ゆかりの乳首から飛び出た糸にも点火する。ゆかりの

二つの乳首でオレンジの炎が燃え上がった。

「もう少し、いきましょうか」

メイドは、ゆかりの鼻の穴と耳の穴にも細い蝋燭を突き刺し点火する。ゆかりの股間、胸、顔でオレンジの炎が揺らめいている。ゆかりはもう、恐怖と焼かれる激痛で生きた心地がしなかった。

・・じぬうぅーーーっ・・

メイドは部屋の灯りをおとし撮影していた。暗い室内でゆかりの体が仄かに浮かび上がり、まさに人間蝋燭といえた。膣と子宮、それに直腸と乳首を焼かれながらゆかりは意識を失っていった。

１３、処刑執行前

１３、処刑執行前

ゆかりが目覚めると、周囲にざわついた雰囲気が満ちていた。その何時もとは違う雰囲気にゆかりは何故か体が震えてきていた。すると、ゆかりにあてがわれている部屋に、満面の笑みの葉月が入ってきた。

「お早う、６９番。今日は絶好の処刑日和だわ。前に話したメス奴隷の処刑を今日執行します。６９番にもじっくり見せてあげるからね。興奮するでしょう。自分も近いうちに同じ様に処刑されていくのですからね。特等席で見せてあげるわ」

葉月は、それだけ言うといそいそと部屋を出ていった。

・・処刑……。私も処刑されちゃう……。でも、本当にマンコ全て壊してくれるなら……・・

今日、見学させてもらえる処刑がどのようなものなのかゆかりには想像もつかないが、ゆかりの知識で思い浮かぶのは、ギロチンで首を切断されたり、火炙りにされたり、槍で串刺しにされたりする光景だった。でも、あのメイドも性器を壊すと言っていたので、そのような処刑とは違うものなのだろう。ゆかりは、その処刑を想像し恐怖と期待でガクガクと震えていた。

しばらくすると、いつもの無表情なメイドが台車から3本の杭が突き出ている物をがらがらと押して二人の男と共にやって来た。ゆかりは、なんだろうという目でその変わった台車を眺めていた。台車から突き出ている3本の杭は一列に並んでいて、太さが違っていた。一番前が一番細く2センチ弱か、真ん中が一番太く１０センチ以上ある。そして、後ろが5センチ程だった。どの杭にも先端から１０センチ程度のところにストッパーが付いていて、そこで止まるようになっていた。

「６９番さん、それでは会場に向かいますよ。６９番さんは足は切断されていて一人で向かうのは難儀でしょうから、この台車で運んで行きます」

メイドは台車の車輪のストッパーを止め、二人の男に合図する。男はゆかりの両側から、ゆかりを軽々と持ち上げると台車に付いた杭の上に運んでいく。そして、ゆかりの足を開かせて狙いをつける。そこでようやく、ゆかりにもこの3本の杭がどういう意味を持つのか想像がついた。

・・私の股の3つの穴に、この杭を突き刺すんだ・・

ゆかりは、その無様な自分の姿を想像し濡らしてしまっていた。しかし、濡れたといっても膣に入れられるのは１０センチ以上ある太い杭である。それに、尿道と肛門にも杭は突き刺される。通常はローションを使用するものだが、当然そんなものは使用されずに無理矢理挿入される事になる。ゆかりは迫ってくる杭の先端に息を荒くしていたが、実際にそれが挿入され始めると絶叫した。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ!!」

ビリビリと股間が全て裂けるような感覚にゆかりは泣き喚いていたが、メイドはゆかりの頬を激しく叩いた。

「静かにしなさい。まったく躾がなっていないわね。あなたは葉月様のメス奴隷なのですから、葉月様に恥をかかせないように常に気を付けなさい」

メイドに頬を打たれ厳しく諌められたゆかりは涙を流しながら必死に激痛に耐えていた。そして、ゆかりの3つの穴にストッパーまで杭が突き入れられた。それだけでは不安定なので、ゆかりの太ももの付け根にベルトが巻かれ、それについているチェーンで台車に固定される。これで、ゆかりは台車に固定され完全に動けなくなった。

「それでは向かいましょうか、69番さん。一応目隠しさせて貰いますからね」

ゆかりの目に黒い布を何重にもぐるぐると巻き付けるとメイドは台車を押して部屋から出る。そして、広い廊下をがらがらと進んでいく。しかし、台車の振動が直接性器から脳へ響いてくるゆかりは声を出さないように必死にこらえていたが、どうしても小さな声が出てしまう。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

しかし、その声についてはメイドの指導は何もなかったが、段差を乗り越える時の大きなショックでゆかりはつい大声を出してしまった。

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

無表情のメイドが笑みを浮かべながら、あら失礼と謝るが、それでゆかりはこのメイドが故意にやった事だと気がついた。

・・このメイドの人、私を痛め付ける事が楽しいのかも知れない・・

思い返せば先日のゆかりの性器調教も実に楽しそうに行っていた。もともとそういう性格なのか、それともゆかりだから楽しいのか、それは定かではないが、ゆかりはこのメイドなら遠慮なく性器調教を頼めると認識した。

廊下を抜け突き当たりの扉から表に出ると、眩しい日差しが体に当たるのを感じた。そして、そこにはゆかりの想像を越えた大勢の観客がいることが感じられた。目隠しされているので、正確には分からないがかなりの数の観客が来ているとゆかりは感じていた。

「良いですか、顔を上げて胸を張ってお客様に６９番さんの姿を良く見せるのですよ」

ゆかりはつい下を向いてしまう顔を意識して上げて小さな胸を突き出した。観客も、手足を切断され台車に固定されて運ばれてくるゆかりを見て、今日処刑されるのはゆかりだとばかり思っていた。

「ほう、なかなか痛め付けがいのある顔と体をしていますな」

「もう、四肢切断されていて後はマンコを破壊するだけですかな」

「良いわね、この６９番のメス奴隷。早くこのメス奴隷がマンコ壊される姿を見たいわ」

「えっ？６９番？今日処刑されるのは６７番と葉月様が言っていま

したよ」

ゆかりのクリトリスの装着されているナンバープレートに気付いた観客にざわめきが起きる。ゆかりの股間の中心では確かに〝６９〟と書かれたプレートが揺れていた。

「という事はこのメス奴隷はなんでしょうね」

「処刑する奴隷ではないのに会場に入場させるとは、何か意味があるのかしら……」

そんな中をゆかりはがらがらと運ばれていく。そして、会場の中心葉月が待つ場へ運ばれると、葉月がゆかりに巻かれている目隠しを取った。ゆかりの思った通り大勢の観客が目に入った。そして、その観客が全員、男も女も全て全裸でいる事にゆかりは改めて驚いていた。

「さて、皆さん。この６９番は必ず処刑されますので、お顔を隠さなくても大丈夫です。御安心下さい。御覧のように手足もすでに切断してありますので万が一の逃亡も不可能です。今回の処刑を見学させる為に入場させました。自分がどの様に処刑されるのか見学させるのも楽しいと思いませんか。次に自分が処刑される恐怖と絶望で震える姿は楽しい見世物になるでしょう。ですので、６９番はこの処刑場に置いておきます。処刑と共に、この６９番の反応を見るのも楽しいと思いますよ」

葉月の説明で、観客たちも納得がいった。

「あのメス奴隷、自分が処刑される様子を今見られるんだ。どんな気持ちだろうね」

「葉月様も人が悪い。いきなり処刑の方が楽だろうに、精神的にも追い詰めて徹底的に壊すおつもりかな」

「確かに次に自分がやられるとなると、普通ではいられないよね。あのメス奴隷、よほど葉月様に気に入られたのね。体も心も壊されるんだわ」

ゆかりは観客の話し声も聞こえ極度に緊張していた。これは、ゆかりが想像しているような単純な処刑ではない。そう思い知らされた。

「良いですか、目を閉じてはいけませんよ。しっかり見届けるのです。もし目を閉じて見ていなかったら、目に針を刺して一生見えなくしてあげますからね」

メイドがゆかりに念押しする。そこへ何か激しい叫び声が聞こえてきた。一人の全裸の少女が後ろ手に縛られ、足枷についた鉄球を引き摺り、首輪のロープに引かれてヨタヨタと歩かされている。少女のクリトリスには、ゆかりと同じ様に番号札がぶら下げられており、その札には〝67〟とはっきりと書かれていた。

１４、６７番の処刑（前書き）

６７番のメス奴隷は、別作品「少女無惨」エピソード３１～３３に登場する“まどか“です。素人のまどかが、なぜ、こうなったのかについては、そちらを参照して頂ければ助かります。
よろしくお願い致します。

１４、６７番の処刑

１４、６７番の処刑

処刑場の中央に引き摺り出され無様に泣き喚いている６７番の札を付けたメス奴隷を見て、ゆかりはみっともないと感じていた。

・・奴隷なんだから、もっと奴隷らしくしなさいよ。自覚が足りないよ・・

ゆかりは６７番の奴隷を、焼き印も捺され抜歯もされたうえに手足も切断されて奴隷らしい姿の自分の方が遥かに上だと誇らしげに上から目線で見ていたが、それはゆかりが今日処刑される身ではなかったから思える事であった。後日、ゆかりが実際に処刑される当日には、この６７番以上にゆかりは無様に泣き喚き必死に許しを求めていたのである。もちろん、それが叶えられる事はなかったのだが……。

「この６７番は、あなたと同じ素人のようですよ。メス奴隷になる前は〝まどか〟という名前だったようです。まあ、もう処刑されるので名前など関係ありませんがね。同じ素人の６９番さんには、この６７番が処刑されてどうなってしまうのか参考になると思います。自分も同じ目にあうのですからね。しっかりと見ておくのですよ」

メイドがゆかりの横で注意する。どうやら、このメイドはゆかりの横で、ゆかりを監視するつもりらしい。そうしているうちに葉月が６７番のメス奴隷の紹介を始めていた。

「皆様、この６７番はまったくの素人であります。あるルートから入手しました。素人ですから処刑途中ですぐ絶命してしまうかも知れませんが、それでは皆様も詰まらないでしょう。そこで今回は特別に薬剤を投与しておきます。これで、かなりの苦痛にもショック死せずに耐える事が出来ます。苦痛を和らげるわけではありません。ただ耐える事が出来るというだけなので、この６７番に激痛が与えられる事には変わりはありませんので御安心下さい」

葉月の説明が耳に入った６７番まどかは再び狂ったように喚き出す。

「処刑って何？そんな事許されるわけないじゃない。頭がおかしいの。早く帰してよ、学校があるんだから」

「おやおや、馬鹿なのはあなたですよ６７番。もう学校など行く必要はありません。だって、あなたはこれから処刑されるのですよ。分かりましたか」

「だから、処刑なんて許されるわけないわ。お父さんやお母さんだって黙ってないわよ」

「６７番の家族はお金を貰ってあなたの売却を認めましたよ。これからまだ苦労してあなたを育てるより遊んで暮らせる方が良かったのでしょうね。哀れですね、６７番」

「そんな……。お金なんかで……」

「あなたもニュースで見ていませんか。犯罪を犯した男が大金を積んで示談にして刑事罰に問われなかった事件。勘違いしている人が多いですが、示談が成立したからといって罪が消えるわけではあり

ませんよ。罪は罪、間違いなく犯罪者です。しかし、ねえ、世の中、金が全てですよ。示談が成立したと言えばそれで全て終わったと思うおめでたい人がなんと多いことか。これで事件を起こした犯罪者が世の中に残るわけです。良い世の中ですね。まあ、あなたの家族もこれで幸せになれるでしょうね。あなたのおかげですよ、生まれてきたかいがあったじゃないですか。それに最後に処刑されて大勢の人を楽しませる事が出来る。素晴らしいですね」

まどかは、自分が売却されたなど、まだ信じられなかった。

・・嘘だよ、嘘だよ、嘘だよおぉぉっ・・

あの男の仕業だとまどかは思った。やはり、あんな異常な男に近付かなければ良かったと後悔したが、それはもう後の祭りだった。

「許して下さい、お金は働いて返しますから……。お願いします」

まどかはすがるように言うが、葉月はまどかの右の乳首を摘まむと注射針を深く突き刺し薬剤を注入する。

「あぶうぅぅっ」

まどかが悲鳴を上げるが、葉月は左の乳首にも注射器を刺し薬剤を注入してしまった。

「さあ、準備ＯＫです。皆様、お待たせしました。それでは、６７番の処刑を開始します」

「嫌だあぁぁっ、誰かあぁぁっ、助けてぇぇっ！！」

パンッ、パンッ、パンッ！！

まどかの頬が激しく打たれる。

「ひぐっ、ひぐっ」

葉月は号泣するまどかに凄みを効かせた声で囁く。

「あと二時間もすれば楽になれるから言うことをききなさい。それとも、もっと長く苦しめてあげましょうか」

まどかは絶望で息が止まりそうだった。楽になれる。それはつまり自分はその時には死んでいるという事だろう。あと二時間しかない命。しかも、その間苦しめられ続けるのだ。

「足を開きなさい。大きく開くのです」

まどかは葉月の命令に従わざるを得なかった。言われた通りに大きく足を開く。まどかの股間の中心で６７と書かれた番号札がゆらゆらと揺れている。

「もう、これは必要ないわね」

葉月はまどかの股間で揺れる番号札を掴むと笑みを浮かべた。そして、思い切り引っ張る。

ブチイィィッ！

「あぎいいいいーーーーっ！！」

まどかのクリトリスに安全ピンで付けられていた番号札が力任せに取り外され、クリトリスが千切れまどかは悲鳴を上げていた。まどかの裂けたクリトリスからは血が滴っている。ゆかりは思わず目を背けてしまっていた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

その、目を背けた瞬間、ゆかりの頬が激しく打たれる。

「目を逸らすなと言っておいたと思いますが……。これくらいの事で目を逸らしていたら、きちんと見届けられるか心配ですね。なので、罰を与える事にしましょう。６９番のマンコは葉月様のものですので、それ以外の処を痛め付けさせてもらいます」

無表情だったメイドが、また嬉しそうにニヤリと微笑む。

「では、舌を出してもらいましょうか」

ゆかりが指示通り舌を出すと、メイドはゆかりの舌を掴む。そして、そこに１６Ｇの太い針を突き刺し貫通させた。

「うぐっ、うぐっ」

ゆかりが涙ぐむが、メイドはもう1本ゆかりの舌に針を貫通させる。そして、嬉しそうな顔でゆかりに告げた。

「６９番さんが処刑を少しでも見逃していたら顔面を針山にしていきます。万が一、顔面が一杯になったら、そうですね、あまりに平らで見映えが良くありませんが胸に刺していきましょう。この、乳首だけでも１０本以上は刺せるでしょうからよしとしますか。おっ

と、６９番さん。針を刺してもらう為にわざと目を逸らすのはいけませんよ。変態の６９番さんなら、やりかねないですからね」

「あうっ、あうっ」

ゆかりは、分かりましたと答えたかったが舌に針を２本も貫通されている為、言葉にならなかった。

「無様で良いですね。葉月様、四肢だけでなく舌も切断してしまえば良かったのに……」

メイドは残念そうに言うが、ゆかりはやはりこの人たちは根本的に違うと思い至っていた。奴隷など本当に物としてしか認識していない。メス奴隷は自分たちが楽しむ為の物なのだ。とはいえ、ゆかり自身も、自分が物として扱われる事に快感を覚える変態なので、どっちもどっち、目くそ鼻くそを笑う世界だった。そして、ゆかりの見ている前でまどかが開脚逆さ吊りにされていく。葉月は長いニードルを手にしていた。いよいよ、まどかの処刑が本格的に開始される。観客たちの目も、まどかの性器に集中していた。

15、まどか処刑執行

15、まどか処刑執行

開脚逆さ吊りにされたまどかは泣き喚いていた。自分は本当に処刑されてしまう。もう、あの時のように目が覚めたら、また次があるという訳にはいかないのだ。もう、まどかを救ってくれる者はいない。それどころか大勢の観客はまどかが処刑され絶命するのを心待ちにしているのだ。葉月はニードルを手に持ち残酷に笑う。

「さあ、67番。始めますよ。まずはニードルからです。67番のマンコを串刺しにしてあげますね」

葉月はまどかの割れ目をくぱぁと指で広げる。そして、まずはまどかの尿道口にニードルの先を当てた。まどかの息が荒くなっていく。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ニードルの太さは6ミリ程だ。まどかは尿道にニードルを突き刺されているが、まだ尿道を擦られる程度でそれは耐えられる痛みである。3センチ程ニードルを突き刺すと膀胱の括約筋にニードルの切っ先が突き当たる。ここから先が本番なのだ。通常、導尿でカテーテルを挿入する場合、ここで括約筋を壊さないように解してから膀胱にゆっくりと突き入れるが、今回はそもそも処刑であるので、そんな事は考慮されない。破壊するのが目的だから当然だ。ここで二名の全裸で頭にだけ全頭マスクを被った男が、まどかの体を両側か

ら押さえつける。まどかが激痛で体を動かし、葉月の狙いがずれるのを防ぐ為だった。

「さあ、最初の一撃、いきます」

葉月は楽しそうに宣言すると、まどかの尿道に刺さっているニードルを思い切り手のひらで根本まで押し込んだ。

プツゥッ

「ひ、ぶうぅぅーーーーっ！！」

まどかが絶叫し、まどかの下腹部を突き破り血塗れのニードルの先端が顔を出していた。ニードルはまどかの尿道から膀胱を串刺しにし、そのまま腹から突き出てしまっていた。

「あばばばばばばっ、あばばあっ」

まどかは膀胱を串刺しにされた激痛で、言葉が喋れなくなったのか意味不明の言葉を発している。

・・本当におしっこの穴から串刺しにされた。お腹からニードルの先が突き出てるよ・・

ゆかりは、体が震える程の恐怖と、失神してしまいそうな程の興奮を感じていた。

・・あの女の子、本当に処刑されるんだ。それに、私も……・・

ゆかりは、ぶるっと震えがきて、つい横を向いてしまった。それを、

メイドは見逃さない。

「また、目を逸らしましたね」

メイドは嬉しそうに残酷に笑うと、ゆかりの唇の左端を摘まむ。そして、下からズブッと針を突き刺し、そのまま上唇まで貫通させていた。

「ひぶうぅぅーーーっ」

ゆかりが悲しげに声を上げるがメイドは構わず右側の唇も針を突き通し貫通させていた。ゆかりは舌を針で貫通されたまま、唇も貫通されていた。

「あらあら、惨めで無様な顔になってきましたよ。嬉しいですか、６９番さん」

ゆかりは、涙を流しながらコクンと頷いていた。

「本当にドＭのド変態ですね。そんな、あなたが葉月様にマンコ壊されていって、精神崩壊する姿を想像すると興奮してしまいますね。どんな惨めで無様な姿を見せてくれるのでしょう。この、６７番もどこまでもちますかね。私の予想では子宮を焼かれて破壊される辺りで発狂しそうで楽しみです」

楽しそうに話すメイドの言葉にゆかりは、もう引き返せない場所にいる自分を実感する。今日、処刑されるのは自分ではないが、近い将来自分も必ず間違いなく処刑される。

「ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ」

ゆかりは呼吸が荒くなってきていた。自室で自虐を楽しんでいた時、こんな未来が待っているとはまるで想像もつかなかった。もう、手足も切断されて処刑されるのを待つ身だ。

・・頭のおかしい変態のゆかりには相応しい、これ以上ない末路なんだ・・

ゆかりは、遅かれ早かれこうなるのが自分の運命なのだと考えるが、やはり死んでしまうのは怖かった。だが、それは確実に近付いてきている。ゆかりは、止めようもなくブルブル震えていた。

「あら、興奮しているのですか。本当にどうしようもないですね。それでは、少し刺激を与えてあげますよ」

メイドは台車に植え付けられゆかりを固定している杭から伸びるコードに付いた機械のダイヤルを操作する。

「は、ぶぶぶぶぶぅぅっ」

「どうです。気持ちいいですか。６９番さんの３つの穴に突き刺している杭は通電出来るのですよ。マンコに電気流されて気持ち良いでしょう。もう少し強く流してあげますね」

メイドは更にダイヤルを回す。

「あぶぶぶぶぶぶぶぶぅっ、ぶぶぅっ！！」

ゆかりの体がブルブル震え、口から泡を吹き出し始めた。

「あら、いけない。強くし過ぎましたか」

メイドがスイッチを切り、ゆかりはようやく電流責めから解放されたが、性器に刺激を与えられた事でゆかりは、こんな状態でありながら激しく濡らしてしまっていた。そうしているうちに、葉月はまどかの尿道に二本目のニードルを入れようとしていた。

「一本くらいではお客様は満足しませんからね。3本は入れますからね。苦しんで下さい」

まどかは尿道に無理矢理2本目のニードルを入れられ絶叫していた。まどかの細い尿道はどんどん裂けていく。

「いだあぁぁぁーーーっ！たじげでぇぇぇーーーっ！！」

まどかは必死に体を動かして逃れようとするが、両腕を縛られ開脚逆さ吊りされているうえに、両側から男二人に体を押さえつけられているので微動だに出来なかった。そして……。

プツウッ

「あっびゃぁぁぁーーーっ！！」

2本目のニードルがまどかの下腹部を突き破り顔を出していた。まどかは絶叫し、大便まで漏らしてしまっていた。まどかの肛門から、ぶりぶりと大便が排便され地面に落ちていく。

「あらあら、まだ2本目なのにウンチまで漏らすなんて情けないメス奴隷ね。前に処刑したあなたより若いメス奴隷は、もっと頑張っていたわよ」

そう言いながら葉月は3本目のニードルをまどかの尿道に突き入れる。そして、手のひらで押し込む。

プツゥッ

「あっ、ばあぁぁぁーーーっ！！！」

まどかの下腹部から3本目のニードルが突き出ていた。

「さあーて、次はこれ」

葉月はアイロンのような器具を手にした。

「これは私が開発した拷問具よ。焼きごてみたいな物ね。焼きごては冷めていってしまうから、それを冷めないように改良した物ね。これを、あなたのマンコに押し当ててあげる」

葉月は得意気に説明していたが、尿道を3本のニードルで串刺しにされたまどかは葉月の言葉など耳に入らなかった。しかし、ゆかりは別である。焼きごてを捺された経験のあるゆかりは、あの焼きごての温度が下がらなかった場合を考えて顔が硬直していた。あの最初の熱のまま、ずっと押し付けられるのだ。それを性器に当てられる。ゆかりは経験した事があるが故に恐怖で体が震えていた。しかも、葉月はまどかの小陰唇を開いてクリップで留めている。まどかは開いたままの性器の中身に、あのアイロンを押し付けられるのだ。

「さあ、いきますよ。皆様、よおく御覧下さいね」

葉月はアイロンをまどかの性器にゆっくりと近付けていく。ゆかり

は息を呑んでいた。この瞬間が一番恐怖に囚われる。徐々に自分に近付いてくる凄まじい熱気。体に押し当てられてしまえば、その激痛で恐怖など飛んでしまうのだが、この直前が恐怖の最高潮になる。初めは、尿道から膀胱を串刺しにされた激痛で気付いていないようなまどかだったが、その凄まじい熱気にようやく気が付いたようで唯一自由に動く首を必死に左右に振って許しを乞うが、もちろん葉月が許す筈もない。

ジュゥゥゥーーーッ

「ぶっ、びゃぁぁぁぁーーーーっ!!」

葉月は容赦なくまどかの開いた性器にアイロンを押し当てていた。絶叫するまどかの性器から肉が焦げる匂いが漂う。それでも、葉月はまどかの性器にアイロンを押し付けたまま離そうとしなかった。その性器にアイロンをかけられ号泣するまどかの姿を見ながら、ゆかりは自分もやられたように感じ失神しそうになっていた。

16、絶命するまどか

16、絶命するまどか

ジュゥゥゥーーッ

開脚逆さ吊りのまどかの性器に特製のアイロンを押し付ける葉月。まどかの性器の肉が焼ける匂いが周囲に漂っていた。

「あぢゃあぁぁーーっ、あぢゃぢゃぢゃぢゃぁぁっ！！」

葉月は、十分にまどかの性器を焼き潰してからアイロンを放す。まどかの性器は真っ赤に腫れ水膨れが出来ていた。

「だいぶ無様な状態になってきましたね。それでは軽く鞭打ちといきますか」

葉月は革の一本鞭を手にする。そして、ヒュンヒュンと軽く素振りをすると残酷な笑みを浮かべ、まどかの性器に鞭を思い切り叩き込んだ。

バシィィッ！

「ぶっ、ひいぃぃぃーーーーっ！！」

豚のようなまどかの絶叫が気に入ったのか、葉月は火傷したてのま

どかの性器に連続で鞭を叩き込む。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ！！

「ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃぃぃーーーーっ！！」

まどかの性器はもう皮膚が破れ、血が飛び散っている。それを見て更に興奮したように葉月は鞭を振る。

ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ！！

絶叫しないまどかを不審に思って、葉月が顔を覗き込んで見ると、まどかは口から泡を吹いて白目を剥き失神してしまっていた。

「あらあら、これくらいで失神とは情けないわね。薬を射ってあげるから目を覚ましなさい。まだまだ、マンコ処刑は続くのよ」

葉月は注射器の針をまどかの会陰にズブリと深く突き刺し薬剤を注入する。

「あぁぁぁぁーーーーーっ！」

しばらくするとまどかはビクンと体を動かし覚醒した。

「さあ、それじゃ続きを始めますよ」

葉月は、まどかの膣に膣鏡を挿入していく。そして、最奥まで挿入すると最大まで開口させた。まどかの膣の奥に子宮が確認される。

その、まどかが吊られている横で男性スタッフが炭をおこし始めていた。

「おおっ、またこれが見られるとは嬉しいですね」

「私は、これが楽しみで来ているようなものですよ。これをやられる時のメス奴隷の絶叫が最高ですね」

「これやられたら、もうメス奴隷のマンコ死ぬからね。楽しみぃ、ワクワクするわ」

「あの67番のメス奴隷も、もう終わりね。ここでもう発狂しちゃうかしら、楽しみね」

ゲストたちは大いに盛り上がってきていたが、ゆかりにはまだ理解できていなかった。炭をおこしている事から、また焼きごてのような物で責めるのかと想像していた。

・・マンコ、殺されって事は、ここであの女の子の膣も子宮も壊されちゃうって事なのかな。どんな事されるんだろう・・

ゆかりも、それが自分にもされる事だという事も忘れて期待に胸が高鳴っていた。が、炭をおこすのに手間取っており、なかなか燃焼が始まらない。葉月はイライラしている様子だった。

「何をしているのかしら使えない男ね。バーナーを使いなさいよ。バーナーで燃やして団扇で扇ぐのっ。早くしなさいっ、お客様が待ちかねているわっ！」

葉月に怒鳴られ男のスタッフは慌てていた。

「あらまあ、あのスタッフ。後で処刑されるわね。葉月様、オスの処刑は好みではないようですけど、処刑するのが好きな方ですから間違いなく処刑するでしょうね」

ゆかりの横でメイドが無表情で呟いた。

「男の人も処刑されてしまうんですか？」

ゆかりが驚いて聞き返す。処刑されるのは購入されたメス奴隷だけだとばかり思っていた。

「葉月様は恐ろしいお方です。御自分の意にそぐわない者は誰でも処刑しますよ。妹の睦月様も処刑したくらいですからね。ですが、その唯一無二の葉月様に惹かれる者が大勢おります。私も、その一人ですよ。６９番さん、あなたはその葉月様に気に入られているのです。私にとっては羨ましい限りですよ」

無表情のメイドが、本当に羨ましそうな顔を向ける。

・・私、そんな凄い人に処刑してもらえるんだ・・

ゆかりは、何故か自分が誇らしく感じていた。

・・どうしようもない変態マゾの自分でも、人に羨ましがられる事があるんだ・・

一時、ゆかりは処刑の事も忘れ、幸せな気分に浸っていた。が、それも観客席の歓声で破られる。なかなか炭おこしが終了しない事に業を煮やした葉月が、まどかの小陰唇をびろーんと伸ばし切断しよ

うとしていた。

ジョキーンッ！

「あぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

まどかが絶叫し、まどかの左の小陰唇が切除される。葉月は続けて右の小陰唇も摘まんで引き伸ばしていた。

ジョキーンッ！

「あぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

右の小陰唇も簡単に切除されてしまう。が、それで終わりではなかった。葉月はまどかのクリトリスも摘まみカッターの刃を当てた。観客席が期待で静まり返る。

スパッッ！

「ふぎぃぃぃぃーーーーっ！！」

容赦なかった。まどかは、あっという間に左右の小陰唇とクリトリスを切除されてしまっていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

まどかはもう言葉も発せられず、号泣している。しかし、まどかはさらなる苦痛を味わう事になる。それはようやく、炭おこしが終了したようで、葉月が高温の白炭をトングではさみ上げていた。そして、それを開脚逆さ吊りで、膣鏡を挿入され大きく開口されている

まどかの膣の上に持っていく。それを見てまどかが何をされるか理解したゆかりは、息が止まる思いだった。

・・あ、あの白炭をマンコの中に入れられちゃうの……・・

白炭は黒炭よりも燃焼温度が高いと認識しているゆかりは、確か1000度を超える温度になるよねと震えていた。葉月はその白炭をポトッとまどかの膣の中に落とす。

「！！！！！！！！！！！！！！」

まどかを押さえつけている両側のスタッフが振り飛ばされそうな程、吊られたまままどかは暴れた。しかし、葉月は続けてポトポトとまどかの膣の中に白炭を落としていく。そして、膣口一杯まで白炭を入れると団扇で扇いだ。ボウッとまどかの膣から激しく炎が上がった。

「あひゃ、あひゃひゃひゃひゃあぁぁっ」

まどかは泣きながら笑っていた。もう、まどかの目の焦点もあっていなかった。まどかは、膣内に白炭を入れられ燃やされた恐怖と激痛で哀れにも発狂してしまっていた。ゆかりは、性器から炎が上がり発狂してしまったまどかを見て顔面蒼白になっていた。体の震えが止まらない。ゆかりも、まどかと同じ事をされると伝えられているる。ゆかりは、性器を破壊されていき発狂したまどかに未来の自分を重ねていた。そう遠くない未来の自分がそこにいる。ゆかりに、また恐怖が甦ってきた。

・・あんな事されたら耐えられる筈がないよ・・

ゆかりは、まどかの様に性器を破壊され無様に発狂し処刑されていく自分を想像し、今更ながら後悔していたが、ゆかり本人も気付かない部分で、その処刑を早く自分にも執行して貰いたいと思っているのは間違いなかった。ゆかりの膣を串刺しにしている杭は、もうその台座まで、ゆかりの分泌した粘液で濡れてしまっているのだから……。

「せっかく薬も射ってあげたのに、もう発狂してしまうなんて興醒めですね。まったく、だらしない」

葉月はプンプンしながら、充電式の回転ノコギリを手に持った。

キュイィィーン

そして、電源を入れ刃を回転させる。ノコギリの刃が高速で回転を始めた。葉月はそれをまどかの性器の上に持っていくと、そのまま回転する刃をまどかの性器に当てる。

ギュイィィィーーーン！

「あばばばばばばばばばばぁっ」

まどかの性器が本当の割れ目になっていく。葉月はまどかの性器を、どんどん切り裂いていった。

ヂュイィィィーーーーン

「あばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばっ」

回転ノコギリの音が変わり、まどかの恥骨まで切断され始めた。そ

して、すぐに恥丘の半分以上が切断されてしまった。まどかの股間からは血が溢れだし、まどかの体はビクンビクンと痙攣している。葉月は、そこでまどかの性器切断を止め、回転ノコギリを置くと、なんと切断したまどかの性器に腕を突っ込んだ。そして、ズボゥッと腕を抜く。その、葉月の手にはまどかの子宮が握られていた。葉月は、まどかの子宮を力任せに抜き取ってしまったのだ。そして、葉月はスタッフに指示を出しまどかの頭を顔が下を向くように押さえさせると、西洋のサーベルをすらりと持って構える。狙いはまどかの股間。もう、小陰唇もクリトリスも切除され、ノコギリで切断された上に子宮も抜き取られてしまったまどかの性器を、まだ葉月は破壊しようとしているようだった。そして、葉月は気合いと共にサーベルをまどかの性器に突き刺していく。抉るようにしながら突き刺していく葉月は楽しそうに笑っていた。

「おごおぉぉぉーーーっ!!」

無様な声を上げるまどかの口から、血と共にサーベルの切っ先が飛び出した。葉月は、嬉しそうにサーベルを抜くと、またまどかの股間からサーベルを突き刺した。

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ

何度も何度も繰り返しまどかを串刺しにする。ビクンビクンと体を動かすまどかだが、もう息絶えてしまったのか、声を上げる事も暴れる事もなかった。

「おお、素晴らしいね。何回串刺しにするんだろう。やっぱり串刺しはマンコから口まで突き通すのが一番だね。これはもうたまらないね」

「あはっ、あのメス奴隷、もう確実に死んでるわね。無様で最高っ」

「死んでからも串刺しにされる姿、哀れで惨めで興奮してくるわね。もう、マンコ濡れてくるわ」

「ああ、もう私、我慢出来ないわ」

一人の女のゲストが我慢できず自慰を始めていた。すると、他のゲストも伝染したように自慰を始めだす。ゆかりは、その異様な光景に度肝を抜かれていたが、処刑されているまどかを見て興奮しているゲストたちが、自分が処刑されて絶命する姿を見ても自慰してくれるのだろうかと心配になっていた。

・・ゆかりが処刑されて絶命する時も、みんなで興奮してオナニーして下さい。ゆかりが無様に絶命する時、その姿を見て皆さんがオナニーしてくれていると思うと、ゆかりは幸せです・・

ゆかりは、自分の最後の瞬間、全員が射精し、潮を吹く様子を想像し、また幸せな気分に浸っていた。

17、処刑の後

17、処刑の後

まどかは性器を破壊され、串刺しにされ絶命した。その、まどかの体はまだ吊るされている。もう、動くこともなくぶらぶらと風で揺れるまどかの切断された性器に、プラスチック爆弾が詰められていた。そして、まどかの口の中にも爆弾が詰められていった。まどかの体は死んでからも破壊されるようであった。

「あの67番のメス奴隷、哀れだわね。葉月様、あのメス奴隷の体を、この世から消滅させる気ね」

メイドは、ゆかりの顔をじっと見る。そして、ゆかりの四肢を切断されて台車に固定されている体も舐める様に観察していた。

「69番さん、あなたは心配いらない。処刑が執行されて絶命しても、体を爆破される事はないから安心しなさい。まったく、葉月様はどこが気に入ったのでしょうね。こんな地味な顔で、胸もない寸胴な体なのにね。良いところが見当たらないわ。それなのに、あなたの体を剥製にして飾っておくと仰っているのですよ。私からしたら、あの67番の方が遥かに可愛くてスタイルも良いと思うのですがね。まったく爆破してしまうのが勿体ないわ」

メイドの言葉にゆかりは恐怖と同時に興奮していたが、それを悟られないようにしていた。

・・私、処刑されてからも剥製にされて飾られるんだ。どんな風に置かれるんだろう。マンコは壊されちゃうから、ただの穴になるのかな。それともシリコンとかで造型してくれるのかな・・

自分の剥製を嬉しそうに想像している時点でゆかりの精神が病んでいる事は間違いなかった。それも、相当な重病である。おそらく、葉月が惹かれたのも、ゆかりの体ではなく、その異常な精神状態であると思われた。

「どうやら爆破準備が整ったようですね」

メイドの言葉でゆかりは我に返り、まどかの体を見つめた。哀れにも処刑され絶命したまどかは、その体をも爆破されようとしている。性器と口の爆弾には信管がセットされ最前列の観客の移動が終わり、後は葉月が起爆スイッチを押すだけだったが、葉月はツカツカとゆかりの前にやって来る。そして、ゆかりの唇や舌に刺さっている針を抜くと起爆装置をゆかりに見せる。

「あの６７番の爆破は６９番にやって貰いましょう。さあ、頭は動くでしょう。早く、このボタンを頭で押しなさい」

しかし、ゆかりは怖くてボタンを押すのを躊躇っていた。まどかは、もう間違いなく絶命しているだろう。でも、もし万が一まだ生きていたら自分はまどかを殺す事になる。ゆかりは、ぶるぶる震えながらすがるような眼で葉月を見るが、葉月は冷酷にゆかりに命令する。

「お客様が待っていますよ。早くあのマンコ壊されて用済みのメス奴隷を爆破しなさい」

葉月の眼に射すくめられ、ゆかりはノロノロと頭をボタンに向かって動かす。ゆかりは怖かったが、その一方で爆破され完全にとどめを刺されてしまうまどかの姿に興奮もしていた。

・・あの女の子、壊されたマンコ爆破されて、頭も吹き飛ばされるんだ・・

そして、ゆかりは起爆装置のボタンを押してしまった。

ボスゥゥッ！！

鈍い音が響き、まどかの下腹部と頭が爆破され、粉々の肉片となり消滅していた。もう、誰が見てもまどかは完全に絶命したのは間違いなかった。

「酷いですね、６９番。生きていたかも知れない６７番を完全に殺しましたね。あなたは真面目に生きてきたと思っているでしょうが、もうそんな事は言えませんね。あなたは人殺しですよ。そんな、人殺しのあなたの処刑は一週間後に決定しましょう。一週間後、あなたはマンコの内も外も全て破壊されて死んでいくのです」

葉月は笑いながら持っていたサーベルの刃先を押していた。するとサーベルは刃先が引っ込んでしまう。

・・えっ……？・・

おそらく手品の小道具のような物なのだろう。それに気付いたゆかりは顔面蒼白になっていた。

・・う、嘘だよ……。だって、あの女の子の口から切っ先が飛び出

ていたもの……。そ、そんな、私、本当にあの女の子を殺しちゃったの……・・

ゆかりは激しく動揺していた。まるで、自分が処刑されたような青ざめた顔で口を開けたまま固まっている。そんなゆかりを満足そうに眺めていた葉月はマイクを手に取る。

「皆様、本日の処刑は終了しました。一週間後に、ここにいるこの６９番の処刑を執行します。楽しみに待っていて下さいね。それでは、６９番の挨拶を聞いてあげて下さい」

葉月はマイクをゆかりの口の前に差し出す。そして、私に恥をかかせないよう気を付けて挨拶なさいと小さな声でゆかりに告げる。

「ご、ご紹介に預かりました、６９番のメス奴隷です。わ、私はマンコを拷問されるのが大好きな変態マゾ奴隷でした。ですので、今、葉月様からありましたように、こ、今度、マンコを破壊されて処刑される事が決定しました。頑張りますので、私がマンコ壊されて絶命する無様な姿を楽しんで下さい。よ、よろしくお願い致します」

ゆかりは途中から泣き声になっていたが、最後まで挨拶を言いきっていた。

「泣きながら挨拶するところが良いねぇ。早くマンコ壊されるところが観たいね」

「しっかり、しているじゃないか。これなら最後まで楽しめそうだな」

「この６９番が、無様に泣き喚く姿が早く見たいわね」

「一週間後と言わず、今すぐ処刑してくれても良いよね」

「今日のメス奴隷より頑張りそうで期待出来るわね。でも、最後には無様に発狂して欲しいわね。想像するとゾクゾクする」

様々なゲストの声が聞こえてきて、概ねそれはゆかりが処刑される事を楽しみにしている声だったので葉月の機嫌も良かった。

「ああ、私も楽しみだわ。６９番、あなたを処刑する日が待ち遠しい。マンコは、あなたが満足するように徹底的に壊してあげるからね」

葉月は満面の笑みを浮かべていたが、自分の命の終わりが決定されただけでなく、自分が人を殺してしまったかもという罪の意識で、本来真面目なゆかりは震えが止まらなかった。その隣でメイドは思っていた。

・・あんな玩具のサーベルをわざと見せて、このメス奴隷の心に罪の意識を植え込んだ。このメス奴隷、自分が爆破スイッチを押したという負い目があるから疑心暗鬼に捕らわれる。可哀想に、このメス奴隷まだ幼いのに心も壊されるのですね・・

こうして、ゆかりは真面目であるが故に精神的にも追い詰められていった。

「そうそう、６９番。あなたのいた学校に、あなたの処刑の招待状を送っておいたわ。あなたも処刑される時、知らない人ばかりでは寂しいでしょう。誰が来るのかは分からないけど、あなたのお友達が来てくれるかも知れませんよ。お友達の前で恥ずかしい格好は出

来ませんよね。精一杯、頑張って無様な姿を見せてあげて下さいね」

追い討ちをかけるように葉月は言い、ゆかりの反応を楽しんでいた。

そして、最後にとどめを刺すように残酷に告げる。

「あと、特別ゲストも呼んであるのですよ。誰だか分かりますか？あなたのとても良く知っている方ですよ」

しかし、ゆかりには誰のことか見当もつかなかった。

・・私の処刑を見に来る人で、良く知っている人……？・・

風紀委員の人達かと思ったが、それなら招待状で来るだろう。ゆかりは、本当に分からず頭を悩ませていたが、次の葉月の言葉で、ゆかりの初めて逃げ出したくなっていた。

「渡邉夫妻。あなたが人間だった頃の両親ですよ。初めは、そんなもの観たくない、観る価値などないと渋っていましたがね。お金を積んだら首を縦に振りましたよ」

葉月は、ゆかりの顔を見て残酷に笑っていた。

「嫌ぁぁっ！！お願いします。それだけは許してくださいっ。お願いします、お願いします、お願いしますぅぅっ！！嫌だぁぁっ、許してぇぇっ！！嫌っ、嫌っ、嫌ぁぁぁっ！！」

大人しいゆかりが、狂ったように感情剥き出しで葉月に懇願する。

自分の性器を破壊され無様に処刑される姿を、変態のゆかりでも両親には見られたくなかったのだ。ゆかりは、まどかを殺してしまったかもという罪の意識と、勝手に奴隷に堕ちてこれまで育ててもら

った両親を裏切った罪の意識で精神が崩壊しそうであった。変態だが真面目なゆかりにとって、今この場で死んでしまいたいと思う程精神が追い詰められていた。それを隣で見ていたメイドは改めて葉月に畏怖の念を感じていた。

・・葉月様は恐ろしい。この６９番の心も体も両方壊す気でいらっしゃる。哀れなのは、この６９番。全て破壊される・・

ゆかりは、号泣しながらいつまでも許して下さいと呪文のように呟いていた。もう、ゆかりの頭には快楽も興奮もなかった。ただ絶望と後悔だけが渦巻いていた。葉月は、そんなゆかりを楽しそうに眺め、パンパンと平手でゆかりの頬を打つ。

「可愛いわね、６９番。もっと絶望しなさい。そして、自覚しなさい。あなたは、人殺しで親不孝なメス奴隷なの。あなたが妄想していた世界と現実は違うの。ここからはたっぷりと現実を噛み締めて、絶望と後悔で残り少ない時間を過ごすといいわ」

葉月は、追い詰められて哀れに号泣しているゆかりに冷たく言い放った。

１８、性器型取り

１８、性器型取り

ゆかりは、まどかを殺したのは自分かもしれないという恐怖と、自分が無様に処刑される姿を両親が観に来るという羞恥で気が狂いそうだった。こんな事になるなら、自分の部屋で一人で性器を調教して楽しんでいれば良かったと激しく後悔するが、それはもう後の祭りだった。そして、それは処刑の日が近付くにつれ、ゆかりの心に重くのし掛かってくる。

・・ううっ、もう嫌だぁ。誰かゆかりを今すぐ殺して下さい・・

ゆかりは、処刑される前に死んでしまいたかった。とはいえ、四肢を切断されて一人では何も出来ないゆかりは、ただ泣く事しか出来なかったのだ。そして、あれほど毎日依頼していた性器調教をメイドにお願いする事も、６７番の処刑以来パッタリとなくなっていた。それほど、ゆかりの精神は追い詰められていたのだ。学校に行っていれば、まだ中学生のゆかりである。それは無理もない事であった。

ゆかりがベッドの上で、後悔と絶望で泣いていると、楽しそうに葉月が入ってきた。

「どう、６９番。あなたの処刑が迫ってきたから準備しに来たの。あなたのマンコを処刑して壊す前に、型取りをして記念に残しておこうと思うの。この前、マンコ蝋燭をされたようだけど、それに耐

えられたなら大丈夫よ、多分ね」

葉月は笑いながら言う。その笑いからゆかりは、絶対に耐える事が出来ない行為をされるのだと感じていた。そして、そのゆかりの直感は直後に見事に的中していた事が証明された。

ゆかりは、切断された太ももに装着されているリングに天井からのフックをかけられ逆さ吊りにされた。そして、フックが左右に引かれ両足が大きく開かれる。ゆかりは性器を丸出しにして逆さ吊りにされていた。

「かわいいマンコね。すぐに壊してしまいたいけれど、処刑日まで我慢するわね」

残念そうに言いながら葉月は、男のスタッフに指示を出す。数人のスタッフは全員下着一枚の姿で手際よく準備を進めていった。ゆかりの性器の周りにぐるっと型枠が付けられる。これで流し込んだ溶剤が固まるまで、流れ落ちてしまうのを防ぐわけだった。そして、ゆかりの口には男のスタッフが穿いていた下着が詰め込まれ、さらにボールギャグが噛ませられ、その上にガムテープが何重にも貼られる。ゆかりは、これ以上ないほど厳重に口を塞がれた。

「さてと、それではこの型枠の中に溶剤を流していきますよ。最初は私用にプラチナを溶かした溶剤でいきますよ。プラチナの融点は１７００度以上ですから、マンコ熱いでしょうね。熱いで済めば良いですけどね」

笑いながら葉月はポットを持つとゆかりの性器の前に移動する。

「ふうっ、ふうっ、ふうぅぅーーーっ！」

恐怖のあまりゆかりが塞がれた口で大きく叫び。狂ったように暴れるが、男のスタッフに体を押さえつけられ動けなくなってしまう。

・・これで、ショックで死んじゃえばいいんだ。そうすれば、お父さんやお母さんにマンコ処刑されるゆかりの恥ずかしい姿を見られないで済む・・

ゆかりは、その可能性に期待していた。１７００度以上あるプラチナを性器にかけられたら、そのショックは相当なものだろう。ゆかりは、死ぬのは怖かったが、そうなれば両親に恥ずかしい姿を見られないで済むと考えていたが、葉月はそのゆかりの考えを読んだように注射器を取り出す。

「ショック死されると詰まらないから、薬を射っておくわね」

葉月はゆかりのクリトリスを摘まみ、頂点に針先を当てると、そのまま深く針を突き刺した。

プスッ

「ふううぅぅーっ！」

敏感な突起に針を深く刺されゆかりは声を上げるが、葉月はヂューッと薬を注入する。

「念のため、もう一本射っておくわ」

今度はゆかりの会陰に針をプスッと突き刺し、ヂューッと薬を注入する。ゆかりの望みは絶たれた。ゆかりはもう絶望のどん底にいた。

ここで死ねたらと考えていたゆかりは望みを絶たれ泣く以外なかった。そのゆかりの性器に葉月はプラチナの溶剤をポタリと一滴垂らす。

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

ゆかりが絶叫し、ゆかりの体を押さえている男のスタッフが吹き飛ばされそうになっていた。たった一滴でそれほどの苦痛をゆかりは与えられていた。そして、一滴垂らしてゆかりの様子を確認した葉月は、いよいよゆかりの性器の型を取るため、型枠の中に溶けたプラチナを流し込む。

「ふんがあぁぁぁぁーーーーーーっ！！！」

性器に１７００度以上のプラチナ溶液をかけられては、ショック死するか気絶するかであるが、ゆかりは射たれた薬の影響で、ショック死する事も気絶する事もなく、その激痛に絶叫していた。葉月は精巧な型を作る為、ゆかりの性器のヒダの隙間にもプラチナを流し込んでいく。ゆかりは激痛で頭の中が真っ白になっていた。そして、ようやく型に流し込まれたプラチナが固まり慎重に型枠から取り外される。

「ほら、６９番。あなたのマンコの型が正確に採れましたよ。次はマンコを開いて型を取りますね」

葉月はゆかりの性器をくぱぁと開くと、プラチナで作成した棒を使いゆかりの性器が閉じないよう固定する。ゆかりは、さらに激しい苦痛を与えられる事に半狂乱になっていた。死にたいなどと思っていた気持ちは吹っ飛び、もう自分の性器に与えられる仕打ちに恐怖しかなかった。

・・もう、許してくださいいいいっ・・

ゆかりは必死で目で訴えるが、葉月はゆかりの開いた性器にプラチナを容赦なくドボドボと流し込んでいく。

「ふんごおぉぉぉーーーーーーっ！！！」

ゆかりが再び絶叫し、ゆかりの腰を押さえていたスタッフが吹き飛ばされてしまった。ゆかりの股間に付けられた型枠からプラチナが飛び散っている。葉月は舌打ちして別のスタッフに命令する。

「その使えない男二人、拘束しなさい。後でチンポ潰して切断します」

許して下さいと泣き叫びながら二名のスタッフは拘束されてしまう。そしてゆかりの両脇に頑丈な拘束台が用意され、そこから伸びる太い金属のステーに付いた丈夫な革のベルトでゆかりの太ももの付け根と腰の3ヶ所は完全に拘束されてしまった。もう、ゆかりがどれだけ暴れようと下腹部を動かす事はことは出来ない。二個目の性器型取りはゆかりが動いてしまい失敗したため、改めてやり直す事になった。号泣するゆかりの拡げられた性器に再びプラチナが流し込まれる。

「ふんごおぉぉぉーーーーーーっ！！！」

ゆかりが絶叫するが、今度は腰を動かす事が出来ず、葉月は型枠一杯にプラチナを満たしていく。ゆかりは体をビクンビクンと痙攣し始めていた。

「あらあら、いけないわね　」

葉月は注射器を持ち、ゆかりの乳首にプスッと突き刺すとギューッと薬を注入する。すると、ゆかりの痙攣が治まってきた。

「まだ肝心なところが残っていますからね、しっかりしてもらわないといけませんね」

ゆかりは、これ以上まだ性器を痛め付けられるのかと思うと、これはもう本番の処刑と変わらないのではと涙を流しながら考えていた。葉月は、鳥の嘴のような桜井式の膣鏡ではなく、膣壁を観察するためのステー式の膣開口具をゆかりの膣に挿入する。そして、最奥まで挿入すると４本のステーをネジを締めて最大まで開口する。ゆかりの膣の奥にコロッとした子宮頸部が見えている。

「可愛い子宮だわ。早く壊したいわね。あぁでも、もう少し我慢しないといけませんね」

葉月は舌なめずりをして、ゆかりの子宮を見つめていた。ゆかりは、次に自分がされる事を想像し震えていた。この流れで、こうして膣を拡げられれば、もうやられる事は決まっている。それ以外に考えられない。

「ふごおっ、ふごおぉぉっ」

ゆかりは塞がれた口で必死に許しを求めるが、案の定、葉月はゆかりの想像通りゆかりの大きく口を開けている膣の上に溶けたプラチナの入ったポットを持ってくると、それを傾けてゆかりの膣の中に流し込んでしまった。１７００度以上のプラチナがゆかりの膣内を焼き尽くす。

「ふんごおおぉぉぉぉーーーーーーーーっ！！！！」

ゆかりの上半身がえびのように反り返り、ゆかりの目と鼻から涙と鼻水が滝のように流れ落ちる。性器の中を焼かれ、ゆかりは白眼を剥いて、またビクンビクンと体を痙攣させていた。

19、膣に詰められた物

19、膣に詰められた物

ゆかりはプラチナで性器の外と内、両方の型を取られ無様に体を痙攣させ白眼を剥いていた。

「どう、69番。マンコ痛め付けられて気絶するなんて最高の気分でしょう」

葉月は開脚逆さ吊りのゆかりの性器を眺めているうちに、ムラムラしてきて堪らなかった。

・・・もう、我慢できないわ。少しくらい壊してもいいわよね。マンコの中なら見えないし、カメラで映像流さなければ、お客様も気付かないでしょう・・・

スタッフの一人に耳打ちした葉月は、ゆかりの開口具で大きく開口されている膣を見て残酷な笑みを浮かべていた。しばらくすると葉月に指示を出されたスタッフが頼まれた物を小型の箱の中に用意して戻ってきた。葉月は待ちかねたという顔で、箱を受け取り、すぐに箱を開ける。そして、その中から紙の小箱を取り出して蓋を開ける。キラキラと光が当たって輝く物が大量に入っていた。葉月は残虐な笑みを浮かべ、まだ泣いているゆかりに告げた。

「69番、あなたのマンコが可愛いから処刑前に少し壊しておくわ。

見えないところを壊すから心配しないでね。また、思い切り泣いて良いわよ」

葉月は嬉しくてたまらないと興奮した口調で言うが、ゆかりは反対に震えていた。性器にプラチナ溶液を流し込まれ焼かれるという処刑に匹敵する行為を行われたばかりだというのに、今度は性器を壊す気でいる。

・・見えないところって、私のマンコ、どこが壊されるの・・

少し考えれば見えないところで、今、開口具で大きく口を開けている状態の箇所、そこが壊されるとすぐに気付く筈であるが、ゆかりもそんな事にも気付かないほど冷静ではなかったのた。ゆかりが、自分の膣が壊されると理解したのは、葉月がゆかりの膣内に小箱の中身をザーッと空けた瞬間だった。

・・私のマンコの中に何か小さくて冷たい固い物を入れられた・・

ゆかりはまだ自分の膣の中に入れられた物の正体に気付いていなかったが、これから何をされるのか不安と期待で、この状態でありながらバルトリン腺から粘液を分泌してしまっていた。

「さすが変態の６９番ね。この状態でマンコ濡らすメス奴隷は始めて見たわ」

葉月は感心しながら小箱の中身を全てゆかりの膣の中に入れてしまうと、すりこぎ棒を手に取りニヤリと笑う。

「今、６９番のマンコの穴に入れた物を、このすりこぎ棒で押し込んであげるわ。同じ物をたくさん用意してあるから、どんどん押し

込んでいってマンコの中に詰めるだけ詰めてあげるから喜びなさい。変態の69番にとって、とっても気持ちいいと思うわよ」

しかし、ゆかりは葉月の言葉と裏腹に、自分の性器はとても酷い事をされると認識していた。

・・マンコ、少し壊すと言ってるから、私のマンコの穴、壊されるんだ。怖いよぅ……。本当にマンコ壊される時ってどれだけ痛いの。少しってどんな風に壊されるの・・

ゆかりは遠目にも分かる程、ぶるぶると震えていた。葉月は先端が丸く直径が3センチ弱のすりこぎ棒をゆかりの膣に入れる。ゆかりの膣は、切開しない限り限界かと思われる4センチまで開口具で拡げられているので、すりこぎ棒は楽にゆかりの膣内に入っていく。そして、4センチ程すりこぎ棒を突き入れたところで、ゆかりの膣に入れた物に先端が当たった。

「それじゃあ、いくわよ。思い切り泣き叫びなさい」

葉月は思い切りすりこぎ棒をゆかりの膣に押し込んだ。そして、ぐりぐりと胡麻を擂るようにすりこぎ棒を動かす。

「ぶっ、ひいいいいいーーーーーーっ!!!!」

ゆかりはまたエビのように体を反らせ絶叫する。葉月は、まだぐりぐりとすりこぎ棒を動かしている。ゆかりは反り返ったまま、ぶりぶりと大便を漏らしていた。ゆかりの漏らした大便は、反り返っているゆかりの頭にぼとぼと乗っている。しかし、ゆかりはそんな事にも気付かない程、激しく反り返り白眼を剥いていた。葉月は、最初にゆかりの膣に入れた分が充分に奥に詰め込まれたのを確認し、

もう一箱蓋を開け、ゆかりの膣内にザーッと中身を全て入れる。

「そんなに体反らして絶叫して、よほど嬉しいのね、６９番。今、２箱目入れたから、また押し込んで詰めてあげるわ。何箱入るか、楽しみだわ」

葉月は、またすりこぎ棒で押し込もうとして、箱の中身が一つ落ちているのに気付いた。

「あら、勿体ない」

葉月は、落ちていた画鋲を拾うとポンッとゆかりの膣に投げ入れた。そして、またすりこぎ棒でゆかりの膣に入れた画鋲をぐりぐりと押し込み詰めていく。ゆかりは反り返ったまま大便を漏らし、狂ったように塞がれた口で絶叫し続けている。そして、葉月は3箱目の画鋲を取ると、ザーッとまたゆかりの膣内に入れる。一箱には２０個の画鋲が入っているので、ゆかりの膣内にはもう６０個もの画鋲が入れられた事になる。葉月は、すりこぎ棒でぐりぐりと画鋲をゆかりの膣に詰め込みながら、５箱くらいは楽にいけそうねと残酷に微笑んでいた。ゆかりは膣内に画鋲を入れられただけではなく、それをすりこぎ棒で詰め込まれ、発狂しそうな程何も考えられなくなっていた。生まれて初めての性器処刑を本当に執行され、その耐えられない激痛にゆかりは無様に絶叫し続けていた。

・・だれがあぁ、だじげでえぇぇぇぇっ・・

ゆかりの頭の中は真っ白で、ただ救いと慈悲を求めていた。

・・おねがいじまぢゅうぅっ、もおゆるじでえぇぇぇぇっ・・

しかし、葉月は4箱目の画鋲をゆかりの膣に入れる。そして、続けて5箱目も入れてしまった。１００個も画鋲を入れられ、画鋲はゆかりの膣口近くまできたが、葉月はそれをすりこぎ棒で無理矢理押し込んでいく。

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ

「ぶ、ぎいいいいいいいーーーーっ！！！」

哀れにもゆかりの頭は自分の大便まみれになり、全身は汗まみれになっていた。

「今まで、このマンコの穴に画鋲詰めたメス奴隷は5箱で発狂したのが記録だったけど、さすが６９番だわ。まだまだ入りそうね」

葉月は、また二箱まとめてゆかりの膣に画鋲を入れると、すりこぎ棒で画鋲を押し込んでいく。そして、また二箱。ゆかりは１８０個もの画鋲を膣内に詰め込まれ、膣と子宮頸部をズタズタに破壊されていた。

「9箱だと切りが良くないから、もう一箱入れて１０箱にしてあげるわ。今までの記録の倍よ、６９番。凄いわね」

葉月は満足そうに言いながら１０箱目をゆかりの膣に入れ、すりこぎ棒で押し込んだ。

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ！！

ゆかりはもう失神してしまったのか、力なくだらんと吊られていた。

葉月はゆかりの膣口まで隙間なく詰め込まれた画鋲を見て興奮していた。

「さすがにもうパンパンね。それじゃ、仕上げにこれをかけてあげる」

葉月は、赤い液体の入った小瓶の蓋を開け、ゆかりの画鋲の詰まった膣にドボドボと振りかけた。

「お、げえええぇぇぇぇぇーーーーっ！！！」

だらんと下がっていたゆかりが、激しく絶叫し、また反り返る。ゆかりが感じたのは、性器から体全体をニードルで串刺しにされたような激しく突き刺すような激痛だった。

「あら、お目覚めね。目覚めの激辛香辛料は気持ち良かったかしら。画鋲でズタズタにされたマンコの穴に丁度良いスパイスになるでしょう」

葉月は、ドボドボと小瓶の中の赤い液体を全部ゆかりの膣に入れてしまう。

・・もお、じぬうぅぅぅーーーっ・・

ゆかりは、もう自分は発狂すると思った。何も考えられない。思考が停止する。

・・私、マンコを完全に壊される前に狂っちゃうんだ。あははっ、最高に無様な女子中学生ね。ブスで変態のゆかりには相応しいよ・・

ゆかりは、もう自分は発狂すると思っていたが、そんな事を考える余裕があるというのは、まだゆかりが正常であるという証だった。ゆかりが、この後本当に公開性器処刑を執行され大勢のゲストの前で、哀れにも本当に発狂してしまう時には、そんな事を考える余裕など当然なかった。ゆかりは、性器を破壊され、発狂させられた後、友人や両親の観ている前で完全に絶命させられる。それは逃れられない運命だった。もう、ゆかりの残された時間は2日を切っていた。

２０、破壊される肛門

２０、破壊される肛門

ゆかりは膣内に画鋲を詰められ、膣をズタズタにされた上に激辛の香辛料の液体を注入され地獄の苦痛を味わっていた。

「さて、マンコの型取りと撮影も終わったし、これでデータを入力すれば３Ｄプリンターでいつでも６９番のマンコを再現できるわ。後はこの６９番のマンコを処置して今日は終了としますか」

逆さに吊られ固定されているゆかりは、ようやく解放されるかと思ったが、葉月の〝マンコの処置〟という言葉が気になった。

・・もう、何もしないよね。私のマンコの穴から画鋲取り出して、洗浄して、消毒してくれるんだよね・・

ゆかりは朦朧とする意識で、そう願っていたが、そんな甘い考えはここにはなかった。もうすぐ壊してしまうゆかりの性器を洗浄や消毒などするわけがない。まだ中学生であるゆかりには、そこに思い至らなかったのは仕方がないと云える。そして、そんな甘い考えを持っていたゆかりの性器に再び激痛がはしる。

「ふごおおぉぉぉぉーーーーーっ！！！」

ゆかりは、また反り返り絶叫していた。葉月は、ゆかりの性器を針

と糸で縫い合わせていた。

「せっかく詰めた画鋲が零れたらいけませんからね。あなたのマンコは縫い合わせて閉じておきますよ」

葉月は、チクチクとまるで布を縫うようにゆかりの性器を縫っていく。ゆかりは、捻り出す大便が無くなったのか、ぶほっと大きく放屁していた。それは、ゆかりの性器を縫い合わせる為、顔を近付けていた葉月を直撃する。ゆかりの股間付近に激しい悪臭が漂い、葉月は顔をしかめた。

「まったく、この締まりのない穴を壊しますか。この穴ならマンコと違って処刑前に壊しても、マンコ破壊を楽しみにされているお客様からは文句ないですしね。処刑まで間もないですし、今壊してもそれまで生きていられるでしょう」

葉月は、ゆかりの肛門を破壊すると即座に決めてしまった。そして、小型の爆竹を用意すると、それをゆかりの肛門に詰め込んだ。

「まずは、この汚いおしりの穴を爆破してあげるわ。そんなに泣かないでね。まだ殺さないから大丈夫よ。まあ、死ぬほどの苦痛でしょうけどね」

しかし、そんな事を言われてもゆかりの恐怖は頂点に達していた。肛門破壊……。いよいよ、本当の処刑が執行される。それはもう、戻ってこれない一方通行の道。ゆかりが妄想していた世界とは違う、本当の現実の世界だ。ゆかりは恐怖で吊られている上半身を激しく動かし泣き叫んでいたが、固定されている下腹部は一切動かす事が出来なかった。

「さあ、６９番。いきますよ」

葉月は、ゆかりの肛門に詰めた爆竹の導火線に点火する。シューッと導火線がどんどん短くなっていく。

パァーーーンッ

「ふごおおぉぉぉぉーーーーーっ！！」

乾いた爆発音が響き、ゆかりの肛門が爆破された。ゆかりの肛門から煙が立ち登り、火薬臭が辺りに漂う。ゆかりの肛門の穴からは血が流れ出していた。

「うははははっ、どう６９番。おしりの穴を爆破されて気持ちいい？」

しかし、ゆかりは呻き声を上げるばかりで返事がなかった。

「あら、満足しなかったのかしら。それなら火力上げて、もう一回爆破してあげるわ」

葉月は、倍の量の爆竹をゆかりの肛門に詰めていく。そして、医療スタッフに連絡し待機してもらった。万が一、ゆかりが危険な状態になった時、すぐに対処してもらう為だ。性器を公開処刑する前にゆかりを殺してしまう訳にはいかない。そして、準備を整えた葉月は、導火線に点火する。

シューーーッ

バァァーーーーンッ！！

「ふんごおぉぉぉぉーーーーーっ！！」

先程より大きな爆発音の後、絶叫したゆかりの肛門から血が噴き出した。ゆかりは上半身を狂ったように動かしている。その、ゆかりの哀れな姿を見て葉月は爆笑していた。

「あははっ、面白ーい。おしりの穴から噴水みたいに血が噴き出してるよ。６９番、あなた最高っ」

激痛で狂ったように体をぶらぶらと動かし、肛門から血を噴き出しているゆかりの姿に葉月は笑いが止まらなかった。

「あははっ、楽しいね。マンコ壊すのも良いけど、こっちの穴も楽しいわ」

葉月は、がらがらとイルリガートルの下がった台車を持ってくると、下のキャスターのストッパーを上げ固定する。そして、イルリガートルにドボドボと液体を入れ始めた。その液体から強い刺激臭が漂った。

・・何、この臭い。どこかで嗅いだ事があるよ・・

肛門を爆破され朦朧とした意識のゆかりは、その刺激臭の正体を思い出そうとした。そして、ハッと思い出した。

・・理科の実験……。何かの実験で使った塩酸だ。そんなもの何にするの・・

そこで、ゆかりはまた思い出す。

・・そうだ、塩酸は殺菌効果がある。私のマンコ殺菌してくれるのかな。でも、傷があるからかなり痛いよね。それにマンコ縫われちゃったし、どうするの・・

ゆかりが、イルリガートルに塩酸を入れている様子を見たなら、そんな事に使用するのではないと理解出来ただろうが、ゆかりに想像出来るのはその程度だった。

「原液のまま注入すると、さすがに死んじゃうでしょうから希釈してあげるわ。まあ、それでも排泄機能が破壊されれば、長くはもたないでしょうけど、もう処刑まで間もないし問題ないわよね」

葉月は、イルリガートルの底に付けられたゴム管を摘まみ残酷に微笑む。そして、ゴム管をゆかりの肛門に押し込んでいく。ここにきてゆかりは自分が何をされるのか初めて理解した。

・・嘘だよ、そんな事されたら死んじゃうよ・・

ゆかりはガクガクと震え涙を流しているが、葉月はゆかりのその顔を楽しそうに眺めている。

「そうだよね、いくらド変態のあなたでも、死ぬのは怖いものね。でも、どうせもうすぐ処刑されちゃうんだから同じでしょう。じゃあ注入するから苦しんでね。大丈夫よ、すぐには死なないようにしてあるから」

葉月は号泣するゆかりに構わずゴム管に付いているコックを緩めてしまう。ゆかりの肛門から、ゆかりの中へ塩酸が流れ注入されていく。

「ぶぎゃあああぁぁぁぁぁーーーーっ！！」

ゆかりはまた反り返り絶叫する。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ、うぼぼおぉぉっ！」

ゆかりは体の中を焼かれる激痛に反り返ったまま塞がれた口で絶叫し続けている。ゆかりの肉が溶ける異臭が充満し、ゆかりは涙と鼻水を大量に流し白目を剥いている。しかし、葉月はそんな苦しむゆかりの姿を楽しそうに見つめていた。

「ああ、面白いわぁ。６９番、あなたのその姿最高っ、もう興奮が止まらないわ」

葉月は、イルリガートルにドボドボと塩酸の原液を追加してしまう。薄めてあった塩酸濃度が上がり、それを注入されているゆかりの体内を更に激しく焼き溶かしている。

「あぼぼぼぼぼぼぼっ、あぼぼおぉぉっ！」

「あぁ、口、塞がない方が良かったかしら。あなたの生絶叫も良さそうね」

葉月は笑いながらゆかりの苦しむ姿を楽しんで見ていた。そして、ゆかりはイルリガートルに満たされた希釈塩酸液を１リットル全て容赦なく注入されてしまう。この時から、ゆかりの死へのカウントダウンが始まったと言っても過言ではなかった。

・・だぢゅげでえぇぇぇっ、ぐるぢいぃぃぃっ・・

ゆかりの上半身は吊られたまま、のたうち回っていたが、がっしりと固定されている下腹部は微動だにせず画鋲を詰め込まれ縫われた性器とゴム管を挿入されている肛門を無様に晒していた。

「それじゃ、あなたのおしりの穴、もう壊すね」

葉月は、ゆかりの肛門からゴム管を抜くと、ニッパーで肛門の括約筋を挟む。そして、なんの躊躇もなくパチンと切断した。

「ふんごおおおぉぉぉぉーーーーーっ!!」

ゆかりが、また絶叫するが葉月はパチパチとゆかりの肛門を切断していく。

・・もお、いやだあぁぁぁっ、だぢゅげでえぇぇぇっ!!・・

ゆかりは今まで自分ではあまり責めた事のない肛門を徹底的に破壊されていた。そして、ニッパーで括約筋を切断し終わった葉月は、今度はメスを持つ。

「はい、あなたのおしりの穴の最後よ」

葉月はゆかりの肛門と会陰の間にメスを突き刺す。そして、ぐるりと肛門の周りをメスで切開していった。

「ぶうびゃあああぁぁぁぁぁーーーーーーっ!!」

葉月は、ゆかりの肛門をメスで抉り取っていた。

「ほら、あなたの肛門。こんなに間近で見るの初めてでしょう。汚

い肉片だけど69番、あなたの物と思うと可愛いわね。記念にホルマリン漬けにして保存しておいてあげるわ」

液体の満たされたガラスの小瓶に切り取ったゆかりの肛門を入れ葉月は微笑んだ。こうして、ゆかりの肛門処刑は終了した。ぽっかりと穴が空いたゆかりの肛門があった場所は、もうこの穴は必要ないだろうと縫い合わされてしまった。

21、処刑前日、そして……

21、処刑前日、そして……

肛門を処刑され、抉り取られてしまったゆかりの処置が行われていた。処置といっても縫い合わせるだけである。すぐに処刑されるゆかりに、それ以上の処置は施されない。当然の事であった。そして、ゆかりは膣に画鋲を詰められ縫われたまま逆さに吊るされている。ゆかりの正面には3台のモニターが置かれ、そのモニターの一つにはゆかりのクラスメイトたちの画像が動画とスライドショーで映し出され、もう1台にはゆかりの両親の画像が映し出されていた。そして、真ん中のモニターには葉月か入手した八千代、真弓、秋穂の処刑動画と、葉月が処刑した凛津、睦月、柚月たち先日のまどかの処刑動画がエンドレスで流されていた。ゆかりはクラスメイトや両親から、この無様な姿を見られているような感覚になり、しかも泣き叫びながら残酷に処刑されていく今までのメス奴隷を観ているうちに、自分自身が処刑されているような感覚に陥り精神が不安定になっていた。もう、少しでも何かあればゆかりの精神は崩壊してしまうのでは思われた。

・・お父さん、お母さん、ゆかりがマンコ処刑されるところ見ないで・・

ゆかりは両親にじっと見られているようで、この開脚したまま縫われた性器を剥き出しにして吊るされている姿が堪らなく苦痛だった。

・・お願い、明日はこないで・・

ゆかりは祈りにも似た気持ちでモニターを見ていた。そこへ葉月が入ってくる。葉月はメイドと白衣を着た女も連れていた。

「６９番、明日はいよいよ処刑ね。どう、嬉しい。あなたの望み通りマンコを壊されて処刑されるのよ」

葉月はゆかりの性器をじろじろ眺めながら鞭を手に取った。

「どうも、あなたのマンコ見てるとムラムラしてくるのよね。軽く、その縫われたマンコ鞭で打たせてもらうわよ」

葉月はすぐに鞭を構え、ヒュンと鞭を振る。

パシィィッ！

「ふぐうぅぅぅーーっ！」

ゆかりは画鋲を詰められ縫われている性器を鞭で打たれ悲鳴を上げる。葉月はゆかりの反応に興奮し、明日が処刑なので軽く二、三発で終わりにするつもりが止まらなくなっていた。

パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ！！

「んぎいいいいーーーーーっ！！」

ゆかりは昨日のようにエビ反り絶叫する。そのうちにゆかりの性器から血が飛び散りだした。縫われた性器を鞭で激しく打たれた為、

縫われた小陰唇が引き千切れ出血しだしたのだ。葉月は、ゆかりの血を見てさらに興奮していた。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ！！

「んんんぎいいいいいいーーーーーっ！！」

葉月の鞭が激しくなり、ゆかりは反り返ったまま絶叫し続ける。

・・お父さん、お母さん、助けてえぇぇぇぇっ・・

モニターに映った両親を見てゆかりは、哀れにも助けを求めていた。そして、ようやく葉月の嵐のような鞭打ちが終わる。ゆかりの縫われた性器は、鞭の打撃で小陰唇が引き千切れ開いてしまい、膣の中の画鋲が顔を見せていた。

「あら、いけない。明日処刑なのできちんと抜糸して画鋲を取り出してきれいにしておこうと思ったのに、つい興奮してしまったわ。もう、抜糸は必要ないわね」

葉月は大袈裟に肩をすくめると白衣の女に処理よろしくと声をかけた。白衣の女は、掃除機のような吸引機をゆかりの膣に当て、それで吸引出来ない画鋲はピンセットで一つづつ摘まみ出していった。そして、最後に軟膏のようなものを膣内と小陰唇に塗り、終わりましたと葉月に頭を下げると退室していった。

「さてと、明日はもう処刑だから、これでも聞いて最後の夜を過ごしなさい。６７番が最後に言っていた言葉よ。あなたに爆破される寸前に言っていた言葉をマイクが拾っていたの。もう消えそうな小

さな声だったから初めは気付かずにいたけど、雑音をカットしてみると確かに声が聞こえるのよ。貴重な最後の音声ね。はっきり聞こえるようにするには苦労したわ。ふふ、それでは、６９番、明日ね」

葉月は吊るされているゆかりの頭の下に小型の機械を置くとスイッチを入れ出ていった。しばらくザーッとノイズが流れていたが、音声が流れ出した。

「お願いします、お願いします。まどかを助けて。まだ死にたくないです。お願いします。助けて下さい。ボタンを押さないで。お願いします、助けて下さい。まどか、死にたくない……」

それは、ゆかりに爆破された６７番まどかの命乞いの言葉だった。小さな、か細い涙声で必死に、死にたくないと繰り返している。

・・嫌あぁぁぁぁーーーーーーっ！！私が殺した、私が殺しちゃった。私があの女の子を殺したんだ。こんなに死にたくないと必死に訴えてた女の子を殺したんだ。あああぁぁぁーーーっ！！・・

まどかの声はエンドレスで流れている。ゆかりは半狂乱になっていた。

・・こんな人を殺した最低の女、大勢の前で笑われながら徹底的に残酷に処刑されればいいんだ。こんな女のマンコ、形も残らないほど壊されてしまえ。もう、私は地獄に堕ちる。人殺しだ。地獄に堕ちてからも永遠にマンコ壊され続ければいいんだ・・

ゆかりは、もう自分など生きている資格はないと号泣していた。思い切り残酷に処刑される事が自分に残された贖罪だと考えた。こうして、ゆかりは葉月によって最後の夜の安息さえ奪われた。

・・葉月様は恐ろしい・・

葉月の後ろを歩きながらメイドは、葉月の容赦ない仕打ちに恐ろしさと共に尊敬の念を抱いた。

・・あの〝ＡＩ〟で作成した音声で、６９番は確実に自責の念に駆られて最後の夜も寝る事が出来ないだろう。そして、その気持ちのまま残酷に処刑されていく・・

驚くべきことだがメイドは、ゆかりに対して多少同情の念を抱いていた。そして、ゆかりにとって最後の夜がついに明ける。

★　★　★　★

「今日だったわね　」

「そうだな、あまり気が進まないが、観覧すれば大金が戴けるんだ。処刑なんてそんなに時間がかからないだろう。少し我慢すればいい」

「そうね、首吊りかギロチンか分からないけど一瞬ですもんね。ゆかりだと思わなければ何でもないわ。それより、場所の連絡とかないけどどうするのかしら」

「ああ、車で迎えがくるらしい。時間になったら下に降りていればいいらしいよ」

男はそこで窓の外に目を向ける。タワーマンションの窓から見る空

は真っ青に晴れ渡っていた。

「いい天気ね。気持ちがいいわ」

女も外を眺めながら髪を指で鋤く。

「ゆかりには感謝しないとね。ゆかりのおかげでこんな暮らしが出来るようになって嬉しいわ」

「まったくだ。ゆかりは大金を残して遠い地に嫁いでいったと思えば何でもないな」

タワーマンションの窓から眺める眼下には、車や人が小さく動いている。彼ら二人は、もう働く事なく一生人々を見下ろして生活出来るのだ。二人にとっては夢のような生活だった。

★　★　★　★

蜂須賀彩音（注）は中学校の校庭にいた。ここに迎えが来る筈だった。

「大丈夫ですか、蜂須賀さん。途中で退場とか出来ませんよ」

「周りにいる人たちも、みんな処刑を楽しみに大金を払って観に来るような人たちですからね」

彩音を見送りに来ている理津子と麗華が心配そうに言うが、彩音はしっかりとした口調で答える。

「私は大丈夫です。でも、渡邉さんが大丈夫か心配です。だって、今日大勢の前で処刑されちゃうんです。今、どんな気持ちだろうと考えると……」

彩音はそこで言葉を切っていた。理津子と麗華は、その先に〝可哀想〟と続くものと思っていたが、彩音の頭の中では〝興奮してしまう〟と続けていた。実際、彩音の性器は濡れてしまっている。それに気付かれないように彩音が校門を見ていると、黒塗りの大きなセダンが入って来た。ベントレーのコンチネンタルＧＴだ。こんな４０００万以上する車を学校の教師や職員が乗っている訳がない。迎えに来た車だと、すぐに分かった。ベントレーは彩音たちの前に停まると運転席からピシッとテーラーで仕立てたスーツを着た男が降りてきた。

「蜂須賀彩音様ですね。どうぞお乗り下さい」

男は後部座席のドアを開けると彩音を車に乗せた。そして、理津子と麗華に頭を下げる。

「橘様と香坂様ですね。豪徳寺様がよろしくと仰っていました。それでは、蜂須賀様をお預かり致します」

彩音はさすがに緊張した顔でベントレーのシートに乗り込んだ。そして、彩音を乗せたベントレーはモーターとＶ８のエンジン音を響かせて走り去っていった。

（注）ゆかりのクラスメイト。初出は別作品「変態異常自虐少女ゆかりの記録」５６話。彩音がゆかりの処刑を観に行く事になった経緯については「……ゆかりの記録」番外編を参照して下さい。

22、処刑当日

22、処刑当日

ゆかりの部屋のドアが開けられた。いよいよ、ゆかりの公開処刑が執行される時がきた。ゆかりは、もう今日が終わる前には間違いなくこの世から消えているのだ。

「お早う、69番。よく眠れたかしら。今日は良いお天気、絶好の処刑日和よ。これも69番の普段の行いが良いからでしょうね。さあ、それでは会場に向かいましょう」

葉月は男のスタッフに指示を出し、ゆかりの体をキャスターの付いた拘束具に拘束する。それは、膣や肛門を破壊された時のような両側の柱から頑丈な太いステーが伸びた拘束具だった。ゆかりの体は、その拘束具に開脚逆さ吊りの状態にされ、二度と体を動かせないように厳重に拘束された。ゆかりは、その執拗なほど厳重な拘束に、今までとは違う、もうゆかりを完全に破壊し絶命させるのだという残酷な意思を敏感に感じ泣き出していた。

・・本当に私、あの女の子たちみたいに処刑されちゃう。もう、ここに帰ってくる事もないんだ・・

まどかに対する贖罪の気持ちから、自分など早く残酷に処刑されれば良いと思っていたゆかりだが、こうして実際にその日を迎え、これから処刑される段階になると激しい恐怖に捕らわれていた。

「ふひぃ、ふひぃ、ふひぃ、ふひぃ」

ゆかりは過呼吸になっていた。無理もない。まだ中学生のゆかりが性器を破壊され処刑されるのだ。施設でそのように教育され育てられたメス奴隷でさえ、最後は恐怖に捕らわれ泣き叫び命乞いするのだ。普通の中学生のゆかりが過呼吸になるのも当然だった。しかし、そのような事に構わずゆかりを固定した台車は、がらがらと運ばれていく。そして、ドアが開けられ会場内にゆかりは運ばれていった。

「ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ、ぶひぃ」

自分の処刑を観に来ている大勢の観客の姿が見え、ゆかりは更に激しく過呼吸になっていた。怖くて涙と鼻水が止まらない。その時、涙で滲むゆかりの目に彩音の姿が映った。

・・蜂須賀さん……。蜂須賀さんが来てくれたんだ。私とお友達になりたいって言ってたけど、私はこんな変態マゾで人殺しなんだよ……。でも、蜂須賀さん、その格好はどうしたの。まるで私と同じ奴隷みたい・・

ゆかりは、もう会う事はないと思っていたクラスメイトに思わぬ所で会う事が出来、普通の学校生活を思い出し涙が激しく溢れてきた。そして、そこでようやく声が出た。

「だじげでえぇぇっ、おねがいぢまぢゅう、だじげでぐだぢゃい、なんでもしまずがらあぁ、だじげでぐだぢゃいぃぃっ。マンコごわじでいいがらぁ、だじげでえぇぇっ」

ゆかりは無様に狂ったように号泣しながら救いを求めていたが、が

らがらと会場の中央に運ばれていく。ゆかりが無様に泣き叫ぶ姿は、大勢のゲストの興奮を煽ったに過ぎなかった。

★　★　★　★

その、ゆかりが彩音を見つけた少し前、彩音はベントレーから降りると、そこはもう会場の受付の前だった。彩音が受け付けに招待状を見せると、どうぞ中へと案内されたが、そこで衣服は全て脱ぐように指示された。会場の中を覗くとそこにいる男女全てが全裸である。

「あの……。どうしても全部服を脱がなければいけませんか」

彩音が躊躇していると、規則なので衣服を脱がなければ会場に入る事は出来ませんと受付の女性に言われてしまった。彩音はそれでも躊躇していた。

「あら、恥ずかしいのかしら。まだ中学生くらいだから無理もないですね。大人になれば自分の体を見て貰いたいと思うのですがね。マンコ、舐めて貰う悦びも知らないのでしょうね。可哀想だわ」

受付の女性に笑われ彩音は憤慨していた。彩音は別に裸になることなど、何でもなかった。胸や性器を見せる事にも抵抗などまるでない。

・・裸になると分かっていれば、付けてこなかったのに……。でも、私マンコ処刑なんて観た事ないから渡邉さんの処刑は絶対観たいの・・

彩音は意を決してセーラー服を脱ぎ始めた。そして、スカートも脱ぐ。彩音は制服の下には下着を着けていなかった。

「あらあら、そういう事だったのですね。あなた、可愛いですね」

彩音の服を脱いだ姿を見て、受付の女性が感心したように声を上げる。彩音の二つの乳首はピンチで挟まれ錘が下げられていた。そして、股間を見ると、そこにも大量の錘がぶら下げられていた。

「本当にあなた可愛いわ。手を上げて、足を開いてみてくれる」

受付の女性は興奮したように彩音に言うと、さらに付け加えた。

「私のお願いきいてくれれば、特等席でメス奴隷の処刑を観せてあげるわ。私は神楽坂沙也加。葉月様とは懇意にさせて頂いているの。どう、今日のメス奴隷の処刑を間近で観たいなら、私の言うことをききなさい」

彩音は、沙也加の言葉に従い両手を万歳のように上げ、両足を大きく開いていた。かなりの人数が集まっているのが見えた為、優先的に良い席で観る事が出来るなら、それに越した事はなかった。

・・渡邉さんがどんな風にマンコ処刑されるのか、少しも見逃さず観ていたい・・

彩音は、この沙也加という女が嘘を言っているようには見えなかったので、沙也加の言う通りの姿勢をとっていた。沙也加は、その彩音の姿を見てスタッフを呼びつけ何か指示を出していた。

「えっ……」

彩音は、両手両足、腰を5人のスタッフに押さえられていた。そして、沙也加は彩音が提出した招待状を改めて確認していた。

「あなた、今日処刑されるメス奴隷の同級生なのね。なるほど、あのメス奴隷の友だちだけあるわね。あなたも随分な趣味をお持ちのようだけど、どうせなら私がもっと可愛いくしてあげるわ」

沙也加は、押さえつけられた彩音の乳首からピンチを外す。そして、性器に付けられたピンチも外していった。そこへ、先程指示を受けたスタッフが箱を持ってくる。

「せっかく錘をたくさんぶら下げて来たんだから、こっちに付け替えてあげるね」

沙也加は、箱の中から錘を取り出すと彩音にそれを見せた。それは彩音が付けてきた錘よりも、大きく重量がありそうな錘で、しかもピンチではなく鋭い釣り針に錘が付けられていた。

「ひぃぃっ」

思わず彩音は悲鳴を上げるが、その彩音の口もスタッフに押さえられ塞がれてしまう。

「ふぐぅ、ふぐぅ、ふぐぅ、ふぐぅ」

彩音は、逃れようと暴れるが5人ものスタッフに押さえられては動く事も出来ない。沙也加は彩音の左の乳首を摘まむと釣り針の針先を当てた。

プツゥッ

「ふぐうぅぅぅーーっ」

彩音の乳首に釣り針が突き刺されていた。そして、沙也加はそのまま釣り針を彩音の乳首に貫通させる。

プツゥッ

「ふぐうぅぅぅーーっ」

彩音の瞳から涙がポロポロこぼれていたが、沙也加は反対側の乳首にも釣り針を貫通させ錘をぶら下げた。

「良いわね。可愛くなったわ。もう少し可愛くしてあげるからね」

沙也加の指示で彩音の両腕は背中に回されボンデージ用のアームバインドで拘束されてしまった。そして、両足首にも足枷が装着され、その足枷に鉄パイプが付けられ足を閉じられないようにされる。さらに口には男根を模した性具が挿入され、その性具に付いたベルトがきつく締められ彩音は口も塞がれた。彩音は、他人に調教されるなど初めての経験で涙を流し、ぶるぶる震えていた。

「震えちゃって可愛いわね。大丈夫よ。ちゃんとマンコにも錘を付けてあげますからね」

沙也加は彩音の前に屈み込んで小陰唇を引き伸ばした。彩音は次にされる事を想像し、いやいやというように大きく首を左右に振るが、沙也加は構わず彩音の小陰唇に釣り針を突き刺し貫通させた。そし

て、次々に彩音の小陰唇に錘をぶら下げていく。

プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ

「んぐうぅぅぅーーーーっ！」

沙也加は彩音の小陰唇に左右5個ずつ計10個もの錘をぶら下げてしまった。彩音の小陰唇が錘の重量で、びろーんと無様に伸びきっている。そして、沙也加は最後の一つを手に取ると彩音のクリトリスに針先を当てた。それには特に大きい重い錘が付いていた。彩音は恐怖で泣き叫び逃げようとするが、拘束されている上にスタッフに押さえつけられていて動く事が出来ない。沙也加は徐々に指先に力を入れていった。

プツッ

「んぎぃぃぃぃーーーーっ！」

プシャーーッ

彩音が絶叫し尿道から小便が勢いよく噴き出していた。彩音はクリトリスに釣り針を貫通され、錘をぶら下げられ、その引き千切れそうな激痛に無様に漏らしてしまっていた。

「うーん、可愛くなりましたね。最高ですよ。それでは約束通り特等席に案内しますね」

彩音は首輪も付けられ、鼻フックもかけられ鼻の穴が思い切り引き伸ばされていた。そして、首輪に付いている鎖に引かれてガチャガ

チャと歩き出していた。鉄パイプで足が閉じられない為、非常に歩き辛いのと、乳首と性器に釣り針で下げられた錘が歩く度に揺れ激痛がはしった。彩音は泣きながら、まるでこれから処刑されるメス奴隷のように沙也加に鎖を引かれて歩いていた。

23、ゆかり乳首切除

23、ゆかり乳首切除

会場の中央に拘束台ごと据えられたゆかりは号泣していた。

「皆様、お待たせ致しました。それでは、この69番のメス奴隷の処刑を開始します。皆様の期待通りマンコは徹底的に破壊して処刑しますので、楽しんで下さいね」

葉月が宣誓すると会場がわーっと盛り上がり、ゆかりは狂ったように一段と激しく号泣していた。そのゆかりの頬が激しく打たれる。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「ひぶうぅぅーーーっ、ゆるじでぐだぢゃいぃっ」

ゆかりは震えながら泣き声で懇願するが、許される筈がない。

「可愛いわね、69番。もっと無様に泣きなさい。お客様は喜んでくれるわ。あそこで観ているあなたの元両親も嬉しいでしょうね。それにね、排泄機能を壊されたあなたはもう長くは生きられないの。どうせなら自分の望み通りマンコ壊されて処刑された方が良いでしょう」

葉月は高い建物の一画を指差して残酷に笑う。そこに、ゆかりの両

親がいるようだった。ゆかりは、その建物から目を逸らしていた。自分のこんな姿を見られていると思うと、逃げ出したい気持ちであるが、ゆかりの体はもう四肢を切断され拘束されており、逃げることなど叶わなかった。その震えるゆかりの涙で滲む目に最前列の中央の席でゆかりを見ている彩音の姿が映った。彩音は目を大きく見開いてゆかりを見つめている。ゆかりの姿を焼き付けるように……。

「それでは、マンコ破壊の前に、このつるぺたの胸に不要な乳首を切除しておこうと思います。この６９番の乳首を最後に痛め付けたいと思う方、１名を募集します。もちろん、刺す、焼く、溶かす、どんな方法で痛め付けてもＯＫです。最後に完全に乳首を消去してくれれば問題ありません」

葉月の言葉でゲストは一斉に手に持った端末から金額を入力する。葉月は手元のモニターに表示される数値を見て笑いが止まらなかった。

★
★
★
★

「これは、どういう事ですか。処刑ではないのですか。乳首を切除なんて、こんな残酷な事、許されるわけがない」

強い口調で男がメイドに詰め寄っていた。隣の女も口に手を当てて、モニターにアップで映されているゆかりの涙と鼻水で汚れた顔を見て震えていた。

ここは、会場を見下ろせる特別室の中だった。正面の大きな窓からは処刑場が良く見渡せ、その横の大型モニターには、鮮明な画像が映し出され処刑の細かな部分まで余すところなく観察出来るよう配

慮されていた。まさにＶＩＰ用の観覧席である。

「あんなに泣いているゆかりを可哀想と思わないのか。そのゆかりを更に痛め付けるなんて人間のする事じゃないっ」

男の興奮は収まらないがメイドは落ち着いたものだった。

「お金を積まれて、元自分達の娘の処刑を見に来るあなた方も人間とは思えませんがね。それに、あなた方は知らないでしょうが、これはあの６９番のメス奴隷本人が望んでいる事、最後くらいは娘の好きにさせてあげてはどうですかね」

「望んでいる？そんな訳がない。泣いているじゃないか」

「仕方ありませんね。これは６９番が告白している映像です。６９番はすぐに四肢を切断されてしまいましたので、手紙ではなく動画でですがご覧になって下さい」

メイドは、ＤＶＤをセットするとモニターにゆかりの顔が大きく映し出された。

「私は渡邉ゆかりという名前でした。今はメス奴隷となりましたので６９番と呼ばれています。ゆかりは小さい時からマンコ痛め付けるのが大好きでした。自分で色々マンコを自虐していましたけど、一人で調教するには限界があります。そこで、メス奴隷になる事にしました。メス奴隷は、いつか処刑される運命です。その時に私のマンコを徹底的に壊して処刑して貰うのがゆかりの夢です。ああ、早くマンコを壊して貰いたい。そればかりを考えて、毎日マンコ調教してもらっています。あっ、もちろんこれは私、６９番渡邉ゆかり本人が思っている事です。強迫されたり強制されて言っているわ

けではありません。渡邉ゆかりは本当にどうしようもないド変態マゾなのです。どうぞ蔑んで笑って下さい。ゆかりは、そうされる事で興奮してマンコ濡らしてしまいます」

ゆかりは、はっきりした口調で述べていた。男と女は、口を開けたまま固まっていた。

★　★　★　★

処刑場の中央にゆかりの乳首を切除する権利を手に入れた女が興奮した顔で立っていた。

「葉月様、こんな機会を与えて頂きありがとうございます。私、一度処刑してみたかったんです」

女は葉月に礼を言い、用意されている器具に目を向けた。

「それでは、もう一つの乳首を切除するのは６９番のメス奴隷の元クラスメイトです。美しい友情ですね。皆様、拍手でお迎え下さい」

沙也加が彩音の首輪の鎖を引き、行きますよと歩き出す。周りの観客から嵐のような拍手が巻き起こり彩音を包み込んだ。

・・えっ、えっ？・・

彩音は訳がわからず沙也加に鎖を引かれて、閉じられない脚でヨタヨタと歩いていた。そして、ゆかりの前に立つ。逆さに固定されているゆかりからは、彩音の錘を吊り下げた性器が丸見えだった。ゆ

かりが自分の性器を見ているのに気付いた彩音は、腰を前に突き出し、ゆかりに自分の性器がよく見えるようにしていた。

・・私も、渡邉さんと同じです。私が渡邉さんと、お友だちになりたかったのは、きっとこういう事なんですね。渡邉さんは、一人じゃないですよ。私も同じ変態マゾです・・

涙を流して泣いているゆかりが、嬉しそうに頷いたように彩音には見えた。二人の間で確かに気持ちが通じたと彩音は感じていた。しかし、そんな二人の感情など気にもせず沙也加が彩音の口枷を外し、口に細い物を咥えさせる。

「ほら、これをしっかり咥えなさい。あなたはまだ歯はあるのでしょう」

もちろん、歯を抜歯されているゆかりと違い、まだメス奴隷ではない彩音には当然歯は全部揃っていた。彩音が、口に咥えさせられた物を、よく見るとそれは鋭く長い針だった。

「これで６９番の乳首を貫通させなさい。さあ、早く。お客様が待っていますよ」

「ううっ」

彩音はゆかりの前に跪くと針先をゆかりの乳首に当てる。そして、しっかりと針を咥えて力を込めていった。

プツッ

「いだあぁぁっ」

ゆかりの乳首に針が刺さった感覚がダイレクトに彩音に伝わる。彩音がゆかりの乳首に針を刺したのを見た隣の女も、ゆかりの乳首に針を刺していた。そして、彩音は更に力を入れる。

プツゥッ

「ひぎいいいいっ！」

ゆかりの乳首の反対側へ針先が突き抜けていた。ゆかりは神経の集まっている乳首を針で貫通され号泣しているが、一本程度で終わるわけがない。彩音は二本目の針を咥えさせられ、またゆかりの乳首を針で貫通させた。隣の女も、どんどんゆかりの乳首に針を貫通させていく。ゆかりの左右の乳首はたちまち針山になっていった。

「う、う、う……」

ゆかりは呻き声をあげているが、彩音の口に次にゆかりの乳首を痛め付ける細いパイプのような道具が咥えさせられた。

「強く噛むと使えるようになるから、それで６９番の乳首を痛め付けなさい。さあ、早く」

沙也加に強い口調で命令され彩音は咥えさせられた物を強く噛む。すると、カチッという音がしてパイプの先に青い炎が噴き出した。

「そのバーナーで６９番の乳首を黒焦げにしてあげるのよ。炭になるまで焼いてあげなさい」

「ううっ……」

彩音はさすがに躊躇していたが、隣の女はゆかりの乳首をバーナーの炎で炙り始めていた。

「ぶひいいいいーーーーっ！！」

絶叫するゆかりの乳首を隣の女は楽しそうに焼いていく。彩音はゆかりの苦しむ姿を見て震えていた。

「あなたが早く焼いてあげないと、６９番は余計長く苦しむ事になるわよ」

残酷に言い放つ沙也加の言葉で彩音もゆかりの乳首に顔を近付け焼き始めた。彩音の鼻腔にゆかりの乳首が焼ける臭いが入ってくる。

「ひぎいいいいーーーーっ！！！」

唯一動かせる頭をぶんぶんと激しく振り苦しむゆかりの乳首が黒焦げに焼かれていく。そして、一刻の後、ゆかりの乳首は完全に燃やされ炭になっていた。次に彩音は口にカッターを咥えさせられる。

「さあ、それでは最後にもう使い物にならない６９番の乳首を切除しましょうか。今なら６９番も苦しまずに済むかも知れませんよ」

乳首を燃やされ失神したゆかりを見て、沙也加が残酷に命令する。彩音も、そうかも知れないとゆかりの乳首にカッターの刃を当てる。しかし、両腕を拘束されている彩音は、口だけでは上手くゆかりの乳首を切除出来ない。隣の女は片手でゆかりの乳首を摘まみ、乳首の根本にカッターの刃を当てると、そのままスパッと乳首を切断した。

「ぶぎぃぃぃぃーーーーっ！！」

その激痛にゆかりが覚醒し絶叫する。彩音は何度も何度もゆかりの乳首を切りつけているが、まだ切断出来ずにいた。

「いだあぁぁぁーーーーっ！！」

絶叫するゆかりに彩音は震えながらゆかりの乳首を切り続けた。そして、ようやく3分の2程度の切断に成功する。ゆかりの乳首がぶらーんと垂れ下がる。ここまでくれば後は簡単だった。拡がっている切断面に刃を入れ前後に動かし切り裂いていく。そして、ゆかりの乳首は切断され、ポトリと地面に落ちた。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

両乳首を切除され号泣するゆかりの姿に観客席から歓声が上がっている。彩音は、また口枷を嵌められ鎖を引かれて観客席に戻ると拍手で迎えられていた。

２４、ゆかり尿道責め

２４、ゆかり尿道責め

「もう、ゆかりを楽にさせて下さい。これ以上ゆかりの苦しむ姿を見ていられない。お金は要らないですから、もう帰らせて下さい」

男がメイドに懇願し、女も涙の溜まる目でメイドを見るが、メイドは冷たく言い放つ。

「あなたたちは６９番の元とはいえ親である訳でしょう。ならば、最後まで見届ける義務があると思いませんか。６９番がここまでになってしまったのは、自分たちに責任があると思いませんか。あなたたちが６９番の性癖に気付いていれば、６９番はまだ普通の生活を送っていたでしょうね。その性癖を排除するのではなく認めてあげればですけどね。葉月様は、あなたたちの責任を問う為にも、ここに招いたと思いますよ。しっかりと娘が残酷に性器処刑される最後の姿を見届けて、親としての務めをはたしなさい。ほら、いよいよ６９番のマンコが破壊されていきますよ。刮目しなさい」

男と女は、メイドの言葉にショックを受けながら窓からゆかりを見る。鮮明に拡大され映し出されているモニターは怖くて見る事が出来なかった。完全に拘束されているゆかりは、口も塞がれようとしているところだった。

★　★　★　★

・・渡邉さん、口も塞がれちゃう。もう救いを求める事も、許しを乞う事も出来ない。このまま渡邉さんはマンコを処刑されて、絶命するんだ・・

彩音は、ゆかりの事を考え恐怖で体の震えが止まらなかった。しかし、その反面、ゆかりの性器が間違いなく確実に壊されていくという事実に、早く始めて欲しいと期待してしまっている自分がいた。

・・あの渡邉さんのマンコ、本当に壊される。どんな風に壊されるの。早く観てみたい・・

「あらあら、彩音ちゃん。興奮しちゃって可愛いわね」

その彩音の本心に気付いたように沙也加が呟く。

「あなたも相当な変態マゾなのね。それなら、もう少し調教してあげるね。調教されながら処刑を観るのは最高でしょう」

沙也加はスタッフに申し付け、再び機材と道具を運ばせた。彩音は、背中に頑丈な鉄パイプを背負わされ、そこから伸びる革のベルトで厳重に拘束されてしまった。彩音は、ピンと背筋を伸ばしたまま〝人〟の字型に完全に拘束されてしまう。

・・ううっ、私、何されるの？・・

彩音は不安で顔を強張らせていたが、その顔とは反対に性器は期待でぐっしょりと濡れていた。それを確認した沙也加は、笑みを浮か

べていた。

「錘が少なくて不満そうだから、もっとたくさん付けてあげるわ」

沙也加は、また釣り針に付いた錘を取り出すと彩音の乳首を摘まみ、プツッと突き刺し錘をぶら下げる。固定され前屈みになれない彩音の乳首が下に引き伸ばされ千切れそうになる。

「ふぐうぅぅぅっ！！」

彩音は塞がれた口で絶叫し、涙と鼻水が流れ落ちるが沙也加はかまわず錘を釣り針でぶら下げていく。彩音は、乳首に３個ずつ錘を下げられ号泣していた。後から付けられた錘は一つ４００グラムあるため、彩音は乳首に１キロ近い錘を下げられていることになる。彩音は千切れそうな乳首の激痛に号泣しているが、それだけでは当然終わらなかった。

「さあ、あなたのお股にももっと錘を下げてあげるね」

嫌々と必死に首を振る彩音の小陰唇に沙也加は釣り針で錘をぶら下げていく。

プチッ、プチッ、プチッ、プチッ、プチッ、プチッ、プチッ、プチッ

「ふぐうぅぅーーーっ！」

新たに大量の錘をぶら下げられ彩音の小陰唇はびろーんと激しく伸び、千切れそうであった。彩音は涙と鼻水を大量に流し号泣していた。

「あらあら、凄い伸びるわね」

沙也加は、そう言いながら彩音の小陰唇を触っていたが、彩音が性器を濡らしている事に気付く。

「こんな事されてマンコを濡らしているなんて、あなたも６９番と同類ね。あなたも本当は６９番みたいにマンコを壊されたいんじゃないの。６９番と一緒にマンコ壊してあげましょうか」

彩音は思わず首を縦に振りそうになって、慌ててこらえていた。まだ彩音の中にわずかに残っていた理性が、この場での処刑を拒否していた。

・・処刑は最後の手段だから、まだ早いよ。もっとマンコ痛め付けてから……。だって、渡邉さんの日記に書いてあった事、まだ全部やってない・・

彩音は、最後には今目の前で処刑されるゆかりのように自分も処刑されたいと思ってはいたが、まだ時期尚早だと冷静に判断していた。

「残念ね。それじゃこれを付けてあげるわ。どこに付けるか分かるわよね」

沙也加は一番大きな錘を手に持ち、彩音のクリトリスに有無を言わせず突き刺した。そして、錘から手を放す。

「ふぐうぅぅーーーーっ！！」

彩音のクリトリスが引き千切れそうなほど伸ばされ、彩音は絶叫する。

「いい格好ね。本当はこのまま処刑したいところですけれど、一応あなたはゲストなので我慢するわ。ほら、６９番のマンコが壊されていきますよ。しっかりと見ておきなさい」

沙也加の言葉通り、葉月は大量の線香に火を点けゆかりの性器を見つめ笑っていた。

★　★　★　★

「今度は何をするんですか？あんなに大量の線香を持って……」

男は震える声でメイドに尋ねていた。

「あれは葉月様のお好きな責めですよ。まだ、破壊はしないようですね。もっと痛め付けてからとお考えなのでしょう。マンコを痛め付けられる事があのメス奴隷、６９番の望みですからね。優しい葉月様は、その願いを叶えて差し上げるつもりなのでしょうね」

「優しい？ゆかりのあそこを痛め付けようとする人間が優しい訳がないでしょう。もう早く楽にしてあげて下さいっ」

今度は女の方が叫ぶように大声をあげる。

「それは無理ですね。それに、そんな事をすればあの６９番にも恨まれますよ。先程観た通り、６９番自身が望んでいる事ですのでね」

男と女は口を開けたまま言葉がなく固まっていた。

★
★
★
★

葉月は火を点けた束ねた線香から1本取り出し、このメス奴隷の性器の何処に線香の火を押し付けようか思案していた。

「これは私が前に〝八千代〟というメス奴隷にやった軽いお仕置き。あのメス奴隷も処刑したかったけど、残念ながら叶わなかったわ。あなたには、その分楽しませて貰いますからね。まずはこの穴からいきましょう」

葉月は震えるゆかりの性器をくぱぁと開くと、ゆかりの小さな尿道口に狙いをつける。

ジュゥウッ！

「あづうぅぅぅっ！！」

尿道に線香の火を入れられてゆかりは絶叫していたが、葉月は続けて火の点いた線香をゆかりの尿道に押し込んでいく。2本、3本、4本……。ゆかりは涙と鼻水を流し絶叫していた。尿道にカテーテル等を入れた経験のあるゆかりだったが、さすがに火の点いた線香など入れた事はなかった。

・・あづいっ、あづいいぃいぃっ・・

ゆかりは尿道を襲う経験した事のない激痛に泣き叫んでいた。

・・私、本当にマンコ壊されているんだ。もう私のマンコ失くなるんだ。たぶん私、耐えられない。きっと、頭がおかしくなって処刑されるんだ。お父さんやお母さんや蜂須賀さんの見ている前で、無様にマンコ壊されて発狂して処刑されるんだ・・

ゆかりは、まだ性器処刑が始まったばかりだと云うのに、かつてない痛みに涙が止まらなかった。しかし、ゆかりが味わう苦痛はこんなものではなかった。ゆかりは、自慰の際の妄想の延長のように考えているが、実際の性器処刑がどのようなものかまるで分かっていない。モニターで八千代等、他のメス奴隷の処刑動画を観ていたが、それはあくまで他人。自分は観ているだけで痛くも痒くもなかった。だが今は本当に自分の性器が処刑されていくのである。他人事ではない。自分自身が、その地獄の苦痛を味わう番なのだ。ゆかりは自分でも思っている通り間違いなく発狂するだろう。もう、ゆかりがゆかりとしていられる時間は長くはないのである。

「さすがにもう入らないわね。まだ尿道を裂くには早いですからね。この尿道に入れた線香に火を点けて、他のところも焼いてあげるわ」

葉月はゆかりの尿道に入れた線香の束に点火すると、他の線香でゆかりのクリトリスに火を押し付ける。

ジュゥウッ！

「ひぎいぃぃぃぃっ！！」

ゆかりはまた絶叫するが、葉月はゆかりのクリトリスの頂点、側面、根元と線香の火を当て焼いていく。そして、次にはゆかりの膣に線香を突き入れようとして手を止めた。

「あらあら、こんなに濡れているんじゃ火がすぐ消えてしまうわね」

ゆかりの大量に粘液を分泌している膣を葉月は呆れたように眺め、ウェットティッシュできれいに拭き取っていく。そして、線香を1本ではなくまとめて掴むと、それをズボッとゆかりの膣に躊躇いなく入れてしまった。

ジュワァァッ！

「は、ぶうぅぅぅーーーっ！！」

画鋲と激辛香辛料でズタズタになっているゆかりの膣が線香の火で焼かれ、ゆかりは絶叫していた。その後も葉月は、ゆかりの膣前庭や会陰に線香の火を押し付けて楽しんでいた。

★　★　★　★

「私のあそこにも線香の火を押し当てて下さいっ」

苦しむゆかりの姿を涙を浮かべて観ていた女が叫ぶ。

「せめて私も、ゆかりが味わっている苦しみを少しでも味わいたい」

女は必死の目でメイドを見ていた。メイドはすぐに拘束台を用意させると女を大の字に拘束し、スカートと下着を脱がした。そして、開脚され固定された女の性器を眺め、線香の束に火を点けた。

「このような経験はあるのですか？」

「あるわけないでしょう。でも、あんなに苦しんでいるゆかりを見ると……」

「それでは、ショック死しないよう薬を討っておきましょう。あなたはゲストなのでね」

「ショ、ショック死？」

女は、ごくりと唾を呑み込んでいた。

「それほどの苦痛という事ですよ。では射ちますよ」

メイドは女の腕に注射針を射すと、ヂューッと薬剤を注入し、しばらく時計を見て時間を測った後、女の性器をくぱぁと開いた。

「それではいきますよ」

メイドは女のクリトリスに線香の火を押し当てていた。

ヂュウッ

「あ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

シャァァーーッ

女はクリトリスに線香の火を押し当てられ絶叫し尿を漏らしてしまっていた。メイドは続けて女の膣前庭と会陰にも同時に線香の火を押し当てる。女は無様に白眼を剥いて口から泡を吹き失神してしまっていた。

「参りましたね。この程度で失神して……。きちんと６９番の処刑を観させないと私が葉月様に叱られてしまいます」

メイドは女の頬を平手で叩き、目を覚まさせようとしている。男は、この女の凄惨な姿を見て硬直したように体が固まっていた。

・・ゆかりは、これよりもっと酷い事をされて処刑されてしまう。こんなもの観に来るんじゃなかった・・

男は、ここに来てしまった事を激しく後悔していた。

25、ゆかり膀胱破壊

25、ゆかり膀胱破壊

ゆかりの尿道に入れられ火を点けられた線香がだんだんと短くなってきていた。もうすぐ、火はゆかりの尿道の中に入っていくだろう。葉月はその間ゆかりの膣前庭や会陰や大陰唇にも線香の火を押し付けて楽しんでいた。

「あづっ、あづっ、あづうぅぅぅーーーっ！」

線香が短くなり火がゆかりの尿道の中に入っていく。ゆかりの尿道は線香の火でじりじりと焼かれていった。

「どう？おしっこの穴を焼かれるのは気持ち良いかしら」

葉月は絶叫し苦しむゆかりに話しかけるが、ゆかりはそれどころではなかった。ゆかりの尿道を焼かれ苦しむ姿は、そこかしこに設置された高解像度のモニターに鮮明に映し出され、後方の席のゲストにも楽しめるよう配慮されていた。

「あづうぅぅっ、だじげでえぇぇぇぇっ！」

ゆかりは涙と鼻水と涎で顔を汚し、全身汗まみれになっている。前方のゲスト席にはゆかりの尿道が焼ける異臭が漂っていた。

・・渡邉さん、本当におしっこの穴を壊されてる。凄い、凄いよ・・

彩音は自分の体の痛みも忘れ、尿道を破壊されるゆかりの姿から目が離せなかった。そのゆかりの尿道内の線香が燃え尽き、ゆかりには次の性器破壊の準備が始まっていた。号泣するゆかりの尿道に太いカテーテルが挿入されていく。そして、それは膀胱まで容赦なく突き入れられる。どうやら葉月は、まずゆかりの膀胱を破壊するつもりのようだ。ゆかりの尿道に挿入したカテーテル漏斗を取り付けた葉月は残酷に笑う。

「皆さん次はこの６９番の膀胱に熱湯を注いでいきます」

葉月はゲストへ説明すると、泣いているゆかりの前に銀のポットを持って屈み込む。

「ほら６９番、このぐらぐらと煮たった熱湯をあなたのおしっこの穴から中に入れてあげますよ。嬉しいでしょう。変態のあなたの事ですから、こんな事も妄想していたのではありませんか。あなたの妄想通り、本当にやられるのですよ」

葉月は笑いながらゆかりのカテーテルに取り付けた漏斗に、ドボドボと熱湯を注いでいった。カテーテルを通り、ゆかりの膀胱に熱湯が注入される。

「おっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

ゆかりは、カテーテルで膀胱に熱湯を注がれ絶叫し白眼を剥いて口からぶくぶくと泡を吹き無様に失神していた。ゆかりの体はびくびくと痙攣している。

「あらあら、失神しましたか。そんなに熱かったですか。もうこれで、あなたの膀胱は使い物にならないでしょうが、おしっこの穴と膀胱には、ここで止めを刺してあげますね」

葉月は、ゆかりの尿道からカテーテルを抜くと、細く長い銀色に輝くニードルを手に取った。何度も葉月の処刑を観に来ている観客から期待の歓声が上がる。もう、葉月がこれから何をするのか分かっているのだ。

「私は、これが好きなんですよ。葉月様は分かってらっしゃる」

「とうとう69番のメス奴隷、マンコ壊されていくのね。ここからが本番よね。楽しみだわ」

「おしっこの穴からの串刺し、良いわよね。あの69番、いいきみだわ」

「あの下腹部からニードルの切っ先が突き出るところが堪らないのよね」

観客たちは、これから起こる事に期待し、興奮していた。彩音は周囲の盛り上がりに、いよいよゆかりの処刑が本格的に始まるのだと感じ息を呑んでいた。葉月は、ゆかりの頬をパンパンと叩き無理矢理覚醒させる。ゆかりも周囲の盛り上がりを敏感に感じ、恐怖で顔を歪め泣いていた。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

「あなたのその泣き声も可愛くて良いけど、もう泣いてる余裕も失くなりますよ。これからは喉が渇れるまで絶叫して下さいね」

葉月は、ゆかりの性器をくぱぁと拡げ、膣前庭の尿道口に狙いをつけニードルをズブズブと挿入していく。そして、ゆかりの膀胱の括約筋にニードルの先端が当たった手応えを感じた。

「さあ、６９番叫びなさい」

ズブゥゥッ！

葉月は、ニードルを根本までゆかりの尿道に押し込んでいた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

ゆかりが絶叫し、ゆかりの下腹部を突き破りニードルの先端が顔を見せていた。

「あばばばばばばばばっ、あっばあぁぁっ」

ゆかりは、先日処刑されたまどかと同じ声を上げていた。ゆかりの涙と鼻水と涎が滝のように流れ、ゆかりの顔を無様に汚している。

「いけない。私も興奮して忘れていたわ」

我に返ったように葉月はゆかりの近くにモニターの付いた機器を持ってくると、その機器から伸びるコードに付いているセンサーをゆかりの乳首を切断されつるぺたの胸に装着していく。そして、いくつかのセンサーがゆかりの胸に取り付けられた。すると、モニターには波形が映し出されていた。

「これは心電図よ。この波形が完全にフラットになるまであなたを

処刑するわ。お客様もあなたが絶命した事が分かるし、あなたも完全に絶命するまで処刑された方が嬉しいでしょう」

葉月は残酷に笑うと2本目のニードルを手にした。

「当然ですが、1本で終わりではありませんよ。普通3本は入れますが、69番あなたなら三倍の9本はいけそうですね。楽しみです」

葉月は、2本目のニードルをゆかりの尿道に突き刺していく。

「あばあぁぁぁーーーっ！」

ゆかりは唯一動かせる首を左右に振って泣き喚くが葉月は2本目も根本まで押し込んでいた。

プツウッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

2本目のニードルもゆかりの下腹部を破り、突き出ていた。

・・私、本当に串刺しにされてる。あの女の子と同じだ。私も、このあと頭が狂って絶命するんだ・・

ゆかりは確実に自分の終わりが近付いてくる恐怖に、もう発狂しそうであった。ゆかりの頭には、もう両親の事も、彩音の事も無かった。ゆかりが今感じているのは、ただ純粋な耐えられない激痛と、死の恐怖だけだった。

プツウッ、プツウッ、プツウッ、プツウッ！

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ、あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！！」

ゆかりの下腹部から次々にニードルの先端が顔を出す。ゆかりの細い尿道はとっくに裂け血が溢れ、膀胱もズタズタになっていた。それでも、葉月はゆかりの尿道にニードルを突き刺していく。

プツウッ、プツウッ、プツウッ！！

「あびゃびゃびゃびゃっ、だじげで……。だじげでぐだぢゃい。おねがいじまぢゅ、もおゆるじでぐだぢゃい」

「ふふふ、何を言っているのですか、６９番。排泄する所は壊しましたが、まだ肝心のマンコが残っているじゃないですか。これから、マンコを壊していくのですよ。これからが楽しいところではないですか」

葉月は、ゆかりの耳許で残酷に囁く。観客席も、これからゆかりの性器が破壊される期待で今まで以上に盛り上がっていた。ゆかりの下腹部からは９本の血まみれのニードルが突き出ている。それを見るだけでゆかりが、もう長くはない事が誰の目にも明らかだった。葉月はゆかりに取り付けた心電図のモニターを確認しながら急いで次の処刑を開始する。葉月は、銀色のハサミを持っていた。このハサミも葉月の考案で作成されたハサミで、刃が直線ではなく、ぎざぎざに加工されている。これは、挟んだ物をよく切る為ではなく、逆に切り難くするものだった。つまり、これで切ろうとした場合、切られた物はぐちゃぐちゃになるという事だった。葉月は、ゆかりの左の小陰唇を摘まみ、びろーんと伸ばす。ゆかりは、尿道から膀胱を串刺しにされ、腹を突き破られた激痛で、自分の小陰唇が引き

伸ばされ、これから切断されるなど想像もしていなかった。

「ふふふ、６９番。もうすぐ、あなたのマンコは無くなりますよ。嬉しいでしょう。あなたが、ずうっと妄想してオナニーしてきた事が現実になるのですよ。私に感謝しなさい」

葉月は、楽しくて仕方がないというようにハサミをジョキジョキと鳴らし大きく笑っていた。

26、ゆかり小陰唇切除

26、ゆかり小陰唇切除

開脚され逆さに固定されているゆかりの下腹部から9本のニードルが突き出ている。そして、葉月はゆかりの左の小陰唇を引き伸ばし、その根本にハサミの刃を当てる。

ジョキッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

ゆかりの小陰唇が切断されていく。観客の興奮も大きくなってきていた。

「やはり、この行為がないといけませんよね。無様に小陰唇を切られていくメス奴隷の姿が最高ですよ」

「まったく、あんなところを切られてどんな気持ちなんでしょうね。メス奴隷だから嬉しいのでしょうかね」

「あははっ、あのメス奴隷、泣き叫んでいい様ね。あのハサミ、ぐちゃぐちゃに切るから楽しいわね。ふふ、もっと痛め付けられて苦しむ姿を見てみたいわ」

「ビラビラ切りは良いわよね。メス奴隷の大切なところ失くなって、

無様で最高だわ」

・・渡邉さん、とうとうあんなところも切られちゃう。おしっこの穴も壊されて、お腹から針が何本も出てるし、渡邉さん、狂ったみたいに泣いてる。どれだけ痛くて苦しいの・・

彩音は最前列でゆかりの姿が間近で見えるため、そのゆかりの苦痛や苦しみが手に取るように分かり、震えていた。けれど、それとは引き換えに観客席は大いに盛り上がっていく。その観客の興奮が乗り移ったかのように葉月はゆかりの小陰唇を容赦なく切断していった。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、だじげでぐだぢゃいいいいっ、ゆるじでえぇぇぇっ！！」

しかし、葉月はハサミを握る手を休めない。

ジョキーンッ

「あんっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

ゆかりの小陰唇がついに完全に切断され、葉月はそれを液体の満たされた小瓶に入れていた。そして、反対の小陰唇も引き伸ばしハサミを当てる。

「さあ、今度は反対側も切っていきますよ」

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

夥しい涙を流し、ゆかりは小陰唇を切断されていく。

「ゆるじでぐだぢゃいっ、だれが、だじげでえぇぇぇっ！！！」

ジョキーンッ！

無様に泣き叫び許しを乞うゆかりの小陰唇が切断された。ゆかりは左右の小陰唇を切断され、哀れに性器から血を流し、体はぶるぶると震えていた。

「乳首、ビラビラときて次にどこを切断されるか、もう分かると思うけど、すぐに切断してしまっては勿体ないから、そこを痛め付けてから切断してあげるわね。おっと、その前に止血もしておかないとね」

止血といっても普通に止血する訳ではない。葉月は真っ赤に焼けた鉄棒で、ゆかりの小陰唇を切断され出血している性器を焼き潰すつもりだった。

「マンコ焼いて血を止めてあげるからね。感謝しなさい。ほら、お礼を言いなさい」

自分で小陰唇を切断しておきながら葉月は、ゆかりに礼を言えと命令する。

「ありがどうごじゃいまず。ううぅっ」

ゆかりが泣きながら葉月に礼を言うと、葉月はゆかりの性器に焼けた鉄棒を二本、小陰唇の切断面に押し付けた。

ジュウウウウッ！！

「あづううぅぅーーーっ！！！だじげでええぇぇぇーーーっ！！！」

ゆかりがまた絶叫し性器からは煙が上がり、異臭が漂う。葉月は、そのままゆかりの性器に鉄棒を押し当て小陰唇の切断面が完全に焼けたのを確認し鉄棒を離した。

「さて、止血も終わったから次にいくわよ」

葉月は直径1ミリ、長さ10センチ程の針を手に取る。その針には細い電線が半田で溶接されており、その電線はポータブル電源に接続されていた。葉月は、その電線の付いた針をゆかりのクリトリスにプツッと刺した。

「あひぃぃぃーーっ！」

ゆかりが悲鳴を上げるが葉月は嘲笑うように針を押し込みながら、ゆかりに告げる。

「クリトリスにピアス入れてたあなたが、これくらいでは満足しないでしょう。もっと深く突き刺してあげるから」

葉月は、ゆかりのクリトリスの頂点からゆかりの中へ針を深く打ち込んでいく。もう5センチ以上ゆかりの中に深く打ち込まれていた。

「いだいいいぃーーっ、ふかい、ふかい、ふがいよおぉぉぉーーっ、もお、だじげでええぇぇぇーーーっ！！」

ゆかりは泣き叫ぶが、葉月は１０センチの針を根本までゆかりの中に突き刺してしまった。そして、同じく電線の付いた針を、今度はゆかりの会陰に当て容赦なく突き刺していった。

「いだあぁぁぁーーっ、いだいよおぉぉぉーーっ、もお、ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃーーっ！！」

泣き叫ぶゆかりの会陰に葉月はまた根本まで針を突き刺していた。二本の針をゆかりの性器に深く突き刺した葉月はポータブル電源のスイッチを入れる。

「はぶぶぶぶぶぶぶぶぶうっ、ぶっぶうっ」

性器に通電され、ゆかりの体がぶるぶる震え、ゆかりは意味不明の言葉を叫んでいた。葉月は、楽しそうに電流を強くしていく。

「はぶぶぶぶぶぶぶぶぶうっ、じ、じぬうぅぅっ」

ゆかりは開いた口から舌を突きだし、苦悶の表情で叫んでいるが、葉月は楽しそうに苦しむゆかりを眺めていた。

「ふふふ、まだ殺しはしないから大丈夫よ。ぎりぎりまで責めてあげるけどね」

葉月はどんどんダイヤルを回し強くしていく。ゆかりの体は遠目で見てもブルブルと激しく震えているのがわかった。

「あっ、ばあぁぁぁぁーーっ、あばばばばばばばばっ、あっばぁぁぁーーーっ！！」

絶叫するゆかりの姿に観客席は大いに盛り上がっていた。

「あははっ、マンコに通電されて、あんなに体震えてるわ。おもしろーい」

「マンコから煙出てるんじゃない。マンコ通電されて焼けてるよね、あのメス奴隷のマンコ。早くもっとぐちゃぐちゃに壊して欲しいわ」

「ああ、ホントに無様でいい様だな。あのメス奴隷がマンコ壊されて絶命する姿が早く見たいね」

「この後、何やられるのかしら、あのメス奴隷。もう、楽しくて興奮が止まらないわ」

・・大丈夫なの、渡邉さん……。ううん、だ、大丈夫なわけないよね。渡邉さん、処刑されちゃうんだから……・・

彩音の目の前でゆかりは性器に通電されブルブル体を激しく震わせている。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼうぅぅぅぅぅっ」

ゆかりは大量の涙と鼻水を流しながら、白眼を剥いて口からブクブクと泡を吹き出していた。そのゆかりの姿に、観客席はさらに盛り上がる。観客のほとんど全てが、このままゆかりが性器を壊され絶命する姿を早く見たいと期待していた。

★
★
★
★

「ううっ、もうここまでしたのですから許して貰えませんか。もう、ゆかりのあそこはぐちゃぐちゃで使い物になりませんよ。だから、許してあげて下さい」

「お願いします。ここまですればもう十分でしょう。ゆかりを楽にさせてあげて下さい。これ以上観ていられない」

男と女がすがるように隣にいるメイドに懇願するが、メイドは冷たく言い放つ。

「何を言っているのですか。この観客席の盛り上りが分からないのですか。皆さん、あの69番がマンコを壊されて絶命する姿を期待しているのですよ。これからが、もっと楽しくなるところではありませんか。膣に子宮が残っていますからね。69番も、まだ発狂せずに頑張っていますよ。見ているだけのあなた方が甘えた事を言ってはいけませんね。ほら、マンコ通電は終わりましたよ。これから葉月様はクリトリスを壊していくでしょう。あなたたちもしっかり目を開いて見ていなさい」

メイドは告げると丁度葉月が針を抜き、細いハサミを持ったところだった。

シャキッ、シャキッ、シャキッ、シャキッ

「いだあぁぁぁーーっ、いだいよおぉぉぉーーっ、だじげでえぇぇぇぇーーーっ!!」

また、ゆかりが絶叫するが葉月は、ゆかりのクリトリスの周囲を覆う包皮をハサミで切除していた。そして、ゆかりのクリトリスを剥き出しにすると媚薬を塗り強制的に勃起させていた。いよいよ、ゆかりのクリトリスの最後の時が訪れる。そのゆかりの姿を見ながら正直、ゆかりの性器が壊されていく事に期待してしまっている彩音がいた。

27、壊されていくゆかり

27、壊されていくゆかり

すでに尿道と膀胱、小陰唇は破壊され切除されたゆかり。次に狙いを付けられたクリトリスが、これから壊されていく。葉月は木綿の糸にアルコールを染み込ませ、それを勃起させられたゆかりのクリトリスにぐるぐると巻いていく。そして、先端を蝋燭の芯のように立たせると、そこでプチッと切った。

「相当変態の69番だから、これからやられる事も妄想していたでしょうね。クリの直焼き、楽しみでしょう」

葉月はゆかりのクリトリスに巻いた糸の先端に点火した。アルコールが染みた糸がボウッと燃え上がる。

「あっ、づううぅぅーーっ！あづうっ、あづうっ、あづいぃぃぃーーーーっ！！」

ゆかりのクリトリスで青い炎がゆらゆらと燃えている。ゆかりはクリトリスを直に炎で焼かれ絶叫していた。

「ひぎぃぃぃーーーーっ、だじげでえええぇぇーーーーっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅっ、だれかもうだじげでえええぇぇーーーーっ！！！」

ゆかりの激しく泣き叫ぶ姿に観客席からも、おぉぉっという歓声が上がる。

「あのメス奴隷、クリトリス燃やされてるのか。良いね、興奮する」

「クリトリスの直焼き、私もやってみたいわ」

「あはは、クリが燃え上がってるよ。燃やされるメス、おしっこの穴壊されてなければ潮吹いていたんじゃないの」

「あの敏感なところを容赦なく燃やされてて良いわね。炭になるまで燃やして欲しいわ」

・・渡邉さん、あんなところも燃やされている。渡邉さん、熱くて痛くて苦しそうだよ。で、でも嬉しそうにも見えるのは私の気のせいなの・・

そう思う彩音の性器も太ももの内側を濡らす程、びっしょりと濡れていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーっ、あづぅっ、あづいぃぃぃーーーーっ！！」

哀れに泣き叫ぶゆかりの股間で青い炎が揺れている。ゆかりのクリトリスが焼ける異臭が風に乗って彩音のもとにも流れてきた。

・・渡邉さんのクリトリスが焼ける臭いだ。渡邉さん、もう、クリでオナニーする事も出来ない……。ううん、オナニーどころじゃないよ。渡邉さん、もうすぐ本当にマンコ壊されて絶命させられるんだ・・

彩音の目にも、もうゆかりの性器処刑が佳境を迎えている事は理解出来た。

★　★　★　★

ゆかりのクリトリスを燃やされて泣き叫んでいる姿を見て、男と女は口を開けたまま固まっていた。

「ゆ、ゆかり……」

二人の口から同時に声が漏れる。しかし、その後に続いた言葉は隣にいるメイドの意表を突くものだった。

「ゆかりが望んでいるのなら、徹底的にゆかりのあそこを壊して下さい。ここまでされたら、もうあの子は助からない。それなら、あの子に後悔が残らないようにしてあげて下さい」

「ゆかりは真面目で大人しい子だった。そのゆかりの最後の望みなら叶えてあげたい」

二人の言葉にメイドは驚いていたが、口許に笑みを浮かべる。

「正直に言ったらどうですか、あなたたちも69番の処刑に興奮していますね。69番がマンコ壊されていく姿を見たくて仕方ないのでしょう」

メイドは、部屋にいる男のスタッフに目で合図する。スタッフは女

を立ち上がらせスカートを捲る。すると、股間には恥ずかしい染みが拡がっていた。

「濡れていますね。別に恥ずかしがる事はないですよ。そちらの方はズボンを穿いてても分かるほど股間が膨らんでいますね。６９番がマンコ処刑されるのを見て勃起しているのでしょう。６９番は、あなたたちの娘。あなたたちの血を受け継いでいるのですからね。あなたたちが、マンコ処刑を見て興奮するのも当然。６９番を見れば、あなた方も同じ性癖を持っているのが容易に想像出来ますよ。正直に自分達の娘がマンコを壊され泣き叫ぶ姿に興奮したと言いなさい。まったく、この親にして、あの娘ありですね。でも、あの６９番はあなたたちの最高傑作ですね。この会場を見れば分かるように、これだけ大勢の人間を興奮させるメス奴隷は早々居ませんよ。あの、葉月様も気に入ってるようですし、あなたたちも誇りに思って良いと思いますよ」

モニターを見ながら話していたメイドが、ほら外を見なさいと二人に告げる。ゆかりのクリトリスに巻かれていた糸が燃え尽き、黒焦げになったゆかりのクリトリスがいよいよ切断されるところであった。葉月は銀色に光るメスを握りしめ笑みを浮かべている。ゆかりは大声で泣いていた。

「まず、縦に割いてみましょうか。レアではないでしょうね。ミディアムか、ウェルダンまで焼けていますかね。くくく」

葉月は笑いながら、ゆかりのクリトリスの頂点にメスを当てる。そして、躊躇なくゆかりのクリトリスを縦に切り裂いた。

「あびゃあぁぁぁぁーーっ！！」

クリトリスを真っ二つに切り裂かれゆかりが絶叫する。

「あらあら、絶叫するって事は完全に焼けてなかったようね。残念。でも、それならクリトリスを切除する時も相当の激痛でしょうね。楽しみだわ」

葉月は泣き叫んでいるゆかりのクリトリスの根本にメスを当てる。

「では、いきますよ　６９番」

葉月はゆかりのクリトリスを摘まむと根本にメスの刃を入れ、グリッと抉るようにメスを動かす。

「あぶうぅぅーーーーっ、だじげでえぇぇぇーーーっ！！」

プツッ

絶叫するゆかりのクリトリスは葉月にグリグリと残酷に抉り取られていた。葉月は、ゆかりの切断した左右の小陰唇を入れた小瓶に、たった今切断したゆかりのクリトリスもポトッと入れる。ゆかりの外性器は、とうとうクリトリスも小陰唇も切除され無惨な姿を晒しているが、葉月はまたゆかりの性器に焼けた鉄棒を押し当てる。

ジュュュュッ

「あびゃあぁぁぁぁーーっ！」

「いちいち喚かないの。止血してあげているのだから感謝しなさい」

葉月は笑いながら、ゆかりの性器を見つめている。彩音は、クリト

リスも切除されてしまったゆかりを見て震えていたが、もう股間から太ももまで光って見える程激しく濡らしてしまっていた。彩音は隣でゆかりの処刑を見ている沙也加に目を向ける。

・・私のマンコ、もっと虐めて下さい・・

彩音は目で沙也加に訴えるが、沙也加は佳境に入ったゆかりの性器処刑に夢中で、彩音の懇願する視線には気付かなかった。

・・あとはマンコの穴と子宮ね。楽しくて興奮してくるわ・・

沙也加も次に壊されるゆかりの性器の部分を想像し股間を濡らしていた。そして、葉月はマイクを握ると観客席に向かって声をあげる。

「皆さま、お待たせしました。これから、６９番のマンコの穴と子宮を壊していきます。それから、只今切り取った６９番のビラビラ２枚とクリトリスの３点セットの瓶詰め、来場の皆さまに販売したいと思います。お持ちの端末から希望金額の入力お願いします。最高価格の方にお譲りしたいと思います。ホルマリンで浸けてありますので長時間観賞して楽しめると思いますよ」

おおっと観客席からどよめきが起こり、葉月の見ているモニターに表示されている金額がどんどん更新されていく。その数字を見て葉月は笑いが止まらなかった。

・・これなら、この６９番のマンコの型も売れそうね。マンコの穴の中も型とってあるし、シリコンで加工すればこの６９番のマンコそのものが再現出来るわね。リアルオナホとして売れば需要があるかもしれないわね・・

葉月は舌なめずりすると再びマイクを口に当てる。

「それでは、引き続き69番のマンコを処刑していきます。3点セットの入札は、このメス奴隷が絶命した時点で締め切らせて頂きますので、それまでよろしくお願いします」

葉月はマイクから銀色に輝くメスに持ち変えると、ゆかりの膣に深くメスを差し込んだ。

ツプッ……

そして、ゆかりの膣の最奥までメスを入れニヤリと笑う。いよいよ、ゆかりの膣の最後がやってきた。ゆかりは、これから膣を破壊される。これまで、ゆかりに快楽を与えてきた膣が消滅する。そしてもう、ゆかりがこの世で息をしていられる時間も残り少なくなっていた。

28、膣を破壊されるゆかり

28、膣を破壊されるゆかり

ツプッ

ゆかりの膣にメスが差し込まれた。そのまま最奥までメスは入れられ、メスの刃がゆかりの膣壁に向けられる。尿道側の膣壁だ。ゆかりはこれから膣壁を切開される事も分からず泣いていた。

「ひひひひっ」

葉月は不気味な笑いを上げ、メスに力を入れ、メスを動かす。

ツゥゥーーーッ

「ぶびゃあぁぁぁぁーーーっ、いだあぁぁぁぁーーっ!!!」

葉月は、ゆかりの膣の最奥から膣口まで一直線に深く切開していた。当然、ゆかりの膣内部Gスポットも真っ二つに切断される。

「はぶうぅぅーーっ、はぶぶうぅぅーーっ」

ゆかりは膣を切り裂かれる激痛に絶叫しながら、Gスポットを切開され信じられない事に絶頂を迎えてしまっていた。ゆかりの顔は涙と鼻水で汚れながら一瞬恍惚の表情をしていた。四肢が切断されて

いなければ足の指先までピーンと伸ばし、尿道が壊されていなければ大量に潮を吹いていただろう事は、誰の目にも明らかだった。

「ほら、６９番。今の気持ちをお客様に正直に言いなさい」

ゆかりは葉月の命令が聞こえないのか、呻き声を上げ号泣している。葉月は、泣いているゆかりの頬を平手でパンパンと打っていた。

「私の命令が聞こえないの、６９番。今の自分の気持ちを言いなさいっ」

再び葉月が命令する。ゆかりが口を開けると葉月がマイクをゆかりの口に当てる。

「私は今……。女の子の大切なオマンコの穴を……。切り裂かれています……」

ゆかりはここまで言うと、大きく泣き崩れた。それは次の自分の気持ちを言う事をためらったように見えた。

「私はオマンコの穴を切開されて気持ちよくなっています……。どうしようもなく頭のおかしいメス奴隷です。葉月様、どうか私のオマンコを徹底的に破壊して下さい。私のオマンコが完全に消滅するまで容赦なく処刑して下さい。お願いします」

ゆかりは泣きながら、それでもはっきりと言い切っていた。葉月は、笑いながらまたゆかりの膣にメスを入れ、今度は切開した尿道側の反対、会陰側の膣壁にメスの刃を当てる。そして、メスに力を込めた。

ツウゥゥゥッ

鋭いメスがゆかりの膣壁を滑るように切り裂いていく。

「ひぶぅぅぅーーーっ！！！もう、いやあぁぁっ。おねがいじまぢゅ、もう楽にじでぐだぢゃいっ。もお、ごろじでえぇぇぇっ」

ゆかりはまた膣壁を切開され今度はもう楽にしてと惨めに懇願していた。当然だ、膣を切開されているのだ。それほどの激痛という事だ。葉月は、そんなゆかりの無様な姿を見て冷笑していた。

「Gスポットを切開されてイッてしまう変態メス奴隷が何を言っているのです。まだまだ、あなたのマンコ壊していきますよ　あなたも本心では嬉しいはずですよ」

葉月は三度（みたび）、ゆかりの膣にメスを入れていた。そして、メスの刃を右の膣壁に当て切り裂いた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

葉月はまたゆかりの膣の最奥から膣口まで一直線に膣壁を切り裂いていた。

「さすがに出血が凄いわね。せっかく切り裂いたのに焼き潰して血を止める訳にはいきませんからね。ここは急いだ方が良いでしょう。まだ死んでは困りますよ、６９番」

葉月はチラッと心電図のモニターを確認し、ゆかりの膣にまたメスをツプッと入れた。そして、今度は左の膣壁にメスの刃を当てる。

ツウゥゥゥッ

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

「相変わらずいい声で叫ぶわね。興奮してしまうわ。それに、そんなに心配いらないわよ、あなたが生きているうちにマンコの穴は壊してあげるから」

葉月は残酷に嬉しそうに笑うと、またゆかりの膣にメスを入れ今度は膣壁の最奥に刃を当てる。そして、ぐるりとゆかりの膣壁の最奥の周辺を円を描くように切断した。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ、あっびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

ゆかりが膣を四等分に切り裂かれ、さらに膣奥をぐるりと切断され狂ったように泣き叫んでいる。その、ゆかりの姿は観客席の興奮を煽っていた。

「あのメス奴隷、マンコの穴を切り裂かれてゾクゾクするわね。私もめちゃくちゃに切り裂きたいわ」

「メスの大事な穴に、あんな事されて最高だわ。もっと酷い事してくれないかしら。期待しちゃうわね」

「ああ、もう駄目。我慢出来ないわ。あのメスの不細工で哀れな顔見ていると、もっともっと痛め付けたくなってくるわね」

「葉月様、また別の器具持っているけど、まだあのメスのマンコの穴、許すつもりはないみたい。これ以上、マンコの穴壊されるなん

て、あのメス奴隷もう死ぬわね。楽しみだわ」

先端の曲がったプライヤー状の器具を持った葉月は、ゆかりの血塗れの膣を見て興奮した顔をしていた。

・・あんな工具で渡邉さん、これ以上なにされるの。マンコからあんなに血を流して、もう渡邉さん死んじゃうよ・・

彩音も、ゆかりの命がもう長くないと感じていた。そして、ゆかりが絶命する姿を見逃さないように目を皿のようにして葉月の一挙一動を見つめていた。

★
★
★
★

男と女は、もう椅子に座っている事が出来ず立ち上がり処刑場を見下ろす窓にかぶり付いて、ゆかりの処刑を見ていた。その息は荒くなっている。

「どうです。あなたたちも気が付いたでしょう。あの６９番のメス、あなたたちの娘はマンコの穴、Ｇスポットを切開されてイッていましたね。救いようのない変態マゾですね。あなたたちも、もう我慢出来ないのではありませんか。性器を調教して貰いたいなら、何時でも承けたまりますよ」

男と女は、メイドの言葉に振り返る。その二人の顔を見てメイドは瞬時に彼らの気持ちを理解した。そして、スタッフに命令する。すぐに大きな枠のような拘束具が二つ運ばれてきて、男と女は全裸にされる。全裸にされた男と女は枠型の拘束具に付いている鎖の手枷、

足枷で〝X〟字に拘束された。男と女は特に抵抗する事なく、スタッフにされるがままに拘束されていた。

「あなたたちはゲストなので性器処刑はしませんよ。でも、あなたたちのチンポとマンコには相当の事をさせて頂きますので満足出来ると思いますよ。安心して下さい。それで、お二人は性器調教の経験はありますか」

メイドの問いに男と女はぶんぶんと首を横に振っていた。

「初調教ですか。それでは、口も塞がせて貰いましょうか。あまり絶叫されても、この部屋の中では野外と違いうるさいですからね」

メイドの指示で、すぐに男と女の口腔に男根型の性具が突き入れられ、喉奥まで挿入されるとガムテープで口毎グルグルと巻かれ抜けないように固定された。

「目は塞ぎませんから心配しないで下さい。あなたたちは、自分の娘がマンコを処刑される姿を見ながら、チンポとマンコを調教されるのです。滅多に出来ない経験ですよ。こんな状態なのにあなたのイチモツは天を向いて硬くそそり立っているし、こちらのマンコは洪水のように濡れていますよ。このチンポとマンコから生まれたのが、あの６９番のメスですからね。あんな異常な変態マゾに育ったのは当然ですね。さあ、それでは基本の鞭からいきますか。まずチンポとマンコに１０００発くらい鞭を打ち込んでいきますよ」

メイドが言い終わると同時に鋭い風切り音がヒュッと鳴り、男と女の性器に鞭が叩き込まれていた。

「うぐぅぅぅっ！」

男と女は呻き声を上げ、目からは涙がポロポロと零れていた。

★　★　★　★

葉月は細いプライヤーをゆかりの血塗れの膣に入れると最奥のぐるりと切断した膣壁にプライヤーの先を入れ膣壁を挟んだ。

「ふふっ、６９番。ここからはさらに地獄ですよ。あなたは耐えられますかね。でももう、無理に耐えなくても良いですよ。もうすぐ、あなたの命は尽きるでしょうから」

葉月は楽しそうに残酷に笑い、プライヤーを握る手に力を入れた。

「さあ、いきますよ、６９番」

葉月は腕に力を入れ、ゆかりの膣壁を挟んだプライヤーを、ゆかりの膣から抜いていく。ゆかりの膣壁は奥からバリバリと剥がされていた。

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

絶叫。文字通りの絶叫がゆかりの口から飛び出す。

バリィィッ！

葉月は四等分したゆかりの膣壁を一枚、ゆかりの性器から引き剥がしていた。そして、ゆかりから引き剥がした膣壁を、小陰唇と同様

ホルマリンの満たされた硝子の瓶に入れる。

「まだ、後三回分ありますよ。どこまでもちますかね」

残酷に笑う葉月の前でゆかりはビクビクと激しく体を痙攣させ、虚ろな目から大量の涙を溢れさせていた。

29、ゆかりと彩音

29、ゆかりと彩音

葉月は四等分に切り裂いたゆかりの膣壁をプライヤーで挟み、次々に引き剥がしていく。ゆかりは、固定された体をビクビクと痙攣させ、絶叫し続けている。まさに地獄のような光景が広がっていた。

「ふふふ、これで69番、あなたの膣は失くなったわね。もう、あなたのマンコはただの穴。何の役にも立たないの。惨めでいいわね」

膣壁をすべて残酷に引き剥がされてしまったゆかりの股間にぽっかりと空いた穴から血が溢れ出ている。葉月はスタッフに素早く指示していた。

「ルート、確保しなさいっ。早く点滴っ、そして輸血もっ」

葉月の指示でスタッフもきびきびと慣れているように動いていた。

「ルート、取りました。挿針OK。注入します」

膣壁を剥がされ大量に出血し、気を失っていたようになっていたゆかりが覚醒したように絶叫する。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!!」

葉月は心電図のモニターを確認し、ステー式の膣鏡をゆかりの膣のあった穴に挿入し思い切り拡げる。膣鏡の奥にゆかりのコロッとした子宮頸部が見えていた。葉月は、ゆかりの子宮を見て嬉しそうに笑う。

「まだ死なせませんよ、６９番。あなたには、もっともっと地獄の苦痛を味わって貰います。さあ次は子宮です」

「もお、ごろじでぐだぢゃいいいいっ！！」

四肢を切断され性器を破壊されていくゆかりは、もう何も考えられず、その激痛に絶叫していたが、葉月はそのゆかりの苦しむ姿を笑いながら眺めていた。

★　★　★　★

・・葉月様は本当に恐ろしい。あの６９番のメス奴隷に死ぬ事も許さない。あのメス奴隷は、これから子宮を破壊されて発狂させられる。そして、マンコを完全に壊されて発狂した無様な姿を晒されて、おそらく〝あれ〟をされて絶命するだろう・・

処刑場を見ながらメイドは葉月の恐ろしさに汗をかいていた。この、メイドのいる特別室では男と女が性器調教され呻き声を上げている。女は拘束している枠ごと逆さにされ、開脚逆さ吊り状態になっていた。そして、自分たちの娘であるゆかりの処刑が良く見えるように、それぞれの顔の前にモニターが設置され、そこにはゆかりの泣き叫び苦しむ姿が鮮明に映し出されていた。男と女の性器には激しく鞭が叩き込まれている。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシィィィッ！！

「うぐうぅぅうっ」

呻き声を上げる男の陰茎は鞭の打撃で上下左右に激しく揺れ、女は小陰唇を開いてテープで留められ剥き出しの膣前庭に激しく鞭を叩き込まれていた。男と女は、自分の娘が処刑されていく哀れな姿を見ながら性器を調教され、どちらも絶頂を迎える寸前だった。そして、ついにゆかりの股間の穴に入れられた物を見て……。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

プッシャァァァーーーッ

男は鞭で打たれながら射精してしまっていた。女も性器を鞭で打たれイッてしまい潮を吹いていた。

「どうしようもない変態の親ですね。もう少し酷い事をしてあげますか。娘の苦痛が少しは分かると思いますよ。かなり上級向けの調教なので初心者のあなた方にはきついでしょうが、娘の処刑を見て興奮しているあなた方には丁度良いでしょう」

メイドは残酷に笑みを浮かべていた。信じられない事だがメイドは、自分たちの娘であるゆかりの処刑を見て興奮している男と女を見て嫌悪感を覚えていたのだ。

・・普通の親なら、いくら大金を積まれても自分の娘の処刑を見に来たりはしませんよ・・

メイドは、少しくらいこの男と女の性器を壊してやろうかと考えていた。

★　★　★　★

葉月はゆかりの股間の穴を見つめて笑っていた。

「６９番、これから止血も兼ねて〝これ〟を詰めてあげるわ。あなたもこの前見ていたから分かるでしょう。そう〝あれ〟よ」

ゆかりは、葉月の言葉を辛うじて聞き取り、その行為をされた時のショックに耐えられるよう気持ちを落ち着かせていた。

・・あれがくる。あの女の子が発狂したあれだ。お願い、私……。まだ狂わないで、私のマンコが完全に壊されるまで感じていたいの。マンコを壊される激痛を……・・

この時ゆかりは、以前メス奴隷として処刑されていった八千代とまったく同じ気持ちになっていた。自分の性器が破壊される激痛を最後まで味わいたい。育った環境はまるで違うが、ゆかりと八千代は深い部分で似ているのかも知れなかった。

「いきますよ、６９番」

葉月はトングで焼けた白炭を挟んで、ゆかりの股間の穴に近付けていく。ゆかりは、自分に迫ってくる凄まじい熱波に息を止めたように身構えていた。

・・くるっ。もうすぐあの女の子と同じ様に白炭が私の穴に入れられる。私の子宮が１０００度の炭で焼かれる・・

ゆかりは遠目でも分かる程ぶるぶると震え、涙を流していた。そして、その時がきた。葉月がポトッとゆかりの股間の穴に白炭を落とす。

「あっ、びゃあぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

絶叫。文字通り断末魔の悲鳴のような絶叫がゆかりの口から迸る。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、じぬうぅぅっ、どってぇぇっ、はやぐ、とってぐだぢゃいぃぃぃっ！！」

しかし当然、葉月はゆかりの言葉など無視して次の白炭をゆかりの穴の中に落とす。そして、次々にゆかりの中に白炭を落としていった。

ポトッ、ポトッ、ポトッ、ポトッ、ポトッ、ポトッ、ポトッ

「だぢゅげでえぇぇぇっ！じぬうぅぅぅっ！あびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁーーーっ！！！」

ゆかりは舌を突き出し泡を吹いて激しく絶叫する。ゆかりの肉が焼ける匂いが周囲に広がっていった。葉月は、ゆかりの穴一杯に白炭を詰めると、火箸で炭をつつき、扇子を広げ、ゆかりの股間の穴を扇ぐ。ゆかりの穴に入れられた白炭から、ぼぅっと火があがった。大きく燃え上がった炎は、ゆかりの膣前庭や大陰唇も焼き焦がしていく。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

絶叫し続けるゆかりの声は枯れてきてしまっていた。観客席でも、ゆかりの性器処刑が大詰めを迎えた事で、そこかしこで精液が放出され、潮が吹かれていた。

「いつ見ても、このマンコ炭火焼きは良いわね。興奮するわ」

「なかなか観られないから、今日は観られてラッキーだったわね」

「マンコ直焼き。もうこのメスのマンコはおしまいね。早く発狂して絶命する無様な姿を見せて欲しいわね」

・・あっ、あっ、あっ、凄い、凄いよ。もう渡邉さんマンコ壊されて死んじゃう。ハァハァ、私のマンコの穴も虐めて下さい・・

彩音も、もう我慢できなくなっていた。両腕を拘束され他の観客のように自慰出来ない彩音は、鼻息が荒くなり全身汗でびっしょりだ。股間と太ももの内側は性器から溢れ出た粘液が糸を引いている。彩音は拘束されたまま腰を前後に動かし喘いでいた。そして、ゆかりの処刑に夢中になっていた沙也加が、ようやく息を荒くして腰を動かしている彩音に気がつく。

「あらあら、ごめんなさい。気が付かなくて。マンコの穴、虐めて欲しいんでしょう。分かるわよ」

沙也加はスタッフに指示を出し、性具を持ってきて貰った。それは、男根状の太く長いデルドゥだったが、底の部分にボタンがあり、表面には一面に小さな穴が無数に空いていた。

「これは葉月様が考案して作成した性具。これをマンコの穴に入れて、このボタンを押すと……」

パシュッ！

鋭い音がして性具の表面の小さな穴全てから、びっしりと無数の鋭い針が2センチも飛び出していた。彩音はその凶悪な性具を見て震えていた。これを入れられてボタンを押されれば、膣は一瞬にして無数の針で容赦なく突き刺される事になる。

・・そんな事されたら私のマンコの穴、どうなるの……。で、でも、やって貰いたい。渡邉さんのようにマンコの穴、壊されたい……。針、いっぱい刺されたい・・

彩音は震えながらも自分の膣に性具を挿入しやすいよう腰を前に突き出していた。

「ふふふ、あなたみたいな変態マゾには嬉しい御褒美でしょう。さあ、入れてあげるわね」

ズリュッ

「ふぐぅぅっ」

小さく声を上げる彩音の膣に沙也加は性具を根本まで押し込む。すでに大量に濡れていた彩音の膣は、その巨大な性具をあっさりと飲み込み咥え込んでしまった。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

彩音の息が荒くなり、瞳からは大量の涙が溢れ、体はぶるぶると震えている。女子中学生がこれから一度に膣に無数の針を刺されるのだ。異常性欲に覚醒した変態マゾの彩音も初めての経験に恐怖しかなかった。

「心の準備が出来たら私に分かるように頷きなさい。ボタンを押してあげるわ」

沙也加は残酷に彩音に告げる。彩音は号泣して震えているが、ふうぅーっと鼻から息を吸い込むと大きく頷いた。

パシュッ！！

「は、ぶうぅぅぅーーーーっ！！！」

プッシャァァァーーーッ

彩音は、膣に無数の針を突き刺され、あろうことか絶頂に達して潮を吹いてしまっていた。そして、その後、ガクガクと体を震わせ白目を剥いて気絶してしまった。

「あらまあ、マンコの穴に１００本以上の針を刺されてイッてしまうなんて、Ｇスポットを切開されてイッてしまった６９番のメス奴隷と同じですね。気絶したのは初めてでは仕方ありませんか。気付け薬を注入しなさい。せっかくの６９番の処刑を見逃してしまったら大変ですからね」

沙也加に命令されたスタッフは彩音の会陰に深く注射針を突き刺しギューッと薬剤を注入していた。ほどなく彩音は覚醒し、膣を襲っている激しい激痛にまた絶叫する。その頃ゆかりは詰められていた

白炭を取り出され、ゆかりの股間の上に回転ノコギリが用意されていた。いよいよ、ゆかりの最後のカウントダウンが始まった。もう、ゆかりの残された時間は1時間にも満たない。ゆかりの無様に絶命する姿を期待して観客席は大いに盛り上がっていた。

３０、性器完全破壊

３０、性器完全破壊

いよいよゆかりの最後の時が近付いてきていた。ゆかりは哀れにも体をビクンビクンと痙攣させ、呪文のように、もおごろぢでぐだぢゃいと繰り返し唱えていた。

「ふふふ、メスの代表的な性感帯、乳首、クリトリス、Ｇスポット、ポルチオ、全て破壊したわ。もう、６９番あなたには快感など与えない。地獄の苦しみで発狂しなさい。本当はこの前のメス奴隷のようにすぐにマンコ切断する予定だったけれど、あなたみたいな超ド級の変態マゾには、子宮頸部を殺されただけでは満足出来ないでしょう。安心しなさい。子宮本体も壊してあげるから」

葉月は、ぐちゃぐちゃに焼け爛れたゆかりの子宮頸部の子宮口にカテーテルを挿入する。

「６９番、あなたは自分の子宮の中に、自分の糞尿を注入していたそうね（ゆかりの記録、９・１０話参照）一般のメスでここまでの変態は見たことないわ。だから、あなたの子宮に塩酸を注入してあげる。薄めた塩酸を入れる〝酸責め〟という拷問もあるけど、これは処刑ですからね。原液を入れてあげるわ。あなたも薄めた塩酸なんかじゃ満足出来ないでしょう」

葉月は残酷にゆかりに告げるが、もうゆかりの耳には葉月の言葉が

入っていなかった。ゆかりは性器を破壊されていく激痛で、もう何も耳に入らず何も考えられなくなっていた。葉月は、そんなゆかりの姿に失笑すると、ゆかりの子宮に挿入したカテーテルにシリンジを取り付ける。そして、マスクを着けると観客席の前方にいるゲストにもマスクを着けるよう促していた。

「これから塩酸を使用した、この69番のメス奴隷の子宮破壊を行います。強い刺激臭が漂いますので近くの方は気をつけて下さいね」

ゲストは次に起こる事を期待しながらマスクを着用していた。沙也加もマスクを着けると、隣で震えている彩音にもマスクを装着させていた。

・・渡邉さん、こんな事もされちゃうの。渡邉さんの子宮、ぐちゃぐちゃにされる。渡邉さん、マンコ全部を壊される・・

彩音は針を無数に刺されている自分の性器の痛みも忘れ、これから行われるゆかりの子宮破壊に息を呑んでいた。

「さあ、それでは皆さんマスクは着けましたね。注入を開始しますよ」

葉月はシリンジに満たした塩酸をヂューッとゆかりの子宮に容赦なく注入していった。

「うんびゃあぁぁぁぁーーーっ！もお、ぢぬうぅぅっ！だぢゅげでぇぇぇーーーっ！！」

ゆかりは、なんと子宮に塩酸を注入され、子宮内部を焼かれ溶かされていた。辺りには強烈な刺激臭が漂い、ゆかりは泡を吹いて絶叫

している。凄惨な光景のなか葉月はシリンジの塩酸を全てゆかりの子宮に注入してしまった。そして、急いでカテーテルをゆかりの子宮から抜く。もう、ここからは時間との競争だった。ゆかりが絶命する前に、ゆかりの性器を全て破壊する。葉月は、スタッフにも指示を出しながら慌てる事なく冷静に動いていた。そして、ゆかりの股間の上に用意してある回転ノコギリの電源を入れる。

キュイーーン

ノコギリの刃は高速で回転を始めていた。葉月は、その回転ノコギリを慎重に位置を確認しながら下ろしていく。そして、ゆかりの性器の僅か手前で下ろすのを止めていた。観客席も次の場面を期待してシーンと静まりかえっている。葉月はゲストの反応を確認して、ノコギリの刃をおろした。

ギュバァァーーーッ！！

「んんんびゃあぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

絶叫するゆかりの性器が回転ノコギリで真っ二つに切断されていく。

「あびゃびゃびゃびゃっ、あっびゃあぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

ゆかりの股間からは血と肉片が激しく飛び散っている。そして、ゆかりの性器を切断している回転ノコギリの音が変わった。どうやら、ゆかりの恥骨も切断され始めたようだ。ゆかりはビクビクと体を痙攣させ、まさに絶叫していたが、もう目は虚ろで焦点が合っていなかった。だらしなくよだれも垂れ流している。今まで激しい性器処刑から必死に正気を保っていたゆかりだったが、それも限界だった。

ゆかりは性器を切断される途中で惨めに発狂した。中学生のゆかりが、よくここまで頑張ったというべきだろう。葉月はゆかりが発狂したのを確認すると爆笑していた。

「あははっ、とうとう発狂しましたね。変態マゾのあなたも満足したでしょう。でも、まだ終わりではないですからね。６９番、あなたのマンコはまだ破壊されますよ」

葉月はゆかりの性器から恥丘の半分ほど切断すると回転ノコギリを一旦止め、引き抜いた。そして、ゆかりの血と脂で切れ味の落ちた回転ノコギリの刃を交換する。

「ふふふ、可哀相に６９番あなたの命はもうすぐ終わりね。これから子宮も真っ二つにしますよ。もう考える事も出来ないでしょうけど、子宮が切断されると中に入れられている塩酸が流れ出します。あなたの体の中を溶かしていきますよ。果たして生きていられますかね。私としては最後の〝あれ〟まで息があって欲しいですが……」

葉月は刃を替えた回転ノコギリをまた作動させると、再びゆかりの真っ二つに切断された性器に刃を入れていく。

チュイィィーン

ゆかりの恥骨を切断するため細かい目の刃に替えた為、高周波の音が響き、ゆかりの恥骨をあっさりと切断する。

「あばばばばばばばばばばばばばばばばばばばっ」

もう発狂してしまったゆかりが力のない意味もない声をあげている。葉月はゆかりの恥丘を切断し終えていた。当然もうゆかりの子宮は

真っ二つに切断されている。葉月は、そのままゆかりの臍の辺りまで回転ノコギリでゆかりの体を切断すると、心電図のモニターを確認する。

「偉いですね。まだ生きていてくれましたか。本当は頭まで真っ二つにしたいところですが、あなたの体は剥製にして飾っておくつもりですから、お臍までで止めておきますね」

葉月も満足そうにニヤリと笑う。そして、ゆかりの性器から下腹部を切断した回転ノコギリの刃をズボッと抜いた。刃が抜かれたゆかりの下腹部から血が激しく噴き出す。もう、ゆかりの残った命は僅かだったが、そんなゆかりにも容赦せず医療用の青いニトリルグローブを両手に着けた葉月は、真っ二つに切断したゆかりの性器に両手を入れるとガバッと拡げていた。

★
★
★
★

「ふぐうぅぅーーーっ」

男と女は尿道に細い爆竹を入れられて、塞がれた口で声を上げていた。男の方は、尿道に2本の爆竹を縦に押し込められている。女の方は尿道と膣に1本ずつ爆竹を押し込められていた。モニターの中ではゆかりの性器に回転ノコギリが押し当てられるところであった。メイドはタイミングを計って爆竹の導火線に点火した。

シュゥゥーッ

導火線が短くなっていく。そして、ゆかりの性器が回転ノコギリで

切断された瞬間……。

パァァンッ！

「はぶうぅぅぅっ！」

男と女の性器で爆竹が破裂していた。二人の性器から煙が上がり火薬臭が鼻をつく。男と女は涙を流して呻き声を上げているが、モニターの中ではゆかりの性器が、もう真っ二つに完全に切断されていた。

・・コイツらのチンポとマンコも切断してやりたいところですが、葉月様が招いたゲストですからね。我慢しないといけませんね・・

メイドは自分の気持ちを抑えて、ゆかりの処刑に目を向けた。ゆかりは哀れにも発狂し、切断された股間に葉月の両手が入れられていた。

★
★
★
★

彩音は、目の前で執行されるゆかりの処刑の凄まじさに体の震えが止まらなかった。

・・もう絶対、万が一にも渡邉さんは助からない。お臍まで切断されて生きていられる筈がないよ・・

沙也加はぶるぶる震えている彩音の表情を見て、この女はいずれここに自分の意思で戻って来るだろうと確信した。涙を流し震えてい

る彩音だが、憧れに満ちた瞳で処刑されているゆかりを見つめていた。ゆかりに自分の姿を重ねているのは間違いなかった。

・・この女も間違いなく６９番と同類。おそらく、もう自分でも気が付いているだろう。マンコを残酷に処刑されたいと・・

沙也加は口許に笑みを浮かべ彩音を見つめていた。

31、ゆかり絶命（前書き）

ついにゆかりは完全に絶命します。ゆかりが絶命させられるシーンのみです。
今更ですけど、スカ、グロ要素多めになっています。苦手な方は飛ばして下さい。

31、ゆかり絶命

31、ゆかり絶命

葉月はゆかりの切断した性器に両手を入れ、大きく拡げる。そして、手をゆかりの中に突っ込み真っ二つに切断した赤黒い子宮を取り出していた。ぶるぶると震えるゆかりの大切な臓器が白日の下に晒される。摘出したゆかりの子宮を葉月は、スタッフが持っているトレイの上にベチャッと投げ入れた。子宮についている卵管は2本とも千切れてしまっている。さらに葉月は、またゆかりの下腹部に両手を入れ、小さな親指大のコロッとした楕円形の卵巣も一つずつ掴み取り出していた。もうゆかりの腹の中はグチャグチャだった。

「69番の大切な卵巣、コロッとして可愛いわ。これ、ぐちゃぐちゃに潰してあげたいけど我慢しないといけないわね」

葉月は残念そうな顔をしながら、ゆかりの卵巣もトレイに乗せた。そしてまた葉月はゆかりの腹の中に手を突っ込み、尿管や尿道を引き千切り膀胱も取り出していた。他の臓器も切断された腹からこぼれ落ちている。そして、真っ二つに切断されたゆかりの恥骨も、バリッと引き剥がしてトレイに置いた。

「急いで洗浄して保存っ。早くっ、卵巣も膀胱も大事な商品ですからね、丁寧に扱いなさい」

葉月は、どうやらゆかりの切り裂いた子宮や卵巣、そして膀胱や恥

骨も売り物にするつもりのようだった。ゆかりは、ついに性器の全てを完全に破壊、摘出されていた。

・・渡邉さん、マンコの中身まで抜き出されちゃったよ。もう、渡邉さんのマンコ、何もないよ。このまま死んじゃうまで放置されちゃうのかな。そんな事ないよね。まだ何か酷い事やって貰いたい。私が渡邉さんなら、もう誰が見ても絶命したと思われる程の事をされたい。もう最後だから徹底的にメスの扱いも受けないでモノとして扱われるのがいい。堕とされて辱しめられて惨めに嗤われながら絶命したい・・

彩音は、ゆかりが受けた凄まじい仕打ちに震えていたが、彩音の予想は当たっていた。葉月は、発狂して性器を完全に壊されたゆかりを、まだ許す気はなかった。葉月はチラッとまたモニターを確認する。ここまでされても、ゆかりはまだ微かに生きていた。葉月は、急ぎゆかりに止めをさす権利を持つ男を呼び出した。この男は事前に葉月にお金を渡し、その権利を入手していたのだった。全裸のまま男は観客席から処刑台に上がってきた。

・・やはり、僕の思った通り君は無様に発狂していたね。まあ、ここまでマンコ壊されれば無理もないけどね。もう君は、僕だと分からないだろう。商品チェックの時に君の穴を全て味わっておいて良かったよ。あの時味わった君のマンコ、もう無いからね。そして今、君に止めをさせるなんて最高だ。もう僕のモノは硬く勃起したままだ。君を無様に完全に絶命させるまでおさまらないよ・・

男は、ゆかりと公園で会っていた男だった。公園でゆかりに会って以来、男はゆかりに惹かれていた。そのゆかりを奴隷にする夢は叶わなかったが、止めをさせる事が出来るというので男は最高に興奮していた。

「あなたが、こんなメス奴隷に惹かれているなんて意外ね。もっと華やかで壊しがいのあるメスに惹かれるのではなかったかしら」

「僕の方こそ君がこんな地味でお世辞にも可愛いといえないメスに大金を出すとは思わなかったよ」

「どうやらお互いに、このメスの容姿ではなく同じところに惹かれたようね」

「そうだね。このメスは、いくら教育してもここまで育てる事は困難な貴重なメスだ。自虐を繰り返して処刑願望を持つメスだからね」

「この69番のメス奴隷は本物だったわ。その表情や声、ゾクゾクするわ。ふふ、それじゃあ、このメスに敬意を表して引導を渡しましょう。最後まで惨めにモノとして扱われて69番も嬉しいでしょう」

葉月は、頭蓋穿孔器をゆかりの頭に装着すると額の中央に位置を合わせる。そして、頭蓋穿孔器を作動させる。

キュゥゥゥン！

ゆかりの頭蓋骨が丸く切断され、額の中心に穴が穿たれた。性器から臍まで真っ二つに正中切断されたゆかりは、ブクブクと口から血の泡を吹いているが、まだ生きていた。そのゆかりに、ついに最後の時が訪れた。ゆかりは、これから脳を犯される。ゆかりという人格の根源が破壊される。頭蓋穿孔器を外したゆかりの頭を男が両手で押さえつけた。無様に発狂したゆかりは涙と鼻水と血の泡を吹きながら、よだれもだらしなく垂らし意味不明の言葉を発していた。

ゆかりは、もう虫の息であったが、それでもまだ確かに生きていた。その、ゆかりの額に穿たれた穴に男が自分の硬く勃起した陰茎の鬼頭先端を当てる。この男の性器がゆかりの頭の中に突き入れられれば、その瞬間渡邉ゆかりというメス奴隷に堕ちた女子はこの世から消滅するのだ。

・・ああ、興奮する。もうすぐ君はメス奴隷ではなく、ただの物体になるんだ。変態の君は嬉しいだろう・・

男は感無量だった。そして、男はとうとうゆかりの頭の中に硬く大きく勃起した陰茎を容赦なくズボッと突き入れた。その瞬間ゆかりの目が正気が戻ったように大きくクワッと見開かれる。そして、涙がポロポロと零れた。

「おっ、ぼぅぅぅっ……」

それが、ゆかりが発した最後の言葉だった。いや、言葉というより音といった方が正確である。それはもう意味のない言葉だったので……。男はゆかりの頭を押さえたまま激しく腰を振る。一瞬正気に戻ったかのようなゆかりの瞳はクルッと白眼を剥き、もう元に戻る事はなかった。脳を犯され破壊されたゆかりの体はビクンビクンと激しく痙攣している。男は容赦なく腰を振り続け、ゆかりの頭の中はぐちゃぐちゃに破壊された。そのうちに、痙攣していたゆかりの肉体もただの動かない物体になっていく。心電図のモニターもピーッとフラットになっていた。ゆかりは完全に絶命した。変態自虐自慰を幼少より繰り返し、性器を処刑される事を夢見ていた渡邉ゆかりは、その念願が叶って性器を完全に破壊され、さらに脳も破壊され絶命させられた。ゆかりにとっては、短い人生であり地獄の苦痛を味わう結果にはなったが、夢が叶い幸せであったのは間違いなかった。そして、男はゆかりの頭の中に射精する。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は大量に精液を放出したが、すぐにゆかりの頭から性器を抜かず、そのままゆかりの頭の中に性器を入れていた。すると、すぐに男の性器は再び硬く勃起していく。

・・ああ、君の頭の中を犯せるなんて最高だ。興奮が止まらない。いつまでも君を犯していたいよ・・

男はゆかりの頭から性器を抜かず、また腰を振り続けた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は、またゆかりの頭の中に射精した。そして、その後今度はゆかりの頭の中に放尿していた。

ジョォォォォーーーッ

ゆかりの目、鼻、耳から男の尿が溢れ出す。その、ゆかりのあまりに無惨な姿を見て彩音は目を大きく見開いたまま固まっていた。沙也加は、そんな彩音の股間の前にしゃがみこみ、彩音の性器に下げられた錘を外していた。そして、膣に入れられた性具も針を引っ込めてズルッと抜く。沙也加は残酷に笑うと彩音の肛門に浣腸器を突き刺しヂューッとグリセリンの原液を注入する。その後、尿道にもアタッチメントを取り付けていた。そのアタッチメントを彩音の腰に装着したペニスバンドに接続する。勿論、ペニスバンドの反対側は彩音の膣に子宮を突くほど深く挿入されていた。それだけではなかった。彩音の肛門にもペニスバンドから伸びるチューブが挿入されている。

「ふふふ、このペニスバンドはあなたがイッた時に潮を吹くと、このペニスの先端から吹き出すようになっているのよ。男の射精みたいでしょう。でも、それだけじゃないの。このチューブの栓を開ければ、あなたのウンチもペニスの先端から出せるのよ。葉月様が企画した商品の試作品。あなたで試させて貰うわ。さあ、それじゃあお友達のところへ行きましょうか」

沙也加は彩音の首輪の鎖を引き、ゆかりのもとへ連れていく。

「葉月様、連れてきました。６９番の友人で名前は、蜂須賀彩音です」

「お友達の最後を看取る為に足を運んでくれた蜂須賀さんに、最後のお別れをさせてあげるわ。この６９番メス奴隷の頭を、そのペニスで犯しなさい。まだ６９番の体は暖かいですからね。最後のお別れをゆっくり楽しんで貰いたいわ」

・・私が渡邉さんの頭を……・・

もうゆかりは絶命しているとはいえ、彩音にはゆかりの頭を犯す事に抵抗があった。

・・頭を犯すなんて怖くて出来ないよう。渡邉さんがもう死んでても、やってはいけない事だよね・・

ぶるぶる震える彩音に葉月はイライラした顔を見せていた。沙也加は葉月の機嫌を損ねないように彩音にそっと呟く。

「ほら、お客様もあなたたちの友情を期待して待っているわ。早く

しなさい、蜂須賀さん」

沙也加が優しいが厳しい声で彩音を促す。

「わ、わかりました。それでは腕の拘束を解いて貰えませんか。渡邉さんをこの腕で抱き締めたいんです」

葉月が沙也加に頷いてみせると、沙也加はすぐに彩音の両腕の拘束を解いた。彩音は両腕をプルプルと振り感覚を確かめると、ゆかりの頭と腰に手を当てる。

・・渡邉さん、いくよ。渡邉さんの頭の中、私が犯すよ・・

彩音は左手でゆかりの頭を押さえ、右手でペニスバンドのペニスを掴み、ゆかりの額の穴に先端を当てる。そして、ズリュッとゆかりの頭の中にペニスを突き入れた。その後彩音は、あの男と同じ様に両手でゆかりの頭を押さえつけ腰を振る。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

彩音はゆかりの頭を犯しながら声を出し始めていた。腰を振ると自分の膣に挿入されたペニスの反対側も激しく動き彩音の膣と子宮を刺激する。

・・私は今、本当に渡邉さんの頭の中を犯している。渡邉さんを人とは思わない、こんな酷い仕打ちをしているのに興奮が止まらないよ。あはっ、私も頭がおかしいんだ・・

「あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁーーっ」

彩音の腰の動きはさらに激しくなっていく。

「いぐっ、いぐっ、いぐっ、いぐぅぅぅぅーーーっ！」

プッシャァァァーーーッ

彩音はゆかりの頭の中に潮を吹いていた。そして、ペニスを抜こうとした彩音の腰を押さえつけた沙也加が、彩音の肛門に挿入しているチューブの栓を外す。

ブッシャァァァーーーッ、ブリッ、ブリッ、ブリィィィッ！！

ゆかりの頭の中に彩音の大便が放出されていた。浣腸されている彩音は排便を止める事が出来ず、ゆかりの目や鼻、耳からドロドロの彩音の液便が流れ出している。

「ひぐぅっ！」

そのゆかりの無惨な姿を見て彩音は小さく声を上げるが、激しく興奮してしまってもいた。

「ふふ、ウンチを全部出してあげなさい。もう、このメスはマンコも無くなって公衆便女としか体を使えないですからね。このメスの頭の中、あなたのウンチで埋めてあげなさい。お友達の頭の中が自分のウンチで一杯になると思うと興奮するでしょう」

葉月の言葉に彩音は震えていたが、確かに興奮し激しく性器を濡らしてしまっていた。

・・確かに私も、こんな事されたら嬉しくてイッちゃうよ。頭の中

にウンチされるなんて考えた事もなかった。たぶん渡邉さんも生きてたら喜んでくれたと思う。あははっ、もう駄目……。私もマンコ壊されて渡邉さんみたいな無様で惨めな最後迎えたいよ・・

彩音は、ゆかりの頭の中に排便しながら自分の頭が狂っていくのを感じていた。しかし、彩音はそれを否定する。

・・ううん、私は狂ってなんかいない。私は元々こうだったんだ。ただ自分の本性に気付いていなかっただけ。私の本性は渡邉さんと同じ。マンコ徹底的に壊されて処刑されたい。今、はっきりとわかったよ。思い切り惨めに絶命したい・・

彩音は、ガクガクと足が震えながらもゆかりの頭をしっかりと押さえつけ、腰を前に突き出し、ゆかりの頭の奥深くにぶりぶりと排便し続けていた。

31、ゆかり絶命（後書き）

次回、ゆかりの章最終話となります。
渡邊夫妻、彩音の運命はどうなるのか。
一つの結末を迎えます。

32、宴の後（前書き）

ゆかりの章、最終話になります。
ゆかりは絶命してもなお、哀れに破壊されていきます。今回もグロ多めです。気を付けて下さい。

32、宴の後

32、宴の後

彩音はゆかりの頭の中に排便し続けながら、あまりの興奮で失神してしまっていた。沙也加が後ろから彩音を支え、ゆかりの頭から彩音が突き入れていたペニスをズボッと抜く。その瞬間、ゆかりの額の穴から大便、小便、精液とゆかりのぐちゃぐちゃにされた脳と脳漿が流れ出した。沙也加はスタッフを呼びつけ彩音をベッドに横にして休ませるよう指示を出す。葉月はマイクを手にして観客席に向かって話しだした。

「さて、ここからは皆さんにこのメス奴隷だった69番の頭部を自由にして貰う時間を設けます。ご希望の方は存分に犯すもよし、便器として使用するもよし自由に楽しんで下さいね。女性の方には今この69番の友人が使用したペニスバンドも販売していますので使いたいと思う方はスタッフにお申し付け下さい。それでは準備しますので少しの間お待ちください」

葉月のアナウンスで、ゆかりの頭を凌辱したいという希望者が殺到していた。

「脳姦なんて滅多に経験出来ないからね。絶対、経験しておいた方が良いよ」

「あのペニスバンド良いわね。私も購入させて貰うわ。ゾクゾクす

る」

「あのメス奴隷の頭の中にウンチするの良いわね。興奮するわ。私にもペニスバンドを……。それと浣腸して下さい」

「メス奴隷、目や鼻からウンチ漏れて最高っ！私もおしっことウンチ入れてあげるわ」

ゲストたちも興奮し、彩音が使用したペニスバンドも飛ぶように売れていった。葉月に命令されたスタッフはゆかりの死後硬直が始める前に口に開口ギャグを装着し、ゆかりの舌も切断した。そして、ゆかりの左右の眼球も抉り取っている。

「丁寧に扱いなさい。それも大事な商品ですからね」

スタッフに指示を出す葉月に沙也加は耳打ちする。

「今日のメス奴隷の四肢を切断した際に使用した、葉月様が考案した処刑台の改良は進んでいますか」

「ああ、あれね。あなたが秋穂というメス奴隷でチェックしてくれたので、改良してみたわ。ボウガンはやめて、新たな処刑台を幾つか試作してみたわ。四肢を切断するギロチンに胴と首も切断するギロチン、それにマンコから口までニードルで串刺しにする機能と下腹部を裂く機能も加えたのよ。どうかしら、動作チェックをして問題なければ売り出すつもりだけどね。これを使えば技術や経験なしに誰でも簡単にメス奴隷の処刑が執行出来るから普及すると思うわよ（注１）」

「その動作チェック用の人材を見つけました。今はまだ一般の女で

すが、間違いなくメス奴隷に堕ちるでしょう。一般の女なのでオークションを通さずに直接購入すれば、今日のメス奴隷よりもさらに格安で手に入れる事が出来ると思いますよ」

「ほう、それは朗報ですね。それで、その女がメス奴隷に堕ちるのは間違いないのですか」

「はい、葉月様。私が確認しましたので間違いありません。本人も、もう自分の本性は認識しているでしょう。あとは奴隷契約書と奴隷誓約書を記入して貰えばＯＫです」

沙也加は、チラッと彩音が横になっているベッドに目を向ける。葉月も沙也加の視線を追い、彩音を見ると笑みを浮かべた。

「あれなら、なかなか見映えも良いですね。見た目だけなら６９番とは雲泥の差がありますね。でも、残念ながら今日のメス奴隷のように処刑を楽しむ気にはなれませんね。生まれた時から持つ、全身から放つ独特の雰囲気が足りませんね。それでも、動作チェック用には丁度良いでしょう。処刑される過程を撮影してカタログ写真に使用しても映えそうです。それでは動作チェック用のメス奴隷の確保は神楽坂さん、あなたに任せます。それと神楽坂さん、この後先日の６７番の処刑で炭起こしに失敗したオスを処刑する予定ですが、お望みならあなたがやりますか。オスは、メスに比べてすぐにショック死してしまうので、あなたが好きな〝チンポスライス〟や〝金玉潰し〟をする時には事前に忘れず薬を射った方が良いですよ。今までは、そこですぐオスを殺してしまいましたからね」

「ありがとうございます、葉月様。葉月様にこの様な機会を頂きましたので、気を付けてゆっくり処刑を楽しませて貰います。それと動作チェック用のメスの確保はお任せ下さい」

沙也加は、葉月に信頼されたようで嬉しさで頬を紅潮させていた。そうしているうちに、ゆかりの準備が整い、葉月は再びマイクを握る。

「お待たせしました、皆様。６９番のメス奴隷の準備が整いましたので順番にお楽しみ下さい。メス奴隷の口腔と眼窩も使用出来るようにしましたので、額の穴と合わせてお好きな穴で存分にお楽しみ下さい。勿論、三つの穴全てを使用しても構いませんが、大勢のお客様がいらっしゃいます。常識の範囲の時間でお済ませ下さい」

葉月の合図で並んでいたゲストが先頭から順番にゆかりの頭を犯し、便器にしていく。ゆかりの体は絶命してからも性具として使用されていた。１００人以上の男女に頭を犯され、ゆかりの頭の中はもう糞尿と精液で一杯になっていた。ゆかりの穴という穴から精液や糞尿が溢れ出ている。ゆかりの脳は全て流れ出し、地面で糞尿と混ざりあっていた。葉月は死んでからも凌辱の限りを受けたゆかりの体に水をかけて綺麗に洗浄する。ゆかりの外見は綺麗になったが、実際のゆかりの体は頭の中に糞尿が詰まった只の糞袋のようになっていた。ベッドの上で気が付いた彩音は、ゆかりのその惨めで哀れで無様な姿を見て口を開けたまま固まっていたが、右手は股間に伸び自慰していた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

止めようとしても止められない。彩音の右手は勃起したクリトリスを激しく擦り、膣に指も入れていた。彩音の左手も股間に伸び、肛門に指を突っ込んでいる。そして、ゆかりの乳首に針を刺し黒焦げにして切断した時の事、ゆかりの頭を犯し潮を吹き排便した時の事を思い出していた。彩音は自分でも気付かないうちに腰を大きく持

ち上げ、ブリッジのような姿勢になっていた。太ももがガクガクと震えている。それでも両手の動きは止まらなかった。

「いぐぅっ、いぐぅっ、いぐぅぅぅーーーっ！」

プッシャァァァーーーッ

彩音は、また潮を吹いてイッてしまった。彩音の腰が落ち、足は一直線にピーンと指先まで伸びきっている。

・・もう、私のマンコも壊して下さい。渡邉さんみたいに容赦なく徹底的に壊されたい。私もマンコ処刑されたいです・・

彩音は、また興奮し過ぎて失神してしまっていた。

★　★　★　★

「ゆかりぃぃぃっ！」

ゆかりの頭に男の硬く勃起した性器が突き入れられた瞬間、男と女は絶叫していた。脳姦され体をビクンビクンと痙攣させるゆかりの姿を見て男と女は涙を流していた。しかし、その態度とは裏腹に男の性器は硬く勃起し、女の性器もクリトリスが激しく勃起し胯間一帯をびしょびしょに濡らしていた。

「さあ、それでは行きますか」

メイドはスタッフに指示を出し、男と女に首輪を着け拘束を解く。

女の方には彩音が使用した物と同じペニスバンドを装着されていた。
そして、メイドは男と女の首輪に付いた鎖を引き歩きだした。

「どこに行くのですか？」

不安そうに訊く女にメイドは、何を言っているんだという表情で呟く。

「処刑された、あなたたちの娘に最後のお別れをしに行くのですよ。そんな事も分かりませんか」

「最後のお別れに、どうして私のあそこに、こんな性具を付けるのですか」

「もう、分かっているでしょう。最後のお別れに娘の頭を犯すのですよ。ド変態の娘ですからね、両親に頭を犯して貰えば嬉しいでしょう」

「そんな……。どこまでゆかりに酷い仕打ちをすれば気が済むのですか。もう、ゆっくりと静かにゆかりを眠らせてあげて下さい」

激しくメイドに詰め寄る女に、メイドは冷ややかな視線を浴びせた。

「また、建て前ですか。もう、いい加減自覚しなさい。あなた方は娘が絶命する姿を見て興奮している異常者ですよ。素直に自分の異常を認めなさいっ」

メイドに一喝され、男と女は項垂(うなだ)れていたが、その性器は激しく勃起し濡れたままだった。そして、変わり果てた自分の娘と対面した時、もう我慢が出来ないというように男は、ゆかりの頭に勃起した

性器をぶち込み激しく腰を振り射精していた。女も自分の娘の頭を犯しながら恍惚の表情を浮かべ、娘の頭の中に潮を吹いていた。そして、ぶりぶりと排便までしていた。

★
★
★
★

彩音は沙也加に送られ豪徳寺邸の玄関前で送迎の車を待っていた。

「今日はありがとうございました。渡邉さんの最後を看取る事が出来て良かったです。それで、あの……」

彩音は沙也加に何かを言おうとして言い淀んでいた。沙也加は口許に笑みを浮かべると、彩音に自分の名刺を渡す。

「ここで、こうして出会ったのも何かの縁でしょう。私に頼み事がある時は遠慮なく連絡ちょうだいね。彩音ちゃんの頼みなら最優先でやってあげるから。今日は疲れたでしょう、ゆっくり休みなさい」

「はい、ありがとうございます。たぶん、また連絡すると思います。その時は、よろしくお願い致します」

彩音が沙也加に頭を下げていると黒塗りのベントレーがやって来た。彩音は後部座席に乗り込み帰っていった（注2）沙也加は、小さくなっていくベントレーを見送りながら声を出して笑っていた。

・・あなたには葉月様の処刑台の動作チェック用メス奴隷になってもらうわ。あなたが生きていられる時間は自分で決めなさい。あなたが私に連絡してきた日が、最後の日になるの。楽しみだわ・・

ベントレーは夕陽の中に小さく見えなくなっていった。沙也加は、笑いながらカツカツとヒールを鳴らし屋敷の中に入り、大きく重く豪華な装飾が施されたドアを閉めた。

★　★　★　★

数日後、とあるタワーマンションの一室で男と女が行為に励んでいた。

「おっ、おっ、おっ」

「あっ、あっ、あっ」

女は四つん這いでバックから犯され声を上げていた。男は女の腰を押さえつけ激しく腰を振っている。女の子宮は下がり、男の鬼頭が女の子宮頸部を激しく突いている。そして、男と女は頂点に達しようとしていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は女の膣内に大量に射精する。その熱い飛沫を膣内で感じた瞬間、女もイッてしまっていた。二人はそのまま力尽きたようにベッドの上に重なって倒れている。

「また女の子が良いな。いや、女の子以外いらないな」

「勿論よ。私とあなたの子供なら、またあんな変態になるでしょう

ね」

「当然だろう。そうすれば、また高く売れるな」

「もっと変態になれば、もっと高く売れるかしら」

「そうだな。今度は部屋にカメラも付けて観察していこう。どんな事をするか興味があるしな」

「これで私たちの生活は安泰ね。初めからこうなると分かっていれば、あの娘にも勉強なんかさせないで、そっちの教育でもっと変態に育てられたのに残念ね」

「まあ、それでもこれだけの生活が出来るようになったんだ。良いじゃないか。次は、この経験を活かせばいいよ」

男と女は裸で抱き合ったまま笑っていた。そして、１０ヶ月後、この男と女の間に女の子が生まれていた。男と女は、その小さな女の子を抱きしめ満面の笑みを浮かべた。

「この娘は〝しずく〟と名付けよう」

「どうして？」

女が甘えた声で男に訊くと、男はニヤリと笑う。

「いっぱい粘液を漏らして、涙や鼻水や涎を垂らすような変態マゾになるようにさ」

★
★
★
★

葉月は豪華なソファに座りブランデーを飲んでいた。そして、目の前に置かれた物をうっとりとした目で眺めている。

・・あぁまた、あなたみたいな本物の変態マゾのメス奴隷に会いたいわね。渡邊ゆかり、この名前は忘れないわ。あなたは最高だった。もし、同じ様なメスがいたらお金に糸目はつけずに手に入れるのに・・

葉月の前には、ゆかりの剥製が置かれていた。丁寧に皮を剥いで綺麗に作製され、破壊され無くなってしまった性器も、型どりしたデータを元に本物とまったく同じに作製され取り付けられている。声をかければ返事をしそうな程の出来映えであったし、このまま串刺しにしても楽しそうだった。葉月は、そのゆかりの剥製を眺めながら二杯目のブランデーを口に運んだ。

その頃、豪徳寺邸の広い客室ではガラスケースの中に陳列された硝子瓶がオークション形式で販売されていた。残り期日は1日。価格はどんどん上昇している。ガラスケースには、ゆかりの全裸の画像、それに顔と性器、膣内の拡大画像も貼り付けてあり、各硝子瓶には「渡邊ゆかり卵巣」「渡邊ゆかり子宮（右）」「渡邊ゆかり膀胱」などとラベルが貼られていた。それが間違いなくゆかりの臓物であるという葉月の保証書と、それをゆかりから摘出した際の処刑動画もセットになっていた。

葉月のお気入りだった“渡邊ゆかり”の名前は界隈では、もうステータスになっており、そのゆかりの性器の一部でも所有する者は、それだけで同好の人間から尊敬されていた。こうして、“渡邊ゆかり”の名はメス奴隷のレジェンドとして永く語り継がれていくのだ

った……。

（注１）この豪徳寺葉月の考案した処刑台は改良されていき、遥か未来に飯嶋量子と綾辻留美子の処刑に使用される事になる。まだ幼い二人の少女は泣き叫びながら、容赦なく性器を、そして体を破壊されていき、残酷に処刑された。そこにはゆかりを処刑した豪徳寺葉月の影も見え隠れしていた……「スク水少女戦士ウテルス」２２、２３話参照。※凄惨なシーンが多々あります。幼い少女が容赦なく処刑されたり、食べられたりしてしまいます。この作品より酷い内容かも知れませんので、うっかり読まないよう気を付けて下さい。

（注２）この後の蜂須賀彩音の行動と運命については「檻の中の幸福・彩音の章」として掲載予定です。この作品に登場するということは、もう彩音の最後は悲惨な結果になると決定してしまいました。可哀想ですが、それが彩音の運命なのでしょう。

32、宴の後（後書き）

お読みくださりありがとうございました。
別作品「変態異常自虐少女ゆかりの記録」から、ずっと登場してきたゆかりの最後は如何だったでしょうか。
変態マゾのゆかりに相応しい、哀れで惨めな最後にしたかったのですが、上手く着地出来たのか不安が残ります。それと長い間、書き続けてきたゆかりを退場させてしまった事で一抹の寂しさがあります。まあ、いつかゆかりの性器を徹底的に破壊するお話しを書きたいとは思っていましたので書いていて楽しかったですが、ゆかりの体を剥製にしたかったので、三人少女の章の柚月のように徹底的に破壊出来なかったのが少し心残りですね。

こんな作品ですが感想頂けると非常に嬉しいです。よろしくお願い致します。
次章、彩音編でまた皆様とお会い出来る事を願いつつ一旦筆を置きます。

それでは、次章開幕まで、しばらくお待ち下さい、
ありがとうございました。

1、彩音の本心（前書き）

今回から始まる「彩音の章」は前回「ゆかりの章」からの続きとなります。主人公である蜂須賀彩音について詳細は「変態異常自虐少女ゆかりの記録」番外編蜂須賀彩音を参照して下さい。

一般人である彩音ですので、いつものオークション会場からのスタートとは大きく異なる導入部ですが、彩音が残酷に性器を壊され処刑される内容には変わりません。この物語に主人公として登場してしまった以上、彩音は処刑され絶命するのが決定してしまっています。彩音が助かる要素は一切ありません。ご安心下さい。

例によって酷い内容なので苦手な方は読まないようお願いします。

1、彩音の本心

1、彩音の本心

彩音は、ゆかりの処刑から戻って以来、人が変わったようになっていた。どこか全てを超越したような雰囲気があり、クラスメイトの青柳広子も彩音に声をかけづらくなっていた。

・・蜂須賀さん、どうしたんだろう。やっぱり、あの噂が本当で風紀委員さんにまたお仕置きされちゃったのかな。もしかしたら、マンコ壊されちゃったのかも・・

広子は彩音に訊いてみたかったが、遠い夢見るような瞳をしている彩音はお仕置きされて落ち込んでいるようにはみえなかった。何か他の事で頭が一杯で、それ以外の事は考えられない。そんな感じだった。

・・好きな人が出来て、その人の事で頭が一杯なのかな・・

広子の想像は、まるで的外れというわけではなかった。彩音は、広子の想像通り一人の人間の事で頭が一杯であったのだ。しかし、それは恋愛とは、まるで関係がない。いや、彩音はその人物を愛してしまっていたのかも知れない。〝渡邉ゆかり〟。彩音の頭はゆかりの事で一杯だった。考えるのは、ゆかりの事ばかり、夢の中にも出てくる始末だった。

ゆかりの処刑が執行され、ゆかりが絶命してから早くも1ヶ月が過ぎようとしていた。彩音は今でもゆかりの処刑の様子をはっきりと鮮明に覚えている。処刑場で拘束され運ばれていくゆかりを見た時、ゆかりも彩音に気が付いて、二人の目が合った。その時ゆかりは、その瞳でありがとうと言っているように感じた。その後ゆかりは彩音の目の前で性器を壊されていき、その性器全てを破壊された。そして、脳に男の性器を突き入れられ絶命した。その時のゆかりの表情が彩音の脳裏に焼き付いている。全てに満足したような表情に彩音は感じたが、それは勿論、彩音の心が造り出した幻像である。実際のゆかりの表情は苦痛で歪み、脳に男の性器を突き入れられ驚愕の表情で死んでいったのである。ゆかりは、後悔と絶望の中、苦しみ抜いて絶命したのである。そこには彩音が考えるような幸せなど一片の欠片もなかった。彩音も、ゆかりと同じ思いを抱き絶命していく事になるが、この時の彩音は処刑される事が最上の幸せと思い込んでいた。

・・私もあんな顔をして絶命したいです・・

もう、彩音の頭の中は、自分が処刑されて絶命するシーンばかりをイメージし興奮していた。

★　★　★　★

風紀委員の委員会室の中で橘理津子と香坂麗華がひそひそと話していた。

「渡邉さんの処刑から戻って以来、蜂須賀さんの様子がおかしいようですね」

「そのようです。渡邉さんの処刑でショックを受けてしまったのですかね。あんなもの普通の人が見たら精神がおかしくなりますよ」

理津子と麗華は、葉月から贈られてきたゆかりの処刑動画を視聴していた。その中で彩音が乳首と性器に酷い事をされ、さらにゆかりの処刑にも参加させられているのが確認できた。

「やはり蜂須賀さんではなく、西園寺くんあたりにでも行って貰った方が良かったですかね」

「ええ、でももう後の祭りですね。私たちのせいで蜂須賀さんがおかしくなってしまったのなら責任を感じてしまいますよ。少し蜂須賀さんについて、同じクラスのみんなに様子を訊いてみますね」

麗華は彩音のクラスの生徒に、それとなく彩音の様子を尋ねてみるが、ショックを受けているようには感じなかった。

「渡邉さんの処刑でショックを受けたのかと思ったのですが、違うようですね」

「あの噂について真偽を問い質したいのですが、それを気に病んでいるのですかね」

「そうかも知れませんね。蜂須賀さんは、真面目ですから一旦思い込むと一途になりそうですから……。でも、不純異性交遊を放置するわけにはいきませんから、今日の放課後、蜂須賀さんを呼んで確かめてみましょうよ。それが原因で鬱いでいるなら蜂須賀さんも、早くすっきりした方が良いでしょうから」

「そうですね。それでは麗華さん、放課後蜂須賀さんと話しましょう」

理津子と麗華が問題にしている噂とは、彩音と同じクラスの東條佳純が広めた噂だった。元々風紀委員にお仕置きされた彩音が本当の理由を言えずについた嘘が発端だったが、今ではそれが本当の事のように生徒の間で広まっていた。女子中学生が男子生徒とエッチする。風紀委員としては見過ごせない噂だった。もし噂が真実ならば、お仕置きの対象になる。

麗華は放課後、彩音のクラスに行ってみるが、そこに彩音の姿はなかった。麗華は教室にいた生徒に声をかけてみた。

「蜂須賀さんは、このところ当番がない日は、すぐに帰っちゃいますよ。一緒にドーナツ食べに誘っても、付き合い悪いし、忙しいんじゃないですか」

女子生徒は彼氏とデートなんじゃないですかと麗華に言うと、友人たちに声をかけられ教室を出ていった。彩音はもう下校してしまったようなので、麗華は理津子のところへ向かいながら考えた。

・・噂は本当なのかも……。明日は昼のうちに蜂須賀さんを捕まえておこう・・

麗華は廊下を歩きながら考えていた。

★　★　★　★

彩音は、またゆかりの部屋に上がり込み、沙也加に貰った名刺を見つめていた。ここに連絡すれば彩音の望みは間違いなく叶う。毎日、この名刺を眺めているが、まだ沙也加に連絡は入れていなかった。彩音はもう自分の本当の望みは、はっきりと理解していた。性器を破壊されて処刑される。四六時中、その事ばかりを考えている。ゆかりの処刑が頭から離れる事はなかった。それでも沙也加に連絡しないのは、両親の事を考えてしまうからであった。今まで育ててくれた恩を裏切る結果になってしまう。彩音は、その一点だけで連絡を躊躇していたのだ。

・・渡邉さんは凄い。全てを棄ててメス奴隷に堕ちていった。私も渡邉さんのようになりたいけど、期待してくれているお父さんやお母さんを見ると、踏ん切りがつかないよ・・

彩音は、毎日悶々としていた。すぐにでも沙也加に連絡して性器を壊され処刑されたかった。でも、一歩が踏み出せない。その時、ゆかりのランジェリーボックスを漁っていた彩音の手に硬い感触があった。不審に思い彩音は、その下着を取り出してみる。普通の白い綿の下着に見える。

・・渡邉さんらしい真面目な下着だよね・・

純白で股上の深い綿の下着は、穿けば臍の下辺りまで覆いそうな大きさだ。が、そのクロッチ部に埋め込まれた物を見て声が出なかった。下着のクロッチから針が突き出ていた。中心に一列。そして、その両側に一列ずつ。（「変態異常自虐少女ゆかりの記録」１１、１２話）

・・これ、マンコに針を刺す為の下着だよね。もしかして渡邉さん、毎日これ穿いて学校に来てたの・・

ランジェリーボックスの中を探してみると、他にも針付き下着を発見出来た。彩音は興奮で息が止まりそうだった。

・・私も今日から、この下着穿いて過ごそう　・・

彩音は穿いていた下着を脱ぐと、ゆかりの作成した針付き下着を穿いていく。そして、下着を上げていくとチクリとした刺激を性器に感じた。クリトリスの下に1本、尿道と膣の間に3本、そして、会陰に1本。左右の大陰唇に3本ずつ。

・・ここに刺さるんだ……・・

彩音は、ゆかりとまったく同じ事を考えていた。

・・やるよ、彩音・・

彩音は下着の両端を持ち思い切り引き上げた。

「うぐうぅぅっ」

小さく声を上げた彩音は、本当に自分の性器に針が刺さっていると実感するが、それは先日膣内を針で刺された痛みに比較すると微々たるものだった。

・・こんなもんなの。もっと痛い事されたい。早く渡邉さんみたいにマンコ壊されたいよ・・

彩音は自分の性器に針を突き刺しながら、もうその程度では我慢出来なくなっていた。

2、新しい処刑具

2、新しい処刑具

彩音は昼休みに風紀委員の香坂麗華に捕まっていた。校内で流れている噂について訊きたい事があるので、放課後風紀委員の部屋まで来るように言われた。彩音は、あれは咄嗟についた嘘だったと正直に言おうと思った。ゆかりの処刑を観に行く為とは言えず嘘ついたんです。そう言えば、事情を知っている風紀委員長の橘理津子は分かってくれるだろう。でも、と彩音は考える。

・・この噂を利用すれば、私も渡邉さんみたいなメス奴隷に堕ちる事が出来るかも知れない・・

彩音は自分がメス奴隷となり、ゆかりのように公衆の面前で処刑される姿を想像し性器を激しく濡らしてしまっていた。

★　★　★　★

神楽坂沙也加は葉月に呼び出され、葉月の屋敷の地下処刑室へ向かっていた。屋敷の地下には幾つかの処刑用の部屋が作られている。メス奴隷の処刑に使用する部屋は勿論、失態を犯したスタッフの処刑や、沙也加のように外部の者にレンタルする為の部屋もある。その中で今日沙也加が呼ばれた部屋は、葉月が新しい拷問処刑機器を

考え出すのに使用している部屋だった。

・・葉月様、また何か新しい処刑具を開発されたのかしら・・

沙也加はワクワクしながら部屋のドアを開けた。そこには葉月が全裸にハイヒールを履いた姿で立っていた。

「葉月様、何なりと御命令をお申し付け下さい」

沙也加は葉月の前に跪いて頭を下げる。

「呼び出して悪いわね、神楽坂さん。新しい処刑装置を作ったので試して貰いたいのよ」

「た、試すのですか……」

「あらあら、そんなに緊張する事はないわよ。本当に処刑したりはしないわ。あなたは今のところ私の有能なアシスタントでありますからね。私を信じなさい」

「も、もちろん疑ってなんかおりません……。それで、どうすればよろしいですか」

沙也加はしかし、葉月が自分の妹まで処刑してしまったのを知っている（注・凛津の章、１２～１４話）その妹、睦月を処刑したのは自分だからだ。ここで葉月の意に背いてしまったら本当に自分は処刑されるだろう。沙也加は、そんな事にならぬよう細心の注意を払っていた。

「この装置に入って、空いている穴に手足を入れて貰いたいのよ、

ただそれだけ……」

葉月が指差した装置はかなり大掛かりな物だった。長方形の箱を縦にして一辺と中央をくり貫いた〝Ü〟の字型の物体だ。左右の壁の部分に一つずつと底の部分に二つの穴が空いている。

「さあ、神楽坂さん。裸になってその装置に乗って貰えるかしら」

沙也加は服を脱ぐとU字型の真ん中に入り、二つ空いた穴を見る。穴の底は見えず随分深そうだ。それに二つの穴の間には三本の突起が一列に並んでいる。突起と云うよりも杭といったら良いのか。沙也加はそれがメスの股間の三つの穴に入れる杭だと理解した。沙也加は穴に足を入れると、やはり足がつかない。相当深いようだ。そのまま恐る恐る入れていくと、太ももを半分程入れたところでようやく足がついた。沙也加は穴に足を入れたまま立ち上がり、腰を落とし尿道、膣、肛門に三つの杭を入れる。

ヌプッッッウッ！

「うひっっっ」

沙也加の三つの穴に三本の杭が突き刺さる。沙也加は息が荒くなっていた。

「どうです？上手く入りましたか？」

「はい、葉月様。ＯＫです」

「それではそのまま立っていて下さい」

沙也加が頷いて立っていると突然足を乗せている底が抜け、沙也加はガクンと落ちていた。

「はぶうぅぅぅーーーっ！」

股間の杭が根元まで一気に突き刺さる。一番前の杭は膀胱まで突き刺さり、真ん中の杭は子宮口を抉じ開け子宮内にまで到達していた。そして、後ろの杭はS字結腸にまで接触している。

「あぶぶぶぶっ」

無様に声を上げる沙也加の穴に入れている両足首が、カチッとロックされた。これで沙也加はもう足を抜く事は出来ない。すると両側の壁が動き出し、沙也加の体には迫ってきた。沙也加は迫る壁を見て青ざめていた。足が抜けない状態で、このまま左右の壁に潰され圧死させられると思ったが、左右の壁は沙也加の体の真横で動きを止める。

「さあ、早く腕を穴に入れて下さいよ、神楽坂さん」

沙也加は震えながら左右の壁の穴に両腕を入れた。

カチッ

今度は両手首が穴の中でロックされた。沙也加は何をされるか分からず、額に汗を浮かべ震えていた。

「どうです、動けますか？」

沙也加は穴に入れた両手足を動かそうとするが、厳重にロックされ

ており、動かす事も抜く事も出来なかった。

「葉月様、動けません」

沙也加が震える声で答えると葉月は満足したように笑う。

「それでは準備ＯＫです。これから、この処刑具を作動させます。御自分の体で存分に味わって下さいね」

「作動っ?。う、嘘ですよね、葉月様」

しかし葉月は沙也加の口にギャグを装着し塞いでしまう。そして、目の上にも黒い布をぐるぐると巻き付け視覚も封じてしまった。沙也加の目から涙が流れ出て、目隠しの布に染みを作っていく。

・・ううっ、そんな……。葉月様が私を処刑する筈がない。葉月様を信じるのよ・・

沙也加は葉月を信じようとするが、穴に入れた手足に何か液体のようなものがかかってきて、忽ちその液体で沙也加の手足は包み込まれていた。沙也加の手足は壁と床の穴の中で液体にどっぷりと浸された状態だ。

「おごうぅぅぅーーっ！おごごごうぅぅぅーーっ！」

その液体で刺すような痛みととんでもない熱さが手足を襲い沙也加が悲鳴を上げるが葉月は笑って見ていた。

「どうです?苦しいですか神楽坂さん」

葉月は涙を流し苦しむ沙也加の顔を満足気に眺めると鞭を手にし、動けない沙也加の体に鞭を叩き込む。

バシィッ、バシッ、バシッ、バシッ！！

「おごおぅぅぅーーーーっ！！」

沙也加は無様に涙と鼻水を流し泣き叫んでいた。

「ああ、良いですよ神楽坂さん。やはり、あなたは私の優秀なアシスタントです」

葉月はひとしきり沙也加の体を鞭打つとリモコンのスイッチを押した。その途端、壁と床に満たされていた液体が排出され、沙也加の手足を襲っていた痛みと熱さは消え、沙也加は安堵の表情を浮かべていた。そして、沙也加の手足のロックも外される。

「もう、出られるでしょう。感想は如何ですか」

沙也加は真っ赤になって水脹れも出来ている自分の手足を眺める。熱湯のような物で手足を浸けられた感覚だ。でも、これが処刑具だとは沙也加には思えなかった。恐る恐る葉月に、その旨を伝えると葉月は大きく笑う。

「本当に処刑はしないと言ったと思いますが……。それだけ恐怖を味わえたという事ですか。それでは合格ですね。この処刑具は手足を溶解する処刑具ですよ。今日はただ熱湯を入れただけですが、本来は酸を注入するのですよ。酸で満たして手足を溶かしていくのです。一気に切断するのも良いですが、こうして少しずつ溶かしていくのも趣(おもむき)があるとは思いませんか。やられる方も、一気に切断され

るより、長く苦しむ事が出来て嬉しいでしょう。見る方も然りですね。苦しむメス奴隷の姿を長く楽しむ事が出来ます。それに酸の濃度を変える事で溶かす時間を変えられるのですよ。フレキシブルで良いでしょう。それで、神楽坂さんには、この処刑具のチェック用のメスの確保もお願いしたいのですよ。チェック用ですから、あまり贅沢は言いませんが少し数が多いと助かりますね」

「は、はい、葉月様。喜んで……」

沙也加は膝をつき頭を下げて即答していた。

・・葉月様は私を頼りにしてくれている。こんな名誉な事はありません。メス奴隷確保、早急に手をうちましょう・・

沙也加は頭の中に、あるメスの顔を思い浮かべてニヤリと笑う。

・・そろそろ、狩りますか・・

葉月は沙也加に、よろしくと告げるとカツカツとハイヒールの音を響かせて部屋を出て行った。

3、彩音の嘘（前書き）

「変態異常自虐少女ゆかりの記録」みたいな感じになっていますが、間違いなく「檻の中の幸福」ですので安心して下さい。
彩音には今のうちに楽しんで貰いましょう。

3、彩音の嘘

3、彩音の嘘

彩音は放課後、風紀委員の委員会室で、橘理津子と香坂麗華と向き合っていた。そして、理津子が彩音を見つめて問いただす。

「蜂須賀さん、校内で流れているあなたの噂は耳に入っていますか」

「はい、なんとなく何を言われているのか分かっています」

「この噂は本当なのですか。正直に答えて下さいよ、蜂須賀さん」

彩音は、言葉に詰まる。正直、まだ迷っていた。噂は嘘であるけれど、そう言ってしまっては話はここで終わってしまう。そうなればまた、いつもと変わらない日常が始まるだけだった。

・・私は渡邉さんのようなメス奴隷になりたい。渡邉さんのようにマンコ壊されて無様に笑われながら処刑されたい。どんなに命乞いしても許されずに処刑されたい・・

彩音は、そう思うだけで自分の性器が濡れてきているのを感じた。彩音はごくっと唾を呑むと顔を上げる。そして、しっかりと理津子と麗華の顔を見つめた。

「はい、本当です。間違いありません。私は校則に背いて男子とエ

ッチしました」

「本当なのですか？私には信じられないのですが」

麗華が彩音に疑問を投げかけるが、彩音は本当ですと繰り返すばかりだった。

「残念ですね、蜂須賀さん。なぜそんな事を？せっかく今まで真面目に生きていた事が全て台無しになりますよ」

「仕方ありません、自分でした事ですから……。エッチしたくて我慢出来なかったんです。だから誰でも良かった。なので、相手の顔を名前も憶えていません」

当然、これは嘘だ。そんな相手などいない。彩音は適当に名前を言って、もしその名前の男子が実際にいた場合、迷惑をかけてしまう事を怖れて、顔も名前も知らないと答えていた。

「そんなにエッチしたかったのですか……。あと2年と少し我慢すれば高校生。そうすれば好きなだけエッチする事が出来るというのに……。しかし、事実であれば仕方ありません。校則違反です。蜂須賀さん、あなたはお仕置きの対象となりますよ」

「はい、申し訳ありません」

彩音はうつ向いていた。理津子と麗華はため息をつくと、もう帰って結構ですと告げた。彩音が席を立ち、一礼して外に出ようとした時理津子が呼び止めた。

「蜂須賀さん、それでも私にはまだ信じられません。それで、明日

からはZクラスに行って貰います。そこで、しばらくあなたの様子をみようと思います」

分かりましたと彩音は返事をして部屋を出ていった。

★　★　★　★

校門を出た彩音は、そこで待っていた青柳広子に驚いていた。

「風紀委員に呼ばれていたけど、どうなったの？」

広子は心配そうな顔で、彩音の顔を覗き込む。

「うん、明日から私、Zクラスだって……」

「えっ……」

広子は絶句していた。彩音たちの通う西園寺グループのこの桜桃中学校は、基本的に優秀な子女が集まる中学校として名が通っている。だが頭脳が優秀である事と、人間として優秀である事は違う。Zクラスというのは、この中学校の中で人間的におかしい、異常であると判断された生徒が編入されるクラスであった。

「どうして、蜂須賀さんが……？」

「あの噂が本当だから、私、本当はビッチだから……。マンコの穴に入れられるの大好きなの。青柳さんも、もう私と口をきかない方がいいよ。私と同類と思われちゃうよ。風紀委員の人たちが見てい

るかも知れないし」

彩音にそう言われると広子も怖くなってきた。風紀委員のお仕置きも嫌だし、Zクラスになんか行かされたら人生が終わってしまう。広子はひきつった笑顔で彩音にサヨナラと言うと逃げるように駆け出していた。小さくなっていく広子の後ろ姿を見て彩音は安堵していた。

・・青柳さんを巻き込む訳にはいかないもんね・・

そして、彩音は自宅マンションとは方向の違う繁華街に向かって歩いていた。

・・今日中にやっておく事がある。それをやっておかないと、私の嘘がバレちゃうかも知れないから・・

彩音は、普段なら絶対に近付かない繁華街の細い裏通りに入っていた。そして、目当てのものを見つけた。

・・いた……。あの男たちならちょうどいいよ・・

彩音は裏通りのゴミ箱に腰を下ろし、たむろしている三人組の男に目をつけていた。三人共黒いラフなパンツに派手なジャケットを羽織っている。彩音は男たちに近付くと、ニコッと微笑みかけた。

「あの、私とエッチしませんか」

「はっ？」

男たちは彩音の姿を舐めるように見る。セーラー服姿の彩音はわざ

と胸を突きだし両腕を後ろで組み、足を開いていた。

「おい、待て。コイツ、おかしいぞ」

すぐに襲われると思っていた彩音だったが、男たちは意外に冷静だった。

「中学生くらいか。おい、学生証見せろ」

彩音は学生鞄から学生証を取り出して男たちに掲示する。

「本物だな。しかもコイツ、あの桜桃中学の生徒だぞ」

「マジか、信じられねえな」

それはそうだろうと男たちの反応を見て彩音は思った。桜桃には〝善良な教育〟や〝上品〟という意味があり、それを学校名にしている彩音の中学は、世間のイメージもその通りのものだった。彩音は思う。

・・そこに私みたいな淫乱な生徒がいるなどと信じられないでしょう。でも、それが事実なの。どの世界にも必ず何パーセントかは異端者は混じっているの・・

「よし、それじゃ動画撮らせろ。あとで変な事、騒がれたら面倒だからな。自分から誘ったとはっきりと口で言えよ」

彩音は右手で学生証を顔の横に持たされ左手で自分のスカートを捲らされた。そして、足を開くよう命令される。彩音の穿いている白い下着を見て男たちは、桜桃中学の生徒だけあって清楚な下着だと

喜んでいた。その下着が普通の下着ではないと気付かずに……。

「よし、その姿勢のまま喋れ、ゆっくり分かるように喋れよ」

「初めまして、桜桃中学Ｚクラスの蜂須賀彩音と申します。このあと、私からお願いして、マンコの穴を犯して貰う事になりました。彩音のマンコは嬉しくて、もう濡れてしまっています。早く彩音のマンコの穴を思い切り貫いて欲しいです。よろしくお願いします」

彩音が喋り終わった時、そのままションベンしろと書かれた紙が男たちから出された。彩音は下腹部に力を入れると、シャァァーッと下着を突き抜けて尿が溢れ、太ももの内側も濡らしていく。男たちは、セーラー服姿の彩音が立ったまま足を開いて放尿する姿を見て喝采を送っていた。

「ようし、それじゃあ拐っていって楽しもうぜ」

彩音は男たちに抱えられ黒塗りのワンボックカーに連れ込まれると、そのまま何処かに運ばれて行った。その時、路地の陰から人影が現れた。

・・ふむ、なかなか面白い事になっていますね・・

人影は口許に笑みを浮かべ、連れ去られていく彩音を楽しそうに見つめていた。

4、犯されまくる彩音（前書き）

今回も別作品のようになっていますが、後に必要となるエピソードなのでもう少し我慢して下さい。すいません。
学園モードが終われば、いつもの展開に進んでいきます。

4、犯されまくる彩音

4、犯されまくる彩音

彩音は男たちに車に詰め込まれ運ばれていった。目隠しをされてしまった為、何処を走っているのかさえ分からない。黒塗りのワンボックスカーは男たちの興奮を表すように、かなりのスピードで疾走していく。男たちは、これから自分達が行う行為を想像し有頂天になっていた。だから、男たちの車の後ろをついてくる、同じく黒塗りの高級外車ベントレーの存在には気付いていなかった。
男たちの車は町外れの廃工場に入って行った。ここは彼らが狩ってきた女性を犯す為のいつもの場所だった。男たちの車が工場内に入って行くと、そこにいた男たち数人が出迎える。男たちは車を停めるとスライドドアを開き、目隠しして腕も縛ってある彩音を外に連れ出した。そして、地面の上に転がすと目隠しを外した。

「おりょっ、何っ、今日は可愛いメスじゃん」

「しかも、ずいぶん若そうだし、経験も少なそうだな。もう、ビッチは飽きたから良いじゃん」

工場内で待ち構えていた男たちが、興奮して彩音を舐めるように視姦するが、一人の男が冷静に言う。

「セーラー服だけど学生なのか。こんなの拐ってきたら、ヤバくないか？」

心配そうに言う男に、車で来た男たちは心配するなと答える。

「こいつが自分で犯してくれと言ってきたのさ。心配する事はない。証拠の動画も撮ってある」

「そうなのか、それじゃ御要望通り、普通に生活出来なくなるほど犯し続けてやろうぜ」

もう歯止めの効かなくなった男たちは彩音に襲いかかる。彩音はスカートを捲られ、あっという間に下着を脱がされていた。そこで、男たちは違和感に気付く。彩音の下着を乱暴に脱がせた男の手から血が流れていた。

「いてぇ、なんだこれっ？」

男が彩音から脱がせた白い下着を確認すると、そのクロッチ、股布の部分に針が埋め込まれていた。男たちは、驚愕して彩音の顔をガン視する。

「このメス、おかしいと思ったけど、本当に頭おかしい奴じゃねえか」

「可愛い顔して頭がおかしいとはな。マンコに針刺して喜んでる変態メスか」

「普通の変態じゃねえな。俺たちにも、こんな事されたいんだろうよ」

「ははっ、おもしれえ。俺、メスのマンコに針刺して針山にしてみ

たかったんだ」

「良いじゃん、やっちまおうぜ。このメスも期待して来てんだろう」

彩音は大騒ぎする男たちを見て、ため息が出ていた。

・・どうして、この男たちはこんなに馬鹿なのだろう。グダグダ言ってないで、私のマンコ早く犯してくれないと困るんだけど・・

彩音は、もう少しまともな男にすれば良かったと後悔していた。風紀委員に男子とエッチしたと嘘をついてしまった以上、実際にエッチしてその感覚を把握しておかないと、嘘が露見してしまう可能性がある。そこで彩音は考えた。

・・逃げ出す振りをすれば、慌てて押さえつけて犯してくるかも・・

彩音は、針を買ってこいとか何時までも騒いでいる男たちから逃げるように立ち上がり走り出した。男たちは彩音が逃げるとは思っていなかったようで慌てて追ってくる。彩音は両手を縛られているため、すぐに追い付かれ押さえつけられた。

「自分から誘っておいて逃げるとか、あり得ねえんだけど」

「おい、まず犯しておこうぜ。足、広げて押さえろっ」

男の亀頭が彩音の性器に当てられ、男は自分のモノを掴み彩音の性器の割れ目に沿って亀頭で擦り刺激する。同時に別の男が彩音のセーラー服を捲りブラをずらすと、指でコリコリと彩音の乳首を刺激しだした。

「あっ、おっ、おっ、おっ」

彩音は小さく声を上げ始め瞳は潤み、乳首とクリトリスは硬く勃起し、バルトリン腺からは粘液を大量に分泌しだしていた。彩音の割れ目を亀頭で擦り刺激して男は、自分の陰茎が彩音の愛液でねっとりになったのを確認し、彩音の膣口に亀頭の先端を当てる。

「いくぞっ、メス」

ズリュウウウッ

「あうぅぅぅっ」

彩音の膣に男の硬く勃起した陰険が根本まで深く突き挿され、男は激しく腰を動かしだす。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

淫靡な音が響き、男は更に激しく腰を振る。ディルドゥを挿れたり、膣に針を刺されたりした経験のある彩音であるが、異性との性交は初めてであった。その初めての快感に声が漏れてしまう。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

彩音は自分の内に熱い刺激を感じていた。

・・私、本当に中に出されちゃったんだ。これで、私、本当に校則

違反した女子だ・・

彩音は何故か涙が溢れてきていた。

「おいおい、このメス泣いてるぞ」

「よほど嬉しかったんだろう。ひひっ、もっと泣かせてやろうぜ」

「泣き顔も可愛いじゃねえか。そそるな、このメス」

次の男は彩音の頬をパンパンと打ちながら挿してきた。

「おっ、なんかマンコ締まった。具合良いぞ、これ。そういえば、首絞めながら犯すと具合いいって聞いた事あるな」

男は押さえつけられ抵抗出来ない彩音の首を両手で絞める。彩音の顔が酸欠で変色してきた。

「おい、本当に具合いいぞ」

男は興奮して叫ぶが、彩音は息が出来ず白眼を剥いていた。

「おいおい、あとが残ってるんだ。殺すなよ」

他の男が止めようとするが、男は興奮して腰を動かし続けていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は彩音の中に放出すると、スッキリした顔で次の男に場所を譲っていた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

彩音は、ようやく呼吸が出来るようになり大きく口を開けて息をしていると、そこに男の陰茎が突き挿された。それは彩音の喉奥まで容赦なく突き挿される。

「おごっ、おごっ、おごっ」

彩音は頭を押さえつけられ、そのまま喉も犯されていた。食道の奥まで挿入され、彩音はまた呼吸が出来なくなっていた。

「おおっ、このメスのクチマンコも具合いいぞ」

興奮する男とはまた別の男が、彩音の尻を拡げると、彩音の小さな肛門にも亀頭を押し付け、突き射れた。

「ケツマンコも良いわ。やっぱり、まだ使い込んでねえメスはいいな。おい、マンコの穴が寂しがってるから、誰か挿れてやれよ」

すぐ別の男が彩音の膣にも突き挿していく。彩音は男たちに、喉、膣、肛門を同時に犯されていた。

「3穴、同時に犯されて、このメス嬉しそうだな」

男たちは代わる代わる彩音の穴を犯し続け、彩音は精液袋のように口や膣、肛門から精液を溢れさせていた。それでも、まだ彩音は犯され続ける。彩音はもう意識が失くなったように、ぐったりして男たちのされるがままになっていた。その動かない彩音にも容赦なく男たちは襲いかかり犯し続けていた。

5、彩音の後悔

5、彩音の後悔

彩音の穴は徹底的に休みなく犯されていた。鼻の穴や耳の穴は勿論、尿道口にも男の性器が当てられ射精され中に注入されていた。

「おーい、せっかくだからこいつの子宮の中にも直接入れてやろうぜ。漏斗とチューブ、あったよな」

男たちはぐったりしている彩音の腰を上げ、足を開かせ性器が上を向くように押さえつけると、太い鉄パイプを彩音の膣に無理矢理挿していく。そして、懐中電灯で彩音の桜色の子宮頸部を確認すると、その小さな子宮口にチューブを奥まで挿入し、そこに漏斗を取り付ける。

「ようし、それじゃ順番に注入してやろうぜ」

男たちは彩音の子宮に直結した漏斗に次々に射精していく。漏斗に溜まった精液は彩音の子宮の中に流れ込んでいった。さんざん男たちに犯されまくった彩音は、もう自分が何をされているのか分からなかったが、それでも自分がまだ男たちの玩具にされていると理解していた。

・・そろそろ私に飽きたでしょう。もう解放して……・・

彩音はもう男たちから解放される事を願ったが、彩音はあまりにも男たちを軽く見ていた。集団でこうなってしまった男はもう止まらない。最後の最後までいってしまうのだ。

「おい、このメス吊るせよ」

一人の男の提案で彩音の首にロープが巻かれる。そして、頭上を通っている梁にロープが通され彩音の体が吊るされる。彩音は辛うじて足の爪先が届く位置で首吊りにされていた。服ももうセーラー服もスカートも脱がされて全裸にされている。両腕も高手後手にきつく縛り直されていた。

「さあて、また楽しもうか」

男は彩音の太ももに手をかけ持ち上げると、そのまま彩音の膣に自分の大きく勃起した性器を突き挿した。彩音は首吊り状態で犯されていた。

「かひゅっ、かひゅっ、かひゅっ、かひゅっ」

ロープで首を絞められている彩音はおかしな声を上げ、涙を流し口から舌を突き出していた。

「おおっ、締まりいいぞ、これっ」

「どれどれ」

もう一人の男が後ろから彩音の肛門に突き挿していく。彩音は首吊りにされたまま膣と肛門を犯されていた。それからも彩音は代わる代わる犯されていく。

「いやあ、さすがに疲れたな。そろそろ終わりにするか」

「どうする？もう面倒だから殺しちまおうか」

「じゃあ、このままロープ引いて首吊りにするか」

「おい、錘探して来いよ。足にぶら下げてやろうぜ」

男たちは廃工場の中からコンクリートブロックを見つけてきて、彩音の足に厳重に縛りつけた。そして、ロープを引き彩音を完全な首吊りにする。錘をつけられた彩音はピーンと一直線に体を伸ばし、もう死へのカウントダウンが始まっている状態だった。何も抵抗出来ず哀れに首吊りにされている彩音の体に、男たちは更に木刀を叩き込んだり煙草の火を押し付けたりと暴虐の限りを尽くしていた。

「そろそろ、死ぬんじゃね。これで止めを刺してやるか」

男はネイルガン、釘打ち機を持ち出してきた。

「これで頭に釘を打てば、このメスは終わりだ。フランケンシュタインみたいに何本も射ち込んでやるよ」

楽しそうにネイルガンを彩音の額に当てる男の目は薬でもやっているかのように焦点が合わず血走っていた。首を吊られ朦朧とする意識の中で彩音は後悔していた。こんな馬鹿な男に、こんな馬鹿な殺され方をするなんて悔やんでも悔やみきれない。こんな事なら両親など構わずに沙也加に連絡して性器を壊され処刑されれば良かったと涙が出てきた。

・・私は本当に馬鹿……。渡邉さん、みたいに全てを捨てれば良かったんだ。こんな殺され方じゃ詰まらないよぅ。私を殺して良いから、マンコ壊してからにして……。せめてマンコを串刺しとか鋸挽きとか考えられないの。どこまで馬鹿なの。せっかく女の子を殺すんだよ。女の子の大切で大事な処を壊してよ。マンコ、犯すだけで満足なの・・

彩音は涙が止まらなかった。

・・嫌だ、こんな死に方嫌だよぅ。私は、マンコ壊されて処刑されたいの・・

しかし、男は彩音のそんな気持ちなど分かる筈もなく。彩音の額に当てたネイルガンのスイッチを押す。

パシュッ

小さな音が響いた。彩音は何が起こったのか理解出来なかった。彩音の額にネイルガンを当てていた男が、自分の額から血を流して倒れていった。そして、彩音の首を吊っているロープも切断される。

パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ

続いてまた何かの発射音が響き、男たちは次々に倒れていく。どうやら、誰かが消音器（サイレンサー）付きの拳銃で男たちを射殺しているようだった。

「近藤さん、2、3人は残しておいて貰えるかしら。少し体を動かしたいのよ」

女の声が聞こえた。彩音は、その女の声に聞き覚えがあった。

「畏まりました、神楽坂さん」

パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ

男たちは3人を残してみんな倒れていた。が、1人の男は倒れたまま呻き声を上げている。

「あら、近藤さん。一人生きているわよ」

「申し訳ありません、神楽坂さん。私とした事が急所を外したようです」

パシュッ

近藤は倒れて呻き声を上げている男に新たに銃弾を打ち込む。男は静かになり動かなくなった。

「な、なんだお前らっ！こんな事して、ただで済むと思ってんのか。俺たちは、この辺を仕切っている半グレ集団のブラックデビルだ。もう、生きて帰れると思うなよ」

残った男たちはいきり立ち、チャキッと飛び出しナイフを手にする。

「半グレですって……。そんな中途半端な輩（やから）が地獄の闇より黒い私たちに何が出来るというのです。拳銃を持っている私たちに、そんなナイフで向かってくるなど頭が湧いているようですね」

・・あの時の女の人、沙也加さんだ・・

彩音は腕を組んで悠々と構えている沙也加を見て、何故沙也加がここにいるのか理解出来なかったが、それでもこれで自分は助かったのかも知れないと安堵していた。

「へっ、銃を持ってるからって余裕みせてると泣きをみるぜ」

男たちは狙いを付けられないように動きまわり距離を詰めてくる。
そして、一人の男が床に転がっていた紙袋を蹴り上げた。

ぶわっ

紙袋が破れ、中に入っていた石灰が辺りに撒き散らされる。それは、まるで目眩ましのように沙也加と近藤の視界を奪った。男たちはナイフを振りかざし沙也加に襲いかかる。

「　いひっ……」

シュパパパッッッ

男たちのナイフの刃は切断され、男たちの体は切り刻まれていた。

シュパッ

そして、男たちの足と腕の腱が切断され、男たちは芋虫のように床に転がった。

「いひひっ、久しぶりに切り刻むと快感が走るわね。ゾクゾクするわ。私は葉月様のように強くはないから素手で戦おうなんて思わないわ。このタングステン鋼のメスで切り刻んであげる。あなたたち

のナイフのようなナマクラと違って良く切れるわよ」

両手にメスを持った沙也加は一人の男に近付いて行くとパンツと下着を切り裂き下半身を露出させる。

「やめろぅ、なにするんだっ。ちょっと止めてくれっ、そんなことっ」

男は悲鳴を上げ泣き出していたが、沙也加は男の陰茎を掴むとその根元にメスを当てた。そして、容赦なくメスを滑らせる。

シュパッ

「ひぎゃあーーーーっ！」

性器を根本から切断され男は絶叫し、血を噴き出しビクビクと体を痙攣させていた。沙也加は下着を脱ぐと、なんと切断した男の陰茎を自分の膣に挿入していた。

「こんな、ふにゃちん一本じゃ火照りが治まらないわね。もう一本確保しとこうかしら」

沙也加は倒れているもう一人の男のパンツと下着を剥ぎ取った。男はもう恐怖で声も出せず。目に涙を溜めて、ぶるぶる震えていた。

5、彩音の後悔（後書き）

この事件が後に重大な結果をもたらす事になります。

6、Zクラス

6、Zクラス

彩音は思いもしない神楽坂沙也加に助け出されていた。彩音に用があってこの街に来たけれど、ちょうど街で見かけたので追ってきたという事だった。真意は定かではないが、沙也加に助けてもらったのは確かだった。彩音はこの時点でもう、自分の性器を壊して貰うのはこの人だと確信していた。

「彩音ちゃんが楽しそうだったから黙って見ていたけど、殺されてしまうのはちょっとね。彩音ちゃんが殺されたら私が楽しめなくなってしまうからね。ああ、大丈夫よ。後始末はきちっとやっておくわ。ついでに、あの何とかいう半グレも潰しておくから彩音ちゃんは何も心配しなくていいわよ。もう葉月様に連絡して、あの半グレどもに関係している者は、親兄弟親類縁者含めて全て始末して貰うよう伝えてありますからね。3日もすれば、きれいにこの世から消えているでしょうね。それで、用というのは彩音ちゃんのお友だちでも知り合いでも、メス奴隷として何人か確保して貰いたいのよ。葉月様から頼まれたものでね。新しい処刑具のテストに使ってみたいそうよ。公開する訳ではなくテストだから、どんなメス奴隷でもいいわ。うふっ、だからお願いするわね」

命を助けて貰った沙也加の頼みであるので、彩音は勿論引き受けていた。もう彩音の頭の中には、一人の女子の名前が浮かんでいた。

・・渡邉さんにも酷い事していたし、私にも……。ちょうど良いか

らここで消えて貰うね。私と渡邉さんにした事、後悔しながら死んでいきなさいね・・

彩音は残酷に笑っていた。その彩音の笑顔を見て沙也加も微笑む。

「ふふっ、彩音ちゃんも楽しい思いして興奮しているみたいね。どう、ここで彩音ちゃんのマンコ、処刑して壊してあげようか」

「えっ、ここで？今すぐですか？」

彩音はドキドキしていた。男たちに犯され精液まみれのまま性器を壊される。彩音は沙也加のメスで切り裂かれた自分の膣や子宮から、ドロリと精液が溢れ出す様子を想像し息が荒くなってきていた。

「ハァハァハァハァ……。さ、沙也加さん……。お願いしても良いですか、私のマンコ、渡邉さんみたいに徹底的に壊して下さい。何も残らないほど、跡形もなくマンコ全てを消滅させて下さい」

彩音は沙也加の瞳を見てすがるように呟いた。沙也加は満足したように思わず笑みが零れてしまう。

「いひっ、冗談よ、冗談。ここには設備もないしね、彩音ちゃんの望むような処刑は出来ませんからね。私も我慢するから、彩音ちゃんも我慢しなさい。今日は送ってあげるから。途中でシャワーも浴びましょう、お洋服も買ってあげるわ」

沙也加は彩音に告げると、近藤に大きなバスタオルを持って来させ彩音に羽織らせ立ち上がらせる。

「はい、ごめんなさい。沙也加さん。我慢します。それなら一つお

願いがあります。渡邉さんの処刑の時、私のマンコに挿してくれた、あの針が飛び出る性具を貸して貰えませんか。マンコの中に針が突き刺さる感覚が忘れられないんです」

「あら、良いわよ。それなら今持っているから差し上げるわよ。他ならぬ彩音ちゃんのお願いですからね」

彩音は嬉しそうに沙也加に頭を下げていた。

彩音を自宅マンションまで送り届けた後、車の中で沙也加は興奮が治まらなかった。

・・あのメス、うまい具合に育っている。６９番の処刑の時はまだ蕾だったけど、今では自分からマンコ処刑を望む程に……。もう十分に熟れた。こちらも準備を整えましょう・・

沙也加は目の前の御馳走を我慢している感覚で涎が垂れていた。

「近藤さん、今日は虚亡の日（六曜の仏滅）だったわね。それなら、開催されているでしょう。オークション会場に行って貰えるかしら」

「畏まりました、神楽坂さん。安く手に入れられると良いですね」

沙也加は、この体の火照りを抑える為、安いメス奴隷を手に入れ処刑しようと考えていた。そして、安価でメス奴隷を落札した沙也加は、その日のうちに処刑してしまった。以前の沙也加であれば、元を取る為に出来るだけ長く楽しむのであるが、もう我慢出来ない程、興奮してしまっていたのである。

★　★　★　★

「蜂須賀さん、今日からあなたのクラスになるＺクラスの教室がここです」

Ｚクラス担任の西園寺響子先生に案内された場所は、桜桃中学校本校舎とは離れた校庭の外れに残っている旧校舎だった。そこが彩音が編入されたＺクラスのある場所だったのだ。一般の生徒はほとんど近付かない旧校舎に彩音は案内されて初めて来ていた。

・・ここが私が入るクラスなの。それにしても、この学校を経営している西園寺グループの人がなぜＺクラスの担任なのだろう・・

彩音は不思議に思ったが、それも何か教育方針の一貫なのかと考えていた。響子がドアの前で立ち止まったので彩音も止まる。古ぼけた校舎の古ぼけた教室。生徒がいる筈なのに、シーンと静まり返っている。異様な気配が漂っていた。

「さあ、それでは入りますよ。蜂須賀さん、覚悟を決めて下さいね」

彩音が頷くと響子は教室の中に入っていった。教室の中には４人の生徒がいた。

・・たったこれだけ？・・

彩音は思ったが、このクラスは通常のクラスではない。広子が言っていたように、このクラスに編入されたら人生終わりと言われているクラスだ。人数が少なくて当たり前。数が多かったら不味いだろう。

「本日から皆さんの学友になる蜂須賀彩音さんです。彼女はどうやらマンコの穴に入れられる事が大好きで堕ちてしまったようなので、皆さん、よろしくね。特に清家君は女子のマンコが大好きだから嬉しいでしょう。私の見ているところであれば、遠慮は要りませんから、蜂須賀さんの穴を犯してあげて下さいね」

・・えっ？・・

彩音は驚いて言葉が出なかった。先生公認で校則違反。彩音が響子の横顔を見つめていると、視線に気付いた響子が彩音の顔を見て微笑む。

「清家君はね、女子のマンコが大好きでね、クラスの女子のマンコに拳突っ込んで壊しちゃったのよ。それで、問題有りとの判断でこのクラスに来たのよ。このクラスでは問題ある生徒の、問題を抑えるのではなく解放してあげるのよ。だから蜂須賀さんも、好きなだけ犯して貰うといいわ。だけど、避妊具は着けて貰うわよ。まだ、あなたたちは子供ですからね。さて、今日の自慰当番は小宮山君ね。それでは授業を始めますよ。蜂須賀さんは空いている好きな席に座って下さいね」

彩音は取り敢えず、ちょうど中央付近の席に着いた。すると、彩音と入れ違いに一人の男子が教壇に立った。

「はい、それでは小宮山君、自慰して下さい」

小宮山は頷くと、一人の女子に向かって手を伸ばす。

「今日は真理ちゃんの匂いでしますね、先生」

真理と呼ばれた女子は、もう慣れているようにスカートを捲り、下着を脱ぐと小宮山に手渡した。小宮山は受け取った下着を頭に被ると大きく深呼吸して真理の匂いを吸い込む。それから、制服を脱いでいき全裸になった。そして、彼は自分の硬く勃起したモノを右手でしごき始めた。

「ハァハァハァハァ」

小宮山の息が荒くなり右手の動きも早くなる。すると、もう一人の女子が小宮山の前に跪(ひざまず)いた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

小宮山は盛大に射精していた。小宮山の飛ばした精液は、跪(ひざまず)いていた女子の顔面にベッタリと付着しているが、その女子は嬉しそうに恍惚の表情を浮かべていた。

7、クラスの日常（前書き）

今回、スカ要素強めです。
そちら方面に耐性のない方は、気分が悪くなる可能性がありますので、スルー推奨です。

7、クラスの日常

7、クラスの日常

教壇の上で自慰を済ませた小宮山は、まだ教壇から降りずにいた。射精して萎んでいた小宮山の陰茎がまた硬く勃起していく。

「あらあら、小宮山君。まだ足りないのかしら」

響子が呆れたように言うが、小宮山は全裸で女子の下着を頭に被ったまま性器を勃起させ彩音を指差す。

「先生、僕。蜂須賀さんのおしっこが飲みたいです」

「えっ……」

彩音は小さく声を出していたが、響子は彩音に前に来るよう指示する。

「蜂須賀さん、この机の上に乗って腰を降ろして足を開きなさい。みんなに股間が良く見えるように座るのですよ」

彩音は、よく言う〝M字開脚〟の状態で机の上に座っていた。すると、男子生徒の清家が彩音を後ろから羽交い締めにし、女子二人が左右から彩音が足を閉じられないように押さえつけた。そして、小宮山が彩音の股間に顔を近付け、しみじみと彩音の白い下着に包ま

れた股間を見つめて、鼻から息を大きく吸った。

「うーん、蜂須賀さんのマンコの匂い。とても良い匂いだよ。人によってマンコの匂い、色々だけど蜂須賀さんのマンコは僕の好きな匂いだ。じゃあ蜂須賀さん、早くおしっこして」

小宮山は彩音の股間に口を付けていた。そこで、小宮山は一瞬あれっという顔をするが、そのまま彩音の股間に口を押し付けていた。

「ほら、蜂須賀さん。早くしてあげなさい。小宮山君は排泄物フェチなのよ。女子の排泄物が大好きなの。女子の使用した下着のコレクターでもあってね。まあ、それを買っているうちは個人の趣味として良かったのだけどね。盗みに入るようになるとね。それで、このクラスに来たわけ。ほら、小宮山君が待ちわびているわよ。早くおしっこ出しなさい、蜂須賀さん」

彩音は別に下着を穿いたまま尿を漏らす事に抵抗はなかった。歩きながら放尿しているくらいだ。が、自分の尿を異性に飲まれた経験はなかった。

・・本当に私のおしっこ飲むの？・・

彩音は初めての経験でドキドキしていた。自分の股間に感じる男の唇が早くしろと急かしているように動く。

「あっ……」

ショオォォォッ

彩音の下着から尿が染み出て小宮山の口に入っていく。彩音は尿以

外のものも漏らし下着を濡らしてしまっていた。小宮山は美味しそうに彩音の尿を飲みながら、右手で自分の硬く勃起したものをしごいていた。

シコッ、シコッ、シコッ、シコッ、シコッ、シコッ、シコッ、シコッ

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

小宮山の尿道から激しく精液が迸りでる。すると彩音を羽交い締めにしていた清家が響子に訴える。

「先生、俺も蜂須賀の穴に入れてえ。こいつ、処女じゃねえなら良いんだよな」

「ふふ、良かったわね、清家君。水野さんと水鳥川さんは処女マンコだから、今まで我慢してたものね。やっぱり先生のマンコより若い人のマンコの方が良いわよね」

・・この先生、生徒と寝ちゃってるの・・

しかし、誰も驚いていないと云うことはそれが日常なのだろう。彩音は、成る程と思っていた。

・・青柳さんが、このクラスに入れられたら終わりと思うのも頷けるよ・・

後で聞いた話では男子二人は清家正、小宮山悟。そして、女子二名は水野真理（注）、水鳥川凛で女子二人は処女という事だった。基

本このクラスは男子が女子を自由に犯して良いルールであるが、女子が処女の場合は、女子に拒否権がある。しかし、それでは性癖が抑圧されてしまうので、響子が女子の代役をしていたのである。そこへ処女ではない彩音が入ってきたので清家は喜んだのも当然であった。

「ようし、女子二人、蜂須賀の足を開いて押さえてくれ。特等席で犯されるマンコ見せてやるよ。先生と小宮山は蜂須賀の腕と口、押さえてくれ」

清家の号令で彩音は4人がかりで机の上に仰向けに押さえつけられる。

「んっ、んっ、んっ」

彩音は抵抗しようとするが1対4では動く事は出来ない。それどころか響子は彩音の頬を激しく打った。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「ううっ……」

彩音の瞳から涙が零れ落ちるが、響子は彩音の口を強く押さえつける。

「いい、蜂須賀さん。あなたは処女じゃないのだから、もうただの穴なの。挿して貫いてもらうだけの、ただの穴。自覚しなさい、自分はただの穴だと。あなたは穴があるから価値があるだけの、ただのオナホール。ふふ、大丈夫よ。そのうちに慣れてくるわ」

清家は、その間自分の勃起した性器にスキンを装着していた。

「この極薄スキンだとダイレクトにマンコの中を感じられて具合がいいんだ」

清家はハサミで彩音の白い下着を切り裂くと剥ぎ取った。

「！！！！！！！！」

全員の目が点になっていた。

「蜂須賀さん、あなたは私の想像以上の怪物ですね。これは教育しがいがありますね」

響子は興奮した口調で呟いた。剥ぎ取られた彩音の下着のクロッチ部には針が埋め込まれており、彩音の膣には太い性具が挿入されていた。

「これじゃ蜂須賀さん、清家の粗チンじゃ満足出来ないわね」

水鳥川凛が笑いながら言う。

「そうですね。蜂須賀さん、凄いです。マンコに針刺していたんですか」

水野真理が感心したように呟く。

・・僕が感じた違和感はこれだったのか・・

小宮山悟は彩音の股間に口を付けて尿を飲んだ時の感覚を思い出し

ていた。

ただ一人、清家正だけは彩音を化け物でも見るように退いていた。勃起していた性器も萎れてしまっている。

「あれっ、ここについてるボタンはなんだろう?」

凛が彩音の膣に挿入されている性具の底に付いているボタンに気付き押そうとする。彩音は慌てて止めようとするが、小宮山や真理に腕を押さえられてしまう。

「あはっ、もしかして電動で動くのかなぁ。蜂須賀さん、好きだねぇ。じゃあ、ポチッと押してみるね」

「んーーっ、んーーーっ、んーーーっ」

・・違う、それはそんなものじゃないよう。それはボタンを押すと周囲から針が飛び出して、膣内を串刺しにするの。ここで押すのは止めてぇ・・

口を押さえられている彩音が止めようと必死に暴れるが、凛はボタンを押してしまう。

「あっ、びゃあぁぁぁぁぁーーーーっ!!!」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

絶叫した彩音は白目を剥き泡を吹いて肛門から大便を漏らしていた。彩音の体はビクビクと痙攣している。そして、彩音の膣から血が流れ出していた。

「何やったの、水鳥川さん。早くそれ抜いて」

響子が叫ぶが、彩音の膣に挿入されている性具は固定されているように抜く事が出来なかった。数十本の針が膣壁に突き刺さっているのだ。抜けないのは当然といえた。慌てる響子たちを他所に、小宮山は彩音が漏らした大便を嬉しそうに自分の性器に塗りたくり、両手に彩音の大便を載せるとまるで顔を洗うように大便を顔に塗りつけた。

・・ひひっ、蜂須賀さんのウンチ最高。これから僕が蜂須賀さんの便器になるよ・・

小宮山は顔に塗りつけた彩音の大便を口に入れ、嬉しそうに食べていた。

（注）聞いた事がある名前と思った方もいるかと思いますが「少女無惨・穂乃果からの手紙」に登場する少女です。あれから彼女も堕ちていってしまいました。

8、凛の自慰

8、凛の自慰

彩音はZクラスに編入されてしまった時点で、両親から見捨てられてしまっていた。大手商事会社のエリートである父親と、貿易会社を起業している母親からしてみれば、彩音はとんでもなく外れの失敗作となる。そんな彩音をもう自分たちの子供として認めたくなかったのである。それまで両親と住んでいたタワーマンションから、まるでゴミを捨てるように追い出された彩音は、しばらくネットカフェなどで過ごしていたが沙也加に連絡を取り、なんと立派なマンションに入居する事が出来ていた。彩音は安いアパートで良いと言ったのだが、沙也加は立派なメス奴隷になる為には、きちんとした家に住み、きちんと生活するのが必要不可欠だと譲らなかったのである。彩音は思惑通り両親から離れる事に成功し、これでもうメス奴隷として何時でも性器を処刑される準備が出来たとワクワクしていた。そして、セーラー服を着ると学校に向かって意気揚々と登校していった。

★　★　★　★

「蜂須賀さん、今日は普通の下着で、マンコの穴にも性具は入れていないでしょうね」

担任の響子が厳しくチェックを入れる。彩音は、針付き下着の着用と、針が飛び出し膣を串刺しにする性具の使用を禁止されていた。毎日、響子がチェックしてから教室への入室が許可されていたのである。彩音が教室に入っていくと生徒たちが彩音に視線を向ける。彩音は、もう清家を除いた三人からは尊敬の眼差しで見られていた。

「おはよう、蜂須賀さん。今日の授業は蜂須賀さんが奴隷になってくれるんでしょう。蜂須賀さんが奴隷なら色々出来そうで楽しみだよ」

凛が嬉しそうに彩音に声をかける。奴隷というのは授業中は人格を破棄され本物の奴隷として扱われる事を意味する。その間、奴隷役の人間は何をされても耐えなければいけない。と言っても、あくまで授業の一環である。処刑など命に関わる行為はＮＧだった。

「おはようございます、蜂須賀さん。私は蜂須賀さんをとても尊敬しています。今度私にもあの下着を譲ってくれませんか。私もマンコに針刺してみたいです。女の子の大切なマンコに針を刺されるって気持ち良いですよね」

真理が興奮した口調で言う。どうやら真理も彩音と似た性癖のようだったが、彩音はそれに気付かなかった。

「お早う、蜂須賀さん。今日も僕にオシッコ飲ませてね。もちろん、ウンチも頼むよ」

小宮山が彩音に近付きクンクンと匂いを嗅ぎながら言う。

「ふん、別に俺は蜂須賀のマンコの穴なんか使いたくねえから。今日、蜂須賀が奴隷なら良い機会だ。他の穴、開発してやるよ」

最後に清家が彩音に何故か敵意剥き出しで睨み付けていた。

「はい、皆さん。始めますよ。今日の自慰当番は水鳥川さんね。それじゃ、早速始めて貰えるかしら」

「はい、先生」

凛は返事をすると教壇に上がりセーラー服を脱ぎスカートも脱いでいく。下着姿になった凛は、くるりとゆっくりと体を回転させ、自分の体を見せつけた後、その下着を脱いで全裸になる。この時点で凛の息はもう荒くなっていた。

「じゃあ、みんな、いつもの下さい」

凛の言葉でみんな下着を脱いでいた。そして、清家はブリーフ、小宮山はトランクス、真理はショーツを凛に渡していた。凛は彩音にも目を向ける。

「えっ……」

彩音が戸惑っていると響子が、早く水鳥川さんに下着を渡してあげなさいと教えてくれた。彩音は慌てて下着を脱ぎ凛に渡す。受け取った下着をどうするのかと彩音が見ていると、凛は小宮山のトランクスを全部口に入れてしまう。

・・あんな大きなパンツ、全部入るの・・

彩音は驚いていたが、凛も喉奥まで入り苦しいのだろう目に涙を滲ませている。それでも、自分の頭に清家のブリーフを被っていた。

そして、肛門にも真理の下着を詰めていき、彩音の下着も肛門に全て入れてしまった。

・・水鳥川さん、マンコの穴には詰めないんだ・・

彩音は一瞬そう思ったが、凛は処女だったのを思い出した。

・・処女だからマンコの穴に詰めないんだ。マンコの穴に詰めたら気持ちいいのに・・

彩音は勿体ないと感じたが、凛は教壇の机の上に座り足を開くと自分の割れ目をくぱぁと開き、自分の人差し指を根本まで突っ込んでいた。

・・えっ？・・

彩音は凛が膣に指を入れたのかと思ったが、凛が指を突き挿していたのは尿道だった。そして、凛は激しく指を動かしていく。

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ」

凛の口は半開きになり、声と唾液が漏れ出した。同時に凛の膣からも大量の粘液が溢れだす。

「凛ちゃんはね、オシッコの穴が大好きなの。もっと拡張して、オシッコの穴を犯して貰うんだって言ってるよ」

驚いた顔をしている彩音に真理が解説してくれた。

「アイツは変態だからさ。所構わずお漏らしして、アヘ顔になって

るんだよ。それでこのクラスに来たのさ。アイツの自慰当番の時は、いつも自分で尿道責めてイッてるからな。尿道なんて、そんなに気持ちいいのか訳分からないよ」

小宮山が気持ちの悪い生き物でも見るように凛を見るが、彩音はあなたも相当だけどねと思っていた。

・・でもこの中で一番異常なのは間違いなく私。マンコを徹底的に壊されて処刑されたいなんて思ってるのは私と渡邉さんくらいだよね・・

彩音のその想像は間違ってはいなかったが、この中に1名、彩音やゆかりにかなり近い性癖の者がいたのだった。彩音もすぐにそれに気付く事になるが、この時の彩音はまだそんな異常な性癖を持つ者は他にはいないと思い込んでいた。

「ちぇんちぇえっ、はやぐぅ、浣腸の準備じでえぇぇっ」

激しく指を尿道に出し入れしながら凛が叫ぶ。

「水野さん、早くウンチしてっ。小宮山君、シリンジをっ」

響子の指示で二人は慣れたように動く。真理はスカートを捲って息むと、ぶりぶりと肛門から大便が出て教室の床に落ちる。小宮山はその真理の排泄物を嬉しそうに手で掴むと、シリンジの中に入れていた。

「はやぐぅぅぅっ、わたちの中にいりぇてえぇぇっ、汚ないのおぉおっ、いっぱいいりぇてえぇぇっ」

凛は狂ったように叫び、指の動きが更に激しくなる。その凛の両腕を後ろから清家が押さえつけた。と同時に小宮山がシリンジの注入口を凛の尿道に突き挿す。見事な連携プレイだった。そして、小宮山は凛の尿道から膀胱の中に真理の排泄物を全て注入していた。

ヂュウーーーーッ

「あひゅーっ、入ってくりゅうぅぅっ。凛の中にウンチが入ってくるのおぉぉぉーーっ！」

清家が凛を羽交い締めにし、小宮山が2本目のシリンジを凛の尿道に突き挿しプランジャを押す。

ヂュウーーーーッ

凛の膀胱にまた固形の排泄物が注入される。

「えひっ、えひっ、えひっ、ウンチ、いっぱいぃぃぃっ」

「まだまだ、もう1本いくぞお、水鳥川っ」

ヂュウーーーーッ

3本目のシリンジから容赦なく凛の膀胱に排泄物が注入された。もう、凛の膀胱は真理の大便で破裂しそうになっている。

「えひっ、えひっ、でりゅうぅぅっ、凛、オシッコの穴からウンチすりゅうぅぅっ」

凛が腰を持ち上げて尿道から大便を排泄しようとした時、響子が凛

の尿道にプラグを押し込んでいた。押し込まれたプラグは、凛の膀胱の中で笠を開き、ロックを解除しなければ抜けない仕様になっている。

「駄目よ、水鳥川さん。まだ時間が早いわ。まだイカせてあげられないわね。少しの間、苦しみなさい」

冷たく残酷な目付きで響子は凛を見ていた。

「ぐるじいぃぃぃっ、はやぐうぅぅっ、おちっこの穴からウンチじゃぜでえぇぇぇっ！」

脂汗を流し苦しむ凛を見ながら彩音は、性器を激しく濡らしていた。そして、苦しみながら凛も股間一帯がヌルヌルになるほど濡らしてしまっていた。

9、凛の処女貫通

9、凛の処女貫通

「だじゅげでえぇぇっ、ぐるじいよおぉぉっ」

プラグで尿道を封印されてしまった凛は脂汗を垂らし、涙と鼻水で顔を汚し羽交い締めにされたまま泣き叫ぶ。

「楽しそうだな、水鳥川　ケツマンコにも浣腸してやるよ。イヒヒッ。おい、水野、この中にオシッコしろ」

小宮山がシリンジを真理に渡すと、真理は自分の股間にシリンジを当て、シャーッと放尿する。そして、シリンジを尿で満たすと小宮山に手渡す。小宮山は真理の尿を溢さないようにシリンジの先を指で押さえてプランジャを差し込み、凛の下着を詰めている肛門にそのまま突き挿した。

「このまま、注入してやるよ、水鳥川。オシッコで下着も膨張するから、もっと苦しくなるぞ。イヒヒッ」

ヂューーーッ

「うびぃぃぃっ、お腹ふくれりゅうぅぅうっ！」

凛が悲鳴を上げるが小宮山はシリンジ内の真理の尿を全て注入して

しまう。

「次は蜂須賀、この中にオシッコ入れて」

小宮山の命令で彩音もシリンジ内に放尿していた。それを小宮山は、また凛の肛門から注入する。そして、彩音の尿も全て注入した小宮山は自分の性器をシリンジに入れ、ジャーッと放尿して、それも凛の肛門から注入してしまった。

「先生、水鳥川のお尻にもプラグ入れて封印して下さいよ。この変態メスにはお仕置きしてあげないとね」

「それもそうね」

響子も興奮しているのか、最大直径5センチもある円錐形のアナルプラグを取り出す。そして、先端を凛の肛門に当てた。

「さあ、押し込むわよ、水鳥川さん」

響子は、グッと力を入れてアナルプラグを押し込んでいく。

「いだぁぁぁっ、裂けりゅうぅぅっ！」

凛が悲鳴を上げるが、響子は構わずプラグを押し込み、最大直径を過ぎるとニュルリと吸い込まれるようにプラグは凛の肛門に入っていった。アナルプラグには底の部分に鈴が付いており、チリチリと小さく鳴っている。

「なかなか、いい姿ですよ水鳥川さん。オシッコの穴とお尻の穴、封印されて嬉しいでしょう。記念にその姿、写真に撮っておいてあ

げますね」

響子は大股開きにさせた凛の股間を何枚も撮影し、その苦しむ顔も被っていたブリーフを剥ぎ取り鮮明に撮影していた。

・・この水鳥川さんも、なかなかの変態だよ。この女子も、もう少し調教されれば私みたいにマンコを処刑される事を望むようになりそうだよ・・

彩音は頭の中で残酷に考えながら、真理の顔もチラッと覗き見る。

・・水野さんも、結構こちら側に踏み込んでいそうだし、これで沙也加さんに頼まれたテスト用のメス奴隷も確保出来そうだよ。あと一人は、アイツ。アイツは絶対許さない。一番酷く壊して貰うよ。いい気味だわ・・

彩音が不気味な笑みを浮かべていると、二穴を塞がれている凛が狂ったように騒いでいた。

「もう、らめえぇぇっ！我慢できりゃいよおぉっ、入れてくりゃちゃいっ！凛のマンコの穴に入りぇてぇぇぇっ！」

羽交い締めにされ二穴を封印された凛は、もう膣も犯される事を自ら願い、トロトロと粘液を湧き出していた。

「凛の処女マンコ、犯してくらちゃいっ」

凛を羽交い締めにしながら清家はニヤリと笑っていた。

「先生、聞いた。本人からお願いされたんだ。犯しても良いんだよ

ね」

「そうですね。水鳥川さん、合意の上の行為になりますので構いませんよ。だたスキンを着けるの忘れないようにね」

「分かってますよ、先生。これで、水鳥川の処女マンコ頂きだ」

清家は、羽交い締めから凛を解放し速攻で自分のモノにスキンを被せていく。その間に凛は机の端まで腰を移動され、大股開きに固定されていた。ちょうど、高さも清家が立ったまま犯すのにぴったりの位置だった。

「ウヒヒッ、水鳥川、嬉しいか。今、マンコの穴貫いてやるからな」

「あいっ、凛のマンコの穴、めちゃくちゃに貫いてくらちゃい」

清家は凛の割れ目を亀頭を擦り、凛の粘液を自分の硬く勃起したモノに塗りつけていく。そして、凛の膣口に先端を当てた。

「いくぞっ、水鳥川」

清家は凛の腰を押さえつけ、少しづつ自分の性器を突き入れていく。

「いだあぁぁぁーーっ」

凛が悲鳴を上げ、両手で清家を押さえようとするが、小宮山と真理に止められてしまった。凛は、よほど痛いのだろう。ずりずりと机の上をずり上がっていくが、その凛の肩を清家が押さえつける。

「お前が望んだんだろう、水鳥川」

清家は、凛の肩を押さえたまま、一気に自分の性器を根本まで突き挿した。

ズリュウッ

「あがあぁぁっ、いぢゃいいいーーっ！」

一気に膣奥まで突き挿された凛が叫ぶが、清家は構わず腰を振り出した。

「先生、清家君が犯し終わった後、私も水鳥川さんを犯して良いですか？」

響子に訊ねたのは彩音だった。その言葉に響子だけではなく、他の生徒も驚いた顔をする。

「犯すって、蜂須賀さん。どうやって？手を入れてフィストでもするつもりですか」

「フィストも良いですけど、私、こんな物も持っているんですよ。知り合いの方が譲ってくれた物ですけど」

彩音がバックから取り出したのは、以前ゆかりの頭を犯す際に使用したペニスバンドだった。

「このカテーテルとチューブをオシッコの穴とお尻の穴に入れてから真ん中のプラグは自分のマンコの穴に入れるんです。そうしてベルトを装着して犯すと、自分のマンコも犯されているようになって気持ちいいんですよ。そして、私がイクとこのペニスの先端から潮

が吹き出る仕様になっています。ウンチも先端から出せるようになってますから、マンコの中、ぐちゃぐちゃに出来ますよ。せっかく、水鳥川さん、マンコの穴貫通して貰ったんだから、徹底的にやって上げましょうよ。何事も最初が肝心ですよね、先生」

彩音が笑いながら言うと、響子より先に小宮山が反応していた。

「それ僕にも貸してくれよ、蜂須賀」

「えっ、だって小宮山君、自分のチンポあるでしょう」

さすがに彩音が驚いて言うと、小宮山は何故か自信たっぷりに答える。

「僕のは粗チンだからな。だから僕のとダブルで入れてやるのさ。それ、ウンコも出せるって言っただろう。最高じゃないか。水鳥川のマンコの中にウンコするなんて……。先生、良いですよね」

響子はここで止めたら小宮山の性癖が暴走して、事件でも起こしかねないと考え、小宮山の歪んだ行為を許可していた。

「ただし、相手は今日初めて経験したを女の子ですからね。多少は仕方ないですが、壊してしまっては駄目ですよ」

響子の許可を得た小宮山は、ぐふふと気味の悪い笑い方をして清家に犯されている凛を眺めていた。彩音は、自分も異常者であるのは間違いないが、この男も違う意味で異常者であると確信していた。

１０、狙われた凛

１０、狙われた凛

凛は清家に犯され、初めての経験に号泣していた。

「いい面だな、水鳥川。破瓜を迎えた気分はどうだ？最高だろう」

清家は笑いながら腰を振っていた。凛は体を押さえ付けられ、動く事も出来ず清家に犯されるままになっている。清家は、口に小宮山のトランクスを詰め号泣している凛の顔を眺め、凶悪な感情が芽生えていた。

「ほら、もっと泣けよ水鳥川」

清家は凛の顔面を殴りつけた。

バキャッ

「ふごっ！」

小さく声を上げた凛の鼻から鼻血が流れていた。その血を見て清家はさらに興奮する。

・・こいつはいいや。今日の帰り、佐瀬に頼んで水鳥川を拉致して徹底的に遊んでやるか・・

清家は良からぬ事を考えながら、腰を振っていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

清家の放出が終わると、間髪入れずペニスバンドを装着した彩音が凛を犯し始めた。その人工的なペニスは清家のモノより遥かに太く長い巨大なモノで、凛の破瓜を迎えたばかりの経験の浅い膣はぶちぶちと裂けていった。

「ふごうぅぅっ、ふごうぅぅっ！！」

苦痛に顔を歪め、号泣する凛の耳に顔を近付け彩音は呟く。

「水鳥川さん、この痛みこそが女の子の幸せなのよ。マンコを壊される。これ以上の幸せなんて女の子に存在しない。あなたも、それが分かってくるわよ」

彩音の言葉に凛は怯えたように大きく目を見開いていた。

「あっ、うっ、うっ、うっ」

プシャーーッ

彩音は頂点に達し、凛の中に潮を吹いていた。その彩音から奪うようにペニスバンドを取り外し、自分に装着した小宮山はぐったりしている凛の膣に、自分のモノとペニスバンドのペニスを無理矢理突き挿した。

ぶちっ、ぶち、ぶちいぃぃぃっ

「ふがあぁぁぁぁーーーーっ！」

膣がビリビリに裂け絶叫する凛に構わず小宮山は腰を振る。だが、小宮山は先の二人と違い、その狙いは凛を犯す事ではなかった。

・・水鳥川のマンコの中にウンコを注入してやる・・

小宮山が思っているのは、凛の膣の中に排便し、凛の性器を排泄物で汚してやる。それだけだった。その大便にまみれた凛の性器を想像すると小宮山の性器は激しく硬く勃起していた。

「うおぉぉぉっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

小宮山は射精と同時に排便し、凛の膣から自分の性器とペニスを抜くと、膣口から白濁した液と大便が溢れ出てきた。これで凛も解放されるかと思ったが、小宮山をどかして今度は真理が、凛の前に立っていた。

「あら、水野さん、処女ですのにこのペニスバンド使用するのですか。これは自分の膣にも挿入しますので、あなたの処女膜は失なわれますよ」

響子が驚いて真理を見ると、真理はいえいえと言うように首を振る。

「いえ、先生。私はこれで水鳥川さんを犯します。水鳥川さんの子

宮の中に、小宮山くんのウンチ詰めてあげますよ。みんな、水鳥川さんの体を押さえておいて下さいよ」

真理は口許に笑みを浮かべると、その右手を凛の膣に指先をすぼめて突っ込んだ。

「ふぐうぅぅぅーーーっ！」

膣に手首まで挿入され凛が激しく暴れるが、体を押さえ付けられていて動けない。真理は、凛の膣内に排便された小宮山の大便を、子宮口から凛の子宮内に押し込んでいた。その時の真理の顔は実に楽しそうで、響子は今日はっきりと、このクラスにいる生徒はまともではないと改めて認識していた。とはいえ、高額の授業料を納めてくれている生徒をおいそれと退学には出来ない。その為のZクラスであるが、その常軌を逸した行動には寒気がするのは事実だった。

・・なんとか事件を起こさせずに無事卒業させれば、私の仕事は終わり。でも、それまでこの生徒たちを押さえておくことが出来るかが問題だわ。いっそのこと、みんな死んでしまえば良いのに……・・

響子は目の前で狂乱を繰り広げる生徒たちを眺め、心の底からそう思っていた。その時、自分を見つめている視線に気付く。蜂須賀彩音だった。彩音は、響子が顔を向けるとすぐに視線を逸らしたが、響子は自分の考えを見透かされたようで動揺していた。

・・先生の考えは分かる。こんなクラスを任されて可哀想だよね。でもすぐに私が二人連れていくから、少しは楽になりますよ・・

彩音は真理と凛に顔を向け、悪魔のように微笑んでいた。

★
★
★
★

結局、この日は凛への暴行だけで終わってしまった。彩音を奴隷にしての授業は後日という事で、下校となった。彩音が校庭を裏口の校門に向けて歩いていると、声をかけられた。一般の生徒は、こちらの校門は使わず、正門から下校していくので同じZクラスの生徒であるのは間違いなかった。彩音が振り替えると、そこには案の定Zクラスの真理がいた。

「蜂須賀さん、お願いがあるんだけど……」

「なにっ？水野さん」

ここで真理は声を小さく落とす。

「私の処女をこれから奪って下さい」

「私にっ？それなら、明日授業中に清家くんにでもお願いすれば、すぐに犯してくれると思うけど……。授業中なら担任公認だし、問題ないよ。それ以外だと校則違反になるよ」

「私は蜂須賀さんに奪ってもらいたいんです。それに私たちはもうZクラスに入れられてしまっているので、別に校則違反は気にする事ないと思いますよ」

「それは違うよ、水野さん。校則というのは守るもの。私は理由があって校則を破ったけど、破ってしまった事で私を信じてくれていた人を裏切ってしまったの。だから自分がZクラスに編入されたの

は当然だけど、その事で裏切ってしまった人には申し訳なく思っている。私は、もうこれ以上校則は破らないよ。最後の時までは……」

「さ、最後の時……。だったら、お友だちになって下さい。私、なぜか蜂須賀さんを一目見た時から惹かれているんです」

・・えっ……・・

彩音は、自分がゆかりと友だちになりたいと思っていた事を思い出した。

・・あの時の私と、今の水野さんは同じだ。だったら……・・

「それなら、良いですよ。これから私の家に来ますか。私、一人暮らしなので気を遣わないで大丈夫だよ。それに蜂須賀さんじゃなくて彩音でいいよ」

彩音の言葉に真理は飛び上がって喜んでいたが、ここで彩音と友だちになった事が真理の運命を決定づけていた。その二人の前を、1日中犯されまくりヨロヨロと校門に向かって歩いている凛がいた。

「水鳥川さんも誘って女子会やろうよ。いい？彩音ちゃん」

もちろん彩音は頷いていた。これで、この二人を確保出来る。彩音は心の中で残酷に微笑んでいた。

校門のところで凛に追い付いた彩音たちは、三人で話しながら外に出た。その三人の姿を電柱の陰から覗いている男がいた。清家から連絡を受けた佐瀬である。

・・ちっ、早く一人になれよ・・

佐瀬は凛の写真を見ながら、三人の後をつけていく。そのうちに立派なマンションの前まで来ていた。

・・お嬢さま学校というのは本当らしいな。こんな豪勢なところに住んでやがるのか。こんなお嬢さまをメス奴隷に仕上げるのは興奮するじゃねえか。天辺（てっぺん）から底辺に堕としてやるぜ・・

佐瀬は、転がしてきたトランクの上に座り、拘束され泣きながら鞭で打たれる凛の姿を想像し興奮していた。そこへ、ぬっと人影が現れた。清家かと思った佐瀬が顔を向けると、そこには黒いスーツを着た、がたいのいい男が立っていた。

「おい、お前、あそこの女子を盗み見ているようだが、そのトランクの中を見せてみろ」

「な、なに言ってるのですか。俺は疲れたので休んでいただけですよ」

「中を見せろと言ってる」

「分からない人だな。休んでるだけですよ」

「お前、〝李下に冠を正さず〟という言葉を知っているか」

「知ってますよ、そんなの。あんたこそ、〝疑わしきは罰せず〟という言葉を知らないのですか」

「ああ、知らんな。疑わしい者は罰するんだよ」

男はいきなり佐瀬の鳩尾に鋭い拳を突き入れてきた。

ズンッ

「おごうっ」

佐瀬はトランクから転げ落ち、ゲロを吐きながら腹を押さえてのたうち回る。そんな佐瀬を髪を掴み立たせた男は、さらにボコボコになるまで佐瀬を殴りつけた。一刻の後、佐瀬はぼろ切れのように地面に横たわっていた。男は佐瀬のトランクを開けてみると、中には結束バンドやガムテープの他は何も入っていなかった。ここに少女を詰めて拉致しようとしていたのは一目瞭然だった。男は、ふんとトランクを蹴飛ばすとコツコツと歩いていった。

「あれっ、近藤さん。どうしたんですか」

男の姿に気付いた彩音が声をかけていた。

「沙也加様に指示されまして、豪徳寺の者が交代でこの付近を警戒しているのですよ。蜂須賀さんは沙也加様にとって大切な方のようですね」

近藤の言葉に驚いたように真理が声をあげる。

「豪徳寺って……。豪徳寺葉月様の事。彩音ちゃん、そんな凄い人と知り合いなの」

「うん、まあ……」

彩音たちが楽しく会話している先で地面に転がった佐瀬は朦朧とする意識の中、彩音たちを睨み付けていた。

・・豪徳寺だと……。ふざけるなっ、クソッ。俺がそのうち一泡吹かせてやる。みていやがれ・・

佐瀬は、彩音たちを睨みながら意識を失っていった。

１１、針付き下着を穿く三人娘

１１、針付き下着を穿く三人娘

彩音のマンションにやって来た真理と凛は驚いていた。真理と凛もお嬢さま学校に通う女子であるが、こんな大きく設備の整ったマンションに一人で住んでいるという彩音に驚愕する以外なかった。オートロックの扉を開け、中に入ると広いエントランスは高級ホテルのような豪華さがあり傍らにはコンシェルジュが待機している。そして、エントランスを抜けたエレベーターホールには多数のエレベーターが並び、その中の一つに彩音は乗る。

「このエレベーターじゃないと私の部屋に来れないから覚えておいてね」

彩音の言葉に真理と凛はセキュリティ面でも考慮されているのかと、また驚いていた。そして、彩音の部屋はここに一人で住んでいるのかと疑うほど広い部屋で、真理と凛は緊張していた。

「凛ちゃん、今日は大変だったからシャワー浴びてきなよ。まだ気持ち悪いでしょう。ビデもあるからマンコの中も良く洗ってきなよ。小宮山くんのウンコ残ってたら嫌でしょう」

凛はお礼を言うと、シャワールームに向かっていった。凛を見送った彩音は真理に顔を向ける。

「真理ちゃん、あの針付き下着穿きたいって言ってたよね。穿かせてあげるよ。凛ちゃんが出てきたら三人で穿こうよ」

「ほ、本当に……。嬉しい、興奮してくる。凛ちゃん、早く出て来ないかな」

真理は嬉しそうに顔を赤らめ目を輝かせている。彩音はそんな真理の姿を見て、この女子は間違いなく自分と同じ側にいると感じていた。

・・後は凛ちゃんだけど、あの子は私たち二人がやれば断れない性格だよね。今日も勢いに流されて破瓜までしたくらいだからね・・

彩音は三人分の針突き下着を用意して、真理に見せていた。真理は改めてその下着を見て興奮していた。下着のクロッチ部分に埋め込まれた長針の長さは数センチにもおよぶ。かつて〝渡邉ゆかり〟が作成し使用していた下着は、彩音に受け継がれ更に広がっていこうとしていた。彩音たちは知るよしもなかったが、それは別の世界でも変態ドMの間で使用されるまでになっていたのである。

「やっと出てきた、待ってたよ凛ちゃん」

真理が、早く早くと凛を手招きする。凛が慌てて駆け寄って来ると真理が興奮した声で説明する。

「今から三人でこれ穿こうよ。彩音ちゃんが前に穿いてた下着。ほら見て、この針。これがマンコに刺さるんだよ」

「えっ……」

さすがに驚く凛であるが、真理は熱心に説得する。

「凛ちゃん、今日犯して貰ったから分かるだろうけど、女の子は痛いのが嬉しいの。痛ければ痛い程興奮してくるんだよ。ほら、想像してみて、この針が自分のマンコに刺さる様子。クリやビラビラやいろんな処に刺さるんだよ。そこに、ブチッと刺さって、そのまま奥まで突き刺されるの。あひっ……。もう、らめ……。早く穿きたいよ」

真理は凛の手を取ると自分の股間を触らせた。真理の股間はぬるぬるになってしまっていた。けっきょく、彩音の予想通り、凛は流されるように針付き下着を穿く事に合意していた。三人は全裸になると、それぞれ下着を穿いていく。彩音は二人と向かい合って下着の穿き方をレクチャーしていた。

「ほら、ある程度下着を穿いたら足を開いて、針がマンコに上手く刺さるように位置を調整するの。針先がマンコに当たるところで一旦止めて位置を確認してね。チクッとした痛みがあるから分かるでしょう」

彩音が下着を上げて、針先が性器に当たる位置で止めると二人も同じ様に下着を上げていった。チクッとした微かな刺激が三人の性器を襲う。

「どう？その位置に針が刺さるの。この時が一番興奮するよね。真理ちゃんも凛ちゃんも興奮するでしょう」

彩音が本当にワクワクした顔で二人の顔を見渡す。真理は彩音同様興奮した顔をしているが、凛は強張った顔をしていた。そこで、真理がふと気付いたというように彩音の顔を見る。

「これで私も処女じゃなくなるのかなぁ。これ、校則違反にならないよね。別に構わないけど……」

「大丈夫だよ。異性と性交するのが校則違反。これは、オナニーだから違反にはならないよ。私の友だちのゆかりちゃんは自分で性具使って処女膜貫通してたよ。だから、別に処女に拘る事ないんじゃない」

「えっ、彩音ちゃん、あの奴隷になった“渡邉ゆかり“と友だちなの？」

凛が驚いた顔で声を上げていた。真理も口を開けて彩音を見つめている。奴隷に堕ちたゆかりの噂は校内で知らない者はいなかったが、様々な噂が流れどれが真実なのか誰も分からなかった。それが、彩音の言葉で本当のゆかりの姿が分かるかも知れないと期待していた。

「そのお友だちの人、姿見なくなったけど売られちゃったんですか」

凛が興味津々という顔で訊いてくる。先程までの強張った顔とは一転して生き生きとした顔をしている。彩音は凛を堕とすチャンスだと思っていた。

「うん、ゆかりちゃんはオークションにかけられて売られていったの。ゆかりちゃん、人気があって競争が激しかったみたいよ。けっきょく、豪徳寺葉月さんが落札したんだ」

「葉月さんっ。そんな凄い人が落札したの。どうして彩音ちゃんはそんな事知っているの」

興奮した真理が叫ぶように言う。

「私も葉月さんと知り合いだし、葉月さんのご友人の神楽坂沙也加さんとは仲良いの。このマンションも沙也加さんが手配してくれたんだよ」

「えぇぇぇーっ！」

真理は絶叫して彩音に向かってお願いしていた。

「お願い、彩音ちゃん。私も紹介して。お願い、お願いっ」

「うん、分かったよ。それじゃ三人で沙也加さんに調教して貰おうよ。今電話して来て貰うから……。だから、その前にこの下着穿いておこうね」

「うん、分かったよ。嬉しい。それじゃみんな同時に穿こうよ。はい、足開いてパンツの両脇持って、凛ちゃんもいくよ。早く」

その場を仕切りだした真理の号令で凛も足を開いて下着の両側に手をかける。

「それじゃ一気にいくよ。3、2、1、それっ！」

三人は一気に下着を引き上げていた。三人の性器に鋭い針が深く突き刺さる。

「ひぶうぅぅぅーーっ！」

「かはあぁぁぁーーーっ！」

「あびゃびゃあぁぁぁーーーっ！」

三人の顔は一瞬で涙と鼻水で汚れ、体はガクガクと震えていた。そして、三人ともシャーッと尿を漏らしてしまっていた。

12、凛の調教初体験

12、凛の調教初体験

針付き下着を自ら穿いた三人は、性器を襲う激痛に尿を漏らし悶絶していた。

「ほら、両手を上げて大きく足を開いて。もうすぐ沙也加さんが来るから、きちんとマンコに針を刺して無様にオシッコ漏らしたとこ見て貰うの」

「う、うん。でも少し動いただけで痛いよ。本当にマンコの奥まで針が刺さっているの。もっと足開かないと駄目なの？」

真理が泣きながら彩音に訊くが、彩音の答えは当然もっと足を開けだった。凛はもう言葉も出せないのか、呻きながら足を開いて手を上げていた。すると、カチャリとドアが開く音がして沙也加が入ってきた。当然、沙也加はこの部屋の鍵を持っているので呼び鈴など押さず直接入って来る。

「あっ、沙也加さん」

彩音は、部屋に入ってきた沙也加に近付くと、この二人がメス奴隷候補ですと耳打ちする。沙也加はニヤリと笑みを浮かべていた。

「皆さん、初めまして。神楽坂沙也加と申します。豪徳寺葉月様と

は親しくさせて貰っている者です。ふふっ、皆さん偉いですね。その下着を穿いているとは感服します。それを穿いているという事は、マンコ破壊が望みなのですね。葉月様はそういうメスが大好きですから、あなたたちもきっと気に入って貰えますよ」

「はいっ、よろしくお願い致します」

真理は有頂天になってすぐに返事をしたが、凛は恐怖と性器を襲う激痛で震えてしまって声が出せなかった。

「ふふっ、嬉しいですね。こんな新鮮な初々しい女子ばかりで、壊しがいがあります。葉月様もお喜びになるでしょう。彩音ちゃん、あちらの部屋の準備は出来ていますか」

「はい、全て整っていますよ沙也加さん」

「はい、それでは皆さん。彩音ちゃんに続いてあちらの部屋に移動して下さい」

彩音はさっさと隣の部屋に歩いて行ったが、真理と凛は性器に突き刺さった針が足を動かす度に、性器を抉るように動くので、がに股になり泣きながら歩いて隣の部屋に入っていった。その部屋に入った途端、真理と凛は目を丸くしていた。経験のなかった二人はまだ入った事はなかったが、その部屋はまるでＳＭ用のラブホテルのように鎖や滑車、磔台や三角木馬や剥き出しの便器等が設置されていた。真理と凛は、部屋の中を見回していたが、沙也加に立つ位置を指定され、二人は指定された位置に両手を上げ、足を開いて立っていた。その二人を沙也加と彩音が手分けして拘束していく。両手は天井からの鎖で拘束され、両足も開いたまま閉じられないように側面からの鎖で固定された。そして、最後に彩音も二人と同じ様に拘

束される。沙也加は三人の開いた股間の白い下着にうっすらと滲む赤い色と尿の染みに興奮していた。

「それじゃまずは鞭からいきますか。軽く１０００発ほどあなたたちのマンコに打ち込んであげます。おっと、その前に名札をつけましょうね」

「えっ、このまま鞭で打たれるんですか」

真理も恐怖で声が震えていた。針が深く突き刺さっている性器を鞭で打たれる。どれ程の苦痛なのか想像もつかない。

「「えひっ、えひっ、えひっ」」

真理と凛は泣き出していた。

「泣いてるところ悪いけど、名前を教えて貰えるかしら」

泣いてる女子中学生を見ても可哀想などとは一切思わず、沙也加は真理と凛の名前を訊き、安全ピンのついたネームプレートに名前を書いていった。

「水野真理ちゃんに、水鳥川凛ちゃんね。じゃあ、彩音ちゃんから名札付けますよ」

真理と凛は全裸で下着一枚しか穿いていない自分たちなので、その下着に名札を付けるのかと思ったが、それは大きな勘違いだった。沙也加の様子を見ていると彩音の股間の前にかがみ込み、彩音の性器を刺激しているようだった。そして、下着の上から何かを摘まむと、そこに安全ピンの針を刺していった。

「んぐうぅぅっ！」

彩音が苦しげな声を上げるが、沙也加は構わず安全ピンの針を貫通させ、そこに名札を取り付けた。彩音の股間で名札がぶらぶらと無様に揺れている。次に沙也加は真理の前にかがみ込んだ。真理はここで初めて彩音が何処に安全ピンで名札を付けられたのか理解した。

・・クリッ、私のクリに安全ピンで名札が付けられるんだ・・

真理は初めての経験に失神しそうだったが、真理のクリトリスは沙也加に刺激され強制的に勃起させられていく。そして、硬く大きく勃起した真理のクリトリスが下着の上から沙也加の指に摘まれた。そして、それは何の前触れもなく突然やってきた。

プツッ

「ふびょおぉぉぉぉーーっ！」

皮膚を突き破る小さな音に続き、真理のクリトリスに激痛がはしる。絶叫する真理のクリトリスに平然とした顔で沙也加は安全ピンの太い針を突き通していった。真理はガチャガチャと鎖を鳴らし逃れようとするが、安全ピンの針は真理のクリトリスを貫通していた。彩音に続いて真理のクリトリスにも名札が下げられ、これから最後の凛にも名札が付けられる。凛は二人の反応から、自分の体のどこに安全ピンが留められるか大体想像がついていた。

「許してくだぢゃい。こわいぃぃっ」

始めから号泣している凛のクリトリスを刺激し、沙也加は勃起させ

ていく。凛のクリトリスは、凛の意思とは関係なく硬く勃起させられていた。そして、沙也加は凛のクリトリスを下着の上から摘まみ容赦なく針を突き刺した。

プツッ

「あぎゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

今まで一番大きい絶叫が響き渡る。

「あら、いい声ね。ここは完全防音だから思う存分泣き叫んでね」

沙也加は凛がどんなに泣き喚こうが構わず安全ピンをクリトリスにグリグリと突き通していく。そして、プツンッと反対側に抜けた針を留め、凛のクリトリスにも名札の装着を終了した。

「はい、それでは写真撮るから、皆さん腰を突き出して名札の名前がよく見えるようにしなさい。葉月様にお見せする写真だから一番いい顔をするのですよ」

沙也加はそれぞれ一人ずつ写真に収めたあと、今度は全員で股を拡げ名札を強調している無様な写真を何枚も撮影していた。

「ＯＫ。みんな良く撮れたわよ。それじゃ一人ずつ鞭で打っていくからね。みんな可愛いから私も興奮するわ。何処を鞭打たれるか、分かるわよね真理ちゃん」

「は、はい。私のオマンコです」

鞭打たれる場所、それは針が刺さり名札がつけられ大きく足を開い

ている自分の性器以外考えられず真理は即答していた。

「はい正解。それではみんな他の人の姿を良く見ておきなさいね。今回は経験や性癖の差があるようだから、それぞれ違う鞭で打ってあげる。まず最初は凛ちゃんからいくよ。凛ちゃんは、このバラ鞭でマンコを１０００回打つからね」

「ひっ……」

凛は小さく悲鳴を上げるが、もう拘束されている以上逃げる事は不可能だ。凛の体はぶるぶる震え、瞳からは涙が溢れていた。沙也加は、その凛の姿を楽しそうに見つめ思い切り鞭を叩き込んだ。

パシィィーーーッ！

「ひぐぅぅぅーーーっ！」

性器に鞭を叩き込まれ凛が悲鳴を上げるが、まだ凛の性器への鞭打ちは始まったばかりであった。まだ残り９９９回。凛は生まれて初めての性器への鞭打ちに泣き叫ぶ事になる。しかも、初めての経験が性器に針が突き刺さり、クリトリスに名札を下げた状態で鞭打たれるという。なかなかにハードな初体験になっていた。

13、狩られる女子（前書き）

すいません。今回、グロもリョナもありません。
彩音の処刑に向けての準備回となります。
早いとこ処刑に持っていこうと、かなり駆け足になってしまっています事、ご了承下さい。

１３、狩られる女子

１３、狩られる女子

彩音のマンションの部屋で沙也加から調教を受けていた３人は、揃って失神してしまっていた。沙也加は天井からの鎖で両腕を吊られたまま失神している３人を残酷な笑顔で見つめていた。沙也加は考える。彩音を処刑台のテスト用実験体にするつもりであったが、これなら彩音は通常の処刑で更に残酷に処刑する事が出来るのではと内心興奮していた。処刑台を使用すると確かに楽に間違いなく処刑出来るので、初心者でもメス奴隷を確実に処刑するのが可能だが、処刑に慣れている者にとっては、もっと自分の好きなようにメス奴隷を絶命させたいという不満が出てくるのだ。当然、沙也加も好きなように処刑したいと思う側である。

・・蜂須賀彩音は、あと一人候補がいると言っていた。それなら蜂須賀彩音本人は、実験体に使用しなくても良さそうですね・・

とにかく沙也加は早くメス奴隷として人数を押さえて確保しておこうと考えていた。葉月の屋敷には調教室はもちろんだが、メス奴隷を飼育しておける檻もある。そこに捕えてしまえば、もうメス奴隷は外界と隔離され処刑されるまで、そこから出る事は叶わない。

・・まず、この２匹を確保しておきますか・・

沙也加は、すぐに葉月に連絡して水野真理と水鳥川凛の画像を転送

して手配を頼んでいた。そして、すぐに豪徳寺家のスタッフが大きなトランクを二つ持ちやって来た。

「丁寧に扱うように。葉月様が使用するメス奴隷になる女子ですからね。傷一つつけてはいけませんよ」

沙也加の命令でスタッフの男たちは慎重に両腕と両足の鎖を外し、今度は丈夫な革のベルトで両足首と太ももを合わせて拘束する。そして、両腕も背中に回しベルトで拘束する。さらに目隠しをつけ、ボールギャグを口に装着すると、真理と凛はトランクに詰め込まれていた。

トランクの蓋が閉められ、鍵でロックされると真理と凛はそのまま男たちに運ばれていった。そして、この日から二人の姿は神隠しにあったように消えてしまい、二度と再び姿を見る事はなかった。

★　★　★　★

「東條さん、こんにちは」

彩音は下校の為、校庭を歩いていた東條佳純に声をかけていた。佳純は振り向くと彩音の顔を見て驚いていた。

「なんだ、蜂須賀。Ｚクラスは裏口から下校する決まりじゃないの。Ｚクラスの人間が普通に校庭歩いてたらお仕置きの対象だよ」

「うん、分かっているよ。私、東條さんのおかげで目が醒めたの。だから、お礼を言いたくて。家の両親も感謝していて、東條さんにお礼と謝礼を渡したいって言ってるの。うち、こう見えてもお金持

ちだから一杯貰えるんじゃない。それで、今度の日曜日に家に来てよ、東條さん」

初めは気乗りのしないような佳純だったが、彩音の謝礼がたくさん貰えるという言葉で、すっかり顔つきが変わっていた。

・・こいつのすぐ男とやる男狂いを直したのを私だと思っているのか。確かにZクラスにこいつがいったのは私が流した噂のおかげだからね。感謝されて当たり前か・・

佳純は、二つ返事で彩音に了解と告げていた。そして、スキップするように校門に向かって歩いていく。彩音は、佳純の後ろ姿を見送りながら会心の笑みを浮かべていた。

・・ふふっ、簡単に釣られてくれて嬉しいよね。私の話をペラペラ広めた事、渡邉さんにした事、じっくり反省してね。東條さんの苦しむ顔、私も楽しみに見させて貰うからね・・

彩音は人には見せた事のない残酷な笑顔で佳純が去った校門を見つめていた。

★　★　★　★

日曜日、彩音はいつもの公園で佳純と待ち合わせていた。彩音がスマートフォンで時間を見ると、もう約束の時間を過ぎている。

・・まさか、すっぽかされちゃったのかな・・

元々、彩音と佳純は仲が良いわけではない。ただ同じクラスの女子というだけだった。彩音がZクラスに移ってからは、まったく接点などなかった。そんな彩音の家に行くのが面倒になったのかと、彩音は落胆していた。

・・また、別の方法を考えないといけないかな・・

彩音は、あと5分待っても来なかったら帰ろうと考え、またスマートフォンに目を向けた。その時、公園に駆け込んで来る佳純の姿が見えた。それも、一人ではなく二人。

・・来たっ・・

彩音は、佳純に向かって手を振っていた。内心の嬉しさが顔に出てしまっていたが佳純は気付かずに、別の公園に行っていて違うと思ってこっちに来たと子供でも分かる嘘をついていた。

「途中で洋子に会って、ここまで連れてきて貰ったんだよ。洋子も一緒に行っていい？」

・・本当にこの人、適当な嘘ばかり。初めから二人で来るつもりだったんでしょう。私は別に構わないよ。人数が増えてむしろ喜んでくれるよ・・

嘉藤洋子は話した事はないが知っている。いつも佳純と一緒にいる取り巻きのような女子だ。陰湿な性格らしく、気付かれないように大人しい女子を虐めているという噂もある。

彩音は大歓迎という風に頷くと、さあ行きましょうと歩きだした。

佳純と洋子も後をついて来る。そして、彩音の住むマンションの前まで来た。

「へえ、蜂須賀、凄いマンションに住んでいるんだね」

佳純も洋子も驚いたようにマンションを見上げていた。こんなマンションに住んでいるからには謝礼も期待出来そうだと、二人の顔に現れていた。彩音は、そんな二人に構わずスタスタと歩いていく。エントランスに入るとコンシェルジュが、蜂須賀様お帰りなさいませと頭を下げていた。

・・早く部屋まで連れ込まないと。部屋に入れてしまえば、もうこの二人は逃げられない・・

エレベーターホールからエレベーターに乗り、そして、彩音の部屋に入ると一人の女性がいた。彩音はその女性に目で合図する。佳純と洋子は、その女性が彩音の母親なのかと頭を下げていた。

「こんにちは、東條さんとそちらの方は？」

「あ、はい。私の友人の嘉藤洋子です。彼女も彩音さんを立ち直らせるのに力になってくれました」

「そうですか、それでは彼女にも謝礼を差し上げねばなりませんね。彩音がお世話になりました。今日は東條さんの分しか用意してありませんが、後日必ずお渡ししますので安心して下さいね」

女性は二人にソファーに座るよう促し、彩音が紅茶を淹れて持ってきた。そして、女性は佳純の前にアタッシュケースを置き、鍵を開ける。アタッシュケースの中には、佳純が見たこともない大金が入っていた。

「これが謝礼です。かなりの額になりますので、あなたには一束だけ渡しておきますね。後はあなたの御両親に届けておきます。それでよろしいですね」

「は、はい……」

一束といってもかなりの額だ。佳純も洋子も興奮して顔が火照っていた。

・・ふふっ、商談成立ですね・・

神楽坂沙也加は心の中で笑っていた。

★　★　★　★

「どうやら、蜂須賀彩音に生理がこないようなのです。もう、処刑の準備に入ろうというのに申し訳ありません。早急に堕ろすよう指示します」

沙也加は葉月に頭を下げていた。葉月は腕を組んで何か考えているようだったが、嬉しそうな顔を沙也加に向ける。

「いいえ、神楽坂さん。蜂須賀彩音には産んで貰いましょう。なるほど、こういう方法もあるではないですか。もっと早く気付いていれば〝渡邉ゆかり〟の直系のメスが手に入ったものを……。蜂須賀彩音が産んだ子がメスだった場合、私が育てます」

・・葉月様が子供を育てる?・・

沙也加は驚いて言葉もなかった。母親の姿など、およそ葉月のイメージから遠くかけ離れていたが、葉月が子供を育てようとしたのには、まるで別の理由があるのだった。

13、狩られる女子（後書き）

彩音の産んだ子供の話は別作品「変態異常自虐少女ゆかりの記録」2部に繋がっていきます。興味ある方はそちらも読んでみて下さい。

１４、捕らわれた女子

１４、捕らわれた女子

東條佳純は、自分が何処にいるのかまるで見当もつかなかった。真っ白い壁に三方を囲まれたワンルームの奥にベッドが置いてあり、その反対側には鉄格子があり、その前に剥き出しの便座が設置されている。そして、佳純は両腕を高手後手に拘束されて首に装着された鉄製の頑丈な首輪に付けられた鎖が部屋の中央の留め具に繋がれていた。

・・なにこれ、牢屋……？・・

佳純が思った通り、ここはメス奴隷を閉じ込め飼育する為の、まさに檻だったのである。

・・確か蜂須賀のマンションに行って母親から謝礼を貰ったのは憶えているけど……・・

それから、どうなったのか佳純は思い出せなかったが、自分が今、非常に良くない状況である事は理解出来た。鎖の長さはベッドで横になったり、便座で用を足す分には長さが充分であるが、それ以上の自由は望む事は出来なかった。佳純はどうにか脱出出来ないかと辺りを見渡すが、白い壁には窓もなく、唯一の出入り口は鉄格子についた扉だけだった。

・・ふざけないでよ。なんのつもり。こんな事して只では済まさないから。あれから、どれくらいたったのか分からないけど、私の家の親はそれなりの力を持っているんだから、すぐに見つけてくれるわ。そしたら、こんな事した奴、殺して貰うからね・・

佳純はギリギリと歯軋りしながら、狭い部屋の中を歩き回っていた。すると、白い壁の一部に突然映像が映った。どうやら壁と思っていた一部分は液晶のモニターになっていたようだった。

・・何、これ？・・

壁のモニターには〝U〟字型の器具の中に拘束されているような女性の姿が映っていた。女性は全裸にされ、手足はすっぽりと〝U〟字型の器具に飲み込まれている。腕は肩口まで、足は太ももの付け根まで、〝U〟字の左右と下の壁に入っている。あれでは、どんなに暴れようと抜け出せるはずがなかった。そして、初めは小さく映っていた体がだんだん大きくなってくる。どうやら、〝U〟字型の器具が移動してカメラに近づいてきているようであった。

・・えっ、よ、洋子っ・・

拘束具に囚われていたのは佳純と一緒に彩音のマンションに来た嘉藤洋子だった。

・・どうして、洋子がこんな事になっているの。わけが分からない・・

佳純が戸惑っていると、急に音声も流れてきた。

「なにこれ、外しなさいよ。あたしにこんな事したら只じゃ済まな

いわよ」

洋子は逃れようと必死に暴れているが、手足が抜ける気配は一向になかった。

「それでは、執行します」

機械の合成音のような声が聞こえ、何かが流れるような音も聞こえてくる。

「あぢゃあぁぁぁーーーーっ！！」

突然、洋子が絶叫していた。佳純は何が起こっているのか、まるで分からないが洋子の苦しみ方からただ事ではないと感じていた。

「だじげでえぇぇーーっ、いだいぃぃっ、あぢゅいぃぃーーーっ！！」

洋子の顔面は涙と鼻水で汚れ、表情は苦痛で醜く歪んでいた。

「じぬうぅぅーーーっ、だれがあっだじげでえぇぇーーーっ！！」

狂ったように絶叫する洋子を見ても、佳純は何が起こっているのか分からないが、洋子が死ぬ程の苦痛を与えられているのは間違いないと感じていた。

・・何っ、いったい何されているの洋子？・・

佳純は不安で壁のモニターから目が離せなくなっていた。洋子はも

う口からぶくぶくと泡を吹き出し白眼を剥いてしまっている。よく見ると股間から尿と大便が漏れているのが分かった。

・・なんなの?洋子、どうしたの。おしっことウンチ漏らす程の事をされてるの・・

佳純も、これはただ事ではないとぶるぶる震えてきていた。洋子の見えている部分には何も変化は見えない。ただ大小便を漏らしているだけだ。おそらく、あの〝U〟字型の器具に入れられている洋子の手足に何かされているのだろうと想像がつくが、それがいったいどんな事なのか佳純には全く想像がつかなかったが、それはすぐに判明した。洋子の体が、グラッと動くと後ろに倒れたのだ。

・・えっ、手足があの器具の中に固定されている筈なのに、どうして倒れるの・・

佳純は自分の目がおかしくなったと思った。手足があったら後ろに倒れるわけがない。物理的におかしい。佳純は、嫌な感じがして洋子の姿をしっかりと観察し、それを脳が認識してしまった。

「ひゃあぁぁぁーーーっ!」

それを認めたとたん佳純は悲鳴を上げていた。洋子の手足が消滅していたのである。後ろに倒れたのは洋子の頭と胴体だけだった。そう、これは葉月が開発し沙也加でテストを行った、あの手足を溶解する処刑具だった。洋子は、その実際の動作テストに試験体として使用されたのだ。佳純が見ている中、手足の失くなった洋子が覆面を被った全裸の男たちに持ち上げられ、処刑台の上に仰向けに拘束された。その処刑台は中心線にスリットがあり処刑台の端には回転ノコギリの刃が見えている。

・・まさか……。嘘だよね、そんなこと有り得ないよね・・

佳純は、洋子がこのまま股間から真っ二つに切断されてしまうのかと思ったが男たちは手にクーパーを持っていた。

ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ

「はぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

洋子の乳首がクリトリスが小陰唇が、ジャキジャキと切り取られる。洋子は舌を突きだし絶叫していた。

・・これ、ＣＧか何かだよね。洋子が本当にこんな事されている訳がないよ・・

佳純は震えながら、これが実際に起こっている事ではないと思い込もうとしていたが、自分のおかれたこの状況を考えると発狂しそうな程の恐怖に捕らわれていた。そして、モニターの中では、いよいよ回転ノコギリが高速に回転し、中央のスリットを洋子に向かって移動していく。それを見ている佳純の呼吸は恐怖で過呼吸になっていた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

・・絶対、嘘だよ。そんな事したら洋子死んじゃうよ。怖がらせておいて手前で止めるんだよね・・

佳純は、これは自分を怖がらせる為の演出だと思い込もうとしたが、もう洋子は四肢を溶解され失っているという事実を忘れていた。普

通に考えれば今さら洋子が許されるなど考えられない。

チュイィィーーン！！

「あっびゃあぁぁぁーーーーーっ！あびゃびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁーーっ！！」

回転ノコギリは本当に洋子の性器を切断し、洋子の割れ目を本当の割れ目に変えていく。洋子は、もう人間の声とは思えない絶叫を上げ続けていた。洋子はもう臍の上まで切断され、体がビクンビクンと激しく痙攣しだしている。しかし、回転ノコギリはそこで止まらなかった。洋子の正中線を切断していき、とうとう頭まで真っ二つに切断してしまった。洋子はもう何も言わぬ物体になってしまっていた。

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ」

佳純は泣きながら、尿を漏らしてしまっていた。そこへ、檻の外に覆面を被った全裸の男が数人現れ、檻の鍵を開けると中に入ってきた。

「ひいぃぃぃぃーーーーーっ！」

佳純が悲鳴を上げるが押さえ付けられ、男たちに犯されまくる。何も抵抗出来ない佳純は、三つの穴に代わる代わる挿れられ乱暴に犯されていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

佳純の膣も肛門も口も、男たちの精液を大量に放出され溢れ出ている。そして、佳純を犯しまくった男たちは床から鎖を外すと引き摺るように佳純を檻の外に出し、そのままズルズルと運んでいく。

「いやぢゃあぁぁーーっ、おねがいぢまぢゅうぅぅーーっ、だじげでえぇぇーーっ！」

佳純の悲痛な叫びが通路に響いているが、佳純は其のまま処刑室に運ばれていった。

１５、処刑される佳純

１５、処刑される佳純

処刑室に運び込まれた佳純は、先程モニターで見たU字型の巨大な機械を見て震えていた。実際に見るその機械は思ったより大型で、凄まじい威圧感を放っている。

「ゆるじでぐだぢゃいっ、だじげてぐだぢゃいっ」

佳純は泣きながら覆面を被った男たちにお願いするが、男たちは佳純を持ち上げU字の下の二つの穴に佳純の両足を入れようとする。佳純は足をバタつかせて必死に抵抗するが、両腕を縛られている状態で男数人に押さえられては、どうしようもなかった。佳純の足は穴の中に入れられてしまう。そして、佳純の足は穴の中でカチッとロックされた。

「ひいいぃぃぃぃーーーっ」

佳純は恐怖で悲鳴を上げるが、次に腕が掴まれ左右から移動して迫ってくる壁の穴に入れられてしまう。そして、佳純の両腕も穴の中でロックされた。佳純は洋子の姿を思い出し泣き叫んでいた。

「いやだあぁぁぁっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃっ！」

洋子は四肢を切断されたと思った佳純は、この穴の中に入れられた

自分の手足が切断されるものと思っていた。だが、それは間違いだった。佳純の手足は切断ではなく溶解されるのである。一瞬で処理が終わる切断ではなく、時間をかけて苦しめる溶解が行われるのだ。コツコツとヒールの音が響き、泣き叫ぶ佳純の前に一人の女が立っていた。

「おねがいじまぢゅうっ、だじげでぐだぢゃいぃっ」

佳純は涙と鼻水で汚れた顔で、目の前の女に助けを求めるが、その女は笑いながら言う。

「あなたはもう助からないの。あなたは、これから惨めに処刑されるのよ。あなたのお友達のようにね。どう、嬉しいでしょう。あなたは、その若い体のまま処刑されて世界中に動画配信されるのよ。一躍有名人ね。名誉な事でしょう」

女は佳純に近付くと、佳純の股間に手を伸ばし性器に触れると膣に指を挿れてきた。

「ふふっ、さんざん犯して貰って良い思いもしたでしょう。あなたは手足を溶解した後、串刺しにしてあげるわ。マンコから口まで串を通してあげる。すぐには殺さないから安心しなさい」

「頭おかしいよ。あんた、狂ってる。こんな事したら絶対捕まって死刑になるから。私のパパやママだって黙ってないわよ。私のパパは……」

「知っていますよ。反社会的勢力でしょう。所詮、社会に歯向かう程度の事。私は世界を創る者です。相手になりませんね。でも、あなたの両親は賢明でしたよ。あなたをお金で私に売りましたからね。

断っていれば今頃どうなっていたでしょう。命拾いしましたね」

「う、嘘だよ。そんな事ないっ。あるはずないよっ」

「仕方ありませんね。神楽坂さん」

葉月に呼ばれて沙也加が顔を出すと、佳純は沙也加に向かって叫んでいた。

「蜂須賀さんのお母さん、助けて下さい。この人、頭がおかしいですよ。私を処刑するって言ってるんです」

沙也加は佳純に近付くと、佳純の頬を思い切り打っていた。

パアンッ！

大きな音が響き佳純は驚愕した顔をしている。

「私の尊敬するお方に向かって無礼な物言い、許せませんね。あのお金は、あなたの両親に渡してきましたので安心しなさい。ついでに、あなたの譲渡証明にもサインして頂きました。話が分かる御両親ですね。葉月様の御名前を出したら、逆らいもせずにサインしてくれましたよ。それに私は蜂須賀彩音の母親ではありませんよ。蜂須賀彩音の母親は、こちらの豪徳寺葉月様です」

佳純は衝撃のあまり、口をパクパク動かすだけで声が出なかった。そして、ようやく声が出るようになると泣きながら惨めに命乞いしていた。

「何でもしますから許して下さい。お願いします。一生奴隷として

仕えますから……」

「それは嬉しい申し出ですね。それでは当初の予定通り、この処刑具のテストを行う実験体になって貰いましょうか。あなたの同意も得られた事であるし、さっそく始めますね」

「ち、ちがいまぢゅうぅぅっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃっ！！」

佳純は、また泣き喚くが葉月と沙也加は相手にもせず歩き出していた。

「ああ、いけない神楽坂さん。忘れていました。気絶されては反応を見られないので薬を注射しておいて貰えますか」

沙也加は、喜んでと返事すると注射器を持って佳純の性器に狙いをつける。そして、佳純のクリトリスの頂点から深く注射針を突き刺した。

「あぶうぅぅーーーっ！」

佳純が悲鳴を上げるが沙也加は構わず薬剤を注入する。

ヂューッ

「あふっ、あふっ、あふっ」

佳純がおかしな声を上げ始める。

「これは媚薬の成分も入っていますからね。興奮してくるでしょう。でも、この処刑具が動作すれば、すぐに激痛に塗り潰されますけど

ね」

沙也加は、我慢できずに声を上げている佳純を見つめ、もう一本注射器を取り出す。

「念のため、ここにも射っておきますよ。あの洋子というメスには5本射ちましたけど、あなたなら3本で大丈夫でしょう」

沙也加は、佳純の左右の乳首に一本ずつ注射針を刺し薬を注入する。

「あひいいいっ、マンコ熱いいいいっ」

処刑具に固定されながら無様に発情する佳純を見て沙也加は残酷に微笑むと歩き出した。そして、葉月にOKのサインを送る。それを受けて葉月は処刑具のスイッチを入れた。

ゴオォォーン

機械が動作する音が響き、処刑具の中に濃塩酸が注入されていく。

「あっ、あがあぁぁぁぁぁーーーーっ!!」

佳純が大きく眼を見開き絶叫する。必死に穴から手足を抜こうとするが、厳重にロックされているため動かす事も出来ない。

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ!!!」

プッシャアァァーーーッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりいいいいいっ

佳純は、洋子と同じく尿と大便を漏らしていた。

「あっぢゃあぁぁぁーーーーっ！！」

手足を溶解される激痛に佳純は狂ったように絶叫している。その様子をモニターで観ながら水野真理は自慰していた。水鳥川凛は、その凄まじい映像に度肝を抜かれたが、凛の股間は激しく濡れ始めていた。蜂須賀彩音、彩音だけはこの映像を観ていなかった。彩音は出産の為、入院していたからであった。この生まれてくる子供の物語は、別の物語として語られていくことになる。この時点で、その子供がどんな運命を辿るのか、それはまだ確定していなかったが、彩音には朧気にその未来が想像出来ていた。

・・子供の名前は“琴音“にしたいな。沙也加さんに伝えておこう・・

既に性別は判明している。彩音は自分の子供が拘束され鞭打たれる姿を想像し幸福に浸っていた。

１６、佳純の最後

１６、佳純の最後

「あびゃあぁぁぁーーーっ！！」

手足を溶解され大小便を漏らし絶叫する東條佳純の口から泡がブクブクと吹き出してくる。Ｚクラスに編入される前は普通クラスにいた水野真理は、渡邉ゆかりと同じクラスだった佳純もよく知っている。気が強く、人の噂を撒き散らし、ゆかりの事を毛嫌いしている女子という印象だった。その佳純がどういう経緯で、ここで処刑されているのか分からなかったが、あの佳純が惨めに泣き叫びながら処刑されているのを見て、真理は興奮していた。

・・カーストの上位にいた東條さんが無様にウンチとおしっこ漏らしながら泣き叫んで処刑されているよ。あの気の強い東條さんのあんな無様な姿、初めて見たよ。あははっ、なんだろう興奮する。もっと目茶苦茶にされてしまえば良いのに。東條さんが、泣き叫んで絶望して惨めに処刑される姿、最高。なんだろう、スカッとする、気持ちいい・・

真理はモニターを見ながらたまらず自慰に励んでいた。

・・あひっ、あひっ、あひっ……。あぁ、もう私も手足切断してマンコも壊して下さい・・

真理は佳純の姿に自分を重ねて興奮していた。自分が芋虫のように手足を切断されて転がされている。その周りを囲んだ支配者である男たちが笑いながら自分に小便を浴びせ、長い串を持ち自分の性器に突き刺すと、そのまま口まで串刺しにしていく。性器から口まで完全に串刺しにされた自分の体をビクンビクンと痙攣し最後の刻を迎えていく。そんな妄想をしながら真理は頂点に達しようとしていた。その頃、水鳥川凛もモニターから目が離せずにいた。佳純の事は知っていたが、Zクラスの自分をいつも下に見ている態度が露骨で関わりたくない女子だった。正直、その佳純が処刑されているのを見て、ざまあみろという気持ちだった。

・・もっと徹底的に痛め付けて壊してやれば良いのに。生温いよ。私なら恐怖と激痛で発狂させて廃人にしてから殺してあげる・・

知らず知らずのうちに凛も佳純の処刑に引き込まれていた。

★
★
★
★

佳純の四肢の溶解が終了し、佳純は処刑台の上に転がっていた。そして、気付け薬を注射され目覚めた佳純は、消滅した自分の手足を見て悲鳴を上げ続けていた。

「あああぁぁぁぁぁーーーーっ！」

号泣する佳純に沙也加が近寄って来ると、佳純の頬を平手で思い切り打っていた。

パシィィッ！

「ひぃぃっ」

「静かにしなさい。みっともない。あなたの同級生にも話を聞きましたが、あなたはどうやらイジメをしていたようですね。自分には何の力も無いのに親の力でいい気になっていたようですね。そういう意味では因果応報でしょうか。これから、あなたのマンコを撮影しながら解体しますからね。きちんとカメラを意識しなさい。撮影した動画はあなたが虐めていた人たちに配布する事になっています。いい顔で泣いて下さいね。分かりましたか」

しかし、佳純は震えてしまって口が動かなかった。そんな佳純の姿にイライラした沙也加は、また佳純の顔面を殴りつける。

「返事も出来ないのなら、もうまともに喋れないようにしてあげましょうね」

沙也加は泣いている佳純の舌を引き出すと根元から切断してしまった。

「あぴゃあぁぁぁぁーーーーっ」

悲鳴を上げる佳純の口中に焼けた鉄鏝を突っ込み、佳純の口内を焼いて止血した沙也加はいよいよ性器解体に取り掛かる。

「まず、あなたの外性器から切除していきますよ。外性器と言っても小陰唇とクリトリスだけだから、すぐに終わりますよ」

沙也加は佳純のクリトリスを媚薬を塗って強制的に勃起させると、まず包皮にカッターを当て切除していく。そして、剥き出しになっ

たクリトリスを摘まみ根元にカッターの刃を当て滑るように刃をスライドさせた。

スパッ！

「ひっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ」

佳純のクリトリスはあっさりと切除されていた。そして、次に小陰唇を摘まみツーッとカッターの刃を滑らせ小陰唇を切除していった。

「あじゃあぁぁぁーーーっ、もお、ゆるぢでぐだぢゃいいいーーっ！」

佳純は必死に懇願するが沙也加は構わずに、佳純の臍の下から正中線に赤いマジックで線を引いていた。

「それでは切開しますからね。これで、あなたのメスは終わりですね。嬉しいですか」

沙也加は有無を言わせず泣き喚く佳純の正中線をメスで切開していく。メスが切り裂いた跡から血が滲んでくる。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、だぢげでえぇぇぇーーーーっ」

佳純は絶叫するが、沙也加は切開した佳純の下腹部をぐいっと手で開き、まず恥骨をがばっと取り出す。そして、尿管や尿道も切断して膀胱も取り出していた。取り出した膀胱は床に叩きつけ、ヒールで踏みぐちゃぐちゃに破壊されてしまった。

「おぶっ、おぶっ、おぶっ、おぶっ」

佳純は白目を剥き手足のない体をビクンビクンと激しく痙攣させている。

「あらあら、まだ死なないで下さいよ。もっと苦しんで貰わないとね。これから、子宮を殺しますから」

沙也加は、佳純の子宮をメスで切開し開創器で子宮を開いたままで固定すると、携帯バーナーに着火する。そして、ガスの量を調整して青い炎になったのを確認し、佳純の子宮の内側を炎で炙り始めた。

ジュゥゥゥーーーッ

「あぶうぅぅぅぅーーーーーっ、あぶぶぶっぶっぶうぅぅぅーーーっ！」

子宮の中を炙られ佳純はもう虫の息になっていた。

「あはは、マンコ解体されて子宮の中も焼かれていい様ですね。子宮の肉が焼けるいい匂いがしてきましたよ。でも、まだ終わりじゃありませんよ。膣の中も焼いてあげますから」

沙也加は佳純の膣も切開してバーナーで焼き始める。佳純はもう何も言わず、壊れたロボットのように体が時々動いていた。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n6028ik/

檻の中の幸福

2025年9月6日02時14分発行